

オーバーロードと大きな蜘蛛さん

粘体スライム狂い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロードの二次創作です。

D&Dのデータを元にしたオリキャラ至高の41人の一人がモモンガ様と一緒に異世界へといつちやいます。

モモンガ様とナザリックNPCの一喜一憂する姿が大好きで書いてみました。

書籍版準拠で進んでいきますが、捏造大目なので公式設定とごっちゃにならないように気をつけて下さい。

2016/5/30

仕事が繁忙期の為、一時更新を停止します。時間を取って丁寧に書けるようになったら再開します。大体秋頃には再開できる予定。それまでは気分転換のつもりで気楽に書けるオリジナル小説を別にUPするつもりです。

ある魔導書に記された名も無き神の肖像。

封印だろうか？見慣れぬ奇怪な紋章が刻まれている……。

動画編集が趣味のギルドメンバー「クーゲルシュライバー」は

数年の時を費やして作り上げた動画データを引っさげてサービス終了間際のユグドラシルへとログインした。

全ては昔の仲間に関わる作品を披露する為に。

目次

24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
382	363	337	306	283	266	247	225	201	190	169	155	140	127	108	99	82	71	60	48	33	23	13	1

3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

605 584 557 540 519 506 487 467 450 433 415 400

1話

朝の薄暗く濁ったような光がカーテンの隙間から差し込む部屋の
中で一人、

目を血走らせ何かに急かされるようにコンソールを猛打する男が
居た。

部屋の床には空のペットボトルや口を縛られたコンビニの袋が散
乱している。

「ああ畜生め。なんでこう丁度いい素材がないんだ。誰か一人ぐらい
フリーで公開しててもいいじゃないか」

悪態をつきつつ新たな検索ワードを入力し、表示された情報を夜勤
明けの鈍った頭で吟味する。

やはり、ない。

素材を手に入れたとしても、その編集にかかる時間を考えると
もはやこれ以上のタイムロスは許容しがたかった。

彼は迷う事無くマジックテープ式の財布からカードを抜き放つ。

「ここで間に合わなかったらもったいなさ過ぎる」

頻繁に使用する機会があり、既に暗記しているクレジットカードの
番号を念のため確認すると慣れた手つきで入力していく。

モニターに大きく、購入が完了しました、という文字が躍った。

「よっしこれでいける。って、うっわなにこのエフェクトかっこいい。
やっぱりこっちにしようかな?」

購入した素材集の中には当初の目的だったエフェクトよりも興味
を引かれる物が複数あった。

時間短縮の為のエフェクト素材集の購入だったが、より良い物を作
りたいという気持ちと生来の優柔不断さが合わさるかえって時間を
浪費するはめになっている。

「よし、これにしよう」

やや金を無駄遣いしてしまった感覚に奇妙な高揚感を感じつつ、
彼は高価な編集機材を弄る。

エフェクトを合成し、特殊効果をつけ、時間設定を調整し、効果音

のタイムライン上の位置を調整する。

そして、再生ボタンを押した。

「んふふふふ……やっべこれいいじゃないか」

高価な編集機材に囲まれたモニターの上方では、骸骨の姿をした魔法使いが邪悪なオーラを放ちながら杖を掲げていた。

「どこかでお会いしましょう……か」

だれも居ない円卓の間でモモンガは一人呟く。

座る者の居なくなつた40席の椅子を眺めつつモモンガは心中で荒れる感情を堪えていた。

ふざけるな！そう叫んでしまいたかつた。

しかしその言葉も、その後続くキルドメンバーに対する複雑な気持ちも音声として口からは出てこない。

「……………ふう」

溜息を一つ。

落ち着かなければならない、とモモンガは思った。

ユグドラシルというゲームが終わる今日と言う日の為に1週間以上の余裕を持つて

かつてのギルドメンバー達に誘いのメールを送つたのはモモンガ自身だ。

もしかすると、まだ来ていないギルドメンバーが次の瞬間にもログインしてくるかも知れない。

その事を考えると仲間たちへの文句を感情に任せて叫ぶことなど出来なかつた。

そう――

最後に残つたモモンガを除く3人のギルドメンバーの内、あと1人がまだ来ていないのだ。

「遅いなあ。見せたいものがあるって言っていたのに」

メールへの返事はあった。

見せたいものと、皆にプレゼントがあるから必ず行くという内容だった。

何かと気まぐれで飽きつぱく、それでいて拘るところにはトコトン拘る彼の事だからきつと来る。

モモンガは当時趣味が合った友人のログインを確信していたが、それでもサーバーダウンまでの時間が残り僅かになれば不安が頭をもたげてくる。

「……」

モモンガは無言で円卓の席から立ちあがると、ギルド武器の傍に歩み寄った。

スタッフ・オブ・アインズウールゴウン。これを作るためにギルドメンバーは相当な無茶をしたものだ。

だからこそ、このギルド武器はかつての輝かしい日々を思い出させてくれた。

苦行とも言える狩りを続ける日々が脳裏に蘇えっていく。

その時だった。

「クーゲルシュライバーさんがloginしました。」

モモンガの視界中央にシステムメッセージが表示された。

「お久しぶりですクーゲルシュライバーさん」

ちよつと遅くはないか？

そんな気持ちも無くはないが、モモンガは心から彼のログインを歓迎しつつ振り向いた。

そこにいたのは巨大な蜘蛛だった。

人間よりも二周りも大きな蜘蛛。その蜘蛛の、本来目があるべき場所には余すところ無く黒檀色の甲殻に覆われた、逞しい人間状の上半身が生えている。

そののっぺらぼうのようにツルリとした頭部には、設定上目の役割を果たす真紅の光を放つ8個の円形の窪みがあった。

それは、種族派生の多いスパイダー系最上位種族の一つである

アトラク_クナク_ア 深淵の大蜘蛛だ。

エルダーブラックウーズなどと同じダンジョンに配置されるモンスターで、糸を使った高度な行動阻害能力が面倒くさいと評判だった。

モモンガは深淵^{アトラク_クナク_ア}の大蜘蛛の糸で拘束された前衛が複数のエルダーブラックウーズに纏わりつかれた挙句高価な装備品の殆どを溶かされてしまった時の事を思い出した。

その後ガチ泣きする前衛を慰めつつ、魔法による支援が遅れてしまった事に対する罪悪感から、溶かされた装備分を何とか取り戻そうと奮闘したのもやはり良い思い出である。

ただ、眼前のアトラク_クナク_アはそういったダンジョンに配置される通常モンスターの形状から少し逸脱している。

それはプレイヤーキャラとして外装を弄っている上に、様々な種族を経てスキルを習得している為、本来存在しない器官が生成されているせいだ。

「お久しぶりですモモンガさん。いやあ遅くなつてすみません！」

ややハイテンションなクーゲルシュライバーの声に、モモンガは徹夜明けの空気を感じた。

この人もまた、忙しい中無理をしつつ自分のわがままのような誘いに答えてくれたのだと申し訳なく思う。

その一方で大きな喜びが胸にこみ上げてくる。

未だアインズ・ウール・ゴウンのメンバーとして名前が残っているプレイヤーはこれで全員来てくれたのだ。

その事がギルド拠点を維持する為に今まで一人で狩りをしてきたモモンガには嬉しかった。

あの孤独の日々が報われたような気がしたのだ。

「ちよつとエンコードに時間が掛かっちゃいました。あ、私の他にどなたか来ました？もしかして私が最初です？」

その言葉にモモンガはへ口へ口をもう少しだけ引き止めるべきだったかと後悔する。

クーゲルシュライバーとへ口へ口は嘗てのギルド全盛期に行われ

たPKやギルドウォーではコンビを組むことが多かった。

二人のキャラが持つ性能の相性が非常に良かった為にそうなったのだが、それを抜きにしてもあの二人はとても仲がよかったのだ。

「いえ、クーゲルシュライバーさんで最後ですよ。ほんの数分前までへろへろさんが居たんですけど、お疲れのようだったので……」

「うっわへろへろさん来てたんですか！くそう惜しい事したなあ。もうちょっと早くエンコード終われば……」

クーゲルシュライバーは擬腕を振り回して悔しがるリアクションを取ると、慌てた様子でモモンガに詰め寄ってくる。

ユグドラシルのスパイダー系モンスターらしく非常にリアルな脚の動きで此方に向かってくる大蜘蛛にモモンガが僅かに身を引く。

とうに見慣れていた筈の光景に対する自らの反応に、耐性がなくなるだけの空白の時間があつた事に気づきながら。

「ど、どうしました？」

「モモンガさんヤバイです時間が無いです！玉座の間に行きましょう！」

「え、あ、はい。最後の瞬間は玉座の間にしようと思つたので丁度いいですね。行きましょう」

焦りを感じさせるエモーションを連続表示させるクーゲルシュライバーに対しモモンガは静かに頷くとギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手を取った。

あふれ出す邪悪なエフェクトの作りこみに感動する間もなくモモンガはクーゲルシュライバーと共に円卓の間を飛び出した。

なんとも慌しい最後になったものだ。

クーゲルシュライバーに急かされるままモモンガは玉座の間にとどり着いていた。

途中見かけた執事とメイドのNPCを無視し、悪戯好きなギルドメンバー作の巨大な扉をなんの警戒もなく開け放ち得た僅かな時間を

使って

クーゲルシユライバーは一人コンソールを弄っている。

モモンガの事は完全にほったらかしだ。

その姿を玉座から眺めつつモモンガは考える。

しみみりした最後というのを予想していたが、こういう慌しくバタバタした最後というのもアインズ・ウール・ゴウンらしくて良いのではないか？

モモンガは過ぎ去った日々思いを馳せる。

毎日がバカ騒ぎの連続だった。色んな苦勞をした覚えもある。

だが仕事帰りのその騒がしいおバカな時間が何よりも楽しかった。

これが友達なんだ、と。

これが友達と本気で遊ぶという事なのか、と心底感動し、そしてそれにのめりこんでいった。

——今はこんなにも少なくなってしまったけど。

過去のバカ騒ぎを思い出しつつモモンガはふと、悪戯を試してみたくなった。

クーゲルシユライバーが準備をしている間、玉座に座って何もしていなかったわけではない。

傍らに仕える高レベルNPCであるアルベドの設定に目を通し、最後の一文にドン引きしていたのだ。

「変更するか」

ギルドメンバーが独自のこだわりで作り上げたNPCを個人の感情で弄っていいものかという葛藤はあった。

しかし昔の仲間達の自由奔放さを思い出していたモモンガは、サービス終了間際という事もあり悩むことをやめ自分勝手に振舞うことを良しとした。

人間、たまには悪いことをしてみたい時もあるのだ。

ギルド武器を使用して設定テキストにアクセスする。

即座に問題の「ちなみにビッチである。」という一文は消去された。

「なにしてるんです？」

「うおっほん!？」

突如頭上から声をかけられモモンガが狼狽する。

立ち上がり玉座のやたらと高い背もたれを見上げれば、そこには徐々に不透明度を増していくクーゲルシュライバーの姿があった。

壁や天井を移動可能になる種族特性と職業から来る隠密スキルを利用した見事な不意打ちだった。

モモンガの種族的なスキル、魔法的視力強化／透明看破が効果を発揮していない事を顧みるに、どうやら魔法であれば超位階相当の一日に4回しか使えないスキルを使用したらしい。

「ああいやその、これはですね」

まさに悪戯が見つかった子供のようにはうろたえるモモンガにクーゲルシュライバーは気にすることは無い、という意味で使用されるエモーションを表示する。

「どつきり成功！」

「……どつきりって、もう勘弁してください。結構本気で驚きましたよ」

「あはははすみません。でもそんなに慌てること無いのに」

「いやいや、アルベドの設定を勝手に弄っていたわけですし……元に戻しますね」

やはり滅多な事はやるものではないと後悔しつつ、コンソールへと手を伸ばすモモンガをクーゲルシュライバーが止める。

「いや良いじゃないですか。タブラさんはもう抜けちゃったんだし、ギルドマスターでもたまにはこういう事をしてもいいと思いますよ」

それに、とアルベドを一瞥する。

「最後ぐらいはビッチ設定変えちゃいましょうよ。こう、今まではビッチだったけど最後は改心してNPC統括に相応しいキャラになった……みたいな感じで！」

その言葉にモモンガは思い出した。

クーゲルシュライバーという男は古の遊戯であるTRPG（テーブルトークロールプレイングゲーム）を嗜む今時珍しい趣味の持ち主であり、

設定を作ったり弄ったり生やしたりするのが大好きだったという

事を。

「……それじゃあ、空いた文字数分何か書き足しますか？」

「えっ、いいんです？モモンガさんが何か考えていたんじゃない？」

「いえ、特に考えていたわけではないので構いませんよ」

「そうですか。それじゃあ……」

考える時間を10秒も持たずに、クーゲルシュライバーは自分の考えを口にした。

「ギルメンを愛してる、ってどうです？」

「ギルメン……略語ですか。文字制限に苦しんだ感じが出てますね」

「正直苦渋の選択ですよ……。でも内容的にはいいんじゃないですかね？」

ただのビッチがギルドメンバーだけを愛するようになる。なんかそこまでの過程でショートシナリオが一つ書けそうですし！」

「でも結局ビッチじゃありませんか？」

ギルドメンバーは名前が残っている者だけで4人いるのだ。

結局は表現が変わっただけでビッチには違いないのではないだろうか？

「まあ結局範囲が狭まっただけでビッチですけど。でもそこがいいんですよ、そこが！」

そういうものなのだろうか。

そういうものなんだろうな。モモンガは納得することにした。

勝手に設定を弄ろうとしていた事を目撃されたのが、未だに尾を引いている。

正直、恥ずかしいのでさっさとこの話題から離れたかったのだ。

素早くコンソールを操作し設定の空欄を埋める。

「それで、準備完了ですか？」

「そうでした！上映準備が出来たんで開始しますよ！時間もありませんし」

今思い出したかのように慌てつつクーゲルシュライバーは特殊なスクロールを取り出す。

これはスクロールの形状をしているが全くの別物だ。
その名を「ムービースクロール」という。

その中でも課金を必要とする最大のデータ容量を持つものだ。
ユグドラシルには所謂ビデオカメラに相当するアイテムが存在し、
それらで撮影した動画データをゲーム外に持ち出す事が可能だ。

別売りのゲーム撮影用の機材を使っても同じことは出来るが一式
を揃えるのにかかるのリアルマネーを消費する上に、プライバシー保
護機能がついていない為にネット上で公開する時はわざわざ動画編
集ソフトを使ってプレイヤー名などを隠さないとならないので、より
手軽なこのアイテムが使用されることが多い。

かつて行われた1500人からなるナザリック攻略戦において、第
8階層での戦いを記録したのもこの系統のアイテムだった。

そして動画データの持ち出しが可能なアイテムがあれば、外部から
取り込んだ動画データを持ち込む事が出来るアイテムも存在する。

それがムービースクロールである。

クーゲルシュライバーはこの手のアイテムを最も愛用していたギ
ルドメンバーだった。

「これは本当に自信作なんですよ！皆に撮影手伝ってもらったから
ムービー素材は沢山ありましたからね！」

「ずいぶんと長い時間を使って作っていたようですね」

「うぐつ、そ、それはなんか……すみません」

痛いところを突かれた。

夜勤明けのまま睡眠を取る事なく再び夜を迎え、不自然にテンショ
ンが高かったクーゲルシュライバーはモモンガの言葉を受けて目に
見えて落ち込んだ。

「あつ、いやすみません。全然そういうつもりではなくてですね！」

「いや、いいんです。実際ちよつと時間掛かりすぎですもんね」

たとえば動画サイトに置ける人気動画シリーズがあったでしょう。

その次回更新は一週間後と告知しておいて、実際に更新したのは5
年後だった時のアップロード主の気持ち。

それが現在のクーゲルシュライバーの心境に一番近いだろう。

胃が痛え。

リアルに胃への痛みを感じつつクーゲルシユライバーはうろ覚えだったコマンドを使用しアルベドを部屋の隅へと移動させそこで跪かせる。

上映会の邪魔にならないようにする配慮からだ。

「時間は掛かりましたが本当に自信作です。モモンガさんのアドレスにデータ送っておいたんで、あとで皆にも配ってあげて欲しいです。卒業記念品みたいな感じで」

「分かりました。しっかりとやっておきます」

「ありがとうございます。それじゃ、始めますね」

クーゲルシユライバーはムービースクロールを起動させると、スキルを複数使用して姿を消した。

これは上映会を行う際、デカイ外装が視聴の邪魔にならないようにと彼が昔からやっていた行為であるため、モモンガは何も言わずに玉座の間の中空に展開される映像に注目した。

「おお………」

重厚な音楽と共にギルドメンバー各員の紋章が漆黒の闇に浮かんでいく。

「俺、たっち・みー、死獣天朱雀、餡ころもっちもち、へろへろ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、

タブラ・スマラグディナ、武人建御雷、ばりあぶる・たりすまん、源次郎………」

モモンガは現れては円を描くように配置されていく紋章を指差し、それが表すギルドメンバーの名をよどみなく読み上げていく。

全メンバーの名を読み上げるのに、大した時間は掛からなかった。いまや勢ぞろいしたギルドメンバー達の紋章は巨大な円を形作っていた。

その配置は円卓の間でのそれぞれの席順と同じである事にモモンガは容易く気づくことが出来た。

「そうだ、楽しかったんだ……」

こみ上げてくる熱い感情を堪えながら見つめる先では、円を描く紋

章の中心に巨大なギルドサインが浮かびあがっている。

そして次の瞬間闇と紋章は掻き消え、円卓の間を天井から見下ろすアングルとなる。

モモンガは、いや、鈴木悟は自身の肉体が涙を流している事を自覚することもなくそれに魅入った。

——ああ、みんなだ。みんなが、いる。

円卓の周りには空席はなく。

鈴木悟という人間の遅すぎる青春時代を共に駆け抜けた、掛け替えのない大切な40人の仲間が居た。

視点が円を描くように移動し、円卓に座る41人のギルドメンバーを一人残らず映していく。

最後にモモンガの前で視点が止まると、モモンガはローブをはためかせつつ立ち上がり杖を高く掲げた。

骸骨の体から邪悪なオーラが立ち上り、杖の先からは様々な色の光のエフェクトが迸る。

「おおお……！」

あまりにもカッコイイ自分のキャラクターの姿にモモンガのテンションは頂点を極めようとしていた。

滾る光がその強さを増していく。

そして——！

唐突に映像は途切れた。

「……………え？」

気の抜けた声が玉座の間の静寂に溶ける。

先ほどまで一大スペクタクルが浮かんでいた空間にはもう何も無い。

「どうどう………ことだ？」

折角いいところだったのに、なぜ？

モモンガは微かに苛立ちつつ、玉座から立ち上がった。
その時だ。

「どうかなきいましたか？モモンガ様？」

初めて聞く女性の綺麗な声。

モモンガは呆気にとられながら声の発生源を探り……唾然とした。

声のした方角から、心配そうな表情を浮かべたアルベドが此方へと
小走りで近づいてきていたのだ。

2話

最初に異変に気づいたのはモモンガに配慮して隠密スキルを使用し姿を隠していたクーゲルシュライバーだった。

自身の最高傑作『アインズ・ウール・ゴウン！アルティメットサーガ（OP風）Ver. 2.8』を凝視しつつ感嘆の声を上げるモモンガを、大きな満足感と共に見守っていた時だ。

クーゲルシュライバーの全身を異様な感触が襲った。

「えっ!？」

全身を液体に包まれたかのような感触。

それに伴う奇妙な安心感と爽快感に驚愕の声を上げるも、それは水中で発したような不明瞭なものだ。

わけがわからない。なぜそうなるのか？

クーゲルシュライバーの使用しているスキルは使用者を通常次元に接する異なる次元——エーテル界やアーストル界など——に移動させる事により通常次元からの観測を困難にするものだ。

だがそれは設定的なものであり、ユグドラシルでの実際の効果はやや高度で看破されにくい透明化程度に留まる。違う次元に移動する効果などない。

ゲーム内で使用した場合、視界にスキル効果が発動中であることを示すアイコンが表示されるだけだ。

断じて、現在経験しているような異常な感触に包まれる事などない。

「つてか、感触だど!? 在りえない!」

DMMO—RPGでは触覚はある程度の制限が課せられているが、存在はしている。

だがクーゲルシュライバーはそれを在りえないと叫ぶ。それはなぜか。

全身に、蜘蛛の体にも感触がある——。

クーゲルシュライバーが驚愕したのは、まさにそれについてだった。

ユグドラシルの異形種が持つ肉体において、人間の形状から大きくかけ離れたパーツには触覚が存在していない。

これは現実ではただの人間でしかないプレイヤーの脳が、本来存在しない器官のもたらす感覚に対応できないからだ。

DMMO—RPGの醍醐味であるリアル感を大いに損なうとして、スパイダー系やスライム系などを筆頭に異形種が不人気となった一因でもある。

ゲーム内で蜘蛛となり肢が増えたクーゲルシュライバーが感じる感触というのは、通常生活のそれと比べれば寧ろ大きく欠落していたほどだった。

だが今は違う。

4対ある脚、1対の触肢と鋏角、巨大な腹部と頭胸部、頭胸部に生える人間の上半身状の器官、このすべてに鮮明な感覚があるのだ。

感覚があるだけではない。

人間に備わっているはずも無い、蜘蛛の体の動かし方まで完璧に理解できる。

「上映会とかやってる場合じゃない」

視界からステータス情報などが消え去っている事に気づき焦りつつも、

クーゲルシュライバーは即座にムービースクロールの効果を中断させる為にアイテムボックスを開こうと擬腕を伸ばす。

ゴポリ、という音が聞こえてくるかのようにクーゲルシュライバーの手が何も無い空間に沈み込む。

見えない何かに潜り込んで消えた腕の境界線からは、粘着質で禍々しい、瘴気ともいえる黒い霧があふれ出している。

——工業地帯に流れる川に浮かぶ川霧みたいだ。

クーゲルシュライバーはそう思うが、とにかく明らかに慣れ親しんだユグドラシルの仕様ではない。

その事に驚きながらも、クーゲルシュライバーは何時も通りの動作でアイテムボックスを開いた。

「普通に、アイテムはあるな」

アイテム画面には昔と同じように様々なアイテムが鎮座している。その中から現在上映中のムービースクロールを取り出すと、<停止>コマンドを唱える。

やや色あせ、輪郭が多少滲んだ視界の先では、展開されていたムービーが一瞬で掻き消えた。

突然の事にモモンガが立ち上がり、どうということだと大きめの声を出している。

その姿に申し訳なさを感じるクーゲルシュライバーだったが、我が身に起こっている異常事態に対応するのを優先させた。

だが――。

「うっそだろお？」

滲んだ視界に、口を動かし自ら言葉を発しながらモモンガに駆け寄るアルベドの姿を捉えてしまった。

ユグドラシルでは、いやDMMORPGでは決してありえない光景を目の当たりにしたクーゲルシュライバーは、もはや自分から何かしようという気が失せてしまった。

考えることが面倒になったのだ。

もしくは、どうしたらいいのか分からなくなった。

やんぬるかな。どうにでもなるがいい。どうにかなるだろうさ。

現にほら。モモンガさんがアルベドと話を始めたぞ。まずはそれを眺めようじゃないか。

全身を包む心地よさに思考する事を投げ出したクーゲルシュライバーは、玉座の背もたれの天辺に登ると妙に近い距離で会話するモモンガとアルベドの観察を開始した。

モモンガは困っていた。

突然の異常事態に精神をすり減らしながらも、詰め寄ってきたアルベドをどうにか宥めすかし、現状を把握する為に彼女を使って様々な実験を行った。

そうして得られたものは不思議な力により精神が冷静に保たれる
モモンガをして頭を抱えなくなるようなものだった。

浮上してきた仮想世界が現実となった可能性。

自分に露骨な好意を見せるアルベド。

タブラ・スマラグディナの作ったNPCを穢してしまった罪悪感。

そしてなにより。

姿が見えなくなってしまったクーゲルシュライバー。

どうにか連絡を取ろうとメッセージの魔法が使えないかを試した

際、モモンガは己の中に埋没する能力への確信を抱いた。

その確信に従いプレイヤー同士の連絡手段として使用される

＜伝言＞の魔法を使用した。

そして聞こえてきた携帯電話のコールに似た音に、モモンガは心底
喜んだ。

しかし、＜伝言＞の魔法が繋がる事は無かった。

居留守を使われたような不快感を覚える以上に、繋がることのない

コール音はモモンガにギルドメンバーの身を案じさせた。

＜伝言＞に出られない程のトラブルに見舞われているのか？

考えるほどに不安と焦燥感が増していく。

だがそれをモモンガは超人的な冷静さで抑え込み、問題を後回しに
してアルベドに指示を出した。

先ず、彼女を通じ玉座の間に移動する際見かけた執事とメイドのN
PC——アルベドによればセバス・チャンとプレアデス——にナザ
リック周辺の調査と第九階層の警備をするよう命令した。

その後、彼女自身に現状動かすことが出来る階層守護者全員を第六
階層の闘技場に集めるよう指示した。

主人の命令を受け喜びつつ退室するアルベドを見送ったモモンガ
は今、一人きりで玉座に深く身を沈めて＜伝言＞の魔法を起動させ
ていた。

「3コール以内に出るのが常識だろお……頼むから出てください」

やはり、繋がらない。

「お願いだから、もう、一人にしないでくれよ……」

そんな眩きも空しくコール数は増えていく。

モモンガは心底困り果て、人間がそうするのと同じように天を仰いだ。

そして。

「あつ」

玉座の長い背もたれの上から、此方を見下ろしつつワタワタと慌てているクーゲルシュライバーと目が合った。

空間が歪む。

モモンガの眼前で、まるで水滴を垂らされた水面のように空間に波紋が広がっていく。

その波紋の中心から、次元の壁を潜りぬけ、どす黒く糸を引く粘液を全身に纏わせながら神話的恐怖の権化がこの世界に現臨した。

ただ其処に在るだけで精神をかき乱すような恐ろしい蜘蛛の姿。

甲殻の隙間をなぞる様に流れる青紫の光と全身から沸き立つ緑色のオーラが、この存在が途方もない力を内包していることを強く確信させる。

狂気と恐怖と暴力の極限。

そう断言できる畏怖すべき存在に対し、死の支配者たるモモンガは電撃的速度の水平チョップを叩き込んだ。

「このっ！このっ！俺がつ！あんなにつ！連絡したのにつ！心配っ！させっ！てえっ！」

「ごめっ！ぐへあつ！ぐわあつ！ヌワーツ！グワーツ！アバーツ！ンアーツ！」

特殊能力を使用しておらず、死の支配者^{オーバーロード}の持つく魔法的視覚強化／透明看破>に見事捕捉されたクーゲルシュライバーはモモンガのアドバイスに従い自身の能力に対する理解を得る事ができた

そして促されるまま隠密状態を解除し姿を現すこと成功したのだ

が、其処で待つていたのは寄せては返す波のように、激しい喜怒の感情と平静を行き来する狂気の死の支配者^{オーバード}だった。

急に沈静化する怒れるアンデッドに軽い恐怖を感じながらクーデルシユライバーは悲鳴を上げることしかできない。

だが、魔法職であり筋力は30レベルの戦士職程度しかないモモンガのチョップでは、当然ながら前衛を張っていたクーゲルシユライバーの外皮鎧を突破することなど叶わない。

だからこのチョップの嵐と悲鳴のやり取りはただのじゃれあいだった。

「……フウ」

「……落ち着きましたか？」

チョップの嵐が止み、呼吸などしなくせに大きく肩を上下させていたモモンガが背筋を伸ばし姿勢を正す。

その姿にとりあえず気が済んだのだと判断してクーゲルシユライバーは恐る恐るモモンガに声をかけた。

「ええ落ち着きました。どういうわけか感情が一定以上高まると強制的に冷静になるようでして」

「精神作用無効の特殊能力の影響でしょうか？」

「まだ確信は持てませんが、おそらくは」

「そうですか。ではもしかすると私も……」

ユグドラシルの高位モンスターには旧支配者^{グレート・オールド・ワン}という副種別がある。

この副種別を持つモンスターは精神作用無効の特殊能力を必ず所持しているのだ。

モンスターの元ネタである神話体系で旧支配者^{グレート・オールド・ワン}であると記されていた深淵の大蜘蛛^{アトラクシナク}にもこの特殊能力は当然のように搭載されている。

「精神作用無効が原因ならば、私と同じようになるのはほぼ間違いないでしょうね。自覚はないんですか？」

「まだこれと言っては。ですが、まあこんな異常な事態ですし冷静で居続けられるならばそれはメリットしかないんじゃないですかね？」

「……今は、良いのかも知れませんが」

長期的に見れば情動の少ない精神というのは健康的ではないような気がする。

そんなモモンガの考えが、ぼんやりと透けて見えた。

確かにその通りだ、とクーゲルシュライバーは同意する。

だがやはりそれほど心配することはないとも思えた。

「回数は限られてますけど精神作用無効化を解除する手段ならあります。もしもヤバイと思ったらそれを使って息抜きしましょうよ」

「ああ、そういえばそういうアイテムもありましたね」

「そうです。それにアイテムが無くなっても私が居れば」

「職業<コズミックホラー>ですもんね。わかりました。その時が来たらお願いします」

モモンガはそこで話を一旦打ち切り、今後の事について話題を変更した。

クーゲルシュライバーはモモンガとアルベドの会話を完全に把握していたので、今後の動きについての説明は不要だった。

話し合い擦り合わせをするべきなのはモモンガがどういう意図を持って行動しようとしていたのか、だった。

「なるほど、先ずは身の安全の確保ですか」

「ええ。当然の事ですけど、これを疎かにする事はできません。次にNPC達です」

「さっきのアルベドの様子を見る限り問題ないような気もしますが」

「ダメです。……考えたくはないですが、NPC達が我々を裏切り襲ってくる可能性もあります。確認が取れるまで警戒はすべきでしょう」

「うーん。……現実には、リアルになればそういう事もありえる、かあ」
クーゲルシュライバーはそう言いつつもNPC達は早々裏切らないのではないかと感じていた。

設定が色濃く反映されていたアルベドの姿を見ていたのもそういう理由の一つだが、もつと大きく漠然とした感覚があったのだ。

それは直感や勘といったものだ。

そんなあやふやなものを理由にすると馬鹿げている、とクーゲルシュライバー自身も思う。

だが、それでもそれこそが真実だという確信に近いものがあつただ。

それは先ほど感じた自分の能力に対する確信とほぼ同一の感触だ。

——— 那样的えば、悪魔喰いの大蜘蛛の時に取つた特殊能力でく真意看破>つていうのがあつたつけ

そんな事を思い出しつつも、クーゲルシュライバーは自分の意見を口にすることは無く、モモンガの話を聞いていく。

「……と、というのが私の考えです。なにかありましたら、どうぞ」
どうぞ、と言われても。

クーゲルシュライバーは擬腕を組むと触肢で絨毯をリズムカルに叩いた。

人間が腕組みをした状態で爪先で地面をトントン叩くようなものだ。

方針としては特に問題はない。というよりこれ以上のものはない、と思う。

モモンガの方針は十分に慎重で堅実だ。

この上自分が何かをするのであれば、それはそれぞれの行動を取るときのリスクを減少させ、メリットを増やす事を目標にすべきだろう。

リスクを減らす努力。 そうだな——。

クーゲルシュライバーの口が開く。

人間の上半身状の器官には口は存在しないので、開いた口はその下、巨大な牙に隠された蜘蛛の口だ。

「もしもNPCが裏切つて攻撃してきた時に備えて、私は完全隠密状態で行こうかと思うんですが、どうでしょう？」

「えっ」

強面のモモンガから気弱な声が漏れた事に触肢をピクリと動かしながらクーゲルシュライバーは説明する。

「いや、だって日を跨いでますから使用回数は戻ってますし、もしもモ

モンガさんが襲われても特殊能力1回につき3回までなら100%先手を取れますから」

「待ってください。そうするとNPC達と直接顔を合わせ会話するのは私だけになってしまおうのですが？」

モモンガの言葉を受けクーゲルシユライバーは、何を言ってるんだろうこの人は？とでも言いたげに頭状の部位を傾けた。

「そうですね。でもモモンガさんの先ほどのやり取りを見ている限り何の問題もないと思いますよ」

「問題があるんですよ！さっきのアレだって相当いっぱいだったんですから！」

眼窩の奥の赤い光を輝かせ骸骨が叫ぶ。

だがクーゲルシユライバーは聞く耳をもたない。

「そうでしたか。でも今回の状況じゃあ自己強化の時間を取る事は出来ません。」

そうなる私の能力的には奇襲を仕掛けないと階層守護者レベルからモモンガさんを守るのは少し大変なんですよ」

クーゲルシユライバーには深淵の大蜘蛛アトラクキナクアの種族的なペナルティとして魔法、アイテム、料理、音楽などによるバフ効果が一切効かない。

自己強化をするには<コズミックホラー>の職業レベルが4になった時に得られる常時発動型特殊技術<恐怖を喰らうもの>が必ずだ。

クーゲルシユライバーはこのスキルを所持してはいるのだが、このスキルでの自己強化には前提条件があり、その条件を満たすことが今の状況と相手では非常に難しいのだ。

「確かに階層守護者達の精神作用に対する耐性は高いですけど………」

モモンガもクーゲルシユライバーの言い分は理解できた。

それでも元はただの一般市民であるモモンガにとって、NPC達の前で威厳ある演技／ロールプレイをするのは精神的負担が大きすぎた。

できることならばその重圧を二人で分かち合いたかった。

骸骨の顔で伝わるかどうか分からないが、モモンガは縋るような気持ちで眼前の邪神に視線を送った。

その視線を受け、気持ちを通じたのだろうか？

クーゲルシュライバーの頭状の部位にある真紅の光が漏れる窪みと、モモンガの眼窩の奥に宿る真紅の光の視線がぴたりとあう。

そして、クーゲルシュライバーの蜘蛛の体が大きく揺れ、牙が絨毯に刺さりそうになるほど低く地面に伏した。

土下座だ……。

モモンガは直感でそう確信した。

「モモンガさん。本当に申し訳ないんですが、私達二人の安全の為だと思って頑張ってくれませんか？」

「……」

私達二人の安全の為。

私達（アインズ・ウール・ゴウン）の（友人同士）二人の安全の為。

その言葉にモモンガは無言で陥落した。

3話

「戻れ、レメゲトンの悪魔達よ」

モモンガの命令に従い、超稀少金属で作られたゴーレム達が己の席へと帰っていく。

これでナザリックの設備が使用できるかどうかの確認は取れた。

懸念事項が一つクリアされたことに安堵するモモンガを眺めつつクーゲルシュライバーは思考を巡らせていた。

やはり、モモンガさんは信頼できる。

仮想世界が現実になったという可能性についてモモンガから教えられた時、クーゲルシュライバーはまず最初に——本心からそんな事はないと否定していながら——プレイヤー同士の仲間割れが発生するのではないかと危惧した。

アインズ・ウール・ゴウンは多数決を重んじてきたが、このような非常事態においてそれが守られるだろうか？

そもそも自分とモモンガの二人しか居ないのだから、意見が異なり、もしもそれが対立するような事があれば、だ。

対立する意見の妥協点を見つけることが出来なければ二人の仲はたやすく引き裂かれるだろう。

そうなった時クーゲルシュライバーでは、ギルド長でありギルド武器を装備していて世界級アイテムまでも所持しているモモンガには勝利する事は出来ないだろう。

だから、モモンガが自身の考えを打ち明け、今後の方針を共に決めようとする姿にクーゲルシュライバーは内心安堵していた。

そしてその安堵はやはり間違いではなかったのだと今強く確信した。

モモンガは極当然のようにレメゲトンの悪魔達への指揮権を『ギルドメンバー限定』としたのだ。

それはつまりクーゲルシュライバーにもモモンガと同等の指揮権があるという事だ。

あくまでも対等な立場であろうとする処置に、クーゲルシュライ

バーはモモンガからの強い信頼を感じていた。

信頼には、信頼を。

共に助け合い、この先を生きていこうとクーゲルシュライバーは決心した。

「さて、これでひとまずの問題は解決か」

そう呟きながらモモンガは両手に輝く9個の指輪を眺めている。

正確には、そのうちの一つくリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをだ。

レメゲトンでの用事が済んだ後は、指輪に秘められたナザリツク内での転移機能を使用して第六階層にある闘技場へと向かう予定だった。

モモンガはそこで攻撃魔法の試し撃ちを行いつつ、アルベド以外の100レベルNPC達の忠誠心を確認するつもりなのだ。

転移した後、クーゲルシュライバーはNPC達が反逆のそぶりを見せたら即座にカウンターを放ちモモンガを救出できるよう、完全隠密状態で警戒する手はずになっている。

「それじゃあ次は第六階層まで転移できるかですね」

「ええ。先ほどムービースクロールが普通に使用できたから、こちらも問題は無いと思うんですが」

クーゲルシュライバーもモモンガと同じように、擬腕の先端、人間のよう^にに五つに枝分かれした指の一つに嵌っているくリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを眺める。

本来スパイダー系の異形種は指輪を装備できない。当然だ。蜘蛛には手も指もないのだから。

たった一つの例外であるアラクネという種族は女性専用で、性別男でゲーム登録したクーゲルシュライバーは随分と長い間指輪と無縁のユグドラシルライフを送っていた。

その生活が変化したのはレベルアップを繰り返し最上位種族である^{アトラク}深淵の大蜘蛛^{ナク}になった時だ。

深淵の大蜘蛛の常時発動型特殊技術の一つに指輪装備が可能となるものがあつた。

それによってクーゲルシュライバーは人間の腕のような擬腕を手に入れ、指輪の恩恵を授かることができるようになったのだ。

その時の喜び様は凄まじく、即座に課金して指輪の装備スロットを2個から10個まで拡張するほどだった。

ちなみに、我を忘れていたせいで登録された8個の指輪は性能のフランスなど全く考えられていなかった為、結局装備アイテムの厳選を行った後にクーゲルシュライバーは課金しなおす羽目になった。

「この指輪が生命線になりますね」

クーゲルシュライバーの言葉にモモンガが頷く。

「ええ。まずいと思ったら即座に転移して逃走に移ります。場所は宝物殿がよいでしょう」

「ギルドメンバーしか持っていないこの指輪がなければ侵入は難しい場所。避難所にはもってこいですね」

「そのとおりです。では、そろそろ行きましょう。覚悟はいいですか？」

モモンガのその言葉にクーゲルシュライバーが覚悟を決める。

何かあったときは慌てずにモモンガを救出する覚悟だ。

NPCとの戦闘に対する心構えも、出来うる限りで整えたつもりだった。

範囲攻撃でなぎ払われたとしても、それによって痛みを感じようとも。

自身が金と時間と苦労を注ぎ込み作り上げてきたキャラクターの性能を信じる。

大丈夫だ。階層守護者レベルの範囲攻撃が複数飛んできても、モモンガさんを救出して逃げる程度の事はできる。

それは紛れもない事実だ。

モモンガからあやふやになっていた階層守護者の大まかな攻撃手段を教えてもらいダメージ計算をした結果、可能であると判断された。

モモンガも太鼓判を押している。

ならば、なんの問題も無い。

クーゲルシュライバーはモモンガの骸骨の顔を8つの目で見つめると、大きく頷く。

——その一瞬前。

クーゲルシュライバーの脳裏に玉座の間でのアルベドの姿がよぎった。

美しく、清純なようで妖艶な魅力を持つアルベド。

その豊満なバストは、胸の前で組んだ手に握られた棒状の物体によつて形を歪められており、それがなんとも言えない魅力を……。

……棒？

「……ちよつと待ってくださいよ!？」

クーゲルシュライバーが恐怖を滲ませた声で叫ぶ。

モモンガは一体どうしたのかと眼窩の奥の光を点滅させた。

「ちよつとモモンガさん! さつきアルベド、ギンヌンガガブ真なる無[>]持つてませんでした!？」

「あ」

クーゲルシュライバーの言葉に、モモンガが忘れていましたと言わんばかりの気の抜けた声を上げた。

カパリと開いた髑髏の顎がプランプランと揺れている。

その姿にクーゲルシュライバーは激しい怒りを覚える。

が、その怒りは突如として何かに抑制されたかのように消えうせ、冷静さが戻ってくる。

忘れていたのはモモンガさんだけではない。自分だってそうだ。

それなのにモモンガさんばかりを責めるのはどうなのだろうか？

情けなくも思考を放棄した自分とは違って、知恵を絞って様々な対応を取ってきた彼に余りにも失礼ではないか？

そういつた思いが、偶然を装って俺を殺す気か! という暴言が感情に任せて口から放たれるのを未然に防いでくれた。

なるほどこれが精神作用無効化か。

なんともありがたいものだと思いながら、クーゲルシュライバーは力なく口を開く。

「あ、じゃないですよ……。広域破壊が可能な世界級ワールドアイテムです

よ？そんなの喰らったら俺、流石に死にますって……」

「す、すみません！本当に申し訳ない！自分が世界級アイテムを装備しているからって、ああクソツ！なんてバカなんだ俺は！」

世界級アイテムの効果を受けなかったためには、同格の世界級アイテムを所持しているか、特別な職業についていなくてはならない。

モモンガは前者だ。

仲間達から個人的に所有する許可を貰った世界級アイテムを身に着けているモモンガには、アルベドの持つ＜真なる無＞の絶大な威力の広域破壊効果は通用しない。

だが、クーゲルシュライバーは違う。

世界級アイテムも持っていなければ、特別な職業でもないのである。

そんな彼が、何かの成り行きで真なる無の一撃に巻き込まれたとしたら。

如何に強力な物理・魔法ダメージ減少の特殊能力を持っていたとしてもクーゲルシュライバーに待つのは、死、である。

知らず知らずの内に仲間の命を危険に晒していた事に気づいたモモンガの心中は穏やかではなかった。

自己嫌悪の怒りと悲しみが嵐の海のようにモモンガの精神を苛む。

だがそれも数回のぶり返しを経験した後完全に沈静化する。

「……本当に、すみません。今後はこのような失態が無いように気をつけますのでどうか許してください」

心の底からの謝罪と共にモモンガが頭を下げた。

その姿をクーゲルシュライバーは表情筋など存在しない肉体に感謝しながら見つめていた。

やはり、モモンガさんは信頼できる。この人を一瞬でも、感情に任せて疑ってしまった自分はとんでもない馬鹿だ。

興奮しては沈静化するモモンガの姿は明らかに精神作用無効化の作用を受けていた。

つまり先ほどの激しい自責の叫びは激しい感情を伴った、モモンガの本音であると判断してもよいだろう。

モモンガさんは、俺の命を危険に晒した事を心から悔いている。

その事を理性でも、直感でもクーゲルシュライバーには理解できなかった。

「許すも許さないも……俺だってモモンガさんと同じようにさつきまで忘れていたんです。だからコレはお互い今後は注意深くやっつけてこうね、というだけの話で。」

寧ろ私のほうこそすみません。嫌味な言い方をしてしまつて……」
ごめんなさい。

そう言つて玉座の間でしたように土下座したクーゲルシュライバーの姿に、慌ててモモンガも膝をつき骨の頭を床に擦り付けた。

そうして暫くの間、レメゲトンには死の支配者と深淵の大蜘蛛が互いに謝罪しながら頭を下げる姿があつた。

「……なんとか、間に合つたな」

薄暗い通路にモモンガの声が染み込んでいく。

その声がいささか疲れを含んでいるように思えるのは気のせいではないだろう。

レメゲトンから宝物殿へとクーゲルシュライバー用の世界級アイテムを取りに行った時の事——つい先ほどの出来事だ——を遥かな過去に思いをはせるように思い出す。

いや、思い出そうとして、やめた。

遠い過去のように思えるのはそれを忘却したいというモモンガの意思の影響だ。

酷い有様だったのだ。本当に酷い。

だが気分を切り替え、これからの事に全力で当たらねばならない。此処からが本番なのだ。

モモンガは無理やり思考を変えて通路の先にある階層守護者達との交渉の場を睨む。

もつとも、先程の宝物殿で遭遇したハプニングから戦闘などの危険

な状況に陥る可能性は低いと考えているのだが。

「それじゃあ私はこれから完全隠密状態に入ります。アクション回数
の節約の為に予め〈伝言〉^{メッセージ}を起動させておきましょう」

「了解しました。そのまま〈伝言〉^{メッセージ}は繋ぎっぱなしにしておきます」
「お願いします」

クーゲルシュライバーの持つ超位魔法に匹敵する隠密系特殊技術
は、ホラー系と呼ばれる職業をそれぞれ10レベル以上で最低3つ取
得していないと入手できない。

この条件を彼は〈オカルトホラー〉〈パニックホラー〉〈コス
ミックホラー〉の3つを10レベル以上で取得することにより達成
している。

取得したスキルをリセットする効果のある課金アイテムを使い、ス
キル構成を最適化させた上で手に入れたその特殊技術の名は〈
エッセンス・オブ・ホラー
恐怖の本質〉という。

この特殊技術は使用者を完全に隠蔽してしまう。

その力は凄まじく世界級アイテムを除く如何なる手段を以てして
も使用者を発見することは不可能だ。

正に隠密系スキルの最高峰と言える効果であるが、

この隠蔽効果は使用者が3回、攻撃や魔法、アイテムの使用などの
アクションを行うと解除されてしまう。

もしくは範囲攻撃などで3回使用者にダメージを与えることに成
功するとこの効果は解除になる。

モモンガとクーゲルシュライバーが前もって〈伝言〉^{メッセージ}の魔法を使
用したのは、3回あるアクション可能回数を減らさないようにする工
夫だった。

「では行きます。〈恐怖の本質〉^{エッセンス・オブ・ホラー}」

別に声に出さなくとも発動は出来るのだが、モモンガにも完全隠密
状態に入った事を伝える為にあえて声に出して特殊技術を発動させ
た。

モモンガの鬼火のような目が左右に揺れる。

その姿を確認してから、クーゲルシュライバーは繋ぎっぱなしの〈

メッセージ
伝言>を使用してモモンガに話しかけた。

『ちゃんと発動していますかね』

『はい、クーゲルシュライバーさんが何処にいるのか、さっぱりわかりません。……あ、私の口って今動いていますか？』

『いや、動いてないです。これなら交渉中にも問題なく会話が出来ますね』

『ええ。……準備完了ですかね』

モモンガの声が硬く、低くなる。

その姿も相まってクーゲルシュライバーは、まるで魔王のようだな、と思った。

『戦闘になる可能性は低いと思います。ですが、万が一があった場合はクーゲルシュライバーさんが頼りです』

『分かっています。その時は任せてください』

『……頼みます』

一瞬、何時もの好青年然した声に戻ったモモンガに、クーゲルシュライバーは元氣付けるつもりで気取ったような声で答えた。

Wenches meines Gottes Willie
『我が神のお望みとあらば』

「やめろオ!!」

精神に直接響いた声に、モモンガは血を吐くような叫びを廊下に響き渡らせる。

『ちよ、モモンガさん！シー！シーッ！アウラが心配してきちやいますよ！』

本気で焦っているクーゲルシュライバーの声に、モモンガは頭を抱えながらく伝言>で答える。

『あのですね、それ、やめましょうよ、ね？いや、ほんと。べつにね？クーゲルシュライバーさんのしゅみをどうこういうつもりはないんですよ。』

でもおれのまえではさ。やめましょうよ。マジで』

『ええー。でもかつこよかったですよパンドラズ・アクター。アクターらしい身振り手振り、ビシッと決まった敬礼、それにあの喋り方』
本気で絶賛しているクーゲルシュライバー。

その声を聞くだけでモモンガは最強のギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを、崩れ落ちそうになる体を支える為の杖として使用せざるを得ないほどに憔悴していた。

そんなモモンガの様子に気づいていないのか、不可視な事をいいことにクーゲルシュライバーはモモンガに対し見よう見まねの敬礼をした。

『WennessmeinessGottesWille我が神のお望みとあらば！くふう！かけえ！』

『やめろといってんだよこのボールペン野郎がああああああ!!』

再度唱えられた死の支配者をも悶絶させる、漆黒の呪文。

それはモモンガにむき出しになった肋骨を掻き筆らせるほどの効果を発揮した。

即座に発動した精神効果無効化がモモンガに冷静さを取り戻す。

この時、モモンガは骨しかないわが身を呪った。

モモンガは泣きたかったのだ。大粒の涙を流してこの胸にこびり付いた苦い思いをすべて流してしまいたかった。

クーゲルシュライバー。

ドイツ語でボールペンという意味の名前を持つこのギルドメンバーとは趣味、というより好みがあつたという事でそれなりに仲がよかつた。

円卓の間で、辞書片手にカツコイイ響きのドイツ語と一緒にピツクアツプする程度には。

日付を跨ぐまでには間違いなくアインズ・ウール・ゴウンの輝かしい栄光の日々の1ページだったその思い出は、今や悪夢と同義だ。

モモンガは自分がいつの間にか大人の階段を上がついていた事に気がついていた。

こんな事で気づきたくはなかつたが。

『なんで怒るんです？茶化してるわけじゃないですよ？』

『……怒ってないです。心が痛いだけなんです。あ、そういうえばクーゲルシュライバーさんウルベルトさんと仲良かったですもんね。そうかあ、だから現役なんだなあ』

『ウルベルトさんかあ懐かしいです。確かに仲良くしてもらいました

ね。一緒に武器作ったり、後で探してみるかな……ゲシユペンスト
シユバルツリッター』

『うぐっ！も、もうこれぐらいにしましょう！行きますよ！』

『あ、はい』

これ以上の会話は命に関わる。

重篤な中二病患者者 クーゲルシユライバーとの会話を強引に終了させると、息はしていな
いが息も絶え絶えといった体でモモンガは闘技場への入り口へ向
かって一歩踏み出した。

4話

「モモンガ様っ！」

自動ドアのように完璧なタイミングで開かれた格子戸を潜って闘技場へと足を踏み入れた瞬間、

モモンガの視界に金色の髪がうつりこむ。

焦りを感じさせる声で己の名を呼ばれたモモンガはすわ奇襲かと杖を握る手に力を込め――。

「モモンガ様！無事ですか!?!」

闇妖精の少女の、モモンガの身を案じる嘘偽りのない言葉に力を緩めた。

「アウラか。見ての通り私はなんともないぞ」

落ち着いた威厳を感じさせる声動作で両手を広げ無事である事をアピールするモモンガに、この第六階層の階層守護者であるアウラ・ベラ・フィオーラは安堵の吐息を吐いた。

「よかったあ。お声が聞こえたので、モモンガ様の身になにかあったんじゃないかと」

「そうだったか。余計な心配をさせてすまなかったな」

まさに余計な心配だった。

アウラが聞いたモモンガの声とは、黒歴史を掘り起こすクーゲルシュライバーに対する制止の叫びだった。

ある意味危険な状態ではあったが、アウラが心配するような事態ではなかったのは確かだ。

「そんな！あたしは至高の御方々に仕える者として当然の事をしただけですよ！だからモモンガ様がそのようなことを仰る必要などないですよ！」

「……そうか。お前のその忠誠心、嬉しく思うぞアウラ」

モモンガはその硬い骨の手で美しい金色の髪を傷つけないよう、細心の注意を払って優しくアウラの頭を撫でた。

鋭い指先がアウラの頭皮を微かに引っ掻きながら耳の裏を通り首筋をなぞる。

そして掌全体でアウラの頬を覆い、軽くその頤を上げさせた。言われたとおりにやってみただけ、これでいいのだろうか？

子供とは言え、女性の頭を撫でた経験などないモモンガは、不安を感じながらアウラを見つめた。

その視線の先では、アウラが口を開けたまま絶句していた。

しくじったのだろうか？モモンガがそう思った次の瞬間、アウラの褐色の頬に朱が注し、ピンと伸びた長い耳までもが赤く染まった。

「はひっ!? あ、あの、こ、光栄でしゅ、じゃなくてえ！もったいないお言葉です！」

「なんであたし当然の事をしただけなのにモモンガ様に頭撫でられてるの？」

「どうしてモモンガ様こんなに優しいの？実はとってもお優しい方だったの？」

それともあたしにだけ優しいの？

今までお会いする機会も少なく、お話も数えるくらいしかしていないのに。なんでいきなり？

「どうか撫で方がなんかスゴイ！どうしよう！よくわかんないけど、モモンガ様がスゴクスゴイ！」

特徴的なオツドアイを白黒させながら必死に言葉を紡ぐアウラ。

そんな彼女をじっくり時間をかけて撫でまわしつつ、モモンガはく
メッセージ
伝言>

でクーゲルシュライバーに確認する。

『どうですか？』

『見ればわかると思いますけど判定結果白です。混乱しつつもめっちゃくちや喜んでますよ』

<恐怖の本質>発動中のアクション可能回数が一回分減った事を
エッセンス・オブ・ホラー
感覚で理解し、舌打ちをしつつもクーゲルシュライバーが答える。

クーゲルシュライバーが取得している<常時発動型特殊技術>の
バックス
数は一般的なプレイヤーと比べてもかなり多い。

その中の一つである<真意看破>は別のスキルの前提条件となっている為に取得したものだ。

ユグドラシルでは敵のフェイント系スキルに掛かりにくくなるという地味な効果しかなかった。

だが今はそれだけではない。

じっくりと1分以上をかけて人物を観察すれば信頼できそうかどうかという感覚を得ることもできる。

この感覚が本当に正しいのかどうか今後精度を確かめる必要はあるが、モモンガとクーゲルシュライバーはこのスキルを判断材料の一つとして利用してもよいと考えていた。

＜常時発動型特殊技術＞による判定ならばアクション可能回数が減少しないのではないかという期待もあったのだが、それは裏切られてしまったようだ。

これも要検証だ。

クーゲルシュライバーは心のメモにそう書き込み＜伝言＞^{メッセージ}を飛ばす。

『とりあえずアウラは大丈夫そうです。この様子なら弟の方も』

『ええ。良い子に作ってくれたぶくぶく茶釜さんに感謝しなくては』

『ホントに。あ、モモンガさん。そろそろアウラが限界っぽいんで、先に進めたほうがいいんじゃないですか？』

クーゲルシュライバーに言われて見てみれば、そこには全身に力を込め、目をきつく瞑り、下唇を噛みながら頭をモモンガに差し出しているアウラが居た。

その姿にモモンガは自分が新入社員にセクハラ、いや、小学生か中学生に万札握らせて悪戯する変質者になったかのような錯覚に襲われた。

かつてのギルドメンバーが残してくれた大切な存在を汚してしまったような感覚にモモンガは小さく呻いた。

いや、セーフだ。合法だ。

アウラは喜んでるわけだから、これはセクハラではない。合意の上での行為なんだ。

そもそも俺がこんな変態みたいな事してるのは、これがクーゲルシュライバーさんの提案だからであって……つまり俺の意思ではな

い。

これが事案だというのであれば道連れにしてやるぞクーゲルシュライバーさん。

モモンガは多大な精神力を消費しつつ、アウラの頭から手を離れた。

名残惜しいかのように柔肌をなぞりながら離れていくモモンガの手の感触にアウラが小さく声をあげた。

俺は何も聞いていない。

モモンガはその外見にすぐわぬ艶を含んだ声を努めて無視して話を始めた。

「さてアウラよ。私がここに来たのはだな……」

「次に各階層守護者に聞いておきたいことがある。皆にとって、私は一体どのような人物だ？」

アウラを撫でくり回して赤面させたのちモモンガは実に手際よく確認事項を消化していった。

アウラの双子の弟であるマーレ・ペロ・フィオーレとの顔合わせも済ませ、フレンドリファイアと精神作用無効化に関する検証を行った。

その後集合した各階層守護者からの忠誠の儀を受けその忠義が揺るぐことの無いものと知り、帰還したセバスを交えて現在ナザリック地下大墳墓がおかれた状況と今後の動きについて話し合った。

そして今。最後の確認としてモモンガは守護者達に問いを投げた。

「まずはシャルティア」

「美の結晶。まさにこの世界で最も美しいお方です。その白きお体と比べれば、宝石さえ見劣りしてしまいます」

迷い無く答えるシャルティアを見つめ、自分に向けられた言葉をどこか他人事のように聞きながらモモンガはクーゲルシュライバーと

＜伝言＞を交わしていた。

『美の結晶ってなに？俺、骨なんだけど』

『歯並びいいし、そういうのポイント高いんじゃないですか？』

「——コキュートス」

「守護者各員ヨリモ強者デアリ、マサニナザリック地下大墳墓ノ絶対ナル支配者ニ相応シイ方カト」

『ロールプレイ重視でスキル取ってるからシャルティア辺りには普通に負けかねないんだけど』

『相性悪いですよねえ。私もクリティカル無効なシャルティアは苦手な部類だし、試合とか挑まれると困っちゃいますね』

「——アウラ」

「慈悲深く、深い配慮に優れた素敵なお方です」

『深い配慮？なにそれ。ついさつきミスったばかりなんですけど』

『私より全然優れてるから気にしないでください。それよりモモンガさん、アウラが素敵って言ってますよ。こういうのナデポっていうんですよー。』

「……マール」

「す、すごく優しい方だと思います」

『マールは無難だな。そうそう、この程度の認識でいいんだよ』

『モモンガさん？マールの表情見てもそう言えます？いや、本当にモテモテですね』

『マールのアレはそういうのじゃないでしょ！単に恥ずかしかってるだけですよー。』

「——デミウルゴス」

「賢明な判断力と、瞬時に実行される行動力も有された方。まさに端倪すべからざる、という言葉が相応しきお方です」

『誰の話をしているんだデミウルゴス。俺の事を話してくれ』

『そうは言いますが俺から見てもモモンガさんってそういうところ
ありますよ。デミウルゴスはちよつと過大評価してるだけで』

『俺はただの一般人なんです！勘違いしないで下さいよお！』

「——セバス」

「至高の方々の総括に就任されていた方。そして最後まで私達を見放
さず残っていただけだ慈悲深き方」

『あれ？……この認識、他のNPCも同じなんでしょうか？』

『そうだとすると少し、いや、かなりまずいです。つまり、モモンガさ
ん以外のギルドメンバーは自分を見捨てた、と思ってるわけですよ
ね』

『此処は少し探らないとならないでしょうね』

「そして最後になったがアルベド」

「至高の方々の最高責任者であり、私どもの最高の主人であります。
そして私の愛しいお方です」

『ああああああ……タブラさんになんと詫びたらいいんだこれ』

『タブラさんなら詫びなんていらないうっていいですよ』

『……そうでしょうかね？』

『そうです。気にしなくていいことですよ』

設定を変更したことをクヨクヨと悩むモモンガに励ましの言葉を
贈りつつ、クーゲルシュライバーは守護者達の言動を思い出す。

まず確かなのは、守護者達のモモンガへ忠誠心は絶対的であるとい
う事だ。

恐らくこれ以上は上がらないだろうと思うほどに、守護者達の忠誠
心は高い。

その事に強く安堵すると同時に不安になった。

安堵は、もし今後自分がなんらかの原因により守護者を含むナザ
リックの存在に危害を与えられそうになっても、モモンガと仲がよけ
ればそのピンチを脱することが出来るからである。

一言やめろと命令すればNPC達は私心を殺してでもモモンガに

従うだろう。

不安になったのは、その極限の忠誠心が何からきているものなのかが不明だからだ。

当然のように忠誠を誓っているが、それは何故だ？

元々ギルド拠点のNPCだからプレイヤーに従っている、というのが一番期待したい答えだ。

もしそうならばNPC達は絶対に裏切らない。忠誠心についての設定テキストが無くとも、システムの忠義を尽くすようになっていくからだ。

だが、もしも。

NPC達が忠誠を誓う理由が、モモンガの事を先ほど答えさせた通りの『完璧かつ絶対なる支配者』であると信じているからだとしたら？

当然ながら、守護者達の言ったモモンガへの評価の大部分が勘違いだ。

なによりも美しく、誰よりも強く、慈悲を知り、賢く勇敢で、至高の存在達を纏め上げ、その頂点に君臨する真の支配者。

そんなものはクーゲルシュライバーの知るモモンガの実態とは遠くかけ離れていた。彼はもつと一般的な男なのだ。

だがその偶像にこそ彼らが忠誠を捧げているとするなら。もしそのイメージを壊すような事をしたら。失望されたら。

絶対の忠誠心はその強さのまま逆転し、信仰するアイドルのスキヤンダルを知った熱狂的なファンが起こす凶行など兇戯に等しい恐ろしい何かが起こってしまうのではないか？

『どうしましょうこれ。あいつら……本気ですよ』

『ええ。本気でモモンガさんの事をあんな風に認識している……これはちよつと、あの評価を崩すことは危険かも知れないですよ』

『やっぱりそう思いますか？であれば、あいつらの言うイメージを崩さないよう、演技しなくちゃ……』

＜伝言＞で送られてくるモモンガの声は非常に重く暗いものだ。それだけで今彼が感じているストレスがいかにどのものか理解できて

しまう。

クーゲルシュライバーにとつても他人事ではない。

今は存在が露見していないが、何時かはNPC達の前に姿を現さなければならぬ。

その時に彼らが自分の事をどう評価しているのかがわかっていなければ、即座に失望される可能性もある。

失われた信用を取り戻すのは、それが強大であればあるほど難しいものだ。

『モモンガさん。すごく気が乗らないんですが、私に対する評価も聞いてもらえませんか？』

『勿論ですよ。まかせてください』

モモンガもその情報の重要性に気づいているのだろう。すぐさま了承の返事がくる。

クーゲルシュライバーは、どうかあんな恐ろしい過大評価が自分に對してなされていけないようにと神に祈った。

「……なるほど。皆の考えは十分理解した」

短くない沈黙の後、モモンガはようやく口を開いた。

「では、守護者達よ。再び問おう」

その言葉に守護者達はどのような質問がモモンガから投げかけられても対応できるように身構えた。

「お前達は至高の41人……つまり、私以外のアインズ・ウール・ゴウンのメンバーをどう思う？ 去っていった彼らを恋しく思うか？」

問いを投げた瞬間、守護者達の間流れる空気が変化した。

アウラとマール、シャルティアは露骨に悲しみを顔に浮かべ、コキュートスは何かに耐えるようにその腕を震わせている。

常に微笑みを絶やさず、感情がうかがい知れない部分があったデミウルゴスですらどこか悲しみを感じさせる表情をしていた。

「それは……おそらく皆、同じ答えかと存じます」

アルベドが守護者を代表してモモンガに答えた。

「至高の御方々を恋しく思わない者など、このナザリックには居りません。偉大なるモモンガ様のお隣に、至高の御方々の姿があればどれだけ素晴らしいことか！誰もがみな、去られていった御方々が再びこのナザリックにお帰りになられる時を待ち侘びているのです」

そうなのか？

モモンガはアルベド以外の守護者に目で問いかければ、皆、それに頷いた。

「そうか……。嬉しいぞ守護者達よ。我が親友達の事をそこまで思ってくれているとはな……」

で、あればだ——。モモンガは言葉を続ける。

「お前達は我が友、クーゲルシュライバーの事を覚えているか？お前達にとって彼はどのような存在であったのだ？」

「シャルティア。言え」

「は……はいっ！」

自分の時とは違い、即座に答えを返せなかったシャルティアの様子に、モモンガの視線に疑惑の色が混じる。

ちらりと他の守護者の様子を見てみれば、アウラとマーレ、コキユートスはおろかデミウルゴスでさえ何かに苦悩するかのような素振りを見せている。

唯一余裕を持っているのはアルベドだけだ。

もしかして、覚えていないのか？それだとしたら、彼は過大評価されずに、素のままにナザリックへと帰還する事ができるではないか。なんて羨ましいんだ。モモンガは答えも聞かずにクーゲルシュライバーに嫉妬した。

「どうしたシャルティア。よもや、彼の事を忘れたとでも？」

「め、滅相もありんせん!!至高の御方々を忘れるなんてそんな事は絶対にないでありんすモモンガ様！」

「では話せ。お前に取って彼はなんなのだ？」

「はい……モモンガ様が美の極限であるならば、かの御方はまさしく恐怖の極限。死者すらも恐怖に怯えすくむことでしよう」

「——コキュートス。おまえはどうだ」

「ハッ！底知レヌカヲ秘メタ御方。実力ヲ見通セヌ深淵ノ如キ御方カト」

「——アウラ」

「ご自身の役職に誇りを持ち、情熱を持って職務にあたる方です」

「——マーレ」

「と、とても真面目なお方です。その、すごすぎるぐらいに」

「——デミウルゴス」

「指揮下にある者達の失敗を決して許さない完璧主義者。至高の御方々からも恐れられた苛烈なお方です」

「——セバス」

「至高の御方々の記録係。そして御仕える我々の事も気にかけてくださる慈悲のお心も合わせ持つお方」

「——アルベド」

「至高の御方々の栄光を余すところ無く記録する事を使命とされたお方。そして私が愛を捧げるお方の御一人です」

何でそうなったんだ！

クーゲルシユライバーは今すぐ姿を現し守護者達に問い詰めたい気持ち在必死に抑えた。

つまり、なんだ？

クーゲルシユライバーとは恐怖の極限であり、力の限界が見えない強者であり、仕事熱心な超堅物の完璧主義者で同僚からも恐れられているが部下を思いやる事もできる優しさを合わせ持つ、アルベドの愛を捧げられた存在である、と。

『なにこれ』

『単純な高評価とはまた違った厄介さですねコレは……』

語られる守護者からの評価に、クーゲルシユライバーは悶絶していた。

なにこれ、などと言いつつも彼らがそう評価する原因に心当たりがあったのだ。

『ナザリック内での撮影の事、こいつら覚えてるのかよ!』

『ああー……鬼監督でしたもんねクーゲルシュライバーさん』

『やめて!あれはやりすぎだったって今でも申し訳ないと思ってるんだから!』

かつてのナザリックでギルドメンバーの大半が参加した大規模な撮影が行われた。

それは当時クーゲルシュライバーが製作していた大型の動画に使用する素材を撮るためのイベントだったのだが、その撮影が困難を極めたのだ。

何故困難だったのかと言うと、その原因は幾つかあった。

まず監督であるクーゲルシュライバーの要求する画の理想が高すぎた事。

次にウルベルトとたち・ミーが参加していた事。

とどめとして、るし★ふぁーがテンションマックスのやる気満々状態だった事。

これらの原因が重なり撮影会は一転阿鼻叫喚の地獄絵図と化し、一向に進まない撮影にクーゲルシュライバーがぶち切れたのだ。

『まあまあ。今ではいい思い出ですよ。……で、どうします?』

『……いや、出て行きますよ。そういうロールプレイもまあ、やったことあるし』

『では、タイミングを作りますね』

『お願いします』

「なるほど。その言葉に嘘偽りは無いな」

「勿論でございます。我ら一同、モモンガ様に嘘をつくことなどありません」

「そうか……」

満足げに頷く主人の姿に、守護者達は恐縮ですと言いたげに頭を下げた。

そして続くモモンガの言葉に頭を跳ね上げた。

「だ、そうですよ。クーゲルシュライバーさん」

いま、自らの主人はなんと言ったのか。

聞き漏らす事無く今しがた認識したはずの言葉の意味が信じられず守護者達はモモンガを驚愕の表情を隠そうともせずに見つめた。

見つめようとした。

だがそれは叶わない。

なぜならばモモンガと守護者達の丁度中間。

何も無いはずの空間から漆黒に染まった粘着質の闇そのものがあふれ出してきたのだ。

その底なしの闇が守護者達のモモンガへの視線を遮っている。

理解しがたい現象を目の当たりにした守護者達はしかし、取り乱すことも無く闇に向かい深く頭を下げた。

その闇の奥から感じる尊き気配に、全身を歓喜に震わせながら。

「……異論は無い。流石は階層守護者達、と褒めるべきかな？」

土に杭を打ち込むような音が、八つ。

流れ出た闇が世界に溶けるように消失したその時、聞くだけで畏怖の感情を掻き立てられる冷淡な声が闘技場に響いた。

その声を聞いただけで、アルベドはもう涙を堪えることが出来なかった。

恐怖の涙ではない。

アルベドの金色の瞳を濡らすその雫は、二度と会うことの出来ないと思っていた愛する人と再会することが出来た至福の涙だった。

はやく。はやくその尊きお姿を拝見したい。その御威光に触れさせてほしい。なにとぞ。なにとぞこの哀れな女にご慈悲を！

アルベドの忍耐はもはや限界に近かった。

「面を上げよ、我らが守護者達よ」

モモンガの声に、守護者達は首が霞む程の速度で頭を上げた。

そして誰もが嗚咽を堪え切れなかった。

「ああークーゲルシュライバー様!!よ、よくぞ……よくぞお戻りになられました！この時をどれほど待ちわびたことか!!」

あふれ出す涙を振り払い、面を上げた先ではアルベド達が忠義を捧

げるべき尊き存在がその数を増やしていた。

すぐさまあふれ出る涙に滲む視界には、ナザリツクの絶対的支配者であるモモンガと肩を揃えて並び立つ、

永きに渡る時を越えナザリツクに帰還を果たした至高の存在、クーゲルシュライバーの姿があった。

凄まじい重圧感が守護者達を襲う。辛うじてモモンガの放つプレッシャーに耐えていたというのに、それが二倍になるとは！

守護者達は畏怖の感情を抑え切れなかった。

そしてそれ以上に歓喜していた。自分の仕える主はこんなにも偉大なる存在なのだ。

「ああ、今帰った。……泣くなアルベドよ。美人が台無しだぞ」

「く、くふー！も、もつたいないお言葉！」

うわ！アルベド目え怖い！

目を見開き金色の瞳をギラギラと輝かせながら発せられたアルベドの奇声に、モモンガとクーゲルシュライバーは悲鳴を上げないようにするのが精一杯だった。

モモンガは杖を強く握り締めるだけで済んだが、クーゲルシュライバーは豹変したアルベドの表情に怯え、よろけるように後ずさってしまった。

なにやってんの俺！情けない姿見せてどーするんだよ！気づかれないように、姿勢を立て直さねば！

クーゲルシュライバーは細心の注意を払って立ち位置を元に戻そうとするが、見られているという緊張感から上手くいかない。

傍から見てみればなにやらフラフラとしているのが丸わかりだった。

その姿を見てモモンガがすかさず助け舟を出した。

「ク、クーゲルシュライバーさんは帰還したばかりでお疲れのようだな。顔合わせは今日のところは切り上げようじゃないか」

演技とか無理です！もう勘弁してください！

威厳を見せるつもりで姿を現したのに、出だして躓いてフォローされている自分に情けなくなりながらもクーゲルシュライバーはその

提案に乗ることにした。なるべく威厳を損なわないように慎重かつ素早く言葉を選ぶ。

「すまない我が友よ。あの忌まわしい封印を破り、ナザリツクに帰還するため次元の壁を突破するのに些か力を消耗しすぎたようだ……」

「……お、おう」

おねがい引かないで!?

涙腺があるならクーゲルシュライバーは泣きたかった。

威厳ある振る舞いは出来ないのに、なぜ咄嗟の会話でこういうセリフがスラスラと出てきてしまうのか。

「うん、いや、うむ。確かにあの封印を破って次元の壁まで破れば消耗するな。なにせあの封印だからな。あの、凄まじい、恐るべき封印な！」

ああ、モモンガさんに中二病だと思われてる。すっげえ気を使われている。

もう、消えてしまいたい。というかもう消えよう。

クーゲルシュライバーは意気消沈しながらく伝言＜メッセージ＞を使用した。

『自室に帰らせてもらいます』

『え？あ、おつです……』

「名残惜しいが自室に戻る。皆、また後日」

それだけ言い残すとクーゲルシュライバーは指輪の力を使用して闘技場から姿を消した。

言っていた通り、第九階層にある自室へと向かったのだろう。

「ふむ。こうなつては仕方が無いな。本当は帰還した彼をお前達と共に歓迎したかったのだが、ああ仕方が無いな。それは後日としよう。……お前達を信頼し、私の仲間達が担当していた執務の一部まで委ねる。あまり浮かれず、今後も忠勤に励め」

大きく頭を下げ、拝謁の姿勢を守護者達の前からモモンガは逃げるように転移して姿を消した。

主人が居なくなった事を気配で確認すると、拝謁の姿勢のままセバスはく伝言＜＞を使用する。

相手はメイド長であるペストーニャ・S・ワンコだ。

セバスはレベル1のホムンクルスである一般メイドをクーゲルシュライバーの自室へ派遣するように指示した。

あの偉大なるナザリツクの支配者をして凄まじい、恐るべきという言葉を使わせる強力な封印。

それがどのようなものなのかセバスには想像もつかなかったが、それだけの戒めを破れば如何に至高の御方であろうと疲労して当然だろう。

疲労した主人を一人にするなど許されることではない。

セバスの行動はこのナザリツクにおいて誰もが納得する当然の行いだっただけだ。

一人で心の傷を治したいクーゲルシュライバーとしては、実に勘弁してほしいものではあったが。

5話

モモンガとクーゲルシュライバーが異常な現象に巻き込まれてから2日が経っていた。

その日モモンガはメイドや護衛を部屋の外へと追い出し、一人きりの部屋内で大きな執務机に両肘を寄せ手で頭を抱えながら机の上に置かれた一枚の紙を眺めていた。

紙の隣には空の封筒が無造作に投げ出されている。

その開け放たれた口には封蝋が施されていた。すでに碎けてはいるが、この封蝋には蜘蛛を思わせるサインが刻印されていた。

そのサインはクーゲルシュライバーの自室の扉に刻まれている物と同じであり、それはつまりこの封筒が彼から送られてきたものだという事を示していた。

「極秘書類だという話だったが……」

モモンガは今一度、手元の書類に目を通した。

手書きの書類だ。

定規で引かれた美しい線が大小の囲いを形成している。

その囲いの中には、名前、LV、種族、職業といった言葉が書かれていた。

「これはキャラシじゃないか！」

モモンガの言うとおり、それはキャラシートだった。

クーゲルシュライバー自身もキャラシートとして製作しただけあつて、

題名に「キャラシートver. 1」とデカデカと書かれている。

モモンガはいざという時の為にお互いの能力を把握しておくべきだと考えていた。

今後組むこともあるだろう連携の為でもあるし、この世界に来たことよって変化している呪文やスキルの効果に関する情報も共有しておかなくてはならない。

その為にクーゲルシュライバーにお互いの現状について定期的にレポートを出そうと提案したのだ。

その提案を未だ部屋から出てこないクーゲルシュライバーは快く受け入れ、昨日の今日だというのに、こうしてモモンガの許へと至高の41人以外の閲覧を厳しく禁じた封筒に入れられて届けられたのだった。

「いや、見やすいけどさ。なにこのダメージ・ダイスとかACとかいう項目は。空欄になってるがどういう意味があるんだ？いや、それよりもだ」

ユグドラシルには存在しないパラメーターを示すであろう単語に困惑しながらも、モモンガはキャラシートを裏返しそこに書かれている夥しい量の文章を睨みつける。

文章の一番上には「ロールプレイの方向性と各種設定」と書かれていた。

「アルベドの設定テキストを開いたときみたいだ……いや、手書きな分こっちの方がすごいぞ……」

視線が滑りそうになるのを必死に堪えてモモンガは細かく、そして密集する文字群を読み解いていく。

読むだけで正気が失われていくようだ。

昨日は中二病がどうか言って傷ついていたようなのに、どうしてこうなったのか。それがモモンガにはわからない。

「いや、ユグドラシルでの設定を上手く絡めてるし、別にいいんだけどさ」

そうは言いつつもモモンガは思わずには居られない。本当に大丈夫なのかと。

この設定で演技するの、クーゲルシュライバーさんなんですよ？と。

「土方歳三的ポジションを目指すって、どういう事なの……？」

モモンガは一人なのをいいことに、唸り声を上げながら机に突っ伏した。

「食欲はなくとも、食べ物は食べられる。睡眠欲はなくとも、寝れない

わけではない……つと」

魔法の照明により薄暗く保たれた寝室内で、クーゲルシュライバーはメモに検証の結果を書いていた。

「よし。お次は墳墓トウム・スパイダー蜘蛛で取ったスキルに關係する確認だ」

誰に聞かせるわけでもなく呟くと、クーゲルシュライバーはメイドに運び込ませた巨大な姿見の前に立った。

その体は漆黒の光沢を放つだけで、以前身に纏っていたような緑のオーラを発してはいない。

恐怖される存在であるという評価を崩さないようにと、守護者達との謁見ではオンにしていたく恐怖のオーラⅣは今は必要ないと判断してオフにしていた。

クーゲルシュライバーは8本の肢を器用に使つて蜘蛛の体の裏側を鏡に映す。

そして巨大な蜘蛛の腹部を凝視する。

正確に言えば頭胸部との境界に近い腹部の上端を、だ。

「うーむ……なんか、蓋みたいなのがある」

見つめる先には確かに黒い小さな蓋のような甲殻があった。

動かすことが出来るだろうかとその部分を意識して力を込めると、静かに蓋が迫り上がり、その下に隠されていた複雑な構造を露わにした。

その光景を複雑な心境で眺めつつ、クーゲルシュライバーはそつと蓋を元の場所に被せた。

「やつべえ。これ、生殖孔つてヤツだよな？ということ俺、メスなの？」

ユグドラシルではクーゲルシュライバーは男性キャラとして登録をしていた。

また、少しばかり前に口元から生えている触肢を鏡に映して観察してみたところオスの蜘蛛に備わる特徴を発見することが出来た。

昨晚メイドを使って図書館から持ってこさせた蜘蛛の図鑑を読ん

で得た知識による判定だ。間違いはなかったはずなのに。
墳墓蜘蛛トウム・スパイダーという死体に卵を産み付けることで、その死体をアンデツ

ドとして操ることの出来るモンスターがいる。

未熟だった頃、クーゲルシュライバーはその種族へと進化して当時まだ普通のダンジョンであったナザリックに潜り狩りをしていた。

その時に多用していた特殊技術の一つに、倒したモンスターに卵を産み付け、より強化されたアンデッドとして使役するものがあつた。

現在も所持しているその特殊技術が使用できるのかどうか。それを確かめる為にクーゲルシュライバーは本で得た知識を基に、蜘蛛のメスが持つ性器を探していたのだ。

そして、ついさつきそれを発見してしまったというわけだ。

「オスとメスの性器がある。つまり両性具有^{フタナリ}って事なんだが、なんでそうなる？特殊技術の影響で体の設定が歪められているのか？」

卵を産み付けるスキルを持つている以上、卵を産める体でなければならぬ。

しかし設定上は男なのだから、男の機能も無ければならない。その結果が両性具有の体という事なのだろうか？

ユグドラシルではクーゲルシュライバーの外装にメスの性器など付いていなかった。

特殊技術も、倒したモンスターの上に乗るアイコンをクリックするだけで完了する仕様だった。

しかし仮想世界が現実と化した今、それでは無理があつたという事なのかもしれない。

「まあ、いいか。性欲とかまったく感じないし、スキルが使えるなら問題ないだろ」

スキルの使用に交尾が必須だとか、そういう仕様になっていないのであればとりあえず文句はなかった。

「あとで実際に卵を産み付けられるか試さないとな。モモンガさんに適当なの作ってもらおうか」

今後の予定としてメモに「卵を産み付ける、モモンガさんに頼む」と書いてクーゲルシュライバーはペンを置き、寝室を後にした。

「おはようございます。クーゲルシュライバー様」

音もなく寝室から出てきたクーゲルシュライバーに部屋つきのメイドが挨拶をしてくる。

今日初めて出会うメイドの美しい金色の髪の毛を眺めながら、クーゲルシュライバーは擬腕で前脚をゴシゴシなぞりつつリビングとして使用している応接間のソファアに登った。

体が大きすぎるせいで普通の椅子の類に座れないのである。

それを見つともないと感じつつも不便はない。

むしろこうしていると落ち着くとさえ彼は思っていた。

「おはよう。早速で悪いがブラシと、なにかシーツのような物を持ってきてくれ」

「かしこまりました」

メイドが美しい姿勢のまま静かに移動するのを、人間の時と比べて2倍以上に広がった視界で捉えつつクーゲルシュライバーは特殊技術ススキルを発動させる。

「＜甲殻化＞解除」

口に出す必要は皆無だがなんとなくでそう呟くと、クーゲルシュライバーの姿が大きく変化する。

ツヤツヤとした黒い甲殻が幾千もの繊維に分解され、次の瞬間には長い毛となって立ち上がる。

クーゲルシュライバーのシャープなフォルムが一変し、モコモコした哺乳類のような印象の輪郭になる。

先ほどまでの姿がジョロウグモとするならば、今の姿はタランチュラに似ている。

ベルベットののような光沢を放つ毛に覆われたクーゲルシュライバーは、擬腕の爪を立てて自身の前脚を擦る。

（あーくそ。なーんか汚れてるような気がするんだよなあ。別に汚れるような事してないのに）

防御力を向上させる＜甲殻化＞を解除したのは身づくろい、いや、毛づくろいのためだった。

クーゲルシュライバーはこの体になってからと言うものの、自身の肉体の清潔さに神経質になっていた。

自分で言っている通り、汚れるような事は何もしていない。それなのにやたらと気に掛かるのだ。

その理由を自分なりに考えてみる。

かつて存在したというアシダカグモという徘徊性の蜘蛛は、大層な綺麗好きで頻繁に毛づくろいをしていたという。

種族的には蜘蛛という段階を超越し邪神となったこの体だが、

大本である初期種族はジャイアント・スパイダーという特別な能力を持たない巨大蜘蛛だったのだ。

もしかすると、その習性が未だに残っているのではないだろうか？
そこまで考えたところでメイドが帰ってきた。

「お待たせ致しました。ブラシとシートをお持ちしました」

「うむ。シートはソファの上にかける。終わったら下っていいぞ、危険だからな」

「かしこまりました」

シートをソファに敷き終わり、メイドが部屋の隅に移動したのを確認するとクーゲルシュライバーは手にしたブラシで擬腕が届く範囲の体を丁寧にブラッシングしていく。

（ああ……良い気持ちだ。良い気持ちなんだが、なにか物足りないんだよなあ。何でだろう？）

微かに舞い上がる自分の体毛の煌くさまを一瞥してクーゲルシュライバーは首をかしげた。

自らの体毛を梳いているのはかなり高級なブラシだ。柔らかな毛先が体毛を傷つける事無くケアしていく。

水で洗い流していないからだろうか？

そう考えるが、クーゲルシュライバーの体毛は水をよく撥く。

水をかけた所で満足いく結果が得られるとはとても思えなかった。

「ふむ……」

クーゲルシュライバーはブラッシングする手を止め、ブラシをジッと見つめた。

その様子に、メイドが不安そうに声をかけてくる。

「なにか、不備が御座いましたでしょうか？」

「いや、そうではない。そうではないが……ん？」

フルフルと瞳を震わせて此方の様子を窺っているメイドを見て、クーゲルシュライバーに閃くものがあった。

「確か戦闘メイド、プレアデスの一員に蜘蛛人アラクノイドがいたな？」

「はい。エントマ・ヴァシリツサ・ゼータの事で御座いますね」

「そいつだ。今すぐエントマをここに呼んでこい。勿論、手隙でモモングから何の指示も出されていないのであればだ」

「かしこまりました」

退室していくメイドを見送りながら、我ながら良いアイデアが浮かんだものとクーゲルシュライバーは自画自賛する。

蜘蛛の肉体になって、満足いく毛づくろいが出来ないのであればだ。

餅は餅屋である。

毛づくろいを日常的に行っているだろう蜘蛛系モンスターにやらせればいいのだ。

ただのモンスターでは些か不安が残るが、戦闘メイドという役職についているエントマであれば快適に毛づくろいを受ける事が出来るだろう。

(これでやつとスッキリできるな！)

精神作用無効化の影響を受けながらも、クーゲルシュライバーは満足いく毛づくろいへの期待にその心を弾ませていた。

「ねえねえシクススう。クーゲルシュライバー様はあ、何の御用で私を呼んだのお？」

幼く甘ったるい喋り方で和服風のメイド服を着たメイドが口を動かさずに金髪のメイドに話しかける。

「わからないよ。でも、すぐ来てほしいみたいだったから急がないと！」

「わかってるう！わかってるからそんなにひっぱらないでえ。触覚がとれちやうう」

金髪のメイド、シクススはエントマのシニヨンを掴みながら足早に、かつ上品にクーゲルシュライバーの部屋へと急いでいた。

どれだけ急いでいようとも。今居る場所は至高の41人の生活スペース、いわば神域であるナザリツク地下大墳墓第九階層。

メイド如きが走り回り、至高の御方々を煩わせる事があってはいけないのだ。

「到着う。ほらほらシクススう、息整えなきや至高の御方に失礼だよお」

「わ、わかってるよ。すぐ、整えるから」

状況的に出せる最大の速度でシクススはクーゲルシュライバーの部屋の前まで到達していた。

だが、上品に素早く長距離を移動するという行為は、如何にメイドとして訓練されているシクススであつても息の乱れを生じさせるのに十分な運動だった。

それに対しエントマは息一つ乱していない。

これがレベル1のホームクルスであるシクススと、戦闘メイドプレアデスの一員でありレベル51の蜘蛛人であるエントマの持つ身体能力の違いだった。

隣で息を整えるメイド仲間を、一切動かない能面のような表情で見つめながらエントマは思案していた。

一体なんの御用があるのだろうか？

戦闘メイドである自分が呼ばれるのだから、戦闘に関する用事なのだろうか？

そういえば噂によれば、ナザリツクに帰還された至高の御方クーゲルシュライバー様は階層守護者であつても理解の及ばない超が三つ付くほど強力な封印から脱出した影響で体調を崩しているらしい。

もしかすると護衛の為に呼ばれたのかもしれない。封印を施した、謎の敵を警戒して……。

ギチツギチツ。

エントマの顎の辺りから、硬質な何かが擦りあわされるような音が発せられた。

それは至高の御方の一人を拘束し、このナザリックへの帰還を阻もうとした謎の敵に対するエントマの怒りの表れだった。

破られたとはいえ至高の御方を長年にわたり封印する事のできる敵に対して、いくらエントマが怒りを抱きその償いをさせようとしてもそれはきつと犬死に終わるだろう。

それがわかっていても尚、エントマはその敵が姿を現したら戦いを挑むつもりだった。

勝てないからなんだというのだ。死ぬからどうしたというのだ。

至高の御方を苦しめた憎い憎い憎い憎い敵に、僅かばかりでも復讐することができれば、エントマは自分の全てを賭けてそれを行う。

我慢なんて出来るはずもないのだ。

「ふうごめんね。もう大丈夫。行きましょう」

数秒かけて息を整えたシクスの声に、エントマは思考を切り替える。

まだ何の為に呼ばれたのかもわからない状態だ。

今はただ、至高の御方に従うメイドとしてその役目を果たさなければ。

暴力的な思考を雲散霧消させ、エントマはシクスに頷いた。

「来たか」

「はい。エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。御身の前に」

考えていたよりも早く到着したメイド二人を、クーゲルシュライバーは満足しながら部屋へ迎え入れた。

眼前で跪くメイドは、なるほど、ムシツカイの職業に恥じぬ蟲達の集合体だった。

多種多様な蟲が集まって一つの美少女を形作っているその様は、まるで騙し絵のようでもある。

だれがこのような素晴らしい出来のNPCを作ったのか。クーゲルシュライバーは気になって仕方がなかった。

「ふむ。私が思っていたよりずっと見事なメイドだな。エントマ、お前の製作者は誰だ」

「はっ！ お褒めに与り光栄です。私の創造主は源次郎様で御座います」

「ほう、源次郎さんか！流石だな！」

懐かしい名を聞いたとクーゲルシュライバーは声を弾ませた。

源次郎。宝物殿の整理を好んで行っていたギルドメンバーだ。

その整頓好きからさぞリアルでも掃除が好きなのだろうと思えば、リアルの自室は汚部屋だというちよつと変わった人だった。

もしかして、汚部屋の住人だからこそ蜘蛛のNPCを作ったのかもしれない。

汚い部屋には付き物の、激しい環境破壊にも耐えてしぶとく繁栄している例のアイツ。

それを狩る存在に源次郎さんは特別な感情を持っていたのかもしれない。

「なるほどな。ふふふっ！エントマよ。お前の姿を見て私は確信したぞ」

「？」

疑問を感じているのだろうか、エントマの頭頂部から生える触覚がせわしなく動いている。

なんたる萌えポイントか。源次郎さんはすごいな。

今は会えない仲間に対し、勝手に蟲属性を追加してクーゲルシュライバーは感動していた。

上級性的嗜好持ちは拘り様もやはり違うな、などと思いつつながら。

「源次郎さんがこだわりと愛を詰め込んで生み出したお前ならば、私の望みを完璧に叶えることができるかな」

「なっ……！！」

クーゲルシュライバーの言葉にエントマが変化のない顔のまま、肩を跳ね上げた。

その様子はまるで驚愕しているかのようだった。

事実、エントマは驚愕していた。

しかしその感情はただの驚愕だけではなく歓喜や悲しみなどがごちゃ混ぜになった複雑怪奇なものであった。

だが、それでもエントマはまるで桃源郷の中を漂うような至福を感じていた。

メイドとして褒められ。

誇りを持って明かした自らの創造主を褒められ。

更には創造主が自身に向けていた愛について語られ。

そして深い信頼を寄せられる。

これら全てがこの短期間で、美しく逞しい素敵な男性である至高のお方によって与えられたのである。

このような至福がこの世にあってよいのだろうかと不安に駆られるほど、エントマは幸せを味わっていた。

だがいつまでも惚けてはいられない。このいと高き至高のお方に、お返事をしなければ。

「み、身に余るこうえ……」

「よい。それよりも至急お前に命じたいことがあるのだ」

理性を総動員して返事をしようとしたエントマを、クーゲルシュライバーは右の擬腕を掲げることで制止した。

エントマは主人の意思に従い、すぐさま口を閉ざすと大きく頭を下げた。

「どうぞ、何なりとお命じください」

もとよりそのつもりであったが、エントマはその気持ちをより一層強めていた。

たとえば、どんな事を命じられても完璧にこなしてみせる。

大きな愛をもって自分を生み出してくれた偉大なる創造主、源次郎様の名にかけて。

エントマは奮起していた。

「ではエントマ・ヴァシリツサ・ゼータに至高の41人が1人、この私クーゲルシュライバーが命ずる」

「お前が普段やっているように、私の毛づくろいをせよ」

6話

「毛づくろい、で、御座いますか？」

キチキチと小さな音をたてながら問い返してくるエントマにさも当然と言わんばかりにクーゲルシュライバーが頷く。

「そうだ。たかが毛づくろい、私自身でやれぬ事ではないのだが……」
大嘘である。

蜘蛛としての本能を満足させる毛づくろいの方法がわからないからこそ、クーゲルシュライバーはエントマを呼んだのだ。

だがそれを正直に話すのは、「異なる次元より現れ出でた永劫に等しい時を生きている神格」というユグドラシルにおける深淵^{アトラク}の大蜘蛛^{リナク}の設定に反しているような気がした。

この設定を採用している身としては、それだけ長生きして毛づくろいの方法を知らないなんてなんたる不潔！という風にNPC達に失望されてしまうのではないかという恐怖があった。

威厳ある主人を演じるためクーゲルシュライバーは更に嘘を重ねる。

「封印されているわけでもなし。いま居る場所は我々アインズ・ウール・ゴウンが作り上げたナザリック地下大墳墓である。ならばそのような些事は下々の者達に任せるのが道理。であろう？」

そうだよな？と一抹の不安を覚えながらも昔の映画であったお色気シーンを思い出すクーゲルシュライバー。

その映画では中世の貴族が、従者に着替えや入浴を手伝わせていた。

だから偉い人は自分で身だしなみを整えたりしないのが当然なのだと思っただが……。

不安に駆られたクーゲルシュライバーは頭をピクリとも動かさずに視界内の金髪メイドに意識を向けた。

その表情をみて不安が消える。

彼女の顔には十分な理解の色が浮かんでいたのだ。

「は、はい。仰るとおりかと存じます」

僅かにどもったエントマの声にクーゲルシュライバーは疑問を感じる。

表情が変わらず外見で感情を読むことが難しい彼女だが、どうにも困惑しているように思える。

なぜエントマは困惑するのだろうか？

クーゲルシュライバーにはその理由を思いつくことが出来なかった。

「……うむ。時すら朽ちる歪められた永劫の中に囚われていたのだ。此度の毛づくろいは自由を取り戻してから初めて行うものであり、そこに最高の質を求める私の気持ちを十分理解して勤めに励んでほしい」

キャラシートに書かれた設定を持ち出し語るクーゲルシュライバーにエントマは緊張したかのように身を震わせた。

人間だった頃のクーゲルシュライバーは4年間連続のベテラン夜勤労働者だった。

起きたら世界は夜で、仕事が終わるのは工業地帯にありがちな低く分厚い雲の一部が微かに明るくなる頃になる払暁前だ。

太陽が登り明るくなる頃には会社が用意した寮の暗い室内で自炊し、風呂に入り、ネットで遊び、そして寝る。

太陽の光という人間にとって重要な要素が欠落した、職場と寮を行き来するだけの毎日を送るうちに時間の感覚は無くなっていく。

そうして同じ一日を何度も繰り返しているような錯覚に陥っていた、クーゲルシュライバー自身の経験を元にした封印の設定である。

意図せず声に滲み出てしまったドス黒い感情が、演技している本人が思っている以上に言葉の真実味を強めていた。

「クーゲルシュライバー様……畏まりました。全身全霊をもって、毛づくろいさせていただきます」

敬愛するべき主人の、深い悲しみを秘めた声にエントマは己に与えられた使命の重大さを改めて理解していた。

御下命を賜った時、エントマは不覚にもその内容に思考が一瞬真っ白になってしまった。

毛づくろい。

エントマ自身、一日に数回は誰も見ていない事を確認してから体に纏った蟲達を部分的に外し、体を清潔にしている。

身だしなみを整える事はなにも特別なことではない。

一般メイド達がシャワーや湯浴みをするのと同じ感覚で、エントマもメイドとして身だしなみに最大限の注意を払っていた。

全身を覆う蟲達の呼吸などの影響により、やや蒸れやすいエントマは寧ろ他のメイド達よりも身だしなみに長い時間をかけている。

別段特別な方法でそれを行っているわけではない。

蜘蛛人として慣れ親しんだ、いや、蜘蛛の姿をしたモンスターとしては極一般的な方法で体を清潔に保っている。

毛づくろいせよと言われたならば即座に完璧に実行できる。

だが、しかし――

(じ、自分以外に毛づくろいするなんてえ、倒錯的すぎるよお)

一般メイドの一部にはお互いの体を洗いあったりする者もいる。

それをおかしな事とはエントマは思わない。仲がいいことは良いことだ。仕事の効率があがる。

しかし、しかしだ。

蜘蛛人、そして蜘蛛人が属するスパイダー系モンスターは自分以外の体に毛づくろいを施す事など決してない。

毛づくろいは自分自身でやるものである。それが常識だ。

戦闘能力が殆どない小動物としての蜘蛛だってそれは変わらない。

お互いの肉体が最も接近する交尾の時でさえ――交尾の時だからこそ――相手の体を毛づくろいしたりはしない。

つまり、エントマにとって他人に毛づくろいをやらせようとするクーゲルシュライバーの命令は、蜘蛛としての常軌を逸した凄まじく倒錯的なものであると言えた。

そもそも至高の御方に毛づくろいするなど、その玉体に触れる行為は非常に恐れ多いものだ。

ましてや、自分の「アレ」を塗布するなど——！
ナザリックの存在にとつての常識と、蜘蛛としての常識。

その二つの常識的に考えてこの命令を実行することは精神的な難易度が非常に高かった。

高すぎた。

言葉を聞いただけでエントマの思考が吹っ飛んでしまう程度には。

正直な話、エントマの知る範疇の蜘蛛的な感性と常識でいえばクーゲルシュライバーがやらせようとしている行為は超越的、いや、コスミック宇宙の変質者のそれであった。

(でも、それを至高の御方がお望みになるならあ)

エントマは湧き上がる羞恥心に内心で悶え、体を震わせながらも与えられた命令を実行しようとする。

それはひとえにエントマが持つ篤い忠誠心のなせるわざであった。
(クーゲルシュライバー様はあ、長い幽閉の疲れと汚れを払拭する榮譽を私に与えてくださったんだわあ。言い出しにくい事なのに私を信頼してご命じくださったのお)

エントマはクーゲルシュライバーによるコスミックホラー宇宙の変態行為の強要を、健気にもそう捉えていた。

確かに主人の長年の疲れを癒し、その身を清めさせていただけるとするのはナザリックの者達にとつてはご褒美に他ならない。

内容が些か宇宙的でも、至高の御方の深遠なる嗜好であるからそれを変態などと罵る気などあるはずはない。

むしろ肯定し、その至高の嗜好に副えるよう喜びに震えながらご奉仕するのがナザリックのメイドとしての正しい姿だろう。

エントマは——当然だが——承諾の言葉を口にした。

頭を上げた先に見えるのは至高の御方であるクーゲルシュライバーの巨大かつ逞しい肉体。

自分の体の何倍もあるその威容に、エントマは使命を果たすことが出来るだろうかと弱気にも似た考えを抱く。

しかし即座に、迷う事無くその考えを掻き消した。

出来るかどうかじゃない。やるのだ。

たとえ全身の水分を使い果たし、干物のようになって斃れようとも。

必ずやこの至高の御方の全身を、自分の唾液で清め尽くして差し上げるのだ！

第三者が知る事が出来たら悲壮感さえ感じるほどの決意を固め、エントマは毛づくろいに挑もうとしていた。

「おおそうか！頼むぞエントマよ」

「畏まりました。それでは、失礼いたします」

機嫌の良さそうなクーゲルシュライバーの声を聞きつつ、エントマは立ち上がり主人の漆黒の体へと身を寄せていく。

黒いビロードのような美しい体毛が近づくにつれ、エントマの緊張感と羞恥心は急上昇していく。

（頭がどうにかなつちやいそうう）

だがそれでも自分は主人の役に立ってみせる。

なぜならそれがナザリツクに生まれた者達の存在理由であり、喜びそのものなのだから。

エントマは自分自身の口を大きく開けると、クーゲルシュライバーの前肢にその顔を埋めるように近づけていく。

その時だった。

「ああ、さてエントマ。おい、そのメイドよ」

「え？あ、は、はいっー」

クーゲルシュライバーは毛づくろいをしようと近づくとエントマを止め、いまだ名前を思い出せない金髪のメイドに声をかけた。

へロへロ、ホワイトブリム、ク・ドウ・グラス。

この三名の内誰が作った作品なのかはわからないが、素晴らしい造形を持つメイドが不意を突かれたかのように焦って返事をする姿に微笑ましいものを感じる。

その気持ちが声にも表れているのだろう。行為を一旦停止し、耳を傾けていたエントマは主人の声に確かな喜びを感じとっていた。

そんなエントマの様子には気付かずにクーゲルシュライバーは機

嫌が良さそうにアイテムボックスを開くと、そこから出したアイテムを金髪のメイド——シクスス——に投げ渡す。

完璧なコントロールでシクススの胸元へと飛来するそのアイテムは急いで差し出された両腕にすっぽりと収まった。

「こ、これはー！」

受け取ったものの姿を確認したシクススは驚愕にメイドにあるまじき声を上げた。

本来ならば自分如きの存在が触れてはならない筈の至宝が手の上にあつたからだ。

「そのアイテムは<カメラ>という。かき……いや、私の力により強化されている物だ。それを使いエントマが私に奉仕する姿を記録せよ」

クーゲルシュライバーが毛づくろいの学習用記録ビデオを作る為にそう言うと、突然足元からキィキィという音が聞こえてきた。

なんだろうと音のする方向を見てみれば、エントマが和服の袖で顔を半分覆いながらまるで子供がするようにイヤイヤと頭を左右に振っていた。

一体どうしたのだろうか？

あえて<真意看破>を使用していないクーゲルシュライバーにはエントマがなぜそのような動作をしているのかさっぱりわからなかった。

「く、クーゲルシュライバー様！おそれながら申し上げます！」

今度は一体なんなんだと思いつつもクーゲルシュライバーは人間の頭状の部位——擬頭とでも言えばいいのか——を顎をしゃくるように動かしシクススの発言を許した。

「このアイテムはクーゲルシュライバー様が至高の御方々のご活躍を記録するのにお使いになれる至宝中の至宝！私如きが使用してよいものではございません！」

シクススは顔面を蒼白にしてそう訴えた。

それを受けてクーゲルシュライバーは苦笑する。

つまり部下である自分が上司愛用の仕事道具を使っているのか？

壊してしまつたらどうしよう?!

このメイドはそういう心配しているのだろう。その気持ちはクーゲルシュライバーにも良く理解できた。

しかしその心配は無用なのである。

確かに今渡した<カメラ>にはそこそこの課金が施されている。

焼肉一回分ぐらいの額で、まあ貴重な品と言ってもいいだろう。

しかし、逆に言えばその程度だ。

クーゲルシュライバーは他にも似た効果を持つアイテムを複数所持しているのも、もしも壊れてしまつても大した痛手ではない。

そもそも、あのカメラ系アイテムは壊れない。

酸で焼こうが超位魔法が直撃しようがワールドチャンピオンがスキルを使用して切りつけようが決して壊れないのだ。

少なくともユグドラシルではそういう存在だった。

現在はどうなのか不明だが、それでも普通に使つていれば壊れるなんてことは無いだろうとクーゲルシュライバーは考えていた。

だが折角メイドが壊れやすい至宝だと勘違いしているのだから、これを利用して寛大な主人でもあるという事をアピールするのも悪くない。

「よい。確かにそれは私の大切な仕事道具の一つだが、この場限り使用する事を差し許そう。使い方はわかるな?」

「は、はい!……ですが、本当によろしいのですか?」

「くどい。そんなに私の命令を聞くのが嫌なのか?」

なかなか進まない会話にクーゲルシュライバーは常時発動型特殊技術<恐怖のオーラー>を起動させる

クーゲルシュライバーの全身を仄かに揺らめく緑のオーラが包む。

ホラー系職業に共通した常時発動型特殊技術であり、ホラー系では最初にとつた職業である<オカルトホラー>で取得したものだ

効果は範囲内のクリーチャーに<恐怖>の精神作用効果を与えるというもの。

最下位の力しかなく恐怖のオーラーでは相手に<恐怖>による作用を与えたところで、その症状は4段階ある状態の内でも最も程度

の低い＜怯え状態＞にしかならない。

軽度の命中率、回避率、魔法や特殊技術ススキルに対する抵抗力の低下しか発生しないので、すこし脅しをかけるには丁度良い。

そして、クーゲルシュライバーが所持する複数の＜恐怖＞の精神作用効果を持つ特殊技術ススキルや魔法を強化する常時発動型特殊技術ススキルは全てオフにしてある。

これならば未だ効果範囲の制御に自信が無いクーゲルシュライバーでも、意図せずエントマに＜恐怖＞効果を及ぼしてしまうリスクが減る。

＜恐怖のオーラー＞単体ならばエントマがそれに抵抗レジストできる可能性は0ではないからだ。

このように安全について考えた上でオンにした常時発動型特殊技術ススキル＜恐怖のオーラー＞だったのだが、その効果は靦面だった

「申し訳ありませんでした！クーゲルシュライバー様に口答えしたご無礼、なにとぞ、なにとぞお許しくださいませ！」

血の気が失せ、瑞々しい唇を紫色にしながらシクススは跪いて許しを請う。

レベル1の魔法防御力しか持たないシクススに対し、クーゲルシュライバーは常時発動型特殊技術ススキル群を切っつけていてもレベル80の魔法職に匹敵する——恐怖効果を与えるものに限定されるが——魔法攻撃力を持つ。

シクススにはクーゲルシュライバーの放つ恐怖に抗レジストするう事など不可能だった。

結果、シクススは今、ナザリックでの日常で感じることは少ない恐怖という感情を過剰なほど味わっていた。

至高の41人からの叱責という、あの第七階層守護者デミウルゴスほどの男であっても恐怖するしかない事態を前に、シクススは大粒の涙を零しながらただひたすら謝ることしか出来なかった。

怖い。怖い怖い怖い。失望されるのが怖い。捨てられるのが怖い。ひたすらに怖い。怖すぎる。

シクススは至高のお方のお部屋に侍る事が出来るという喜びから、今朝は沢山食事を摂ってきた。

ああ、あんなに沢山ミルクを飲んでくるんじゃないかった。

彼女は激しく後悔していた。そして己の忍耐の限界に挑戦しつつづけていた。これ以上の失態だけは回避しなくてはならない。

それだけは、なんとしても、だ。

(うわあ効果覷面だ。流石にこれは可哀想だぞ……)

自身の中に湧き上がる名状しがたいものを感じながら、クーゲルシュライバーは内股気味に跪きプルプルと体を震わせながら謝罪するメイドの姿を見て己の行いを悔いていた。

別に面白半分で<恐怖のオーラー>を発動させたわけではない。

モモンガに提出したキャラシートに書いた設定に従い、部下から恐れられる厳しい上司としての演技を行ったただけだ。

これはこれからナザリックで生活するにあたり必要な事だった。

設定は決定してもその演技を完璧にこなせるかという不安は当然クーゲルシュライバーにも存在しており、部屋を出て大勢のNPC達に接した時にボロが出ないよう演技を練習しキャラを固める機会が欲しかった。

だからこそシクススには練習台になってもらうつもりでわざと強い言葉を口に出しく恐怖のオーラー>まで使用したのだ。

「お、お許しをっ……なにとぞ、お許しをっ……」

(ぐおおおおお！罪悪感がやばい！パワハラ感がハンパないぞマジで！なんでこんな設定にしたんだ俺はあ！)

嗚咽を漏らし、途切れ途切れに謝罪するシクススにクーゲルシュライバーは決意が揺らぐのを感じた。

なんでこんな設定で演技しなければいけないのか？

答えは簡単。階層守護者がそういう評価をしていたからに他ならない。

自身の強さに匹敵する彼らの評価を崩すことが身の危険に繋がる以上、演技をやめるわけにはいかない。

(あいつらがあんな評価してなかったら俺はこんな事しなくてすんだのにいい！)

高まつてきた感情に反応して精神作用無効化が発動する。

そうして冷静になった頭で考えてみれば、守護者達のその評価ですら、元々自分が仲間達に行った仕打ちが原因なのだ。

大げさな評価になってはいるが守護者達を責めるのもお門違いだろう。そう、悪いのは自分だ。

(ともかく、厳しい上司としての姿は見せた。もう慰めてもいいだろう)

クーゲルシュライバーは<恐怖のオーライ>をオフにするとソファから音も無く降りて跪いているシクススの前に移動した。

そして八本の肢を屈め、頭を下げる彼女の両肩をオス特有の太く発達した触肢で掴み、身を起こさせた。

「もうよい。本来であれば罰を与えるところではあるが、特別にお前を許そう」

涙と汗と鼻水で汚れた顔を見てドン引きしつつも、クーゲルシュライバーはアイテムボックスから状態異常を癒す効果のあるハンカチ型アーティファクトを取り出す。

そして器用に触肢でハンカチを掴むと、シクススの顔を丁寧に拭いた。

拭い終わった頃には状態異常から復帰したのだろう、シクススが目をまんまるにして呆然とした様子でクーゲルシュライバーを見つめていた。

「私はお前であれば我が秘宝を使わせてもよい、と思っっているからこそ命じたのだ。常識に囚われ主の行いに口を出す前に、今後はよく考える事だな」

「は、はい！クーゲルシュライバー様のお慈悲に感謝いたします！以後、そのお言葉を肝に銘じて御奉仕させていただきます！」

「うむ。期待しているぞ。それと、このハンカチはお前にくれてやる」
両手がカメラで塞がっているので、クーゲルシュライバーはシクススの胸元めがけハンカチを放った。

突然主人から下賜された宝物にシクススは不敬に当たると思いながらも至宝たるカメラを床に置く事もできず、悩んだ末にカメラを片手で持って空いた手を使ってハンカチを取り、綺麗に折りたたんでメイド服のポケットに仕舞い込んだ。

「あ、ありがたく、頂戴いたします」

学習したのだろう。素直に受け取るシクススに満足げに頷くとクーゲルシュライバーは触肢で早くも滲んできた涙を拭ってやり、次に擬腕で彼女の髪をかつてモモンガがアウラにしたように撫でた。

シクススの頬がサツと赤く染まる。

「クーゲルシュライバー様……」

(大したアイテムでもないし、涙と汗と鼻水に濡れたハンカチは流石にアイテムボックスに戻したくないよなあ)

頬を染め潤んだ瞳で見つめてくるシクススに気付いて、また泣かれは敵わないとクーゲルシュライバーは足早に元居たソファへと戻った。

ここではエントマがイヤイヤするようなポーズで身動き一つせず待機していた。

「では、撮影を開始せよ」

「畏まりました」

クーゲルシュライバーの命令にシクススが応え、カメラからピツという電子音が聞こえた。

その音にエントマはビクリと体を跳ねさせ、何かを訴えるように、続けるようにクーゲルシュライバーの擬頭を見上げた。

そんなエントマの姿を、いつでも出来ます、という意味だと解釈したクーゲルシュライバーはなるべく安心感を与えるよう、優しい声で命令を下した。

「さあエントマよ。始めるが良い」

ぴああああああ。

エントマから、微かにそんな甲高い音が発せられた。

7話

撮られ続けている。時間にしてまだ数十秒も経ってはいない。

しかしそれでも同僚であるシクスの視線と彼女が構える至高のアイテムの単眼を思わせる無機質な視線に晒され続けたエントマは極限の羞恥を感じていた。

シクススを責めることは出来ない。彼女はただ主人の命令に従っているだけだ。

蜘蛛でもなんでもないホムンクルスである彼女に、自身が感じている羞恥と抵抗感が何故生じるのか理解してもらおうことは出来ないだろう。

つまり助け舟は期待できない。

いや、至高の御方からの命令である以上エントマには行為をやめる事など出来はしない。

だからシクススがこれからエントマがやろうとしている行為の宇宙的変態性に気付かないのは寧ろ僥倖と言える。

「どうしたエントマよ。私は既に許可を出したぞ?」

頭上から酷く優しい声が聞こえてくる。

その声のエントマは思った。

——ああ、この方は私の心中を知った上で、このように優しく接してくるのだ、と。

同じ蜘蛛である至高の御方が、この行為の持つ異常性を知らないはずが無い。

熟知した上で羞恥に悶える己を弄ぶような言葉をかけ、更には同僚に命じてこの行為の記録を残させているのだ。

同僚といえば、先ほどシクススを陥落させたクーゲルシュライバーの手練手管はまさに圧巻だった。

明らかに熟練されたその手口に、エントマはシクススが蜘蛛の巣に囚われた哀れな獲物に見えた程だ。

そして、それは自分も同じ事。

所詮自分もクーゲルシュライバーの手の内で踊らされる玩具に過

ぎないのだ。

至高のお方によって玩具のように、物のように弄ばれているという
事実には、ナザリツクの全ての作り出された存在がそうであるようにエ
ントマの全身を甘美なる快感が稲妻のように駆け巡る。

これが至高の41人の1人、深淵の大蜘蛛アトラクシナクアクーゲルシュライバー。
なるほど、この老獪な嗜虐性。

至高の御方々ですら恐れたというその力の一端に触れ、エントマは
体が震えるのを禁じえなかった。

(恥ずかしいい……でも、私で喜んでいただきたい。だからあ、精
一杯ご奉仕しますう)

エントマは覚悟を決めた。

もはや逃れられない運命ならば、せめて主人を待たせて不機嫌にさ
せるよりは、覚悟を決めて変態行為にこの身を染めるべきだと。

エントマは異常な経験をしていると強く実感しながら、クーゲル
シュライバーの太く逞しい前脚に口付けした。

幼い外見をしたエントマの精神の片隅で、決して触れてはいけな
かったはずの禁断の扉が今、音を立てて開き始めていた。

(んえええええええええ!?)

クーゲルシュライバーは驚愕していた。

いや、正確にはドン引きしていた。

「んちゅ……エレロオ……」

ぼんやりとした雰囲気を放つエントマが、自分の肢に顔を埋めたと
思った次の瞬間。

彼女の顎から大きな牙が二本出現しその間から流れ出る透明な液
体を塗りつけ始めたのだ。

エントマの顔はそういう甲殻を持つ蟲である。ゆえに彼女の表情
は変わらない。口も動かない。

本当の顔と口は仮面めいた蟲の下にある。

つまりなにがどうなっているかと言うと、エントマは今、自分自身
の口から分泌される液体をクーゲルシュライバーに擦り付けている

という事になる。

(まてまてまてまて！なにをしてるんだエントマは!?こんな普段から自分にやってるのか?と、とんでもないド変態じゃないかこの子は!!)

自分の想像していたものと余りにもかけ離れていたエントマの行為にドン引きしつつ、助けを求めるようにクーゲルシュライバーは撮影を続けるシクススを見た。

そして硬直する。

(うおおあああなにあの子！目が！目がいつちやつてる!!)

視線の先ではシクススが頬を染め、喜悦に歪んだ笑みを浮かべながらクーゲルシュライバーとエントマの行為をカメラに収めていた。

その目は完全に陶醉しており、彼女がまともな状態ではないという事を如実に示していた。

実際のところシクススは深く敬愛する慈悲深き主から与えられた至宝を使い、与えられた命令を遂行できている事によって生じる満足感に酔っているのだが、その姿はクーゲルシュライバーにとっては同僚であるエントマの変態行為を撮影することに興奮しているようにしか見えなかった。

(な、何てことだ。もしかしてナザリックではこういうのが普通なのか? だ、だとしたら……いかん！ このままではナザリック地下大墳墓が特殊性的嗜好の見本市になってしまう!)

骨と蜘蛛を愛していると豪語するアルベドと、死体愛好家であるシャルティア、男装ロリと女装ショタであるアウラとマーレの姿が脳裏に浮かび、クーゲルシュライバーは激しい危機感に襲われた。

しかし、すこし遅れてやってきた精神作用無効化により冷静な判断力が戻ってくる。

(いやまて。人間の感性で蜘蛛人の行う行為を変態だと決め付けるのは早計かもしれない。エントマは本当に普段やっている通りの事を俺にしている、そしてこれが蜘蛛人にとってごく普通の行為だとすれば、ここで取り乱すのは毛づくろいに対する知識が無いという事を教えるようなものじゃないか)

クーゲルシュライバーは自分の肢を丹念に舐めるエントマをじつくりと見つめる。

そして〈真意看破〉を使用した。

このような事態になれば、もはや自分自身の観察眼を鍛えるなどと言つて使用を控える必要はない。

エントマがどういふつもりでこんな事をしているのか、早急に知る必要があつた。

(……ふむ。羞恥を感じているようだが、これは俺の体に触れているからか。エントマ自身、毛づくろいを行つていふという意識だな)あと、少なくとも歓喜の感情も見取れた。

感じ取れる彼女の真意に、クーゲルシュライバーの緊張がほぐれる。

そして一瞬でも変態だと思つてしまった自分を恥じた。

エントマは自分に喜んでもらおうと精一杯の奉仕をしているのがわかる。

なんとも健気ではないか。

そんなかわいいメイドに対し、自分はなんて愚かなのだろうか。

(これが異種族間交流の難しさか。価値観と文化の違いというのは中々理解できないものだな)

クーゲルシュライバーは自分の見る目の無さに深く反省してから〈真意看破〉をオフにした。

これからナザリツクの上位者として生活するようになるのだ。やはり、〈真意看破〉に頼らずにすむ観察眼は鍛えるに越したことはない。

「ンぷはあ……ど、どうでしょうかクーゲルシュライバー様？」

「なかなか上手だぞエントマ。随分と慣れているようではないか」

「そ、そんな事ありません！ こういうことするのは、クーゲルシュライバー様が初めてで……」

(ん？ どういうことだ？ これは極普通の毛づくろいじゃ……ああそうか。他人にやるのは初めてなんだな。蜘蛛人の友達とかいないのか？)

顎を涎塗れにしているエントマの言葉に、クーゲルシュライバーは不憫なものを感じた。

哺乳類の知識ではあるが、毛づくろい、つまりグルーミングには重要な社会的意味がある。

それを行うことが出来ないのは同族である蜘蛛人がいないからではないかとクーゲルシュライバーは考えた。

そういえばナザリックにはエントマ以外の蜘蛛人を配置していなかったような記憶がある。

つまりエントマには仲のよい同族の友達がいない、という事だ。

プレアデスや同僚である一般メイド達とは仲がいいだろうが、それでも他種族だ。

同じ種族の友達が居ないというのは幼く見えるエントマにとってはあまりよろしくない状況にも思える。

(そのうち傭兵モンスターで友達役を見繕ってみるか。最初は立場の違いから打ち解けられないかもしれないが、そこはまあ俺が直々にエントマにそいつの毛づくろいを命じれば解決するだろ。なにせ——) エントマの毛づくろいはこんなにも気持ちいいのだから。

クーゲルシュライバーはエントマによる毛づくろいに大きな満足感を得ていた。

一舐め毎に体が清められているような感覚。

それこそがこの行為が蜘蛛の毛づくろいとして正しいものなのだという事をクーゲルシュライバーに確信させていた。

「そのわりには上手に出来ているぞ。どうだエントマよ、折角録画しているのだ。その技術をさらに高めるために後でお前の働きぶりを一緒に鑑賞するか?」

「お、御戯れを……」

まだ思いつきでしかないが、来るべき「エントマちゃん友達100人出来るかな計画」の為にビデオを見せて他人への毛づくろい技術を磨かせようというクーゲルシュライバーの発言の真意に気付く事無く、エントマは自らの胸と腹の境界付近——人間的に見れば鳩尾の辺り——に手を添えて恥じ入るようにそう言った。

ナザリック地下大墳墓第九階層、通称ロイヤルスイート。

至高の41人の居住スペースであるこの階層はまさに神々の居城という表現が相応しい絢爛豪華な場所だ。

そこに住む至高の御方々を煩わせないよう、ここに配置される者達は極力音や振動を立てないように行動する。

故に、神域たる第九階層は神聖なる静寂を讃えた空間なのだ。

しかし、今日はそんな神域に大きな音が響いている。

大きな音と言っても雑音ではない。一糸乱れぬ足音。それもかなりの人数が立てるものだ。

その音の発生源、ナザリック地下大墳墓儀仗隊を引き連れながらモモンガはプレアデスの一員、ナーベラル・ガンマを伴って廊下を歩いていた。

「……だな」

モモンガが蜘蛛をイメージさせるサインの描かれた扉の前で止まると、背後の儀仗隊も一糸乱れず完璧なタイミングで行進を停止する。

その背後の気配を誇らしく思いながらモモンガはナーベラルが扉を叩き、中のメイドに来訪を伝える姿を見ていた。

(……なんかあのメイド、頬が赤かったけどどうしたんだ?)

多少疑問に思ったがモモンガはすぐに考えることをやめた。

僅かな時間ではあるが、メイド達の至高の41人に対する忠誠心もまた強固なものだという事がわかった。

あのメイドも至高の41人の1人であるクーゲルシュライバーに仕えることで興奮しているのだろうか。

モモンガは自分の経験からそう結論付けていた。

「どうぞ、お入りくださいモモンガ様」

扉を開けて出てきたメイドがそう言うのを確認すると、モモンガは儀仗隊にその場で待機するように伝えたとナーベラルと共にクーゲルシュライバーの部屋へと入っていった。

クーゲルシュライバーは応接間に居た。

上等なソファの上にその巨体を乗せ、ツヤツヤした黒い甲殻に魔法の光を反射させながらモモンガを待っていた。

「お我が友モモンガよ。よく来てくれた」

芝居がかった口調にモモンガはパンドラス・アクターを思い出し軽く眉をひそめる。

実際には眉はないので目の光が多少曇っただけの変化だったが。

「休養中すまないな我が友クーゲルシュライバー。至急、相談したいことがあったのでこうしてお邪魔させてもらった」

「邪魔などというものではないよ。で？相談したい事というのは、例の書類の件かな？」

「その通りだ」

そう、モモンガがクーゲルシュライバーに会いに来たのは彼が提出してきた書類、キャラシートについて幾つか聞きたいことがあったからだ。

それ以外にも今後の指針や、NPC達の情報の共有。しておきたいことは沢山ある。

しかしそれらの話し合いはプレイヤー同士二人きりで行うべきものであり、人払いは必須だ。

モモンガはナーベラルに退室の命令を出すと、クーゲルシュライバーの隣に控えるメイド達を見て——違和感を覚えた。

「うん？なぜエントマが此処にいるのだ？」

モモンガのその言葉に名を呼ばれたメイド、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータが荒い息を押し殺しながらびくりと体を緊張させた。

モモンガの記憶が確かならばクーゲルシュライバーの部屋に配置されたのは一般メイドのはず。

戦闘メイドであるプレアデスを向かわせたという報告は受けていない。

チラリと横に立つナーベラルに視線を送る。

「いえ、私もエントマがクーゲルシュライバー様のお部屋に向かった

という報告は受けていません」

主人の視線の意味を正確にとらえたナーベラルがモモンガに自分も知らなかったと伝える。

ナーベラルがその切れ長の瞳でエントマに鋭い視線を送る。

それを受けたエントマは、表情に変わりはないがうつむき加減になり、小さくその肢を震わせていた。

まるで隠し事がばれて怯えている子供のような姿にナーベラルの視線が冷たさを増していく。

「ああ、すまなかつたなモモンガ。エントマは私が直々に呼び出したのだよ。そして今の今まで私の身支度を手伝ってもらっていたのだ。そうだな？エントマ」

「あ……は、はい！その通りです」

助け舟をだしたのはクーゲルシュライバーだった。

彼の説明による効果は絶大で、ナーベラルはそうだったのかと視線に籠る剣呑な光を霧散させた。

彼女はエントマがもしも独断でこの部屋に訪れ、クーゲルシュライバーに侍っていたというのであれば、至高の御方々の前である以上この場では実行できないが罰を与えるべきだと思っていたのだ。死なない程度に加減した、罰を。

「そうだったか。いや、構わないとも。メイド達は私だけに仕えているわけではない。クーゲルシュライバーが個人的に呼び出しても問題などないさ」

「そう言ってくれると助かるよ。さて、エントマよ。他のメイドを連れ退出せよ。これから私はモモンガと大切な話がある。……いずれまた呼ぶからそのつもりで居るように」

「っ！か、畏まりました……」

クーゲルシュライバーの命に従い、エントマともう1人の一般メイドが退出する為に動き出す。

それにあわせてナーベラルも動く。

ドアを開け閉めする回数はあるべく少ないほうがいい。

「おっと、忘れていた。おいメイド。私の寝室から一つ本を持って来

い」

退出しようとしていたメイド3人をクーゲルシュライバーの声が止めた。

メイドとは誰の事を指しているのか。

クーゲルシュライバーはエントマの事を名前で呼んでいたし、自らの用事をやらせるならば自分付きのメイドにやらせるのが当然なのでナーベラルは除外される。

自分の事を呼んでいるのだと判断したシクススは素早く行動を開始した。

「お、お持ちしました」

「うむ。ご苦労。エントマ達と共に下ってよいぞ」

「畏まりました。失礼いたします」

金髪のメイドがクーゲルシュライバーに何かの本を渡す。

そして上品な動きでモモンガの隣を通って退室していった。

(ん……？なんださっきのメイド。なにやら妙な表情で俺を見ていたけど……)

通りすぎる一瞬見えたメイドの顔。

その表情にはなにか不安のような、心配するような色があった。

しかしモモンガにはそんな顔をされる心当たりが無い。一体なんだというのだろうか。

困惑しつつもモモンガは盗聴防止の魔法を発動する。

それを確認したクーゲルシュライバーから気の抜けた声が発せられた。

「ああああああ……つかれたあ。いや気持ちよかったんだけど、まだ慣れてないっていうか」

「なんの事かはわかりませんが、とりあえずロールプレイお疲れ様でした。やっぱり疲れますよねー」

「だいたい慣れてきたんですけどね。はあ、なんかもう人間の体じゃないんだなあって実感しちゃいましたよ」

ぐったりとソファにもたれかかるクーゲルシュライバーにモモンガは自分が感じているストレスに似た何かがあったのだろうと察した。

自分と比べても人間の体から余りにもかけ離れた体になってしまったクーゲルシュライバーのストレスは察するに余りある。

「忠誠を捧げてくれるのはいいんですけど、いちいちよつと大げさなんですよね。元は一般人だからどうも落ち着かないというか」

「そうですねえ。まあエントマのお陰で大分癒されたんですけど、それでもやつぱりね」

「へえ。メイドの相手をして癒されるって、私じゃあ想像できませんね」

何時も堅苦しく自分に仕えるナーベラルの顔を思い出す。

彼女と同じプレアデスの一員なのに、クーゲルシュライバーはエントマに癒されるという。

一体どういう事だろうか？

エントマは結構フランクな感じで仕えてくれるのか？ それなら自分もエントマを……と考えたところでモモンガはその考えを破棄した。

(ナーベラル外してエントマを入れたら不和の元になるかもしれないしな。やはり平等にするべきだろう。はあ、めんどくさい)

上司としての思考をしなくてはならない事に無い胃を痛めるモモンガにクーゲルシュライバーが自慢げな声で話しかけた。

「私の命じたことを一生懸命やってくれましてね。初めてながら精一杯頑張るエントマの姿は中々感動的でした」

「なるほど。それは確かに癒されますね」

「その様子をカメラで録画してあるんですよ。よかつたらモモンガさんも見ますか？ちよつと驚くかもしれませんが、エントマのお陰で私の甲殻ピツカピカになったんです」

「はははは。では、それはまたの機会に見せてもらいますね」

まるで自分の娘を自慢する父親のような雰囲気を感じてモモンガは笑い声を上げた。

自分がNPC達に感じるような感情を、この友人も感じてくれている。今は居ない皆の残してくれた大切な宝を大切にしてくれている。

その事がモモンガには嬉しかったのだ。

「さて、それじゃあ相談をはじめましょうか。まずはこのキャラシートのACCという項目なんですけど……」

「ああ、それはですね……」

NPCが誰も居ないという久しぶりの感覚に、死の支配者^{オーバーロード}と深淵の大蜘蛛^{アトラクティナクア}は朗らかな気分で相談を開始した。

8話

「くっ！おのれクーゲルシユライバー！至高の41人の総括である私に、よくもこんなっ！」

「ふっ。気の強いことだなモモンガよ。だが魔法詠唱者であるお前がこの距離で俺に敵うとでも？」

「くそっ……なぜこんな事をするんだ。私とお前は親友だろう？」

「なぜ、か。フフフツ散々胸元を肌蹴させておいて……誘っていたのはお前だろう？」

「ち、違う！これはただのファツションでっ……」

「まあどっちでもいい。私のする事は変わらない」

「くあ！糸が……キツいつ」

「これからお前は私の子をその身に宿すんだ」

「なあ!?馬鹿なことを言うな！私は骨だぞ！」

「だが穴はある。中身がなくなつて寂しそうになっている穴がなあ？」

「ま、まさか！おい、バカやめろ！の、乗りかかつてくるなあ！」

「さあ何処から注ぎ込んでやろうかな？口？眼窩？外耳孔？」

「や、やめろおおおお！」

「はははは！いいぞ！いいぞ！お前の抵抗など愛撫にしかならぬわ！もつと私の下で足掻くがいいさ！」

「ああああああ！」

「決めたぞ。冠状縫合をこじ開けて其処から卵を流し込んでやる。最初はキツいかもしれんが、なあに直に何も考えられなくなる。私の卵を頭蓋内に感じながら果てるがいい！」

「やめろお！そこは広がらなっ……！ひ、ひぎいいいいいい！？」

「く、くふふふうー……!!そんないけませんわクーゲルシユライバー様！モモンガ様の冠状縫合が軋んでっ……ああそんな！頭頂骨が捲れてあんなに広がって……くくくふう！くひひー!!後生です！私も混ぜてくださいませえー……！」

ナザリツク地下大墳墓第九階層。

神々の居城の如き偉容の只中で、守護者統括であるアルベドが目を見開き黄金の瞳をギラギラと発光させながら狂乱していた。

髪を振り乱しながら何かを堪えるように両肩を抱きしめ震えるアルベドの恐るべき姿を、シクスス、エントマ、ナーベラルの三人のメイドは極力無視して己の仕える主人から声がかかるとを辛抱強く待っていた。

「やっぱりい、クーゲルシュライバー様が両性だってアルベド様には教えないほうがよかったかもお」

「私も……あのメモの事、黙っていたほうがよかったですか?」
「シクスス。あなたは意図せず知ってしまった機密情報をどうするべきか相談しただけ。間違ったことはしていないわ。ただちよつと、伝えた内容がアルベド様にとって重要すぎただけで」

もう2時間以上前からアルベドはあんな感じだ。

防衛体制の変更案をモモンガに伝える為に此処で待つとの事だったが、彼女は余りにも騒々しい。

第九階層こそがホームのメイド達からしてみれば眉を顰めざるを得ない。

「クーゲルシュライバー様が両性だからって、アルベド様が危惧するみたいにモモンガ様に卵を産み付けるなんて思えないんですけど」

シクススはアルベドの妄言を聞き流しつつ、2時間前の、クーゲルシュライバーに寝室へ本を持ちに行くように命じられた時の事を思い出す。

何の問題もなく目的の本——原色・蜘蛛類大図鑑という本だった——を見つけてきたのだが、その横にメモが放置されており、そこにはでかかど

「卵を産みつける モモンガさんに頼む」と書いてあるのをシクススは見てしまった。

思いがけずクーゲルシュライバーの書いたと推定されるメモを見てしまったシクススはその事を告げようかと主人に本を渡すギリギリまで悩んでいた。

だが先刻体と心に刻まれた恐怖が蘇えり、また怒られるのではないかと、あろうことか口を噤んでしまったのだ。

それにあの場にはモモンガも居た。もしかしたらモモンガにも叱責されるかもしれない。

そうして、本来ならばメモを見てしまったことを謝罪しなければならぬのに、自分が叱責されるのが恐ろしくて黙秘する事を選んだシクススの心中では罪悪感が嵐のように唸りを上げる事になる。

モモンガの隣を通り過ぎる時に、見透かされて叱責されるのではないかと不安と心配から、ついついその骸骨の顔を見てしまいその罪悪感はさらに巨大なものとなってしまった。

黙したまま退室し、成長した罪悪感に押しつぶされそうになった時に現れたアルベドに、懺悔するように事を打ち明けたのが思えばこの狂乱の始まりだった。

「そうそう。いくらなんでもお、それはない……はずう」

シクススに同意する言葉をエントマは途中で曖昧な形へと変えた。彼女の脳裏に先ほどまでクーゲルシュライバーやらされていた行為が鮮やかに蘇ってきたからだ。

脳を焼くような羞恥が再燃し、エントマは興奮にまかせて被っている蟲の腹を顔についている小さな肢で猛烈に打ち叩いた。

仮面の蟲が迷惑そうにキューキューと鳴き声を上げる。

そんな顔面だけが超高速振動しているエントマに対してナーベラルが眉を顰めた。

「エントマ。その言い方は不敬にあたるわよ。なにを根拠にそう言うの？」

「えっ？え、えええっとお、ほら、至高の御方々の深淵なお心を全て見通すことなんて私達に出来るわけじゃないじゃない？」

怪しい。何か隠しているような気がする。

そう思うもののエントマがいう事ももともとだとナーベラルは思った。

自分達如きの存在では至高の御方々の深遠なお考えを理解するなど到底不可能――

ナーベラルは日頃から心底そう思っていた。

なにせナザリック一の知恵者であるデミウルゴスでさえ全てを察することは出来ないというのだから。

「確かに……私達には理解不能な事でも、至高の御方々のなされる事には何時も深遠な意味がある……アルベド様が仰るような事があつてもそれは何か意味のあることなのでしょう」

「そうだよそうだよおー……あ、ナーベラル髪が少しもつれてるよお？」

「え？そんなはずは……」

そんなはずはない。と言い切る前にエントマが素早く手櫛でナーベラルのポニーテールを梳いた。

「はい。これでもう大丈夫う」

「……ええ。ありがとう」

——今日のエントマは、変だ。

明らかに話をずらそうという意思が見て取れる。だが、多少気になる部分もあるがそれは別にいい。

ナーベラルはエントマを見つめる。

右手を和風メイド服の帯のあたりに沿えて、何時も通りの感情の分りにくい表情で持ち場に立っている。

見た目だけなら別におかしい事はないだろう。

しかし行動がおかしい。

ナーベラルの知るエントマは他人の身だしなみを注意することはあつても、自ら手を出してそれを直してやったりはしない。

「エントマ……あなた今日ちよつと変じゃない？」

「……そうかなあ？そう思うんだたらあ、きつとクーゲルシユライバー様のおかげじゃないかなあ」

「……なるほど」

エントマの答えは戦闘メイドというメイドの一種であるプレアデスの一員、ナーベラルにとって尤もなものだった。

至高の御方の部屋で、その傍近くに侍る事が出来るというのはナザリック全メイドにとって最高の名誉であり喜びだ。

何時もは食べ物の事しか興味がないようなエントマであっても、喜びのあまり浮かれてしまうのも当然だろう。

自身も既に至高の41人の総括だったモモンガに仕えている身。浮かれたくなる気持ちはよくわかっていた。

ナーベラルがそう納得した時、アルベドが首をガクガク揺らしながら耳まで裂けるような笑みを浮かべて接近してきた。

「ねえあなた達！クーゲルシュライバー様が上でモモンガ様が下というのもいいけれど、その逆も素敵じゃないかしら!? 微かな隙を突いて攻守逆転するモモンガ様！今度は私の番だと幾多の魔法を操り攻めるモモンガ様の勇姿！ああ……なんて素敵なのかしら！言うなれば……そう、魔法性交者!?魔法性交者!でも言えればいいのかしら!?その身に刻め！これが真のスカルフアックだ！なんちゃってなんちゃってえええええー！きゃああああああー！」

どうやらアルベドの妄想は新たなステージに到達したらしい。

メイド三人は荒ぶる守護者統括を醒めた目で見ながら無言で頷き、彼女に同意しておいた。

決して、本心ではなかったが。

「うん。とりあえずこんなものか?」

「そうですねー。それで、今すぐ検証が必要なのは私のく恐怖を喰らうもの>ですね。これが上手く機能しないと私役立たずですよ」

モモンガとクーゲルシュライバーの話し合いは大詰めを迎えていた。

2時間以上の話し合いで当初予定していた議題の殆どが消化されている。

今は最後の議題として、重要度が高くすぐにも検証を行うべきスキルと魔法を決めているところだった。

「役立たずとは思いませんけど……それじゃあ検証の為にレベルがわかってるシモベを闘技場に呼んでおきましょう。どのぐらいのレベルがいいですか?」

「計算しやすいように10の倍数でお願いします。耐性があると面倒なんで、できるだけ耐性持ちはなしでお願いします」

「わかりました。デミウルゴスに用意させておきます」

クーゲルシユライバーは所謂「古典型コズミックホラー」と呼ばれているガチビルドのキャラクターだ。

仲間との連携を前提に、軸となるたった一つの常時発動型特殊技術<恐怖を喰らうもの>を最大限に活用するための構成をしているのでそれを封じられると極端に脆い性質を持っている

逆に言えば、それさえ機能すればユグドラシルにおいて「自走する超位魔法」「別ゲーの始まり」「封印が解けられた！これで死ぬる！」などの別称と迷セリフを生んだ古典型コズミックホラーの全力を発揮することができる。

たとえこの世界の存在が100レベルだろうが200レベルだろうが、理論的には対応することが可能なクーゲルシユライバーの常時発動型特殊技術の確認はモモンガにとっても非常に重要度が高い。

「モモンガさんは<星に願いを>でしたっけ？」

「いえ、やっぱりそれは止そうかと」

「やはり経験値の消費が？」

「ええ。この世界に経験値という概念が在るかどうかも不明ですから。補給の目途が立っていないのにリソースを使うのは流石に」

モモンガが使える超位魔法の一つに<星に願いを>というものがある。

ユグドラシルでは経験値を消費して発動するタイプの超位魔法で術者の願いを叶えるという効果があった。

願いを叶える、といっても使用すると複数の選択肢がランダムで出現し、その中から好きな願いを選ぶというなんとも博打めいたネタ魔法だった。

しかしこの世界へと来てからというものの、コンソールを始めユグドラシルでは当然のようにあった各種表示が全くと言っていいほど消

えてなくなってしまうている。

このような状態で星に願いを使った場合、選択肢はどのようなのだろうか？

そういつた疑問と、もしかすると魔法のランプよろしく何でも願いの叶う魔法になっていて可能性もあるのではないかという希望から検証の必要性が高いとピックアップアップされていた。

しかし、モモンガの言うとおりに経験値という概念があるかどうかわからない現状では使用のリスクが高い魔法でもある。

「じゃあ経験値があるかどうか調べましようよ」

「ですがどうやって？ステータス画面が開かない以上、経験値が入っているかどうか確かめる方法はないですよ」

「いやいやモモンガさん。無欲と強欲ですよ。フレンドリイファイアが解禁されてるんですから経験値の元は自給自足できちゃいますし、あれ使って適当なシモベを狩りましよう」

「それで回収できれば経験値の存在を確認できるという事ですか。なるほど！上手くいけば1週間に1回くらいは^{ウィッシュユ・アポン・ア・スター}星に願いを>を使えるようになるかもしれませんね！」

フレンドリイファイアが解禁されているという事のメリットを生かそうというクーゲルシュライバーの提案にモモンガが喝采する。

モモンガにとって大切なのはアインズ・ウール・ゴウンのメンバーによって作り出された存在だけだ。

定期的にPOPする有象無象のモンスターなどにかける慈悲はない。そしてそれはクーゲルシュライバーも同じだった。

「それじゃあ一応運営資金節約の為に実験台になるシモベは召喚系スキル持ちが呼び出したやつで行いましょう」

「じゃあ私の特殊技術スぺシャルの検証で戦慄状態にして身動き取れなくなった連中をそのまま実験台にしちゃいましょう。私じゃ無欲と強欲は装備できないんで、モモンガさんお願いします」

「わかりました。それじゃあ移動しましょうか」

話し合いが終了し、あとは行動する時間だ。

モモンガは部屋にかけられた魔法を解除するとソファから立ち上

がる。

まず向かうべきは、気が進まない事この上ないが宝物殿だ。

転移する必要があるのだが、その前に退出させたメイド達に今後の行動について一言伝えておかなければならない。

でなければ彼女達と儀仗兵達はいつまでもクーゲルシュライバーの部屋の前で待ちぼうけする事になる。

「お互い、ロールプレイ頑張りましょうねモモンガさん」

「ええ、ボロが出ないよう頑張りましょう」

クーゲルシュライバーとモモンガの二人はそういうと軽く笑いあう。

その笑いは乾燥したものであり、既に彼らがロールプレイする事に疲れてきている証左でもあった。

しかしどれだけ疲れていようともこれだけはこなさなければならぬ。

ナザリツクに君臨する絶対者である至高の41人。

その存在に向けられる尊敬と忠誠を裏切るような真似は自らの命を縮める行為なのだから。

それだけではなく、ナザリツクを円滑に運営するにも必要だし、個人的にもNPCに失望されるのが命の危険とは別の意味で怖い。

まだ2日しか経ってはいないが、健気なNPC達から向けられる想い出来るだけ応えてやりたいという気持ちも少なからずあるのだ。

子供の前で見栄を張ってしまう父親の気持ちとはこんなものなのだろうか？

モモンガはギルドメンバーの1人たち・ミーの事を想う。

子持ちである彼も、もしかしたらこんな気持ちを味わっているのだろうか？

そうだとしたら、少しだけ彼に近づけたような気がする。

それを嬉しく感じながら、モモンガはナーベラル達が待つ廊下への扉を開けた。

「ああモモンガ様！クーゲルシュライバー様！お待ちしておりました！どちらが上でどちらが下だったんですか!?!さあさあ私も含めて内

密で濃密な話し合いを致しましょう！さあさあさあ！」

開けた先にスタンバイしていた情欲に蕩けた異様な雰囲気纏う興奮しきったアルベドの姿を確認すると、モモンガは無言で扉を閉めようとした。

借りてきたAVを鑑賞していたら自分のかわいい娘が出演している見知らぬ男に媚を売ってる姿を交通事故的に目撃してしまった父親のような気分を噛み締めながら。

だが、それよりも先に背後にいたクーゲルシュライバーが余計な事を言った。

（上だの下だのと、アルベドはなにを言ってるんだ？ギルド長であるモモンガさんが上に決まってるじゃないか。いくら本来は同格っていつてもさあ）

「アルベドよ。私が下でモモンガが上だとも。なにを当然の事を言っているんだ？」

「く、クーゲルシュライバー様が下!?それが当然!?く、くふー！モモンガ様マジマジックフアツカーくふふー！」

モモンガは扉を閉めた。そして頭を抱えて蹲った。

「おお。これは壮観」

闘技場の貴賓席からクーゲルシュライバーは眼下にひしめく悪魔の軍勢を見下ろしていた。

デミウルゴス配下の魔将が召喚した100を越える悪魔の軍勢だ。「低レベルの悪魔を用意致しました。モモンガ様が仰るにはこれで丁度合計レベルは2500となるそうですございます」

「2500レベルか。上手くいけば250ポイントだが、さてどうなることか……下れ、デミウルゴス」

「はっ」

傍らに立って報告を行っていたデミウルゴスを下らせると、クーゲルシュライバーは各種常時発動型特殊技術パッシブスキルを起動させていく。

＜畏怖すべき存在＞やく恐怖を齎すもの＞に代表される恐怖効果のある魔法や特殊スキルの抵抗難易度を上昇させる常時発動型特殊技術が次々に起動していく中、クーゲルシュライバーは闘技場の観客席にいる者達を注視していた。

ゴーレムの集団に紛れていてもまるで輝くような存在感を放つ女性達。

アルベド、エントマ、ナーベラルの三名が期待の眼差しをクーゲルシュライバーに向けていた。

（隣のデミウルゴスもそうだけど、そんな目で見られるとやりにく
いって言うか、参ったなあ）

恐怖のオーラを使えば相手に恐怖効果を付与することが出来るのはシクスの件で検証済み。

眼下の雑魚悪魔達のレベルから考えれば十分に通用するので、恐怖効果を付与するのは問題なく完遂できるだろう。

だが、もしこれで＜恐怖を喰らうもの＞が発動しなかったらどうすればいいのだろうか。

わざわざ雑魚を召喚して、恐怖させてはい終了……という事になると弱いものを怖がらせて粹がっているようないじめっ子のように非常に情けない。

（言い訳は考えておくとして……頼む！お願いだから発動してくれよお）

クーゲルシュライバーは心の中で誰に対してもない祈りを捧げると、擬腕を広げ巨大な鋏角を軋ませながら特大の恐怖をぶちまけた。

「我が供物となるがいい。＜恐怖のオーラIV＞」

かつて守護者達に対して放たれた緑のオーラが、同じ場所で再びその猛威を振るう。

クーゲルシュライバーから発せられるオーラの如き緑色の光は、瞬時に生贄として捧げられた悪魔達をその効果範囲に捉えた。

そして、100を超える悪魔の軍勢がその構成員の1人も例外なく、魂を驚掴みされたかのように硬直した。

「!!」

目を持つものはそれを血走らせ。

口を持つものはそこから声にならない悲鳴を上げる。

様々な姿をした悪魔達は皆例外なく恐怖という一つの感情に支配されていた。

最大級の恐怖により一切の身動きが取れなくなった悪魔達は、古の彫刻家が作り上げた邪悪な石像の如く闘技場の土の上に立ち尽くす事しか出来ない。

悪魔達の身を縛り付けるのは恐怖効果が齎す四段階ある状態の内、第四段階目の症状である「戦慄状態」だ。

本来であれば一段階前の「恐慌状態」にした敵を追い詰め逃亡不能にした時に陥る状態なのだが、IからVまでのレベルが存在する<恐怖のオーラ>の内、恐怖効果を与えるだけのレベルとしては最高位の<恐怖のオーラIV>はその前提条件を無視してレジストに失敗した対象を「戦慄状態」にする事が可能である。

下手に恐怖状態や恐慌状態にすると付与された対象は力の限り逃亡しようとするため、面倒が生じるとの判断でクーゲルシュライバーはこれを使用したのだった。

「フ、フフフフフ………!」

声が変わった。

クーゲルシュライバーの隣に控えていたデミウルゴスは主人の笑い声を聞いて、そう確信していた。

声が女性のものに変わったとか、そういう変化ではない。

劇的に変化したものの、それは声に含まれる「力」だった。

言葉を武器にするデミウルゴスをして驚愕させるに足る、自信に満ちた力強い声。

精神作用に対する強力な耐性を持って居なければそれだけで心を酷くかき乱されるだろうその声に、デミウルゴスは無言で跪き頭を垂れる。

「素晴らしい。とても素晴らしいぞ。案ずるより産むが易しというが、まさにそれだな」

「おめでとうございますクーゲルシュライバー様」

デミウルゴスは主人の喜びこそ我が喜び、そう言いたげな笑みを浮かべながらクーゲルシュライバーに賛辞を送った。

クーゲルシュライバーはそれを当然のように無言で受け取ると、自信の内側に湧き上がった名状しがたいなにかの総量を掴もうと精神を集中させる。

シクススに恐怖を与えた時に発生したそれとは10倍も違うだろう濃度の「なにか」の大群。

その数はクーゲルシュライバーの想像通り250単位あると感じられた。

その確信にクーゲルシュライバーは今にも踊り出したい気分だった。

——クーゲルシュライバーが感じている名状しがたいなにかの正体。

それはく恐怖を喰らうものへの効果で発生した各種バフに使用される専用ポイント「神話パワー」だ。

副種別「旧支配者」を持つ種族は通常的手段によるバフ、デバフ効果を一切受け付けない。

宇宙的恐怖の権化であり神そのものである種族であるため、通常の魔法では影響を与える事は出来ないというのがユグドラシルでの設定だ。

自己強化魔法だけではなく、「旧支配者」には非常に大きなデメリットがある。

自分の力を高めるために通常ならば装備できて当たり前な武器、防具が完全に装備不能なのだ。

そうなれば如何にレベルアップによるステータス上昇が優秀といえども、同じレベル帯のキャラクターと比べれば一歩どころか二歩も劣る性能になってしまふのは避けようが無い。

「邪神は武装なんかしない」という運営の無体の結果である。

だがそれでも、「旧支配者」の種族は人気があった。

それは旧支配者の姿になりたい原作ファンが沢山いたからという

理由ではない。

単純に、強かったからである。

「デミウルゴスよ。ナザリック一の知恵者であるお前に問う。私が許すので素直に答えるがよい」

「はっ！承知いたしました」

「お前の目から見て、私の強さというのはどの程度のものだ？戦術などを考慮に入れず、ステータス……いや、肉体のスペック的に比較しての強さでだ。誰と同等、誰に劣っているという答え方でよい」

尊敬する主からの念の入れられた質問だったが、それでもデミウルゴスは一瞬答えるのを躊躇った。

クーゲルシュライバーの言う肉体的なスペック。

それはお世辞にも100レベルの前衛職として、決して高いとは言えないものだったからだ。

「はっ。僭越ながら申し上げますが、体力はアウラと同等、魔力と物理攻撃力ではアルベドと同等、物理防御力は……」

なるべく劣るといふ言葉を使わないように評価していくデミウルゴスにクーゲルシュライバーは概ねその通りだろうと納得していた。自分のステータスなど見なくなって久しいがそう大きく間違っただけではない。

HP	: 80
MP	: 40
物理攻撃	: 80
物理防御	: 50
素早さ	: 100
魔法攻撃	: 30
魔法防御	: 90
総合耐性	: 80
特殊	: 100

ステータス上限を100とした場合、ステータスはこんなものだろうという認識があった。

確実に総合力ではシャルティア、マーレ、アルベド、コキュートス、

果てはモモンガにまでに劣っている。

コキュートスは当然として、下手をするとシャルティアとアルベドには力でねじ伏せられかねない。

「……というのが私の意見でございます」

評価を言い終わったデミウルゴスにクーゲルシュライバーは大きく頷く。

そして、覚悟を決めて演技^{ロール}する。

「なるほど。やはり流石はデミウルゴス。実に正確な分析だ。よくぞこの私の……封印された状態での力を見抜いた」

「封印ですとっ!？」

（ああ……リアル中二病の時と同じ事を口にしてるぞ俺。なんかもう痛気持ちよくなってきたあ）

驚愕を顕にする部下の姿を見て、美女に耳を甘噛みされるような微かな快感を伴った痛みに悶えながらクーゲルシュライバーはユグドラシルの設定を心の中で反芻する。

（旧支配者は異なる次元からユグドラシルの世界に顕現する際に大きな制限を受ける。その為本来の絶大な力を振るうことが出来ない。旧支配者にとってレベルアップというのは世界から受ける制限を解除し本来の力を取り戻していく作業の事を言うのである。だ、だから封印って設定でもおかしくないよな!?!公式!公式だから!俺は悪くない!中二病なのは公式だから!）

「クーゲルシュライバー様を縛る封印が未だにそのような力を残していないようとは……くっ!なせ見抜けなかったのだ私はっ!」

（あれ?なんかこの間の設定と混同してる?ま、まあいいか。説明するのも恥ずかしい）

「そう自分を責めるなデミウルゴス。この私をも封^{公式}ずる窮極^{設定}の呪法だ。お前が見抜く事が出来なくともそれは仕方がない事なのだ。それに……」

未だに主人の身を苛む恐るべき封印に気付くことの出来なかった己の愚かさを悔いながらもデミウルゴスは続くクーゲルシュライバーの言葉を待った。

自らの感情に任せて謝罪を行ってもそれはかえって無礼になる事を熟知しているからだ。

ただでさえ大失態を演じている身。

己では想像することも出来ない苦難を乗り越えついにナザリツクへ帰還を果たした至高の御方を前に、これ以上の醜態は決して許されるものではない。

もしかしたら部下の愚かさに愛想を尽かして再びナザリツクを離れてしまいかもしれない。

クーゲルシュライバーの帰還と共にデミウルゴスの心中に巢食い始めたその恐怖が今まさに浮上し、彼の背筋を凍りつかせていた。

(ん？なんか神話パワーが10ポイント増えたぞ。なんで？新たに恐怖効果を与えたりしてないのに)

突如自分の中が増えた出所不明の神話パワーに疑問を抱くも、クーゲルシュライバーは即座にそれを思考の端へと追いやり言葉を続けた。

「それに心配には及ばぬ……この封印を一時的に解除する術を私は既に体得しているのだ」

——その言葉を言い終わると同時に<恐怖を喰らうもの>の真価が発揮された。

「……っ！な、なんと……!!」

戦慄し、驚愕の表情を浮かべるデミウルゴスにクーゲルシュライバーの自尊心が酷く満たされる。

悪魔達から搾り取った250ポイントに加え先ほど取得した10ポイントの神話パワーをも注ぎ込んだ自己強化の成果としては十分なりアクションだろう。

(全部で260ポイントの神話パワー。全部ステータスの補完にぶち込んだから今の俺は全ステータスの値が100に到達、もしくはは一部突破しているはずだ)

<恐怖を喰らうもの>の真価。

それは自分が恐怖効果を付与した相手のレベル/10だけ得られる神話パワーを使つてのステータス強化にある。

ゴズミックホラーの必殺技とも言えるこの常時発動型特殊技術パッシブスキルによるバフ効果は神話パワー1ポイントにつき、対象のステータスを1レベルアップ分強化する事が出来る。

一度バフを始めると5分間のカウントダウンが始まり、それが0になると全てのバフ効果が消失し25分間のクールタイムに入るといふ弱点はあるものの非常に強力な能力だ。

なにせこのパッシブスキルによるステータス上昇には限界が存在しない。

つまり神話パワーさえあれば理論的には200レベル相当のステータスにも到達する事が可能なのだ。

邪神には技や魔法などの小細工は必要ない。

力こそパワー！レベルを上げて物理で殴る！ステータスという地力の差で圧殺する！

旧支配者が強い理由は旧支配者だからという理不尽を再現したものがこのパッシブスキルなのである。

当然こんなものがPKに使われたらまずいので救済処置はあった。街で購入可能な所持上限数10個のアイテム「エルダーサイン」を装着している装備に使用すると30秒間だけ恐怖を喰らうものゝ効果を発動させているプレイヤーからの攻撃をノーダメージにすることができた。

＜恐怖を喰らうもの＞が正常に機能することを確かめたクーゲルシュライバーにとって、残る不安の種はその手のアイテムだけがそれでも対応のしようはある。

「どうだデミウルゴス。今の私は、お前から見てどのような強さだ？」

湧き上がる力に裏付けされた自信に満ち満ちたクーゲルシュライバーの声に、デミウルゴスは恭しく跪き頭を大きく下げて答えた。

「守護者各員を凌駕する強さ。まさに、至高の御方と呼ぶに相応しい圧倒的な強さでございます」

デミウルゴスの言葉に、クーゲルシュライバーは大きな牙を打ち鳴らし高らかに笑い声を上げた。

それはこの名前も知らない世界に誕生した、大いなる邪神の産声そのものだった。

9話

魔宴。

そう表現するしかないこの世の邪悪の全てを終結しても尚足りないほどの悍ましい光景が其処にはあった。

夜空を覆い隠すように鬱蒼と茂った暗黒の森の只中、顔の無い無定形の生物の姿が刻み込まれた古の平石が鎮座する広間にて。

無明の闇に包まれているはずの空間には如何なる魔術の作用なのだろうか？

中空に浮かびつつ回転する非地球的な生命体を象った奇怪な装飾が施された小箱の中から漏れる七色の狂気を湛えた光が、禍々しくも慈悲深い暗黒を追い払いこの世のどんな悪夢より凄惨な光景をありありと照らし出していた。

そこに居たのは如何なる存在か。

永遠の狂気に囚われながらも、人類が持つありとあらゆる知識と勇気を総動員し正確に描写しようとするならば次のようになるだろう。

——曰く。それは冒瀆の言辞を吐きちらかして沸きかえる、最下の混沌の最後の無定形の暗影。

——曰く。それは粘液質の深淵にて忌わしい分裂繁殖を繰り返す灰色の脈うつ液体じみた塊。

——曰く。それは触腕や長い鼻や蛸のような目を備え、なかば無定形で、一部が鱗や皺におおわれている巨大な闇。

——曰く。それは蛸の頭部を備え、顔はのたうつ触腕の塊で、鱗に覆われたゴム状の体を持ち、四肢には長い鉤爪があり細長い翼を持つ大いなる司祭。

——曰く。それはぞつとするような柔軟さの触腕状の付属肢と手の両方を持った燃えるような三眼を備えた巨大な無定形の生き物。

曰く。曰く。曰く。曰く。曰く。

暗黒の森の広場にはそれら邪悪の化身が犇っていた。

ある存在は植物的特長を備えた樽状の胴体を持つ謎の生物をその触腕にて殴打し、広場に狂おしき太鼓の連打を鳴り響かせる。

またある存在は骨にも金属にも見える正体不明の物質で構成されたフルートのような物体を吹き鳴らし、か細い単調な呪われた音色を奏でる。

それら正気を打ち砕く冒瀆的な音楽に紛れて、金切り声を上げる女と、苦痛に呻く男の声で歌い上げられる狂気の賛美歌が森の奥底から流れてくる。

その賛美歌を破滅を齎す触腕を振り乱しながら唱和し踊り狂う邪悪なる者共の前に、一体の異形が躍り出た。

大量の血液にて清められた冒瀆的な象形文字、彫刻や巨像、浅浮き彫りに覆われた巨大石柱で出来た祭壇の上から、邪悪極まりない饗宴を見下ろすその影は腕にも似た器官を大きく振り上げると甲高い鳴き声を上げた。

それに答えるように広場の邪悪達から怒号のような声が湧き上がった。

「Ia! Ia! Attach-Nachha!」

「Ia! Ia! Attach-Nachha!」

「Ia! Ia! Attach-Nachha!」

それはかの存在を讃える祝詞だった。

この場に轟く人類の想像も及ばぬ力を内包する邪悪共の全てが祭壇に立つ黒い影に傅きその至高なる存在を讃えているのだ。

中空にて回転する黒き結晶体を抱する小箱から放たれた一条の光が、邪教の祭壇を照らし、そこに君臨する神の姿を浮かび上がらせた。

そこには、全身で崇拜を受けるクーゲルシュライバーの姿があった。

「うーむ。懐かしいな。ギルド【HPラブクラフトいあい愛好会】主催、ユグドラシル夏の納涼邪神だらけの盆踊り大会」

巨大な鋏角にむしゃぶりつき熱心に唾液を塗り込んでいるエントマの頭を撫でながらクーゲルシュユライバーは惚れ惚れするように呟いた。

ここはクーゲルシュユライバーの自室の応接間。闘技場での検証を終え、モモンガによる星に願いをの検証結果を確認したクーゲルシュユライバーはその結果に満足し、自室に戻ってムービースクロールの鑑賞を行っていた。

ムービースクロールによって映し出される記録映像はユグドラシル時代とは違ってよりリアルさを増していた。

その事にクーゲルシュユライバーは自分の作品を勝手に修正されたような不快感を覚えつつも、より迫力ある映像となった事を喜んだ。

なにせ映像に出てくる旧支配者達はまるで本物のような邪悪さと恐ろしさなのだ。

完璧にR-18になるであろうグロテスクな邪神たちが楽しそうに跳梁跋扈する様は、もしも普通の感性を持つ人間であったらトラウマになってもおかしくは無いショックキングな光景である。

この手の光景に慣れているクーゲルシュユライバーであっても本来は余りの恐怖に視聴を止めるところであるが、アトラクティブ深淵の大蜘蛛になった事で感性が変化してしまったのだろうか？

同時多重SANチェックによりSAN値直葬されて然るべき恐怖を目にしても、出来のいい映画を見る程度の感情しか湧かなかった。(それにしても懐かしい。邪教の神様気分が味わえるっていうんで参加者全員と交替しながら祭壇に上がったんだよなあ。あのシャイニングトラペゾヘドロン型ミラーボールの出来も良かったし、祭壇もすごい作り込みだった。ユグドラシルに存在する全旧支配者の文様が描かれてるなんて流石は100年以上続く愛好会をバックボーンに持つギルド主催イベント。タブラさん参加できなくて悔しがってたなあ)

盆踊り大会の最後に行われた「燃える三眼」と「炎の精」によるお互いに恐怖を喰らうもの>を全力使用したガチンコバトルで会場だった暗黒の森が全部焼けてしまい、そこを狩場に使っていた他のプレ

イヤーから抗議がきたのもいい思い出だ。

最終的には参加者全員が＜恐怖を喰らうもの＞を発動させて他プレイヤーをフィールドの彼方へと吹き飛ばし、焦土となった森で壮絶なPVPを行うという阿鼻叫喚の珍事に発展したのだが、アレもまた今考えてみるとユグドラシルというゲームを象徴する実に自由かつ混沌とした事件だと言えるだろう。

(タイムアウト後のクールダウン中に祭りだとばかりに大挙した上位プレイヤー達に皆まとめて討伐されたっけ。主催ギルドのマスターが、おのれ旧神！我らは必ず蘇えるぞ！正しき星辰の揃うその時まで、束の間の安寧を享受することだな！なんて言っただけの場に居た全員が大笑いしたんだよな。まったく気のいい連中だった)

狩る側も狩られる側も皆楽しそうだった。

そういえば邪神討伐に参加していたプレイヤーにはたち・みーも居たような気がする。

主催ギルドのギルマスである「沸騰する混沌の核」を討伐したのも「正義降臨」のエフェクトを背後に展開したたち・みーだった……はずだ。

リスポンした後に普通の人たちに迷惑かけちゃだめでしょうとちよっぴり怒られた記憶があるので間違いではないだろう。

在りし日のたち・みーの姿をしみじみと思い出すクーゲルシュライバー。

その優れた聴覚が微かな音をとらえた。

「……あ……あ」

「うん？どうしたシクスス」

隣に侍る、ようやく名前を思い出したメイドが発するうめくような声にクーゲルシュライバーは気分が悪くなったのかと心配して声をかける。

「いあ……いあ……あとらしくなくあ……いあ……いあ……くーげるしゅらいばーさま」

「えっ」

シクススの様子が変だ。

声をかけられたシクススは瞳孔の開ききつた光の無い目を恍惚に震わせ、ひび割れた笑みを顔に浮かべつつクーゲルシュライバーを見つめ祝詞を唱えていた。

——シクススのクーゲルシュライバーを見る目がおかしい……。

(え、なにこれ。洗脳？ 発狂？ なんかくわからんがそういう感じのやばいアレだコレー!?)

「んぷへえあつ……クーゲルシュライバー様あ。シクススはあ、幾多の邪神を従えるクーゲルシュライバー様の偉大なるお姿を見て感動しているんですう」

クーゲルシュライバーの体から銀糸を引きながら顔を離れたエントマが甘ったるい口調でそういった。

仕事モードの切り替えは完璧なエントマがこのような無礼にあたる言葉を主人に対して使うのには理由がある。

エントマの仕事ぶりを気に入ったクーゲルシュライバーから毛づくろいをしている間だけ普段プレアデス同士であるのと同じように喋れと命令されたのだ。

変態的奉仕をしている時だけ、素の自分をさらけだしてよいという命令にエントマは更に倒錯感を深めているのだが、そんな彼女の心情にクーゲルシュライバーは全く気付いていなかった。

「……そんな感動するほどの事でもないだろう」

「クーゲルシュライバー様からすればそうでしょうけどお、私達仕える者からすれば感動するのは当然の光景なんですこれはあ」

そういうものなんだろうか？ いや、エントマの言う事にも一理ある。

ようは、勘違いなのだ。

きつとエントマとシクススは、クーゲルシュライバーこそが旧支配者の頂点に立つ総帥であると勘違いしている。

確かにあの映像を見ればそう思うのも仕方ないだろう。

だが実際はアトラクナクアはそんな高位の存在ではないし、そもそもかわりばんこで崇拜ごっこしているだけなので彼女達の思っ

ることは全くの見当違いなのである。

しかし――。

(いちいち誤解を多く必要もないか。都合がいい方に勘違いしてくれ
るならそれでいい)

強大な主たらんとするクーゲルシュライバーはあえて彼女達の勘
違いを放置することにした。

彼女達の口からナザリック内にこの噂が広がれば、更なる忠誠が得
られるだろうと期待して。

「そうか。まあ今はああいう信徒達は居ないのだがな」

「……では、クーゲルシュライバー様を崇拜する信徒を増やしますか
？」

「よい。そのようなことをせずとも今の私にはお前達がいる。私に忠
誠を誓い、無私の奉仕をするお前達がな」

クーゲルシュライバーは人間の上半身が生えている辺りに居たエ
ントマを勇気をだして左の擬腕で抱き上げそういった。

巨大な手がエントマの細い腰を掴み上げている。

掴んだその手から一瞬、なにか硬質な蓋が閉まるような妙な感触が
伝わってくるが、更なる忠誠心の向上のために恥ずかしい演技を敢行
しているクーゲルシュライバーはその事に気を向ける余裕はなかつ
た。

「私の可愛いメイドよ。我が奉仕種族よ。私はかつての信徒に傳かれ
るよりも、お前達に仕えられる方が嬉しいのだよ」

「ああ……クーゲルシュライバー様あ……」

(よっしゃいける！このまま口説き落とすんだ俺！)

別に口説くのが目的ではないのだが、蕩けるような雰囲気醸し出
すエントマの姿に当てられてクーゲルシュライバーは本来の目的を
半ば忘れ、余計な事をしようとしていた。

興奮しているのだろうか？小刻みに高速振動するエントマの顔に
クーゲルシュライバーは右の擬腕を添え、彼女の本当の顔を覆う蟲を
取り外した。

人間であればおぞましいと感じるだろうエントマの蜘蛛そのもの

である素顔が外気に晒される。

実を言うとクーゲルシュライバーも内心ちよつと引いていた。

「あつーす、すみませんクーゲルシュライバー様、仮面蟲をお返しくださいませ。御見苦しいものを至高の御方にお見せするわけには……」

焦るように言葉を連ねるエントマに、彼女の胴体を握る手の力を一瞬強める事で中断させると、クーゲルシュライバーは八つの赤光を放つ擬頭をむき出しの蜘蛛の顔に近づけ囁くように言った。

「見苦しいなどと言うなエントマ。つやつやと輝く円らな単眼は八つの宝石のようで、力強い顎は鋭く尖りとても健康的だ。顔について小さな肢は繊細かつ可憐でこの私自ら毛づくろいしてやっても良いほどぞぞ？エントマよ、お前は知らなければならぬ。素顔のお前は、美しいのだ……」

トドメとばかりにエントマの口元に生えた小さな肢を擬腕の指で小刻みに撫でた。

人間であれば唇をなぞるのに近いだろうと判断してやった行為である。

完璧だ。クーゲルシュライバーは自画自賛した。

歯が浮いて総入れ歯にしなければならぬレベルのセリフを堂々と演技仕切った彼は羞恥を感じる以上に達成感に満ち溢れていた。

これがTRPGのセツションであれば、色んな意味で空気を読んだGMが対話判定に修正値を与えてくれる……そんなレベルの完成度だったとクーゲルシュライバーは確信している。

現実の女性にはトコトンもてなかつたが、ゲーム中では熟練のジゴロである。

その自負の下、クーゲルシュライバーは余裕を持ってエントマの様子を観察した。

「……」

(あ、あれえ？反応がないぞおかしいな!?)

エントマはピクリとも動かなかつた。

表情のない蜘蛛の顔からは彼女がなにを思っているのか窺い知ることが出来ない。

もしや、やりすぎたか!?

そう思い緊張に身を硬直させるクーゲルシュライバー。

エントマとクーゲルシュライバーがピクリとも動かず、物音一つ立っていないその横で、シクススの「いあいあ」という恍惚とした声だけが部屋の静寂へと溶け込んでいく。

どれだけ時間が経過したのだろうか?クーゲルシュライバーがそう思った時、エントマの顔に添えた右手に小刻みな振動が発生した。

(……ちっちゃい肢で叩いてるのか?)

抱き上げられたエントマは口元から生える肢でクーゲルシュライバーの指を高速で叩いていた。

クーゲルシュライバーは考える。

これは蜘蛛的に考えてどういう行為なのだろうか?

(……わ、わからん。あの凶鑑、体の構造とか色んな種類の蜘蛛の写真が載ってたけど、生態についてはさっぱり書いてなかったんだよねあ)

いまいち役に立たない凶鑑を罵倒しつつ思考をめぐらせる。

蜘蛛的にどういう行為かわからないのであれば、人間的に考えてみてはどうだろうか?

相手は蜘蛛人。半分ぐらいは人っぽい常識が通じるのではないかとクーゲルシュライバーは思ったのだ。

(添えられている指を高速で叩く……叩くということは、つまりあれか!?!この手を離せという事か!?!控えめかつ奥ゆかしいなあい!)

その考えに至ったとき、クーゲルシュライバーは敗北感に打ちひしがれた。

やはり、此処はリアルの世界。ゲーム内で鍛えた口説きスキルは通用しないのか?

些か調子にのって性急にすぎたのかもしれない。

これ以上の拒絶をされる前にと、クーゲルシュライバーはエントマを床へと降ろした。

それを待っていたようにカサカサと仮面蟲がエントマの顔めがけてよじ登っていく。

次の瞬間にエントマは何時も通りの無機質な微笑みを湛えた美少女の姿へと戻っていた。

「……さて、そろそろシクススにも普通の状態に戻って貰わねばな」
何事も無かったかのようにエントマに背を向け、クーゲルシュライバーはシクススのメイド服をまさぐって持たせておいたハンカチ型アーティファクトを取り出した。

闘技場に行っている間に洗濯したのだろう。付着していた体液が綺麗さっぱりなくなっている事を確認すると、クーゲルシュライバーはそれを使ってシクススの顔を優しく拭う。

そんなクーゲルシュライバーの後ろ姿をエントマはただ無言で見つめていた。

彼女の擬毛だけが、へにやりと力なく垂れ下がっていた。

10話

「シヤカシヤカシヤカ♪」

至高の41人の1人に創造されたかつて存在したとされる伝説の夜天の光に照らされる闘技場の観客席で、体を左右に振りながら踊り歌う人影が一つあった。

その長い袖からは幾つもの紙片、精神効果の魔法効果を発動させる符が顔を覗かしている。

「そろそろかなあー？そろそろですわあー」

手にした符が一瞬光を放ち蒼炎を上げ消失すると、その人影、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータは懐から懐中時計を取り出した。

現在ナザリツク時間23時55分。

この時間帯に來ないのであれば、もう本日の分は終了だろう。

目を動かさずに眼下の闘技場を見やると、エントマは懐中時計を慣れた手つきで元あった場所へと戻した。

そんな時、如何にも紳士然とした声がエントマの背後から聞こえてきた。

「今宵も良い月ですなエントマ様」

「あらあー！恐怖公じゃないい。まだだったのお？」

擬毛を動かし背後を振り返ったその先には王冠とマント、錫杖を身に着けた直立するゴキブリが居た。

第二階層「黒^{ブラックカプセル}棺」の領域守護者であるナザリツク五大最悪の1人、恐怖公だ。

緋のマントを翻す彼の周囲には夥しい数の眷属の姿が見える。

闘技場の構造物を侵食するかのよう^{スウォーム}に蠢く黒い闇の一団は恐怖公が持つ同族の無限召喚というスキルによって呼び出されたゴキブリの大群だ。

その数、まさに膨大。

普段彼が守る領域である黒棺に犇いている数を更に超えている。

このナザリツクにおいても多くの者が恐れを抱くだろうその光景を前に、エントマは顎に袖を寄せジュルリと舌なめずりのような音を

立てた。

その音に恐怖公とその一団が微かに身を引きつらせる。

時たま自身の守護領域に現れてはおやつ感覚で同胞をつまんでい……
く彼女の食欲は今日も旺盛なようだ。

「ご覧の通り、一日かけて用意した我輩の貢物はいささか嵩張りますゆえな。これほどまでに膨れ上がった群れを率いこの場所へと移動するとなると、通り道の皆々様方にご迷惑がかかると思いますこのような時間と相成りました」

「氣遣いご苦労様あ。もうすぐ時間だからあ、早く所定の場所に配置してねえ?」

「勿論ですとも。至高の御方をお待たせするわけにはいきませんからな」

恐怖公の指示を受け、光沢を放つ闇の塊がザツと音を立て滑るように闘技場の広間へと移動していく。

それを何時もと変わらない顔で見つめるエントマに、恐怖公が声をかけた。

「……彼らは至高の御方々に捧げる供物。つまみ食いはダメですぞ」

「ちよ、ちよつとお!いくらなんでもそんな事しないからあ!」

凶星を指されたエントマは肩を怒らせて恐怖公に抗議した。

確かに恐怖公の言うとおり、一匹ぐらい食べてもばれないだろうという考えはあった。

だがそれでも彼らが何の為に此処へ連れてこられたのかを知るエントマは決してその考えを実行に移すことは無かっただろう。

「で、ありますか。これは大変失礼を致しました。さて、そろそろ我輩は自分の領域へと戻りますぞ」

「むうー。あなたが私の事をどういう風に思っているのかすつごく気になるんですけどお……」

「それについてはまた後日ですな。今はご自身のお役目に専念なさるとよろしいでしょう」

それだけ言うと、恐怖公は滑らかかつ機敏な動きで闘技場から去っていった。

エントマは遠ざかっていく食欲をそそる匂いを多少惜しく感じながらも、今一度闘技場の広場を見下ろした。

そこには、先ほど加わった恐怖公の眷属の他に様々な種族のモンスター達が所狭しと犇っていた。

悪魔、魔獣、蟲、アンデッド e t c . . .

彼らはナザリックの者達が召喚した生贄だった。

召喚系スキルの多くは一日に使用できる回数が決まっている。

その回数がナザリック時間23時を越えて余っている者達が次々とこの闘技場にやってきては召喚した結果がこの大群なのである。

まるで統一感の無い構成ではあるが、彼らはみな整然と列をなして静止していた。

エントマの得意魔法である精神操作の影響だ。

精神作用に耐性のあるアンデッドやスライムの周りには勝手な行動を阻害するための壁として体の大きな悪魔等が配置されている。

「0時ジャストお。お時間ですわあ」

エントマはそう呟くと通信符を取り出し口元へと添えるとその場に跪いた。

偉大なる主への定時連絡である。

伝えるべき相手が眼前に居なくとも臣下の礼をとるのはエントマにとって当然の行いだった。

「ナザリック時間0時となりました。これより儀式を開始致します」

通信相手二人からの返事はすぐにやってきた。

至高なる主人二人からの言葉に擬毛を歓喜に大きく震わせると、エントマは貴賓席へと跳躍した。

数十メートルの距離を一瞬で飛び越えた先にはヴェールに覆われた高さ3メートルもある長方形のシルエットをした何か貴賓席の床に鎮座していた。

前日には存在していなかったその物体を覆うヴェールをエントマは躊躇い無く引き剥がした。

ヴェールの向うにあったのは濃い色の黒曜石で構成された塔のようなオブジェだった。

螺旋状に絡まる二つの四角錐のような形状のこのオブジェの表面にはまるで蜘蛛の巣のように見える溝が彫られており、その中央には見るだけで邪悪であると思われる狂気じみた文字が刻まれていた。

そんな邪悪ではあるが一種の神聖さを感じさせる振れた塔の前に立つエントマは自身が口と舌での奉仕を捧げる偉大なる主人より授かった呪文を唱える準備をする。命じられた司祭としての役目を果たす時が来たのだ。

深呼吸し、精神を集中するエントマは、神殿にて巨大な聖印に対し祈りを捧げる聖女をイメージさせるほどの真剣さを纏っていた。

そしてついに、神に等しき御方より賜った深淵なる力を秘めた呪文が詠い上げられた。

「ウエウエシタシタヒダリミギヒダリミギビーエー」

エントマの口がリズムカルに呪文を唱え上げると振れた塔に刻まれた文字から血のように赤い液体がにじみ出る。

そして次の瞬間。

緑色光の爆発とでも言うべき現象が闘技場を駆け抜け、そして――

哀れな犠牲者達の魂を恐怖と戦慄で覆い尽くした。

「お、神話パワーが溜まってきたな」

今日も今日とて自室で寛ぎつつ検証を重ねていたクーゲルシユライバーが巨大な蜘蛛の巣の上でそう呟いた。

部屋の柱時計を見ればナザリック時間0時1分ジャスト。

予定通りの時間に頼んでおいた儀式が成功したのだと理解したクーゲルシユライバーは満足げに巨大な牙に自らの足を擦り付ける。

己の中に意識を向ければ260などという数が馬鹿馬鹿しくなる

ほどの神話パワーを感じる。

ユグドラシルではコレほどまでに神話パワーを貯めるのはかなりの重労働だった。

それが今では一瞬である。

それもクーゲルシュライバー自身が一々行動する事無く部下達の働きで半自動的に神話パワーが手に入るのだ。

「我ながらいい方法を思いついたものだ。協力してくれたモモンガに礼をせねばならんな」

クーゲルシュライバーが考え付き、モモンガに協力を求め、エントマに実行させた儀式。

それは<恐怖の印形>という魔法による間接的な恐怖効果付与を行う事によって神話パワーを得ようというものだ。

<恐怖の印形>。

それは魔法による罫と呼ばれるタイプの魔法である。

この魔法は強大な力を持つルーンをオブジェクト等に刻み込む事が出来る。そして術者が指定したトリガーとなる行動が行われるとそのルーンに込められた魔法効果が広範囲に渡って発揮されるのだ。

<恐怖の印形>によって刻まれるルーンの魔法効果は当然「恐怖」であり、付与される症状は「恐慌状態」である。

だが、クーゲルシュライバーのパッシブスキルによって強化されたこの魔法は範囲内に居る存在を恐怖作用最上位の「戦慄状態」にする事が可能となっている。

モモンガに協力を求めたのはこの魔法を刻む事が出来て、それでいて見た目がよいオブジェクトをクーゲルシュライバーが用意できなかったのが原因だった。

事情を聞いたモモンガは快く、そして実にあっさりとクリエイト系魔法によって見るも立派な黒曜石のオブジェクトを創造してくれた。

その上<恐怖の印形>の魔法に<永続化>を付与してくれた。

コレにより本来一回発動すると力を失ってしまう<恐怖の印形>は発動後10分のクールタイムの後、再び使用できる状態へと戻るようになったのである。

そうして出来上がった恐怖を振りまくオブジェはナザリック第六階層の闘技場へと設置された。

そして一日の終わりにナザリックのシモベ達が持つ召喚スキルの余剰を使い召喚された低レベルモンスター達を闘技場へ集め、オブジェに秘められた魔法を発動させる。

すると、オブジェに込められた魔法はクーゲルシュライバーのものである為、発動させたのが別人であっても恐怖を喰らうものゝ条件……すなわち「自身が恐怖効果を付与したクリーチャーのレベルに応じた神話パワーを得る」を満たすことが出来るのだ。

「この後はモモンガによる経験値の搾取か。あっちも自動化できればいいのだが」

戦慄状態になり身動き一つ取れなくなったモンスター達は世界級アイテム「無欲と強欲」を装備したモモンガによって一匹残らず滅ぼされ、超位魔法を使用する際の経験値として貯蓄される。

今頃闘技場ではモモンガが魔法の検証もかねて捧げられた生贄達を処理している所だろう。

まだ検証が必要な魔法が残っている現在、それでもいいのかもしれないが何時かはこの作業を別の誰かに任せられるべきかもしれない。

なにせこの生贄の儀式はこれから毎日行われるのだから。
(それに関してはまあ追々でいいか。それよりも今はこっちの作業が大事だ)

心の中で呟いたなんてこと無いはずの言葉。

それにどこか引つかかるものを感じたものの、クーゲルシュライバーは次の検証の準備に入る。

糸の扱いに関しては数時間をかけて検証及び練習をして問題がない事を確認している。

ただ、より多くの検証すべき事項、ゲーム内ではなかった応用が出来るような要素を発見してしまったので引き続き研究が必要と思われる。

しかしそれは今すべき事ではない。一定の成果が得られたのだから当初の予定通り次の検証に入るべきだ。

そう自分に言い聞かせて糸の研究に没頭したくなる気持ちが多大な精神力を消費し抑え付けると、クーゲルシュライバーは半ば専属メイドと化しているシクススに特殊技術スキルを使用して声をかけた。

「シクスス。私の下へ」

クーゲルシュライバーの部屋に緊張が走った。

ムービースクロールの検証の後にコキュートスが連れてきた護衛用のシモベであるエイトエッジ・アサシン達が控えている天井からも微かな物音が発せられる。

隠密を得意とする彼らがこうもあからさまな気配を発するのはそれだけでなにか異常な事態が起こったという事を証明していた。

「あつ、えつと、か、かしこまりました？」

声をかけられたシクスス本人ですら困惑していた。

だがそれも仕方がない事だろう。

なにせ自分呼び付けた声は、この部屋の主クーゲルシュライバーのものでは無かったのだから。

「フフフフ。混乱しているようだなシクスス？そんなにもこの声は変か？」

「い、いいえ！とても美しいお声だと思います！」

間違いない。

クーゲルシュライバー以外のこの部屋にいる存在はこの、少女のような美しいソプラノの声の持ち主がこの部屋の主である事を確信した。

驚愕に支配される部屋の空気が愉快で、クーゲルシュライバーは蜘蛛の巣の上で未だに慣れない動きで毛づくろいをしつつ笑い声を上げた。

悪戯が成功したような声であつても、聞く者の耳を孕ますかのような妖艶さがそこにはあつた。

天井の気配がより一層ざわめく。

（職業くプレデターくの微妙スキルだけど、取っておいてよかった！これなら女性キャラを演じるときにキモくならないし女性ヴォーカ

ルの曲も歌い放題だ！)

「そうかそうか美しいか。世辞でもそう言われるとこういう声を出すのも偶には悪くないように思えるな」

「お世辞ではございませぬ！とても艶やかで美しく、可憐で……魅力に溢れておいでです！」

少し大きな声を出したシクススに軽く驚きつつもクーゲルシユライバーは楽しくて楽しくてしようがなかった。

もとより自分とは違うキャラクターになる事が楽しくてTRPGやユグドラシルをやっていたような人間だった。

だからこうして特殊技術「声真似」を使い自身が想像する最も美しい声を模倣し、そしてそれを褒められるのはクーゲルシユライバーにとって至上の愉悦に他ならない。

故に、興が乗ってしまった。

何時もとは違うロールプレイに火がついてしまったのだ。

「魅力に溢れた……か。女であるシクススから言われてもどう受け取ってよいものかわからんな」

より女性的に演技の質を変えつつ、クーゲルシユライバーは擬頭を天井へと向けた。

そんな彼は毛づくろいの真つ最中であり、前脚の先端は牙の先端と擦れあい、豊かな黒い体毛が唾液でテラテラと光沢を放っている。

「エイトエッジ・アサシン。お前達はどう思う？蜘蛛のモンスターかつ、雄であるお前達の意見を聞いてみたい」

持ち場である天井を離れエイトエッジ・アサシン達はクーゲルシユライバーの張る巣の前で跪いていた。

誰もが皆、体を硬直させ高性能な目の視界に偉大なる主の姿が入らぬように苦心しながら思考に没頭していた。

考える内容は当然先ほど投げられた「蜘蛛であり雄であるお前達にとって私は魅力的かどうか？」という問いに如何に答えるべきか、という事である。

魅力的かどうかと問われれば、魅力的でないわけがない。

主の大きく膨らんだ腹部は、護衛対象であり崇め奉るべき至高の方であるという事を肝に銘じていても無視することが出来ないほどの性的魅力に溢れている。

あまり食事を取らないという事だが、もしも食事をしたとしたらその魅力は更に膨れ上がる事は間違いないだろう。

長く太い肢など動かさなくとも垂涎物なのに、それが一本一本動く様はエロティズムの極地ともいえる。

先ほど見せた、それら美しい肢をその巨大かつ逞しい缺角に隠された口の下顎より分泌される唾液を塗りつけ毛づくろいする姿など、滅私奉公をモットーとするエイトエツジ・アサシン達であっても内から湧き上がる衝動を隠し通す事など不可能なレベルの色気だったのだ。

いや、そのお色気シーンは未だに続いている。だからこそエイトエツジ・アサシン達は不敬とは思いつつも視線をクーゲルシュライバーに向けることが出来ないでいる。

物理的な圧力を錯覚するほどの魅力ではあったが、それを素直に口にするのも護衛役である彼らには躊躇われた。

もしも素直に自身が感じている主人の放つ魅力について話せば、不敬にも懸想していると見なされかねない。

そうなれば護衛を外される可能性とてあるだろう。

彼らは皆コキュートスに選抜された精鋭中の精鋭である。

もしもそんな彼らが守るべき対象に懸想している事を理由に護衛役から外されでもしたら敬愛する上司であるコキュートスの顔に泥を塗ることになる。

そしてクーゲルシュライバーに対して、この短期間にも拘らず懸想してしまっているのは事実だ。そして彼らにとっての初恋でもあった。

未だ雌の体を知らない雄にとってクーゲルシュライバーは余りにも魅力的過ぎた。

だからこそ、一度口を開いてしまえば胸に秘めた恋心が露見しかねない。

それがエイトエッジ・アサシン達がクーゲルシュライバーの問いに即答できない理由だった。

「どうした？ 私の命令が聞こえなかったわけではあるまい。はやく答えよ」

（今までは男性的なお声だった故、男性として見ることでなんとか堪えられたものの……斯様な美声でお声をかけられては、最早女性としてしか見ることが出来ぬう！）

コキュートスに派遣されてきたエイトエッジアサシン達の中でリーダー格の者が色々と堪えきれずその顔を上げた。

瞬間、人間のものとは構造が違う心臓が大きく脈動する。

顔を上げた先には、中空に張られた巢の中心に居座るクーゲルシュライバーの姿があつたからだ。

角度的に腹部と頭胸部の境界付近に存在する小さな切れ込みのような、もしくは蓋のような部位までもが見えてしまっている。

求愛するなら性成熟する一歩手前の少女で、未成熟な内から困っておきたいという極一般的性的嗜好を持つ彼ですら一瞬で虜にしてしまう程の圧倒的美魔女オーラ。

成熟した女性の妖艶さと少女のような無垢な美しさと若々しさが同居したこの世のものとは思えぬ色気に、血反吐を吐くかのような呻き声があがる。

その声に微かに首を傾げる主の姿を見て、エイトエッジアサシンはまるで魅了の魔法にでもかかったようだと戦慄しながらも覚悟を決めて口を開いた。

そして彼は辛うじて普通の声を出すことに成功した。

「はっ！ 女性としてこの上なく魅力的だと言わざるを得ません。确实な死を予感していようと求愛する事を止められぬ者として居るほどでしょう」

「ふうん。确实な死とかはよくわからないが……そうか、そんなにも魅力的か。求愛したいほどに？」

「ははっ！ その通りでございます」

言ってしまった。

明らかに余分な事を口走ってしまったが、彼は立派に主人からの問いに答えることに成功した。

事態を静観していた他のエイトエッジ・アサシン達の安堵と称賛の気配を背中に感じつつ、少なくとも彼らも自分の言葉を支持している事を理解してほっと一息つく。

主からの反応も悪くはなさそうだ。これでこの降って湧いた危機を乗りこることができた。

そう判断したりーダーが微かに肩の力を抜いたその時、クーゲルシュライバーが極自然な、なんてことない事を質問するかのよう口を開いた。

「ではお前は怎なのだ？この私に対して求愛したいという気持ちはないのか？」

一瞬何を言われたのか理解できなかった彼は、数秒の時間を費やしクーゲルシュライバーの言葉を完璧に理解し、そしてまたしても血反吐を吐くような呻き声を上げる事となった。

「やはりか」

特殊技術^{スキ}声真似を使用した女性の声でクーゲルシュライバーは眼前の光景を眺めてそう言った。

彼の眼前ではエイトエッジ・アサシンの一体がリズムカルに武器である肢を震わせている。

その様子は良く言えば「剣の舞」、悪く言えば「じたばた暴れてるだけ」だ。

クーゲルシュライバーにとっては熱意のようなものは感じられるが、ただそれだけである。

心中に湧き上がってくるものはないし、体に性的な興奮を感じたりもしない。

（こいつの求愛が下手糞なのか、種族が違うから通用しないのか、はたまた俺にはそういう機能がないのか……さて、どれだろうか？）

そこまで考えてクーゲルシュライバーは馬鹿馬鹿しいと思考を打ち切った。

元々気まぐれでやらせている事だ。

少なくともエイトエッジ・アサシンの雄による求愛というものがどのようなものなのか見ただけでも未だ乏しい蜘蛛知識の足しにはなっただろう。

そう思いクーゲルシュライバーは求愛を止めさせようとしてエイトエッジ・アサシンに意識を向けた。

そして、そこで肢を蟹股に広げ両腕を上げて小刻みに振動しているエイトエッジ・アサシンの姿を見た。

「プフッ」

クーゲルシュライバーから、小さくない音量の笑いが漏れた。

まずい、とは思いつつもその小さな笑いは精神抑制されることなくふつつつと湧き上がってくる。

どうやら求愛をしていた者も含めるエイトエッジ・アサシン達全員にもクーゲルシュライバーの笑い声は聞こえたのだろう。

全身を硬直させ緊張の面持ちでクーゲルシュライバーの様子を窺っている。

特に求愛していたエイトエッジ・アサシンの緊張は凄まじいらしく、腕を振り上げた、一見間抜けなポーズで凍りついたかのように微動だにしない。

そのキチン質で覆われた顔には本来表情などないのに、今この時だけはまるで絶望しているかのような悲痛な感情が透けて見えるようだった。

それを見て一生懸命命令に従ってくれているシモベに対して、失礼な態度だったとクーゲルシュライバーは反省する。

残念な事にまったく理解できないが、彼にとってはアレが渾身の決めポーズだったのかもしれない。

それを笑うのは余りにもむごい仕打ちというものだ。

「ああ許せ。なに、必死で動き回るお前が微笑ましくてな」

別に滑稽だから笑ったのではない。そう伝えたつもりなのだがエイトエツジ・アサシン達はまだ固まったままだ。

どことなく気まずい雰囲気や部屋に満ちていくのを感じ、クーゲルシュライバーは表に出しはしないが焦り始める。

そして唐突に面倒になった。

なぜ雄の心情を思いやってあれこれフォローしてやろうとか考えているのだろうか？

そういう繊細な心遣いは胸のときめくような女性にするべきだろう。なんとも馬鹿馬鹿しい。

クーゲルシュライバーは胸中に発生したそんな思いに従って、演技を忘れたやや投げやりな動作で擬腕を振った。

蠅を追い払うかのようなそのジェスチャーが意味するところはすなわち「あっちいけ」である。

「もうよい。本来の仕事に戻れ」

クーゲルシュライバーがそう言うと同時に、求愛をやらされていたエイトエツジ・アサシンがその場に崩れ落ちた。

何事かと目を見張るクーゲルシュライバーに気付いた他のエイトエツジ・アサシン達が、やけに小さく見える彼らのリーダーを抱き起こすと一糸乱れぬ一礼をした後に揃って天井へと戻っていった。

お前はよく頑張った。届かぬのはわかっていた事だろう。そう気を落すな。後生だから放っておいてくれ。ほかに身の丈の合った女性……。もうやめてくれえ！

そんな囁くような声が天井から聞こえてきたが、クーゲルシュライバーは努めてそれを無視した。

自分のしてしまった事から目を逸らしたかったのかもしれない。

「まあ声真似が上手く作動するのはわかったしな。さて、次の検証は……」

クーゲルシュライバーの夜更かしはまだまだ始まったばかりだ。

「祭りか……?」

「ん?」

クーゲルシュライバーはナザリック地下大墳墓第九階層、モモンガの私室に居た。

ナザリックの外で太陽が昇り始めたところに検証を一端終了させ儀式から帰還したエントマに——エイトエッジ・アサシン達が天井に控えているにも拘らず——毛づくろいをさせていたところ、モモンガから面白いアイテムを引っ張り出してきたから遊びに来ないかとの伝言が送られてきたのだ。

モモンガの招待に応じて部屋に来たものの、肝心の面白いアイテム、離れた場所の映像を映し出すマジックアイテムである「ミラー・オブ・リモートビューイング遠隔視の鏡」の操作方法が分からず二人で四苦八苦する羽目になってしまった。

散々に時間をかけて操作法がわかったのはつい数分前だ。

起動キーとなる動作があまりにも単純だった為に激しい徒労感にやる気をそがれたクーゲルシュライバーは、傍に仕えていたセバスガ差し出してきた良い香りのするお茶を器用に啜りながらモモンガの後ろで寛いでいた。

そんな折に聞こえてきたモモンガの声にクーゲルシュライバーは遠隔視の鏡を覗き込んだ。

鏡の中では中世の騎士のような姿をした男達が如何にもファンタジー世界の農村らしい場所で村人達を虐殺していた。

馬上から背中を切りつけられた男が地面へと倒れこむとそれを別の騎兵の馬が踏み潰し、哀れな犠牲者をグズグズのミンチへと変貌させていく。

またある騎士は、孫だろう少年を逃がそうと老体に鞭打って走る老婆の髪の毛を掴み、何の躊躇も無くその首を刎ね飛ばす。嘔き上がる鮮血に老婆が守ろうとした少年が絶望の表情を浮かべると、次の瞬間

には彼の胸には剣が突き立っていた。首の無い老婆の死体に覆いかぶさるように少年の死体が力なく倒れ伏す。

そんな酸鼻極まる光景が村の彼方此方で発生している。

後から見る者の憎悪を煽るような無残な方法で虐殺を行うその様子は、まさに人の世に地獄ともいえるだろう。

その光景を見て、クーゲルシュライバーは感動していた。

(なんて悲劇的なんだ。あのお婆さん、お孫さんを守りたかっただろうに髪を掴まれて……痛かっただろうな。それでも首を切り離される寸前までお孫さんになにか声をかけていた。なんという愛情。こういうのに俺弱いんだよなあ。孫の方も胸を刺されて倒れた後も、小さくなにか呟いていた。あれ、おばあちゃん……とか呟いてたらホント泣けるよなあ)

それは上等な映画のワンシーンを鑑賞している時に感じるようなものだった。

悲劇を鑑賞する者が抱くのに似た感動と愉悦がクーゲルシュライバーの心を躍らせる。

そこには、実際に存在する人間が無残に殺された事に対する恐怖や嫌悪感、忌避感は一切無かった。

そして同情も慈悲もなかった。

完全に想像でしかないが、それでも彼らの心情を思い浮かべ、それを泣けるとまで賞したというのに。

「クーゲルシュライバー、どう思う？」

同じ映像を見てそう問いかけてくるモモンガの声にも動揺はない。

見つめてくる骸骨の顔に同意を求めているかのような雰囲気を感じたクーゲルシュライバーは自身の感性の変貌を自覚しつつも穏やかに答えた。

「どうやら虐殺が行われているようだな。悲劇的な村だ」

「……それだけか？」

「それだけだとも、我が友モモンガよ」

「……そうか。まあ確かに、そうだな」

なぜ村が襲われているのか？どっちが正義でどっちが悪なのか？

なぜ圧倒的強者が無力な者達を無残に殺しまわるのか？

そんな疑問が浮かんでは消えていく。

ユグドラシルにて一世を風靡した異形種狩りの苦い記憶もまた蘇えつつくる。

突然降りかかる理不尽に蹂躪される悲しみを思い出す。

きっと村人達はその時以上の悲しみと苦痛を味わっているに違いない。なにせ此処はゲームの世界ではないのだから。

鎧を着た騎士達の行為は人道的観点から見ればまさに外道と評される悪逆非道に他ならない。

——だがそれらの考えのどれもがクーゲルシュライバーに何か行動を起こさせる理由にはなり得ない。

(同族意識がなくなればこんなものか)

冷え切った残酷な考えに、自分が人間とは違う存在になり果てた事をクーゲルシュライバーは強く感じた。

その事を悲しく思うことはない。

なぜならば似たような考えを、目の前の友人も持っているだろう事を確信しているからだ。

同じ考えの仲間がいる。

だからクーゲルシュライバーは悲しくななかなかった。

「それで、どうされますか？」

クーゲルシュライバーとモモンガに対してセバスが問いかけてくる。

どうするもなにも、と酷薄な笑いが出そうになるクーゲルシュライバーに先んじてモモンガが彼に答えた。

「見捨てる。助けに行く理由がないからな」

全く以てその通りだとクーゲルシュライバーは擬頭を縦に動かしてモモンガに同意した。

それを受けて忠実な執事であるセバスは軽く頭を下げると無言で身を引いた。

それでいい。

情報が足りない今、無闇に現地の事情に首を突っ込むのは避けるべ

きだ。

それをすっかり理解している仲間の中に心の中で称賛を送ると、クーゲルシュライバーは別の所を見ようとモモンガに声をかけようとして――やめた。

「……」

モモンガがセバスを見つめていた。

いや、正確にはその背後を、だ。

クーゲルシュライバーもつられてセバスとその背後を見つめてみるが、特に何かが見えるわけではない。

一体どうしたのだろうか？

「困っている人を助けるのは当たり前、か……」

「え、モモンガさん？」

あまりにも唐突に思いがけない言葉が飛び出し、クーゲルシュライバーは演技することを忘れモモンガを敬称付きで呼んでしまった。

一体なにがどうしてそんな言葉が出てきたのか？

クーゲルシュライバーは頭を捻るが答えは出てこない。

「たっち・みーの決めゼリフだよ。懐かしくは無いか？」

「ああ、そういわれれば。確かにその言葉は彼の十八番だった」

言われてみれば思い出すことの出来る友人の口癖めいた決めゼリフ。

言われなければ思い出せないほどに風化しているという事実と、未だに覚え続けているモモンガに軽く恐れを抱きながらもクーゲルシュライバーはなぜ此処でその言葉が出てくるのかを考えた。

もしかして、ただそれだけの理由でこの村を助けに行くつもりなのだろうか？

TRPGのセッションにおいても、自分の利にならないのであれば野盗に襲われている村を見捨てるようなプレイをしていたクーゲルシュライバーとしては今一気乗りしない。

野盗が略奪の限りを尽くし、村娘を陵辱するなど隙を見せたところで背後から奇襲して一網打尽にする。その上で村娘をやるなり殺るなりして目撃者を消し、賊共が纏めた財宝を掻っ攫う。1人ぐらい賊

を生かしておいて本拠地を吐かせ、そこにある財宝を頂くのもいいかもしれない。

クーゲルシュライバーはできればそういうリスクの少ない行動を取りたいのだ。

そんなクーゲルシュライバーの雰囲気を感じたのだろう、モモンガが十分な冷静さを感じさせる声で話し始める。

「無論それだけが理由ではないさ。そろそろ私達が出来た事の確認も終わってきたことだし、ここらで一つこの世界での自分の戦闘能力を調べてみないかと思ってるね」

「なるほど。確かにそれは、いつかはやらなければならぬ事だ」

クーゲルシュライバーはモモンガの言葉に十分なメリツトを感じていた。

様々な不安要素はあるが、あの騎士達は主に近接武器を扱っているようだし魔法を使う様子もない。

それであれば此方の攻撃がもしも通じなかったとしてもモモンガの魔法で逃げることは容易だろう。

また、騎士達がある程度訓練されているように見えるのも実験台として非常に都合がいい。

ただの村人相手ではこの世界の戦闘職が持つ戦闘力を調べる事は出来ないからだ。

「神話パワーはどれだけ使える？」

「悪いが正確な数は把握できていない。だが、極振りすれば1000レベル突破も出来るだろう」

「であれば、奴らが想像以上の力を持っていたとしても対処はできるか」

恐らくは可能だろうとクーゲルシュライバーは判断する。

初めてこの世界で＜恐怖を喰らうもの＞のバフ効果を発動させた時、どれほどの影響を与える事が出来るかをテストした。

その結果100レベル相当の筋力と素早さで繰り出されたクーゲルシュライバーの通常攻撃は用意された巨大な岩を一瞬で砂へと変えた。

村を襲う騎士達の攻撃にはそこまでの威力はないように見える。

ならば物理と魔法防御力を500レベルぐらいに上昇させれば壁役としてモモンガを守ることぐらいはできるだろうし、物理攻撃力を強化すれば相手の防御力が優れていてもダメージを与えるぐらいは可能だろう。

それに相手は鎧を装備している。胴を守る装備が鎧であるならばそれは自分にとってカモでしかない。

「ああ。対処可能だ」

「で、あればだよ。我が友クーゲルシュユライバー」

モモンガが杖を取り立ち上がる。豪華なローブとマントが翻り、その姿はまさに魔王のようだ。

「どうだ？行かないか」

モモンガは不敵に笑いながら転移^{ゲート}門の魔法を起動した。

11話

ある森の中で少女とそれより若い少女、姉のエンリ・エモットと妹のネム・エモットは今まさに命を散らさんとしていた。

彼女の村を襲った騎士達は一切の慈悲もなく、ただ一方的に村人達を殺害していった。

エンリとネムの姉妹は両親の捨て身の努力——犠牲——の甲斐あつてどうにかこの村はずれにあるトブの大森林へと逃げる事が出来た。

だが彼女達の努力をあざ笑うように、騎士が白刃を太陽に煌かせ追撃してくる。

足手まといと断言出来る幼い妹を連れだしたエンリは、類まれなる家族愛を發揮しネムのその小さな手を決して離しはしなかった。

だからネムは今も生きています。そしてだからこそ今エモット姉妹は二人して死の運命に直面していたのだった。

エンリの背中には切り傷があり、そこから溢れる血が彼女の衣服にどす黒い染みを作っている。

森の入り口まで来たところで、限界まで酷使された足が痙攣を起こしてしまつたネムが転倒してしまつた。

その隙に距離を詰めた騎士にエンリは背中を切られてしまつたのだ。

最早万事休す。

傷を負つたエンリはもう走つて騎士から逃げおおせることは出来ない。

騎士は進退窮まつた姉妹を前に手に持った剣を上段へと大きく振りかぶつた。

一撃で命を奪うことがせめてもの慈悲であると言わんばかりに。

そして致死の刃が振り下ろされる。

頭上から風を切つて襲い来る刃を見つめ、エンリは確実な死を理解した。

死の間際の極限の集中力だろうか？ほんの刹那の時間にエンリは

多くの事を考え、感じていた。

妹を助ける手段。理不尽への怒り。親や隣人を奪われた悲しみと憎悪。死と痛みへの恐怖。

それらが複雑に混ざり合った意識の濁流を胸に秘めつつも、エンリは微笑んだ。

殉教者の如きその笑みは、たった一つの己の命を愛する妹の逃げる時間を稼ぐ為に使うと決めた死に際の微笑みだった。

自らの体で剣を受け止め、抜けなくするという男の戦士であろうと実行しかねる最後の手段。

それをやるとエンリは覚悟を決めたのだ。

それでも襲い来るであろう死と痛みは恐ろしい。

エンリは目を閉じ、漆黒の世界の中で来るであろう痛みに覚悟を決め――。

右肩から筋肉と骨を断ち切りながら肺へと到達した刃の齎す激痛に絶叫を上げた。

「ああああああッ!!」

痛い！痛い！痛い！

死ぬ。死んでしまう。どうしよう私死んじゃうんだ！

ただの村娘に過ぎないエンリが覚悟を決めたところでどうにかなるような痛みではなかった。

あまりの激痛に瞑っていた双眼を見開き、涙を流して叫ぶエンリ。

その断末魔の叫びは右肺が切り裂かれている事と、同じく右肺からあふれ出す血液によって一瞬の内に泡だった異音へと変化する。

呼吸も出来ず痛みで朦朧とする意識の中、それでもエンリは自身の

最後の策を実行していた。

それはもしかするとあまりの痛みに死ぬまでの僅かな間、体が強張ってしまっただけなのかもしれない。

だが、なんにせよエンリは自身の右胸に埋没する剣に圧力をかけ、体から抜けなくする事に成功していた。

「ぬっ……いつめ！」

抜けない剣を騎士が力づくで引き抜こうとする。

ノコギリのように押しつけては引かれる剣が傷を更に広げエンリに苦痛を与えていく。

泡立つ音が激しくなる。

だがエンリは剣を離さない。

むしろ自らの体に引き寄せるように、剣を震える両手で抱きしめる。

痛みを堪えるように力一杯刃を握り締めていた手からは指が何本か地面へ落ちていく。

ボトボトと落ちていく指をエンリは、もう妹の頭を撫でることも趣味兼生業の農作業も二度と出来なくなってしまった寂しさを感じつつ見送った。

「お姉ちゃん！」

ネムの悲痛な声にエンリは自身の心中に怒りが湧くのを感じた。

自分がこんな痛い思いをしているのはネムに逃げる時間を僅かでも与えてやる為だ。

それなのにどうして逃げないのか。

お願いだから早く逃げて欲しい。どこか遠くに、騎士の視界の届かないどこかへ逃げてくれたら、こんな痛いことはすぐに止めて死んでしまえるのに。

そんな八つ当たりにも似た怒りを感じながらも、エンリは全身に力を込めつつも痛みを堪えて息を一口だけ吸った。

すぐさま襲い来る激痛とこみ上げる鉄臭い液体にむせ返るも、エンリは出来るだけ優しい声で、聞き取りやすいように妹へ最期の言葉を紡いだ。

「お願い、逃げて」

それはどんな奇跡だろうか？

エンリの言葉は彼女の口元をべったりと覆う血泡に邪魔されることもなく、まるで普段どおりの、何時もの優しい彼女とやら変わらない声でネムへと届けられた。

その声に、ネムはもう遙か過去の出来事に思える日常を思い出す。そして眼前に広がるあまりにも残酷な現実にも大粒の涙を流した。

「このクソアマー！離せ！」

殆ど死体のような小娘に剣を取られた事に激昂した騎士が鋼鉄のガントレットで覆われた拳を繰り返しエンリの顔面に叩き付ける。

鮮血と共に鼻が折れ、前歯が何本か吹き飛ぶも、エンリは剣を離さない。

村の中では器量よしで通っていた整った顔は今や見る影もない。

その姿に、ネムは痙攣する足の事も忘れ転がるように駆け出した。

「う、ううう、うわああああああ!!」

それはエンリが自分の為に身を挺している事を悟ったからかもしれないし、ただ単に姉の無残な姿を見て次の瞬間あなるのは自分なのだと恐怖したからかもしれない。

しかしどんな理由であろうと、本来は動くことなど出来ないはずのネムは自身の限界を超えて走り出せたのだった。

（お父さん！お母さん！お姉ちゃん！）

何度も躓いてはもがくように立ち上がり、ネムは逃げる。

涙で滲んだ視界は森の光景をネムに教えることはなく、朝までは自分の隣で笑っていた家族の幻影を映すばかりである。

（助けて！神様助けて！助けて！助けて！助けて！助けてください！）

最早ネムを守ってくれる家族は誰も居なかった。

父も、母も、姉も、みんな居なくなつた。そして次は自分の番だ。きつと惨たらしく殺されるにちがいない。きつとすごく痛いに違いない。

ネムはそんなのは嫌だった。あまりにも恐ろしすぎた。だからだろう。

一体どういう存在なのか理解していない、ただ全能の力を以て人間を救うという曖昧なイメージしか持っていない「神」に対してネムは助けを求めた。

「どうか、神様っ！私達を助けてください！なんでもしますからあー！」
祈り念じるだけでは届かないとばかりに、呼吸が乱れる事も厭わず神への懇願を口にするネム。

「あぐっ！」

限界を超えて動いている時に言葉を発した影響はすぐさま転倒という形でネムの幼い体を打ち据える。

だがその衝撃は思ったよりも小さい。

散々転がりまわり嫌という程に味わった硬く、小石が散乱する地面の感触ではなかった。

柔らかい羽毛の中に沈み込むような感触。

これは一体なんなのだろう？

そう疑問に思いつつも、今すべきことは何かを瞬時に思い出す。

今はとにかく逃げるのが先だ。力一杯逃げなければならぬ。そうでなければ自分の為に命をかけてくれた家族に合わす顔がない。

頭を振って涙を振り払い必死の思いで身を起こし、より遠くへ逃げようとするネム。

その全身に、突如衝撃が走った。

「……ほう。なんでもするのか？」

頭上からかけられた声に、ネムは中腰の状態でまるで凍りついたかのように動きを止めた。

ネムが自発的に動きを止めたのではない。

強制的に動きを止められたのだ。

唐突に襲い掛かってきた、先ほどまで感じていた死の恐怖が霞むほどの超絶的な恐怖に。

瞬きも、呼吸も出来ない状態で、ああなんという事だろうか。幼いネムは目にしてしまった。

コロナのように緑色のオーラを放つ巨大な蜘蛛の姿を。

深淵の闇より尚深い、この世全ての悪意を凝縮したかのような漆黒

の神の姿を！

「いいだろう。お前の願いを叶えてやろう」

「あ、あああ……あが……」

人類が、いや、この世界に生きるありとあらゆる生命体が決して知ってはいけない宇宙的恐怖の具現を目の当たりにしてしまった哀れなネムの矮小な精神は一瞬にして粉碎され、そして――

「キイエアアアアアアア!!」

ネムは恒久的な狂気に陥った。

「キイエアアアアアアア!!」

(あちやー……やっちゃったい)

セバスがモモンガの指示をアルベドに伝える為に退出し、クーゲルシュライバーただ一人となったモモンガの自室。

そこでクーゲルシュライバーはカメレオンのように左右の目を別方向へギョロギョロと回しつつ涎を垂らし奇声を上げ失禁する少女を見下ろしながら自らの所業を悔いていた。

脱力感と共に起動させていた全ての常時発動型特殊技術をオフにする。

(幾らモモンガさんと入れ違いで転移門から転がり込んできたからと言って、こんな子供、しかも救助対象にビビるとか流石に恥ずかしいぞ)

ゲートを開きドヤ顔で決め台詞っぽい事を言い放ったモモンガが鏡に映しだされるもう手遅れな光景に焦って単身転移した瞬間、入れ替わりにこの小汚い少女が転がり込んできた。

すわ敵襲かと思いい戦闘態勢を取ったものの、落ち着いて見てみれば鏡に映っていた姉妹の片割れである。

どんな確率なのだろうか、モモンガの開いた転移門ゲートの位置がちように彼女が逃げるルート上にあつたようだ。

そして更にどんな偶然なのか、すれ違うモモンガに衝突することもなくこのナザリック地下大墳墓第九階層への転移に成功したという事らしい。

そんな実に運の良い彼女が何故こうも錯乱しているのかといえは、それは自身が放っている＜恐怖のオーラ＞の影響に他ならない。

このレベルの恐怖のオーラは範囲内の対象を戦慄状態にするだけではなく、＜インサニティ／狂気＞と同じ効果を与える。

＜インサニティ／狂気＞はユグドラシルでは対象を通常の方法では解除できない混乱状態にするという魔法だった。

魔法の説明テキストには「相手を恒久的狂気に陥れる魔法」とも書かれていた記憶がクーゲルシュライバーにはある。

どう考えても眼前の少女の見事な狂いっぷりはこれが原因だった。

『クーゲルシュライバーさん。さつき私とすれ違いに村娘が1人そっちに行きましたよね？』

「エヘッ！アベへへッ！ギャババハハへへへ！」

狂気の赴くまま服を脱ぎ出す少女を生暖かい目で見守りつつ、さあどうするかと考えるクーゲルシュライバーにモモンガからの＜伝言メッセージ＞が飛び込んでくる。

その声には全く焦りの色はなく、余裕と冷静さに満ちていた。

単身乗り込んだモモンガの身を案じていたクーゲルシュライバーはほっと一息安堵の息をつく。

『ええ。ちよつと取り乱しています但し命に別状はないようです。モモンガさんの方は大丈夫ですか？』

「ギャアアアア!!ヒイアアアア!アイイイイイ!!」

『大丈夫です。彼女達を襲っていた騎士は私達と比べて非常に弱くまったく問題になりませんでした』

朗報だ。

一体どの程度の弱さなのか詳しく知りたいところだが、あの慎重なモモンガが「非常に弱い」とまで言うのだから、想定としては30レ

ベル程度の雑魚と思っても良いだろう。

クーゲルシュライバーは自分自身の両目を抉り取ろうとする全裸の少女を拘束しながら牙をガチリと鳴らし喜んだ。

『それは結構な事です。あ、姉っぽい方は大丈夫ですか？なんか殆ど死んでるような感じでしたけど』

『大丈夫です。死ぬ一歩手前でポジションが間に合ったみたいで……まあすこし面倒な事になってるんですけど』

『面倒な事？』

『いえ、御気になさらずに。とにかく此方は大丈夫ですよ』

『そうですか……ではこっちに来ている村娘を少し落ち着かせたら其方に向かいますんで、少し待っていてください』

「死にたい殺してお願いです死なないとなんです殺すんです頑張らないと一生懸命死にますからだから酷い事しないでもういや怖いの助けて死にたくないだから死なないと」

『ええ。それでは』

モモンガとの＜伝言＞^{メッセージ}が切れる。

とりあえずは焦る必要はなくなったらしい。クーゲルシュライバーはそう判断すると口の端に泡を纏わりつかせ意味のない言葉をうわ言の如く呟く少女をしげしげと眺めた。

年の頃は10歳ほどだろうか。全裸であるが故にその平坦な肉体が上から下までよく観察でき、年齢の推察を容易にしていた。

（ふうむ。顔は……子供の頃はだいたい可愛く見えるもんだが、それでも結構良い感じなのかな。発狂してるから台無しだけど）

当然のように性的欲求が湧き起こらない事に安堵しながら、手足にヤスリがけされたかのような大きな擦り傷があるだけで命に関わる重傷をおっていない事を確認したクーゲルシュライバーはアイテムボックスから赤いポジションと小さな白い石像を取り出し、それらを使用した。

効果は劇的だった。

少女の手足にあった大きな擦り傷は光と共に消え、幼女特有の瑞々しく柔らかな皮膚が復活した。

そして完全に狂人のそれであった表情は、まさに憑き物が落ちたかのように歳相応な穏やかな寝顔へと変じた。

「う、うう……」

「さてと、コイツの願いは私達を助けて欲しいって事だけど……やっぱりあれか。村を救うまでが私達、だよな」

ノリで言ってしまった願いを叶えてやろう発言だったが、元々クーゲルシュライバーとモモンガは実験がてらに村を救うつもりだったので全く問題はない。

余計なお世話だと言われる筋合いが無くなったのだから寧ろやりやすくなったと言える。

「で、あるなら完璧に助けてあげようじゃないか。まずはコイツの守りを固めてやろうかね」

敵の強さは大した事無く、数もそれほど多いわけではないので村を襲う騎士達を殲滅するのは難しい仕事ではない。

しかし、なにかの拍子で助けを求めてきたこの少女が命を落すような事があれば後味が悪いことこの上ないだろう。

そう考えたクーゲルシュライバーは暫し思考した後、擬腕に持った少女の裸体を床へと横たえた。

水気を含んだ絨毯が裸体を優しく受け止めたのを見ると、クーゲルシュライバーはうつ伏せになった少女の背中に覆いかぶさる。

歳相応な小さな背中を八つの目で確認すると、肢を小刻みに動かし自身の位置を調整する。

「とりあえず護衛だよな」

そう言うときクーゲルシュライバーは特殊技術を発動させる。

その瞬間、クーゲルシュライバーの巨大な腹部が更に大きく膨れ上がった。

自分の内部に感じる確かな重みに特殊技術が正常に働いていることを確信したクーゲルシュライバーは幼い少女の背中に腹部を押し付けた。

正確には腹部と頭胸部の境界線近くに存在する切れ目にも蓋にも見える部位、外雌器を、だ。

「それドバドバー」

気の抜けるような声と共に、クーゲルシュライバーの外雌器を覆う甲殻が粘着質な音を立てて捲り上がり現れた名状しがたい器官から大量の卵が濁流の如く放出された。

1cm程の真珠のような乳白色の卵の大群が未だ意識を取り戻せずにいる少女の背中へと次々に産み落とされていく。

不思議なことに、少女の小さな背中では到底受け止めきれないだろう量の卵は彼女の柔肌に吸い付くように離れず一粒たりとも零れ落ちたりはしない。

「う、う、あ、あ……あ……」

ものの数秒で、大量の卵がうつ伏せに倒れた少女の体にまるで雪のように積もっていた。

遠くからであれば雪山で行き倒れた死体のようにも見える少女は、自身に産み付けられた卵のツブツブとした感触を感じているのか、悪夢に魘されるような呻き声を上げつつむず痒そうにその裸体を小刻みに動かしていた。

「さあ、生まれ出でよフエイズ・スパイダー・スウォーム転移蜘蛛の大群」

外雌器から伸びる銀色の糸をプツリと切って少女から離れたクーゲルシュライバーは自身が産み落とした卵の山に向かってそう呼びかけた。

するとどうだろう！ たった今産み落とされたばかりの卵が次々と孵化していくではないか。

卵の外殻が破れ、中から脚と背中に白と灰色と青の斑模様があるコモリグモによく似た子蜘蛛が粘液と共に這い出てくる。

夥しい量の子蜘蛛達はその銀色に輝く八つの目をクーゲルシュライバーに向けるとキィキィと鳴き声を上げた。

一匹だけでも不気味だろうその鳴き声は、幾重にも重なり巨大なざわめきと化している。

吐き気を催す悪夢のような合唱が何の変哲もない少女の裸体の上で盛大なハーモニーを響かせていた。

「総員、黙れ」

自身に向かい鳴き声を上げる蜘蛛の「まどい」に対してクーゲルシュライバーは威厳ある声でそう言った。

その言葉に好き勝手に鳴いていた蜘蛛達がぴたりと鳴き止んだ。

まるで階層守護者達を見ているかのような息の合った見事な黙りっぷりに感心しつつクーゲルシュライバーは命令を下す。

「お前達の創造主たるこの私が命ずる。お前達の苗床となったその少女を護衛せよ。これよりその少女をお前達の姉弟だと思い、労わり、彼女を害しようとするありとあらゆる外敵から守りぬけ。彼女こそが私がお前達に与えた命を賭して守るべき巣なのだ」と知れ。よいな？」

クーゲルシュライバーの言葉に全ての蜘蛛達が同時に肯くような動作を見せる。

その動きに含まれた了解の意思を完璧に理解したクーゲルシュライバーはさらに命令を付け足す。

「この任務は隠密に分類される。濫りに姿を現すことの無いようにしろ。それとナザリックに所属する者からの攻撃を防ぐ必要はない。わかったか？」

再び肯くような動作をする蜘蛛達にクーゲルシュライバーは満足し、行動を開始するように命令を出す。

すると、少女の体の上に山のように積み重なっていた蜘蛛の大群は瞬時にその姿を消してしまった。

消失してしまったわけではない。蜘蛛達は確かに少女のすぐ傍に存在している。

透明になったわけでもない。目視できないのはそれ以外の方法で身を隠しているからだ。

ただの透視能力を持つ者では見ることは叶わないが、エーテル体を目視する力を持つ者には倒れ付す少女の全身を覆うように密集する蜘蛛の群れのおぞましい姿を見ることが出来るだろう。

そう。クーゲルシュライバーが生み出した蜘蛛の大群、フレイズ・スパイダー・スクウォーム転移蜘蛛の大群はエーテル界というこの世界に隣接する全く別の次元にその身を隠したのだ。

フェイズ・スパイダー。

別名転移蜘蛛と呼ばれるこのモンスターは通常の蜘蛛と同じく奇襲戦術を得意とする貪欲な捕食者である。

その攻撃方法は如何にも蜘蛛らしく、噛み付いて毒を注入し、獲物が絶命するまで安全な場所で効果が現れるまで待つというもの。

原始的な狩りの方法だが、彼らにはそれを大きく手助けし、立ち向かう者にとっては非常に厄介となる特徴的な能力があった。

それは通常的手段では干渉する事のできないエーテル界とこの世界を自由に行き来する能力。

この力を活用した「知覚出来ない異次元から突如現れ奇襲を仕掛け、反撃を受ける前に物理的な干渉が不可能な異次元へ姿を消す」というフェイズ・スパイダーの戦術はユグドラシルでも大層面倒くさいとの評価を受けていた。

エーテル界にも効果を及ぼす「力場」による攻撃手段さえあれば恐れる存在ではないのだが、それを持たない者にとっては厄介極まるモンスターだ。

数種類ある自分単体で生産できるスウォームの中からクーゲルシュライバーが嘗ての自分の種族でもあったフェイズ・スパイダーを選んだのは、その転移能力が齎す隠密性がやがて日常生活に戻っていただく少女の護衛として最適だと思われたからだ。

他の種類の蜘蛛達も隠密性能は高いが、やはりこの世界に肉体を持って存在しているのとそうでないのでは感知し難さに雲泥の差がある。

それにフェイズ・スパイダーは知能も高く、集団生活を行ううえ、集団内での地位の差が全くないという珍しい生態を持っている。

比較的人間の生態に近い彼らならば人間の雌を護衛するという任務に際し、柔軟な対応が出来るのではないかという期待があったのだ。

身の安全を確保しつつ、幼い少女としての生活に支障をきたさないようにと配慮するクーゲルシュライバー渾身のチョイスだった。

「うん。とりあえずはこれで良いだろう」

100%の善意をもって選ばれ実行された防衛手段にクーゲルシュライバーは満足気に肯くと、未だ意識を取り戻さない少女の裸体を抱え上げモモンガの待つゲートへと歩き出した。

途中で脱ぎ散らかされたアンモニア臭のする衣類を擬腕の指先から噴射した糸で引き寄せつつゲートを潜る。

濃厚な土と血と肉が焦げる匂いが立ち込める森の一角。

其処へ転移したクーゲルシュライバーの視界に飛び込んできたのは、両手を組んで跪く血塗れの服を着た村娘に祈りを捧げられるモモンガの姿だった。

モモンガは杖を持たない右手の指先で骸骨の頬を掻きながらも、ゲートを潜り抜けてきたクーゲルシュライバーへと顔を向ける。

そしてモモンガとクーゲルシュライバーの視線が寸分の違いもなく正面から激突した。

『え、なにそれ？なんでそうなるの？』

カルネ村の近く、トブの大森林の入り口付近にて。

気を失った10歳の全裸少女を抱える深淵^{アトラクシナク}の大蜘蛛と、未だ乾き切らない血に染まった服を着た少女を跪かせた死の支配者^{オーバーロード}が全く同じタイミング、全く同じ言葉でお互いの所業について説明を求めた。

12話

がむしやらに走るネムがゲートに飛び込んだのと同じ時。

モモンガは二重の焦りを抱きながらゲートから姿を現した。

(何かとすれ違ったぞ?! どうする? 一旦ナザリックに戻るか?)

いや、しかしこつちを放置するとあの村娘が死にかねない)

突如出現したモモンガを見つめて唾然としている騎士二人の前には、体を半分切り裂かれた村娘の姿があった。

彼女はモモンガの目の前で力なく崩れ落ちていく。ズルリと粘着質な音を立てながら彼女の体に食い込んでいた剣が抜け落ちる。蓋のなくなった大きな傷口からは噴出すほどの生命力も残されていないのか、ゴボリと血が零れ落ちている。

まずい。死ぬ。

彼女を、延いては彼女の村を助ける為にやってきたというのに此処で死なれでもしたら格好がつかない。

すれ違った謎の存在についてはゲートの向こう側にいるクーゲルシュライバーを信じて任せるしかない。

仲間を信頼し任せることにしたモモンガは焦りながら魔法を放った。

「タイムタータイム! 《タイム・ストップ/時間停止》!!」

焦りを浮かばせる声と共に、モモンガ以外の時間が停止した。

第十位階魔法《タイム・ストップ/時間停止》。

文字通り時を止める魔法である。

止まった時の中では術者による術者以外への攻撃や呪文は一切影響を与えないが、防御を固めたり作戦を立てたりするには非常に効果的な魔法だ。

停止した時間の中で、モモンガはアイテムボックスから無限の背負い袋を取り出し中身をまさぐりつつ状況の確認を急ぐ。

この場にいた救助対象は二名。1人は目の前で真っ白な灰になってもなったかのようなやりきった顔で死にかけている村娘だが、あともう一人、妹と推察される少女の姿が見当たらない。

転移する前に見た遠隔視の鏡には森の奥へと逃げようとする少女の姿が確認できた。

目当てだった下級治癒薬を取り出したモモンガは少女が逃げたであろう方向を振り向く。そこには自身が創造したゲートがあった。

「……なるほど。さつきすれ違ったのはそいつか」

まだ実力が不明の敵をナザリックに通してしまったかと不安を感じていたモモンガは安堵する。

流石にあの少女がナザリックにいるクーゲルシュライバーとセバスより強い筈はないだろう。そもそも敵対行動を取るとも思えない。それに、もしも戦闘になって想像以上の強者だったと判明しても、極振りした場合1000レベルを超えるという膨大な神話パワーを溜め込んだクーゲルシュライバーに勝てる強さではあるまい。

心配の種が一つ消えたことによってモモンガの心に余裕が戻ってくる。

あとは瀕死の村娘の傷を癒し命を繋ぎとめ、敵である騎士二人を排除するだけだ。

《タイム・ストップ／時間停止》の効果時間に鑑みて、今から遅延魔法を使用した先制攻撃は不可能だろう。

ならば――

モモンガは傷つき倒れた村娘の背後へと移動する。

殆ど死体と変わらない村娘を挟んで、彼女を傷つけた騎士とモモンガが向かい合う。

そして《タイム・ストップ／時間停止》の効果時間がきれた。

「ひいっ!」

コマ送りのように突然眼前にまで迫っていたモモンガの姿に、騎士は心臓を鷲掴みにでもされたかのような悲鳴を上げる。

モモンガはそんな騎士を注意深く観察しながら、力なく蹲っている村娘を足で転がし仰向けにすると下級治癒薬の蓋を開けて彼女の口めがけて中身を流し込んだ。

こんな重傷者を足で転がしたくはなかったが眼前の敵の戦力が不

明なために警戒を解くことが出来ないモモンガは、心の中で謝罪しつつアイテムの効果が発動するかどうかを確認する。

高所から流し込んでいるせいで多少口から零れ落ちている
下級治癒薬マイナー・ヒーリング・ポーションだったが、即座にその効果を発揮した。

まるで時間が撒き戻るかのように大きく切り裂かれた村娘の体が修復されていく。

それだけではなく肩口から切り裂かれ血塗れになった服までもが元の状態へと戻っていく。

微かに上下する村娘の胸の動きを目視で確認した後、モモンガは素早く敵への対処へと移った。

モモンガは空になったポーション瓶を投げ捨て、空いた手を大きく広げ——即座に魔法を発動させた。

『《グラスプ・ハート／心臓掌握》』

いつの間にかモモンガの手中には心臓——魔法で形作られているのか僅かに透けている——が握られていた。

そしてそれを僅かな躊躇もなく握りつぶした。

心臓が容易く破裂し、赤い液体を撒き散らす。

——それと同時に騎士が無言で崩れ落ちる。

第九位階という高位の即死魔法は文字通り騎士の心臓を驚づかみにし、その生命を奪い去ったのだ。

ガシャリと鎧を鳴らしつつ事切れた騎士の亡骸が村娘の体に覆いかぶさる。

その衝撃で目を覚ました村娘が呆然とした表情を驚愕に変えながら死体の下から這い出るのをモモンガは冷静に見つめていた。

たった今人間1人の命を奪い去ったというのに、罪悪感も恐怖も混乱も一切感じない静かな湖面のような心。

そんな人間にありえてはならない筈の心の在り方を感じながらモモンガはただ静かに納得していた。

「そうか……やはり肉体のみならず心でも人間を止めたと言うことか……」

モモンガは歩き出す。

その時、騎士の亡骸に怯えていた村娘がモモンガに気付いた。

傷のなくなつた体を確認し、何が起こっているのかわかっていない人間特有のぼんやりとした雰囲気を纏っていた彼女は、瞬時に大きく目を見開き驚愕と畏怖に引きつった表情で呟いた。

「……死の、神様？」

いいえ、ただのサラリーマン社アンデッド畜です。

聞こえてきた擦れた呟きにモモンガは心の中で村娘の勘違いを正すと、残る騎士——後から追加で現れたヤツだ——をどう始末するべきかを思案する。

モモンガの鬼火の如き眼光に見据えられた騎士は小さく悲鳴を上げると一歩、後退した。

「……女子供は追い回せるのに、毛色の変わった相手は無理か？」

騎士から伝わってくる恐怖を嘲笑いながら、モモンガは次の一手を決定した。

自身の得意魔法である即死系魔法では相手の素の強さ、体力や防御力を知ることが出来ないため、与えるダメージ量を計ることの出来る低位の魔法を使用すべきだ。

その考えの下に第五位階魔法《ドラゴン・ライトニング／龍電》が使用する魔法の候補として浮上してきたのだが、モモンガはそれを除外し、別の魔法を選択する。

モモンガの相方であるクーゲルシュライバーは物理攻撃をメインにして戦うスタイルだ。

ならば相手の物理耐性やカウンタースキルの有無について調べておくのもまた重要な事だろう。

モモンガは掌を再び広げ、絶命した騎士が持つ剣へと翳すと魔法を発動させる。

「《アニメイト・オブジェクト／物体操作》」

その声と共に、かつて村娘の肉体を切り裂いた剣が宙に浮かび上がる。

モモンガの魔法によって自分で動く力とかりそめの生命を与えら

れた結果である。

未だに柄を握る硬直した騎士の手を邪魔だとばかりに振り払うと、剣はその切っ先を恐怖に震える騎士へと向けた。

明らかな攻撃の意思を感じさせる剣の動作に騎士が震えながらも自身の剣を構える。

「やれ」

モモンガの命令を受けた剣がまるで踊るように騎士へと向かう。

そして次々に繰り出される白刃の鋭い斬撃を、騎士は悲鳴を上げながらも必死にその手にもった剣で迎え撃つ。

森に剣戟の甲高い音が響き、火花が何度も散る。

逃亡する隙を与えないように自身を振るう剣と、特に技と言えるモノを見せることもなくただひたすら純粋な剣の技術で応戦する騎士を眺めながらモモンガはく伝言^{メッセージ}をクーゲルシュライバーに向けて使用する。

く伝言^{メッセージ}はすぐに繋がった。

モモンガはクーゲルシュライバーに連絡を取りながら、先ほど助けた村娘の様子を横目で確認する。

「私、確かに死んじゃったのに……生き返ったの？それに剣が勝手に……すごい……やっぱり神様なんだ……」

村娘はぼんやりとした口調で呟いているが、その瞳には溢れんばかりの感謝と信仰の光が宿っていた。

それをむず痒いながらも満更でもないと感じる一方で、モモンガは面倒な事になってるとため息をついた。

(神扱いというのはこの場では都合よく働くだろうが、後々で面倒ごととの種になりかねない。宗教関係に首をつっこむのはこの世界の情報が全くない現状ではリスクが高すぎる。というかなんでこの子はこのぐらいの事で俺を神様扱いするんだ？ただのポーションと魔法じゃないか。……もしかしてこの世界には魔法がないのか？だから神だと勘違いしている?)

記憶改竄の必要性を感じながらクーゲルシュライバーとの会話を終わらせると、モモンガはこれ以上の観察は無意味と判断して剣を遠

隔操作し必死の抵抗を続けていた騎士の首に白刃を振った。

突如として動きの鋭さを増した剣の一撃に疲労しきった騎士は反応しきれず、一撃でその頭部を刎ねられた。

実にあっけない。

剣に付与されていた《アニメイト・オブジェクト／物体操作》による舞踏効果^{ダンス}を無効化すると、モモンガは《オール・アプレーザル・マジックアイテム／道具上位鑑定》を使用する。

アイテムの詳細を知ることのできる魔法効果により、モモンガは先ほどの剣がなんの魔法効果も付与されていないただの「鉄の剣」であることを確認した。

モモンガからすればそんな武器ははつきり言ってゴミでしかない。カウンタースキルも防御スキルも発動させることもなく、ゴミに等しい武器の攻撃であっけなく死んだ騎士の弱さに、モモンガは張り巡らせていた緊張感がどこかに行くのを感じた。

一瞬遅れて噴水のようにふきだしてきた血液が自分に掛からないよう、モモンガは剣を操作し首無し騎士の体突いて転がす。

「あっ」

突然モモンガが間拔けな声をだした。

血を噴出す首無し騎士が倒れる方向に村娘がいる事に気付いたのは、彼女が頭から降りかかる血の雨を被ってしまった後だった。

これは可哀想な事をしたとモモンガは村娘に近づいて謝ろうとする。

そのモモンガの歩みが、止まった。

(ひえっ……)

なんだこの恐ろしいものは。

モモンガが足を止めた理由。

それは、跪き、胸の前で手を組んで鮮血に濡れた顔に恍惚の表情を浮かべてこちらを見つめている村娘に気付いたからだ。

しかも熱の籠った小声で「神様ありがとうございます」「私の信仰をお受け取りください」などと呟いている。

怖い、というより気色悪いというのがモモンガの感想だった。

正直、関わりあいたくない。

命に別状はないようだし、すこし気色悪いが感謝もされた事であるし、こいつはこのまま放置して村に行こうか。

そんな逃げの考えをしながらも、放っておくことは出来ないとも考えるモモンガはこの救助対象をどうするべきか骸骨の頬骨をカリカリと指先で搔きながら頭を悩ませる。

そんな時、ゲートから大きな影が現れた。

その手に全裸の幼女となにやら異臭のする衣服をもった、クーゲルシユライバーが。

『え、なにそれ？なんでそうなってるの？』

全く同じタイミング、同じ内容で放たれたくメッセージ伝言による言葉だったが、モモンガは其処に含まれている驚愕は自分のほうが上だろうことを確信していた。

なるほど。

互いの身に何が起こったのかを説明しおえたクーゲルシユライバーはおおよその状況を理解した。

幼女に対して施した防御策について語った時のモモンガからの「かわいそう」という言葉が今一納得できなかったが、クーゲルシユライバーは考え方の違いだと思ふことにした。

恒久的狂気もポーシヨンと共に使用した第七位階魔法《リミテツド・ウィツシユ／限られた望み》という《ウィツシユ・アボン・ア・スター星に願いを》の下位互換魔法と同じ効果をもつアイテムによって解除されている。

その後産み付けを行ったフェイズ・スパイダー・スウォームの件も十分な配慮によって苗床となった本人の意識がない内に完了している。

年端も行かない少女にとって自分の肉体に卵を産みつけられると

いう体験と、蜘蛛の大群に体を覆われるという体験は、身を守るのに必要な処置だと言われても意識がある状態では辛いものがあるだろう。

いくら精神が体に引つ張られていると言っても、その程度の気配りをするぐらいの常識は自分にもあるのだ。

そういう認識だったからこそ、モモンガの発言はクーゲルシュライバーには不満だった。

モモンガはマジックキャスターだから取れる防御手段は豊富だ。

それに対して自分には選択肢が少ない。

年頃の女性には辛いものがある手段しか選べないのだ。

クーゲルシュライバーとしては彼女が厳しい現実気付くことがないように配慮しているのだから、そこはどうか勘弁してほしいかつた。

(そりゃあモモンガさんのほうが適切な防御策をうてるだろうけどさ)

自分の努力にケチをつけられたような気がしたクーゲルシュライバーは拗ねながらも手に持った少女をいつの間にかモモンガの後ろに隠れるように移動していた村娘に差し出す。

「ひいっ！」

村娘は恐怖に身を震わせながら悲鳴を上げると、素早くモモンガのローブの後ろに隠れてしまった

向けられる激しい恐怖を心地よく感じる一方、あからさまな態度を取る少女の姿にクーゲルシュライバーは心が抉られるような思いだった。

(骸骨は平気なのに馬鹿でかい蜘蛛は駄目なのか？仲間を助けてやったのに、流石に傷つくぞ……)

少女を差し出した格好のまま停止するクーゲルシュライバーの心情を汲んだのか、モモンガが背後に隠れる村娘の前から身を引き優しい声で語りかける。

「彼は私の友人でね。お前達に危害を与える気は全くないし、その少女も死んではないから安心してほしい」

「えっ」

まるで予想外の事を告げられたかのような驚きの声を上げる少女の様子に説明が足りてないと判断したクーゲルシュライバーは口を開く。

「私はこの少女の”私達を助けて欲しい”という願いを聞き届けて此処にいるのだ。この子が気絶しているのは……私の姿が少々刺激的過ぎたようですね。まあじきに目を覚ますだろう。……さあ受け取るがよい」

言うだけ言ってクーゲルシュライバーは手に持った少女とその衣服を村娘に押し付けた。

当初は困惑するばかりだった村娘もやすらかな寝息を立てる姿に無事を確信したのか、感極まった様子で少女を抱きしめた。

「ネム！ああネム！生きてる！ああありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！」

その失禁少女はネムという名前だったか。

一応覚えておこうと心のメモにネムという名前を書き込みつつ、クーゲルシュライバーは神様扱いされる事に軽い羞恥を感じていた。

ユグドラシルでの宗教ごっことはまた違った、人間の心の底から湧き出る本当の感謝と信仰の気持ちはただの一般労働者だったクーゲルシュライバーにとってははじめての感触だった。

だから、クーゲルシュライバーはつい照れ隠しで余計な事を呟いた。

「ま、まあ邪神なんだがね」

「ちよ、おま？」

自虐するような声のクーゲルシュライバーの言葉にモモンガが仰天する。

即座に飛んできたモモンガの声にクーゲルシュライバーは自分の失敗を知った。

折角神様扱いで纏まりそうだったのに話がややこしくなる。

だが、クーゲルシュライバーとモモンガの心配をよそに村娘は感極まった様子で話し始めた。

「関係ないです！ 私達の声を、助けを求める声を聞いて、こうして助けに来てくださった御方が！ お、御方々は！ 立派な御方なんです！ 邪神だろうとつ、いや邪神だなんて関係なくて………確かに恐ろしいお姿ですけど………あつすみません！ そ、その、私バカで、上手く言えなくて………でも、でもっ」

声を何度も詰まらせ、涙を浮かべながらも必死に言葉を紡ごうとする村娘の姿を見てクーゲルシュライバーとモモンガは顔を見合わせた。

そして、二人とも表情が動くことがない顔で微笑んだ。

「なに、気にする事はないぞ」

「その通りだ。お前の気持ちは確かに伝わったぞ」

気にするなと穏やかかつ威厳のある声で諭すモモンガと、恐ろしい外見をしているというのに意外と優しい声で喋るクーゲルシュライバーに村娘は酷く赤面した。

その様子を微笑ましく思いながらモモンガが村娘に話しかける。

「それよりもお前に聞きたい事があるのだ。質問に答えてくれるな？

……あー」

「……あーエンリです。私の名前はエンリ・エモットといいます」

言葉につまったモモンガをどうしたのだろうかと見つめる血塗れ村娘だったが、不意に何かに気付いたように表情を変えると自己紹介をする。

そしてそんな彼女の行動にモモンガは察しのいい相手は助かるなあ等と考えつつ、これから行動をするに当たり絶対に避けることのない質問をする。

「うむ。ではエンリよ。お前は魔法というものを知っているか？」

「は、はい。む、村に時々来られる薬師の……私の友人が魔法を使えます」

「……そうか。ならば話が早いな。私はマジックキャスターだ」

《アンティライフ・コクーン／生命拒否の繭》

《ウォール・オブ・プロテクションフロムアローズ／矢守りの障壁》

エンリを中心に半径3mの微光を放つドームが発生する。

モモンガが使用した生命と飛び道具を阻む防御魔法である。村を襲っている騎士達の装備を考えればこれで十分だろう。

さらに今は眠っているエンリの妹であるネムにはクーゲルシュライバーが授けた身の毛もよだつおぞましい護衛が付いているのだ。

たとえ魔法を使う者が襲つてこようと、魔法を使用する為に必要な精神集中をさせる事すらなく撃退が可能だとモモンガは判断していた。

しかし念のために、とモモンガはエンリに二つのみすばらしい角笛を投げ渡した。

エンリが慌てた様子で地面に落ちそうになる角笛を受け止める。

「生物を通さない守りの魔法と、射撃魔法を弱める魔法をかけてやった。そしてお前の腕の中にいる少女には彼の篤い加護がついている。そこにいれば大抵は安全だろう」

モモンガの説明にエンリはクーゲルシュライバーを見つめる。

視線の先のクーゲルシュライバーは自慢げに人間の上半身状の部位の胸を張っていた。

その姿をどう受け取ったのか、エンリは安らかな寝息を立てるネムの寝顔を驚きの表情で見つめる。

「そしてそれは小鬼將軍の角笛と言われるアイテムで吹けば小鬼——小さなモンスターがお前に従うべく姿を見せるはずだ。それを使って身を守るがいい」

それだけ言うとモモンガは身を翻して五体満足で倒れ付す騎士の亡骸に目を向ける。

フェイズ・スパイダー・スウォームが敵を奇襲する際の囿や敵の攻撃を遮る壁にはなるだろうと考え渡したこのアイテムはモモンガからすればゴミアイテムだ。くれてやったところで痛くも痒くもない。

エンリ達の防御としてはこれで十分だと判断したモモンガは今度は自分達の防御を固めようと行動を開始する。

すでに敵である騎士達の防御力、攻撃力については確認済みだが、もしかすると自分達に危害を与える事が出来る予想外の攻撃が飛んでくる可能性もある。

油断していたせいで死ぬなんて愚か過ぎる。

既に万能選手であるクーゲルシュライバーがいるが、そういった予期せぬ攻撃に対しては使い捨ての壁が必要だろう。

モモンガは騎士の亡骸に手を翳し、特殊技術を解放する。

「中位アンデッド作成、死の騎士^{デスナイト}」

モモンガの声と共に空中から黒い霧が滲み出ると、心臓を破壊された騎士の亡骸へ覆いかぶさっていく。

そして騎士の亡骸は人形を思わせるような動きで立ち上がると鎧の内部から迸り出た粘着質な闇に全身を包まれていく。

いまや全身闇に包まれた騎士の体が大きくその形を歪ませていくのをエンリは震えながらも、しかしただ恐怖するのではなく畏敬の表情を浮かべながら見つめていた。

そして、エンリの見ている前で彼女を一度は死に追いやった騎士は全く別の存在へと生まれ変わった。

身長2.3mの長身、圧倒的な膂力を秘めているだろう事を確信させる分厚い胸板、それを包む血の如き赤い装飾の施された黒色の禍々しい鎧。

両手にもつのは全身の4分の3を覆うほどの巨大かつ重厚なタワーシールドと、蛇のように波打つこれまた巨大な大剣フランベルジェ。

ボロボロの漆黒のマントを靡かせ堂々と大地に立つその存在は当然人間ではない。

悪魔の角を模したような禍々しい兜の向こうにあるのは腐り落ちかけた人のそれだ。

まさにアンデッドの騎士という言葉が似合うこの存在こそが、モモンガが自身の特殊技術により生み出したアンデッド「デスナイト」である。

敵モンスターの攻撃を完全に引き付けてくれる能力と、どんな攻撃を受けても一回だけHPで耐えることのできる能力を持つ防御能力に優れた壁モンスターだ。

予期せぬ攻撃に対する壁としてはこれ以上の適役はいないだろう。

(ふうむデスナイトかあ)

威風堂々とモモンガに仕えるデスナイト。

その懐かしい姿を見たクーゲルシュライバーは自分もなにか作るべきかと考える。

自分とモモンガが揃っているだけで大抵の状況はどうか出来そうではあったが、そもそもこの村には実験の為に来ているのである。

少なくともクーゲルシュライバーの認識ではそうだった。

だからクーゲルシュライバーは不要かと思いつながらも、モモンガを真似てサポートモンスターを作成する事にした。

デスナイトが防いでくれるであろう予想外の攻撃を行った相手を捕縛するためのモンスターがいると便利だろう。

そう考えたクーゲルシュライバーはアイテムボックスからバスケットボール大の白い塊を取り出した。

「ん?」

モモンガが怪訝そうに見つめてくるのを無視し、クーゲルシュライバーはその白い塊を首を失い倒れた騎士の体へと投げつける。

そして——エンリが悲鳴を上げた。

「ひいいい!」

騎士の鎧と衝突し破けた白い塊から大量の蜘蛛が這い出てきたのだ。

かつてユグドラシルのゾンビが大量に配置されたフィールドで行われた雪合戦では雪玉の代わりに使用され、阿鼻叫喚の地獄絵図を生させたこのアイテムはプレイヤーからは「スパイダー・スウォーム蜘蛛の大群の素」などと呼ばれていた。

このアイテムの効果は、モンスターの亡骸等に使用すると平面上に1辺3mの正方形を占める総数1500体の蜘蛛からなる^{スパイダー・スウォーム}蜘蛛の大群を召喚するという言うものだ。

発生するスパイダー・スウォームの戦闘力は非常に脆弱だ。プレイヤーからしてみれば見た目が不快なだけである。

しかしこのアイテムには他人を驚かす以外にも利用方法があるのだ。

クーゲルシュライバーは切断された首の断面から体内へと潜り込んでいく蜘蛛の大群を眺めながらアイテムボックスからなにか巨大なものを取り出した。

中空から突如あらわれたその物体に、エンリは内部から食い荒らされていく騎士の亡骸に釘付けになつていた視線を移さざるを得なかった。

中空から現れたもの。

それは――

「ぬーけーがーらー」

妙に間延びした国民的アニメの主人公を意識した声でクーゲルシュライバーが言う通り、それは抜け殻だった。

それも3mもあるジャイアント・スパイダーの抜け殻だ。

これはクーゲルシュライバーがまだ初期種族であるジャイアント・スパイダーの時に生産した彼自身の抜け殻である。

スパイダー系のモンスターは定期的に脱皮を行いこのような「抜け殻」を生産する事ができる。

「抜け殻」は様々なアイテムや武器に加工できる素材アイテムだが、ジャイアント・スパイダーの抜け殻では価値などないに等しい。

しかし無料で手に入る素材を放置することができなかったクーゲルシュライバーのアイテムボックスにはこの手の素材アイテムが山ほど入っている。

今取り出したのその内の一つだった。

クーゲルシュライバーは取り出した自分の抜け殻をグチャグチャと凄惨な音を立てて蠢く騎士の死体へと放り投げると特殊技術を発動させた。

「中位アンデッド作成、死の糸蜘蛛」

種族が死霊術を得意とする墳墓蜘蛛だった時に取得したアンデッド作成スキルがクーゲルシュライバーの抜け殻と蜘蛛の大群を媒体に発動し、この二者を極めて汚らわしい死霊術によって拘束された運命共同体へと変化させる。

クーゲルシュライバーの抜け殻は蜘蛛の大群の巣箱として、

スパイダー・スウォーム

蜘蛛の大群はクーゲルシュライバーの抜け殻の動力源——中身——

としての役割を与えられ一つのアンデッドとしての精神を共に形成した。

そして、がらんどうだった筈の抜け殻が動き出す。

その動きは驚くほど器用で素早く滑らかで、賢く繊細かつ威厳すら持っているように見えるほどだ。

その一方で、時たま抜け殻に空いた穴から「中身」となっている小さな蜘蛛が零れ落ちては慌てて外骨格をよじ登り威厳ある抜け殻の中に戻っていく光景はある種の微笑ましさを感じさせる。

スパイダー・スウォーム

そんなデスウェブの動きに抜け殻の内部に聳く蜘蛛の大群達の調子がすこぶる良い事を確信するとクーゲルシュライバーは満足そうな声でモモンガへと声をかけた。

「今日はお前と私のデスナイトとデスウェブでダブルアンデッドだな！」

決めゼリフだったのだろう。

得意げな雰囲気の前肢をバタバタさせるクーゲルシュライバーにモモンガはただ大きなため息をついた。

(クーゲルシュライバーさん、気楽だなあ……)

モモンガはエンリの悲鳴に目を覚ましたネムが、瞳孔の開ききった異様な目でクーゲルシュライバーとデスウェブを見つめているのを極力無視して心の中でそう呟いた。

13話

「オオオアアアアアアアアー!!」

聞くものに肌があわ立つような恐怖を感じさせる咆哮と共にデスナイトが駆け出す。

生ある者を憎む邪悪極まりないアンデッドの騎士は、これから起るであろう殺戮の予感に歓喜しながら黒い疾風となって小さく見える村へと向かう。

その凶悪かつ力強い背中を見つめ、モモンガは前方に差し出されていた手を力なく降ろした。

「いなくなっちゃったよ……。盾を守るべき者を置いて行ってしまうよ。いや命令したの俺だけだよ」

今までの人生で一度も向けられた経験の無い異様な瞳で生態系から逸脱した二匹の化け物蜘蛛を見つめるネムを極力無視して、モモンガは召喚したデスナイトに血がべったりと付着した人骨を包む鎧を見せた。

そして同じ鎧を着用している者達を殺せという命令をしたのだから、その結果が先ほどの光景である。

この命令はモモンガとしてはデスナイトが自身の護衛中に誤って救助対象である村民を攻撃しないようにと攻撃対象を指定したに過ぎない。

ユグドラシルでは作成されたデスナイトは護衛対象である召喚者の傍から離れることは無かった。

だからモモンガの出した命令はデスナイトに期待される盾としての役割を損なわずに受諾される筈だったのだ。本来であれば。

「解釈の自由というか……護衛に関する命令が無ければかつての壁モンスターもその役割を果たさないのか」

信じられないものを見たというようなクーゲルシュライバーの声に、モモンガはユグドラシルにはなかったこの“自由度”のメリットとデメリットについて考えながら頭を上下に動かし同意を示す。

メリットはシンプルにその自由度自体だ。ゲームではできなかった

た護衛以外の行動を命令次第で行わせることができるはずだ。

デメリットはその自由度ゆえに、命令を的確に行わなければならないように此方の意に副わない行動を取ってしまう事である。

受け取り手の性格や知性によっては勘違いなどが発生してしまう恐れがあるのだ。

このデメリットは未知の要素が多い今の状況では致命的な危険を招きかねない。

サポートモンスターを召喚、作成した時はこの事に注意して命令する際には内容を曖昧にせず、はっきりと此方の望む行動を言葉にして命令しなくてはならないだろう。

流石に契約書ほどに内容を緻密にする必要は無いだろうが、それでも咄嗟に行うには難しい。

少なくとも年下からさえも命令される側だったクーゲルシユライバーと、ただの営業職だったモモンガには難易度が高かった。

だが、苦手と言って克服する努力を怠っては自分と仲間の身を危険に晒すことになる。

少しずつ練習して慣れていかなければならない。

クーゲルシユライバーは自らが作り出したデスウェブを見つめる。

生きた蜘蛛をまるで出血するかのように零れ落す巨大な蜘蛛………の抜け殻。

脆弱な生物が強固な外殻を住処にする様子は一般的な命を持つ生物であるヤドカリに似ているが、当然そのような可愛げのある存在ではない。

両者を運命共同体とするのに死霊術が関与しているせい、デスウェブはアンデッドである。

そしてアンデッドである以上、アンデッドの種族特徴を持っている。

クリティカルヒット無効、精神作用無効、飲食不要、毒・病気・睡眠・麻痺・即死無効、死霊魔法に耐性、肉体ペナルティ耐性、酸素不要、能力値ダメージ無効、エナジードレイン無効、ネガティブエナジーでの回復、ダークヴィジョン／闇視

そしてアンデッド共通の弱点である炎と光、正、神聖攻撃への脆弱性。

この中でデスウェブにとって問題なのが炎への脆弱性だ。

光、正、神聖攻撃とは違って炎による攻撃は比較的容易に行える。それこそあの騎士達だって出来る。

油をかけて火を点けたり、剣に燃料を塗って燃やすだけで弱点属性を突けるのだ。

さらにデスウェブの攻撃方法は糸を多用するし、中身であるスパイダー・スウォーム達は範囲攻撃に弱い。

火を猛烈な弱点に持つモンスターが可燃物をばら撒きながら戦うのである。

一発でも炎属性の攻撃を喰らったら焼死しかねない危険性があった。

(単体で戦わせたらあっさりやられちゃいそうだがぞこイツ。さすが雑魚モンスター。盾役がいなけりやどうにもならん)

特に深い考えがあったわけではなく、名前にデスナイトと同じ「デス」がついて捕獲が得意そうなモンスターが良いだろうという適当な理由で選ばれたデスウェブだったが、その自爆必至な戦闘スタイルを思い出したクーゲルシュライバーはどう運用すればいいのか分からなくなってしまうた。

無理をしてまで使う必要はないし、クーゲルシュライバーにとって幾らでも代えのある召喚モンスターなので倒されてしまっても別に構わない。

使い潰すこと前提で無造作に敵集団に突入させ、どれぐらの戦果を上げるか観察するという運用でも全く問題ないだろう。

しかし、以前モモンガに聞かされていた召喚したモンスターとの精神的な繋がりからはデスウェブの深い敬愛の感情と猛烈なヤル気が伝わって来ている。

あくまで感覚的なものに過ぎないが、クーゲルシュライバーにとってはそれが、ヒーローショーで憧れのヒーローから「怪人を倒すのに君の力が必要だ！」と言われた時の幼稚園児の決意溢れる表情に似て

いるように思えた。

それを端的に表すのならば、すなわち「ぼくがんばる！」である。そんな自身が生み出した存在の無垢な気持ちをクーゲルシュライバーは無下には出来なかった。

それなりの活躍をさせてやろうと頭を回転させ、ひねり出した考えをモモンガに提案する。

「我が友よ。お前のシモベは村を襲う者共を狩りに行ったようだが、村人の守護を担う者も居たほうが都合がよいだろう？我が眷属をその任に当たらせようと思うのだが、どうだろうか？」

デスウェブは盾モンスターではないので自分達の周りに置く意味は薄い。これから盾役としてはナザリック最高峰であるアルベドが来るのだからなおさらだ。

エンリとネムの護衛役にするのも無駄が多すぎる。二人の守りは万全とは言えないが騎士達相手ならば十分すぎる防御力がある。

ならば、とクーゲルシュタイナーが提案したのはデスナイトの補佐とも言える村人の護衛任務だった。

彼我の戦力差を見るに補佐の必要すらないかもしれないが、名目上は村を救いに来たのだから万が一デスナイト襲来の混乱で村人が1人でも死亡するような事があればネムの願いを聞き届けた身として情けない結果となるだろう。

なにせデスナイトは生者を憎むアンデッド。

騎士達の殺害だけで村人の守護を命じられていない以上、騎士の誰かが村人を殺そうとしていてもあえてそれを見逃したりするかも知れない。

それを防ぐための守護役の存在はあった方がよいだろう。それにデスナイトと共闘すれば弱点である炎属性の攻撃に晒された時に庇ってもらえるかもしれない。

クーゲルシュライバーはそう考えた。

「……デスウェブを？」

「デスウェブをだ」

盾モンスターではないデスウェブにその仕事は不適切では？

そう言いたげなモモンガにクーゲルシュライバーは堂々と答える。
その姿になにか思うことがあったのかモモンガは暫し考える素振
りを見せた後クーゲルシュライバーに許可をだした。

「じゃあ頼もうか」

「任せてくれ。……デスウェブよ。この先に、そこに転がっている鎧
を着た者達に襲われている村がある。その村の住民を守れ。そして
先行しているデスナイトと協力し村人の脅威を排除するのだ」

出来るだけ気をつけて命令したけど、これで大丈夫だろうか？

緊張するクーゲルシュライバーに対し、命令を受けたデスウェブは
その体内から大量のスウォームを迸らせながら甲高い鳴き声を上げ
る。

「キイイイイイ!!」

昔見たアニメ映画に登場した神様のゾンビみたいだ、とクーゲル
シュライバーが思っている背後で、エンリが悲鳴を上げ、モモンガが
静かにその身を引き、ネムが薄ら寒い恍惚の笑みを浮かべる。

各々別の反応をみせる彼らに背を向けると、デスウェブは重力に
従って落ちてきたスウォームを空洞の体に納めるとデスナイト以上
の速度で村を目指して走り出した。

「……がんばれよ」

遠ざかる背中に小さな声でクーゲルシュライバーがエールを贈つ
た時、開いていたゲートから人影が現れる。

「む、来たか」

現れた人影、悪魔のような全身甲冑を身に纏ったアルベドの姿を見
たモモンガが効果を持続させていたゲートをもう用はないとばかり
に消失させる。

「準備に時間がかかり、申し訳ありませんでした」

角の生えた面頬付き兜の下から聞こえてきたアルベドの声にモモ
ンガとクーゲルシュライバーが喜色の滲んだ声で出迎える。

未知への不安があり、たった今盾役を失った二人が完全武装したア
ルベドというナザリック最高の盾の到着を喜ばない理由などなかつ
た。

「いや、そうでもない。実にいいタイミングだ」

「まさにな。これからお前が必要となるところだったのだよ」

「ありがとうございます。……それで」

途中で言葉を切ったアルベドに一体どうしたのだろうかとクーゲルシユライバーは彼女の面頬付き兜に覆われた顔を見つめる。

——そして戦慄する。

視界を確保する為に開けられたスリットの闇の向うで金色の光が煌々と輝いていたのだ。

底冷えするような敵意が感じられるその光は真っ直ぐにエンリに抱かれた未だ全裸なネムへと注がれていた。

先ほどまで笑みを浮かべていたその顔は恐怖に引きつり今にも泣き出しそうだ。

そしてそれはネムを抱きかかえているエンリも同じだった。

「その生きているかあ、下等生物の処分は、どうなさいますか？己の犯した罪も知らずのうのと生きていくだけでなく、身の程も弁えず、く、クーゲルシユライバー様に淫らな視線を向ける、そのかあとおう生物の処分は」

今にも手にしたバルディッシュでエンリごとネムを両断しかねない雰囲気を発散するアルベドの姿に、怒りの原因がなんであるかに思い当たったモモンガが手にした杖を地面に突き立てる。

「やめよアルベド。セバスになにを聞いてきたのだ」

アルベドからは返事がない。

「ちゃんと聞いていないのか……。ともかく、私達はこの村を助ける。とりあえずの敵はそこに転がっている鎧と同じものを着た連中だ」

「はっ。しかし……」

尚も引かないアルベドに、こいつどれだけ怒ってるんだよと内心冷や汗を流しながらモモンガは説得をつづける。

援護射撃を期待して横目でクーゲルシユライバーを見てみれば、考え込むようなポーズを取って「淫らな視線ってなんだ？」などと呟いている。

その疑問はもつともだが、頼むからアルベドを落ち着かせるのを手

伝つてくれないか。

そんなモモンガの願いは邪神には届かなかった。

「……やめよと言っている。私の部屋を汚した人間に対するお前の怒りはわかるが、私はそうなる事を予想した上でその少女の前にゲートを開いたのだ」

部屋が汚れてしまう事を予想した上で助けた。

そこまで言われたアルベドはモモンガに謝罪すると静かに身を引いた。

モモンガの肩から力が抜ける。

引き際にアルベドが呟いた「そこまでして保護する価値がアレに……？」という言葉にどこか不安を感じるが、とりあえず折角手間をかけて保護した少女二人を敵ではなく仲間の手によって殺害されるという事態は回避できたようだった。

「なあアルベドよ。お前の言う淫らな視線、というのは一体なんなんだ？」

唐突に、モモンガが必死でアルベドを説得する隣で一人黙々と考え込んでいたクーゲルシュライバーが口を開いた。

「はい。その下等生ぶ……人間が不敬にも至高の御身に向けるあの視線は紛れもなく発情した雌のそれです。この私が言うのです、間違いありません」

アルベドの確信を持った言葉に、そういえばアルベドはサキユバスだったかと心中で呟きながらクーゲルシュライバーは高性能になった視力でネムの両目を覗き見る。

恐怖に震えていたネムだったが、クーゲルシュライバーに見つめられている事に気付いたのか途端にアルベドが来る前の瞳孔が開ききった異様な目で見つめ返してくる。

そんなネムの目を見て、クーゲルシュライバーは昔なにかの雑誌で見た知識を思い出した。

——好きな人を見ると目の瞳孔が開く!?人は興味関心のあるものや好きなものを見ると、瞳孔が大きく開く性質を持っています。なので相手の瞳孔の大きさを見れば相手の好感度をチェックできちゃう

！あなたも明日からこの秘密テクニクで恋愛の達人だ！

（たしかそんな感じだったな。ということとはネムのあの目は欲情とかじゃなくて好意を向ける目って事だ。そりゃそうだ。蜘蛛に欲情する幼女が居てたまるか。アレは多分ピンチを救ってくれたヒーローに対する好意とか敬意とか、そんなところだろう。アルベドの勘違いだな）

自信満々で断言しているアルベドだったが、残念ながらそれは外れだとクーゲルシュライバーは口から空気を漏らす程度に笑う。

その微かな笑いに気付いたのかアルベドが怪訝そうに首をかしげる。

そんな彼女の姿を見えますますクーゲルシュライバーは愉快になつてきた。

（すごい強くて賢い美女で、ギルメン皆愛してる設定の超積極的ビッチなアルベドが実際は恋愛についてはズブの初心者とか……流石はタブラさん。処女ビッチとは良いものだな！）

そう考えると、途端にアルベドのあの態度が好きなお相手に好意を向けるライバルを牽制する女子高生のように思えてくる。

果たしてそんな女子高生が現実に存在するのかどうかは不明だが、クーゲルシュライバーのアルベドに対する印象は今やそれで固定されていった。

「あの、如何なさいましたか？私になにか……？」

自分がなにかおかしい事でも言ったのだらうかと不安そうに聞いてくるアルベドにクーゲルシュライバーはキザっぽい声で答えた。

「なに、人間の少女に嫉妬するとは大人びているアルベドにも存外カワイイところがあるものだ、とな？ハハハハハ」

「カワイイ！クフー！ク、クーゲ……ンンッ！カワイイなどと、ああつ！至高の御方にそんな事を言われたら私、私いっ！」

高らかに笑う蜘蛛とクネクネと喜び悶える全身鎧の戦士という珍奇な光景。

村が襲われているという緊急事態にも拘らず、放っておくといつまでも続きそうな予感を覚えたモモンガは再び杖を地面に突き立てる。

——気付け。気付けよ。気付ければ。ねえ気付いてよ。
土を抉ること四回。

ようやく意識を向けたクーゲルシュライバーとアルベドにモモンガは顎で村を指し示すとゆつくりと歩き出す。

デスナイトとデスウェブを先行させているとはいえ、此処でいつまでも時間を潰しているわけにはいかないのだ。

必死に謝罪するアルベドと、一言二言軽い謝罪を投げかけてくるクーゲルシュライバーを伴ってモモンガは進む。

しかし、数歩も行かない内に背後から声がかかった。

「あ、あの——！助けてくださいってありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

その声にモモンガ達は立ち止まり助けた少女二人を振り返る。

一人は血塗れで、一人は全裸の少女二人組は胸の前で手を組んで仰ぎ見るかのような姿勢で感謝の言葉を紡いでいた。

血塗れの少女エンリはどす黒く変色しスライム状になった血液を貼り付けた顔でモモンガを見つめ、全裸の少女ネムは時折その幼い体をブルリと震わせながら紅潮した顔でクーゲルシュライバーを見つめている。

「……気にするな」

「ああ、気にする事はない。だがその感謝の心は尊いものだ。ゆめ、その心を忘れないようにな」

「はい……これから毎日お二人に祈りを捧げます！」

「捧げます！」

しっかりと感謝できる人間というものは見えていて気分がいいものだ。

手間をかけて救ったこの純朴な村娘二人にはその気持ちを忘れてないで生きていって欲しい。

ぼんやりとそう思って発した言葉だったのだが、祈りを捧げるとはこれはまた大仰な。

神だと思い込まれると一々大げさになって困ったものだとかクーゲルシュライバーとモモンガは苦笑いする。

そんな二人の様子に気付くこともなく、エンリが緊張に震えた声で問いかける。

「そ、それで、お二人の、お、お名前……お名前はなんとおっしゃるんでしゅか！」

——来たか。

モモンガは二日前に行われたクーゲルシユライバーとの会議を思い出す。

多岐に渡って話し合われた議題の一つに、外で活動するさい名前をどうするかというものがあつた。

それはモモンガの拘りなどの影響で紆余曲折あつたものの、結論としては「偽名を使う」でまとまっていた。

プレイヤーキャラの名前は、名前で対象を指定するタイプの呪いや魔法に使用される危険性があるというクーゲルシユライバーの主張が通つた結果だ。

この世界にそのような魔法や呪いがあるかは不明だが、そういったものの存在は元の世界でも——迷信ではあるが——確認されるほどポピュラーなものだ。

当面はそういったものに対する警戒はしておいて損はないだろうとの判断だつた。

それを踏まえたうえで、また別の思惑が重なつた結果モモンガが名乗る名前が決定された。

モモンガはその名前を使うことを当初は拒否したのだが——

決定され、使うと決めた以上はその名に恥じぬよう堂々と名乗つてみせる。

「我が名を知るが良い。我こそが——アインズ・ウール・ゴウン」

絶対的な自信と誇りと共に明かされたその名前にエンリとネムが息を飲む。

その様子にモモンガ……いや、ナザリック地下大墳墓の支配者アインズ・ウール・ゴウンは、この世界で初めて行われた名乗りが満足りく結果を出した事を確信し内心喜びのポーズを取っていた。

(モモンガさんビシッと決めたなあ。これは無様な名乗りはできないぞ)

アイنزの堂々たる名乗りを目の当たりにしたクーゲルシュライバーは、負けてはいられないと静かに気合を入れる。

アイنزとは違い、クーゲルシュライバーの使う偽名は完全にオリジナルだ。

例の会議でいくつか案は出たものの納得が行く名前が無かった為、決定を先延ばしにしていたのだ。

それを今この場で披露する。

クーゲルシュライバーはアイنزに負けなくらいの自信と誇りを込めて名乗りを上げた。

「我が無数にある名の一つを教えよう。我が名はアルト・シュヴァルト・ゲシュテレン!!」

クーゲルシュライバー……もとい、アルト・シュヴァルト・ゲシュテレンが謡うようにその名を名乗った瞬間、悲鳴が上がった。

「ぐわああああああああ!!」

「アイنز・ウール・ゴウン様!?!」

突如として胸を押さえて悲鳴を上げるアイنزの姿に、アルベドが即座に駆け寄ってくる。

「はあ、はあ、な、なんでもない。大丈夫だアルベド」

「し、しかしアイنز・ウール・ゴウン様……」

「い、良いのだ。本当に大丈夫なんだ。本当に」

すぐ傍で心配そうに見つめてくるアルベドを優しく突き放すと、アイنزは一体何事だと此方を見るアルト・シュヴァルト・ゲシュテレンをそれ以上は止めてくれという意思を込めて見つめ返した。

「……」

「……」

「……？」

「……」

「……！」

「アルト・シユヴァルト・ゲシユテルン……その名の意味は古き言葉で、古の黒き星と……」

「やめろおおおおおっ!!」

アインズはむき出しの肋骨を掻き毟り懇願の叫びをあげた。
それはまるで魂を抉られたかのような、悲痛な叫びだった。

静寂を取り戻したトブの大森林。

その入り口に薄い光のドームに包まれたエンリとネムが涎を垂らし呆然と地面に座り込んでいた。

どれだけそうしていただろうか。

突然二人の目に意思の光が戻ってくる。

しかしそれでも二人は動こうとしない。

先ほど体験した信じられないような出来事を思い出し、そのあまりの凄まじさに改めて圧倒されていたからだ。

「すごかったね。アインズ・ウール・ゴウン様と、名も無き神様」

「うん……」

エンリは思い出す。

あの仮面をつけた偉大なる神と、黒い体を持つ恐るべき蜘蛛の神を。

あれこそ正に神と呼ばれる存在に違いなかった。

きっと村は救われるだろう。

そうしたら、あの偉大な神様達の事を村の皆に伝えたい。

あの慈悲深い神様がどんなに素晴らしいのかを教えて回りたい。

それがエンリの嘘偽りのない気持ちだったが、それが実現することは絶対にありえない。

なぜならば去り際にアインズ・ウール・ゴウンが言ったのだ。

——私達はただの通りすがり。決して神だなどと吹聴してはいけない。

何故、という問いは出てこなかった。

命の恩人である神自らがそれを望むというのであれば、黙って従うべきだと思っただからだ。

「ネム。口止めされたこと、絶対に言っては駄目よ。わかった？」

「うん。分かってるよお姉ちゃん」

「絶対に絶対だからね？」

エンリは念を押してそう言うとなムに服を差し出した。

名も無き神と名乗った蜘蛛の姿をした神が持ってきてくれたネムの服だ。

湿っており異臭もするがこのまま裸のまままで居るわけにはいかない。

気持ち悪いだろうが、それは全身血塗れの自分も同じなので妹にも我慢して欲しかった。

「ほら、そんな震えて……寒いでしょう？早く着ないと風邪を引くわよ」

エンリの言うとおり、ネムは少し離れた地面を見つめて震えていた。

緑豊かな季節とはいえ野外で裸は流石に冷えるのだろう。

「ねえお姉ちゃん」

「うん？どうしたの？」

差し出された服を膝の上に抱えながらネムが戸惑うように話しはじめる。

「あのね、なんだか胸がドキドキして顔が熱くて、体がゾクゾクするの。風邪じゃないみたいだけど……なんなんだろう？」

「それ、風邪よ。もう、早く服を着なさい」

エンリは妹の申告を聞いて呆れた様子でそういうとネムに服を着せていった。

エンリは知らない。

体の異変を訴えるネムの視線の先には、地面の上を這い回る蜘蛛がいた事を。

そしてその異変はネムが名も無き神とその眷属を見ていた時にも起こっていた事を。

ネムは知らない。

その身を感じる異変が、幼い身には早すぎる情欲の悦びだという事を。

そしてそれが二度と消える事はない、取り返しのつかない性的嗜好である事を。

ネム・エモット——わずか10歳にして昆虫性愛に覚醒す。
フォミコフィリア

14話

ロンデス・デイ・グランブは18名の仲間と共に今日の標的である村の住民達を一箇所に追い込んでいた。

村の中央、広場として使用されるその場所には60人弱の村人達が怯えた表情でこちらを見つめている。

恐怖に萎縮した村人達は自分達がどうなるか悟っているのにも拘らず、村の行事などに使われる質素な木製の台座の後ろに子供達を隠し小刻みに震えた手で棍棒を掴んでいる。

隣人を、家族を、仲間を殺されながら此処まで逃げてきた村人達は疲労の極地でありながら、その心は抗えない運命への諦めを必死に拒否しようとしている。

自身の無力さを痛感し折れそうになる心はどうにか繋ぎ止め子供達を守るため武器を手取る彼らの精神は、殺戮者であるロンデスにも一定の感動と尊敬を抱かせる。

だが、彼らは死ぬ。

人間の持つ勇気の輝き。その儂くも尊きものを、ここ数日で何度踏み潰してきただろうか。

いまさらそれに罪の意識を感じることは無い。任務だからだ。

村は焼かれ、僅かな生き残りを運び、残りの村人は殺される。

何度も繰り返された任務だ。

それが今回もまた例外なく繰り返される。

そのはずだった。

一瞬の出来事だった。

遅れて逃げてきた村人を後ろから切りつけようとした仲間の一人エリオン。

十分訓練された剣の一撃が哀れな村人の背に到達しようとしたその瞬間、エリオンの体をなにか白い物が覆い尽くした。

「へ？」

剣を振り下ろそうとする格好のまま突然動きを止めたエリオンが

呆然と声を漏らす。

そして、エリオンが姿を消した。

「助けてくれええええええええええエエエエ!!」

装甲に覆われていない頬を巻き起こった強風が撫でていくなか、

徐々に遠ざかっていく悲鳴を追って仲間達が啞然とした表情で首を動かす。

何が起こったのか理解できず、ロンデスも周りに追従する形で村人達に背を向けて今も聞こえる悲鳴の発生源を探す。

いた。エリオンだ。

全身を絹のような光沢を放つ白い布に覆われたエリオンが、砂埃を巻き上げながら地面を引き摺り回されている。

よく見れば日光を反射する純白のロープがエリオンを拘束する白い布に繋がっていた。

そして彼が引き摺られて行く先。砂埃の向こう側に化け物がいた。

見知らぬ相手ではない。この辺りでは見かけない生物ではあるが、場所によつては腐るほど生息しているそれとはロンデスも戦ったことがある。

「ジャイアント・スパイダーだど?なぜこんな平原に?」

本来の生息域である森や洞窟とは全く異なる環境にも拘らず出現したモンスターの姿にロンデスは驚愕しつとも仲間を救うべく走り出す。

ジャイアント・スパイダーは強敵だ。

素早い動きと鎧をも貫通する毒の牙、放たれる糸の脅威はもはや言うまでもない。

一対一ならば勝利を手にするのは難しい相手だ。

その上エリオンを捕らえている個体はロンデスが見たことも無い程の巨体を持っている。

「リリクー・デズン!モーレット!やつの周りを囲め!毒の牙と爪に注意して関節を狙え!」

強大な敵と仲間の危機を前にして棒立ちになっているまぬけな隊長に先んじてロンデスは命令を出す。

ジャイアント・スパイダーは確かに強敵ではあるが、その強さは奇襲や蜘蛛特有の罠に拠るところが大きい。

攻撃方法は前方に対する噛み付きと爪による引つ掻きぐらいしか無いので多方面からの攻撃には対応できない。

つまり誰か一人がヤツの攻撃を引きつけていれば此方は一方的に攻撃を仕掛けることが出来る。

強固な外骨格は剣などの刃物による攻撃に対して非常に強固で、出来ることならばメイスなどの殴打武器を使用するほうが望ましい。

しかし剣であっても外骨格に覆われていない間接部を狙えば十分な効果が見込める。

肢を3本も断ち切る事が出来れば勝利はその時点ですいたも同然だ。

「ぎゃあああああ!!」

絶叫を上げて身を振るエリオンがついにジャイアント・スパイダーの前肢に捕らわれた。

もはや助かるまい。

眼前にせまった仲間の死に齒軋りしつつロンデスは全力で走った。

エリオンが犠牲になっている時がチャンスだ。

一番の脅威である毒の牙が獲物に食い込んでいる隙にヤツの息の根を止めてやる。

「うおおおおおー!」

真つ先にジャイアント・スパイダーの下へとたどり着いたりリクが関節めがけて剣を振り下ろした。

走ってきた勢いを乗せた見事な一撃は関節目掛けて正確に振り下ろされる。

ジャイアント・スパイダーの肢の一本を切断するには十分な一撃だ。

ロンデスの推察が正しいことを証明するように、ジャイアント・スパイダーの肢の一本がその醜い胴体から切り離される。

しかし――。

「な、なに!?!」

切断面から伸びた何本もの白い糸が切り離された肢を繋ぎ、引き戻す。

ほんの一瞬でジャイアント・スパイダーは元通りの姿に戻ってしまった。

なんだそれは。ありえない。

ロンデスは即座に足を止めると目を見開いた。

ジャイアント・スパイダーにあるまじき再生能力に怖気づいたわけではない。

再生力が高くとも、それを上回るダメージを与えることは数に勝る此方としては容易な事だ。

だが、そんな有利を覆すような常軌を逸した光景がロンデスの目の前で発生したのだ。

「ひい!!」

剣を振り切った姿勢のリリクに向かって、ジャイアント・スパイダーから出現した黒い塊が飛び掛った。

煙にも泥の塊にも見えるそれは、キイキイと不快な音を出しながらリリクの全身を覆い鎧の中へと侵入していく。

そして絶叫が上がった。

「ぎゃあああああいたいいたいいいいい!!」

その光景はアリに集られ解体されていく蜥蜴に酷似していた。

地面を転がりもがき苦しむリリクの体はたった数秒で動かなくなる。

鎧の隙間からは血が漏れ出し、布地の部分は大きく弛み中身が無くなったという事実を克明に示していた。

クソツたれ。こんなことってあるのか？

ロンデスは神を罵った。

彼は見たのだ。リリクを覆ったあの黒い塊の正体を。おぞましい蜘蛛の群れを。

やつらはその刃のような顎で吐き気を催すほど簡単に肉を裂き、毒で溶かし、啜り、リリクを物言わぬ骸骨へと変えてしまったのだ。

なんと恐ろしく苦痛に満ちた死に様だろうか。

様々な死を目撃し、自らも死を振りまいていたロンデスをして幼児の子供のように恐怖せざるをえない凄惨極まりない光景だった。

「皆、生まれ・ヤツに近づくな！」

ロンデスが言うまでもなく、リリクと同じようにジャイアント・スパイダーに近づいていたデズンとモーレットは踵を返して距離を取り始めていた。

ロンデスも距離を取りながら油断無く敵を観察する。

見た目は馬鹿でかいジャイアント・スパイダーそのものだ。

しかし実際はそうではないのだろう。

リリクを貪り食った黒い蜘蛛の大群がジャイアント・スパイダーの外骨格の中に滑り込んでいく。

その光景にロンデスは恐怖した。

まさか、あのジャイアント・スパイダーの中にはあの蜘蛛の大群が犇いていて、内部からジャイアント・スパイダーの外骨格を操っていると云うのか？

それはどういう理屈だと文句を言いたかった。

蜘蛛が大量に集まったところでそれは個々の集まりに過ぎない。それがどうしてあのように一つの意思を持っているかのような動作でジャイアント・スパイダーの外骨格を動かすことが出来るというのだ？

自然界に存在しないであろう余りにも異質な存在。もしかするとあの怪物はどこかの魔法詠唱者マジックキャスターが作り上げた人工の魔獣なのかもしれない。

もしそうだとすれば、その魔法詠唱者マジックキャスターこそが自分が属する国が全力を挙げて滅ぼすべき真の邪悪だろう。

「ちくしょう……エリオンもか」

胸に牙を差し込まれ声も上げる事無く絶命していたエリオン。

彼の遺骸もまた例の黒い蜘蛛に覆われていた。

リリクを貪り食った蜘蛛達と比べ、エリオンの口から濁流の如く漏れ出している蜘蛛は小型のものばかりだった。

恐らくは打ち込まれた牙に存在する本来は毒が分泌される穴を

通って直接体内に蜘蛛の群れが雪崩れ込んだのだろう。

毒よりも尚恐ろしい必殺の手段を持つ怪物にロンデスは戦慄を禁じえなかった。

「お、お前達！あの化け物を近づけさせなあ！」

隊長であるベリユーズから命令とはいえない叫びが上がる。

「どうやって？という疑問はあるが、ベリユーズの言っていることは間違っては居ない。」

あの化け物との接近戦は自殺行為だ。

此方がどんなに剣を振るっても、殺せる蜘蛛の数はその総数に比べれば雀の涙。

そんな事をしている内に急ぎ足で這い出てきた蜘蛛の大群に食い尽くされるのがオチである。

剣では戦えない。かと言って弓騎兵を呼んでも矢による攻撃もまた効果的とは言いがたかった。

「油だ！ 錬金油を持っているものはヤツに投げつけろ！ それと火種を持ってこい！ ヤツを火達磨にするんだ！」

ロンデスのその声を受けてすぐさま動き出す仲間達。

本来は村の建物を焼く為に用意していた錬金油だったが、部隊に魔法詠唱者が居ない現状、あの蜘蛛が寄り合わさった化け物を倒しうる面制圧可能な攻撃手段はそれしかない。

あの恐ろしい死に様を目の当たりにしておいて、出し洩る理由は無かった。

「くらえ化け物！」

次々と投げつけられる錬金油を入れた壺。

今は個人携帯が可能な量しかないが、4つも合わさればあの化け物を炎で覆う事の出来る量ではある。

投擲された壺から一呼吸遅れてロンデスは仲間が持ってきた火種を投げつける。

頼むから効いてくれ。

ロンデスの切実な願いを神が聞き届けたのだろう。

投擲された壺と火種は偶然吹いてきた追い風により予想外の速度

でもって化け物へ向かう。

そして、着弾、着火する。

しかし――

「オオオオオオオオオオオオオオアアアアアア!!」

巻き起こる紅蓮の炎は蜘蛛の化け物を焼く事は無かった。

まるで黒く色づいた風のように滑り込んできた巨体。

巨体が掲げる巨大なタワーシールドによってその悉くを防がれてしまったのだ。

唸るような風切り音を立ててタワーシールドが振るわれると、その表面で燃えていた錬金油が跳ね除けられ周囲へと飛び散った。

「か、神よ……」

仲間の誰かが神に救いを乞うた。

そんな彼を誰が軟弱だと笑えようか。

蜘蛛の化け物を守るように現れたその巨体。

仮に呼ぶならば「死の騎士」という名が相応しい、この世の邪悪が形を成したかのようなおぞましいアンデッドを前に平常心を保てる人間など居よう筈も無いのだから。

腐り落ちかけた顔面を更に歪ませ笑う死の騎士と、その後ろで蠢く蜘蛛の化け物。

二体の怪物が、ロンドス達に向かって近づいてくる。

互いに目配せしながら、歩調を合わせてやってくる。

まるで共通の目的を持つ熟練冒険者のように、脆弱な人間を遥かに超える力を持った強大な怪物達がタッグを組んでやってくる。

そして、絶望が始まった。

一番早く異変に気付いたのは子供達だった。

大人達に庇われるように村の行事で使う台座の影に隠れていた彼らは、二重三重に襲い来る恐怖の光景から逃げるように耳を塞ぎ地面

を見つめていた。

人が上げるものとは思えない濁音塗れの泡だった絶叫、皮をはがされ剥き出しになった筋肉を溶かされのたうち回るアンデッドよりも悲惨な姿になった人間の悶え苦しむ様。

それらは自分達の村を襲った憎き敵であろうと、哀れみを感じさせるほどの惨状だった。

もしあの恐ろしいモノが自分の身に降りかかったとしたら。そう考えただけで子供達は泣き出しそうになるほど恐ろしかった。

そんな恐怖を噛み締めながら地面を見つめる子供達の視界に、なにか動くものが映りこんだ。

「ひいっ！」

小さな悲鳴が上がる。

なぜならばソレは少しはなれた場所で猛威を振るっている怪物と同じ姿をしていたから。

そして、たくさん、居たから。

子供達が見つめる地面にはいつの間にか大量の蜘蛛が這い回っていた。

ただ数が多いだけではない。種類も豊富だ。

大きな蜘蛛、小さな蜘蛛、地面を歩く蜘蛛、巣を張る蜘蛛、木の上に棲む蜘蛛、地中に棲む蜘蛛。

子供達が生活の中で見かけたことのある、村に生息する蜘蛛という蜘蛛が一行になって移動していた。

次に気付いたのは村の大人達だった。

村の彼方此方から延びる黒っぽい線。それが地面を伝って今も猛威を振るう蜘蛛の怪物の下へと向かっているのだ。

次々に起こる異常な事態に恐怖しながらもその正体を知ろうと凝視すれば、それは蜘蛛で構成された幾つもの列だった。

一体この蜘蛛は何処から来たのだろうか？

蜘蛛達が襲い掛かってくる様子を見せない事に安堵しつつ周囲を見渡せば、どうやら蜘蛛達は村の中から現れているらしい。

半壊した家の中から、樹上に張られた蜘蛛の巣から、草むらから、野
花から、地中から。

カルネ村に棲んでいただろう蜘蛛という蜘蛛がお互い喰らい合う
事もなく、整然と列を組み蜘蛛の怪物へと向かっている。

そしてその体内へと潜り込んでゆくのだ。

「……村の蜘蛛達が、あの化け物になってるのか？」

「戦ってる……守ってくれている、のか？」

村人達がそれぞれ感じた考えを口にする。

言葉は違えどその内容は大よそ似通っていた。

——村の危機に蜘蛛達が立ち上がり、戦ってくれている。

なぜ戦うのかは分からない。

守ってくれているのかも定かではない。

だが精神的に追い詰められていた村人達は突如として現れ騎士達
を殺戮していく怪物と、村の蜘蛛達が見せ不思議な行動を希望的に結
びつける。

「きつとそうだ。村の蜘蛛達が、同じ村に住む俺達を助けに来てくれ
たんだ！」

誰かが興奮気味に呟いたその言葉は伝染病のように周囲に広がっ
ていく。

追い詰められていた精神にとって、希望を持たせるようなその言葉
はあまりにも心地よく染みこんでいく。

いまや村人達は誰もが熱く潤んだ瞳で、恐るべきアンデッドの騎士
と共闘し村を襲った殺戮者達を駆逐していく蜘蛛の怪物を見つめて
いた。

盾で殴られその身から零れる蜘蛛の何匹かが潰されようと、怯む事
無く戦うその姿に誰もが胸を熱くしていた。

騎士達が死に絶えたとき、次の標的は自分達なのではないかという
疑念から目を逸らしながら。

「アインズ」

虚空からの呼び声にモモンガ——アインズは頭を上げた。

その周囲には村からの逃亡者を確実に狩る為に配置されていた弓騎兵達の死体が散乱している。

「どうした？」

「残りの連中が掃討されそうだ。そろそろ止めるべきではないか？」

透明化した上に複数の隠密系スキルを発動させて姿を隠したクーゲルシュライバーの言葉にアインズは自身が実験に夢中になっていた事に気付く。

クーゲルシュライバーの言うとおりに全滅させてしまっただけはうまくはない。

「そうだな。情報を引き出さねばならん」

アインズは手に持っていた剣を投げ捨てる。

かつては綺麗に磨き上げられていた剣の刀身は今では見る影も無く腐食し朽ち果てており、地面に落ちた衝撃でバラバラに砕け散ってしまった。

『デスナイトよ、それぐらいにしておけ。デスウェブに騎士の捕縛を任せ待機せよ。抵抗するものがいれば多少痛めつけても良いが殺しはするな。利用価値がある』

アインズの思念に反応し、受諾の意が伝わってくる。

先ほどまで行われていた実験中に発見したこのテレパシーに似た力は便利である一方で、離れた相手がどのような状況でどのような気持ちでいるのかが分かってしまうという形容しがたい感覚をアインズに与えていた。

不快とまでは行かないが慣れない感覚であるそれを感じながら、アインズは魔法を発動させる。

《飛行^{フライ}》

アインズの体がふわりと宙に浮かび上がる。

「昔は物理ダメージ軽減とかの、恒常的にダメージを減少させる能力の方が羨ましいと言っていたのだが……」

「ごうもレベルの低い連中ばかりだと。今となつては私がお前を羨ましく思うよ」

クーゲルシュライバーの声が真横から聞こえてくる。

既に地上5メートルまで上昇しているにも拘らずだ。

おそらくは空中での歩行を可能とする魔法《空歩エアウォークき》を使用しているのだろう。アインズが驚く様子はない。

「それでも防御力に対して攻撃力が低すぎる場合そのダメージは0になる。この程度のレベル相手ではどの道同じ結果だろうよ」

「そうかもしれないがな……アルベド、来い」

「えっ?」

至高の存在同士の会話を邪魔しないようにと無言で控えていたアルベドだったが、突如かけられたクーゲルシュライバーの声に困惑した声を出した。

その様子にアインズはまたか、と内心ため息を漏らす。

「お前一人を歩かせるわけには行かないだろう? 乗せてやるから早く来い」

「そ、そのような事は出来ません!」

それ見ろこうなった。

思いがけない内容だったのだろう、大きく取り乱しながらも拒否するアルベド。

自覚しているのかしていないのか。どうもこの友人はNPC達を弄る悪癖があるように思える。

比類なき忠誠を誓い、ゆがめられた設定により愛を捧げるようになったアルベドに対して、自分の背に乗れなどと命令すればこうなるのは目に見えているではないか。

自分の勤める会社の社長か会長に突然、コンビ二連れてってやるからこつち来い、おんぶして行ってやる……などと言うわけのわからない命令をされるのと同じ事だ。

NPC達の背後にかつての仲間達の面影を見ているアインズにとって、彼らは愛すべき友人達の息子や娘のような存在だ。

そんなNPC達を玩具にし、右往左往する姿を楽しんでいるという

のであればそれはたとえ大切な仲間であるクーゲルシュライバーが相手でも嗜めるべきだろう。

単純に透明化して姿を隠しているだけなので、透明看破能力を有するアインズは見ようと意識すればクーゲルシュライバーの姿が見ることが出来る。

これで見えた姿が愉快そうにしているのであれば一言注意するところだが、クーゲルシュライバーにそんな雰囲気は微塵も無い。

そこにあるのは言葉どおり、一人仲間はずれになるアルベドへの氣遣いと善意しかなかった。

「それはそれで厄介だな……」

「うん？なにが厄介なんだ？」

首を傾げるクーゲルシュライバーに対してなんでもないと短く答えると、アインズはアルベドにも《飛行》^{フライ}の魔法を付与する。

最初からそうしておけばクーゲルシュライバーが余計な気を使うことも無く、アルベドがこうも慌てる事もなかった。

アルベドには悪いことをしたと反省しつつ、アインズは村に行く前の身支度を開始する。

露出している胸部をローブで覆い、骸骨の手を無骨な籠手をはめることで隠す。

そして最後に頭をすっぽりと覆うタイプの仮面をアイテムボックスから取り出す。

バリ島の仮面に似た泣いているようにも、怒っているようにも見える表情のその仮面には装飾が過剰なほどに施されていた。

嫉妬する者たちのマスクと呼ばれるその仮面を被れば、アインズの骸骨の見た目は全て覆い隠された事になる。

これで準備万端。さあ生き残り達の下へ行こう。

そう思った時、背後に控えるアルベドからなにやら押し殺した声が聞こえた。

「くっふふ……やっべえアインズ・ウール・ゴウン様かつわええ……」

——さつきアルベドはなんて言ったんだ？アインズ・ウール・ゴウン様……としか聞こえなかったが。

聞き逃した部分はそれほど多くは無いらうが、アルベドが隠すように呟いた言葉がなんなのかアインズは非常に気がかりだった。

まさか陰口ではないだろうか？

そう考えた時、アインズの脳裏に電撃が走った。

(な、なんとという事だ。アルベドはギルメンを愛している。つまりクーゲルシュライバーさんの事も愛しているわけで、さっきのアレはアルベドにとってはそんな愛している相手と触れ合うことの出来る絶好のチャンスだったんだ！そ、それを俺が《飛行》なんて唱えちゃったせいで台無しにしてしまったんだ！それでアルベドは怒っている……最低でも不満に思っているに違いない！)

横目でアルベドの様子を窺ってみれば、兜のせいで表情は読み取れないがその鎧に覆われ肩を小刻みに震わせているのが見えた。

まるでそれは怒りを堪えているようにも見え――

「……アルベドよ。クーゲルシュライバーの傍に居たいというお前の気持ちもわからんでもないが、今は未知の危険が蔓延るナザリック外だ。防御力に劣る私の傍に居てもらわねば困るぞ？」

気付けばいい訳めいた言葉を発していた。

言ってしまった事は無かったことにはできないが、それでもその内容におかしな部分はない。

前衛職であるクーゲルシュライバーよりアインズの方が耐久力に劣っているのは事実であり、より耐久力が低いほうを盾役が守るというのも間違っていない。

そして護衛対象であるアインズが空を飛んでいる以上、盾役であるアルベドが自在に空を飛べるか否かというのは防衛上非常に重要となってくる。

だからさっきの失態は危険な領域で行動するに当たって当然の行為であり、決してアルベドとクーゲルシュライバーのイチャイチャタイムを妨げるつもりは無かった。

アインズはそうアルベドに伝えたかったのだ。

仕事上必要な事なのだから仕方ない。そう納得して欲しかった。

「そ、それとだなアルベド。私の事はアインズでいい。長い名前だか

らな」

アインズがそういった瞬間。

アルベドの頭部を覆う兜の隙間から突風のような息吹が噴出してきた。ナザリツク地下大墳墓守護者統括であるアルベドの持つ肺活量のなんと強大な事か！

突如香るフローラルな香りにアインズは人間が瞬きするかのよう
に瞼のない目を点滅させながらアルベドを見た。

「くっふうー！ー！」

——なにこれももう可愛すぎて幸せすぎて私どうにかなっちゃう！
これがぶくぶく茶釜様とペロロンチーノ様が度々仰っていた萌えと
いう感情なのね！ああ私はなんて幸せ者なのかしら！至高の御方マ
ジ至高！分かっていただけどちよー至高！アインズ・ウール・ゴウン万
歳！アインズ・ウール・ゴウン万歳！

再び吹き出る芳しい突風に伴う騒音によって、アルベドが小声かつ
凄まじい速度で捲くし立てたであろう言葉はアインズに届くことは
無かった。

何を言っているのかは不明だったが、それでもアルベドが全身から
発散する喜びの感情はアインズにも見て取れた。

どうやら機嫌を直してくれたらしい。

些か腑に落ちないところはあるが、アインズは一応問題は解決され
たと判断して安堵する。

そこへアルベドが興奮した様子で詰め寄ってきた。

「あのーあのーあのっ！よ、よろしいのでしょうか？至高の41人の
方々を指す、栄光あるお名前を略すなどという、ふ、ふ、不敬をおこ
にやって！」

不敬もなにもあるものかとアインズは思う。

むしろこうして興奮の鼻息荒く主人に詰め寄っている事の方が
よっぽど不敬に当たるような気もするがアインズにはそれを指摘す
るつもりは全く無い。

この名前を尊いモノと捉え、それを略して呼ぶことにここまで興奮
して喜びを顕にするアルベドに対してそんな意地悪な事をするほど

アイNZは捻くれた性格をしていなかった。

「構わないとも。この名を名乗ることはクーゲルシュライバーとも相談済みだ。ならばこの名は私の名前。自分の名前である以上、この私が許そう。その名で呼ぶことをな」

「畏まりました、で、ですが敬称をつけさせていただきます。で、では……わ、私のご主人様であり愛するお方、ア、イ、ン、ズ、様。く、くふふふ……」

愛する、などと。

顔は見えていないが普段のアルベドの姿を知っている以上、彼女の水蜜桃の如き感情がたつぷりと詰まっている「愛するお方」という言葉にアイNZは少なくない気恥ずかしさを感じた。

挙動不審気味に視線を左右に動かせば、無表情のはずなのにどこかニヤニヤ笑っているような雰囲気のクーゲルシュライバーが目に入る。

やめろ、見るな。余計に恥ずかしい。

アイNZは湧き起こってきた羞恥心から、ローブを翻す勢いでアルベドに背を向けた。

精神作用無効化が発動し平常心を取り戻したアイNZの背に、まともやフローラルな風が吹き付けられる。

「し、死ぬ、萌え死ぬ……と、ところでアイNZ様？」

背後から鎧がたてるガシャガシャという音に紛れてアルベドの声が聞こえてくる。

首を動かして見てみれば、全身鎧を着たアルベドが内股になって身をくねらせている。

普段の姿ならいざ知らず、今は彼女の目もくらむような美貌は一切外に出していない。

そのためアイNZでも引くほどにその姿は異様に見えた。

「も、もしかして、くふふふ……私だけ、あ、あのー至高の御方々を除いて、特別……略して呼んでいいとかで……」

「勘違いするな。いちいち長い名前で呼ばれるのがこそばゆいだけだ。全員同じ呼び方で統一するつもりだ。お前だけ特別扱いすると

「いうわけではない」

「……そうでしたか。これは失礼いたしました」
「？」

——これがツンデレ！なんという威力なの!?

アルベドを落ち着かせる為にあえて強く冷たい言葉を使つたつもりなのだが、アルベドの浮ついた様子は一向に収まる気配を見せない。

その事に疑問を抱きながらも、アインズは移動を開始する。些か時間を浪費しすぎていた。

デスナイトから得た情報を基に村人達がいる広場とそこにある質素な台座を目指して飛行する。

風がバタバタと吹きつける。明らかにユグドラシルでは出ないほどの速度が出ていた。

他の二人はちゃんとついてきているだろうかと振り向けば、そこには足場も何も無い空中で素早く足を動かしまるで滑るように移動するクーゲルシュライバーの姿と、鮮血のような赤に染められたマントをはためかせながら飛行するアルベドの姿があった。

誰一人はぐれる事無く追従できていることを確認し再び前方へと向き直れば既に目的地上空に到着していた。

広場の上空から下を見下ろせば、大地の所々に黒と白に染められた部分があった。

そこにあつたのは複数の死体。蜘蛛の糸に捕らわれながら悲鳴を上げる複数の騎士。よろめきながらも生きて立っている数名の騎士。そしてデスナイトとデスウェブだ。

息がある騎士はデスウェブに捕らえられた者達を含めると8人。

アインズが必要とする数を大きく超えていたが、まあ多い分には構わない。

それよりも問題なのは、いや、疑問が一つあつた。

(……なんで村人達はデスウェブに祈りを捧げてるんだ?)

広場の中央。質素な台座を中心に集まる60弱の村人達は皆地面に跪き両手を胸の前で組んで——エンリとネムがやっていたアレだ

——デスウェブを見つめていた。

彼らの真摯な姿と目に宿る畏敬の念。

それはついさつきエンリとネムの両名に実践され教えられた、神を信仰する人間の姿だった。

(ええええええええええ？なんでそうなってるの?)

よく見ればデスナイトに対してもそのような姿勢を見せる村人もいる。

いくら命を救ってくれた恩があろうと、アンデッドに対して信仰の姿勢をとるのはなにか間違っていないだろうか？

いや、折角助けたのにアンデッドであるという理由で排他的になられても困るのでこれはこれでありがたい展開ではある。

(でも面倒ごとの予感がするなあ。宗教関係に踏み込むのはまだ早まって言うのに、なんでこうなるんだよ)

アイنزは心中で現状への不満をぶちまけると、それを感じさせない威厳ある声であるように心がけ口を開いた。

「デスナイトよ。そこまでだ」

アイنزはアルベドを伴って、ゆっくりと地上に降り立った。

広場に居た人間全ての視線が自身に向けられているのを感じ、アイنزはクーゲルシュライバーの存在が完全に隠蔽されている事を確信した。

デスウェブに対して祈りを捧げるような村人にクーゲルシュライバーの存在を知られたらまた面倒な事が起こる。

そういった心配があつたが、どうやら杞憂だったようだ。

(よかった。恐怖の本質^{エッセンス・オブ・ホラー}より数段性能が劣る隠蔽らしいけど、十分な効果があつたみたいだ)

余計な騒動が起ころなかつた事に満足しつつアイنزは生きている騎士達を見つめた。

騎士達は表情の抜け落ちた虚ろな表情でアイنز達を眺めている。

剣を握んだ手は力なく垂れ下がっており、抵抗する気力が皆無である事を窺わせる。

希望の欠片も存在しない絶望の中で、さらなる絶望がやって来たか

のように、ただ彼らは無抵抗で立ち尽くしていた。

「はじめまして、諸君。私はアインズ・ウール・ゴウンという」

その言葉に誰も返事を返さない。

「投降すれば命は保証しよう。まだ戦いたいと——」

その言葉にすぐさま剣が投げ捨てられる。立っている騎士達全員が剣を捨てるのにかかった時間は一秒にも満たなかった。

蜘蛛の糸にグルグル巻きにされている騎士達も、枯れ果てた声で投降の意思を叫んでいる。

「……よほどお疲れのご様子。だがデスナイトの主人でありデスウェーブを遣わした者の友である私を前に頭が高いな」

その言葉に騎士達は黙して跪き頭をたれる。

投降を叫んでいた捕らわれの騎士達も叫ぶのを止めて沈黙していた。

その姿は最早どうにもならぬと悟り、ただ斬首される時を待つだけの囚人と同じだった。

「諸君らには生きて帰ってもらう——そして諸君らの上司、いや、飼いに伝える」

『モモンガさんオーラオーラ！ここで絶望のオーラーですよ！』

(えー……)

アインズが跪いた騎士の兜を剥ぎ取った時に飛んできたクレーゲルシュライバーのく伝言^{メッセージ}。

その暢気な内容に演技も忘れて気の抜けた声を出しそうになったがアインズはそれ心の中だけに留めることに成功した。

たしかに脅しの効果を高められるような気もするのでここは仲間からのリクエストに答えるとしよう。

アインズはそう思い、絶望のオーラーを発動させる。

その瞬間、疲労に濁った瞳がこぼれ落ちるのではないかという程に見開かれ、ブルブルと震えだした。

元々浅かった呼吸は更に浅くなり、途切れ途切れになっている。

長引かせれば命を失ってもおかしくないほどに怯えた騎士の体調を慮り、アインズは速やかに用件を伝えた。

「この辺りで騒ぎを起こすな。騒ぐようなら今度はお前達の国に死を告げにいくと伝えろ」

騎士は震える体で白目を剥き舌を飛び出させた頭を何度も上下に動かす。

今にも死にかねないその姿に、やはり演出過剰だったかとアインズはマスクの目の部分から立ち上る絶望のオーラを納めた。

「行け。そして確実に主人に伝えろ」

顎でしゃくると騎士達は文字通り転がるように一目散に走り出す。

それを見ていたのだろう、拘束された騎士達から悲痛な叫びがあがった。

「わ、私も投降しました！どうか！どうか慈悲を！そ、そうだ！私はこれでも国では資産家です！お望みの額を必ずお渡しするので、なにとぞ！なにとぞ命だけはお助けください！」

そういうえばそういう奴らも居たなとアインズは思案する。

別に先の騎士達と同じように逃がしても良いのだが、さてどうするか？

『モモンガさん。あいつら貰ってもいいですか？』

クーゲルシュライバーからの＜伝言＞^{メッセージ}だ。その声色には欲しいものをねだる子供のような純粹さがあつた。

『貰うって、どうするんですか？』

『エーテル化の魔法をかけて、ネムにつけた転移蜘蛛^{フエイズ・スパイダー・スウォーム}の大群の餌にしようと思ひまして』

『ええ？でも投降すれば命は保証するって言っちゃいましたし……』

『じゃあ殺さないように加減して食べるって言ひ聞かせますから！あの程度食べたら治療して何処かに捨ててきますから！ね？お願いします！』

いつになく熱心なクーゲルシュライバーにアインズは首を傾げる。その姿を見た騎士達が絶望的な表情を浮かべるが、アインズは全く気にしない。

『どうしたんですか？その拘り様』

『いや、なんとですかですね。自分が作ったモンスターが妙に可愛

くつて……モモンガさんはそういうのありません?』

アインズは自らが創造したデスナイトを見る。

腐り落ちかけた顔を凝視するが、クーゲルシュライバーが言うような可愛さは全く感じない。

むしろ気持ち悪い。

『いや、そういうのはないですね』

『そうですか……。なんといいですかね。精神的な繋がりに伝わってくるあいつらの気持ち、なんとも素朴というか、和むというか』
『うーん。デスナイトからはそういうのはあまり感じられませんが……』

『となると私だけなんですかね。なんかこう、ガンバル!とかママ!。パパ!みたいな子供っぽい感じですよ。すごい慕ってくれてるんですよあいつら』

クーゲルシュライバーの言うような感覚はアインズには全く無かったが、彼の言わんとする事は理解できた。

純粹に自分を慕ってくるモンスター達が可愛くなってしまったと。
フェイス・スパイダー・スウォーム
そして転移蜘蛛の大群達が腹を減らしているのだろう。

それを感じ取ってしまい彼らを可愛く思っているが故にその要望を叶えてやりたくなってしまった。きつとそういう事なのだろう。

クーゲルシュライバーの、自身を慕ってくる子供のような存在を可愛がりたい大切にしたいという気持ちはアインズにも十分理解できた。

つまり、アインズ自身がナザリックの全NPC達に感じる愛情のよくなるものだろう。

その結論に至ったとき、アインズの答えは決定された。

『いいですよ。でも命を奪わないように気をつけてくださいね。約束した事はできるだけ此方から破りたくはないので』

『ありがとうモモンガさん!あいつらもきつと喜びます!それじゃ、サクツとエーテル化させちゃいますね!』

伝言が切れるのと同時に、捕らわれていた騎士達——金がなんだと騒いでいたやつも当然含む——の姿が消えうせた。

中身を失った蜘蛛の糸が音も無く潰れていく。

《イセリアルネスエーテル化》の魔法によってエーテル化し、エーテル界へと連れ去られたのだろう。

暫くは苦痛に満ちた残酷な時間を味わうことになるだろうが、命は保証されているので約束を破ったことにはならない。

此方に落ち度は無い事を再確認すると、それ以上アインズは別次元に拉致されていった哀れな騎士達を気にかけることはなかった。そんな事より優先すべき事があるのだ。

アインズは頭の中でデスナイトに従者スクワイア・ゾンビの動死体の片づけを命じると、村人達にむかって歩き出す。

距離が近づくにつれ村人達の表情に恐怖と混乱がはつきりと交じり合っていく。

怯えが限界に達した数人の村人がデスウェブに向かって一心不乱に祈りを捧げ始めるのを見て、アインズは自分の失敗を悟った。

今の自分は彼らを恐怖のどん底に叩き落した騎士達よりも強い力を持った恐ろしい存在。

弱者である彼らからすれば敵か味方かも分からない正体不明の怪しい人物だろう。

アインズは村人達を無駄に——情報が得づらくなるという意味——怖がらせた事を反省しつつ、彼らからある程度の距離を置いて立ち止まると、親しみを込めた優しい口調で語りかけた。

15話

(改めて見てみればこれはすごいなあ)

クーゲルシュライバーは二対の後肢で体を支え頭を持ち上げると、前肢二対を万歳するように掲げて空を見上げていた。

青い空。白い雲。そして燦然と輝き暖かさと光を地上に与える太陽。

その全てに手を振る。両方の擬腕と、ククリナイフのような形状をした爪を有する前肢をゆっくり大きく振る。

(おーいみんなー！元気かー？！元気なんだろうなー！)

自然が自然のままそこにある。

間違いない本物であるその光景は、やはりユグドラシルはゲームでしかなかったのだとクーゲルシュライバーに強く実感させていた。

なんて美しいのだろうか。

以前モモンガからこの世界の星空が如何に美しいかを熱心に語られたことがある。

その時は関心を示しつつも検証を優先してしまったが、これほどまでに美しい世界ならば今度モモンガと一緒に夜空のデートとしゃれ込むのも悪くないかもしれない。

いや、デートしよう。

二人で夜空を見上げて適当な星に名前をつけたり、星座を決めたりするのはきつとすごく楽しいに違いない。

モモンガと肩を寄せ合いながら、あの星達の形はダブルラさんであつちはおくく茶釜さんに似てるね、なんて言い合うのだ。

NPC達の星座を作るのもいいかもしれない。

デミウルゴス座とか恐怖公座なんていうネタっぽい星座を作ればモモンガもきつと大笑いすることだろう。

精神作用無効化によって抑制されてしまうと勿体無いので、デート決行日にはアンデッドやスライム等の精神作用無効化を打ち消すアイテム《完全なる狂騒》を忘れないようにしましょう。

クーゲルシュライバーが産まれた頃には既に実行不可能になって

いた「天体観測デート」。

かつての仲間であるブループラネットに散々星空について語られたクーゲルシュライバーとしては、そういう遊びに少なからぬ興味があったのだ。

男同士のデートではあるが、それはそれで趣があつていいではないか。寧ろ気を使わなくていいから思う存分楽しめる。

クーゲルシュライバーは期待感に胸を膨らませていた。

(さて、それは決定としてだ……)

クーゲルシュライバーは肢を全部地面につけると、カルネ村の様子を眺める。

現在モモンガが旅の大魔法使いアインズ・ウール・ゴウンとしてこの村の村長から情報を引き出している。

その間クーゲルシュライバーは情報を集めるため村を散策する事になっていた。

アルベドにもアインズから同じ命令が出たのだが、散策に二人も人員をさくほどこの村は大きくない。

その為クーゲルシュライバーはアルベドには村長の家周辺を散策するよう命じていた。

今頃は何時でもアインズを守れるよう、絶妙な距離をキープして散歩を装い周囲の警戒をしているだろう。

(皆精が出るなあ。流石は農民。頑丈だ)

ハイド状態のクーゲルシュライバーに気付く村人はおらず、彼らはあんな事があつたにもかかわらず熱心に作業に勤しんでいる。

どうやら遺体集めをしているらしい。

騎士に破壊された家の扉などをタンカ代わりにして、その上に殺された村人の亡骸を乗せて村外れへと運んでいる。

既に腐敗が始まっているのだろう、濃密な死臭を間近に感じる。

クーゲルシュライバーでそうなのだから、亡骸を運ぶ村人達は凄まじい臭気を感じているはずだ。

それでも泣き言一つ漏らさずに黙々と死体運びをする彼らにクーゲルシュライバーは人間の逞しさを感じた。

(ほつとけば疫病の元になるしな。……それか、放置するとアンデッドになるとかも在り得ない話じゃないか)

いづれにしても、現実かつ切羽詰った事情があつて遺体の回収をしているに違いあるまい。

彼らの汗が滲む苦しそうな表情を見て、クーゲルシュライバーはそう結論付けた。

(まあ、それはいいんだがな。アレをどうするかが問題だなあ)

視線を向けた先、つい先ほどまで凄惨な殺戮の場だった村の広場では、デスウェブが自分の張った蜘蛛の巣をいそいそと片付けている最中だった。

粘着性のある糸なので放置しておくとならば村人達の邪魔になるし、事故の原因になるかもしれないと判断したクーゲルシュライバーが片づけを命じていたのだ。

デスウェブが製作者の命令を良く聞き熱心に作業にあたったおかげで、もう殆どの糸の回収されていた。

それは問題ない。

問題なのは――

(デスウェブを拝む人、多すぎ)

仕事の最中だろうと、この広場を通りすぎる村人達は皆例外なく糸集めに夢中になっているデスウェブに向かって一礼している。

なかには一礼するだけではなく小さくデスウェブへの感謝と祈りを呟く者もいた。

そういった者達が度々口にする蜘蛛の神様、蜘蛛神様、といった言葉。

これがクーゲルシュライバーには問題だった。

(神様扱いはまずいってモモンガさんとは意見が一致したけど、コレどう見ても手遅れだよなあ)

現状この世界における宗教がどのようなものか全く判明していない以上、そこを刺激する行為は慎むべきである。

その判断にクーゲルシュライバーは異論はなかった。

宗教というのは絶大な力を持っている。それは良い面でも悪い面

でもだ。

宗教戦争、異端狩り、宗教裁判――

そういった言葉が脳裏に浮かんで消えていく。どれもこれも実に厄介な代物だ。

当初はカルネ村を実験場としか見ていなかったクーゲルシュライバーだったが、ネムと約束を交わしてからは多少村に対して情が移ってきているのは事実だった。

ナザリックに火の粉がかかるというのなら防火帯としてカルネ村を見捨てる事に迷いはないが、折角救った村でもあるし出来ればこれ以上悲惨な目にあつて欲しくはなかった。

（全員の記憶を操作するのは無理だし……今更デスウェブを消したところで効果は薄いだろうな。そうなると村人達の信仰をなるべく地味な感じで着地させるしかないか？）

「神への信仰」ではなく「命の恩人への感謝」ならば面倒事にはなるまい。

つまり強盗に襲われる飼い主を助けたチワワの話みたいな美談にしてしまえばいい。

そう思いついたクーゲルシュライバーは考える。神と命の恩人、その違いはなんだろうか？

（神聖性のなさ、つまり身近で、親しみがあるかどうかかなあ？）

高尚な存在ではない事をアピールすれば良いのではないだろうか？

出来が悪いと自負している頭脳からいとも簡単に出力された考えに一抹の不安を感じながらも、クーゲルシュライバーはそれを実行する事を決めた。

さしあたり共同作業なんかさせると良いのかも知れない。

よく見てみれば作業する村人のなかには先ほど森の中で助けたエンリとネムの姿もある。

死体運びだろうが、その他の作業だろうがこんな文化レベルの世界の事、どれも重労働であることには変わらない。

エモット姉妹――特にネム――に対してはかなり親しみを感じて

いる事もあり、クーゲルシュライバーとしては彼女達の負担を軽減させてやりたい気持ちがあった。

念のため交渉中のモモンガに伝言でその由を伝える。

反応は良くはなかったが最終的に許可が貰えたのでクーゲルシュライバーは早速デスウェブに命令を下した。

黙々と死体を板切れに乗せて運搬する。

血が抜けていたり、体の部位が欠損していたりして体重が軽くなっている隣人達の亡骸ではあるが、何度も運搬すれば当然疲労が積もっていく。

それに数人分も亡骸を運べば持っている板切れに血や油がこびり付いてくる。

だからだろう、広場に差し掛かったあたりで一人の村人が手を滑らせてしまった。

「あっ！」

何かを言う事も出来ず、支えを失った板切れが傾き上に載っている遺体が地面へ向けて転がり落ちていく。

最早死に絶えているがそれでも今日まで同じ村で暮らしていた仲間の体である。

無残に斬り殺されたその体にさらなる傷をつけてなるものかと手を伸ばすがとても追いつかない。

地面にぶつかる。

そう思った瞬間、地面に落ちる仲間の遺体を優しく受け止めた者がいた。

「うわっ！」

「ひ、ひいっ！」

ペアを組んでいたもう一人の村人と共に彼は慌てて後ずさり、尻餅をついた。

恐怖に歪んだ表情の二人が見つめる先には大きくカーブした巨大

な牙で運んでいた遺体を受け止めている大きな蜘蛛の姿があった。

その蜘蛛の事はよく知っている。

村の蜘蛛達をその体に受け入れながら、村を襲った者達を次々と殺していった蜘蛛の神様。

いや、化け物だ。

間近で見れば分かる。こいつは正真正銘の化け物であり、決して神聖な者ではない。

神様などと崇めているのは眼前で騎士達を殺戮していったその桁違いな力が恐ろしいから。

自分はアナタの仲間なので、どうかどうか此方に攻撃しないでください。

そういつた恐怖が恭順を強いているに過ぎなかった。

今までは広場で糸を集めていただけなのに一体なぜ？

何の為にこいつは此処にきたんだ？

もしかして、糸集めしてたら腹が減ってきて俺達を食おうっていうんじゃない？

そんな想像が次々と浮かんで、成人男性二人は恥も外聞もなくお互い抱き合ってブルブルと震えていた。

「だいたいしようぶ」

「え？」

背後から聞こえてきた少女の声に振り向けば、そこにいたのは彼らもよく知るエモット家の次女ネムだった。

だが、何かが違う。

見慣れているはずのネムの姿。今朝までと変わらないその姿に言い知れぬ違和感があった。

だが、その違和感の正体がなんなのかについて考える余裕は彼らにはなかった。

違和感はそのまま放置され、やがて違和感ではなくなっていく。

「皆を運ぶのを手伝ってくれみたいだよ」

ネムが軽く息を乱しながらそう言うのと、驚くべきことに蜘蛛の化け物が肯定するかのように頭をさげた。

その様子に大人二人は困惑する。

なぜネムはこの化け物のやろうとしていた事がなんなのか理解できたのだろうか？

なぜそんなにも恐ろしい化け物の傍に近寄れるのか？

なぜ化け物も慈しむように肢でネムの頭を撫でているのか？

分からない事だらけだった。

だがそれでも、この化け物がネムの言うとおり仲間達の遺体運びを手伝うつもりなのは理解できた。

「そ、そうか。それじゃあお願いしようかな、いや、お願いします」

「あつ、運ぶ先は村外れの、あつちの方なんですが……」

震える指で行き先を示すと、蜘蛛の化け物はわかったとでも言いたげに頭を上下に振ると、驚くほど滑らかに、かつ人力で運ぶ何十倍の速度で遺体を持って走り去っていった。

「すげえ……」

「ああ……それに死体を埋葬するのを手伝ってくれるなんて、神様っていうのもあながち間違っていないのかも」

呆然と呟く村人二人の表情には先ほどまでであった恐怖の色は無かった。

かわりにそこにあるのは、純粹な驚きと丁寧に仲間の遺体を扱ってくれる得体の知れない存在への敬意だった。

「あはっ」

そんな村人達の後ろでネムが笑っていた。

瞳孔は開ききっており、頬は赤く染まっている。

内股で前かがみになる彼女の視線の先には早くも遺体を置いて戻ってきたデスウェブの姿があった。

ネムの小さな体がブルリと震える。

「撫でられたとき、すご、すごかった……もしも啞えられちゃったら、どうなっちゃうんだろう」

誰にも聞こえないように、恥じ入るように小さな声で呟くネムは想像する。

あの遺体のようにデスウェブに啞えられる自分の姿を。

村人に聞いて知った蜘蛛の大群に纏わりつかれる自分の姿を。

——突如としてネムの視界が白く弾けた。

「え？あつ、なに？あつ！あつあつ!!」

ドサリ、と音を立ててネムは地面に倒れこんだ。

「あ、おいネムちゃん！大丈夫かい？」

「立ちくらみかな？少し休んでいたほうがいいぞ」

地面に座り込み荒い息をしながら体を震わせるネムを心配して村人が近づいてくる。

それをどこか邪魔に思いながらもネムは人生で初めて体験する不思議な体の異常に酔いしれていた。

村外れの共同墓地で葬儀が始まる。

みすぼらしい柵に囲われ、墓石らしき名前の刻まれた丸石が彼方此方におかれた質素な墓地の中で、アインズとの会話を一時中断して出てきた村長が鎮魂の言葉を述べている。

クーゲルシュライバーの知らない、ユグドラシルとは関係なさそうな神の名前を呼び、魂の安息を祈っている。

今回の襲撃で殺された村人の遺体はデスウェブの活躍もあって全て回収されていた。

その中にはエンリとネムの両親も居たのだろう。少し顔を見てもたい気もするが、いまさら見に行くのも野暮な気がする。確かめる機会は失われたのだ。

儀式が進み、いざ墓穴に土をかける段になったところで堪えきれず堰を切ったように泣き出すエモット姉妹をクーゲルシュライバーは胸をときめかせながら見ていた。

（不謹慎だ。不謹慎なんだが、こう、アレだけ泣いていると仲の良い家族だったことがよくわかってしまつて……それが失われた悲しみの程もわかつて、なんとも、なあ？）

20にも届かないうら若き乙女が顔を覆つて両親の墓前で泣いて

いる。

それは悲しい光景だった。

悲劇の1シーンにありそうだとクーゲルシュライバーは思う。だがこれは劇ではなく、現実である。

それは先ほど村を散策している途中に気付いた本物の自然を体感した事から身に染みて理解できている。

だがそれでも。いや、それだからこそクーゲルシュライバーは楽しかった。

自他問わず、感情が揺さぶられる事のなんと素晴らしいことか！

感動や感激。クーゲルシュライバーはそういった感情のうねりが大好きだった。

思えばそれが動画製作に手を出した理由だったのかもしれない。

そんな事を考えながらも、クーゲルシュライバーは眼前の「感動的なシーン」を眺める。

(こういう時精神作用無効化は邪魔だ。折角のお楽しみタイムがあったという間に終わってしまう)

人間だった頃ならもらい泣きする程に感動が高まったとき、途端にその感動が薄れ精神に静寂が訪れる。

それを忌々しく思いながらクーゲルシュライバーはエモット姉妹について考える。

こういった悲しい出来事を見るのは好きだが、これらが現実である以上自ら積極的に悲しみを増産しようという気はない。

深い悲しみに沈む彼女達を心配するのは当然の事だ。

(良いものを見せてくれた礼もしたいし、ネムとの約束もある)

以前誰かが言っていた。

女性を助ける時、ピンチから助けるだけでは不十分。その女性の心まで救って初めて助けたことになるのだと。

ネムの願いは「私達を助けてください」だった。

流石に村人全員を助けるほどのサービス精神は持ち合わせていないが、それなりに情を感じるエモット姉妹だけなら多少苦勞してもいいとクーゲルシュライバーを思っていた。

(……デスウェブをこの村に残してみるか)

クーゲルシュライバーは先の出来事を思い出す。

村人二人に驚かれるデスウェブに恐れる事無く近づき、その真意を見通したネム。

彼女の瞳孔が開ききった興味津々な瞳がデスウェブにも向けられていることをクーゲルシュライバーは見逃さなかった。

恐らくネムはデスウェブの事も村を助けてくれたヒーローのように思っているのだろう。

であればそのヒーローが傍に居てくれるという事実が、どれだけ彼女の心の支えとなるか想像するのは容易い。

一番感謝されるべき、実際感謝されているだろう自分がカルネ村に残るわけにはいかない以上デスウェブを残すのが一番良いだろう。

クーゲルシュライバーは隣で懐の短杖を弄っているモモンガに伝言を飛ばす。

『モモンガさん、デスウェブを村に置いていこうかと思うんですけどダメですかね?』

『え、突然なんです?』

『実は……』

クーゲルシュライバーは自分の考えをモモンガに説明する。

現在村に広がりつつデスウェブ信仰についても併せて伝えるとモモンガから唸り声があがった。

『まさかそんな事になっていようとは』

『まさかの事態ですよねえ。……それで、どうでしょう?ダメですかね?』

『ダメです』

『ぐぬぬ……ダメかー』

野良猫に餌をあげようとしたら通りすがりの人からそれを咎められた小学生のようにクーゲルシュライバーは落ち込んだ。

しかし断られるのを予想していなかった訳ではない。

デスウェブは自分達からしてみれば大したことのない雑魚モンスターだが、この世界の住民にとってその存在は大きすぎるらしい。

絶大な武力を誇る存在をこんな農村に、しかも二人の姉妹のメンタルケアの為だけに置いておくなんて厄介ごとの種になる未来しかみえない。

何か別の方法を探そう。クーゲルシュライバーは潔くデスウェーブを残すという案を破棄した。

『じゃあいいです。それで、まだ葬式見ます?』

『いや、もういいです。村に戻りましょう』

それだけ言うとモモンガは伝言を切って村へと歩き出した。

村に行く途中、アルベドとエイトエッジ・アサシンが後詰の状態について報告しに来たが、その対応は全てモモンガに任せてクーゲルシュライバーは一人思考に没頭していた。

(デスウェーブの戦闘力が問題になるなら……)

クーゲルシュライバーはエモット姉妹メンタルケア計画を未だ捨てきれずにいた。

その後、葬儀から帰ってきた村長とアインズの話し合いは少なくなっていく時間続いた。

ある程度の情報を得たアインズが村長の家から出たのは西の空に夕日が落ちようとする時刻だった。

「はあ……もういい。……ですべき事は終わった。アルベド、帰るぞ」「承知いたしました」

村長の家の周囲を巡回していたアルベドがアインズの傍に侍る。そんなアルベドからはピリピリとして空気が放たれている。

その理由をすぐさま察したアインズがアルベドに人間が嫌いかと問いかげようとしたとき、それを遮るように透明化したクーゲルシュライバーが口を挟んだ。

「アインズ、この村に何者かが接近してきている」
また面倒事か。

アインズは舌打ちを隠そうともせず苛立ちを顕にした。

16話

現れたのは各々装備に違いがある傭兵めいた20騎の騎兵だった。彼らは馬に騎乗したまま広場に乗り込んでくるなり、デスナイトと襲撃時子供達が隠れていた木製台座の影からこっそり顔を出しているデスウェブに警戒しつつ見事な整列を見せる。

その中から馬に乗ったまま一人の戦士が進み出た。

騎兵達の中で最も目を引く屈強な男だ。おそらくはこの集団のリーダーなのだろう。

念のため透明化のほかに隠密系スキルを上掛けたクーゲルシュライバーは音も気配もなくこの男の背後ににじり寄った。

完全な隠蔽効果を持つ《恐怖の本質》エッセンス・オブ・ホラーを使用していなくても気付かれた様子は無い。

明らかに暴力を生業にしているだろう勘のよさそうな男が相手でも、自分の隠密能力は通用するのを確認したクーゲルシュライバーは背後から何時でも首を切り飛ばせる準備をした上で油断無く《真意看破》を使用する。

1分にも満たない短い時間だが、クーゲルシュライバーはこの男が義理や人情を重視する人間である事を確信した。

短い時間で確信が得られたのはそれだけこの男が、悪く言ってしまうと単純だということだろう。

コイツは所謂「良い人」なのだ。

その事を念頭に置いて接するべきだろう。クーゲルシュライバーは《伝言》メッセージで彼らに直接相対しているアインズに自分の考えを伝えた。

交渉している場面を見たわけではないが、村長からあれだけの情報を浚い上げたアインズの対人交渉スキルと思考力は明らかに自分を超えている。

きつと彼ならばこの情報を有効活用してくれるはずだ。

前に進み出た男はナザリックに属する者達を注意深く観察している。

やはりナザリックに属する者達は異質なものに見えるのだろう。デスナイトとアルベドを特に念入りに見つめているのは戦士としてその力量を推し量ろうとしているからだろうか？

彼の目が節穴ではなく此方の戦力がどれほどのものなのかを感じ取ってくれることをクーゲルシュライバーは期待した。

先の襲撃犯とは明らかに装備が異なり、鎧の胸に刻印されている紋章も異なる彼らはその堂々とした振る舞いからして、この村が所属している国の騎士だと予想されるからだ。

出来ることなら戦闘は避けたかった。

「――私は、リ・エステイーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士達を討伐するために王の御命令を受け、村々を回っているものである」

その静かな、しかし聞き取りやすい声は広場にいる者達だけではなく家々の影から此方を窺う村人達にも届いたのだろう。

あちこちでざわめきが起こっている。

王国戦士長。

交渉中のアインズから伝言で伝えられた情報の中にはそのような役職、人物に関するものは無かった。

アインズも疑問を感じたのだろう。村長にどのような人物なのか小声で質問している。

「……………どのような人物で？」

「商人達の話では、かつて王国の御前試合で優勝を果たした人物で、王直属の精鋭騎士達を指揮する方だとか」

「目の前の人物が本当にその……………」

「……………わかりません。私も噂話でしか聞いたことがないもので」

鋭敏な感覚でその会話を聞き取ったクーゲルシュライバーは判断材料を増やしてやろうとアインズに彼が嘘を言っている様子はない事を伝えた。

特殊技術^{スキ}《真意看破》で観察した結果である。

『ありがとうございます。助かりますよクーゲルシュライバーさん』
アインズからの予想以外に柔らかな感謝の言葉に、彼の役に立てた

とクーゲルシュライバーは喜んだ。

なにかと面倒な仕事ばかりを押し付けているアインズに対して、これぐらいはやって当然の事だがそれでも嬉しいものは嬉しいのだ。

「この村の村長だなぁ？横にいるのは一体誰なのか教えてもらいたい」アインズを凝視していたガゼフの視線が村長に向けられる。

身分が圧倒的に違う相手からの鋭い視線を受けてたじろぐ村長を庇うようにアインズが一步前が出る。

「それには及びません。はじめまして、王国戦士長殿。私はアインズ・ウール・ゴウン。この村が騎士に襲われておりましたので助けに来た魔法詠唱者です」

アインズが一礼し自己紹介すると、それに対してガゼフは即座に馬から飛び降りる。

そして同じ大地に立ったガゼフは重々しく頭を下げた。

「この村を救っていただき、感謝の言葉も無い」

王国戦士長という高い地位にいる存在が見せる真摯な態度にクーゲルシュライバーはいたく感心する。

なんと気持ちのいい男だろうか。

ろくに謝罪すらできない大人を多く知っているクーゲルシュライバーとしては彼の行動は非常に好ましかった。

アインズに教えられた情報では、この国では数年前まで奴隷として人間の売買が行われていたらしい。

人権など存在せず、身分の差が非常に明確な世界でこのような行為を行うのだ。

そこに含まれる意味の重さはかつての世界と比べればまったく違うのはクーゲルシュライバーにも十分理解できる事だった。

やはりこいつは「良い人」だ。

《真意看破》の効果について信頼を深めると同時に、クーゲルシュライバーはガゼフという人間の評価を上向き修正する。

アインズもガゼフの人柄を知ったのだろう。

自分に向けられた礼に相応しいだけ態度を軟化させてみせると、会話を開始する。

素性を隠そうとするアインズと、その職務ゆえにどのような者なのか探ろうとするガゼフの会話は思っていた以上に穏やかに進んでいく。

それはアインズが問題を起こさないようにとガゼフに対して協力的な態度を取っていたのが大きな理由だろう。

納得しているかは分からないが、ガゼフはアインズの事を旅の冒険者であるとして話を進めている。

今のところは問題なさそうだ。

クーゲルシュライバーがそう思った時、あまり突っ込んでもらいたくない部分にガゼフが触れてきた。

「騎士達を殺したと言うが……それはゴウン殿が？」

「……そうであるとも言えますし、そうではないとも言えます」

その微妙な言葉に含まれたニュアンスを鋭く察知したのでだろう。ガゼフの視線が血の匂いを漂わせるデスナイトとデスウェブに向けられる。

特に離れているにも拘らず濃密な血の匂いを発散させているデスウェブに対してガゼフの視線が集中する。

それについてクーゲルシュライバーはデスウェブを庇ってガゼフに弁明したい気持ちに駆られた。

確かにデスウェブはその牙と外骨格内に収納された蜘蛛の大群で騎士達を血祭りに上げたが、その時の汚れは既にほかならぬクーゲルシュライバーの手によって綺麗さっぱり洗われている。

糸の片付けを始める前に、村人達を不快にさせないようにと一度村はずれまで移動してそこで無限の水差しを使って丁寧に血を流してやったのだ。

ではデスウェブから漂う血臭はなんなのかと言えば、それは死んだ村人の亡骸を運搬していた時に付着したものだだった。

だからそんなに睨まないでやって欲しい。デスウェブは村人達のために頑張ったんだよ。

しかしそんなクーゲルシュライバーの思いはガゼフには届かない。「今……でお聞きしたいのだが……あれらは、一体？」

「あの騎士は私の生み出したシモベです。そして此方を窺っている蜘蛛ですが……あれは私の友人が遣わしたシモベですね」

感心するような声がガゼフから、そして此方を窺っていた村人達から上がる。

ガゼフはあのような強大な存在を使役するアインズの魔法詠唱者マジックキャスターとしての高い技量を知ったがゆえに。

村人達は神の一種であると思っっているデスウエブの上に主人がいる事、そしてその主人とアインズが友誼を結んでいるという事を知って。

「そのご友人というのは？よろしければ名を教えてくださいだろうか」

「……申し訳ないのですがそれはできません」

「それは、なぜ？」

「……我が友との約束、いや、契約でしてね。決して名を言うてはいけないのです。さもないと……」

アインズはデスウエブを指差す。

「約束を破った私に愛想を尽かして、あの蜘蛛をけしかけてくるかもしれません」

その言葉に村人達がぎよつとした表情になる。

特に声を発したわけではないのだが多くの人間が同時に驚愕を顕にするのを目の当たりにしたガゼフは何かを察したのだろう。

理解したとばかりに重々しく頷く。

アインズが言っている事は嘘だ。

名前を言うてはいけない契約など存在していない。

だがクーゲルシュライバーの存在を秘匿している以上、そういった嘘をつくのは仕方がない事だ。

しかし、しかしである。

（モモンガさああああん！なんかこつちを見ているネムとエンリがシヨック受けてます！俺を物騒な人扱いしないで！勘違いされちゃうからあ！）

クーゲルシュライバーの視線の先には家の影で顔を青くして口を

押さえているエンリとネムの姿があった。

「なるほど……ゴウン殿に比肩するだろう魔法詠唱者だ。知っておいて損はないと思ったが、やめておいたほうがよさそうだな」

「ご配慮ありがとうございます」

名前を言っただけではない魔法詠唱者、か。

ガゼフは心に刻むようにそう呟くと再びアインズに質問する。

「では……その仮面は？」

「ああ、王国戦士長殿を前にして素顔を見せぬ無礼を許していただきたい。これは魔法詠唱者の理由で被っているのです」

「仮面を外してはもらえないか？」

「お断りします。あれが暴走したりすると厄介ですから」

アインズが指差した先にいるデスナイトを見てガゼフが唸り声をあげる。

村に来た当初から気にかけていた存在が暴走する可能性。

それはガゼフにこれ以上の追及を思いとどまらせるには十分な効果があった。

「やはり強大な存在を使役するというのは難しい事なのだ……わかった。仮面はそのまま結構だ」

「ありがとうございます」

二度も同じようなやり取りをする二人をみてクーゲルシュライバーは密かに笑っていた。

だが、肢の先から伝わってきた振動にその笑みを即座にかき消す。

その振動にクーゲルシュライバーは覚えがあった。

先ほどガゼフ達が現れたときと比べれば遥かに小さいものではあったが、この振動を発生させているものがなんなのか理解できる。

これは騎兵が駆けてくる振動だ。

それも相当急いでいるらしい。

クーゲルシュライバーはガゼフから離れると近くにあった家の屋根に音も無く着地した。

3メートル近いクーゲルシュライバーの巨体が相当な速度で動いたのにも拘らず、空気に一切の乱れは無い。

すこし高くなつた視界で振動の発生源を探せば、それはアツサリと見つけた。

装備からしてガゼフの部下だろう。

彼は息を切らしながら広場に飛び込むと大声で緊急事態を告げた。

「戦士長！周囲に複数の人影！村を囲むような形で接近しつつあります！」

「いつまでもこうしていても意味が無い。ではゴウン殿、お元気でこの村を救つてくれたこと、心より感謝する」

村外れに近い民家の中、ガゼフは感謝の言葉を告げるとガントレットを外しアインズの金属に覆われた手を握る。

ガントレットを外さないアインズに嫌な顔一つ見せないのは、きつとガゼフが、これは勝手に感謝しているだけであつてその勝手な行いに相手の礼儀を求める必要はない、と思つているからだろう。

ただ真摯に感謝する男と、それを無言で受ける仮面のマジックキャスター。

その姿をクーゲルシュライバーは家の壁に張り付き窓から覗き込むようにして見つめていた。

「本当に、本当に感謝する。よくぞ無辜の民を暴虐の嵐から守つてくれた！そして……我が儘を言うようだが、重ねてもう一度だけ村人達を守つて欲しい。いまこの場には差し出せるものはなにもないが、このストロノーフの願いをなにとぞ……なにとぞ聞き入れて欲しい」
アインズの手を両手で握り締め心の底からの思いを吐露するガゼフ。

その必死な姿をみてクーゲルシュライバーは考える。

果たしてアインズはどのように判断するだろうか？

現在村に迫りつつある脅威は天使を使役するマジックキャスターで構成された集団。

それもガゼフの見立てによればスレイン法国に所属する特殊工作部隊「六色聖典」の何れからしい。

そして奴らの狙いはガゼフ・ストロノーフ。その殺害か、誘拐と言ったところだろう。

話を聞いている限りでは今のガゼフには奴らを跳ね除ける力はないようだ。

放って置いても、ガゼフが六色聖典を切り伏せ村を守ってくれる……などという事にはまずなるまい。

その場合この村を自分達が守護してやらねば、折角助けた村人達が殺される可能性は高い。

なにせ相手は特殊工作部隊だ。それがどのようなものか詳しくは知らないが、その類の組織は情報の漏洩を許さないイメージがある。

口封じが行われてもおかしくは無いだろう。

正直に言えば、クーゲルシュライバーはカルネ村を守ってやりたかった。

自分のあまりの感化されやすさに苦笑するが、自分と友人が手間をかけて救った村人を殺されるのは些か以上に不快だ。

クーゲルシュライバーは尊敬の眼差しで見つめてきたネムの姿を思い浮かべる。

……死なせたくはない。

それは同等の存在に向けるものではなく、懐いてくる子犬に向けるような感情だった。

大規模災害に際し、ペットをおいて避難しなければならなかった被災者の気持ちとはこのようなものだったのだろうか？

村の倉庫へ向かう人々の群れの中にはネム、そしてエンリがいた。彼女達が浮かべていた不安な表情。

それがかつて見て感動したドキユメンタリー番組を思い出させる。自分ではどうしようもない災害に動揺し恐怖するも、自らの飼い主を信じて大人しくしている犬。

そしてそれを見捨てて避難するしかなかった飼い主の苦悩がなんとも涙を誘う素晴らしい番組だった。

その番組の犬が見せた表情とネムとエンリの顔がクーゲルシュライバーには重なって見えてしかたないのだ。

しかしそんな個人の感情もナザリック全体の安全を考えれば諦めざるを得ないのは分かっていた。

ここで法国と下手に関わっては後の禍根になるかもしれない。

既に生き残りの騎士を送り出してしまったので手遅れかもしれないが、一国の切り札であろう特殊工作部隊を相手にするのならそれを危惧するのは当然だ。

アインズがそれを理由に村の防衛を断るならクーゲルシュライバーに異論はない。

クーゲルシュライバーはアインズがどう答えるか固唾を呑んで見守る。

「……それは」

「もし王都に來られることがあれば、お望みのものをお渡しすると約束しよう。ガゼフ・ストロノーフの名にかけて」

己の名にかけて約束したガゼフは手を離すと跪こうとする。それをアインズが肩に手をかけて止めた。

さあどうなると窓から身を乗り出して事態を見守るクーゲルシュライバーにアインズからの伝言が届く。

その内容を聞くとクーゲルシュライバーは窓から侵入させていた人間状の器官についた擬腕でサムズアップしてみせる。

それを見ているのかいないのか。アインズは自分を見つめているガゼフを向いたまま語りかける。

「……そこまでされる必要はありませんよ。ですが、了解しました。村人は必ず守ってみせます。あなたがその名に誓ったように。このアインズ・ウール・ゴウンの名にかけて」

自分と同じようにと前置きされた上での名をあげての誓いにガゼフの表情が明るくなる。

それと同じように透明になっているクーゲルシュライバーも嬉しげに擬腕を振りまわしていた。

「ハア……初めて会った人間には虫程度の親しみしか無いのに、どうも話してみたりすると、小動物程度の愛着が湧くな」

周囲に人はいない。村人を隔離し、ガゼフ達を村の外の草原に見送った以上、旅の魔法詠唱者マジックキャスターアインズ・ウール・ゴウンを演じる必要はない。

全ての村人を収容した倉庫の前で、横に立つアルベドと、透明化を解いて姿を現したクーゲルシュライバーに聞かせるようモモンガが疲れた声で呟いた。

交渉中はため息一つつかなかった主人が見せる弱った姿に、アルベドは胸の高鳴りを感じつつも怒りを燃やす。

胸の高鳴りは主人が自分の事を弱さを見せてもよい相手だと思ってくれている事に対して。燃え上がる怒りは愛する主人を煩わす下等生物に対して。

混沌とした雰囲気を発するアルベドにモモンガが少し怯えている。それを無視してクーゲルシュライバーは口を開いた。

「だが情だけではない。そうだろうモモンガ？これはある意味チャンスだ。一国の特殊部隊がどの程度の実力なのか調査することができるとし、捕らえられれば情報源として非常に期待できる」

結局のところガゼフの要求をのんだのはモモンガとしても情に拠るものが大きかった。

それは後からこっそりと教えられたクーゲルシュライバーも知ることだったが、アルベドがいる手前ナザリック地下大墳墓の支配者らしい理由を聞かせてやる必要があった。

モモンガもそんな考えを察してクーゲルシュライバーの言葉に続く。

「うむ。この世界の知識が不足している内は常に相手が格上の存在である事を考慮しなくてはならないからな。今回の状況は我々にとって非常に都合がいい」

「なるほど。モモンガ様はあの人間を敵の力を見るための捨て駒に使ったという事ですね。貴重なアイテムを下等生物ごときに授けたのはそういうお考えだったのですか」

「……うむ」

別にそういう風に考えていたわけではない。それに貴重なアイテムと言ってもあれは500円ガチャのはずれアイテムなのでくれてやってもまったく問題はない。

花も恥じ入るような笑顔を見せるアルベドに対して、そう言いたそうな仕草をみせるモモンガを気の毒に思うが訂正しても良いことはあるまい。

クーゲルシュライバーは望んでおこなっていた支配者ロールの面倒くさを噛み締めながらモモンガに話しかける。

「ところでモモンガよ。先のカルネ村襲撃の際はお前ばかりが活躍していたように思うのだが……今度は私に実験させて貰えないか?」

「うん? 活躍していたつもりはないが……確かに騎士を多く使い潰したのは私だな」

「だろう? 私も試してみたいことがある。全部と言わず半分ぐらいはやらせてくれないか」

「別にかまわないとも。ただし、奴らの実力が我々を上回っていた場合はその限りではないぞ?」

「分かっている。奴らの使役する天使は脆弱極まりないが、まさかあれが全力ではあるまい。下手をすれば我々の想定する最高位天使を遥かに超える天使を繰り出してくるやもしれん」

そうなったら、いや、そうなる兆候が見えた段階で即座に全力での撤退を行うさ。そういうクーゲルシュライバーにモモンガは大きく頷く。

モモンガもクーゲルシュライバーも天使系モンスターの多くが使用する善、光、神聖魔法とは相性が悪い。

相手の底が見えない以上は慎重に慎重を重ねた対応が必須だろう。

「それでモモンガ。すこし提案があるんだが……」

今までと違いどこか楽しげな雰囲気を見せるクーゲルシュライ

バーの言葉にモモンガが首を傾げた。

「なんだ？猫なで声で」

「いや猫なで声ってあなた……ゴホンツ！まあなんだ、折角二人で戦うんだ。久しぶりに演出、撮影クーゲルシュライバーで主演モモンガ&クーゲルシュライバーでな」

——ヤってみないか？

夕日を背に受け逆光となったクーゲルシュライバーの漆黒のシルエットの中で、彼の八つの単眼だけが夕日よりもなお紅く輝きを放っていた。

——王国最強、周辺国家でも並ぶものがないとされる最強の戦士ガゼフ・ストロノーフを抹殺せよ。

本来まわされるはずも無い他国への潜入任務だったが、戦闘のエリート中のエリートで構成された陽光聖典にそれを拒否する理由も権利もなかった。

不慣れな任務であると正しく認識していた隊長の念入りな準備と慎重な作戦が功を奏し、ガゼフに与えられたリ・エステーゼ王国の国宝たる装備一式を剥ぎ取り、さらには近隣の村々を襲撃することで多数の部下と分断する事にも成功していた。

労力と時間をかけて圧倒的に有利な戦場を用意した彼らは、構成員に僅かな犠牲も出さずに周辺諸国最強の戦士と名高いガゼフ・ストロノーフを窮地に追い込んでいた。

深手を負ったガゼフに対しても油断する事無く、多数の天使による同時攻撃で止めをさすつもりだった。

あのまま行けば数秒後にはガゼフの命を奪うことに成功していたという確信があった。

だというのに、これは一体どういうことだ？

スレイン法国六色聖典が一つ「陽光聖典」の隊長ニグン・グリッド・ルーインは困惑しつつも冷静に状況を見極めようとしていた。

まず、後一步まで追い詰めていたガゼフが忽然と姿を消した。

そしてそのかわりに戦場となっていた草原に二人の人影が現れた。突如として夕焼けの草原に浮かび上がった、特殊工作部隊陽光聖典の隊長であるニグンですら見たことの無い複雑で奇怪な紋章が光を放ったと思えば、既に彼らは其処に居たのだ。

一人は魔力系魔法詠唱者風の男で顔を仮面で覆い手にはガントレットを嵌めている。身にまとうローブは見るからに高級な一品で、装備する者の身分の高さを証明しているかのようだ。

もう一人は漆黒の全身鎧に身を包んだ者。見る者を圧倒する迫力を放つ見事な鎧は、並の手段で手に入るものではないだろう。遠目であつても一級品のマジックアイテムであろう事が予測できる素晴らしい逸品だ。

どちらもこんな辺境の草原に似つかわしくない存在だった。

だが追い詰めたガゼフのかわりに姿を現した二人である。

何らかの転移魔法を使用してガゼフとその部下達をどこかへ転移させたのだろうが、そんな事ができる魔法に心当たりは無い。

未知の魔法を使用する、上等な装備に身を包む存在。

警戒を絶やしてはならない相手だ。

ニグンのその考えを後押しするかのようには、草原を吹き抜けていく風の流れが変化する。

まるで件の二人組の背後から吹きだしているかのような風は奇妙に冷たく、そして先ほどまで草原に漂っていた血臭とはまったく異なった洞窟を思わせる湿気た臭いを孕んでいた。

ふと、風の音にまぎれて遠く離れたトブの大森林からだろうか？

魔獣のものらしき甲高い鳴き声が聞こえてくる。

——不吉な。

ニグンは思わず口を突いて出そうになった言葉を飲み込む。部下達の前で隊長が口にしていい言葉ではないからだ。

代わりにニグンは素早く命令を下す。

天使達を一旦全員引かせ、防御用の陣形を組ませ、正体不明の存在から若干距離をとる。

油断する事無く相手の出方を窺っていると、ローブを怪鳥の如く風に大きくなびかせる魔法詠唱者風マジックキャスターの男が一步前に入る。

それに合わせるかのように風が吹き付けてくる。

まったくの偶然だが、それはあの男が一步近づいた為に空気が押しつけられて発生したのではと錯覚しかねない絶妙なタイミングだった。

馬鹿馬鹿しい。

相手の装備に圧倒され過剰評価に陥るなど陽光聖典の隊長に在ってはならない事だ。

ニグンは下腹に力を込めると、その魔法詠唱者風マジックキャスターの男を睨みつける。

「はじめましてスレイン法国の皆さん。私の名前はアインズ・ウール・ゴウン。親しみを込めて、アインズ、と呼んでいただければ幸いです」
距離があるにも拘らず、風が運んできてくれるのだろう。その声はニグン達に確かに届いていた。

仮面をしていて、距離が離れており、さらには風に運ばれてきたというのに奇妙なほどにクリアな声だった。

その事実には言い知れぬ違和感を覚えるが、それ以上にニグンと陽光聖典隊員達の意識は草原から大挙して現れ、そしてアインズ・ウール・ゴウンと名乗った男から逃げるように消えていく様々な小動物に向けられていた。

先ほどまでガゼフ率いる精鋭部隊との戦場になっていたというのに、一体何処に隠れていたのか不思議なほど豊富な種類と数だった。飛び去っていく蟲の羽音と鳥の鳴き声が妙に不安を掻き立てる。

立て続けに発生する異常な事態にニグンは二人への警戒をより一層強くしていた。

幻術の類か？幻術を用いて自分を強大な存在だと見せて我々を引かせようとしているのか？

その可能性は高い。なにせ戦力は此方が圧倒的に有利だ。あの二人がそれぞれガゼフに匹敵するだけの存在だとしてもこの状況であれば戦闘行為を避けるはず。

(なるほど、狙いは読めた)

——何者かは知らんが、我々の信仰心をなめるなよ。

多少不安を煽ったところで、陽光聖典に所属するもの達の篤い信仰心は小揺るぎもしない。

神に仕える我々はその信仰心に従って任務を完遂する。その程度の脅しに屈したりはしないのだ。

「そして後ろにいるのがアルベド。まずは皆さんと取引をしたいことがあるので、すこしばかりお時間をもらえませんか？」

取引。

やはりそうきたか。

ニグンは自分の考えが正しいという確信を深める。

こいつらの狙いは時間稼ぎだ。恐らくは転移したガゼフ達の為に時間を稼いでいるのだろう。

とすれば向こうのペースに載るのは愚策も愚策。ここは問答無用で叩き潰し、拷問してガゼフの行方を吐かせるべきだろう。

だが——

(先ほどから起こっている異常の数々。それを幻術だと仮定して、我々が看破できない程の幻術か。それもこれほど大規模なものを扱える魔法詠唱者マジックキャスターの力を侮るのは危険だ。向うもこのような場に出てきた以上何かしらの切り札は持っているだろう)

それにアインズが名乗った名前にニグンは心当たりが無い。これほどの腕前の魔法詠唱者マジックキャスターが無名なはずはない。

恐らく偽名なのだろうが、転移魔法と幻術に長けた魔法詠唱者マジックキャスターについて記憶を探ってもアインズ程の技量を持った者はいなかった。

いや、似たようなことができる者はいる。しかしそういった者達の素性は判明していた。彼らがアインズの正体であるという事はあり

えないとニグンは判断する。

武力で排除するには情報が不足していた。

だがガゼフは深手を負っており、その部下は皆倒れていた。

転移させたにしろアレだけの人数を移動させたのだ。おのずと距離の限界が推測できる。

それほど遠くまでは転移することは出来まい。ならばここは慎重にある程度の情報を得たほうがいい。

ニグンは無言で顎をしゃくりアインズに先を促した。

「……お時間をいただけるようでありがたい。さて、まず最初に言っておかないといけないことが一つ。皆さんでは私達には勝てません。私達に戦いを挑むという事は自殺行為と同意である、と知っていたただきたい」

断言した口調からは絶対的な自信が感じられた。嘘を言っている様子はない。つまりアインズは本気で、たった二人で陽光聖典に勝てるつもりでいる。

ただの馬鹿か、それとも幻術に長けた者の巧妙な擬態か。

スレイン法国でも上位に位置する者達に対するあまりにも傲慢な発言は、何とかして此方を威圧し撤退させようとするアインズの苦肉の策だろう。

アインズの狙いを見透かしているニグンとしてはこの発言は嘲笑に値するものだった。

「はっ！無知なのか、それとも虚勢か？どちらにしても哀れなものだな。だがその発言のつけはその身で支払うことになるぞ魔法詠唱者」
「さて、それはどうでしょう？私は戦いを全て観察していました。その私が此処に来たということは勝利を確信しているから。もし皆さんに勝てないならあの男は見捨てた、そう思いませんか？」

確かにそれは正論だった。

どの系統のマジックキャスターであってもこのように多数の敵の眼前に立つという手段は似つかわしくない。

幻術を得意としているだろうアインズも態々敵に姿を見せる必要などないのだ。

だというのに正面から迎え撃とうとするアインズ達には、何らかの奥の手があると見ていい。

だが、そう思わせるのがアインズの狙いだとしたら？

アインズが言ったことは確かに正論だ。

しかし、ガゼフ・ストロノーフという王国最強の戦士が持つ価値を考えればまた違った意味が見えてくる。

アインズは時間稼ぎの捨て駒という可能性だ。

王国は王の派閥と貴族の派閥、二つに分かれてお互いの力を削いでいる状態にある。

そしてガゼフは王の派閥にとって非常に重要な存在でもある。

そのガゼフが死んだら王にとってそれは破滅を約束されたようなものだ。

ならば優秀なマジックキャスターを捨て駒にしてもガゼフを救おうとするのもおかしな話ではあるまい。

しかし捨て駒である事を悟られては時間稼ぎの任務を果たすことが出来ない。

だからこそアインズはあのような挑発に近い発言をしたのではないか？

悔むわけではないが圧倒的多数であり一人一人が戦闘のエキスパートである陽光聖典を相手に、互角以上の戦いが出来る奥の手を隠し持っていると考えるよりよほど現実的だ。

(幻術を得意とする者を相手にするのは疲れるものだ。魔法以上にその知略が厄介。今後はそういった手合いへの対処法も考えねばならん)

思考をめぐらせるニグンが沈黙しているのを良い事にアインズは好き勝手に話しはじめている。

そのどれもが此方を困惑させるようなものだ。

部下達が使役しているのは第三位階魔法で召喚できる炎の上位天使か、などと改めて確認する必要もないと思われる質問に始まり「ユグドラシル」「キリスト教」などの理解不能な単語を交えた意味不明の推察らしきものを独り言のように喋っている。

そんな狂人めいた言葉の数々にニグンは苛立ちを感じる。だが、それではまずい。向うのペースに乗せられてはいけない。幻術使いというのはそういう心隙を決して見逃したりはしないのだから。

ニグンは一度大きく深呼吸すると冷静かつ高圧的な声でアインズの言葉に割り込んだ。

お前の目論見などお見通しだといわんばかりに。

「時間稼ぎに付き合うつもりはないぞ幻術士。イリユージュヨニスト 答えろ、ガゼフ・ストロノーフを何処へやった」

「時間稼ぎ……何のことだか分かりませんが、彼らは村の中に転移させました」

「……なに？」

白々しく首を傾げるアインズに、やはりこの手の質問は無意味かとニグンが奥歯を噛んだ。

そして一瞬だけ正直に居場所を吐いたアインズに驚いてしまった自分を叱咤する。

（馬鹿かニグン・グリッド・ルーイン！時間稼ぎを目的とした捨て駒が本当の事を言うわけがないだろう！）

恐らく、いや確実に欺瞞だ。

我々が村を搜索する時間を作り、そうして得た時を別の所に転移させたガゼフの逃亡に費やそうとしている。

村一つを犠牲にすることを厭わないアインズの、おそらくは王命であろう任務へ本気の度合いが窺える発言だったがその真偽を見極めるのは容易い。

「愚かな。多数の天使を使役する我々にとっては村一つ搜索するのにそう時間は掛からん。そのような偽りを言ったところで……」

「——偽りなど滅相もない。お聞きになったので答えただけでしたが……実は素直に答えたのにはもう一つ理由があります」
くだい。

ニグンは尚も時間稼ぎの為に言葉を重ねようとするアインズを一喝しようとして、出来なかった。

なぜならアインズの纏う雰囲気が一変したからだ。

山の向うへと沈もうとする夕日の赤い光が雲に遮られ、生じた長い影がアインズだけに闇を落としている。

その闇の中でアインズの仮面の目だけが奇妙に光を反射しキラキラと輝いていた。

吹き付けてくる風が一層強く、冷たくなっていく。

頬を撫でる風に死の匂いを感じたのは、はたしてアインズの幻術に拠るもののだろうか？

誰かがゴクリと喉を鳴らす音が妙に耳に残った。

「実は……お前と戦士長の会話を聞いていたんだが……本当に良い度胸をしている」

地の底から響いてくるかのような声だ。

いや、実際に地の底から響いているのかもしれない。

なぜなら、その声に合わせて地面が小刻みに振動しているのが足から伝わってくるのだ。

「お前たちはこのアインズ・ウール・ゴウンが、そして我が盟友がわざわざ手間をかけて救ってやった村人たちを殺すと広言していたな。これほど不快なことがあるものか」

幻術だ。ブラフだ。脅しに過ぎない。

ニグンは言い聞かせるように心中でそう繰り返し唱えた。

この程度の脅しに、スレイン法国の切り札である陽光聖典の隊長である自分がうろたえてどうする。そんな事はゆるされない。

しかし――

「な、なんだあれは？」

部下の誰かが不安そうに呟く。

か細い笛の音のようなものが混じった風に撫でられざわめく草原に、奇妙な影が空からおちていた。

それは一体どのような偶然だというのだろうか。

はるか天上に浮かぶ雲が複雑に組み合わさり、それを夕日が照らした産物。

そう言うにはあまりにも人為的な形状の影だった。

それはまるで生ある者を恨むアンデッドのように恐ろしい形相をした頭蓋骨を思わせる形だった。

「先ほど取引とிட்டが、内容は抵抗する事無く命を差し出せ、そうすれば苦痛なく殺してやる、だ。だがもしもアレだけの警告をしたにも拘らず歯向かうと言うのなら容赦はしない。その愚劣さの対価として、絶望と苦痛の中で死に絶える事となるだろう」

その言葉が言い終わると同時に周囲に闇がおちてきた。

夕日が沈み、夜が始まったのだ。

それ自体はなにもおかしいことは無い。

だが、陽光聖典に所属する誰もが不安げに周囲を見渡し始めた。

それはニグンも例外ではない。

さつきまで草原に影がくつきりと浮かぶほどの明るさがあったというのに、幾らなんでも日が沈むのが急すぎる。

これもアインズの幻術なのだろうか？ いやしかし、だとしたらアインズの技量は一体どれほどの高みにあるというのだろうか？

魔法に対する抵抗力も鍛えている自分達陽光聖典の全員が抵抗失敗するほどのこの威力。

そしてアインズ自身が発するようになった、圧倒的な強者の威圧。部下が怯えるのも無理はない。

スレイン法国最強の部隊である漆黒聖典の隊員とも面識のあるニグンであっても、これほどまでに圧倒されたのは初めての経験なのだから。

ニグンは警戒レベルを最大まで引き上げる。

もはや幻術が得意とするならば直接的な戦闘能力には欠けるはずだなどという油断は一切捨てる。

これほどの力をもつ正体不明の存在が唐突に現れたことに対する疑問は尽きないが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

そう判断したニグンが部下に命令しアインズを攻撃させようとしたその時だった。

「カ、カハッ……」

声にならない息が喉から漏れる。

瞬きの仕方を体が忘れてしまったかのように目が見開かれる。

突如としてアインズの隣の空間から漏れ出したおぞましい汚泥の如き闇。

その闇の向うから、なにか良くない、とても恐ろしい何かがこの世界へと生れ落ちようとしていた。

この世に存在するありとあらゆる生命を集めミンチにして腐敗させる事で生み出された混合物のような邪悪極まりない闇の向うから、聞くだけで恐怖を掻き立てられる声が聞こえてくる。

「アインズの威圧を受けて戦意喪失しないその勇気は褒めてやろう。だが少し待て。私も今の内にお前たち聞いておきたい事があるんだ」

神に仕える神官でもあるニグン達はなにも行動できなかつた。

ただ、世界を汚すような冒流的な化け物がゆつくりと姿を現すのを見ているしかなかった。

現れたのは夜の闇のただなかにあつても眼を引く黒檀色の巨体をもつ蜘蛛だつた。

本来蜘蛛の眼がある場所には人間の上半身が生えており、その貌のない頭部にある八つの眼が禍々しい真紅の光を放っている。

鋭く頑丈そうな両手には邪悪なる存在に似つかわしくない神秘的な輝きを宿す指輪が嵌められていた。

前肢についた鉋のような爪は人間など一振りでも両断してもおかしくないほど巨大かつ鋭利であり、蜘蛛の頭部から生える金属質に輝く緑色の牙にはどんな鎧であっても貫いてしまいそうな威圧感があつた。

一体この化け物はなんなのだ？

アインズ、などと親しげに呼んでいたがまさかヤツが召喚したモンスターなのだろうか？

そこまで考えてニグンは自分に与えられた「切り札」の存在に思い当たり、そして戦慄した。

（まさかあれがアインズの切り札なのか!?!ならば領ける！あれほどのおぞましい怪物を使役できるといっているのであれば奴のあの態度も当然

というものだ！)

スレイン法国の切り札の一つである陽光聖典を前にして余裕の態度を崩さなかったアインズの切り札の正体。

それは恐らくは十三英雄に滅ぼされなかった魔神を封じたなにかしらのマジックアイテムだったのだろう。

王国はなんと愚かな事をしでかしてくれたのか。

王としての地位を守らんが為に、人類の敵である魔神を利用するなど正気の沙汰ではない。

ニグンはアインズにこの魔神を与えたであろうリ・エステーゼ王国の愚王に心の中であらん限りの侮蔑をぶつけた。

「お前達があの村に騎士達をけしかけたのかな？」

吐き気を催すほど穏やかな声で問いかけてくる化け物に対して、ニグンは半ば呆然としていた頭で答えを返す。

「だ、だったらどうするとうんだあ！」

ニグンは震える心と体を信仰心を杖として支え、やっとの思いでそう叫んだ。

我々のしたことは人類を脅威から守るという大義の為に必要な行為だった。

お前のような邪悪の権化にその事についてどうこう言われる筋合いはない。

そういった思いの籠った激高するかのようなニグンの叫びに対して、化け物は極めて冷静に、さらには優しさすら感じさせる声で答える。

「そう怒るなよ。別にその事についてお前達を糾弾するような馬鹿馬鹿しい真似はしなくても。なにせ彼らは虐殺にはつき物の略奪をしなかった、非常に品のいい連中だったからな。もっとも——」

人間の女がするようなしなやかな動きで上半身をくねらせた化け物が貌の無い頭部に手を添える。

扇で口元を覆い笑っているかのような印象を感じさせる体勢のまま、化け物がさも当然の事のように喋り出した。

「たとえば彼らの代わりに……そうだな、裏モノ電脳風俗の内容でいく

か。

年端もいかぬ少女の腹を裂き内臓を引きずり出してできた空間に頭を埋めて胎内回歸願望を満たす者を差し向けようとも。

うら若き乙女の子宮を生きたまま摘出し、それを肛門拡張の道具として自らに挿入した後絶頂の雫で哀れな犠牲者を汚すことに無上の喜びを感じる者を差し向けようとも。

頭蓋骨に穴を開けて生きのいい脳細胞を陵辱することを……○○

×△△

「オゲエエエエエエ!!」

ゆつくりと化け物が語りはじめた邪悪極まりない、おぞましく、冒流的で、狂気に満ちた言葉の数々に耐え切れず部下の何人かが嘔吐する。

無理もあるまいとニグンは思う。

知識として人間社会においても様々な暴力的かつ異常な性的嗜好を持つ者がいると知っているニグンでも、あの恐るべき化け物が語るような内容は寡聞にして知らない。

にもかかわらずあの化け物はそれを人間が行う所業であるかのように語るのだ。

人間という種を嘲笑い、冒瀆されてるかのような感覚にニグンは眩暈を感じた。

やめろ、そんな恐ろしいことを教えなくてくれ。

幼い頃、寝る前に恐怖を煽る話を聞かされた時の感情が思い起こされる。

この知識は、毒だ。人類が知ってはいけない猛毒を孕んだ禁断の知識だ。

「……そんな者を差し向けようとも。私はお前達を責めるつもりなど、一切ないのだよ。ただ聞きたいだけなんだ。答えてくれるな?」いやだ。あんな恐ろしくて気持ちの悪い化け物と会話したくない。会話した瞬間正気を奪うような何か恐ろしい事を自分の頭に吹き込んでくる予感がしていた。

しかしニグンは精一杯の勇気を振り絞り、こみ上げる吐き気を堪え

ながら答えた。

「うつぶ、そ、そうだあ！だからなんだというんだ！」

「そうか。お前達のおかげであの素晴らしいシーンが見れたというわけか。感謝しておこう」

「か、感謝……？」

化け物から発せられた思いがけない言葉にニグンは困惑する。

その様子を見て化け物が親しみを感じさせる口調で説明をはじめた。

「そうだ。お前達が兵を差し向けなければ無辜の民達が暴力に襲われ、命の危険に晒されながらも精一杯愛する者を守ろうとして力及ばず無残に殺されるといふ悲劇は起こらなかった。そして私がそれを見ることもなかった。思いがけず良いモノを見せてくれたお前達に感謝するぐらいは当然だろ？」

——倒さねばならない。

化け物の言葉を聞いて即座にニグンの頭に浮かんだのはそれだった。

ニグンの震える手が懐に仕舞われている「切り札」へと伸びる。

この化け物が、そしてアインズとあの女も魔神だという最悪の状況を想定しても、勝機はある。

もしも魔神では無かったとしてもあの残虐性だ。けっして野放しにはできない。

奴らは必ず滅ぼさなければならぬ邪悪なのだ。

——いざとなったら「切り札」をきることを躊躇わない。

ニグンは人類の未来が自分の双肩にかかっているかのような重圧と使命感を感じながら、この世を汚す邪悪と、それを従える邪悪な魔法使いを睨み付けた。

17話

(なんてこった。シクススやデミウルゴスの一件で薄々と分かってきた事とはいえ、こんなものありなのか?)

自身の内面世界に満ちていく神話パワーを感じ、クーゲルシュライバーは外見には出さないものの驚愕していた。

スキルや魔法を使用していないのにも拘らず、『恐怖を喰らうもの』の効果が発動している。

ユグドラシルではありえない現象だ。

(おかしいとは思ってたんだ。シクススやデミウルゴス、それにエンリヤネム……いや、ネムは除外か。ともかく、魔法もスキルも使っていないはずなのに神話パワーが増える事があった。

恐怖の精神作用を与えていないはずなのに何故、と不思議に思っていたけどコレでもう確実だろうな)

神話パワーが増えるという事は自分が誰かを恐怖させたという事の証明だ。

しかし自分は恐怖を付与する効果をもつ一切の手段を使っていない。

では誰が恐怖を付与されたのだろうか?

非常事態に備えてエントマには何時でも生贄の儀式を行えるよう準備をさせているが、実行せよと命令していない以上闘技場に集められた生贄達が恐怖したわけではない。

それは伝言で既にエントマに確認済みだ。

ならば、答えはもう出たも同然である。

恐怖しているのは散々恐怖を演出し怖がらせてやろうとクーゲルシュライバーが努力した相手、視線の先で脚をガクガクと震わせながら此方を睨んでいるスレイン法国の者達だ。

確かに恐怖を引き出そうと各種アイテム、魔法、特殊^ス技術^キをふんだんに使用して演出をしたが、それらには恐怖を付与するような効果は含まれていない。

ならば彼らが恐怖しているのはクーゲルシュライバーの言動に対

してだろう。

それはつまり――

――魔法や特殊^ス技術^{キル}を使って恐怖の状態異常にせずとも、会話や行動で相手を恐怖させる事が出来れば《恐怖を喰らうもの》の効果は発動するという事だ。

なんて便利なんだ。態々相手を怖がらせる演技をした甲斐があったというものだ。

仮面越しにも拘らず背後から突き刺さるアインズの困惑するような視線を感じながら、前々からやってみたかったものの、ナザリツクのNPCを実験台にするのは流石に可哀想だと思い実行できなかった実験が良い結果を出して終了した事をクーゲルシュライバーは喜んだ。

後で誤解を解く必要があり、その際の心労を考えると高揚した気分も萎むようではあったが。

クーゲルシュライバーは心の中で誤解だと訴える。

自身が語ったアブノーマルにも程がある超猟奇的なプレイ内容の数々。

それらは決して自分の趣味ではないのだと。

(あれは職場の元闇の組織の構成員だった先輩が教えてくれた内容であって……確かに一回試しに手を出してみたけど、それだってまだ普通の内容だったし全然俺は普通の人だよ！)

相手を恐怖させるのに丁度いい話はないものかと思案した時、かつて自分が恐れおののいた経験のある話を思い出して披露したに過ぎない。

裏モノ電腦風俗。

俗にそう呼ばれるそれはユグドラシルでも使用されるニューロンのノインターフェイスがあり、払う金さえあれば誰もが体験できる裏世界の娯楽だ。

DMM―RPGなどの基本法律や電腦法で禁止されている一切の要素が解禁された、人類の持つ欲の全てを叶えることが可能なエンターテイメントである。

人間が想像しうるありとあらゆる欲と快楽を追求できてしまう性質上、常習性、依存性が極めて高い下手な麻薬などより夕子の悪い代物で、社会を崩壊させかねない存在として厳しく取り締まわれている。

しかしその魅力はあまりにも大きく、生み出す利益は天井知らずだ。

当然のようにこれを商売道具とする組織が多く存在していた。

組織だって運営される以上、客に対する配慮は当然なされるので一般人であつても存在さえ知っていれば利用するのは容易い。

絶大な人気に支えられたコンテンツはそのユーザーの欲と想像力によつて加速度的に先鋭化し、人間の持つおぞましい闇を高密度化していった。

結果、ソドムとゴモラの住人が発狂し、神が憤死しかねない冒瀆的とすら言える異常な世界が形成されてしまった。

先ほどクーゲルシュライバーが語ったのはその片鱗にしか過ぎない。

(人類誕生以来、人が抱き続けてきた夢の集大成とか先輩は言ってたけど……あんなものが人類の夢だなんて思いたくないなあ)

たっち・みーが仕事でそういつた組織の一つを摘発したという話を遠まわしに語ってくれた時は、一度手を出した身であるものの素直に称賛したものだ。

あれは流石に存在してはいけないものだろう。

素直にそう思う程に嫌悪と恐怖を抱くからこそ、クーゲルシュライバーはこの話をスレイン法国の者達に聞かせたのだった。

いくら人権がなくて奴隷が当然のように存在している世界の住人と言えど、あの人類の究極の闇と言える所業を行えるとは思えない。

無垢な少女にハードコアな無修正ポルノを見せるような下種な行為ではあつたが、期待していた通り効果は抜群だった。

しかしその結果、友人であるアインズに異常嗜好持ちのように見られるとは予想していなかった。

少し考えれば分かる事ではあるが、いまさら後悔しても遅い。

(今は気にしないでおこう。さてと、次の実験は……魔法や特殊技術スキルに抛らず自然に発狂した精神は魔法やアイテムで治せるかどうか、だったな。まずは彼らを発狂させなきゃ)

つまり、自然に発狂した場合それは混乱状態と見なされるのかどうかの検証だ。

でもどうやれば人間って発狂するんだろう？

やっぱり恐怖や苦痛を与えるのが一番なのかな？

数を増やしていく天使ザコを眺めながらクーゲルシュライバーは次の演技をどうするべきか考えていた。



「総員傾聴！今こそ我ら六大神に仕える者達の、人類の守護を担う陽光聖典の義務を果たすときだ！」

ニグンの怒鳴り声に近い、しかし強い意志を感じさせる声に陽光聖典の誰もが訓練されたとおりに意識を向けた。

「相手はお前達も分かっている通り強大な邪悪だ！魔神だと想定してしかるべき相手だ！」

魔神。

その言葉に歴戦の陽光聖典の隊員であつても身を強張らせる。

魔神、魔神だと？やはり魔神なのか？無理だ、勝てるはずが無い。

誰もが感じていた圧倒的脅威。隊員達はニグンが言ったとおり、自身を知る最も恐ろしい存在である魔神を想起していた。

だがそんなわけはないと、否定続けることで恐怖に屈しようとする心を支えていたのだ。

にもかかわらず、信頼する隊長の口から直々にあれは魔神に匹敵する存在だと言われた隊員達の心に絶望が広がっていく。

「だが恐れるな！魔神を倒す手段は、ここにある！」

おおっ！

懐を握り締めて放たれたニグンの言葉にどよめきが起こる。

その声には今まで無かった希望が含まれていた。

「偉大なる六大神の名を貶める魔神に、神の信徒である我々が屈してはならん！我が神のため、人類の未来のため！今此処であの邪悪を打ち滅ぼすのだ！汝らの信仰を神に捧げよ！」

——これで、多少は恐怖を和らげることは出来たか。

敵前にも拘らず短く黙祷する部下達を横目に、ニグンは今だ動きを見せない敵に警戒する。

大げさな台詞は萎縮する部下達を鼓舞するためのものだ。

あの存在を相手にするならば、万全の状態で挑まねば勝機はあるまい。

切り札を使うにしてもそれだけで容易に勝てるなどと甘い考えをしておけない。

切り札を切った上で部下達を総動員し、より勝利を磐石のものとする。

一切の油断は許されないのだ。

あの邪悪を野放しにする事は決して許されない。

なんとしても此処で打ち滅ぼさなければ必ずや法国、ひいては人類に大きな災いを齎すだろう。

（最悪の最悪、切り札を切っても打倒することが叶わなければ、奴らのような存在が王国に組している事を本国に伝えねばならん……）

今此処で部下の数人を撤退させるべきだろうか？

させるべきだ。戦力の減少は勝率を下げるが、それでもやるべきだ。

ニグンは冷静に思考した結果、そう判断した。

ならばまずは撤退を支援する為に目くらましをする必要がある。

「全天使で攻撃を仕掛ける！撃破されたら即座に再召喚し攻撃に参加させるのだ！」

ニグンの命令に従って総数40体を超える天使がアインズら二人と一体に襲い掛かる。

全方位からの一斉攻撃だったが、ニグン達の姿を覆い隠すようにアインズの前面に多くの天使が配置されるように調整されている。

ニグンはアインズ達の姿が完全に天使達によって見えなくなつた

事を確認すると、素早く3人の部下に撤退の指示を出した。

どこか安堵するような気配を発しながら、彼らは訓練でも見せたことのない素晴らしい速度で撤退を開始する。

誰もが本当は怖いのだ。

それはニグンとて例外ではない。

本当であれば逃げ出したかった。

だがそんな弱気を、この場に残る陽光聖典の者達は信仰の力と、自分達こそが人類の守護者であるという自負によって押さえ込んでいる。

そして敢然と邪悪に立ち向かっているのだ。

その姿にニグンは唐突にガゼフの叫んだ言葉を思い出した。

『俺は王国戦士長！この国を愛し、守護する者！この国を汚す貴様らに負けるわけにいくかああ!!』

ああ、ガゼフ・ストロノーフよ。一度は愚かと嗤ったお前の気持だが、今こそよく分かる。

守るべき対象が違うだけでガゼフと自分達にはなんの違いなどないのだとニグンは悟った。

そうだ。我々こそがスレイン法国の切り札たる六色聖典が一つ、陽光聖典。

人類を愛し、その未来を守護する者。人が生きる世界を汚す邪悪に負けるわけにはいかないのだ。

中には腐敗した人間もいるだろう。しかし多くの人間はそうではない。

腐敗した王国を守ろうとする哀れなガゼフとは違い、自分達の守るべき対象である人類は、守護するに足る存在だ。

六大神を信仰する善良なる法国の民を思う。何の変哲も無い日々にはささやかな喜びを見出し生きる無辜の民達を思う。

彼らの何処にあの化け物が語る邪悪が潜んでいるというのか？

そうだ。

人間は、あの化け物が語るような吐き気を催す邪悪を行う生き物では無いのだ。決して！

「二人とも、下れ」

無数の天使が襲い掛かる中、やけに冷静な声がニグンの下まで届いた。

四方八方から襲い掛かる天使たちによる隙のない攻撃が迫る中、召喚した魔神と護衛役である戦士を下らせようとするアインズ。

その命令に従って天使たちの包囲網から二つの影が信じられない速度で飛び出した。

バカな。なぜあの状態から逃げられる!?

ニグンは驚愕するが、今更命令を撤回したりはしない。

まずは数を減らすべきだ。

天使たちが唯一残ったアインズに殺到し、その刃を突き出す——その前にアインズの魔法が炸裂した。

「ネガティブ・バースト 砕け散るがいい。負の爆裂オツ！」

ズン、と大気が振動した。

アインズを中心に発生した黒い光の波動が一気に周辺を飲みつくす。

瞬き一つでその波動は消え去った。しかし、その結果は歴然として残っていた。

「ひ、ひるむなあ！次の天使を召喚せよ！」

一瞬の静寂の後、ニグンが叫ぶ。

ばかな、ありえない。そんな気持ちを即座にかき消しニグンが出した命令に部下たちが一瞬遅れながらも動き出す。

それは命令されたから従う、といった条件反射に近いものだった。事実、部下たちの殆どは眼前で起きた信じられない事態を理解できず唖然とした表情で召喚を行っている。

天使達が次々に再召喚されていく中、ニグンはアインズを睨みつける。

奴は一体なにをしたのだ？

円状に枯れ果てた草原の中心でアッパーをしたかのように拳を天に突き上げた姿で此方を見ているアインズ。

ゆつくりと拳を降ろし、仮面の頬をカリカリと搔くその姿にニグン

はゾクリと背筋に冷たいものが走るのを感じた。

アインズには傷は無く、周囲には先ほどまで神々しい光を放ちながら存在していた40体以上の天使達の姿は無かった。

滅ぼされたのだ。

あの絶体絶命の状況から、アインズは襲い来る全ての天使を滅ぼすという常識外の方法で生還したのである。

対抗魔法による召喚魔法解除ではない。

黒い波動に飲み込まれてはじけ飛んでいく天使達の姿は耐久力以上のダメージを受けた場合のそれだった。

つまりアインズは何かしらのダメージを与える魔法を使って天使たちを掃討したことになる。

「う、うわああああ!」

「なんだそりゃあ!?!」

「化け物があ!」

「静まれ!くそっ!幻術使いじゃなかったのか!!」

アインズが何をしたのかをようやく理解した部下達が恐慌を起し、天使達を突撃させながらもそれぞれ好き勝手に魔法を使おうとするのをニグンの一喝が辛うじて阻止した。

部下たちの気持ちはよくわかるが、無闇に魔法を使い魔力を消耗するわけにはいかない。

だが、確かにアインズの強さは問題だ。あんな芸当ができるのはニグンの知る限り最強の存在である漆黒聖典の構成員だけ。

魔神に匹敵するだろう化け物だけでも手に余るというのに、そこに最低でも漆黒聖典の構成員に匹敵する魔法詠唱者マジックキャスターが加わるのだ。

状況はまさに想定していた最悪に近づいていると言っている。

何とかしなくてはならない。

「た、隊長!再召喚完了しました!」

「4体ずつ突撃させ四方から攻撃させろ!ガゼフと同じだ、奴を消耗させるぞ!残りの天使は防衛陣形だ!」

突撃させたところで再び範囲攻撃でなぎ払われるだろう。

しかしアインズの魔力を消耗させることは出来る。

あれだけの強力な魔法だ。連打できるとしても、その回数は限られているだろう。

如何に強力な魔法を使う魔法詠唱者マジックキャスターでも魔法を使用するための力が無くなればただの人だ。

そうなればアイテム等には注意しなくてはならないが無力化したと言つていい。

アインズへの対応はこれで良しとして、ニグンは包囲網から逃れた化け物と戦士を探す。

居た。

戦士はいつの間にかアインズの隣に戻っていた。

魔力の消耗を強いる此方の作戦に感づいたのだろう。

憎たらしくなるほどに冷静で優秀な判断だ。

あの戦士がアインズを護衛するとなると、アインズを消耗させるのは難しいかもしれない。

(だが、それでいい。戦力を分断し、あの二人をあそこに釘付けにできればそれで十分だ！)

その隙に最大戦力と思われる蜘蛛の化け物を滅ぼす。

ニグンは懐に手を差し入れ、切り札を握った状態で倒すべき魔神を探した。

しかし――

「いない?」

魔神の姿がない。

部下に命じて探知系の魔法を使わせても反応しない。

召喚者であるアインズが魔法を使ったことで精神集中が乱れ、召喚魔法が無効化された……などという馬鹿げた願望は即座に捨てる。

奴は絶対にどこかにいる。

ニグンはすばやく天使達による防御陣形を中心に移動すると懐から切り札を取り出した。

それはこぶし大のクリスタルだった。

当然ただのクリスタルではなく、強力なマジックアイテムである。

200年前、魔神が大陸中を荒らしまわっていた頃、単騎で魔神の

一体を滅ぼしたことがある最強の天使を召喚する魔法が封じられているのである。

たった一体で都市を壊滅させることすら可能な最高位天使。

これを再び召喚する魔法にかかる費用と労力はまさに国家規模であるが、ニグンはためらいなくその使用に踏み切る。

なにせ相手は魔神だ。いや、確定ではないがそれに匹敵する存在ではあるだろう。

さらには漆黒聖典に匹敵するだろうマジックキャスターがいるのだ。

それらの存在をここで滅ぼすということには、この秘宝に釣り合う価値がある。

「む？あれはまさか魔封じの水晶か？それに輝きからすると超位魔法以外を封じられるものだな。ユグドラシルのアイテムもあるわけか。そうすると……あまり遊んでもいられないな」

四方向から同時に襲い掛かってきた天使を、片っ端からガントレットに包まれた拳で殴り飛ばして滅ぼしている仮面の魔法詠唱者の姿に全身を冷や汗で濡らしながらも、ニグンは規定の手順に従ってクリスタルを破壊する。

——いや、しようとした。

「は、はエ!？」

ニグンの素っ頓狂な声が草原に響き渡る。

確かに今の今まで手で硬く握り締めていたクリスタルが忽然とその姿を消していた。

慌てて周囲を確認するが、何処にも落ちてはいない。

ニグンの顔からサツと血の気がうせていく。

「た、隊長……?」

そんなニグンの姿に部下の一人が不安げに彼を呼んだ。

その声が聞こえていないのだろうか、ニグンはブルブルと震えながら口をパクパク開けたり閉めたりしていた。

「アインズ。これに何が封じられてるかわかるか？」

「うむ、調べてみよう。道具上位鑑定」

オール・アプリーザル・マジックアイテム

聞こえてきた暢気な声に視線を向けたニグンは心臓が飛び出そう
なショックを受けた。

頼みの綱だった最高位天使を呼び出す魔法を封じたスレイン法
国の至宝たるクリスタルが、あろうことか邪悪の権化たる蜘蛛の魔
神の手中にあったのだ。

クリスタルには辛うじて視認できる白銀の糸が付着している。

それを見て何をされたのかを悟ったニグンは絶叫を上げた。

「ぎゃあああああ!!ま、魔神をも滅ぼすち、ちっから!力があ
ああああ!お前からあつ天使を全て突撃させるおお!あのクリスタ
ルを取り戻せええええ!はやくううう!!」

「りよ、了解!」

半狂乱になったニグンが叫んだ命令に部下たちは忠実にしたがっ
た。

こんな事をしてもまたあの魔法で蹴散らされてしまうのではない
か?

部下たちの誰もがそう予想しつつも、再び全天使が突撃していく。

そして彼らの意に反して、天使たちは滅ぼされなかった。

「お、おい!何をしている!はやく取り戻せと言っているんだ!」

「し、しかし隊長!天使たちが、う、動かないのです!」

突撃を敢行した天使達の全てが空中で停止していた。

どれだけ指示をだしても、僅かに身じろぎするだけでまったく動か
ない。

「一網打尽とはこの事か。ではさようならだ。《フレイミング・ウエブ炎の網》」

蜘蛛の魔神がそう言った次の瞬間、何も無いように見えた天使たち
の居た空間に炎が上がった。

その炎はまるで蜘蛛の巣のような形で空中に広がっている。

炎で可視化された事で誰もが理解できた。

天使たちはあの魔神がいつの間にか張り巡らせていた蜘蛛の巣に
かかり身動きが取れなかったのだと。

しかしそれを理解できたところでなんだというのだろうか。

燃える蜘蛛の巣では、名前の通り火に対する耐性を有しているはず

の炎の上級天使が炎上し灰になつていく。

「で、なにが封じられてるか分かったか？」

「ああ……もつたいないことに、封じられてるのは威光ドミニオン・オーソリテイの主天使の召喚魔法だな。十位階魔法じゃないとか何処の馬鹿の仕業なんだ？」

「ふうん。それなら使っちゃってかまわないか？ どうせ要らないだろ？ こんなの」

「……まあ、別に構わないが
まずい。」

聞こえてきた会話にニグンがそう思った次の瞬間、辺りに光が満ちた。

「お、おとおお……」

感嘆にも呻き声にも聞こえる声がニグンの周囲から沸き起こる。

その光は今や隠れてしまった太陽が地上に出現したかのようだった。

草原は爆発的に白く染め上げられ、その微かな香りが鼻腔をくすぐる。

伝え聞く伝説の降臨の前に、ニグンは絶望に呻くようにその名を呼んだ。

「最高位天使、威光ドミニオン・オーソリテイの主天使……」

現れたのは光り輝く翼の集合体だった。

手や足、頭などが一切が存在しておらず、翼の塊から王権を示す錫杖が出ているという異形の姿ではあるが、誰もがそれを神聖なる存在だと感じていた。

その姿を見せた瞬間から、周囲の空気が清浄なものへと変化していったからだ。

至高善の存在。

それを前にした者達の中から歓声があがり……すぐに萎むように消えていった。

それは何故か？

単純な話だ。

最高位天使であり至高善の存在、人間では決して到達することの出

来ない神の力の結晶である威光ドミノン・オーソリテイの主天使が。

あろうことか魔神に付き従うように傍に控え、あまつさえ此方に対して敵意を向けているのだから。

「ああああああ……」

いつの間にか足の力が抜け草原にへたり込んでいたニグンから擦り出すような声が漏れる。

両手を突き、頭を垂らすニグンの姿に何かを察したのか、彼の部下たちも次々に膝を屈していく。

そんな中、誰よりも先に膝を折ったニグンから叫び声が上がった。

「なあぜだああああ！何故、なんでそうなるんだ！おま、おまえはっ！お前は邪悪だろうが！魔神だろうがああああ！」

「ん？」

蜘蛛の魔神を指差し、唾を飛ばしながら叫ぶニグンに対し、叫ばれた相手は実に不思議そうに小首をかしげていた。

最悪の事態だった。

切り札を奪われ、使用され、その脅威が自分たちに向けられている。

まさしく最悪な状況だったが、ニグンが激情を露わにしているのはもつと別のことに關してだった。

あのアイテムを使用したのがアインズであつたら。

もしそうならニグンは此処まで怒り狂わなかつただろう。精々自分たちの勝機が完全に0になった事で絶望するぐらいだ。

なにせ魔神を使役する得体のしれない魔法詠唱者マジックキャスターであっても、拳で天使を毆殺する魔法詠唱者マジックキャスターであっても、それでもアインズは人間だと思われるからだ。

人間であるならばあのアイテムを使用しても構わなかつた。

どんな悪人であつても、人間に対する偉大なる神の深い慈悲ゆえに使用が許されたのだと思えるから。

だが、実際にアイテムを使用し、現れた至高善の存在を従えるのは誰がどう見ても邪悪であると確信できるおぞましい化け物なのだ。

そんな事は神官でもあるニグンには到底受け入れられなかつた。

「お前もだ！なんでそんな邪悪に従うう！おかしいだろうが！至高の

善なんだろうお！人間を救えよおおおお！」

ニグンは半狂乱になって叫ぶ。悠然と宙に漂うドミニオン・オーソリテイ威光の主天使を指差し、涙を流しながら力の限り叫ぶ。

その涙には悲しみや悔しき、怒り、憎悪など、様々な感情が交じり合っていた。

そんなニグンの叫びを聞いて、涙を見て、蜘蛛の魔神が先ほどから変わらない平静な声で言った。

「いや、天使だろうがなんだろうが、従えられるのは当然だろうが」

なあ？などと同意を求め、うむ、などと同意を示すアインズの姿を呆然と眺めつつニグンは世界から切り離されたかのような非現実感を味わっていた。

何を言っているんだ、こいつは。

そんな馬鹿な話があつていいのか？

天使は異界より召喚される神に仕えしモンスターだ。そこに異論を挟む者もいるが、スレイン法国ではそうであると信じられている。その神に仕えしモンスターが、偉大なる六大神に仕える善の象徴たる天使が。

邪悪の権化に従うなんて間違っている。

これが低位の天使ならばまだわかる。邪悪なる力に抵抗できずその手先として使われているのだと理解できる。

だが眼前で邪悪に付き従うのは最も神に近い場所に仕えているであろう至高善の最高位天使。

なぜ。なぜ？なぜなんだ？

六大神は人類を救済する神だろうか？人類は守るべき存在だろうか？我々が人生をかけて守るに値する生き物だろうか？

考えても考えても答えは出ない。いや、答えを出してはいけない。もしも答えを出してしまえば、それは己が人生のほぼ全てを捧げてきた神への信仰に取り返しつかない傷が出来てしまうだろうから。

「ふひ……うへえへへ……」

ニグンの周りからチラホラとそんな狂気を孕んだ笑い声が聞こえてきた。

部下たちの声だ。

「人類なんて、守る価値がないって、そういいたいのかよ……へへっ」
「魔神の言うとおりの邪悪って事なのか、俺たちは……」

「神様、俺が今まで捧げてきた信仰心は、俺の人生は一体……」
「なにが至高善だよ……なにが神だよ……ふざけんな糞が……」

愚かな。いや、哀れな。

神に対する厚い信仰心を持つ事が入隊条件の一つである陽光聖典の隊員達が、口々に神を罵る言葉を呟いていた。

ニグンが必死に目を逸らしていた答えを、彼らは出してしまったのだろう。

痛みや恐怖などには易々と屈しないだろう屈強な彼らの心を砕いたもの。

それは信仰に人生を捧げた彼らにとって、きつと死よりも辛いこと。

つまり――

「おっ？もしかして彼ら発狂してないか？なあどう思う？」

投げかけられた言葉にニグンは狂気に向かおうとする思考を停止させる。

気を抜くとすぐ項垂れてしまう頭をのろのろと持ち上げると、見たくも無いドミニオン・オーソリテイ威光の主天使を侍らせた蜘蛛の魔神の姿を見つめた。

「お前がリーダーだろう？どうだ、お前の眼から見て彼らは狂ってるか？」

「……ああ」

もはや罵声を浴びせる力も残っていないニグンは、見ての通りだろうと思いつながらそう答えた。

ニグンの答えに魔神が嬉しげな声を上げる。

「そうかそうか！そいつは重畳！では早速実験を……んん？」

上機嫌になにか物騒なことを言おうとしていた魔神が突然なにかに気付いたように天を仰いだ。



(よかったー！ 痛めつけてもいい連中とはいえあんまり怖がらせた
り痛い目に遭わせるのは可哀想だもんなあ。なぜかは知らないけど
穏便に発狂してくれて良かったよ)

穏便に発狂するってどうなんだろうかと思いつながらもクーゲル
シュライバーは上機嫌だった。

発狂させるというのは酷い事だ。

ただでさえ酷い事をするというのに、その状態に持っていくまでに
恐怖と苦痛を与えるのは幾らなんでも哀れに思えていたのだ。

(発狂するってことはそれなりに辛かったんだろうけど、まあフル
コースになるよりマシでしょ。それにしても、なんで俺が威光の主天
使を従えてる事にあんなに驚いてたんだろ？ アイテム使用者が召喚
モンスターを従えるのは当然じゃないか)

色々と分からない事が多いが、余計な苦しみを与えず目標を達成で
きたのだから問題ない。

クーゲルシュライバーは嬉々として実験の第二段階へ進もうと混
乱状態を解除する第三位階魔法《ハーツ・イーズ》の込められたスク
ロールを取り出そうとする。

本来はクレリックの使用する魔法なのだが、これはオカルトホラー
でも取得可能な為クーゲルシュライバーでもスクロールでの使用は
可能なのだ。

手探りで目当てのものを探り当て、いざ取り出そうとしたその時
だった。

意識の隅で感じた、何かが引つかかったような感触。

それはこの世界に来てから初めて感じたものだった。

(でも、分かるぞ。これは……やばい！)

謎の感覚の正体について気がついたクーゲルシュライバーは即座
にアインズに何が起きているのかを伝えた。

「モツ……アインズ！ 何者かが私に対して探知魔法を使用してきたぞ
！ 注意してくれ！」

「なにっ？……させるものかよ」

クーゲルシュライバーの報告にアインズが素早く反応する。即座にガントレットに覆われた両手に魔法陣が展開される。アインズはブツブツと呟きながらも次々に魔法を使用していく。展開されては消えていった魔法陣の数が五つを数えた頃、唐突に大きく空間が割れた。

まるで割れた安全ガラスのように。

だが、ひび割れた異様な光景は即座に元に戻る。

「もう少しプレゼントしたかったんだが……残念だ」

「そうは言うがなアインズ。情報系魔法に対するカウンターを5つも追加できたのだから十分ではないか？」

「……まあ覗き見を懲りさせるには十分か。それで、そっちは大丈夫だったのか？」

情報を抜かれてはいないかと心配するアインズにクーゲルシュライバーは胸を張って答えた。

「大丈夫だ。カウンターという程ではないが、妨害魔法がかかってるからな」

そう、クーゲルシュライバーにも情報系魔法に対する防壁はある。

といってもアインズのように相手にダメージを与えるようなものではなく、情報の閲覧を妨害し相手に狂^{インサニティ}気の魔法をかけるという内容のものだ。

この防壁による閲覧の妨害は敵術者の視界に全く関係のない画像を映し出すという形で実現される。

ユグドラシルではこの時に表示される画像は、術者が自由に差し替える事が可能だった。

なにかのスクリーンショット、自作の絵、不特定多数が悶絶する事間違いなしな手書きノートの実写映像等々、術者の数だけ様々な画像があった。

ある種ブラックラに似た使い方も出来るため、悪戯感覚でビックリ画像を仕込むプレイヤーもいたのだが……。



リ・エステイーズ王国領の草原にいるクーゲルシユライバー達は知る由もなかったが、この時スレイン王国では大事件が起こっていた。

陽光聖典に切り札として渡されていた最高位天使を召喚するためのクリスタルが使用された事が確認された為、一体何が起こったのかを調べる為に土の巫女姫を中心とした高位神官達による探査魔法儀式が急遽行われたのだ。

精神を集中し魔法を発動させた土の巫女姫達はまず最初にクリスタルを使用した者を調べようとした。

しかし魔法が調査対象の姿を捉える前に、自我も無く、視力すらないはずの巫女姫の視界になにか異質なものが滑り込んできた。

それは何も無い空間だった。ただただ果てしない闇が続く空虚な空間。

そんな空間に、やがて光が差ししてきた。

太陽の光のような優しいものではない。天使が纏うような神聖なものではない。

それは禍々しく緑色に染まった邪悪な燐光。見ているだけで狂気に駆られるような、そんな光だった。

そして、彼女は見た。見てしまった。

不気味な光に照らされ現れた、いや、現われたのではない。ソレは最初から既に其処に居たのだ。

深淵を覗きこむ、彼女のすぐ傍に。

それは冒涇の言辞を吐きちらかして沸きかえる、最下の混沌の最後の無定形の暗影。

それは粘液質の深淵にて忌わしい分裂繁殖を繰り返す灰色の脈うつ液体じみた塊。

それは触腕や長い鼻や蛸のような目を備え、なかば無定形で、一部が鱗や皺におおわれている巨大な闇。

それは蛸の頭部を備え、顔はのたうつ触腕の塊で、鱗に覆われたゴム状の体を持ち、四肢には長い鉤爪があり細長い翼を持つ大なる司

祭。

それはぞつとするような柔軟さの触腕状の付属肢と手の両方を持った燃えるような三眼を備えた巨大な無定形の生き物。

それはそれはそれはそれはそれは！

「ぎゃあああああああああああ!!」

突如として悲鳴を上げて身をのけぞらした土の巫女姫にその場に集まっていた誰もが目を向けた。

そして戦慄する。

「ぐふふふひひひひひ!!」

土の巫女姫が口から泡を吹きながら、自らの眼窩に指を差し込み、かき混ぜ、無いはずの目を抉り取ろうとしている。

あまりにも唐突に発生した惨事に周囲にいた誰もが即座に行動できず硬直してしまう。

そして次の犠牲者が出た。

それは土の巫女姫を利用して情報系魔法を使用した神官だった。

彼女も巫女姫と同じように自分の目を指で潰し出す。巫女姫と違いドロリとした水晶体が眼窩からあふれ出し引きずり出された視神経がブラブラと垂れ下がっている。

数秒経ち、ようやく周囲の者達が動き出したとき、喉を掻き筆り悶える巫女姫に発狂した神官が奇声を上げながら再び情報系魔法を使用した。

あきらかに狂気に囚われた彼女が、一体何を思ってそうしたのかは永遠にわからない。

そして、その次の瞬間。

巫女姫と神官の体が異常に膨張し、破裂し、大爆発が起こった。

その後スレイン法国に5度に渡る爆発音が響く事になった。

爆発音の原因である土の神殿には、不思議なことに衝撃と炎による破壊痕の他に、大量の蟲や獣の屍骸や、滾々と湧き上がり続ける塩水、金属製の棘、謎の粘液、石化した人間の残骸などが確認されたという。



(確か最後に設定しといた画像はHPラヴクラフトいあいあ愛好会さんの所の素材だったな)

クーゲルシュライバーの言うとおり、発動した対情報系魔法に登録されていたのはかの旧支配者ギルド「HPラヴクラフトいあいあ愛好会」謹製、神話生物オールスターのスクリーンセーバーだった。

ユグドラシル内で旧支配者種族を使用しているプレイヤーだけに配布されていたそのデータは課金しなければ魔法に登録できない程のデータ量だったが、その膨大なデータ量が物語るように非常に出来が良かった。

プレイヤーの中にはそれが見たいが為に態々対策をしないで旧支配者種族を使用しているプレイヤーに情報系魔法をかける者もいた。

そういう類のプレイヤーは大抵原作ファンであり、『旧支配者の精神を垣間見て発狂した哀れな探索者』をロールプレイして楽しんでいた。

(でもこないだシクススに盆踊り大会の映像見せた時の事を考えると、楽しむ余裕はないかもなあ)

まあどのみちアインズのカウンターでえらい事になっているだろうから関係ないか。

そう結論づけてクーゲルシュライバーはアインズに先ほど何があったのかを説明され「本国が俺を……」とショックを受けているリーダーらしき人物に声をかけた。

「それじゃあ続きと行こうじゃないか。あ、いやまて。その前にだ」
ゆつくりと歩き距離を縮めていくクーゲルシュライバーから逃げように、リーダーの男が地面に尻餅をついたまま後ずさっていく。

「お前は私の事を魔神と呼ぶがな。そんなランプにでも封印されてるような奴らと一緒にしないでくれ。私はな……」

「あ、ああああ……来るなッ！来ないでください！お、お願いしますからあああああ！」

「おいおい、そう逃げるなよ。アインズはああ言ったが、別に命までとろうって訳ではないんだから」

「うわあああああ!!プリンパリテイ・オブザベインジョン監視の権天使! 奴を倒せええええ!」

絶叫と共に動き出した天使の一体が光り輝く巨大なメイスを振りかぶり襲い掛かってくる。

神聖属性を付与された武器による攻撃はクーゲルシユライバーの持つダメージ軽減スキルを突破することが可能だ。

そんな武器による一撃が、人間の骨を粉々に粉碎することが可能な速度でクーゲルシユライバーに向かう。

「はいチョンパ」

その声と共に放たれたユグドラシルにおける最大ASPD——アタックスピード、攻撃速度の意——に到達するクーゲルシユライバーの混沌属性を持った首狩りゾオルバルなどが付与された爪による一閃により、プリンパリテイ・オブザベインジョン監視の権天使の頭部が切り飛ばされ魔力の燐光となって消えていく。

残った胴体部分が振り下ろすメイスもクーゲルシユライバーに到達することなく光になって消えた。

「アイイイイイイ!?!」

クーゲルシユライバーは情けない叫び声を上げて逃げる男に向かって擬腕を差し出す。そしてスキルを発動した。

《十二の糸疣》トウエルブウエフシユター

差し出した擬腕の先端についた手の形をした部分。人間で言うところの5本ある指の先端と手首の部分の甲殻が捲り上がり、其処から白銀の糸が投射された。

六条の白銀の線が伸びる先は涙で顔をグシャグシャにした敵のリーダーだ。

放たれた糸は複雑な動きでリーダーを絡めとり彼から動きの自由を奪い去った。

クーゲルシユライバーは自分と彼を繋げる糸を引き寄せる。

「ああああああ! 助けて! 助けてくれええええ!」

人外の怪力によって引っ張られた彼は空中を矢のように飛んでクーゲルシユライバーの擬腕に捕らえられた。

リーダーが助けてと言っているのにも拘らず、周囲にいる彼の部下

たちは何もしようとしなない。

あまり信頼されてなかったのかな？と思いつつも、クーゲルシュライバーは自分のノツペラボウのような擬頭をリーダーの顔に近づけて言った。

「魔神などと勘違いしているようだから教えてやる。私はな——」

——邪神なんだよ。

18話

「邪神だど？馬鹿な……アレはただの作り話だ……」

帝国の一部貴族の間で信仰されている神である邪神。

しかし本当はそんな神など存在してはいないのだ。

神とはみだりに姿を見せないもの、なぜ存在しないと云えるのかと問われようともニグンには断言できた。

そして、それは間違つてはいない。

「なんだ？邪神の伝承でもあるのか？」

いつの間にか距離を詰めていたアインズが問う。

あるかないかと言えば、ある。

それは名無き邪神と呼ばれ、死と暗黒を続べると言う。その邪神は極寒の世界に居城を作り、死した魂を凍りつかせて弄ぶといわれている。

だがそれはスレイン法国で信仰されている闇の神が他国では信仰されていないという面を利用して、とある組織が作り出したものだという事が風花聖典の調査の結果判明している。

つまり、邪神の伝承はあるにはあるが、それは紛れも無く人間の手による作り話なのだ。

そしてその作り話の内容とさえ、自身を捕らえる自称邪神は似ても似つかない。

「知らない……こんな存在がいるなんて、私は知らないっ……」

そう答える一方でニグンは納得していた。

つまり、自分が知らないだけで本当に邪神というのは存在していたのだ。

大本を辿ればスレイン法国で信仰されている死を司る闇の神に行き着く創作物の邪神。

それとは一線を画した、これっぽっちも善なる面を持たない正真正銘の邪悪なる神がこいつなのだ。

だから、至高善の存在であり最高位の天使である威光の権天使ですら、下位の天使のように邪悪なる支配力に負けてしまったのだろう。

それは邪神の力がニグンの信仰する六大神に匹敵する、もしくは上回る事を認める考えだった。

法国の神官に聞かせれば、陽光聖典の隊長であるにも拘らず不信心だ不敬だと罵られるかもしれない。

しかしニグンはこの考えに一筋の信仰的な救いを感じていた。

(善なるものは我ら人類を見捨てたのではない。神は我らを依然愛してくれている。ただ、邪神の力が強すぎるだけなのだ)

信仰を捧げてきた存在に見捨てられたわけではないという思いが、ニグンの正気を辛うじて繋ぎとめていた。

いまだ狂っていない半数近くの部下達も、恐らくは自分と同じ考えなのだろう。

六大神に匹敵する邪悪なる存在に相對している事への恐怖と絶望にすすり泣いているが、皆たしかに正気ではある。

陽光聖典の隊員に選ばれるだけある厚い信仰心のなせる業ではあるが、それが一体この場でなんの役に立つというのだろうか？ニグンは皮肉げに口角を吊り上げ力なく笑う。

あるいは神に見捨てられたと発狂してしまったほうが楽だったのかも知れない。

「うん？」

邪神の声と共に突然体が振られニグンの視界が180度回転する。眼前に吊り上げられていたのが、今は丁度前方に構えられた盾のような形になっている。

恐ろしい邪神の貌が見えなくなった事に僅かながら安心するニグンのその目に顔を顰めたくなるような光景が飛び込んできた。

「へ、へ、へ、へ……」

精神の均衡を崩し、発狂した一部の部下達がニグンを捕らえた邪神の下へと卑屈に笑いながら近づいてくる。

兜を脱ぎ、涙と鼻水、涎で汚れた顔を乞食のような笑みに歪めにじり寄るその姿は敵に対する備えを一切捨てている。

最早抵抗は不可能で無意味だと理解しているニグンから見ても、それは不快感を覚えずにはいられない姿だった。

「へへへ……邪神様。あなた様に私の信仰を捧げます」

「おお神よ……真なる神よ！矮小なるこの身にあなた様を信仰する榮譽を与えたまえ！」

「目が啓かれた思いでございます。今はただ偽りの神を信奉していた愚かなる日々を悔いるのみ」

「あなた様の望むモノを我が信仰の証として捧げます！」

——だから、どうか殺さないで下さい。どうかお助けください。

次々と六大神を捨て邪神への新たなる忠誠を誓っていく彼らの本音はそれだった。

邪神の前で跪き、本来は六大神に祈るための作法で裏切りの言葉を紡ぐのは、ひとえに己の命が惜しいがゆえだ。

その姿のなんと惨めで、汚らわしい事だろうか。

ニグンの心になにか得体の知れない熱が宿っていく。

その熱の正体は、怒りだった。

敵は強大で、勝ち目は無くて、最早抵抗することも出来ない。

そうなれば命乞いもまたやむなしだろう。

しかし。

（それでも、人生をかけて信仰してきた神を容易く捨ててみせるお前たちは間違っている……）

この期に及んで愚かな考えかもしれないと頭の片隅で自嘲するニグン。

そんな彼の考えを意外な存在が同意してみせた。

「さがれ下郎!!」

頬を叩くような突風と共に、アルベドと呼ばれた全身鎧の戦士がニグンを、いや邪神を庇うように現れる。

そして破裂音に似た轟音と共に部下達が宙を舞い、吹き飛ばされていく。

「ひいひいっー！」

「うわああああ！」

「お、おたすけえええええ！」

「(バ)ひいひいっー！」

掃き掃除の最中、戯れに箒を振るわれ周囲に四散する木の葉のようだとニグンは思った。

大きく振り切られたバルディツシュの姿から、ニグンは自分の想像と眼前で起こった現象は同じ理屈で成り立っているのだと悟る。

金属鎧などの重武装をしているわけではないが、完全武装した成人男性を、この女戦士は風を掴みやすい扁平な形状の斧を使ったとはいえ武器を振った風圧だけで吹き飛ばしたのだ。

あるいは明らかに魔法の武器であるあのバルディツシュに秘められた特殊な能力が成した業なのかもしれないが、ニグンはこれが単純な肉体能力の産物であると察していた。

ならば、一体どれだけの筋力があるその偉業を成し遂げるといえるのだろうか？ニグンは改めて戦慄した。

「恥を知れ下等生物風情が！アインズ様の慈悲を拒否するという大罪を犯した身でありながら、今度は命乞いの為に自らの神を捨て我らが至高の神を信仰するなどとよくも嘯いたな！なんたる寡廉鮮恥！信仰や忠義の意味も知らぬ愚か者め！」

怒気を隠そうともしないアルベドの言葉にニグンは本能的な恐怖に身を震わせる。

吹き飛ばされ無様に地面を転がる狂った部下達は、皆一様に顔をグシャグシャに歪め泣きじやくりながらも必死に助けを乞うていた。

あいつらと比べれば、我が身のなんと誇り高き事か。

同じ恐怖の前に立たされておき、同じく未来と希望を断たれた身であるニグンはそう思わざるをえなかった。それほどまでに惨めな光景だったのだ。

振り切られたバルディツシュの刃が返され、血に染まったかのように赤く輝く星達の光を鋭く反射する。

赤く輝く刃は使い手であるアルベドの心火の勢いそのままにブルブルと震えている。まるで牙を剥き喰い声を上げる猛獣のようだ。

アルベドの技量であれば最初の一振りでも彼らを容易く皆殺しに出来たのだろうが、それをしなかったのは返り血で主人達を汚す事を嫌ったからだろう。

だがこうして距離を取った以上、その猛獣はすぐにも解き放たれ恐怖に心折られた哀れな狂人達の命を奪い去っていくのだろう。そしてニグンにはそれを止める力も、止めようとする意思も無かった。

「それまでだアルベド」

最早止める事の出来ないはずの猛獣を止めたのは蜘蛛の邪神だった。

「しかし……」

「やめろと言っているのだ。お前らしくもないぞ、目的を忘れたか？」

「……はっ。出すぎた真似をしました。申し訳ございません」

邪神の言葉に何か言いたげながらもアルベドは振り上げられた兇刃を降ろした。

首元まで近づいていた死が遠ざかった事を認識し、この場に居る人間全てが安堵したようだった。

「ふう。……何を信仰するかは個人の自由だ。そしてその信仰のあり方も個人によって違うのが当然だろう。故にかつての神を捨て、新たな神として私を信仰しようという彼らを罰するつもりはないのだ」

邪神の発した言葉を聞いて、六大神を捨てた者達の目に希望の光が宿る。

そんな彼らの様子を見て邪神が言う。荒れ果てた心に染み入るような柔和で危険な優しい声で。

「それに、彼らは信仰の証として私の望むものを捧げると言っているではないか。なあ？」

「はっ……はい！仰るとおりです邪神様！」

話を振られた狂人の一人がこのチャンスを逃してなるものかとかばかりに返事をする。

邪神は顔の無い頭部を上下に動かして機嫌よさげにしている。

「そうかそうか。……む？震えているな？心配するな。定命の者に対して命を差し出せとは言わないよ。私が望むのは他愛ない、そう、何て事の無い世間話なのだよ」

気遣うような優しい声を間近に聞きながらニグンの未だ折れない

六大神への信仰と人類の守護者足らんと生きてきた経験が警鐘を鳴らす。

(危険だ。奴のいう世間話こそ、最も危険な行為だ……!)

六大神を裏切った部下の惨めな姿を見ることで宿った怒りの炎がもたらす微かな温もりが、ニグンの恐怖に冷え切った思考と心を僅かながら解きほぐしていた。

その彼の頭脳と心が一つの答えを導き出した。

未知の魔法。

意図の掴めないアインズの質問の数々。

本当は命を奪うつもりはないという発言。

世間話を供物として要求する邪神。

降って湧いたかのように現れた3人も常識外の強者。

それらの要素がニグンの脳内で様々な過程を経て一本の糸で繋がった。

(理由はわからないが、奴らは情報を欲しているのだ……。それも我々が持つ機密度の高いモノではなく、世間話レベルの情報ですらも)

今思えば愚かなことだが、アインズに対して自身が放った「無知なのか？」という言葉は間違いではなかったのかもしれない。

一体如何なる理由でアレほど強大な存在がこの世界に対して無知になれるのかは分からない。

しかしニグンには一つだけ分かっていることがあった。

それはあの邪悪にこの世界の情報を与えてはいけないという事だ。

(こいつらは用心深い。ならば無知である内はなにか大きな事件を起こそうとはしないはず)

六大神に匹敵し、もしかすると上回るかもしれない邪悪がこの世界に害を振りまくその時を僅かでも遅らせる。

それが自身に出来る人類への最大の貢献であるとニグンは悟った。

この考えがまったくの見当違いだったとしても、やつらは此方に死なれては困るらしい。

戦いとは如何に相手の嫌がることをするかが重要である。

ならばやることは変わらない。

自らがやろうとすることに對する恐怖はある。

だがアインズが言った「絶望と苦痛の中で死に絶える事となるだろう」という言葉を思えばその恐怖を乗り越えることは容易かった。

「ああ……」

ため息とも嘆きとも取れぬ音を発しながら、ニグンは天を仰いだ。

——見慣れない夜空である。

幾つもの赤く光る星が地上を見つめている。

真の邪悪が跳梁跋扈する夜というのは、こういうものなのか。

ニグンは自身の生涯を振り返りつつ禍々しい夜空を眺めた。

(……信仰と、大義に尽くした人生だった。まさかこんな最後になるとは思わなかったな)

死とは突然、理不尽かつ無慈悲に襲い掛かってくるものである。

そう理解はしていたが、いざ自分に降りかかってくるとこれほどまでに恐ろしく度し難いものなのか。

自分達がしてきた行為の罪深さを実感を伴って知る事になったが、それでも後悔はない。

自分は信奉する神を裏切らず、成されるべき大義の達成のために真つ直ぐ進み続けてきた。

そしてそれはきつと最後の瞬間まで。

ならば、概ね満足な一生だったと言えるだろう。

「世間話……うひひっ……そのようなことでよろしいのならば幾らでも喜んで！」

生にしがみ付こうと必死が故に狂人にも拘らず理性的に振舞っている元部下達。

かつては同じ神を信仰し、苦樂を共にした彼らの昨日までの姿が一瞬脳裏によぎる。

(だが、許さん)

邪神に組する輩を放っておくわけにはいかないのだ。

ニグンは糸に胸部を圧迫されながらも、吸い込める限界まで肺を膨らませ空気を取り込んだ。

——これが、最後の呼吸だ。ああ、アーラ・アラフよ。光の神よ。邪悪に抗う我が勇気を見届けたまえ！

「よろしい。では——」

邪神が何かを言う前に、ニグンの叫びがそれを遮った。

「私と裏切り者を殺せ！ その後に自己終了せよ！ さらに諸君！ 神の御許でまた会おう！」

「……な、なにいい!? ちよ、まつ、死んじやだめえええセーブできないその命いいいいー！」

邪神らしかぬ邪神の焦る叫びを聞きながら舌を噛み切ると、ニグンは胸に感じた衝撃と共に目を閉じた。

最後にニグンが見たものは夜空から流れ落ちる夥しい数の赤い星の姿だった。



「……そんない」

完全に日の暮れた先ほどまでの光景とは違い、西の空に微かに太陽の残滓が残る空の下でクーゲルシュライバーは死んでしまったスレイン法国の兵士達の亡骸を見つめていた。

八つ当たり気味に首を刈り取られて死亡した威光ドミニオン・オーソリテイの主天使から発生した光に照らされたクーゲルシュライバーの擬腕は力なく垂れ下がり、擬頭もうな垂れている。

その姿は勘違いしようも無く、落ち込んでいるようにしか見えなかった。

そんなクーゲルシュライバーの肢の一本に仮面を脱ぎ去ったモモンガが優しく手を添えた。

「そんなに落ち込むことはない。確かに数人死んでしまったが情報源となる兵士はまだ沢山いるし、あのリーダー格の男もポーシヨンが効いて一命を取り留めたじゃないか」

モモンガが草原の一角を指差す。そこでは見るも恐ろしい巨大な黒い蜘蛛達がグネグネと蠢く糸の塊を綺麗に整列させる作業に勤し

んでいる。

彼女達が抱える糸の塊の一つから顔を出したリーダー格の男が、信じられないものを見たといった表情でクーゲルシュライバーを慰めるモモンガを凝視していた。

黒い巨大蜘蛛達の体長は個体差もあるが5mほどで、それぞれ7本や9本、11本等の奇数の肢を持っている。

その黒い体の頭胸部には赤く光る星のような真紅の眼がついていた。

彼女たちは「レン・スパイダー」という名で知られる80レベル台のモンスターだ。

身を隠す事に優れ、糸で作った武器に習熟し、高位の幻術を使いこなす狡猾かつ危険な知的生命体である。

彼女たちは一匹の例外を除いて全員がクーゲルシュライバーの持つ一日に一回しか使えない特殊技術《コール・オブ・アトラクシナクア邪神の呼び声》によって召喚されたものだ。

現有するMPの全てを発動と同時に消費し、その消費量に見合った数の奉仕種族を召喚するこのスキルをクーゲルシュライバーはMPのステータスに神話パワーをつぎ込んで使用していた。

その結果、彼女たち召喚されたレン・スパイダーの総数は30匹を超える。

彼女たちは戦場となった草原一帯の上空に巣を張り、主人であるクーゲルシュライバーの命令に通りの演出効果を幻術——聴覚、視覚、触覚、嗅覚に作用する——で再現していた。

主人からも演出の必要はないと通達されても、その場に留まり何時でも命令に応えられるように待機していた彼女たちの活躍あって、自殺しようとする兵士達を寸前で拘束することができたのだ。

「しかし……」

「しかし、ではない。何も問題はないのに落ち込んでどうするのだ。それに見よ。お前がそのような調子ではレン・スパイダー達が不憫ではないか」

モモンガのその言葉にクーゲルシュライバーはようやく俯いてい

た擬頭を上げた。

そして作業をしながらも時折心配そうな素振りで此方を窺ううら若きレン・スパイダーの美少女達と眼があつた。

——ご主人様、悲しそう。

——ごめんねっごめんねっ……全員生け捕りにしたかつたんだけど……。

——怒られるかな？食べられちゃう？マキマキされちゃう？

概ねそんなニュアンスの感情と思考が感じられ、クーゲルシュライバーは胸が張り裂けそうな思ひだつた。

(うぐぐぐ！す、すまないみんな。別に君達に落胆しているとかそういうんじゃないんだ。ただ単に自分の迂闊さを呪っていただけで……ちくしょう！)

自分が容姿端麗な美少女達を不当に怯えさせているという状況に気付いたクーゲルシュライバーは精神作用無効化が連続発動するほどの羞恥と罪悪感を覚えていた。

しかしそれもやがては完全に抑えこまれ、冷静な感情と思考が戻ってくる。

——そして、ふと。

クーゲルシュライバーは気付きたくなかつた事実気付いてしまった。

「……」

おそろおそろ、レン・スパイダー達の働く姿を見る。

そして静かに視線を外した。

クーゲルシュライバーの擬腕の手が強く握りこまれ、巨大な牙が擦り合わされギシギシと音が鳴る。

一体どれほどの力が込められているのだろうか？まるで金属が軋むような音が不気味に周囲へと染み渡っていく。

黒檀色の全身が小刻みに震える様子はまるで怒りを堪えているかのようだ。

「ク、クーゲルシュライバー様。モモンガ様の仰るとおり、このような事態はミスと呼べるものではございません。そのようにご自身を責

めるのは、ど、どうかお止めくださいませ」

カチカチと鎧を小刻みに鳴らしながら話しかけてきたアルベドに、クーゲルシュライバーはブルブルと震えるぎこちない動きで擬頭を向けた。

面頬付き兜の奥でアルベドが息を飲む音がした。

「いや、違うんだアルベド。多分お前が思ってるのとちよつとズレてる。俺そんなに完璧主義者じゃないから。この震えはべつものだから」

——と、とても真面目なお方です。その、すごすぎるぐらいに。

——指揮下にある者達の失敗を決して許さない完璧主義者。至高の御方々からも恐れられた苛烈なお方です。

数日前に聞いたマーレとデミウルゴスの自身への評価が脳裏にチラつく。

（多分アルベドは俺が情報源を得るという目的を完璧に達成できなかったと自分を責めてるんだと思ってるんだな。無理も無い。仕事熱心の真面目キヤラで完璧主義者ならそうなるだろうよ）

だが勘違いだ。

確かに兵士——特に自分を信仰すると言ってくれた人たち——を無駄に死なせてしまった事には落ち込んだし、レン・スパイダー達を不安にさせた事には後悔もした。

しかしいま自身の体を震わせるのはまったく別の理由なのだ。

（ああちくしょう・なんてこった……何で俺、蜘蛛相手に可愛いとか美少女とか思っちゃってるんだ!?!）

問題はそれだ。

正直な話、呼び出したレン・スパイダーが自分にとって性的過ぎてクラクラするのだ。

この世界に来てからはたとえエントマ相手でも感じなかった性欲が激しく掻き立てられる。

その上何故か一体一体の個性や美しさの違いも判別できてしまう。

これは全く初めての経験だった。

人間としての感性が彼女たちをおぞましい化け物蜘蛛と断じる一

方で、肉体が彼女たちを健康で美しい雌であり食欲と性欲を掻き立てられる魅力的な相手だと認識している。

相反する自身の感性に、まるで意識が二つに引き裂かれるような不快さを感じクーゲルシュライバーは身を震わせていたのだった。

『クーゲルシュライバーさん。完璧主義者ロールもいいですけど、そろそろアルベドが辛そうです。このあたりで終わりにしてあげたほうが良いと思いますよ?』

ブルブルと体を震わせる無言のクーゲルシュライバーに見つめられたアルベドを不憫に思ったのかモモンガから伝言が入った。

その言葉にクーゲルシュライバーは幾分か冷静さを取り戻す。

疑問もあるし不安や混乱もあるが、今はそれらを気にしない事にしよう。

クーゲルシュライバーは擬頭を勉強に疲れた学生がするかのようグルリと回すと、モモンガとアルベドに向き合った。

「……ふう。すまないモモンガ。そしてアルベドよ。これは私の悪い癖だな」

蜘蛛の頭部を軽く下げ謝罪するとモモンガは気にしていないとばかりに口を開け笑った。

「そして美德でもある。なに、謝ることなどないさ。そうだろう? 友よ」

「そうか? いや、モモンガがそう言うなら間違いはないな。では言葉を変えて……ありがとう、友よ」

クーゲルシュライバーは身をかめると擬腕をモモンガに差し出した。

モモンガは快くその手を握り締める。

遠くでリーダー格の男のくぐもった叫び声があがっているがクーゲルシュライバーは気にせず二度三度上下に握手を振ると、モモンガの手を離し少し身を引いて此方を見つめていたアルベドへと身を寄せた。

「アルベドもな。よく言ってくれた。お前のように慈愛に溢れた女を部下に持てて私はとても嬉しいぞ」

出来るだけかっこつけた声で優しく聞こえるような言葉を発したクーゲルシュライバーは、なにやら身を震わせながら跪こうとするアルベドの腕を掴み、彼女が何かを言おうとするのよりも早く口を開いた。

「よい。よいのだアルベド。何も言うな」

「クーゲルシュライバー様……」

なにがよいのかさっぱりだが、とにかくよいのである。

とりあえず、今は自分が感じている蜘蛛に対する欲情以外の事は全て些事に過ぎない。

クーゲルシュライバーはそう思つて、自ら誘発させた事ではあるがなにやら大げさな事態になりそうだったアルベドをゴリ押しで黙らせた。

身長差ゆえに腕を捻り上げられているような形で爪先立ちを強いられているアルベドは、兜越しでも分かる恍惚とした吐息を漏らしながら内腿をすり合わせガチャガチャと金属質な音を立てている。

モモンガが露骨に視線を此方から外した事からわかるように、どんな鈍感男でも分かる程アルベドは性的に興奮していた。

(うーむ。鎧着ても普段のアルベドの姿を知っているから結構エロく感じるものだな。……ん?)

アルベドに対してエロを感じるのであれば、自分はまだ引き返せるのでは？

居心地悪そうにしているモモンガをよそに頭に浮かんだその考えに小さな希望を感じたクーゲルシュライバーはアルベドの腕を引き、大きな牙に隠れるように存在する口に彼女の頭を近づけさせた。

NPCに対して深い拘りを持つモモンガには聞かれては困る内容だと判断したからだ。

「先の間人たちでは出来なかつた実験があつた。だが思えば全身鎧を着ているお前程この実験に適した相手はいないな。アルベドよ、私の実験に付き合つてはくれまいか?」

「はい！私でよろしければ、是非に！」

囁くようなクーゲルシュライバーの言葉にアルベドは即座に肯定

で返した。

「そうか。ではナザリックに戻ったら実験するでしょう。連絡するから鎧を装備した状態で私の部屋まで来るように」

「承知いたしました」

クーゲルシュライバー様のお部屋に！ああどうしまししょうナザリックに帰り次第急いで湯浴みを……いえそれよりも仕事が先よアルベド！優先順位を間違えては折角の御寵愛をうけるチャンスが……。

話はこれで終わりだと言わんばかりに腕を離れたクーゲルシュライバーの口元ではアルベドが小声で欲望に塗れた独り言を呟いている。

なるほど、アルベドはそういうのがお望みか、とクーゲルシュライバーは心のメモにアルベドの望みを書き込む。が、クーゲルシュライバーにはそこまでやるつもりは無い。

いつかこの情報がなんらかの役に立つこともあるだろうと思つての事であつて、実行の意思は皆無なのだ。

やつてはいけないという漠然とした危機感が、自身の性的嗜好が正常な人間のものだと確認したいと逸る心を抑えた結果だった。

「……そうか、逃げた三人の拘束が完了したか。ご苦労だったな」

「シモベ如きにもつたいたいなお言葉でございますモモンガ様。我らは当然の事をやったまで。それに……」

アルベドに構っている間に姿を現しモモンガの前に跪いて報告を行つていたエイトエツジ・アサシンからの視線を感じ、クーゲルシュライバーは首を傾げた。

「ん、なんだ？私がなにかしたか？」

「い、いいえ滅相も無い！ただ、逃亡した三名の人間を捕らえるのにクーゲルシュライバー様が召喚なされたレン・スパイダーのお嬢様が単独で加勢して下さいましたのです」

「……なに？」

うつそくん、などと口を突いて出そうになつた言葉を強引に噛み殺し、クーゲルシュライバーは小さく驚く。声が小さいうえに表情の存

在しない体ゆえにその驚きは周囲に伝わらなかった。

「ほう。あのやり取りの最中でそんな事をさせていたのか。流石は完璧主義者。抜け目が無い」

「あ、いや」

モモンガまでもが素直に称賛してくる事態に、クーゲルシュライバーは言葉を濁すことしか出来なかった。

困惑する思考がそうさせたのだ。

（まてまてまて。俺はそんな命令出してないぞ。命令を勘違いするケースはデスナイトで確認済みだけど、命令無しで動くのかなにそれ怖い。っていうかまずくないかそれ？）

そう。エイトエツジ・アサシンが言う内容にクーゲルシュライバーは全く身に覚えが無かったのである。

「エイトエツジ・アサシンよ……って、お前は私の部屋についてたやつか？」

「ははっ……覚えていて下さるとは感激の極み！」

即座に本題に入ろうとして、ふと気付いた事に話題を変える。

あの目の配置、牙の大きさ、必死に振るっていた腕の数々……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
簡単に忘れるほど薄情でもなければ鬼畜でもない。

クーゲルシュライバーは自分が彼にしたこと、やらせた事を思い出してそう思った。

「うむ、まあ、そうだな、うん。で、だ……お前達に加勢したというレン・スパイダーはどのような奴だった？」

「はっ！ 7本肢で、すらりと細長い蝕肢があどけない小柄なお嬢様でした」

「あどけない？ 小柄？ お嬢様？」

モモンガが腕を組んで作業中のレン・スパイダーの群れを見て呟く。彼の疑問は尤もだろう。

普通、蜘蛛の個性など分かるわけがないのだ。ましてやエイトエツジ・アサシンの言うような主観の入った説明では。

だが、普通の人間としての感性を残すアンデッドであるモモンガには分からずとも、蜘蛛としての感性を有するクーゲルシュライバーに

とっては十分な説明だった。

「そうか、あいつか」

もしかすると、という予感があった。

《コール・オブ・アトラクシナクア邪神の呼び声》で召喚された大勢のレン・スパイダー達とは違い、全く別のスキルによって生み出されたレン・スパイダーが一匹だけいた。

使用されたのはネムの護衛についているフェイズ・スパイダーを生み出したのと同じ系統のスキル。

使用対象に適した雌のオブジェクトが中々見つからず、最終的にはクーゲルシュライバーとしても非常に不本意ながら、こつそり柔らかな地面を掘り起こして見つけたものを苗床にして誕生したレン・スパイダーだった。

彼女は苗床になったオブジェクトのレベルが低かった影響なのか、コール・オブ・アトラクシナクア《邪神の呼び声》で呼び出した者と比べて非常に小柄でレベル自体もペナルティによって10レベル近く低下した状態で産まれてきた。

しかし大変賢く、元氣一杯で、まるで親子の仲のように慕ってくる事からクーゲルシュライバーとしては非常に可愛らしく感じる召喚モンスターだった。

（演出とカルネ村のこれからの為に生み出したけど、ペナ受けてるし廃棄しようとしたんだよなあ。でも可愛くってそれもできずCOA使って演出用レン蜘蛛用意して……そこまでの子が、まさかこんな事をするなんて）

廃棄しなかった理由には苗床にしたオブジェクトの犠牲を無駄にしたくなかったのもある。

死霊術を使うプレイヤーからしてみればただの資源に過ぎないが、ゲームから一歩離れて見てみれば無闇に弄繰り回していいものではない事は明白だ。

モモンガと自分を神と敬う母親譲りの金髪が眩しいエンリと、その妹である無垢で愛らしいネムの事を思えば尚更である。

また、未だに消える様子を見せないデスナイトやデスウェブと同じようにこの世界の存在を媒介にして召喚したモンスターである以上、

長生きするかもしれない可愛いレン・スパイダーを廃棄するのは躊躇われた。

様々な理由が廃棄しようとする意思を遠のけていたが、流石のクーゲルシユライバーもこの事態には考えざるを得なかった。

デスウェブをこのまま村に置く事が出来ないと知ったときから暖めていた計画を、変更する事もやむなしか？

クーゲルシユライバーは外見にその苦悩を表す事無く、うんうんと悩む。

「さて、そろそろ村に戻ろう。王国戦士長殿に別れの挨拶の一つもしておくべきだろうしな」

スレイン法国の兵士たちを梱包し終えたレン・スパイダー達の一群が姿を消すのを見てモモンガが言う。

眼窩の奥の鬼火が横滑りしているところを見ると、不可視看破の特殊能力を使用しているのだろう。

モモンガには糸の塊を肢に抱えたレン・スパイダー達がナザリックに向かって行軍している姿が見えているはずだ。

「そ、そうだな。アインズ・ウール・ゴウンとして、王国戦士長と村の連中に事の次第を伝えねばな」

「全く面倒な事だが、これも必要な事。……ふむ。確かクーゲルシユライバーはこの世界の星空を見るのは初めてだったな？ ゆっくり天体観測でもしながら向かおうじゃないか」

「それは名案だ！」

まさかのモモンガからの天体観測デートの誘い。それに考える時間を稼ぐべきかと考えていたクーゲルシユライバーは即答した。

考えるべき事が沢山あるのだが、目の前にぶら下げられた楽しい事には食いつかざるを得ない。

そんな刹那的な快楽を優先する生き方をしてきた結果が以前の世界でのしみつたれた人生なのだと分かっているても、クーゲルシユライバーはその生き方を変られなかった。

自分で判断して動くレン・スパイダーだって、その気になれば消す事ができるし大丈夫。

自分の性的嗜好というか感性についてだって、今考えてもしかたない。

カルネ村のアレコレについては、ある程度仕込みはしておいたから大丈夫。

死んでしまった兵士の事も、少しだけ残った狂った兵士の事も、そしてあのリーダーの男の事も。

みんな後回しで大丈夫だろう。

そう自分を納得させる中で、クーゲルシュライバーはぼんやりと思う。

(そういえば、蜘蛛って食事している間でも視界に餌になる生き物がいると襲い掛かるんだっけ？興味があるものを見ると飛びついちゃうって事なのかな？もしそうなら、俺って元々、少し蜘蛛っぽいのかも)

きっと全くの見当違いな考えで、蜘蛛からしてみれば著しく名誉を傷つけられるであろう考えである事を認識し苦笑つつ、クーゲルシュライバーは大きく擬腕と前肢を夜空に伸ばす。

伸ばした先には無数の星々と月を思わせる惑星が、クーゲルシュライバーからしてみれば信じられないほど鮮やかさで白く青い光を放ち煌いていた。

「美しい！なんて綺麗なんだ！ほら、アルベドも来い！兜なんて脱いで見てみる！すごいぞお！」

「まあーフフフ……クーゲルシュライバー様だったら……」

「ははは……いや、はしやぎたくなるのは私もわかるな。まったく、二度目だというのにな……なんて美しいんだこの世界は」

モモンガと兜を脱いだアルベドが微笑ましそうに笑うのを背中に感じつつ、黒い外骨格に満天の星を纏ったクーゲルシュライバーは昼間そうしたのと同じように大きく大きく、夜空に手を振った。

なお、精神作用無効化を打ち消すのを忘れていたとクーゲルシユライバーが気付いたのは、彼がナザリツクに戻りモモンガと一緒に風呂に入っている時だった。

19話

「風呂だー！」

男と描かれた暖簾をくぐって一番、クーゲルシュライバーの陽気な声が脱衣所に響き渡る。

モモンガは自分と同じく精神作用無効化が効いている筈の友人が見せる高いテンションに苦笑しながら入り口の扉を閉めた。

「クーゲルシュライバーさんってそんなにお風呂が好きなんですか？」

「いや、それほどでもないけど……ほら、なんだか観光した帰りに家族で温泉に寄ったみたいで懐かしいんですよ」

クルリと振り返り、昔を思い出しているのだろう、視線を天井へと向けて言うクーゲルシュライバーにモモンガは微かな嫉妬と申し訳なさを感じた。

モモンガにはクーゲルシュライバーが言うような家族との思い出は無い。いや、あったのかもしれないが、記憶に残ってはいなかった。

だからこそ自分にはない暖かな記憶を持つクーゲルシュライバーにモモンガは小さいながらも明確な嫉妬をしていた。

そして嫉妬するからこそ、自分の最後の我侷が現実世界に家族がいるクーゲルシュライバーをこんな事態に巻き込んでしまったという罪悪感が胸を締め付けるのだった。

しかしモモンガはそんな心中を表に出す事無く、軽い調子でクーゲルシュライバーに合わせる。この件については既に話し合いが済んでいるからだ。

ここで蒸し返すのは楽しそうにしているクーゲルシュライバーの気を害すだろう。それはモモンガの望むところではない。

「そうなんですか。でもたしかに、今夜の帰り道は楽しかったですよね。プレアデス星団はいいとして、紅蓮大座……ふふっ！ひどいネーミングだなあ。紅蓮にちよつと悪いかもですね」

「あははははー！いやあでも意外ですよ。まさかモモンガさんがあんな化石アニメしってるなんて」

「見たことはないんですけどね。ペロロンチーノさんが勧めてくれたゲームにアレを元ネタにしたキャラクターがいます」

「あいとゆうきのものがたり?」

「あいとゆうきのおとぎばなし、です」

「細かいよモモンガさん!なに?気に入ってるの!?!相当昔の作品だよアレ!」

クーゲルシュライバーとモモンガはナザリックの絶対支配者としての仮面を外し、ユグドラシル時代を思わせる軽さでなんて事のない話に花を咲かせる。

もしもこのやり取りをNPC達が見たら普段との大きすぎるギャップに呆然とすることだろう。

陽光聖典とのじゃれあいを終えたモモンガ達は星空を楽しみつつ一度カルネ村に寄り、そこで挨拶などを済ませた後にナザリックへと帰還した。

そして様々な処理をアルベドに任せると、浮かれたクーゲルシュライバーの強引な誘いもあつてモモンガは第九階層に存在する大浴場「スパリゾートナザリック」へとやって来ていた。

アルベドからの報告を待つ間に野外で活動した汚れを落すのも悪くないと途中で賛同してみせたモモンガに気を良くしたクーゲルシュライバーは、時には恐怖のオーラを使ってまでセバスを初めとした入浴に供しようとする使用人達を風呂場から遠ざけた。

怯えるメイド達を見るとなにもそこまでしなくとも、と思うモモンガではあつたが、そのおかげでこうした素で友人とじゃれあう貴重な機会が得られたのだからあの扱いもやむなしと納得していた。

それに如何に骨だけのモモンガであろうとも、誰もが美しく可憐な女性であるメイド達に一糸纏わぬ姿を見られるのは抵抗があつただ。

「昔のものだろうと良いものは良いのです。……よいしょっと。はい、お待たせしました」

身を覆う最後の衣服であるローブを脱いだモモンガが脱衣の必要がなく先に浴場の入り口で待機していたクーゲルシュライバーに言

う。

クーゲルシュライバーの視界にあらわとなったモモンガの白く細い体が飛び込んでくる。

「うわあ……骨格模型が動いてる」

「骨ですからね」

普段身を包む神器級装備を外したモモンガの姿はまさにただの骸骨そのものだ。

ナザリック地下大墳墓の第一から第三階層をうろついているスケルトンと見た目上なんの違いもありはしない。

違いといえば、肋骨の下に存在する脈動する赤い球体状の世界級アイテムと課金により登録され外すことができない指輪ぐらいだろう。

「なんでアルベド達はこんな骨相手にあんな態度なんでしょうね」

脱衣所の洗面台に映る自分の姿を見ながら小首を傾げるモモンガにクーゲルシュライバーも首を捻る。

「アルベドは設定弄ったからともかく、シャルティアは死体愛好癖があるとはいえ間違いなく自前の恋愛感情です……なんだろう？モモンガさんの顎が尖ってるのが好みなんでしょうかね？」

「たしかに特徴的というか、普通じゃない頭蓋骨の形してますけど……なんだか複雑な気分です」

「……ところで前々から聞きたかったんですけど」

「なんででしょう？」

「もしかしてモモンガさんってリアルでもそんな感じの骨格なんですか？」

モモンガの頭部のデザインはユグドラシルにおけるスケルトン系モンスターのデフォルトとは異なっている。

つまりモモンガが外装を弄った結果があの特徴的な頭蓋骨なのであるから、もしかすると……。

まずありえないだろう考えではあるが、複雑な気分だと落ち込んでみせるモモンガの姿にまさかという疑念が生じての発言だった。

それに対するモモンガの返答は疾風のように早かった。

「イヤァー！」

「グワーツ!？」

モモンガの放った所謂「昇竜拳」がクーゲルシュライバーの擬頭の顎をかち上げ脱衣所の天井へと吹き飛ばした。

あわや激突といったところで空中にて姿勢を制御し上下逆さになつて音もなく天井に張り付いたクーゲルシュライバーが非難の声をあげる。

「いきなり何するんですか!？」

「あ、戦つてる時の演技のせいでつい手が……その、すみませんでした。痛かったですか?？」

「いや全然」

通常時の体重が300kgを優に超えるクーテルシュライバーを天井までかち上げる威力のモモンガの拳ではあつたが、所詮は魔法職による一撃。

当たったところで如何に回避型であるクーゲルシュライバーでもダメージなど発生するわけがない。これはただの戯れなのである。

それはモモンガの攻撃がすばやさにて化しているクーゲルシュライバーに当たっている事からも明らかだった。

「よかった。……いや、だってこんな尖った顎した人間がいるわけないでしょう?さすがの私でも傷つきますよ」

「ごめんなさいごめんなさい。流石にないだろうなあとは思いつつ聞かすには居られなかったんです」

「まったくもう……こんなことしてないでお風呂にいきましょうよ」「りようかい」

浴場に向かつて歩き出したモモンガにクーゲルシュライバーも天井から降りて続く。

硬質な音を立てて取っ手に指をかけたモモンガが勢いよく扉をあけると、清潔な蒸気の香りと湿気があふれ出してきた。

あふれ出す白い湯気を潜れば、そこにはナザリックが誇る9種17個浴槽を備え、12のエリアに分かれた大浴場が二人を待っていた。

わあ、という子供のような感嘆の声が二人から漏れる。

「私室の風呂もすごかったけど、この広さと種類の多さはまた別格で

すねモモンガさん！」

「たしかに。皆が競って色んなものを作ってくれたお陰ですね」

「まったく、こんな贅沢できるなんてギルメン様様ですよ。それで、ま
ずは何処行きます？」

「そうですね……今日は天体観測をした事ですし、ベルリバーさん製
作、ブルー・プラネットさん協力のジャングル風呂にしましょう」

そういつて進むモモンガの向かう先には草木が生い茂ったジャン
グルがある。

ジャングルの植物達はみな作り物なのだが、あまりにもリアルに出
来ているため茂みの中になにか得体の知れないモンスターが潜んで
いるような気さえする。

クーゲルシュライバーは風呂自体よりもそちらの茂みに入りたく
なる自分を抑えてモモンガに続いた。

まずは洗い場だ。風呂に入る前には体を清潔にする必要がある。

「うーんなんともノスタルジックな黄色い桶！ 惜しむらくは商品名
を入れられなかった事かな」

「え？このスパにある桶が皆黄色いのはなにかネタがあるんですか
？伝統だとは聞いてますけど」

「おや、モモンガさんは知らないのか」

クーゲルシュライバーは洗い場のスペースを4人分程も占有しな
がら黄色い桶で湯を掬い体にかける。

体の大きさから見ると濡れた部分は全体の極僅かである。めんど
くさいなと思いつつもクーゲルシュライバーは空になった桶を
器用に指先で回転させつつ蘊蓄をたれる。

「20世紀頃からの定番なんです、入浴施設にはこれ！って具合の。
元々はある会社……今でも残ってたと思うけど、名前忘れたな。
まあ、とある会社が発売した薬の広告として作られたものなんです
よ」

「へえー風呂桶で宣伝とは、昔の人も上手いことをしますね」

「ですね。たしかあの頃は銭湯とかがすごい流行っていた時期で……
だからなんでしょうね。ステレオタイプになって、未だに根強い人

「気があるんです」

「なるほどなあ。また一つ物知りになりました」

「今後必要ない知識だと思えますがね。……だれがやったんだろこれ。ウルベルトさんとか拘りそうな部分だとは思うけど」

あまり裕福ではなく、多くは語らなかつたがブルーカラーらしい発言を度々していた友人を思い出しながらクーゲルシュライバーはお湯を桶に汲んでは体にかけて続ける。

しかし驚異の撥水性を持つ体毛を甲殻化しているクーゲルシュライバーの体は思うように濡れてくれない。

よく手入れされた車のフロントのように受けた水は球状になり体の表面を滑り落ちていってしまうのである。

埃だらけの体をエントマに舐めさせるのは流石に気が引けた為に先に風呂へ入ろうと思つたのだが、こうも悪戦苦闘するのであれば何か上手い方法を考えねばならない。

クーゲルシュライバーが今後野外で活動することを見据えて自身の賢い洗い方を模索しているその前で、モモンガもまた苦戦を強いられていた。

「……」

無言で手にした液体石鹸をたつぷりと塗りたくつたタオルで骨の一本一本を擦っているモモンガ。

しかしその作業の前途は多難だ。

基本的に人間の骨格と同じ構造を持つモモンガの体には約2000個もの骨があるのだ。

その一つ一つを洗うだけでも大変な労力なのに、骨の中には複雑な構造でタオルでは洗いきれないものまである。

それらを丁寧に洗っていけば、風呂に入るのは何時間後になつてしまふのだろうか？

クーゲルシュライバーは黙々と手を動かすモモンガに声をかけた。

「メイド、呼びますか？」

「いや、ちよつとそれは……許可を出したが最後、めぐりめぐつてアルベドやシャルティアが押しかけてきそうぞ」

「ああ……それはちよつと困りますよねえ」

「あの二人が来るとなると言いますか、貪り食われそうな気がしてどうも……」

「わかりますわかります」

肩を落としてモモンガは絶世の美女に言い寄られるプレッシャーについて語る。

クーゲルシュライバーは男の夢ともいえる状況に文句を言う友人の心労を軽減させようと相槌を打つ。

そうして、モモンガとクーゲルシュライバーはしみじみとした雰囲気の中会話しつつ、時には互いの手の届かない部分を手伝いつつ洗いにくい自分の体を地道に洗うのだった。



「ようやく洗い終わった……エントマのありがたみがよくわかるなあ。こりゃあ後で何か感謝の品でもあげないと」

両手に持った桶で全身の泡を流し終えたクーゲルシュライバーは普段毛づくろいをしてもらっているエントマの価値を上向きに再評価しつつ立ち上がった。

モモンガも何度もいろんな角度からお湯を体にかけて背骨などの複雑な構造の骨に入り込んだ泡を洗い落として立ち上がる。

「こちらも洗えるところは洗い終えました……ああなんて面倒な体なんだ。入浴についてなにか考えないとだな」

「お互い難儀な体になったもんですね……さ、体も洗ったことですし待望の風呂に入りましたよ」

「そうしましょう……なんだか疲れちゃいました」

肩でも凝ったのだろうか？

筋肉のない左肩に手をそえて首を回しながらモモンガが浴槽へと歩み寄っていく。

その後姿を見ていたクーゲルシュライバーが突然大きな声を上げた。

「あー！」

「んん!?ど、どうかしましたか?」

今まさに湯に足を踏みいれようとしていたモモンガが素っ頓狂な声を上げて振り返る。

そんなモモンガの腕をクーゲルシュライバーは擬腕で掴んで引つ張り浴槽から遠ざけた。

「だめだめーモモンガさんこれ!これですよ!」

一体何事かと目の光を点滅させていたモモンガにクーゲルシュライバーはアイテムボックスから取り出した円筒形のアイテムを見せ付けた。

「完全なる狂騒です!くっそう本当なら天体観測の時に使おうと思つてたのに……忘れるなんて!」

「あのお……一体何のことだかわからないのですが……」

「ほら!ちよつと前に言つたじゃないですか!息抜きしたい時は精神作用無効化をとつぱらちやおうつて!」

「ああ、そのことですか。いや、でも別に今はいいんじゃない」

「ダメです! 使うなら今なんです! お風呂は命の洗濯! アンデッドだから命無いですし〜とかは無いですよ! お楽しみタイムなんだから絶対使うべきなんです! 今! ここで!」

「は、はあ……」

クーゲルシュライバーの有無を言わさぬ勢いに呑まれたモモンガの手にパーティで使うようなクラツカーがねじ込まれる。

このアイテムの名は「完全なる狂騒」。

アンデッドに対してのみ使用できる、アンデッドの種族特性の一つである精神作用無効化のスキルを一定時間無効化する事ができるアイテムだ。

精神作用無効化のスキルにはモモンガもクーゲルシュライバーもナザリックの支配者として振舞う中で何度も助けられている。

しかしこのスキルに悲しみや怒りの感情だけでなく、喜びの感情すら抑え込まれてしまうというデメリットがあった。

これではストレスが溜まる一方であり精神衛生上非常に良くない

ことは想像するのも容易い。

だからこそ天体観測等のイベントではこのアイテムを使い素の精神のまま楽しい仲間とのひと時を満喫しようとクーゲルシュライバーは思っていたのだ。

迂闊にも天体観測の時には使用するのを忘れてしまった。

だからこそこのNPC達が居ない仲間とお風呂タイムという貴重な気を抜くことができるチャンスを逃すわけには行かないとクーゲルシュライバーは燃えに燃えていた。

「いつせーの、せつ！でそれ使ってくださいね。同時に私もスキル使って自分の精神作用無効化を消しますから」

「わ、わかりました」

「それじゃあいきますよー！いつせーの、せつ！」

——パーン！イヤツホオーウ！

——《マインド・ストリップ》

「ほぎやあああ!?ば、ばけものー！ー！」

「ひええええええええええ!?骸骨のおばけー！ー！」

軽快な破裂音と陽気な男の声がしたと思えば、浴場全体にモモンガとクーゲルシュライバーの恐怖の叫びが木霊した。

急いでクーゲルシュライバーから距離を取ろうとしたモモンガは足の裏に残っていた液体石鹼のせいで盛大にしりもちをついて呻く。

そしてそんなモモンガの間抜けな姿に驚いたクーゲルシュライバーはパニックを起こし、浴場の床、壁、天井を信じがたい速度で走り回りはじめた。

「ぎやああああ!?ぎやあああああ!!」

風呂場に出没したゴキブリなどよりも遥かに恐ろしい巨大蜘蛛がゴキブリさながらに爆走する姿を見たモモンガは、しりもちをついた姿勢のまま洗い場まで退避しそこに置かれていた黄色い桶を頭に被って蹲った。

震える筋肉などありはしないのにモモンガの体はブルブルと震え桶の内部や床にぶつかりカラカラと不吉な音を立てている。

その姿にはナザリック地下大墳墓の主であり至高の41人のまと

め役である偉大なる死の支配者としての風格などありはしない。

そして風格の事を語るのであればクーゲルシュライバーもモモンガに引けを取らなかつた。

「アババババババッアバッアバババッ！」

ジェットコースターよりも激しく変化する視界と変動し続ける体が受ける重力の方向にクーゲルシュライバーは完全に冷静さを失っていた。

理由はないが足を止めると地上に落下し頭部を打ちつけ死んでしまうような気がして動きを止めることすら出来ない。

結果としてクーゲルシュライバーは情けない悲鳴を上げ、さながら彼が昔飼っていたハムスターの如く走り回ることしか出来なかつた。

その姿にはナザリック地下大墳墓において恐怖の極限として恐れられる強大なる邪神としての風格など皆無であつた。

「だ、誰かとめてー！モモンガさん助けてー！」

「む、無理ですよお！蜘蛛怖いもん！」

「なあにがもんだこの薄情者ー！って、ぎゃあああああ！」

天井付近で叫んでいたクーゲルシュライバーが自分の肢に躓いてジャングル風呂へと落下していく。

尾を引く悲鳴とともにクーゲルシュライバーは大きな水音を立てて浴槽へと着水し、そのまま沈んでいった。

それから数十秒後。

奇妙な静寂に包まれた空間の中、モモンガがそつと頭に被つた黄色い桶を外して動き出した。

その動きは周囲を警戒する小動物のそれであるが、やっているのが骸骨なためにまるでホラー映画の一場面のようにだった。

「クー……クーゲルシュライバーさん？大丈夫ですかー……？」

恐る恐るモモンガが浴槽に近づいていくと水面からゆつくりとクーゲルシュライバーの擬頭が浮いてきた。続いて擬腕が浮上してきてモモンガにサムズアップしてみせる。

その様子に海坊主みたいだなと思いつつながらモモンガは胸を撫で下ろした。

「よかった大丈夫みたいですね」

「ええ……未だに心臓っぽい所がバクバクしてますけどね。……驚かせてすみませんでした。でかい蜘蛛が暴れまわるとか普通に怖いですよね」

「いえいえ、私のほうこそ変な声出してすみません。しかし、こうしてみるとクーゲルシュライバーさんって……邪悪な化け物ですねー」

「いやいやモモンガさんも負けてませんって。ちよー邪悪でヤバイ気配ビンビンじゃないですかあ」

そりやあエンリとネムも怖がるわけだ。

奇しくも二人は同じ事を考えていた。そしていまだにお互いの姿にビクつきながらも軽く笑ってみせる。

「念入りにNPC達を風呂場から遠ざけておいてよかったですねモモンガさん。多分さっきの騒ぎ外まで聞こえてましたよ」

「セバスとかがスゴイ血相で押し入ってきそうですよね。そうなたら今の状態じゃあ誤魔化しきる事はできなかつたろうなあ」

わかるわかる!と相槌をうつクーゲルシュライバー。

そしてそれをみるモモンガの間に、久しく感じていなかったように思える人間的な和やかな雰囲気流れる。

そんな時だった。

—— マナー知らずに風呂に入る資格はない!これは誅殺である!!

どこかで聞いたことのある声とともに、湯を吐き出していた精巧なライオンの像が動き出した。

モモンガとクーゲルシュライバーが顔を見合わせ、そして同時に叫んだ。

「るし★ふぁーさん!」

わかりやすく敵意を示す赤い光を目から放つライオンのゴーレムが重々しい足取りで二人へと向かってくる。

一時期、一部のギルドメンバーが変なギミックを作るのにはまっていた事があった。その時期に最も精力的に動いていたのが二人がその名を呼んだ「るし★ふぁー」という男だった。

優秀なゴーレムクラフターだった彼はアインズ・ウール・ゴウン一

のトラブルメイカーだ。モモンガでさえそのあまりの問題児ぶりに「あまり好きになれない」と評するほどの人物なのである。

その男の声とともに動き出したライオン型ゴーレム。この手口。まちがいに下手人は彼だった。

「モモンガさん、下ってー!」

モモンガを庇うように浴槽から勢い良く飛び出たクーゲルシュライバーが首切り鉈めいた前肢を突進してきたゴーレムに連続して振るう。

白い湯気が繰り出された複数の斬撃によつて滅茶苦茶に切り刻まれていく向うで、ゴーレムが体のあちらこちらから大きな火花を散らしながら数メートル後方へと吹き飛ばされていく。

まるで削岩機のような凄まじい連撃だ。

事実この攻撃は岩どころかアダマンタイトの塊ですら容易く削り取るだけの威力があったのだが、放った張本人であるクーゲルシュライバーは前肢に残る感触に顔を顰めていた。

「なんだコイツめつつちやくちや硬い!普通の素材じゃないですよこれ!あの野郎何をちよろまかしてくれたんだ!?!」

「クーゲルシュライバーさん射線を下さい!死ねや!ゴーレムクラフトのくず野郎!!」

クーゲルシュライバーが即座にモモンガとゴーレムを結ぶ直線から退避すると、今まで彼がいた場所をモモンガが放った第十位階の攻撃魔法が凶悪な魔力を迸らせながら通過していった。

その刹那、浴場が猛烈な光によつて白く塗りつぶされた。

間髪容れず、その白い闇を切り裂くように漆黒のクーゲルシュライバーが二刀の爪を振り上げ魔法による暴虐の渦中へと疾駆する。

「やっちまえええー!」

「その首貫つたああああああ!!」

普段のモモンガらしくない言葉を背にクーゲルシュライバーは走る。奔る。疾る。

突発的な戦闘にもかかわらず、更に言えば精神作用無効化が解除されている状態なのに上手く連携して戦えている自分達に満足しなが

ら、この世界に来て初めての緊張感溢れる戦いに没頭していった。



「ああああああ……おとおおおう……ぬううううん」

「……おっさんぽいですよクーゲルシュライバーさん」

ジャングル風呂に肩まで浸かったクーゲルシュライバーが奇妙な唸り声をあげるその隣で、モモンガもまた肩まで体を湯に浸していた。

彼らの入っている浴槽を取り巻く精巧な出来のジャングルの茂みには物言わぬ金属の塊となったライオン型ゴーレムの一部が見え隠れしている。

「だつてさあモモンガさん。ようやく、ようやくですよ？ようやくゆっくりと風呂に入れるんだからこんな声も出ますって」

「……確かにただ風呂に入るだけなのに、そこまでの道のりが異様に険しかったからなあ」

「でしょ？体の埃を落すついでにリラックスするつもりで来たのに、なんか精神的に疲れちゃいましたよ」

「後でこの手のギミックについて調査しておかないと危ないですよね……」

「フレンドリィファイア解禁されてますしね。今回のアレだつて、プレアデス程度のレベルだと多分やられてましたよ」

クーゲルシュライバーが言葉を発するたびに湯の中から巨大な牙が浮上している。

果たしてあの行為は会話するのに必須なのだろうか？モモンガは疑問に思っただけ聞いてみることにした。

「必要ないなら止めてほしいのだ。浮上するたびに湯が波立って眼窩に湯が入ってくるから。」

「あの、話すたびに牙をお湯の中から出すのにはなにか理由でもあるんですか？」

「んんー？ああこれ？潜望鏡みたいでちよつと恥ずかしいんですけど」

ど、ちゃんと理由はありますよ」

潜望鏡つてなんだ？

潜水艦が海の上を見るときに使う設備であることはモモンガも知っているが、なぜそれが恥ずかしいのか皆目見当がつかなかった。

新たに増えた疑問に首を傾げるモモンガに気付く様子もなく、クーゲルシュライバーはぼんやりとした口調で説明する。

「ほら、私のこの人の部分って眼と糸疣が変形して人型っぽくなって
るものじゃないですか」

「え、そうだったんですか？」

「設定的にはそうなんです。指輪と首輪を装備可能にするという
形になるんですよ」

「ああ、元々アトラク||ナクアって指も首もないから装備できない
ですよ。なるほど、拡張するとそういう風になるんですか」

「なるのです。そんなわけで人型の部分には口がないわけですよ。だ
から喋るときはこうして」

クーゲルシュライバーが水中から突き出している牙をを大きく広
げてみせる。

すると牙の付け根になにやらモゴモゴと蠢く切れ目を見つけるこ
とができた。

その切れ目の中には小型の鮫のような細かく鋭い歯がズラリと並
んでいた。

「口を水中からださないと喋れないってわけですよ」

「ははあー……なんだか妙に現実的なんですね。私なんかどうやって
喋っているのか全くわからないのに」

「私だっていまいち理屈がわからないんですよ。だって口から空
気が出ているわけでもないんですよ？」

「うーむ、謎ですね」

「なぞですねえー……」

風呂に入っているせいなのかモモンガとクーゲルシュライバーの
口調はひどく間延びしている。

実際のところは湯に浸かるといふ行為による心地よさを二人は然

程感じていなかった。

ジワジワと温かさが染み入ってくるような感触があるものの人間の時のような心地よさは感じられないのはモモンガもクーゲルシュライバーも一緒だった。

では二人のこのだらけた姿は演技かというところではない。

精神作用無効化が効果を発揮していない今の二人は人間だった頃に非常に近い精神状態になっている。

その人間の精神が豪華な風呂に入っているという状況を大いに楽しんでいるのだ。

「そういえばモモンガさん、この後どうします？なんか玉座の間にNPC達集めてるみたいですけど」

「う、もう仕事の話ですか？……まあいいか」

モモンガは一回頭まで湯に沈めるとわざとらしく口でプハツと音を立てて上半身を湯の上まで浮上させた。

「とりあえず今回勝手な行動を取ったことを形だけでも謝っておきます。その後はこれからの大目的についてとクーゲルシュライバーさんの帰還についてですね」

「こないだ話し合ったアレですか？」

「ええ。せっかくの機会ですからまとめやっちゃいましょう。あまり頻繁に集合をかけるのは仕事熱心なNPC達に悪いですし」

NPC達の仕事を邪魔しないようにと配慮するモモンガの言葉を聞いてクーゲルシュライバーはもつともだと頷いてみせる。

主要なNPC達を集合させるという事は防衛網が薄くなり、所によつては穴が生じさせる事になるだろう。

そういった防衛上の隙はなるべく作らないに越したことはない。

「なら、ちよつとこの機会にやりたい事があるんですけど」

「ん？なんでしょうか？」

何でも言うてくださいいとばかりに軽い口調で聞き返してくるモモンガにクーゲルシュライバーは擬頭の頬を掻きながら話しはじめる。

「NPC達と生活している中で分かったんですけど、あいつら私達の事を至高の御方とか言ってるわりにナザリツクの外で私達が何をし

ていたのか知らないみたいなんですよ」

「そうなんですか？それは……意外じゃないか。拠点に配置しているNPCは外へは連れて行くことはできませんし、ナザリック外での活動について知らないのは当然か」

「それでなんですけど、NPC達に私が所持しているナザリック外での活動を記録した動画をみせてやりたいんです。きつとあいつら喜ぶと思うんですよ」

「クーゲルシュライバーさん……」

それ、あなたが自作の動画を披露したいだけなんじゃ？モモンガは喉元までこみ上げてきていた言葉を飲み込んだ。

クーゲルシュライバーの言葉には続きがありそうな気配がしたからだ。

「初日にアルベドが言っていましたけどNPC達は皆ギルメンに会いたい気持ちで一杯らしいじゃないですか。それこそ私なんかと会っただけで階層守護者達が咽び泣く程に」

そんなあいつらの寂しさを和らげてやりたいと思って……。

恥ずかしそうにそう言うクーゲルシュライバーにモモンガはギルドメンバー達が去っていったあの悲しみと寂しさを思う。

あの胸を締め付ける想いをNPC達も感じているとするならば、同じ苦しみを嫌という程思い知っているモモンガとしてはそれを捨て置くわけにはいかなかった。

「いいでしょう。やりましょうよ上映会！」

親指を立て、片方の眼窩に宿る光を消したモモンガが明るい声でOKを出した。

それはウインクのつもりなのかと思いつつもクーゲルシュライバーは諸手をあげて喜んだ。

「よっしゃあー！ありがとうモモンガさん！実はもう何を上映するかは決まってるんですよ！」

楽しい気分がどんどんエスカレートしていくという普段ではありえない感情の動きに精神を翻弄されながらも、クーゲルシュライバーはこれでNPCの忠誠心さらに上昇待ったなしだ！と内心ほくそ笑

んでいた。

そんな実利を勘定して提案しているクーゲルシュルライバーの心に気付く事無く、モモンガは残された者達の悲しみを慰めようとする心優しい友人が隣に居ることに感謝していた。

「どんなのを見せるんですか？」

まるで映画館前の子供のような純粹さで問いかけるモモンガに対して、クーゲルシュルライバーは表情のない顔で確かにニヤリと笑ってみせると仰々しくその名を告げた。

「その名も『決戦！アインズ・ウール・ゴウンVSワールドエネミー

——世界が滅亡する日——』です！」

20話

モモンガの自室には絢爛豪華な調度品の数々が置かれ、豪華な真紅の絨毯が敷かれている。

静寂に満ちたその広い室内には、普段控えているメイドの姿は見当たらない。

彼女達はこの後に予定されるナザリックにおいて前代未聞のイベントに備え、第九階層で働く他のメイド達とともに第六階層へと移動している。

現在部屋に居るのは体からほのかに湯気を上げるモモンガとクーゲルシュライバー、そして書類を手にしたアルベド、剣を構え静止するデスナイトだけだ。

部屋に満ちる静寂を乱さぬよう、穏やかで甘く蕩けるような声でアルベドが話し出す。

「ご報告させて頂きます。あの村近郊で捕獲したスレイン法国の陽光聖典指揮官は指示通り第二階層のイビルウェブ・ブリッジに送り込んでおります。これからの情報の収集は特別情報収集官と特殊観察官が共同で行う手筈となっております」

「ニューロニストとミューラニスならば問題はないだろう。ただ、死体は私とクーゲルシュライバーがそれぞれ実験に使用するというのは知っているのかな？」

「承知しております。次にクーゲルシュライバー様が召喚した眷属についてですが、特殊個体を除く全てのレン・スパイダーの消滅を確認いたしました。仰っていた通りの時間でしたので、恐らくは召喚時間が超過したのが原因と思われます。残った特殊個体は現在アウラが使役する魔獣による監視のもと、第六階層の樹海でクーゲルシュライバー様の指示通りその場での待機を維持しております」

「そうか。ひとまずは安心といったところだな？」

モモンガは肩の力を抜きながら、隣にいるクーゲルシュライバーに軽い調子で声をかけた。

報告の邪魔しないようにと沈黙を保っていたクーゲルシュライ

バーは、モモンガに軽く頷いてみせると顎をしゃくってアルベドに続きを促した。

「次に騎士の格好をした者達から剥ぎ取った装備品は只今調査中ですが、大した魔法はかかっていないという報告が上がっています。調査結果次第でアイテムは宝物殿に送ることになると思われます」

「……まあそれが妥当だな」

「最後になりますが、あの村への警戒と警備という観点から、影の悪魔を二体送り込んでいます。報告によれば今のところ、村内部に目立つた動きはないのですが、ネムという人間が、クーゲルシュライバー様の抜け殻の傍で長時間にわたって祈りを捧げているようです」

「……なに？あんな事があつた後だということにか？それに子供がこんな時間まで起きているだど？」

おもわず、といった風に口を出したクーゲルシュライバーはショックを受けていた。

陽光聖典との戦闘前に、そのまま村に置いておくことの出来ないデスウェブを澁々ながら消滅させると、クーゲルシュライバーはかわりに自身の抜け殻である《ジャイアント・スパイダーの抜け殻》を村の外縁部に設置していた。

設置後にクーゲルシュライバーが加えた一撃により抜け殻は素材として使用出来ないほどに破損しており、何も知らない村人達からすれば何者かによって殺されてしまったデスウェブの死体のように見えた事だろう。

その考えを後押しするように、アインズ・ウール・ゴウンとして村に帰還したモモンガは沈痛な口調で、デスウェブは村を守るために戦い勇戦の果てにその命を散らしたのだと説明していた。

（殺せば死ぬ存在だという事をアピールしつつ、美談ほくして村人達のデスウェブ崇拜を軟着陸させる。同時に外側だけでも村に置いて傷心のネムの慰めにしようと思ったんだが……逆効果だったか）

前者はともかく、後者は間違いなくミスだった。クーゲルシュライバーはアルベドの報告を聞いて自らの愚かさを呪った。

残してきた抜け殻はネムにとっては命の恩人の死体だ。それがど

うして彼女の慰めになるとあの時の自分は思ったのか。

あの時は直感的にそれであつてと思つたんだ、心に浮かんだ子供じみた言い訳をかき消しクーゲルシュライバーは苦悩する。

両親を殺され、慕つていた命の恩人までも失つたネムの心境を思うと慙愧の念に堪えなかつた。

(あとでフォローいれとかなきゃ)

静かに決意するクーゲルシュライバーの沈黙に、なにかを察したアルベドが柔らかく微笑んで話し出す。

「ご心配にはおよびません。既にネムの姉が回収し住居へと戻つていくとのことですよ」

「……そうか。それを聞いて安心したぞ」

クーゲルシュライバーのその言葉に、アルベドの翼が微かに震えた。

そんな小さな変化をモモンガは偶然にも目撃してしまった。

アルベドは変わらず柔らかい笑みを美しい顔に浮かべていたが、その動きに含まれた彼女の感情について思い当たつてしまったモモンガは即座に先を促した。

「それで報告は終わりかな、アルベド？」

「報告は以上でございます。ですが、質問が一点。ガゼフ・ストロノフに関してはどういった処分を？」

「戦士長に関してはひとまず置いておく。それよりもあの村は唯一の足がかりであり、友好関係の構築に成功した場所だ。不仲になるような事は極力避ける。わかつたな？」

「畏まりました。その件は徹底させます。ではこれで簡単になります
が終了とさせていただきます」

モモンガがご苦労様と言うのを聞いて、クーゲルシュライバーは幸せそうに左手の薬指に嵌めた指輪をさするアルベドに声をかける。

「それで会場の準備は完了したのか？」

「現在指示通り至高の御方々が創造された者達を中心に、第六階層
円形劇場に收容している最中です」

「よろしい。それでは後もうすこしだな」

クーゲルシュライバーが楽しみでならないといった風に触肢を小刻みに動かしていると、突然、金属音が響く。

発生源を見てみればそこにはロングソードが転がっていた。持たせていたデスナイトの姿は何処にもない。

このデスナイトはモモンガが風呂上りに召喚したものだ。トブの大森林で作成したデスナイトは今も存在し続けている。

「……装備品が関係しているわけではないのか。となるとやはり死体を基礎にすると世界との結びつきが強いせいなのか、時間超過による帰還が発生しないというわけか？ 大量の死体があれば、ナザリツクの強化に使えるな」

「では死体を大量に集めましょうか？」

「……あの村の墓地を掘り返すなどの行為はさけるぞ」

やばい。

モモンガの言葉にクーゲルシュライバーが内心冷や汗を流す。

なにせ先ほど話題に話題に上がった特殊個体のレン・スパイダーはカルネ村の墓地を掘り起こして作り出したモンスターだからだ。

召喚に際し基礎となった死体は大きく破損してしまっただが、残った部分は丁重に元の墓穴に戻して土をかけた。

その行為には死者への一定の敬意が存在していたが、クーゲルシュライバーが墓荒らしという人間の倫理的にもモモンガ的にもアウトな行為をしてしまった事には変わりはない。

新しい墓だから土を掘り返してもばれる可能性は低いと思われるがクーゲルシュライバーの内心は穏やかではなかった。

「承知しております。ただ、新鮮な死体を得る手段は立案しておいたほうがよろしいかと。さて、デスナイトが消えたという事はそろそろ会場の準備が完了した頃でしょう。アンフィテートルム円形劇場にはセバスともにお越しください。私は先に向かわせていただきます」

「そうか、ではアルベド。後にまた会おう」

「皆がソワソワしていたとしてもあまり叱ってやるなよ？ それは私達の望むところではないからな」

アルベドはモモンガとクーゲルシュライバーに静かに一礼すると

部屋から退出していった。



アウラとマーレの双子のダークエルフが守護する階層、ナザリック地下大墳墓第六階層。

広大な森林と本物と見間違ふほどの空が広がるこの階層にそれはあつた。

長径188メートル、短径156メートルの楕円形で、高さは48メートル。何層にも客席が中央の空間を取り囲むように配置されたその姿は古代ローマ帝国の円形闘技場そのものだ。

この場所の名は円形劇場^{アンフィシアートルム}。

本来ならば物言わぬゴーレムが客席を埋め尽くしているこの場所だが、今日は様子が違った。

まず、ゴーレム達がいらない。そしてその代わりに客席は至高の存在により生み出された者達が整然と並んでいた。

彼らを取り囲む中央の空間には巨大な四面スクリーンが浮遊している。

その純白の平面を客席に配置された者達は夢見るような表情で見つめていた。

それは貴賓席に座る各階層守護者たちも同じだった。「ほ、本当に僕達ここに座ってもいいんでしょうか？」

チラチラとスクリーンを気にしながらも居心地悪そうに椅子から腰を浮かせたり降ろしたりを繰り返すマーレが、右隣で落ち着いた様子で椅子に腰掛けているデミウルゴスに問いかけた。

「もちろんだとも。本来この貴賓席は至高の御方々が使用する場所。しかしモモンガ様とクーゲルシュライバー様が此処に座るよう命じられた以上は何も不安に思う事はないんだよ、マーレ」

「そうそう。むしろそんな態度じゃお二人に対して失礼になるんじゃない？」

「う、うん……」

左隣に座った姉であるアウラにも言われてようやくマールは貴賓席に腰を落ち着かせた。

「シカシ……マサカ、コノヨウナ日ガ来ヨウトハナ。コノ席ニ我々ガ座ツテイルコトモソウダガ……」

アウラの隣に座ったコキユートスが口器から冷気を鋭く吐き出しながら言う。

4本ある腕の手が落ち着きなく開いたり閉じたりをしている。

そんなコキユートスの言葉を隣のシャルティアが引き継ぐ。

「長らく謎でありんした至高の御方々がナザリックの外でなされたご活動の数々……その一部が開帳される時が来るだなんて、まるで夢のようでありんすえ」

重ねた両手を異様に盛り上がった胸に添えて、言葉どおり夢見るように瞳を閉じた状態でシャルティアは恍惚と呟いた。

「そう。今までは各個人が至高の御方々の会話を偶然漏れ聞く形で、その偉大なる活躍の一端を知る事がほとんどだった。至高の御方が自ら我々にナザリック外の出来事について知らせるといのは前代未聞。異例の出来事と言えるね」

「あ、あの。デ、デミウルゴスさん。なんでモモンガ様とクーゲルシュライバー様は、今になって僕達に至高の冒険についてお教えくださるんでしょうか？」

「ソレハ私モキニナツテイタ。ナニカ深淵ナル才考エガアルノダロウガ……」

マールの問いはこの場に居る階層守護者、そればかりか集められたナザリックのシモベ達全員が感じている疑問でもあった。

ナザリック随一の頭脳を持つデミウルゴスにマールとコキユートスだけでなく、アウラとシャルティアの視線が集まる。

そんな期待の眼差しを一身に受けたデミウルゴスは口元に微笑みを浮かべると肩を竦めた。

「今の段階ではモモンガ様とクーゲルシュライバー様の狙いについて断言することは不可能だね。思い浮かぶ理由が多すぎる。ただ……」
「ただ？ただ何でありんすデミウルゴス」

「ただ、今回の至高の御方々自らのご出陣。外で起こった何かが、長らく続いたナザリツクの不文律を破る原因となっているのは間違いないだろうね」

デミウルゴスの言葉に階層守護者達は押し黙ってナザリツクの外で起こったという何かについて想いをはせる。

その想いはそれぞれ微妙に違ったものだが、自分もついていきたかったという気持ちだけは全員一致していた。

至高の御方自らが動かねばならない程の事態に際し、供となり至高なるその身を守ることが出来ないのは守護者という地位にある者としては口惜しい限りだった。

「まったく。儀礼としての形を取らずともいいとのご命令を受けたとはいえ、すこし浮かれすぎじゃないかしら?」

突然、デミウルゴスの右隣にあつた空席に姿を現したアルベドに彼女以外の階層守護者の視線が集まる。

特にシャルティア、コキュートス、アウラの視線は強烈だ。

シャルティアにいたつては見開かれた両目が激しく血走っており、今にもアルベドに襲い掛かりそうな有様だった。

「ア、アア、アル、ベド?そそそ、その指輪はツ……?」

「……転移が制限されたこのナザリツクで、私がこうしてこの場に転移した事から答えはわかりきっているのではなくて?」

優越感の滲み出た微笑みを湛えたアルベドが、シャルティアに自身の左手を見せ付けた。

その薬指には、偉大なるサインを宿した赤い宝石を嵌めこんだ指輪が燦然と輝いていた。

「リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウン!!ななななんでアルベドがその指輪を!?!」

「モモンガ様に頂いたの。アルベドには必要なものだ、ね」

「も、ももんがさまに……」

呆然と呟くシャルティアがブルブルと体を震わせながら椅子から立ち上がる。

そしてそのままアルベドへと歩き出そうとしたところで、デミウル

ゴスが待ったをかけた。

「そこまでだ、シャルティア。アルベドが来たという事は直にモモンガ様とクーゲルシュユライバー様がいらつしやるという事。そろそろ至高なる御方々をお迎えするに相応しい姿勢を整えるべきだ。そうだろうか？」

「むっ、ぐっ、ぐぐー……ううううううう」

デミウルゴスの言うとおりで。

シャルティアは半べそをかきながらも、スカートを力一杯握り締めて自分に宛がわれた席へと腰を下ろした。

あとで絶対問い詰めてやる。そう決意しながら。

「まったく。あの二人はしようもないんだから」

微笑みを絶やさないとアルベドと、うつむき加減で涙目になっているシャルティアを眺めアウラが呆れたように呟く。

その隣で左手を右手で覆い隠したマーレが、彼らしくない澆刺として元気の良い声を響かせる。

「そ、それにしても、至高の御方々のご活躍……楽しみだよねっ！」

思いのほか大きく響き渡ったその声に、アンファイテアトルム円形劇場に集まった者達全員が同意した。



「まずは私達が勝手に行動したことを皆に詫びよう」

アンファイテアトルム円形劇場の貴賓席、階層守護者達が座る席の後ろに設営された高台の上に鎮座する玉座から、モモンガは全く悪いと思っていない声で陳謝する。

モモンガが座っている玉座の隣に据え付けられた特製の巨大椅子に乗ったクーゲルシュユライバーも、謝罪の気持ちでこれっぽっちも感じられない態度でふんぞり返っている。

最高指導者である二人が勝手に動いたことを、部下達を信用していないが故の行動だと受け取られないがための形式上の謝罪だった。

「外で何があったかについては後でアルベドに聞くように。次に、既

に皆も知っているだろうが、我らがナザリツクにとって非常に喜ばしい事があった」

手に持ったスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンがカツンと硬質な音を立てて突き立てられると、モモンガは玉座から立ち上がり杖を持つていない手をクーゲルシュライバーへ伸ばした。

「先日ナザリツクへと帰還したものの、忌まわしき封印を打ち破った反動により床に臥せていた我が莫逆の友、クーゲルシュライバーの体調が回復した。……クーゲルシュライバー」

名前を呼ばれたクーゲルシュライバーは己の肢でしつかりと立ち上がると、自身を仰ぎ見るNPC達に対して右の擬腕を掲げてみせた。

たったそれだけの動作で、客席からは割れんばかりの歓声がかかる。

クーゲルシュライバーは高揚感と同時に激しい緊張を感じながらも、歓喜に沸き立つ客席をゆつくりと見渡していく。

そこにはアルベドが言ったとおり、ほぼ全てのNPCが揃っていた。

その光景、正に百鬼夜行。

NPCだけではなく各階層から厳選されたであろうシモベも含んだ多種多様な種族の群れは正に圧巻というべきだろう。

だがそんな光景を見ても、クーゲルシュライバーは思っていたより少ないな、などと考えていた。

自分が作り上げた作品を見る存在は、多ければ多いほどよい。特にそれがナザリツクに属する者であればだ。

もつと席を詰めれば大勢収容できたのではないだろうかと不満に思うクーゲルシュライバーだったが、あの優秀なアルベドがこの程度の数に抑えたのには何かしらの、例えば防衛上の理由などがあるからだろうとひとまず満足する事にした。

クーゲルシュライバーは掲げていた擬腕を降ろすと一歩前に出て胸を張る。

歓声がピタリと止んで巨大な円形劇場が静寂に包まれた。復活を

果たした偉大なる存在の言葉を聞き逃さないように。

「……まず最初に。私を迎える皆の声に、私は今猛烈に感動している。」

クーゲルシュライバーは言葉を一旦切って周囲を見渡すが、客席からの反応はない。

大海原で一人きりになったような孤独感を錯覚するクーゲルシュライバーだったが、精一杯自分を励まし用意していた次の言葉を紡ぐ。

「私がこうしてこの場に立っているのは、長きに渡る不在にも拘らず変わらぬ忠義でもって迎えてくれた皆と、我々アインズ・ウール・ゴウンの不朽の絆を信じ孤独の日々を戦い抜いてきたモモンガの力あつての事である。もしも永劫の闇に囚われた私を呼ぶモモンガの声がなければ。もしも長く帰らぬ私を皆が忘れ去っていたのなら。私はきつとこの場にはいなかった事だろう」

この言葉に嘘はなかった。モモンガからのメールが無ければ、そしてNPC達が自分を仕えるべき主人と認識していなかったら。

自分は今こうしてナザリックの支配者の一人として君臨する事は無かつただろう。

現実の世界で生きていた人間としては、あまりにも奇妙な自身の運命を想いクーゲルシュライバーが天を仰ぐ。

その姿にNPC達はクーゲルシュライバーが囚われていたという永劫の闇での計り知れぬ苦難を思い起こしているのだと察していた。「私の帰還は正に奇跡と呼べるものだ。しかし……かつて私に氣にも留めていなかった皆の忠誠心が、金剛石よりも強固であり太陽よりも燦然と光り輝くものであると知った今ならば。この奇跡は必然だったと断言できる。」

なぜならば、私がここに立つ為に必要だった要素、その全ては！既にこのナザリックに揃っていたのだ！我々アインズ・ウール・ゴウンの絆と、我らに連なる全ての者達との絆は！その栄光の輝きは！決して朽ちることの無い至高の存在だったのだから！

アインズ・ウール・ゴウンとしてユグドラシルで過ごした日々は

クーゲルシュライバーにとって非常に充実したものだと言っても良い。

自分が作り上げた動画の数を思い出せば、どれだけユグドラシルに、そしてアインズ・ウール・ゴウンに入れ込んでいたのかは容易に自覚できる。

クーゲルシュライバーはアインズ・ウール・ゴウンが大好きだったのだ。

だからこそ、モモンガからメールが来た時にそれを断るなどという選択肢は存在していなかったのである。

であるならば、モモンガと共にこうして謎の現象に巻き込まれるのは必然だと言えた。

そうした考えのもと、力強く放たれたクーゲルシュライバーの言葉にシモベ達が沸き立つ。

恐れ多くも至高の存在であるクーゲルシュライバー様は、我々シモベとの間にも絆があると仰るだけではなく、その絆は至高の御方々を結ぶものと同等の、至高の絆だと仰ったのだ！

この言葉に、貴賓席で跪きながらクーゲルシュライバーの言葉を聞いていた階層守護者達は激しくうねる感情を抑え切れなかった。

シャルティアやアウラ、マーレは言うに及ばず、デミウルゴスやアルベドまでもが涙を流し、ハンカチを湿らせている。

ただ一人涙を流すことの出来ないコキュートスは、そんな同僚達の姿に微かな羨望を感じながらも全身を駆け巡る感動に身を震わせていた。

至高の御方々が一人、また一人とナザリックを離れていく中、悲しみと絶望感に心を蝕まれながらもこうする事しか知らぬとばかりに全身全霊をかけて忠義を捧げてきた。その忠義が無意味ではなかった。あの凍えるような日々が無駄ではなかったのだ。他ならぬ至高の御方が断言してくださったのだ。

全てのシモベ達が、押し寄せる波のように蘇えってくる悲しみの日々の記憶が、それよりも更に大きな歓喜の大波となって自身の精神を喜びの大渦へと引きずり込んでいくのを感じていた。

「愚かにもこうしてナザリツクに帰還してからそれに気付いた私を許して欲しい。そして願わくば、この私の失態を許そうという者は我が声に応えてもらいたい」

先ほどまでと一転し、染み入るような静かな声でクーゲルシュライバーが望みを口にする。

胸に握った拳をそえ、やや俯くようなその姿は自分自身を責める者のそれだった。

——どうか、そのようにご自身を責めないでほしい。

——たとえ想いが通じなくとも、私達は至高の御方々に忠義を捧げることが出来るだけで幸せだったのです。

——ずっと一方通行でも構わない。だから貴方様が心を痛める必要なんてないのです。

この場にいる至高の41人に忠誠を誓う全ての者が、締め付ける切なさを胸にクーゲルシュライバーを仰いでいた。

「長らく通じ合わなかった我らの絆を、この時より真の意味で輝かせようと望む者は声高らかに叫ぶのだ。それは私と皆の間に存在する主従の関係を、再度結びなおす契約の言葉となるだろう」

客席から息を飲む音が幾つも発せられた。その短い音の後ろに涙に咽ぶ声も混じる。

しかしながら、それらには悲しみなどの負の感情は全く感じられなかった。

そこに含まれているものは唯一つ。天を突かんばかりの歓喜だけだ。

一方的に捧げるだけで幸せだった忠誠に、至高の御方が応えようと知っているを知って。

「絆が繋ぐ希望の未来へ向けて……今ここに、私は万感の想いを込めて叫ぼう」

クーゲルシュライバーが両手を広げ天を仰いだ。客席から聞こえていた音が消えうせ、場に静寂が満ちた。

だが、その静寂は荒れ狂う膨大な熱を孕んでいた。

今にも静寂の帳を引き裂きあふれ出しそうになっているそれが、

クーゲルシュライバーの声と共に解放された。

「ただいま、ナザリック！私は帰ってきたっ!!」

——おかえりなさいませ！クーゲルシュライバー様!!

例外なく全てのシモベがそう応えた直後、万雷の拍手と嵐のような歓声が円形劇場に響き渡った。

あまりにも膨大な数の言葉が混ざり合い歓声とも騒音ともつかぬ音の暴力。

その力の強大さは、そのままシモベ達の忠誠心の強さを表している。

そう判断してクーゲルシュライバーは今回のスピーチが成功したことを確信していた。

(緊張したあ……うう、上手くいったのはいいけど、なんかすつげえ罪悪感が……。)

クーゲルシュライバーからしてみれば、今回のスピーチは「今までありがとう！今後も俺と仲良くしてね！」程度の内容しかない。

それを態々長つたらしく、そして仰々しく語ってみせたのは、この世界に来た初日からクーゲルシュライバーの胸中に燻り続けていたNPC達への不信が原因だった。

彼らの忠誠は一体どこから来たものなのか？

その疑問が不安となり、クーゲルシュライバーに偉大なる支配者としての演技を迫るのだ。

さらなる忠誠心を引き出そうとする全ての言動の根底には、クーゲルシュライバーが語ったような絆や信頼などと程遠い感情である絶対的な不信が横たわっていた。

しかし——

(この様子を見てみると俺がとんでもないクズ野郎に思えてならない。NPC達は俺の言葉を信じて、あんなにも喜んでくれているのに)

クーゲルシュライバーの足元には純粋な感動に打ち震える者達があった。

シャルティアが両の目元に手を添えて滝のような涙を流し泣いて

いた。

コキユートスは何処から取り出したのか、創造主である武人建御雷から授かった斬神刀皇を騎士の如く捧げている。

アウラは泣いた跡の残る顔に満面の笑顔を浮かべクーゲルシュライバーの名を呼んでいる。

マールは泣きじやくりながらも時折濡れた瞳を此方へ向けて頬を染めている。

デミウルゴスが直立不動で左胸に右拳をあて、宝石の瞳を見開きながら泣いていた。

そして、アルベドが思わず見とれてしまうような、とても悪魔だとは思えない純粹であどけない顔で笑っていた。

階層守護者達だけではない。客席に座る全てのNPC達が、その性質の善悪を問わずただ純粹に歓びを表現している。

そんなNPC達の純粹さを向けられるクーゲルシュライバーは、事此処に及んでもまだ彼らを信じきれずにいた。

通じ合わない彼我の心がどうしようもなく悲しくて情けなくて、クーゲルシュライバーは小さく呻き、そしてそれを悟られないよう声を張り上げた。

「ありがとう！ありがとうナザリック！ここに我らの主従の絆が結ばれた！より強く！より美しく！そして永遠に！」

あの忠義の塊を前に不信を抱き、利用しようとしている男が何を言う。

内心でそう吐き捨てたクーゲルシュライバーはこれでスピーチは終わりだという意思を込めてモモンガを見た。

嬉しそうにしきりに頷きながら事の次第を眺めていたモモンガと眼が合い、クーゲルシュライバーは巨大な心臓が跳ね上がるのを感じる。

おそらくはナザリックをこの世で一番愛しているだろう男から向けられた視線に、厚い信頼を感じ取ってしまったがゆえに。

(ごめんよモモンガさん。今はまだ、無理なんだ……)

どんな熱意にも原因はある。

人が持つことの出来る最も強い感情である愛ですら例外ではないのだ。

無償の愛など無く、永久の愛など存在し得ない。

その事をたった一度きりの経験ではあったが思い知らされた過去が、クーゲルシュライバーを拗ねた子供のような意気地無しにしていた。

玉座に座っていたモモンガが立ち上がり一歩前に出るのと同時にクーゲルシュライバーは自分の椅子へと体を乗せた。

「素晴らしい。我らが支配するナザリックが、より一層の輝きを放つのを目の当たりにした今日という日は実に良き日である」

モモンガが散々風呂場で練習した両手を広げてみせる支配者のポーズを取りながら話しはじめる。

円形劇場を沸かしていた歓声は全ナザリックの頂点に立つ男の発言を邪魔しないように即座に消えうせた。

それでも隠し切れないどこか浮ついた雰囲気をもモンガは好意的に受け止めながら話を続ける。

「さて、そんな良き日にお前達に我々からプレゼントがある。中央のスクリーンを見るがよい」

モモンガの言葉に従い何百という数の視線が円形劇場の中央に浮かぶ巨大スクリーンに向けられる。

「思えば我々アインズ・ウール・ゴウンの活動についてお前達に話をしやった事はなかったな。そのことをお前たちの忠義の程を知ったクーゲルシュライバーが哀れに思ったのが此度の上映会の発端だ」

モモンガの言葉に視線がクーゲルシュライバーへと集中する。

尊敬と感謝に満ち満ちた視線に、クーゲルシュライバーがたじろぎながらも手を上げて答えた。

モモンガはそれを確認してから再び口を開く。

「私もよい機会だと思いついて実現するに至った。……今後のナザリックが掲げることになる大きな目標に対して理解を深めるには丁度よい、とな」

大きな目標。

その言葉にNPC達がざわめく。声を出した者は居ないが、僅かな身じろぎによる音が何百と集まった結果だ。

至高なる御方が掲げるナザリックの目標とは一体如何なるものか？

誰もが聞き逃さぬように真剣な表情でモモンガの次の言葉を待った。

「今後のナザリックは世界に打って出る事になる。それに際してお前達には学んでもらわねばならぬ事が幾つかある、のだが……まあまうは見てもらったほうが早いだろう。クーゲルシュライバー」

世界に打って出る。学んでもらわねばならぬ事。

その二つの言葉が発する重大な雰囲気、知能の高い低いの関係無しに全NPC達の表情がさらに真剣なものになる。

それに従って浮ついていた場の雰囲気引き締まっていく。

そんな空気に苦笑いしながらも、モモンガに促されたクーゲルシュライバーが立ち上がり一歩前に出た。

「モモンガは学んでもらうと言ったが、緊張することは無い。素直に我々の活躍を楽しんでくれ。きつとそれだけで、忠義溢れるお前達は我々の望むことを学んでくれると信じている」

「うむ。クーゲルシュライバーの言うとおりだ。故に、上映中多少騒がしくしても構わぬ。我々の前であると萎縮せず、仲の良い者同士で楽しむがいい。無論、他の者の迷惑にならぬ程度にだがな」

——それでは上映を開始する。

クーゲルシュライバーの声と共に、円形劇場の各所に付与された永続光の魔法が一時的に不活性になった。

周囲が闇に沈み、僅かな光源は天上に広がる星空と炎を纏う等の自ら光を放っている者だけとなる。

そんな円形劇場の中央。

中空に浮かぶ巨大な四面スクリーンにクーゲルシュライバーがムービースクロールをかざした。

そしてそれと同時に、静かで神秘的な旋律が何処からとも流れ出した。



そこには闇が広がっていた。

何処までも続くように思える広大な闇の中には、微かな白い霧が渦を巻くように漂っている。

その渦の中心には楕円形の、見ようによつては植物の種子のような形状の純白の塊が存在している。

魔法によつて映し出された映像にもかかわらず、その存在から感じる気配はまさに圧倒的だ。

理解が及ばないと言つても良いほどの力が内包されたそれに、誰もが、階層守護者達ですら、見事なものを見たというような呆然とした眼差しを向けることしか出来ない。

瞬間、その大いなる存在が爆発した。

目を焼くような白い閃光が闇を駆逐し、無限に思われた空間を白く塗りつぶしていく。

その現象の凄まじさ、これまた圧倒的。

抗うことなど不可能な巨大な力の奔流は何処までも続くように思われたが、徐々にその純粹なる白さを薄めていく。

そして全てを塗りつぶした白い闇が完全に取り払われた時。そこには誰もが息を飲むような光景が広がっていた。

星空、いや銀河、それとも宇宙全体？

何もかもが巨大すぎるスケールの、無数の色に輝く光で彩られた空間。

ただそれだけで自らの矮小さを思い知らされる、孤独感さえ覚える美しい景色の中に、ナザリツクのシモベ達を見た。

無数の輝きの中に根を下ろし、逞しい幹から無数の葉をつけた枝を伸ばす光り輝く大樹の姿を。

「なんとという美しさだ……」

デミウルゴスが両目を見開いて嘆息する。

彼の言葉を聞いた誰もが静かに頷き同意した。

この光景を見て美しいと思わぬものなど世界に居るはずが無い……無条件にそう確信するほどに星々の世界に聳え立つ大樹の姿は素晴らしいものだった。

比較対象となるものが無いためどれ程の大きさなのか想像すらできないが、もしも大きさが1メートルでも100キロメートルでも、あの大樹が持つ偉大さと価値は微塵も揺るがないのは確かだろう。

「ユグドラシル……公式PV……」

「おっ……ばれた……なつか……ね」

背後から至高の御方であるモモンガとクーゲルシュライバーの会話が途切れ途切れではあるが聞こえてくる。

耳敏く、その声を捉えたアルベドは公式PVとはなんなのかと疑問に思いながらも、会話に含まれていた重要な単語に電流が背筋を駆け上るような感覚を覚えていた。

「ユグドラシル……これが、世界樹ユグドラシルなのね」

「ナントー！」

「あ、あれがユグドラシルなんですか……？」

アルベドの言葉にコキュートスが感嘆の声を上げ、マールレが自身の武器であるシャドウ・オブ・ユグドラシルを握り締める。

映像を見つめる全てのシモベがその偉容を見つめていた。

そして思うのだ。なんて偉大な存在なのだろうか、と。

至高の御方々が、そして自分達が生きる世界を支える存在の価値を低く見るような愚か者はいない。

しかしそれでも、自分達の創造主こそが最も偉大な存在だと信じ切っている彼らが、至高の41人以外に「偉大」という表現を使うのは尋常ではない。

それほどまでに、光り輝く世界樹の姿は衝撃的だったのだ。

視点が動く。

見る見るうちにその姿を巨大なものとしていくユグドラシル。

その枝に生い茂る葉の一枚一枚に異なる世界が存在しているのをシモベ達は見た。

暗黒が支配する世界。蒼い大海が広がる世界。陸地も海も存在し

ない空だけの世界。巨大な炎が燃え盛る世界。

多種多様な、ありとあらゆる可能性がユグドラシルの枝から生えていた。

そして知る。

数多の世界に存在する、途方も無い力を持つ者達を。

無限と思える魔力を自在に操る魔法使いがいた。

魂と契約を司る強大無比な悪魔がいた。

世界に蔓延る邪悪の悉くを切り伏せる聖騎士がいた。

大海を往く大海獣がいた。

天地開闢を行う神がいた。

拳の一撃で大陸をも砕く人間がいた。

一息で星を滅ぼす龍がいた。

気が遠くなるような力の持ち主が、夜空の星の如く存在していた。

あまりにも強大すぎる力の行使を目撃したシモベ達は戦慄を禁じえない。

それもそのはずだ。

つい今しがた目にした強者達の力は絶対的であり、ものによっては自らが信奉する至高の41人でも行えない、いや、行うのは困難だろう所業を成しているのである。

あの存在と戦えと命じられたのならば、自らの全てをかけて戦う事を厭わない。

だが、敗北は免れないだろう。

その認識は階層守護者達ですら例外ではなかった。

もしかすると、それは至高の御方々でも……。

一部のシモベがそう思ってしまうほどに、ユグドラシルの葉に宿る強者の力は凄まじかった。

彼らはその絶大なる力を以て自身の住む世界を支配していた。

頂点に立つ者の心のありようによって、世界はその性質をかえる。

慈悲深きものが君臨する世界は平穩に、殺戮を好むものが君臨する

世界は血と涙に染まる。

無限ともいえる可能性のまま、姿を変えながらも世界は其々の歴史

を刻んでいく。

それが永遠に続いていくかのように思われた、その時だった。無数に存在する緑と水に満ちた平穏な世界。

その一つが、唐突に滅び去った。

青く透き通った空が突然何かに挟られたかのように漆黒に染まり、緑の大地が底の見えぬ断崖を残して消失した。

その世界の住人はなにが起こったのか理解できなかっただろう。

正体不明の大破壊はたった二度の、バリツという何かを裂くような音を立てただけでその世界の全てを消滅させてしまったのだから。

一体何が起こったのか？

シモベ達はその疑問に、クーゲルシユライバーが記録した映像はすぐさま答えを映し出した。

無数の世界を支えるユグドラシルの枝に、輪郭を掴ませない黒い霧に覆われた何者かがいた。

巨大で細長いとしか理解できぬその何者かは、あろうことか世界そのものであるユグドラシルの葉を貪り食っていたのだ。

謎の影が頭部と思われる細長いからだの一端を葉に触れさせると、先ほど世界が減んだ際に聞いた音と共に葉が齧り取られていく。

バリバリという虫が植物を食むような音には、世界と、そして共に死んでいく者達の断末魔の悲鳴が重なっていた。

たった、数秒。

たった数秒で、一つの世界とそこに住む全ての存在が消えてなくなった。

まるで現実味のない出来事だが、映像が伝えてくる情報はそれが実際に起こったものなのだと問答無用で納得させる説得力を持っていた。

「あ、それは……い、一体……」

あまりの緊張により唾も出なくなったのか、アルベドが彼女らしくも無い掠れた声で呟く。

至高の41人に創造されてからアルベドは一度たりともあのような存在を見たことがなかった。

きつと他の者も同じのはずだ。

世界という途方も無いスケールの存在を貪り食う怪物。

そんなものを誰が知っているというのだろうか？

恐れおののくアルベドの眼前では、例の怪物が次々に世界^葉を喰い散らかしていく姿が映っている。

葉を食い荒らされた影響だろう。生命力に満ち溢れ、輝きを放っていたユグドラシルが徐々にその美しさを衰えさせていく。

その速度はあまりにも急激で、このままではユグドラシルが枯死するの時間の問題だろうと思われた。

何とかしなければ……そう思った時、未だ健在^葉だった世界から光と共に現れる者達がいた。

それは其々の世界の頂点に君臨する強者達だった。

姿も言葉も価値観さえも違う者達。

同じなのは世界を支配する程の力を持つというその一点だけの彼らが、この未曾有の大厄に立ち向かう為に世界の壁を突破して現れ出た。

本来ならば互いに争う事になるであろう正反対の性質を持つ者達ですら、ただ静かに目配せをし領く事で同じ方向を向いて武器を構える。

無数の世界の勇者達からなる強大なる連合が此処に結成されたのだ。

それはまさに神話の軍勢と言ってよい威容だった。

だが無数の強者に囲まれようと、災厄の根源たる黒い影は動じたそぶりをみせない。

ただ鎌首をもたげ、ギチギチと鋭く硬質な物体が擦れあう音を立てて連合を見るだけだ。

そして戦いが始まる。

連合を組んだ圧倒的強者達が次々とその力を発現させ災厄の影を打ち滅ぼさんと躍り出る。

天文学的な魔力を込められた大魔法が、契約を司る悪魔の呪いが、弱者を守る無敵の聖剣が、圧倒的質量から産まれる純粋な暴虐が、天

地を乖離する神の御業が、大陸を割るほどに練られた気を纏う拳が、星をも滅ぼす龍の全力の息吹が。

其々が持つ最大級の攻撃が災厄の影へと殺到する。

その力の奔流は何者にも抗うことは出来ない必滅の運命。

運命ならば覆すことは出来ず、世界を喰らう怪物は光に飲まれ消滅する。

……そのはずなのに。

身を震わせた怪物の頭部から放たれた不気味な極彩色に輝く光線が、放たれた力の全てをいとも容易く押し返しながら連合の悉くを飲み込んだ。

怪物の放った攻撃の凄まじさはその余波だけで大量のユグドラシルの葉が枝から離れ散っていく事から容易に見て取れる。

ああ、また多くの世界が消えていく。

怪物が放った光線がやがて収縮し、糸のようになって消えうせると、そこには連合の姿は無かった。

全滅だ。

あの強大な存在があれほど集まっていたのにも拘らず、ただの一撃で滅ぼされた。

最強とは至高の41人を指す言葉。心底そう信じていても、その力の強さを認めざるを得ない強者からなる一軍が一瞬で全滅する様子をシモベ達は信じられないモノを見るかのように見つめていた。

一体、あれはなんだ？

もう何度繰り返したか分からない問いをまた繰り返す。

世界を喰らい、数多の勇者達の猛攻も歯牙にもかけぬ、ユグドラシルを滅びへと導くあの怪物は一体なんなのだ？

ナザリツクのシモベ達はハラハラと舞い落ちるユグドラシルの木の葉吹雪を見ながら、答えの出ない問いを繰り返す。

おちていく世界が^葉やがて光と変わり、ほのかな燐光を残し何処かへと消えていく。

後に残るのは次々と葉を落としその身を蝕まれていくユグドラシルと、その根元にとぐろを巻いて鎮座する黒くぼやけた怪物のみ。

何処からとも無く黒い霧が現れ、最後に残ったその景色すら闇へと沈んでいく。

それはあたかも蝕まれ衰えていくユグドラシルの運命を暗示するかのような光景だった。

そして、全てが闇に沈んだ。

だが、その絶望の闇に一筋の光が奔った。

その光は複雑に空中を走り回り、重厚かつ優美さを感じさせる文字を形作る。

——《Yggdrasil》と。

円形劇場に流れる曲が悲壮感を煽るものから一転し、勇猛かつ雄大なものへと変わる。

再び光が奔る。

今度の光も文字を形作った。

大きな《Yggdrasil》という文字の下に、何らかの獣の毛で作った筆で書いたのだろう荒々しい文字が浮かぶ。

決戦！

アインズ・ウール・ゴウン

V S

ワールドエネミー

——世界が滅亡する日——

……と。

そんな文字の後ろに、至高の41人を示す偉大なるサインが燃え広がるように描かれていく。

サインから漏れ出る黄金の光が、衝撃的な映像に心を惑わせるシモベ達には、滅びに向かう世界に残された最後の希望のように映った。

21話

画面いっぱい闇を燃やしながらかかれたそのサインが示すのは、長いユグドラシルの歴史に燦然と輝く伝説のギルド《アインズ・ウール・ゴウン》。

焼き払われた闇の向こうには、分厚い雲に覆われた曇天の下で紫色の霧に覆われたナザリック地下大墳墓の姿があった。

グレンベラ沼地から漂う霧に包まれてなお、その威容を翳らせることの無い難攻不落の要塞だ。

誰も居ない地上部を映す画面は次々と違う場所の映像を映している。

ナザリック地下大墳墓が存在する常闇と冷気の世界、ヘルヘイムの映像だけではなかった。

アースガルズ、アルフヘイム、ヴァナヘイム、ニダヴェリール、ミズガルズ、ヨトウンヘイム、ニヴルヘイム、ムスペルヘイム。

ユグドラシルに存在する9つの世界の様々な光景が映し出されては消えていく。

——あれが至高の御方々が旅した世界なのか。

主人達の話が漏れ聞くなどして得ていた知識は所詮は極一部分に過ぎなかったのだと思い知る。

映し出される見事な光景に感嘆の声があがった。

手付かずの大自然と、そこに生きる種族のなんと多様な事か。

取るに足らない存在も居れば、階層守護者であろうとも手を焼くような強大な力を持つ者もいる。

そしてそれは異形種だけではなく、ナザリックの多くの者達が蔑む亜人種、人間種にも言える事だった。

むしろアルベドを筆頭にアライメントが悪に偏っている者達を驚愕せしめたのは、そういった本来は弱いはずの種族たちの姿だった。

「……強イ」

唸るように呟いたコキュートスの言葉に同意しない者など居ない。

それほどまでに映像に映る下等生物達は強大だった。

特に街の外で活動する者達の強さは異常なレベルだ。

なにせそういった者達の大部分が階層守護者に匹敵するだろう強さを見せているのだから。

無論、映像に現れる亜人種、人間種が全員常識外の強さを持っているわけではない。

下等生物の呼び名に相応しい脆弱な者も多く居る。

だがその全てが躊躇無くモンスターの跳梁跋扈する危険なフィールドへと旅立ち、そして信じられないような速度で強くなっていくのである。

ファンファアレーが鳴り、歓喜の声を上げるたびに成長していくその姿は、遙かな高みに居るはずの者達の心に焦燥感を植えつける。

誇りある自らの強さに、蔑んでいた弱き者達が到達しうると感じるがゆえに。

「繰り返されるユグドラシルの日常。しかし、その当たり前の日々に滅亡の危機が迫っていることを誰も知らなかった。そう、たった41人の例外を除いて」

なんちやつて。どう？ 雰囲気でてるでしょ？

動画内のナレーションとして流れたクーゲルシュライバーの声のあとに、恥ずかしげにそう小さく付け加えたのはモモンガの隣に座る彼自身だった。

その言葉はモモンガを「いやプレイヤー全員知ってるから」と苦笑させるだけで、食い入るようにスクリーンを見つめるシモベ達には届くことはない。

場面が切り替わる。

雲の海から突き出た、凍てついた岩肌が頭になった山頂。

星々が冷ややかに輝く夜天の下に、41体の影があった。

「ああつ……」

円形劇場が嘆息に包まれるより一瞬前。

だれよりも早く感動に震える声を漏らしたのは、両手で口元を隠し金色の瞳を涙で潤ませたアルベドだった。

「ダブル・スマラグディナ様っ！」

ありつただけの愛情と尊敬を詰め込んで叫んだアルベドをはじめに、堪えることなどできないとばかりに次々と声が上がる。

「……ウルベルト・アレイン・オールドル様」

「オオツ！ 武人建御雷様ダツ！」

「たっち・みー様……！」

「ペロロンチーノ様！ ペロロンチーノ様だわ！ ほらチビスケ！ ペロロンチーノ様がいらっしやるのよ！」

「うるさいバカ！ ほらマーレ！ ぶくぶく茶釜様もいらっしやるよ！」

「う、うん。……うん！ ぶくぶく茶釜様だねお姉ちゃんっ！」

静かに、噛み締めるように創造主の名を呼ぶデミウルゴス、コキユートス、セバス。

それとは対照的に興奮するシャルティアが立ち上がり、アウラの腕を引っ張って普段のいんちき廓言葉も忘れてもつとよく見るとスクリーンを指差す。

アウラはそんなシャルティアに罵声を浴びせているが、それが本気の言葉ではない事は彼女が浮かべる輝かんばかりの笑顔を見れば一目瞭然だ。

普段は内向的なマーレも姉に手を取られるがままに立ち上がり、シャルティアの手まで取って喜びを顕にしている。

階層守護者達のなかでも幼い容姿をした三人が手を取り合って円になり、ピョンピョンとステップを踏む姿に自然とモモンガとクレーグルシュライバーの視線も柔らかいものへと変わる。

「館ころもつちもち様！……わん」

「源次郎様あ」

「死獣天朱雀様だ！」

「式式炎雷様……なんと雄雄しいお姿」

「ぷにっつと萌え様！」

「ブルー・プラネット様ー！」

「二きやあー！ へろへろ様ー！」

「二ホワイトブリム様もいるー！」

「二ク・ドウ・グラーズ様だつて！」

「やまいご様……ぼくは、ぼくは……うう」

「ぬーぼーさまー！」

「わああああ!?るし★ふぁー様だあああ！」

「ベルリバー様」

「音改様！」

「おおっ！ぼりあぶる・たりすまん様！」

「スーラータンさまー」

「チギリス・ユーフラテス様！」

黄色い声を上げる一般メイド達を筆頭に大変な盛り上がりようだ。

泣いたり笑ったり懺悔したり信仰を捧げたり円形劇場の観客席はしつちやかめつちやかである。

いくら多少騒がしくしてもよいと許しが出ていようとも、これは多少の範囲に収まらない。これではまるで人気アイドルが登場した瞬間の日本武道館だ。

本来ならば守護者統括であるアルベドが一喝すべき事態だが、当の本人がギルドメンバーに対する愛の深さゆえに涙と鼻血を出しながら機能不全を起こしているため一向に收拾がつかない。

そんな様子に大きな満足感を覚えつつも、ちゃんと動画の内容見てくれるかなあと不安に思うクーゲルシュライバーだったが即座に杞憂だったと悟る。

映像の中、山の頂きに佇むモモンガが夜空を見上げて言葉を発した瞬間、円形劇場は瞬時に静まりかえった。

『そろそろ行きますか』

ローブをはためかせ背後に振り向けば、40人の仲間からの元気な声がモモンガに返ってくる。

アインズ・ウール・ゴウンのメンバー達は自然体のまま、実に気楽な様子だ。

其処には戦いに赴く者達が纏う剣呑な雰囲気は皆無である。

そんな彼らの中から商人の音改を先頭に非戦闘職のギルドメンバー5人が進み出てくる。

『モモンガさん。これを持って行って下さい』

『音改さん、これは?』

『今回討伐に参加できない5人で作りしました。きっと皆の役に立つはずです』

そう言って差し出された虹色に輝く波紋を封じ込めたような宝石を受け取ったモモンガは彼ら5人をジッと見つめる。

その目には仲間に対する厚い信頼があった。

『ありがとうございます。それじゃあ、留守をお願いしますね』

『任せてください。皆が留守にしている間、ナザリックは私達が守ります。安心して行つてきてください』

円形劇場が一瞬ざわめく。

展開からして至高の御方々はあの恐るべき魔獣を討伐しようとしているに違いない。

ではなぜ41人全員で戦いに赴かないのか?

世界を喰らう強大な魔獣を討伐するならば万全の態勢を整えて行くべきなのではないだろうか?

生じたその疑問の答えにおぼろげながらも到達した者が大勢いたためだ。

恐らくはこの時、ナザリック地下大墳墓を狙う何者かが居たのだ。

その敵は強大であり、自分達シモベだけではナザリックを守りきることが難しいと至高の御方々は判断されたに違いない。

だからこそ、全員で挑むべき難敵を前にして拠点防衛の為の人員を割かざるを得なかったのだろう。

その答えにたどり着いた者達は皆一様に不甲斐ない我が身を恥じた。

偉大なる存在を守るために創造されたというのに、これでは立場がまったく逆ではないか。

至高の御方々とその住居であるナザリック地下大墳墓を守護する為に作り出されたと自覚する守護者には余りの悔しさに涙を滲ませる者までいた。

——それはまったく外的な考えではなかったが正解でもない。ただ単に公式キャンペーンのラスボスであるこの魔獣に一度に挑め

る人数が36人までというシステム的な制限があった為なのだが、そんな事はNPC達にわかるはずも無いのだった。

『はい。それじゃあちよつと世界を救ってきますね』

モモンガは何の気負いも存在しない声でそう言っただけで何らかの転移魔法を使用した。

超位魔法を発動する際に展開されるものを更に複雑化し巨大化させたような立体積層魔法陣が夜空に広がる。

そして一瞬の閃光と共に41人中36人がその尊き姿を消した。

後に残された5人の手にて、リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンが星の光を反射して静かに輝く。

ヘルヘイムの肅然たる星空に光の尾を引いて36の眩い流星が走っていった。

『嗚呼、アイنز・ウール・ゴウンが往く……』

消え行く光の残滓を見上げながら音改が呟いた言葉が、静かに夜空へと溶けて消えていった。

光と共にモモンガ達36人は星空の世界へと降り立った。

彼らの眼前にはたった九枚の葉だけを残したユグドラシルの枯れ果てそうな無残な姿がある。

宇宙に根を張り数多の世界を支える偉大なる世界樹には最早かつての生命力は存在していなかった。

全生命力を残った九枚の葉の存続に費やしているのだろうか？

葉と、それを支える枝の極僅かな部分だけが生命を感じさせる緑色をしていた。

その命の色を目指して、ユグドラシルの荒れ果てた樹皮を這いずり登る影があった。

紛れもない、奴だ。

しかし、これは一体どういう事なのか。

固唾を呑んで見守るシモベ達の表情が戦慄に引きつる。

『ほう、アレが九曜の世界喰いか。流石ワールドエネミー。無駄にで

かいな』

そうだ。

モモンガの言うとおり、敵はあまりにも巨大だった。

連合と戦っていた時も見上げるような巨体だったが、今はそれを遙かに超えて大きくなっている。そして大きくなっているのはその凶体だけではない。

内包している力の気配もかつてとは比べ物にならない程に増大しているように感じられる。

世界そのものであるユグドラシルの葉を食った恐るべき敵——九曜の世界喰い——は以前に増して強大に成長していたのだ。

『イモムシ……いや、蛇かな？ 姉ちゃんはどうちだと思う？』

『つーかアレって元ネタニーズヘッグでしょ？ ならワームだよワーム』

『ユグドラシルの葉を喰らうとくればヘイズルーンだと思っていたのに……予想を裏切られたか』

『まあまあタブラさん。文献によればアイツが齧っているのがユグドラシルなのかどうかははっきりしてないわけですし。それにPVの時点で少なくともヤギじゃないのはわかっていたでしょう？』

映像を見ているだけで体が震えそうになる敵の威圧感。実際に相対している至高の御方々が感じる脅威は如何ほどだろうか？

それは世界そのものが敵意を剥き出しにして襲い掛かってくるかのような絶望的なものであることは想像に難くない。

にも拘らず、至高の御方々は微塵も動じていない。

なんと頼もしいのだろう。なんと偉大なのだろう。

心の底から汲めども尽きぬ泉の如く忠誠心が湧き出てくる。

『もうすぐ始まります。油断せずに行きましょう』

小さく時間を数えていたギルド一の策士と名高いぷにと萌えが注意を促した。

その声を合図とするかのように、九曜の世界喰いがユグドラシルの幹から鎌首をもたげた。

未だにシルエツトしか掴ませない九曜の世界喰いであるが、その視

線は36人へと注がれているのがわかる。

——来る。

背筋が凍るような恐怖を感じるや否や、ユグドラシルを揺るがす衝撃と共に九曜の世界喰いが36人の前へと飛び降りてくる。

その衝撃は足場となるようなものが何も無い空間にまるで見えな
い地面があるかのように立つ36人ごと宇宙全体を揺さぶった。
たったそれだけで並大抵の存在は死滅するであろう衝撃だ。

しかし、実際に幾つかの星や銀河系が爆発四散している惨状の只中
で、36人いる至高の存在は誰一人ダメージを受けたようには見えな
かった。

彼らはただ悠然と、身じろぎすることもなく静かに佇んでいる。

『ムービー終了まで残り5秒！』

『了解！皆さん、いきますよ！』

モモンガのシンプル極まりない言葉と共に、激戦の火蓋が切られ
た。



それはまさに激戦としか形容できない凄まじい光景だった。

貴重なアイテムが湯水のように消費され、十位階魔法がひっきりな
しに飛び交い、超絶のスキルが猛威を振るう。

回復魔法とバフ、デバフの詠唱は止むことは無く、裂帛の気合と共
に戦場を満たす混沌とした音の一部と成っていた。

アインズ・ウール・ゴウン36名による戦闘はあまりにも鮮烈すぎ
た。

至高と形容される強大な36の個が、完璧な連携を取ることでその
戦闘力を極限まで強化している。

連携には隙が無く非常に効率的だ。長年の信頼がなければこうは
いかないだろう。

シモベ達はこの至高の存在たちが見せる連携の完成度から、彼らの
間に存在する深い絆を感じ取っていた。

『スーパー産卵タイム！壁追加に来たよ！』

『ナイスタイミングだクーゲルさん！』

次々に大魔法を放つウルベルトの下へ、遊撃役として周囲を飛び回っていたクーゲルシュライバーが駆けつける。

九曜の世界喰いがひっきりなしに生み出す小型の——とはいっても5メートル以上の巨躯だ——魔獣から後衛の魔法職を守っていたクーゲルシュライバーは、素早くウルベルトの傍へ駆け寄ると躊躇無くその体に卵を産み付けた。

これで二度目の産卵である。

戦闘開始と同時に産み付けられた一度目の卵は、防衛線の合間を縫って流れ弾がウルベルトに迫った時に彼を守る子蜘蛛の壁を生み出してから消滅していた。

放たれた子蜘蛛達は魔法職にとって痛打となりえる暴威からその身を犠牲にすることよってウルベルトを庇い既に名誉の戦死を遂げている。

至高の御方を見事守り抜いた子蜘蛛達の健気な勇姿は、映像を見る多くのシモベに感動の涙を流させていた。特にデミウルゴスなど滂沱の涙を流していた。

この時点で忠誠厚き階層守護者達の流す涙のせいで、貴賓席の床は小雨が降ったかのように湿り気を帯びて変色していた。

クーゲルシュライバーは糸で編まれた卵囊がウルベルトの脚部に付着しているのを確認すると、接近していた魔獣目掛けて恐怖の精神作用を持つ魔法を放つ。

緑色の怪光線が直撃した瞬間、耳を覆いたくなるようなおぞましい叫びを上げ魔獣は体を硬直させた。

その隙を逃す事無く、遠方より飛来した属性ダメージの塊が魔獣を正確に捉え一瞬で塵へと変えてしまった。

爆撃の翼王の異名を持つペロロンチーノによる鮮やかな追撃にシャルティアが「うおおおお！」などとお嬢様然とした姿に似つかわしくない叫びをあげ興奮する。

そんな彼女を諫めるものは存在しない。

なぜならば誰もが自分の創造主の雄雄しい活躍に胸を躍らせ、興奮していたからだ。

普段は淑女らしく振舞うアルベドも、冷静沈着で理知的な言動をするデミウルゴスも与えられた椅子から腰を浮かせ興奮に震える握りこぶしをファイティングポーズのように構えていた。

戦闘は概ねアインズ・ウール・ゴウン優勢で進んでいると言っていた。かかった。

対するワールドエネミー<九曜の世界喰い>の攻撃も凄まじく十数人が一度に重傷を負う事もあったが、冷静な判断による回避行動と後方から降り注ぐ回復魔法の豪雨によつて死に繋がる重大な危機には及ぶことはない。

このまま行けば、勝てる。

誰かがそう思った瞬間、それは起こった。

ユグドラシルの枯れ枝を振動させる大咆哮と共に九曜の世界喰いが突進を開始する。目指す先は魔法職達のいる後方だ。

すかさずぶくぶく茶釜を先頭に前衛の防御力に優れた者達が進捗を阻止しようと立ちふさがった。

しかし――

『ぬわー!?!』

「ああつ!!」

無残に吹き飛ばされる壁役達の姿に、シモベ達から悲鳴が上がる。

『奴を止めろー!』

『無理だよスーパァーアーマーだ!後衛逃げてー!』

たった一度の突進でアインズ・ウール・ゴウンの陣形に綻びが生じた。

歴戦の後衛達はさっそく転移などの移動魔法で冷静に退避を開始するが、様々な妨害が張られていたのだから十分な距離を取れないでいる。

『ちくしょー!ひるめつつーの!』

空中でホバリングするペロロンチーノが焦りを滲ませる声と共に武器である弓を連射する。

属性ダメージの蓄積によるひるみを狙っているのだろう。

しかし、後衛を守るべく必死に戦うペロロンチーノに予想外の出来事が襲い掛かった。

『うそお!?!』

九曜の世界喰いが、跳んだのだ。

巨軀からは想像もつかないほどの機敏さと正確さでペロロンチーノ目掛けて跳びきたる九曜の世界喰い。

その大顎は限界まで広げられている。

世界をも噛み砕くその一撃を受けては如何な至高の御方と言えどただでは済むはずが無い。

「ペロロンチーノ様逃げてえええええ!!」

シャルティアの悲痛な叫びも空しく、破滅の大顎は勢いよく閉じられた。

赤黒い液体が飛び散る。

シャルティアが耐え切れず両手で顔を覆い俯く。

絶望と果てしない憎悪に心をかき乱されるシャルティアだったが、すぐさま聞こえたアウラの悲鳴にも似た歓声に顔を上げた。

「ぶくぶく茶釜様だー!」

後衛を守るための盾となり遥か遠くに弾き飛ばされた筈のぶくぶく茶釜が、小柄なその体を膨張させて九曜の世界喰いの顎に身を差し入れペロロンチーノを庇っていた。

二人の関係を知るシャルティアはその光景に熱い涙があふれ出るのを止める事が出来なかった。

『姉ちゃん!!』

『初見相手にひるみなんて狙ってんじゃねえぞバカ』

庇われたペロロンチーノは叫びながらもすかさず九曜の世界喰いから距離を取る。

そして大顎に食いつかれたぶくぶく茶釜を助けるべく弓を引き絞った。

しかし弓がエネルギーの矢を放つよりも先に惨劇が起る。

九曜の世界喰いが何度も顎を鳴らしてぶくぶく茶釜を噛み砕こう

とする。

一度は防ぎきつたといっても、世界を抉る大顎の連撃を受けては如何に防御に優れたたぶくぶく茶釜であっても無事ではすまない。

顎が動いたびにピンクの粘体から飛沫が上がる。

本体から分離された粘液は赤黒くその色を変えて落下していった。まるで血の雨だ。

みるみる内にぶくぶく茶釜の体積が減少していく。

シモベ達から悲鳴が上がり、マーレなどはあまりに残酷なその光景に気を失いかけていた。

『あれ多段ヒットなのかよ!?!』

『茶釜さんから離れなさい!』

『やまいこさんダメだ!ノックバック耐性が高すぎる!』

『茶釜さんごと突っ込んでくるぞ!退避!退避!』

跳躍し、ピンク色の巨大なガントレットに包まれた拳を叩き込むやまいこ。

ノックバックさせる事に絶大な効果を発揮する武器による一撃はしかし、九曜の世界喰いの巨体を微かに揺さぶるだけだ。

迫り来る巨大質量の軌道を逸らすことも出来ない。

モモンガなどの小技を修めた魔法詠唱者が重力制御等の搦め手で進攻を阻もうとするが、反則的な魔法抵抗力によって防がれ成果を上げることが出来ていない。

このままでは退避が遅れている後衛達のすぐ近くに九曜の世界喰いは着弾するだろう。

もしそうなった場合、戦いの流れは全て変わってしまうだろう。

だがそうはさせぬとぶにつと萌えが大声で指示を飛ばす。

『クーゲルさん使ってください!』

指示というのにはあまりにも単純すぎるその言葉に、全てを理解しているとはかりにクーゲルシュライバーが答えた。

『了解!へろへろさん!』

『合点承知!』

退避していく魔法職達の間をすり抜け、クーゲルシュライバーとへ

ロヘロが走る。

流れるように疾駆する二つの漆黒。

最初に仕掛けたのはヘロヘロだった。

『ヘロヘロのドロドロのボロボロになっーちやえっ！』

ヘロヘロの肉体が大きく撓んで九曜の世界喰いがある上空へと飛び上がる。

天に向かって放たれた一本の矢の如く飛翔したヘロヘロは寸分違わず九曜の世界喰いの腹に着弾する。

その瞬間、大きく薄く引き伸ばされたヘロヘロの肉体が白煙と共に凶悪な酸を分泌し九曜の世界喰いを焼き溶かし始めた。

『あつダメだこれ。コイツの耐性全っ然溶けない。ごめんクーさん拘束無効を5秒解除が限界っぽい』

『それで十分！みんなー！全部ぶっこむから後は頼みましたからね！』

そういうやいなや凄まじい速度で九曜の世界喰いの背後、つまりは跳躍した地点まで回り込んだクーゲルシュライバーの体が怪しい光と共に一回り以上巨大化した。

伸ばされた擬腕の先端からは極太の12本の糸が射出され九曜の世界喰いとクーゲルシュライバーを繋ぐと、足元に巨大な魔法陣が足場の如く展開される。

大きく足を広げ重心を低くしたクーゲルシュライバーは、擬腕から伸びる糸を握りこむと全体重をかけてそれを引っ張った。

『ぬうううん！』

シモベ達の眼前で冗談のような光景が展開された。

九曜の世界喰いの全長100メートルを優に超える巨体が空中で静止すると、クーゲルシュライバーを中心に円を描くように回転し始める。

糸により拘束され、振り回されているのだ。

それは所謂ジャイアント・スイングと呼ばれるプロレス技なのだが、そのスケールは人間が人間に使用する時とは段違いであり、凄まじいを通り越してもはやギャグの領域だ。

唸りを上げる風切り音が1秒毎にその猛々しさを増していく。

『ドワォー!』

たつぷりと蓄えられた速度と遠心力をそのままにクーゲルシユライバーが九曜の世界喰いを後衛達が居る場所から遠く離れた反対側へと投げ飛ばす。

暴力的な衝突音と何故か混じる爆発音と多種多様な破壊音が映像を見るもの全ての体表を震わせる。

未だ啞えられている瀕死のぶくぶく茶釜と、敵を焼き溶かさんと必死に纏わりつくへ口へ口に対する配慮が全く感じられない一撃だった。

シモベ達の背筋に一瞬冷たいものが走る。

『今です!』

ぷにつと萌えの声を合図に現在のアインズ・ウール・ゴウンが放てる最大効率の攻撃が苦しみ悶える九曜の世界喰いに殺到する。

その苛烈な光景にアウラとマーレ、そして一般メイドの1グループが悲痛な声を上げた。

どこからどうみてもぶくぶく茶釜とへ口へ口が巻き添えになっている。

至高の御方々はお二人を犠牲に勝利を得ようとしているのか？

それが必要な相手という事も、負けてはならない戦いであるという事も理解は出来るが、直接の創造主が必要な犠牲だと切り捨てられる光景に納得できるはずがない。

ぶくぶく茶釜とへ口へ口が生み出した特に麗しい姿を持つシモベ達は、みなその美しい顔を悲しみに歪めた。

そして、聞こえてきた緊張感ゼロな声に目を丸くする。

『いやー死ぬかと思っただわ。ありがとみんなー』

『やばい、なにアレめっちゃ楽しかった。またグルグルしたいよ超したい』

九曜の世界喰いのいる各種攻撃により混沌とした色彩の閃光に染められた空間から流れるように現れる粘体二人。

それは先ほどまでの重傷が早くも全快しているぶくぶく茶釜と無

傷のへ口へ口だった。

「う、うわああああん！よかったよう……生きていらっしやるよう」
「ぐすつ……よ、よかったあ……本当によかった……」

アウラとマーレが貴賓席の床にへたり込みお互い抱き合って創造主の無事を泣きながら喜ぶ。

「素晴らしい……あれほどの強大な力を行使しながらも二人に危害を与えないとはなんたる制御精度」

「至高の御方々の華やかなお力に目を奪われがちだけど、こうした細やかな部分にこそその至高たる所以が潜むのね。ああもう何度惚れ直せばいいのかしら！」

「まったくそのとおりだね。それに、さっきのアレは決して誤射は起こらないという互いの深い信頼が無ければ出来ない事。何度忠誠を新たにしても足りないと感じるぐらいだよ」

「はあ……それにしてもぶくぶく茶釜様の張りのあるプルプルでヌルヌルな御体……へ口へ口様のドロドロで黒光りする御体……くふふたまんねえ」

「あー……アルベド？」

「……ムウ。アルベドヨ。念ノタメ言ツテオクガ、ぶくぶく茶釜様ハ女性ダゾ」

「あらコキユートス。愛の前に性別なんて意味を成さないわ」

私はバイよ。

そうやって胸を張るアルベドにコキユートスは最早かける言葉をもたなかったのだろう、静かに視線をスクリーンへと戻す。

デミウルゴスもまた首を小さく振って眉間を指で押さえるとアルベドから視線を外した。

なお、ぶくぶく茶釜とへ口へ口が無事だったのはこの映像がユグドラシルのものでありフレンドリファイアが解禁されていなかったのが原因である。

どれだけ派手に攻撃を撃ち込もうとも決して味方にはダメージが発生しないからこそその猛攻だったのだが、それを知らないシモベ達の間にはアインズ・ウール・ゴウン各員が神がかり的な制御技術でもつ

て味方を攻撃範囲から除外しているように映る。

そうして、実際に直撃しているかのように見えるほどの紙一重なコンテンツロールに自分ではあれ程までの精度は出せないと至高の存在に対する尊敬をさらに高めていた。



ありとあらゆるものが沸騰し揉み返す修羅場の中の修羅場といふべき決戦は、乱れた陣を電光石火の速度で組み直したアインズ・ウール・ゴウンが再度優勢を取っていた。

驍勇無双の勇者達は柔軟に戦術を組み換え強大な敵に立ち向かう。既に相手の動きは見切ったとばかりに、常に敵の上手を行くその戦い振りに勝利を疑う者は居ない。

敵はもう完全に攻略されている。

それは誰の目から見ても明らかだった。

だが敵は狂瀾怒涛の大災厄、ワールドエネミーたる九耀の世界喰い。

何をしでかすかわからない、何をしでかしてもおかしくは無い底の知れぬ強敵だ。

その事を至高の御方々は十二分に理解している。油断や慢心など一切無い戦いぶりがそれを証明していた。

しかし真の脅威というのは理不尽の極致であり、どれだけ警戒しようが対処のしようも無いのだとシモベ達は思い知らされることになる。

『むっ!?体が意のままにならぬ!』

『え、うそこのタイミングでムービー入るの!』

『確定演出か……って、おいなんかアイツ砲撃体勢取ってるぞ!』

『ム、ムービー銃反対!』

『落ち着け流石にダメージは無い……ないよなあっ運営!』

『あ、これ知ってる公式PVのアレだ!』

『まさか時間制限付きだったのか!』

『んなご無体な！』

意味の掴めない言葉もあるが、見えない不思議な力によって自由を奪われたギルドメンバー達は驚愕を顔にしていた。

中空へと持ち上げられた36人を憎悪と喜悦に歪んだ眼で睨め上げる九曜の世界喰いの顎には、かつて世界の勇者達を灰燼と化した極彩色の暴威が輝いてる。

シモベ達の脳裏に無残にも敗れ去っていった勇者達の連合の姿が蘇える。

いや、奴らは確かに強者ではあったが至高の御方々には及ばない。最も偉大で、最も強大な我らの主達ならばあの攻撃を受けたとて同じ結果になるとは限らない。

盲目的にそう思う一方でも拭いきれない不安が心を震わせる。

九曜の世界喰いの攻撃は確かに至高の御方々にダメージを与えていた。世界を削り取る牙による連撃はあのおおお茶釜をも死の間際まで追い詰めたではないか。

今から放たれる一撃はその余波だけで世界そのものである葉を散らせるだけの威力を持っている。

昔ですらそうなのだ。強く大きく成長した今の九曜の世界喰いが放つそれは当然さらなる暴威を發揮するだろう。

そんな一撃を受けて、自由を奪われ無防備となった至高の御方々は果たして無事で済むのだろうか？

ならばその答えを教えてやろう。

そう言うかのように、ついに破滅の光が解き放たれた。

『ぐわあああ！』

『ぬわあああ！』

『ぎやあああ！』

『うおおあああ！！』

上がる絶叫。

初めて聞く至高の御方々の苦痛に悶える悲鳴にシモベの多くがたまらず耳を塞いだ。

その悲鳴が、何も知らずにナザリックでのうのうと過ごしていた自分達を責めているようにすら思えた。

心を散々に切り裂く光景は実際の時間とは異なり、永遠とも思えるような長さでシモベ達を虐め抜いた。

やがて36の落下音が耳が痛くなる程に静まり返った円形劇場に響いた。

倒れている。地に倒れ伏している。

誰が？自らが忠誠を捧げる絶対の主人たるアインズ・ウール・ゴウンの36人がだ。

何よりも偉大で何よりも尊い存在は倒れ伏したままピクリとも動かない。

おおおおお……。

搾り出すような、亡者のような呻き声が観客席のあちらこちらで聞こえてくる。

——もしや、今ナザリックにおわすモモンガ様とクーゲルシュライバー様を除く至高の御方々は此処で斃れたのでは？

そんな考えが少なくない数のシモベの脳裏によぎるほどに事態は絶望的だった。

どうか、お立ち下さい。

祈るような、いや事実祈りを捧げながらシモベ達はスクリーンを見つめた。

『うぐ、み、皆……無事ですか……？』

ああっ……！

アルベドは両手で口元を押さえながら涙に滲む視界で、よろめきながらも手にしたスタッフを支えに立ち上がるモモンガの姿を見つめた。

満身創痍もいいところだ。

ローブの隙間から見える白磁の如き美しい骨体には夥しい罅が走り、大胆に開かれた胸元から覗く肋骨は無残に碎かれている。

見る者に精悍かつ理知的な印象を与える頭蓋骨にも亀裂が走り、無残な穴さえあった。

瀕死の状態である事は明らかだった。

そんな状態でもモモンガは立ち上がり、なによりも先に仲間達の身を案じた。

なんとという慈愛の心。

知っていたつもりではいたが、アルベドは改めてモモンガの慈悲深さを思い知った。

そしてそれはアルベドだけではなくスクリーンを見るシモベ達全員が同じ思いを抱いていた。

『生きてはいるが……ダメだ、体が動かない』

『くそ、なんて威力なんだ……』

『うぐぐ……41人揃えば、あんなやつなんか……』

36人は生きていた。

しかし誰もが苦痛に呻き、半死半生の体を動かさないでいる。

対する怨敵、九曜の世界喰いは大量の眷属を生み出し決して逃がしはせぬぞとばかりに36人を包囲させた。

そして、またも集う極彩色の混沌。

あろうことか九曜の世界喰いは再びあの破滅の光を放たんとしていた。

未だ動けぬ36人と徐々に狭まる包囲の輪、そしてその輝きを増し放たれるときを待つダメ押しの一撃。

あまりにも不利すぎる絶望的とも言える状況で、呪いのようにシモベ達の耳に残る言葉があった。

それはスクリーンの中のクーゲルシュライバーが悔しそうに呟いたもの。

——41人揃えば、あんなやつなんか……。

そうだ。

アインズ・ウール・ゴウンは至高の41人からなる至高の集団。

全員が揃えばどんな障害であろうともその覇道を阻むことはできない。それは確信であり、信仰であり、ナザリックに属するシモベの不動不変の常識だ。

クーゲルシュライバーの言うとおり、あの場に41人全員が揃って

いればこのような窮地に陥る事も無かったのだろう。

ではなぜ、至高の御方々は全員で挑まなかったのか？

その答えは既に出ている。

何よりも心を苛むのはそれだった。

自分たちの力不足、いや無能が！ナザリツクの防衛という名目で戦力の分断を招き、結果としてこの惨状を生み出したのだ。

もしもこの戦いにおいて生き残ったのはモモンガとクーゲルシュライバーの僅か二人だったとしたら、自分たちを捨て、ナザリツクを離れ、お隠れになっていたと思っていた至高の御方々は自分たちが殺したも同然だ。

その考えがシモベ達に与えた絶望は筆舌に尽くしがたい。

特に絶対的な忠誠を捧げる階層守護者達の反応は顕著であり、知らない間に至高の存在の役に立つどころか足を引っ張り死へと追いやっていた己を恥じて自裁しかねない程だった。

『くそ……ここまで来たのに、もう、終わりなのか……？』

あの破滅の一撃を受けてから36人の雰囲気は一変していた。

瀕死になったとしても欠けることの無かった軽口が消え、かつて無い深刻な声で苦悶するように言葉を紡いでいる。

そしてそれは偉大なるギルド長モモンガも例外ではなく、今まさに彼の口から発せられた諦めに近い言葉はシモベ達に悲鳴を上げさせるほどに悲痛なものだった。

ちがう！終わりなんかじゃない！至高の御方々が負けるはずが無い！立って下さい！どうか、どうか御立ち上がり下さい！

溢れる感情そのままにシモベの誰かが叫ぼうとしたその時だ。

傷つき今にも倒れそうなモモンガの手がキラリと光る。

それは指輪だった。赤い宝石の奥に刻まれしは古今無双のギルドの証。

至高の存在にしか持つことを許されないという至宝、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ。

『こ、これは……』

アインズ・ウール・ゴウンを繋ぐ絆の証が放つ輝きに気付いたモモ

ンガが呆然と己の手を見つめた時、彼の脳裏に穏やかな男性の声が響いた。

『俺達は、離れていても一緒です』

5人の声が重なり合ったその言葉に、モモンガは小さく頷き懐に手を差し入れた。

握り締めた骨の拳の隙間から溢れるのは波紋の如き虹の燐光。

『そうだ……俺達は……』

九曜の世界喰いの顎に混沌が集う。

溜まりに溜まった破滅の力は初撃よりも圧縮されており、それでいて巨大だった。

勝利を確信したのだろうか？ 表情など無いように見える九曜の世界喰いの顔に兇悪な笑みが浮かんだように思えた。

そして、三千世界に轟くような爆音を立てて破滅が解き放たれた！

『いつも一緒だ！』

握り締めた拳を突き出したモモンガを極彩色の濁流が飲み込み、その後ろにいた35人をも覆いつくす。シモベ達の悲鳴が上がった。

シモベの中には至高の存在が斃されるところなど見られないとばかりに目を瞑り耳を塞ぐ者もいる。

おお、しかし見よ！そして聞け！

主を信じぬ不忠者よ、至高の存在の至高たる所以とその証を魂に焼き付けるがいい！

心臓に振動を感じさせるほどの歓声が円形劇場から湧き上がる。

その熱に硬く閉ざされた瞼が抉じ開けられる。そして視界に飛び込んできた光景はすぐに溢れ出してきた涙に滲んだ。

「わああああああああ!!」

たまらず、叫ぶ。

誰も彼もが叫んでいる。誰も彼もが泣いている。そして誰も彼もが笑っていた。

歓呼の声が第六階層の夜天を衝いた。

彼らが見つめる先では、破滅を齎す極彩色の濁流を二つに叩き割るモモンガの雄姿があった。

突き出した拳はいつの間にか広げられ手中にあった虹色の輝きを
頭に行っている。

白い骨の掌にあったもの。それはヘルヘイムを発つ前に音改達が
モモンガに託した虹の宝珠だった。

——今回討伐に参加できない5人で作りました。きつと皆の役に
立つはずです。

その言葉通りに5人の仲間が作り上げたアイテムはモモンガ達3
6人の絶体絶命の危機を救ったのだ。

『モモンガさんっ……』

最初に立ち上がったのはペロロンチーノだ。

赤く染まった羽毛が痛々しい。

しかしそんな事は知らぬとばかりに彼の二本の脚はしつかと上半
身を支え、広げられた大翼は天に羽ばたく時を今か今と待ちわびてい
るような力強さだ。

爆撃の翼王、その心未だ地に堕ちず。

その体から迸る光が一層輝きを増すさまは彼の燃え上がる闘志を
そのまま現しているようだった。

彼の指にはめられた指輪が誇らしげにその光を反射する。

ペロロンチーノの声を背中に受けるモモンガが小さく笑う。

表情は無い。モモンガは骸骨である。しかしそのひび割れ穴のあ
いた骸骨の眼窩にある赤い鬼火は喜びを宿して赤く輝きを大きくし
ていた。

その輝きは徐々に強くなる。

背後から聞こえる音が増えていくから。

鎧を軋ませながらたち・みーが立つ。

傷つき汚れた鎧姿であってもその身が宿す気高さは翳る事を知ら
ない。

盾を構え剣を振りかざせば何故か背後で巻き起こる色つき爆発。

正義の二文字を背負う純銀の聖騎士の手で爆炎を照り返して指輪
が煌く。

正義が立つなら己が立たねば始まるまい。

ボロボロになったマントを翻して立ち上がるはたち・みーと正反対の性質の、それでいて同じ気高さを持った偉大なる悪ウルベルト・アレイン・オードル。

爆風に煽られバタつくマントを鬱陶しげに払いながら、爆発を起こした張本人を一瞥すれば舌打ち一つで敵を睨む。

陽炎のように揺らめく魔力を立ち上らせるウルベルト。

その魔力を照り返して指輪が怪しく光る。

次々に立ち上がる仲間達。

その全員の手には一つの指輪が輝きを放っていた。

36人全員が闘志を剥き出しに立ち上がる頃、暴虐の奔流がついに枯れ果てた。

モモンガが掲げる虹色の宝珠から発せられる目に見えない障壁は、九曜の世界喰いの全力を凌ぎきったのだ。

激戦の最中、奇妙な静寂が場に満ちた。

それを成したのがモモンガの偉業ならば、打ち破るのもまたモモンガだった。

『……世界を滅ぼすものよ、お前は強い』

低く、威厳をたつぷりと含んだモモンガの声に至高なる仲間達が続く。

『たった独りでその力、正直尊敬するよ』

『しかし、だからこそお前は知らないだろう』

『弱くとも、信頼する仲間と共に戦う者達が持つ強さを』

『……世界を喰らい、ユグドラシルをも枯らさんとする貴様の力は我ら36人を確かに超えている』

『41人の仲間全員が揃えばあるいは、と言ったところだがこの場にいるのは36人。それは確かさ』

『だけど、僕達は36人で戦っているわけじゃない』

『たとえ遠く離れていても』

『共に世界を駆け抜けた記憶が』

『繋いだ絆がある限り』

『俺達41人は一つだ！』

『今こそ知るがよい。41人が成す、世界を繋ぐ唯一無二の尊き名を。それこそがお前を滅ぼすもの』

36人の手にあるリング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンが光を放つ。

放たれた光の中には各員を示すサインが浮かぶ。

36の光が空中へ伸びる。

それと同時に、ユグドラシルの葉から5つの光が降り注ぐ。

同じ先に向かう41の光は空中にて溶け合い巨大な紋章を形成した。

——我ら！アイنز・ウール・ゴウン！！

誇り高きその紋章を背に、満身創痕の36人が雄雄しく立つ。

その傍らにはこの場にはいないはずの5人の姿もあった。

燃え盛る戦意に輝く41の視線が九曜の世界喰いを貫く。

その威力に巨体が身じろぎ後ずさる。シモベ達の歓声が尚も激しくなった。

いつの間にか流れ出した音楽は戦意を煽るだけ煽り、勇気を何百倍に大きくする。

もう負ける気がしない。

ユグドラシルのテーマのバトルアレンジは作曲家が想定していた通りの盛り上がりと感動をシモベ達に与えていた。

円形劇場のボルテージが天上知らずに高まっていく中、スクリーンの中で今まさに奇跡が成されようとした。

『みんな！ウルベルトさんとたちちに力を！』

いいですとも！

モモンガの声に38人の声が応え、言葉通りに力が集中していく。

ウルベルトには魔力が次々に譲渡されていき、たち・みーには強化魔法やスキルがこれでもかばかりにつき込まれていく。

アイنز・ウール・ゴウンが誇る魔法職最強と戦士職最強に全ての力を託す。

のるかそるか、乾坤一擲の策ではあるが、それを選び誰もが異議を唱えないのはこの最強の二人に対するギルドメンバー達の信頼の深

さゆえであろう。

『たちさん、しくじらないで下さいよ?』

『ウルベルトさんこそ。そちらのタイミングがずれたらオジャンなんですからね?』

『……』

『……』

コツツ。

そんな音を立てて二人は拳同士を打ち合わせるとお互いの顔も見ずに戦闘態勢を取った。

たち・みーが駆け出し、ウルベルトから尋常ではない量の魔力が噴き出す。

ギルドメンバーの力を受けた二人は、完璧なタイミングでもって己のもつ最強の技を解き放つ。

二分されていたアインズ・ウール・ゴウンの力は一つとなり世界の敵を討たんと猛り狂う。

閃光によって白く塗りつぶされた円形劇場に、一際大きな歓声があった。



「さて、どうだったかな?楽しんでもらえただろうか?」

聞くまでも無い事を白々しく言い放ちながらクーゲルシユライバーは満足感に浸っていた。

楽しんだかどうかだつて?そんなのは此方を見上げるシモベ達の間を見れば分かる事だ。

冷酷非道であり悪逆非道でもある邪悪な存在達がその目に宿すのは純真無垢な少年少女のようなキラキラとした興奮の輝きだ。

それを見て楽しんでもらえなかったなどと受け取るほどクーゲルシユライバーはコミュニケーション能力に劣っているわけではなかった。

クーゲルシユライバーの問いに答えるように歓声があがる。

それを受けるとクーゲルシュライバーは全身が震え心が弾みだすのを堪え切れなかった。

動画視聴中にリスクを承知で精神作用無効化を解除しておいてよかった。

まるで映画スターにでもなったかのような状況にクーゲルシュライバーは心底そう思った。

浅ましいとはわかっていても、この自分の努力を全肯定されている感覚は動画を作っている者としては最大のご褒美だとも思える。

これを味わいたいのが為にそれらしい事をモモンガに言つてこの上映会を実現させたと言つてもいい。

(いや、それだけじゃないけどさ)

忠誠心をさらに高めることも、自分の作った動画を見せて称賛されたいと願つた事も間違いなく理由の一つだ。

だが無数にある作品の中で態々この捏造だらけの継ぎ接ぎ動画を選んだのにはクーゲルシュライバーなりの考えがあったのだ。

「ふむ、ふむ！ よろしい。大いに楽しんでくれたようだな！」

上機嫌のモモンガがスタッフについて立ち上がり言った。

モモンガはこの世界に来てから最も上機嫌であり、その声もスキップをするかのように軽やかだ。

シモベ達の視線がスクリーンに釘付けになっている中、モモンガもまた仲間達の活躍を見て大はしやぎしていたのである。

特に満身創痍で立ち上がり仲間と共に啖呵を切るシーン等、玉座から立ち上がりガッツポーズを決めた後、ヨロヨロと元居た場所に腰掛け「やばい俺もう泣きそうです」などとクーゲルシュライバーに震える声で耳打ちする程だった。

その言葉にどれ程の想いが込められていたのかクーゲルシュライバーは察することは出来なかったが、確かにモモンガは上映会を大いに楽しんでいた。

上映会の途中頻繁に発動する精神作用無効化に本気で怒つては抑圧されるモモンガの姿からそれは間違いない。

(ぶっ！じ、地声出てるよモモンガさん……！ま、喜んで貰えたみたいでよかったけどさ)

威厳ある声を出そうと努力していても内心のウキウキ気分を隠しきれしていない友人に苦笑しつつクーゲルシュライバーは動画の出来を改めて評価する。

まず映像。これは文句なしのハイクオリティだった。

元の動画では本来の九曜の世界喰い戦にはない演出やシーンを入れた為に、場面ごとに敵の造形が違うなどのアニメにおける作画ミスの如き違和感が散見されていた。

それがこの世界に来たことによって映像のクオリティが不思議な力で統一されたらしく、その違和感が払拭されていた。

無駄にリアルになった映像はそれだけで大迫力であり美麗でいて刺激的だった。

次に脚本。

これは相変わらず酷いの一言に尽きる。

ペロロンチーノはガチビルドのプレイヤーであり歴戦の廃人であり、作中に見せた無理なひるみ狙いの攻撃などしないし、謎のアイテムによって九曜の世界喰いの放つ破壊光線を叩き割るなんて不可能だ。

そもそも二発目の光線なんて飛んでこない。あれはPVから切り取った映像と、課金して得たラスボス戦のログデータから自作した敵モデルを使用した捏造シーンである。

最終決戦なのにリング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを装備しているのも変だ。ナザリック内における転移を可能とするアイテムをあの場合で装備する理由なんて皆無である。

挙げていけば幾らでもおかしな点が出てくる。

それもそのはず。この動画の脚本には複数人が関わっており、なかには罰ゲームとして無理やりねじ込まれた恥ずかしいセリフ、恥ずかしいシーンまである。

これで混沌としない方がおかしい。

冷静に見てみれば馬鹿馬鹿しいクソ脚本もいいところなのだが、

クーゲルシュライバーはそれはそれとしてこの脚本が嫌いではなかった。

突拍子もない展開の一つ一つに41人で一つの動画を作り上げた思い出が宿っている。

出来が悪いからこそ記憶にこびり付いているそれが、動画を見るたびに鮮やかに蘇ってくるのだ。

今は失われたものを感じさせるからこそ、その価値はただ小奇麗に纏まった動画よりも高いのである。

モモンガが上機嫌なのもきつと同じ理由だろうとクーゲルシュライバーは確信していた。

総評としては10点中6点といったところだろう。

混沌とした脚本によつて0点、思い出補正でプラス1点。あとは映像5点の内訳だった。

「さて、こうして皆に我らの活動の記録を見てもらったわけだが……その真意を教えようと思う」

モモンガの口から重要な事が発せられようとしている事に気付いたシモベ達は一齐に床へと跪いた。

床は夕立でも降った後のようにびしょ濡れだった。

これが全てシモベ達の流した涙と言うのだから、あまりの驚きに声も出ない。

今度上映会をするときには給水所か球場のビアガールのようなものが必要になるだろう。

部下達の水分不足を心配しながら、クーゲルシュライバーは予め用意していた言葉を必死にスピーチするモモンガを視線でだけで応援する。

「世界には強者がいる。それも我々アインズ・ウール・ゴウンが全力で挑まねばならない強敵が」

その言葉だけでモモンガが何を言わんとしているかを察した者達は緊張に身をこわばらせた。

ナザリックが見知らぬ土地に転移してからのモモンガとクーゲルシュライバーが見せた慎重な姿勢が、一体何を警戒しているのかに思

い当たったからだ。

「まだその全容を見通せぬこの世界に、かのワールドエネミーに匹敵する存在が居ないと誰が断言できようか。そして強者はワールドエネミーだけではない。この世界でも確認された人間達。私達が出会った人間は脆弱そのものだったが、全ての人間がその程度とは到底考えられないのだ。お前たちも見ただろう？このナザリックが誇る階層守護者達に匹敵する強さを持つ人間達の姿を」

人間を警戒するモモンガの心を鼻で笑って聞き流す愚か者はいない。

いや、あるいは動画を見ていなかったら至高の御方によるお言葉を受け取ったのにも拘らず心のどこかで人間種を侮る者もいたかもしれない。

しかし至高の41人の一人クーゲルシュライバー自らが記録したという映像に映る人間達の姿を見れば、ただの下等生物と見下せようもないのだ。

至高の御方が記録した映像に嘘など存在しよう筈がないのだから。「私が危惧するのはそれら強者の存在だ。さきにも言ったようにこれからのナザリックは外に打って出ることになる。当然お前達にも働いてもらうのだが、その時にこの世界の存在を侮り短慮な行動に出てもらっては困るのだ。不用意に強者と敵対する事はなんとしても避けねばならない」

——もしもお前達を失う事になれば、私は耐えられぬ。

そう続いたモモンガの言葉に円形劇場に再び涙の雨が降る。

見つめるクーゲルシュライバーは本格的にシモベ達の涙腺と体内の水分量が心配になった。

自分がモモンガのキャンペに付け足した台詞ではあったが、よもやこれほどの効果を発揮するとは思っても居なかった。

これ一個で行き渡るだろうか？

こっそり取り出した無限の水差しを背中に隠しながら首を捻った。

「その事を念頭において、聞いて欲しい。これからのナザリックの目的だ」

そう前置きしてモモンガは全身からオーラを立ち昇らせながら
猛々しい覇気もそのままに宣言した。

それは勅令であり、ナザリックの行く末を決めるものだった。

「我らアインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説とせよ。」

英雄が数多く居るならその全てを塗りつぶせ。アインズ・ウール・
ゴウンこそが真の大英雄だと。生きとし生きるもの全てに知らしめ
てやれ！より強きものがいるのなら、力以外の手段で。数多くの部下
を持つ魔法使いが居るなら、別の手段で。今はまだその前の準備段階
に過ぎないが、来るべきときのために動け。お前達が至高の存在と呼
ぶ我ら41人の栄光を！偉大さを！この世界に知らしめるために！」
千両役者だな。

クーゲルシュライバーは万雷の喝采を受けるモモンガを見つめな
がら満足げに頷いた。

モモンガの語った内容はクーゲルシュライバーとの話し合いの結
果決められたものだった。

仮想世界が現実となり、人外の肉体と力を得たとしてもモモンガと
クーゲルシュライバーは大きな野望に目覚めるといふ事は無かった。
持ち合わせていた望みは余人が聞けばあまりにもちっぽけなもの
に過ぎない。

モモンガの望みは自分とクーゲルシュライバーの安全、次にナザ
リック地下大墳墓の安全。そして最後にして最も哀切な、しかし優先
度の低い望みとしてギルドメンバーとの再会があった。

クーゲルシュライバーの望みもモモンガと似たようなものだ。

安全の確保、モモンガの望みを叶えること、あとはこの世界で出
会った気に入った人間——ネムやエンリ——を助けてやりたいとい
う願いだ。

そして、あと一つ。

クーゲルシュライバーが抱える最も深刻な望みはこの世界に居る
限り達成されているも同然なので、自然とモモンガの望みが前面に出
されることになったのだ。

そこでクーゲルシュライバーが不安を覚えたのが森の中でのアル

ベドの言動だった。

折角助けたネムとエンリに対して下等生物となじり、虫けらを殺すかのような気軽さで武器を構えるアルベドを見て、NPC達の頂点に立つものがこれではいけないと強く思ったのだ。

モモンガはなにも暴力でもってアインズ・ウール・ゴウンの名を轟かせようと思っっているわけではない。

暴力もまた一つの手段ではあるが、無遠慮に振るわれる力は敵を産みやすいというのは間違いない。

なるべく穏便に事を成すに越したことはないのだ。

ではそれを成すにはまず何をすべきか？

そう考えたとき、真つ先にクーゲルシュライバーの脳裏に浮かんだのはシモベの人間蔑視を払拭することだった。

ナザリックのシモベ達の性質を考慮し、もつとも効果が高そうな説得を思案した結果があの上映会だったのである。

幸いにしてシモベ達は動画に映ったユグドラシルの人間プレイヤー達の姿を見て、人間も侮れない存在だと思ってくれたようである。

これならむやみやたらに諍いの種を撒き散らすような行いは慎むだろう。

そう思っつてクーゲルシュライバーは安堵の息をついた。

(しかしどうやってウチのギルドの事を宣伝して回ろうかね。半自動的に広がっていく形にしたいけど……童話でも作ってばら撒くか？いや、それだと広がりが鈍いか。本っつていうアイディアはありだと思っただけ)

本。不変の伝説。英雄。生きとし生けるもの。栄光。偉大。

短い時間ではあるが思考を遊ばせるクーゲルシュライバーの脳裏に、突如ろくでもないことが電流の如く閃いた。

——聖書。宗教広めればよくね？

22話

「世界征服かあ」

円形劇場の床を黙々と拭き掃除していくドラゴンキンを眺めながら、アウラは熱っぽく呟いた。

周りには階層守護者の5人。セバスは既にモモンガとクーゲルシュライバーを追って第九階層へ向かっておりこの場にはいない。

集合していたシモベ達も今はアルベドの指示のもと自分達の持ち場へと戻っていた。

シモベ達を熱狂させた上映会が終わり絶対上位者二人がこの場を離れた後、アルベドはモモンガとクーゲルシュライバーの真意、すなわち世界征服の野望について明らかにした。

「正当なる支配者である至高の御方々の下に、この世界の全てを」そう語られた言葉はあまりにも当然の事として浸透していった。

全世界を支える世界樹ユグドラシルを滅亡の運命から救ったのは他ならぬ至高の41人であり、至高の御方々なくして世界は存在しないと言つてよい。

世界とそこに在る全てのものは至高の御方々によつて今も存在することを許されているのだ。

ナザリツクが転移したこの世界は至高の御方々にとつても未知の世界ではあるが、世界である以上は世界樹ユグドラシルの一部である事は間違いない。もしかすると新たに芽吹いた葉の一つかもしれない。

そうである以上、本来ならば世界に存在する全てが自ら至高の41人に頭をたれ全てを差し出すのが道理なのだが、真実を知った今では腹立たしいことこの上のない事に多くの愚昧はその道理を知らないのである。

それは身命を賭けて戦い抜いた至高の御方々に対し、許されざる無礼でありあまりにも罪深いことだ。

その無礼の罪を思い知らせ、世界を本来あるべき姿に戻す。

至高の41人に仕えるものとして、真実を知るものとしてそれは絶

対に成し遂げなければならぬ義務だった。

「もうワクワクしちゃうよね！当たり前前の事だけどさあ、あたしもう全身全霊をかけてがんばっちゃうよ！」

「う、うん。ほ、僕もがんばります。ふんこつさいしん、です」

目を輝かせ鼻息荒く意気込むアウラにマーレも続く。

見るからに活気に溢れる二人にデミウルゴスが微笑みながら口を挟んだ。

「大変結構。しかし二人とも、モモンガ様とクーゲルシユライバー様がああの大なる記録をご開帳なさった意味を忘れてはいけないよ？」

「わかってるってば。無茶なことはしないし、油断もしないよ。モモンガ様を悲しませるようなことは絶対しない」

「ふーん？しつかり分かってるようでありんすねチビスケ。ま、頭に血が上りすぎてその事を忘れないように気をつけなんし」

「はああああ？それ、あんたが気をつける事じゃないの？」

「まあ、気をつけるべきはそれだけではないのだがね？」

俄かに灼熱化しそうになるアウラとシャルティアだったが、デミウルゴスが肩をすくめて言った言葉になんのことだと首を傾げて制止する。

「ドウイウコトダデミウルゴス？」

「ふふふ……いや、それにしても先ほどの上映会は素晴らしいものだった。このような機会は滅多にあるわけじゃない。此処は一つ感想でも言い合ってみないかい？」

質問に答えず話題を変えるデミウルゴスに、静かに微笑むアルベドを除く守護者達が首を傾げるが、先ほどの素晴らしい体験について語りたいたいという気持ちで勝ったようで次々に口を開き熱っぽく語り始めた。

実のところ皆、モモンガ達が退席してからずっと語りたくてウズウズしていたのである。

「なんと言ってもああの強さでありんす！」

「ウム。至高ノ御方々全員ガ稀代ノ戦巧者。当然ノ事ダガ我ガ身ノ届キウル領域デハナイト思イ知ツタ」

「至高の御方々個人の強さもそうだけども、あたしは集団戦の上手さが特に優れてると思うな！」

「ぼ、僕もそう思います。きつと、すごく仲良しじゃなければ出来ない事だと、お、思います」

一度話し始めればキリがなく、ありとあらゆる場面について言及しその全てを褒め称えていく。

ペロロンチーノとぶくぶく茶釜の麗しい姉弟愛。

クーゲルシュライバーとヘロヘロの年季を感じさせる連携。

モモンガが見せた圧倒的なまでのカリスマ。

たち・みーとウルベルトが見せた不器用な信頼。

世界の壁すら越える至高の41人を繋ぐ無上の絆。

そのどれもが思い出すだけで涙腺が熱くなり、鼻の奥がツーンと痛くなるようなものばかりだ。

話は加熱の一途を辿り、語る者の口をますます滑らかにしていく。

そんな中で愛する者達の活躍を思い出し頬を染め淑女らしかぬ表情を浮かべていたアルベドが俄かに正気を取り戻し冷静な口調で言った。

「全くいくら褒め称えても足りないけど、私はまずクーゲルシュライバー様こそを称賛すべきだと思うの」

「そうでありんす！あねえなに激戦の最中、しっかり記録を撮っていないさるとはいつそ驚きんした！」

「ホントどうやって撮影なさったんだろう？クーゲルシュライバー様ご本人も映っていらっしやっしたし」

「ナニカ特別ナアイテムヲ御使用ナサツタノデハナイカ？」

「いやいや、皆の言う事ももつともだが、アルベドが言っているのはそういうことじゃないよ」

親愛の情を感じさせるような笑みを含んだ言葉を発したデミウルゴスに視線が集まる。

視線の先のデミウルゴスは微笑みを崩さないまま肩をすくめ首を傾げた。

理知的なデミウルゴスがやるには妙にチャーミングな仕草だった

がとてもよく似合っていた。

デミウルゴスが作った一瞬の沈黙にアルベドがするりとその美声を差し込んだ。

「ええデミウルゴスの言うとおり。私が言いたいのにはクーゲルシュライバー様の存在の古さよ。皆見たでしょう？あの映像にはユグドラシルが誕生する前の出来事までもが克明に記録されていたのを」

既に気付いていた二人を除く四人があっという声を上げる。

アルベドの言うとおりあの映像にはユグドラシルが生まれる前、つまり世界誕生前の途方もない過去の事象が記録されていた。

クーゲルシュライバーは邪神である。それも旧支配者と呼ばれる存在であり、その身が重ねてきた年月はまさに天文学的な数字になる事を守護者達は知っていた。

しかし、まさか世界誕生よりも古くから存在していたとは思ってもみなかったのだ。

もしかするとクーゲルシュライバーはこの世で最も古い存在なのではないだろうか？

その事に考え及ぶと、言いようのない尊敬の念が心の奥から湧き出でる。

それは人間が1000年の時を生きる巨木や太古から鎮座する巨石を見た時のような感情の動きだった。

「なんていうかさ……ねえ？」

「うん……なんといわすか」

「至高の御方ってほんと偉大」

「超偉大でありんす」

なかば呆れたように呟くアウラとシャルティアにコキュートスとマーレも首を縦に振って同意する。

昔からずっと偉大だ偉大だと思っていたが、その偉大さは全く底が見えない。

自分達の想像もつかない偉業が、あと幾つあるというのだろうか？
きつと、無数にあるのだろうか。

「そう。至高の御方々こそが最も偉大な存在なのは明白であり、万物

は至高の御方々を崇拜してしかるべきなのよ」

真顔でさも当然の事のように言うアルベド。

その麗しい唇が突然憎悪に歪む。

「だというのに、過去ナザリックを襲撃した1500人からなる愚か者共は一体なんなのかしら？世界を救った大英雄たる至高の御方々に矛を向けるなんて気が狂っているとしたか思えないわ」

煮えたぎる憎悪を隠そうともしないアルベド。

そんな彼女に恐れを抱くものなどこの場にはいない。

誰もがアルベドと同等の怒りと憎悪をその胸の中で煮えたぎらせていた。

思い出すのも忌々しい。

それは攻め込んできた1500人の愚者に対するものであり、守護者としての責務を果たしきれず至高の41人が出陣する状況にまで発展させてしまった自らに対する激情だった。

此度の上映会によって至高の41人の偉大さを再確認した事もあり、その激憤の程は過去に例を見ないほどの荒れようを呈している。

遠く離れて掃除をするドラゴンキン達がその濃密な殺気に当てられ屈強な体躯を小さく丸めて床に倒れ伏した。

「……皆、聞きなさい。デミウルゴスが匂わせた通り、此度の上映会にはモモンガ様が直接おっしゃった事とはまた別の我々に伝えたかった真意が隠されているわ」

守護者統括としてのアルベドの言葉に階層守護者達は荒れ狂う激情をおさめ背筋を伸ばした。

「結論から言えばモモンガ様とクーゲルシュライバー様は味方を欲しているのよ。それも、共に戦える強力な味方を」

つい先ほど自らの無能に身を震わせていた階層守護者各員の心にアルベドの言葉が突き刺さった。

味方は居る。自分たちがそうだ。

しかしアルベドの言葉が正しいのならばそれはつまり……。

「御二人は我ら守護者がこのままでは戦力にならないとお考えなのよ」

戦槌で頭を殴りつけられたかのような衝撃が階層守護者達に走った。

あまりのショックにアウラやシャルティアは顔を青くし、コキュートスが大顎をきつく噛み締め、マーレは左手を握り締め今にも泣き出しそうだった。

アルベドと同じ考えに到達していたデミウルゴスではあつたが改めて言葉にされると事の重大さに動揺する心を隠しきれなかった。

至高の御方々の役に立つことが出来ない。

それはシモベにとつては存在する意味がないのと同義だ。

「全く滑稽。たかが人間などと侮る資格なんて一度敗れている私達には存在しないのに、心のどこかで下等生物と見下していた。その慢心を御二人は見抜いていたの。このままでは使い物にならない、とね」
自嘲するアルベドの羽は小さく震えている。

血の気の引いた唇の色が、その震えがいかなる感情によつてもたらされたものかを雄弁に語っていた。

「……御二人は我々に学べと仰ったわ。あの記録で学ぶべき最たる事。それは……」

言いよどむアルベドの苦悩を察したのはデミウルゴスだけだった。

アルベドの唇がきつく噛み締められる。震える手を握り締め、ついに彼女はその言葉を口にした。

「それは、至高の御方でも勝てない相手が居るといふ事」

瞬間、場の空気が凍りついた。

比喩ではなく実際に温度が急激に低下したのである。

「アルベド！ソレハ不敬だ!!」

氷河の支配者の怒気が冷気として噴き出す。

ダメージを伴うほどの低温だった。人間であればひとたまりもないだろう。

しかしアルベドはその冷気を浴びてなおそれすらも凌駕する極低温の声で言葉を続ける。

「皆も見ただでしょうか？ 至高の41人全員で立ち向かって辛勝した、かのワールドエネミーを。……私はなにもアインズ・ウール・ゴウン

に勝てない相手が居ると言っているわけではないわ。でも考えてみなさい。あのレベルの敵を相手にモモンガ様とクーゲルシユライバー様のお二人で勝利を得ることはできるのかしら?」

どこまでも冷静なアルベドの口調に誰もが苦しそうな表情で沈黙した。

確かに、アルベドの言う通りだ。

デミウルゴスを除き真っ先に納得したのは最も怒りを顕にしたコキュートスだった。

戦いに生きる武人であるからこそ彼はその考えを否定することは出来なかった。

「恐れ多いけれど、きつと難しいでしょう。お二人もそうお考えのはずよ。だからこそあの記録を見せた。世界を知らず至高の御方は無敵であると信じる私達の蒙を啓くために」

そうは言うものの、アルベド自身凝り固まった至高の御方無敵論を完全に排する事は出来ていなかった。

なぜならばそれはナザリックにおいて常識であり不動不変の真理であったからだ。

それを多大な苦痛を伴いながら理屈で打破した上でアルベドは語っていた。

なぜならばその考えが導く先にこそ真の栄光が存在するのだから。アルベドは周りを見渡した。多くの者が暗い顔をしている。

デミウルゴスと目が合った。彼だけはアルベドを気遣うような微妙な表情をその顔に貼り付けている。

まったく。

アルベドはため息をついて、そして小さく笑った。

「しゃんとしなさい。これはつまり、お二人からの救難信号なのよ?」
救難信号?」

至高の御方々が、我々に助けを求めている?」

俯いていた暗い顔がどういことだと生氣を取り戻しアルベドを見つめた。

「御二人はワールドエネミー級の敵を警戒されている。現状遭遇すれ

ば勝ち目の薄い相手を警戒するのは当然のことよね？そして対策をたてるのも」

モモンガ様とクーゲルシュライバー様の二人で勝てないなら、戦力を増やして戦えばいいのよ。

そういうアルベドに合点がいったとばかりに声があがる。

「デハ御二人ハ我ヲ守護者ヲ戦イニ連レテ行ツテ下サルオツモリナノカ！」

世界滅亡の危機に際してナザリックでなにも知らずに過ごしていた無念が、一気に浄化されるかのようにだった。

あの偉大なる主人達と共に戦える。役に立つことが出来る。

その考えがもたらした幸福感はこの世のものとは思えぬ悦楽であり、如何なる薬物でもつても対抗しえないと確信できるものだった。

「はあんっ！そんなの行く行く行く行く！行っっちゃうでありんす！絶対行くでありんすう！」

「ちよ、盛るなバカ！なんか垂れてるし!？」

「ギャンー！」

異常に盛り上がった胸部を自らの腕で締め上げ身悶えするシャルティアの頭に鉄拳を落とした。

遠くからドラゴンキンが掃除をする箇所が増えたことをこっさり確認している。

殴られたシャルティアが怒りをあらわにしてアウラに食って掛かる。

このまま何時もの喧嘩が始まるのかと思われたが、それはアルベドによって遮られた。

「でもこのままでは連れて行って頂くことはないでしょうね」

「えっ!?なんででありんすか!?!」

「私達が弱いからよ」

弱い。弱い？

強者として作り出された自分たち階層守護者が弱い。

それは認めがたいことだが、比較対象が至高の御方々と思えば納得するしかない。

「個人の持つ戦闘力の事ではないわ。所詮脆弱なる身の私達では至高の御方の持つ御力に及ぶことなど叶わない。その事はお二人も重々承知。だから私達に求められているのは群の強さ……つまり連携力よ」

上映会前に行われたクーゲルシュライバーのスピーチが思い出される。

シモベとの関係を深めようとする言葉の真意が今こそ明らかになったような気がした。

あの時クーゲルシュライバーは至高の41人を繋ぐ絆と同じように、シモベ達との絆は至高のものだと言った。

今をもつても恐縮の極みではあるが、その言葉はシモベ達を共に戦うに値すると認めてもらえた証なのではないか？

されど口惜しいことに、未だこの身は主人が求める強さを得ていない。

今すぐに至高の41人が見せた至上の連携を再現できるなどと増長できる者など誰一人としていない。

しかし主から役に立つことを期待されているのだ。
これに応えずして何がシモベか！なにが守護者か！

事ここに及んで階層守護者達の心は一つにまとまり同じ願望を抱く。

それはすなわち。
——強くなりたい！

圧倒的強者として作り出され、その事を誇り、あるいは慢心していたナザリツクの最高戦力たる階層守護者達。

脆弱なる人間とは種族としての力が圧倒的に違う存在が、まるで人間のように強さを求め始めた。

仮想的は世界を滅ぼしうる存在、ワールドエネミー。
成長の余地無き強さを持った者が更なる強さを求めたとき、それは

弱き人間が創意工夫で紡ぎあげたものに酷似していくのだった。



エントマが手旗を振る。

右、左、右、右、両方、左、右、左……。

パタパタと両手に持った紅白の旗をどれだけ振った事だろうか。

しばらくしてこの豪華な部屋の主であるクーゲルシュライバーの
声がかかった。

「テレパシーはしっかり伝わっているようだな」

自室のリビングルームに張った蜘蛛の巣の上でクーゲルシュライ
バーは満足げだった。

普段とは違い、八つの眼がある頭部を支える首には恐ろしく醜悪な
ネックレスが下げられている。

数珠繋ぎにされた頭蓋骨を抜かれた人間の干し首は皆例外なく苦
痛の表情を浮かべており、恐ろしいことに苦悶するようにその表情を
変化させていた。

そんなおぞましい装飾品をクーゲルシュライバーはいとおしげに
撫でる。

これは《エンジェルハイロウ》と命名されたプレイヤー製作のマ
ジックアイテムであり、クーゲルシュライバーの思い出の品だ。

効果としては装備した者に極限まで範囲拡大されたテレパシー能
力を与えるというもの。

フレージャーとして付与されたテキストによると、このネックレスは
サイオニックと呼ばれる超能力者の職業をマスターした者達の頭部
を材料にしているらしい。

見た目的にも設定的にもおぞましい一品ではあるがクーゲルシュ
ライバーにとっては邪神ロールを愛する同志からのプレゼントであ
りお気に入りの装備だった。

ではなぜそんな物を引っ張り出し、動作実験をしているかといえ
ば。

（よし、これでネムの夢枕に立てるぞ。あんな事があったんだきつと
悪夢で魘されるに違いない。ネムと同じように両親を失ったばかり
のエンリに負担をかけるのは望ましくないし、俺がフォローしてあげ

なきやな)

モモンガが聞いたら即座にやめてあげて!と叫びそうな理由だった。

一応クーゲルシュライバーとしても自身が恐ろしい姿をしているという自覚に風呂場にて目覚めている。

送りつける思念に姿が映りこまないようにするなどの配慮はするつもりだった。

しかし送りつけられる思念が心は人間と言えど邪神のものであり、テレパシーに使用するのがどう鼻肩目に見ても禍々しく呪われたアイテムだという事に考えが及んでいなかった。

実験対象であるエントマは異形種であり、カルマがマイナスに傾いている存在だという事を失念していたのが災いしていた。

「ご苦労だったなエントマよ。楽にしているぞ」
「畏まりました」

エンジェルハイロウをアイテムボックスに戻すとクーゲルシュライバーはエントマを労った。

すっかりクーゲルシュライバーの部屋に居るのが馴染んだエントマである。

彼女はクーゲルシュライバーが何も言わずともしずしずと主人の下へと近づきその肢の一本に口を近づけていく。

「さて、今夜は毛づくろいはいい。風呂に入ったことだしな」
「は、失礼致しました」

「いや、さて。話がある」

今宵の奉仕は要らないという主人に内心寂しさを感じながら待機場所まで下ろうとするエントマにクーゲルシュライバーが待ったをかけた。

話とはなんだろうか？

また何か凄い事を言い渡されるのかもしれない。

部屋の隅で待機しているこれまた部屋に馴染んでいるシクススに一瞬だけ意識をむけると、エントマは胸をときめかせながら主人であるクーゲルシュライバーを仰ぎみた。

「お前の普段の働きに対して褒美を取らず。望むものを言ってみるがいい。可能なことであるならば叶えてやろう」

「そ、そんな！もつたいないお言葉です！私ごときに褒美など、あまりにも過分でございます！」

「そう言うな。お前の働き無くして私はあれほど膨大な力を得る事はできない。これは正当な対価だぞ」

突然の出来事に泡を食って跪くエントマにクーゲルシュライバーは苦笑した。

力の源である神話パワーを生産する一工程を担うエントマになにか褒美をあげることが過分であるとはクーゲルシュライバーには思えなかった。

彼女の働きが無くては先の陽光聖典戦に際しレン・スパイダーの大量を召喚することは出来なかっただろう。

「いいから言ってみるがいい。謙虚も過ぎれば傲慢になるともいふぞ？お前は私の判断にケチをつけるのか？」

「そのようなことは決して……！」

ひよつとしてこれは脅迫かパワハラに近くはあるまいか？

口にして初めて気付く言葉の威力に焦りだすも、時すでに遅し。

エントマは可哀想なほどに体を硬直させて頭を下げている。

やってしまった、優しくしてあげないと。

クーゲルシュライバーは巣から降りるとエントマの前に立ち触肢でその背中を優しく叩いた。

エントマの背中がピクリと跳ねた。

「なら言ってみよ。言うだけなら、なんでもいいのだぞ？」

トントンと安心させるように背中をさする感覚でクーゲルシュライバーはエントマの背を叩きながら出来うる限りの優しい声でエントマにささやいた。

プルプルと震えるだけで何も言わないエントマの様子に首を傾げつつ、クーゲルシュライバーはシクススがいるから言い出しにくいのかなと見当違いの考えで彼女に退室を命じていた。

エントマはそんな周囲の動きに全く気付かず思考の海に沈む。

(あ、ああ、ううう……！そんな、欲しいものだなんてえ)

活きのいい人間を何人か頂きたいですう。

昔の自分だったら即座にそう答えただろう。事実ついさつきまではその言葉が喉元まで出てきていたのだ。

しかし奉仕する悦びを教えてくれた敬愛すべき主人が唐突に、なんの前触れも無く己の背をタッピングし始めたことによりその言葉はどこかへと消え去ってしまった。

エントマの脳裏にかつての不敬が蘇える。

主人の優しさに触れ、愚かにもメイドとしての身分を弁えずに寵愛を求めてしまった暗澹たる記憶だ。

またあの失態を繰り返すというのか？学習するのだエントマ・ヴァシリツサ・ゼータ！

そもそも至高の御方が自分が如き矮小な者に寵愛を与えることなどありえないのだ。

世界が生まれるはるか昔から生き続け、全世界を滅亡の危機から救った偉大なる存在相手に、ただの蜘蛛人である自分がそんな事を望んではいけない。

玩具として戯れに弄ばれる栄誉を受けておいてそれ以上なにを求めるといふのだ？

エントマは決心した。

活きのいい人間を、少し欲張っておねだりしよう。

ダイエツト中ではあるが、この胸の中のしこりを飲み下しスッキリ解消させるには多少の暴飲暴食が丁度いいだろう。

そう思い意を決したエントマが口を開いたとき、クーゲルシュライバーが口を近づけて言った。

「自分に素直になれ……。いいのだ、他でもないこの私が許す。エントマよ、お前の欲するものを欲するがよい」

中々答えを返さないエントマの背を押す。

ただそれだけの意図を持って放たれたクーゲルシュライバーの言葉はエントマの決心を容易く打ち砕いた。

内心を見透かされている気がした。

この方は私の浅ましい欲望に気付いていらっしやる。

そう思ってしまうとエントマはもう抑えが利かなかった。

気付いた上でこのような仕打ち、もしかすると……もしかするかも？

震えながら顔を上げたエントマの声は、これまた酷く震えていた。

「わ、わたしはあ……」

「うん」

「クーゲルシュライバー様のお……」

「うんうん」

「御子を授かりたいですう……」

「うん……うんんん!？」

相槌を打って聞いていたクーゲルシュライバーが唸り声のような低い驚愕の悲鳴をあげた。

エントマの小さな体が跳ね上がりまたもや頭を床につくほどに下げた。その頭部から生える擬毛が力なく垂れ下がっている。

まるで瀕死の虫のようだ、などと頭の片隅で考えながらクーゲルシュライバーはエントマの真意を必死で探っていた。

(えええええええ？御子って、子供だよな？えっ、なに？これってモテ期？エントマは子作りをご希望してるの？)

言葉を鵜呑みにすればそうだろう。

しかし、それではあんまりにも……。

クーゲルシュライバーはエントマをじつと見つめた。

小柄な体である。幼い容貌である。

人間なら中学生ぐらいだろうか？甘ったるい声と口調も相まってさらに年若く思える時もあるのが眼前に額づくメイドである。

クーゲルシュライバーは己の体を見回した。

巨大な肉体だ。紛れもなく化け物のそれである。

人間よりも二回り以上巨大なこの肉体は、ただ立っているだけでもエントマの身長に倍する威容を誇る。

この肉体でエントマと事に及ぼうとすれば、その光景は人間に例え

ると成人男性が小学生児童を襲うが如き様相を呈するだろう。

犯罪とか以前に性交が成り立つとは到底思えない。

無理に敢行すればエントマがR-18Gな事になりかねない。それだけなら回復ポリシーンを使えばいいのかもしれないが、下手すれば即死もありえる。

だからたとえ本当にベッドへの誘いだとしても、とても実行する気にはなれなかった。

そしてなによりも、蜘蛛とはいえ女性とそういう行為に及ぶと考えただけで心が引き裂かれるほどの苦痛があった。

いけない。思い出してはいけない。

折角もう二度と手の届かない遠い世界へ来たというのに、これでは苦しみから解放されるなんて夢のまた夢ではないか。

クーゲルシユライバーはかぶりを振った。

(無理無理無理無理かたつむり！どー考えても物理的に無理！あと政治的にも無理！それはエントマも分かっているはず……！じゃあなんだ？さっきの発言はどういう事なんだ？)

事實はどうあれ、クーゲルシユライバーにとってエントマは謙虚で奥ゆかしい乙女である。

そんな彼女がこんな大胆な事を言うとは考えにくいし、そもそもメイドたらんとする者が後継者問題に発展しそうな事を言い出すのもおかしい話だ。

支配者の後継者を産むことで強力な地位と権力を得る……なんていう大河ドラマめいた野望をエントマが抱いているとも考えにくい。

まだ数日の付き合いでしかないが、エントマはそんな事を考えるような女ではない事をクーゲルシユライバーは確信していた。

では、一体どういうことなのか？

クーゲルシユライバーは沈黙が長く続いている事に気付くと、なにか言わねばならんと突然口を突いて出てきた言葉をエントマに投げた。

「ほ、ほほう。お前がそんな願いを口にするとはな。あの動画の影響かな？」

クーゲルシュライバーはとりあえずなんでエントマがそういう願いを言い出したのかを聞きたかった。

エントマは顔を伏したまま応えた。

「……はい。八面六臂の大活躍をなさるクーゲルシュライバー様のお姿を目の当たりにして、愚かにも……」

八面六臂の大活躍。

その言葉を聞いてエントマの求める願いが性交ではないはずと信じたかったクーゲルシュライバーは思いついた都合のいい答えに飛びついた。

（あーそういうことか！エントマの言ってる御子って、ウルベルトさんに付けたあれか！）

クーゲルシュライバーが思い浮かべるのはあの動画内で唯一使った産卵系のスキルだった。

その名を《ウォール・オブ・ヴァーミン》という。

設置型の防御術であり、設置された対象にダメージを発生させうる攻撃が迫った時に発動し、一度限りではあるが完全にその攻撃を無効化する事ができる優秀なスキルだ。

一度設置すれば発動するまで時間制限などはなくずっと待機状態のまま残るので大変使い勝手がいいのだ。

エントマはそれを欲しがっているのだ。

そう考えれば納得がいく。

（戦闘メイドだもんな。戦闘に役立つものを欲しがるのは当然じゃないか）

それはクーゲルシュライバーにとって突然エントマがベッドに誘ってきたと考えるより圧倒的に自然な考えだった。

実際のところエントマにしてみれば突然の申し出ではないのだが、彼女が自分の心を見透していると信じる主人クーゲルシュライバーにはこれっぽっちも身に覚えがない事だった。

二人の心は一度たりとも通じ合ったことなどないのである。

「……も、もうしわけ……ありません。メ、メイド、メイド如きが、シモベ如きが、なにを大それた事を……この命を以て謝罪を……」

芳しくないクーゲルシュライバーの態度にエントマは死んでしまいたい心持ちだった。

円形劇場で聞いたモモンガの言葉を忘れたわけではない。

しかし心の奥から唸りを上げてこみ上げてくる羞恥と罪悪感に抗いがたく、今すぐこの場から消えて自分を殺してしまいたいという欲望を抑えきれなかった。

エントマが抱いた淡い期待は無残にも打ち砕かれ、後に残るのは絶望だけだ。

(もうやだあ……。わかってたはずなのに。なのに。なのに！死にたい……。死にたい死にたい死んじやいたいよお……)

エントマが激しく死を望んだその時だ。

無気力に飲まれ力なく垂れ下がる彼女の擬毛がなにかを捉えた。顔を上げたりはしない。今は主人の姿を見ることがすら辛いから。

しかし、擬毛が感じるこの空気の振動はなんだろうか？この湿気を帯びた空気は？

「エントマよ。面をあげるがいい」

クーゲルシュライバーのその声にエントマが恐る恐る顔を上げ身を起こすと、その和服で包まれた胸元に小さな白い包みが押し付けられた。

エントマが恐る恐るその包みを手にとってみれば、その肌触りは極上のシルクのように滑らかであり、暖かく、微かな湿り気を帯びていた。

あつけにとられ沈黙するエントマの眼前でクーゲルシュライバーが苦笑した。

「お前が望んだものを授けよう。すこし形は違うが、まあ許せ」

エントマは悲鳴を上げそうになる喉を制御するのに大変な労力を費やした。

今自分の手の中にあるもの。

それは紛れもなく、自身が望んだクーゲルシュライバーの御子……。つまりは卵だった。

確かに自分が望んでいたものとは違う。

クーゲルシュライバーとの交接の果てに自分が産んだ卵ではない。しかしそれがなんだというのだろうか？

そもそもそれはメイド如きが望んではいけない願いなのだ。

ナザリツクの支配者たるクーゲルシュライバーが、みだりにその胤を下賜する事を良しとしないのは当然の事。

本来なら即座に却下される、もしくは無礼打ちにされてしかるべき自身の願いを、敬愛すべきこの主は形を変えて叶えてくれたのだ。

その事になんの不満があるろうか！

「ほ、本当に……よろしいのですか？」

「よろしいも何も既に作ってしまったのだから貰ってもらわねば困るぞ？」

「……か、感謝致します偉大なるご主人様！私の全身全霊をかけて御子を守り育てる事を誓います！」

「んん？それじゃ本末転倒……いや、まあ別にいいか。ものを大事にする事に越したことはあるまい」

本末転倒とはなんの事かと思いましたが、クーゲルシュライバーが「まあ別にいいか」と言ったのだから気にする必要もない。

エントマは主人から授かった至宝をいとおしげに撫でるとそつと和服の懐へと仕舞い込んだ。

——私が授かった、クーゲルシュライバー様の御子。……赤ちゃん。赤ちゃんだ！クーゲルシュライバー様から授かった私の可愛い赤ちゃん！

溢れ出す母性はいつそ狂氣的ともいえる膨大なものであり、瞬く間にエントマの心を薔薇色に染め上げていった。



(よかった。満足してくれたみたいだ。動画のものと比べてずいぶんと小さいのが出来ちゃったから不安だったけど、なんとかなったな) 胸元に手をあてるエントマの擬毛がリズムカルに動くのを見ながらクーゲルシュライバーは胸を撫で下ろしていた。

クーゲルシュライバーはエントマの願いを正確に見抜けた事に安堵していた。

当初の考えの通りに動いていたら、今頃羞恥で死にたくなっていた事だろう。

自身の冷静な判断力と深い観察眼にクーゲルシュライバーは喝采を送りたい気分だった。

クーゲルシュライバーは危機を華麗に回避した満足感と共に嬉しそうに体を揺するエントマを眺める。

プレゼントが嬉しすぎたのか、折角の防御手段なのに大事にしまいかもうとしているのが微笑ましい。

これはあれだろうか？

アイドルの握手会にて熱狂的なファンが握られた手を見つめながら「私もうこの手を洗わない！」と宣言するようなものだろうか？

一々大げさなんだよなあ。

クーゲルシュライバーはそう思いながらも他人の喜びを我が事のように喜んでいた。

身近な人を喜ばせる事ができるのは大きな幸せである。

心底そう思うクーゲルシュライバーはこの後に予定しているサブライズを思い密かにほくそ笑んでいた。

「さてエントマよ。神話パワー抽出の功に対する褒美は終わったが、実は褒美……とっていいのかわからんが、もう一つお前にやる事があるのだ」

「えっ！そ、そのような……ただでさえ身に余るほどの褒美を頂いているというのに……」

「よいよい。私がよいと言っているのだからよいのだ。……エントマよ。私はモモンガと風呂に入って改めてお前の価値に気付いたのだ。常日頃私の体を清潔に保ってくれるお前があればほど在りがたく思えたのはナザリックに帰還してから初めてだった」

「……恐れながらクーゲルシュライバー様。私にはそのお言葉だけで十分でございます」

「お前がよくとも私が納得しない。エントマよ。今宵は私がお前の毛

づくろいをしてやろうと思うのだよ」

何時もお疲れ様！肩叩きしてあげる！

その程度の気持ちで放たれたクーゲルシュライバーの言葉に、エントマは残像が残る速度で頭を左右に振ってうろたえた。

クーゲルシュライバーにとって他人、いや他蜘蛛の体の毛づくろいは垢すりやマツサージのようなものであるが、エントマにとってはそうではない。

奉仕という形で自分がクーゲルシュライバーにする事にはすっかり慣れてしまったエントマだったが、自分がされるとこの行為が孕む宇宙の変態性が様々な角度から彼女の羞恥心を刺激するのだ。

「そ、そそそんな事をクーゲルシュライバー様にしていたたくわけには参りません！」

そんなエントマの反応はクーゲルシュライバーにとって既に予想済みである。

こういう部下の謙虚に付き合っている話ですすまない。

クーゲルシュライバーは必死に辞退するエントマの心など知ったことかとはかりにその細い腰を触肢で掴んだ。

「ええいジタバタするなー！」

「はひい!？」

エントマは腰を掴む触肢により床から抱き上げられる。

体格差ゆえにエントマの手足は垂れ下がり宙をブラブラと揺れうごく。

クーゲルシュライバーは小さなエントマの背中を見下ろす。

どう見ても人間の少女の背中だった。

それがクーゲルシュライバーに残る人間の感性を刺激し羞恥と罪悪感を覚えさせる。

しかしその人間的な心の動きをクーゲルシュライバーは「蜘蛛の常識」という彼の中だけに存在する間違った知識で封印した。

（人間の姿をしているからヘンな気分になるだけだ。彼女は蜘蛛なんだ。それにエントマは何時も平気な顔して俺の全身を毛づくろいしてくれるじゃないか。ここで変に恥ずかしがるのは逆にみつともな

いぞ)

自分の大きな腹部を丹念に舐め清めてくれるエントマの姿を思い出す。

勇気がどんどん湧いてくるようだった。

そうだ。これは完全無欠に健全な行為なのだ。

クーゲルシュライバーは意を決して……。

エントマのスカートの中に口を突っ込んだ。

「や、やあああああ!?!」

エントマから絹を裂くような悲鳴が上がる。

この恥ずかしがり屋さんめ。

クーゲルシュライバーは奥ゆかしいエントマの悲鳴を聞きながら口をモゴモゴと動かした。

スカートの内部を窺い知ることは出来ないが、口に当たる感触的に人間とは構造が全く異なることがわかる。

口腔内に感じる滑らかさは、もしかするとこれは蜘蛛における腹部にあたる部分を咥えているのかもしれない。

だとしたら丁度いい。

風呂場で知ったことだが、もつとも自分で洗うのが難しいのは腹部なのだ。

ここを重点的に舐め清めてやればエントマもさぞかしスッキリするだろう。

そう思ったクーゲルシュライバーは身悶え空中を彷徨うエントマの両腕を擬腕で掴んで引き寄せ、更なる密着を強いた。

「ふわあああああ!?!あつ!あああああああ!?!」

弓なりにしなるエントマの体。

激しさを増すクーゲルシュライバーの口撃。

巨大なクーゲルシュライバーの口から分泌された唾液が激しい動きによって周囲に撒き散らかされる。

エントマの頭部がその動きに翻弄されガクガクと前後に動き、空中に投げ出された両足がいつそ衰れなほどに揺れ動いた。

エントマは混乱していた。

なぜこんな事になっているのか理解が及ばなかった。

前後不覚に陥るエントマが唯一わかるのは、自身の蜘蛛としての腹部から与えられる刺激のみ。

吸引されるように巨大な口に収まった腹部を、口腔内にゾロリと生えた鋭利な牙が削っている。

時たま節に引っかかる牙の感覚にエントマは背筋を震わせた。

快感はない。あるのは濃密な死の予感だけだ。

蜘蛛の腹部には様々な器官が存在する。

呼吸器である書肺に気管、生殖器に肛門、蜘蛛の命ともいえる出糸突起もある。

そのほか生命維持に必要な各種臓器も内蔵されている。

エントマのそれは通常の蜘蛛のものとは構造が異なるが、それでも重要な部位であることには違いない。

そんな大切な部位が、圧倒的強者の口内に囚われている。

それだけで死を意識するには十分だ。

エントマが喘ぐ。

苦しい。

呼吸することが困難なのである。

蜘蛛の口は特殊な筋肉の動きにより奥へ奥へと吸い込むようにして食物を摂り込む。

その動きがエントマの腹部に存在する穴という穴から内部に存在するありとあらゆる物をバキュームの如く吸い出そうとしていた。

そんなエントマの窮地に気付かないクーゲルシュライバーは、なんかこれ後背立位みたいだよなあ、などと考え独り軽い羞恥を覚えていた。

「あつーあ、あ、あつーク、クーゲル、シュライバアツ……様アつー」

自分の体が徐々に吸い込まれていくこの感覚は、蛇に丸呑みされる小動物が朦朧とした意識の中感じるものに似ているのかもしれない。

とんでもない事をされているという実感がエントマを焦らせていた。

とにかくこの行為をやめていただかなければ。

そう思つて必死の思いで主人の名を呼ぶエントマだったが、激しい動きによつてはだけた着物の懐から零れ落ちる白色にそれ以上言葉を紡ぐことができなくなった。

——私の赤ちゃん！

激しい振動に翻弄される中エントマは唯一自由になる頭部で落下していく卵嚢を追つた。

顎から伸ばされた牙が辛うじて落下する卵嚢を捉えることに成功するが、それによりエントマは言葉を発することが出来なくなつてしまった。

何度も顎を動かしもう落さぬよう卵嚢を咥え込む。

それは我が子を守らんとする母親の尊く美しい母性を感じさせる光景だったが、あいにくクーゲルシュライバーからはそんな様子は窺い知れない。

クーゲルシュライバーはなおも激しくエントマのスカートの中を舐めしやぶり口内でしごき上げていた。

「んー…んんんー！」

くぐもつたエントマの声にクーゲルシュライバーは異常を感じ取つた。

一体どうしたのでらうかとエントマの背中を眺めてみれば、なるほど彼女の頭部が激しく振り回されている。

原因はすぐに知れた。自分の動きが激しすぎるのである。

あれでは首が辛からう。

そう思つたクーゲルシュライバーはほんの一瞬だけエントマの両腕を掴む擬腕の拘束を解除した。

上半身の支えを失つたエントマの体が前へと倒れこんでゆく、その時だ。

広げられた両の擬腕の先から白い液体が迸り出た。

空気に触れた白濁液は瞬く間にその性質を変化させ糸へと変じる。

放たれた12本の糸は不思議な軌道を描いてエントマの首に巻き付いた。

「んんんんんん？」

再びエントマの背が弓なりにしなった。

首を締め上げる糸によって上半身を引き起こされた形だ。

クーゲルシュライバーは両手から伸びる糸を握りこむと、再びエントマの両腕を掴み激しく動き出した。

エントマの首からギシギシと糸が軋む音が発せられる。

(これで首が固定されて楽になっただろう。見た目がちよつと悪いけど、まあ誰も見てないしいいか)

傍から見れば女子児童絞殺レイプの犯行現場なのだが、エントマは苦痛を感じていなかった。

彼女の喉は非常に硬質であり、糸による締め上げはほとんど効果を成さないのだ。

そもそも呼吸器が別の場所にあるのだから首を絞められたとしても窒息したりはしない。

それはクーゲルシュライバーも知ることであり、だからこそ彼はこのような行為をためらいなく行っているのである。

唯一エントマにとっての悪影響があるとすれば喉に仕込んだ口唇虫が圧迫され声が出なくなることだろう。

(あ、すごい……拘束に対する完全耐性もってるのに、縛られちゃった……)

エントマは朦朧とする意識の中でクーゲルシュライバーを称賛した。

徐々に口の奥へと引きずり込まれていく感覚に、もはや恐怖はない。

いや、そもそも恐怖などエントマは感じていなかった。

死への実感も、窒息の苦痛も、偉大なる至高の御方から与えられたものである以上歓喜しながら受け取るべき宝物に他ならないからだ。

意識がどんどん薄れていく。

殺されてしまう。食べられてしまう。

誰に？

……クーゲルシュライバー様に。

エントマがそう思った瞬間、彼女の体を稲妻のように駆け抜ける一

つの感覚があった。

それは性的なものを一切含まない、戦慄とも言える酷く物々しいもの。

だがそれは極限の状況の中で目覚めたエントマの新たなる光であり、生涯忘れえぬ被虐の妙味であった。

エントマの精神が天を目指して高揚していく。

果てなど知らぬとばかりに高まり続ける精神的快楽はやがて太陽の如き苛烈さでもってエントマの全身を焼いた。

「んゆー……んゆー!!」

一際高い声を奏でてエントマは気を失った。

全身が弛緩してゆく中、掛け替えのない命を抱く顎の力だけは不思議な事に抜け落ちる事はなかった。



扉の向こうからかけられるクーゲルシュライバーの声に従ってシクススはリビングルームへと足を踏み入れた。

シクススは部屋の状況を見て一言も声を上げなかった自分を褒めてやりたい気持ちで一杯だった。

「ではシクスス、私はもう寝る。エントマの世話をまかせるぞ」「畏まりました」

果たして今の言葉は震えていなかっただろうか？

シクススは主人であるクーゲルシュライバーが寝室へと消えるのを根気よく待ち、扉が閉まる音を聞いてから恐る恐るリビングルームを見渡した。

あちらこちらにとろみのある粘液が飛び散っている室内には、ソファに寝かされたエントマの姿があった。

その姿を捉えたシクススは頬を即座に赤く染めた。

ソファに横たわるエントマの衣服は乱れており、スカートから伸びる足は透明な粘液によってドロドロになっている。

そしてなによりもシクススの興味を引くのはエントマがその胸に

抱く白い小包だ。

シクススは入室してすぐにクーゲルシュライバーからその小包についての注意を受けていた。

——エントマが抱いてる白い袋は丁寧に扱うように。やはりあまり衝撃を与えてはよくないだろうからな。

「こ、これってもしかすると……もしかしちやうの？」

高鳴る鼓動と際限なく熱くなる頬にシクススはたまらず首元の夕イを緩めた。

熱に浮かされるシクススの視線の先で、エントマがいとおしげに白い小包を抱きなおした。

「わたしの……あかちゃん……」

やっぱりー！？

完全防音を施された部屋の中で、人知れずシクススの絶叫が上がった。

23話

血しぶきがあがる。

たったいま眼前で父が首を切り落とされた。

「エンリー・ネム！逃げッ……！」

母の叫びが途切れた。

背後から胸を一突きされて、もうそれっきり動かない。

「おねがい、にげて」

体に剣を埋め込まれた姉が殴打され原型を残さない程に腫れ上がった血泡まみれの顔で言う。

無残な姉の亡骸は蹴り倒され地面へと力なく倒れこんだ。

次は自分の番だとわかった。

だから走って逃げようとしたのに、もどかしいことに体が羽毛のように軽く足の裏が大地を蹴ることが出来ない。

後ろからは鎧の音が残酷なほど足早に近づいてくる。

逃げなくては。

焦る心そのままに足をバタつかせるもなんの効果もない。

足音はついに背後に迫った。

二つ結びにした髪の毛の一方が無造作に掴まれる。

髪を引っ張られる痛みと共に体が後ろへと倒れていく。

もうダメだ。ここで死んでしまうんだ。

ぼんやりとした不明瞭な意識でネムがそう思った時、場違いなほどに現実的な何か体が通り抜けていった。

ネムには黒い色つきの突風としか表現できない何か吹き荒れ、周囲の景色の何もかもをかき消していく。

世界は瞬く間に削り取られ、やがてネムは真っ暗な空間にたった一人漂っていた。

ぬかるんだ畑の土のようにドロドロとした感覚がネムの全身を覆いつくしている。

ネムの短い人生の中でこれほどまでに粘着質な物体に触れた経験はない。

理解しがたい不快感と不安がネムの肌を泡立たせた。

一昨日までのネムならとつくに泣き喚いていただろう。

しかし今のネムは泣かない。動じない。

理解の及ばない現象に巻き込まれ、それでも平常心を保っているのは何故か？

なぜならば今感じているものよりもっと恐ろしく狂気的でおぞましいモノをすでに体験しているから。

理由に思い当たった時、ネムは全身を包み込む周囲の闇に即視感を覚えた。

そうだ、自分はこの闇から感じる気配を知っている。

「もう大丈夫だネム。怖いものは何処にもない」

突然聞こえてきた声。

それは空間を占める闇自体が言葉を発しているかのようだった。

奇妙に響くその声にネムは驚きと歓喜の滲み出た声で答えた。

「名も無き神様だ！」

「……うあ、あ……うん、そうそう名も無き神様だよー」

その微妙な間はなんだったのだろうか？

一瞬疑問に思ったがネムは気にしない事にした。

今は命の恩人である神様と話をする方が重要なものだから。

「今日は助けてくれてありがとうございました！」

「……いや、昼間お礼言われたからもう十分だから。そんなに気にしなくていいからね？」

言葉の割には神の声は嬉しそうだった。

それがネムには嬉しかった。自分の気持ちを神様が受け取ってくれたような気がしたのだ。

口調が今までとは違ってまるで村の大人達のように穏やかで優しいのもネムを大きく喜ばせた。

「えへへへ」

「なんか思っていたより元気そうだね」

「はい！元気です！」

「そうかー。ネムはえらいなあ」

粘着質な闇がドロリと動き出す。

何か硬質なモノに頭を撫でられる感覚に、ネムは総身を泡立たせた。

頭から浸透してくる名状しがたい何かがある。ネムの胸をきつく締め付ける。

しかしネムには分かっていた。

これは自分を救ってくれた神が手ずから頭を撫でてくれているのだ。

感じる感覚とは裏腹にとても繊細で優しい手つきに、ネムは今はずいぶん親を思い出し少し泣きそうになった。

「ネムはいい子だね。ネムが元気にしていたら、きっとエンリも喜ぶよ」

「そうなんですか？」

「そうなんだよ。エンリも心の中では辛いだろうからね。ネムが元気を分けてあげるんだ」

「……うん」

「でも無理をしちゃいけない。どうしても元気が出ないときは頑張ることは無いんだ。その時はきつと、周りの人が元気をわけてくれるから」

俺だって、気付く事が出来たらネムを力になってあげるから。

そう続く神の言葉にネムは顔を輝かせた。

「本当ですか!?!ほんとにほんと!?!」

「本当に本当だよ。指きりしてもいい」

「指きり?」

「ん?ああ、この世界には指きりないのか。そりやそうだ、えつと、指きりってというのはね……」

説明を聞けば約束する時の儀式らしい。

約束を違えると針を千本飲ませるといふ非常に苛烈な制裁が行われるとの事。

唐突に発生した重大な契約に思わず身がすくむネムだったが、約束の内容自体は大したことはない。

自分でも守れる約束だ。

そう判断したネムは教えられたとおり小指を差し出した。

その小指に眼には見えない何かが絡みついた。

「ゆーびきりげんまんうーそついたらはーりせんぼんのーます！ゆびきった！」

——うんうん。それじゃあ俺はもう行くね。がんばれよー。

契約を交わしたあと、神の声は周囲の闇と共に遠ざかっていく。

徐々に明るさを取り戻していく周囲を眺めながら、ネムは意識が浮上していくのを感じた。

「う、うんうん？」

ぼんやりと眼を開いたネムの視界に飛び込んできたのはまたもや闇。

しかし先ほどまでの不思議な感覚はなく、どこか慣れ親しんだ心落ち着く闇だった。

隣には姉であるエンリが寝息を立てている。

「夢？」

しかし夢にしてはあまりにも感覚が鮮明すぎた。

いつもは掌から零れ落ちる砂のように失われていく夢の内容もしっかり自分の中に残っている。

ネムは仰向けになり右手を掲げた。

闇の中に薄っすらと浮かび上がる、夢の中で神との契約に使った右手。

神は言った。

自分の元気が姉を元気付けると。

いまやネムに残った肉親は姉であるエンリだけ。

身を挺して自分を守ろうとしてくれた優しく強い大好きな姉だ。自分が元気を振りまくだけで姉の力になれるなら……。

ネムは暗闇の中につこりと笑みを浮かべた。

朝になったら元気一杯姉のお手伝いをしよう。

ネムはそう決心して掲げた右手を力強く握り締めた。

……そして右手から緑色に発光する怪光線が発射され、天井の梁を

焦がした。

「ううん……もう朝……？」

隣から聞こえたはずの姉の音が、どこか遠くから聞こえたような気がした。



「うむ。いいことをした後は気分がいい」

クーゲルシュライバーはいまや蜘蛛の巣だらけになった寝室で首にかかったエンジェルハイロウを外した。

このマジックアイテムによるテレパシーは完璧であり、クーゲルシュライバーのしたかったことは全て達成する事ができた。

思っていたよりネムは落ち込んでいなかったが、嬉しそうに自分と会話する彼女の姿にクーゲルシュライバーは一定の手ごたえを感じ満足していた。

「夢の内容まで読み取れるなんて、テレパシーって便利だな」

ネムの容姿を思い出す。

茶色の髪を二つ結びにした愛嬌のある顔立ちの童女である。

個人的には折角伸ばした髪なのだから二つ結びになどせずセミロングのままにしておけば良いと思う。

自分勝手な不満はあるものの、クーゲルシュライバーはそんな姿かたちのネムに我が事ながら奇妙に思うほど入れ込んでいた。

いくら初めてであった現地人であり、約束を交わした仲であったとしても些かサービスが過ぎる。

その理由を見出そうと試みるが、クーゲルシュライバーはたった5秒で断念した。

直感的にその答えにたどり着いてはいけなさと感じたのだ。

「ちくしょうめ……」

誰に向けたわけでもない罵倒を吐き捨てクーゲルシュライバーは今後の予定を確認する。

モモンガから日が昇ったところに陽光聖典の尋問を行うので一緒に

来て欲しいと誘われていた。

現在陽光聖典の生き残り達は第二階層にあるシャルティアの自室前に横たわる底の見えない亀裂の中にいる。

クーゲルシュライバーはそこを守護する領域守護者の存在を思い盛大に舌打ちをした。

「超行きたくねえ……！」

ミュルアニス。

亀裂の中に配置されたアンデッドの群れの更に下に設置された邪悪の架け橋《イビルウエブ・ブリッジ》の領域守護者であり、クーゲルシュライバーが作り上げたNPCの一体である。

尋常ではない執念とこだわりを詰め込んで作り上げたNPCではあるが、その存在は創造主であるクーゲルシュライバーにとって猛毒に他ならない。

端的に言ってしまうえば、ミュルアニスはクーゲルシュライバーの黒歴史なのである。

彼自身中学生の頃に患った、俺の右腕に封じられし悪魔が云々という黒歴史を遥かに超越した黒歴史中の黒歴史なのだ。

「ああああああ……なんであんなの作っちゃったんだ俺え……！」

天蓋付きベッドの上でクーゲルシュライバーは腹を上に向けて痙攣した。人間状の上半身が本体である蜘蛛の巨体に押しつぶされている。

しかしそんな事は意にも留めずクーゲルシュライバーは苦悩する。

クーゲルシュライバーにとってミュルアニスとはモモンガにとつてのパンドラス・アクター……どころの話ではなかった。

クーゲルシュライバーは未だにパンドラス・アクターの事をモモンガが言うような黒歴史ではないと思っっている。

しかし風呂場にて創造主自らに彼が如何に度し難く苦痛を与える存在なのか、懇切丁寧に語られたからにはクーゲルシュライバーとしてもその主張を呑むほかない。

何をもって黒歴史と感ずるのかは人それぞれだからだ。

ただそれでも、それぞれの黒歴史がもたらす苦痛には差が存在する

のだ。

もしも黒歴史発表会なる地獄の宴が存在したとして、そこでモモンガと問題のNPCを紹介し合ったならば自分の方がより審査員に苦しみを味わわせる事が出来るとクーゲルシュライバーは断言できる。「モモンガさんのはまだ笑い話になるじゃんか……俺のは笑い話にもならねえよ……」

もう黒歴史というか、狂気の産物とでも呼んだ方がしっくりくる。なんにせよ、ミルアニスと会うことだけは絶対にできない。

尋問にミルアニスを参加させる事を提案したのはクーゲルシュライバーだったが、彼自身は絶対不参加を心に誓っていた。

「なんか別の予定いれよ……」

そういえば陽光聖典戦後にアルベドと交わした約束があった。

あれをねじ込んで参加を拒否しよう。

クーゲルシュライバーはそれだけ決めると意識のスイッチを切るかのように眠りに落ちていった。



ナザリツク地下大墳墓第九階層に存在する従業員食堂。

朝のこの時間は一日の仕事前に食事を取るホムンクルスである一般メイド達で賑わっているはずの場所はいま、耳が痛くなるほどの静寂の只中にあった。

人が居ない訳ではない。

何時ものように一般メイド達がグループを作って席に座っており、そんな彼女達の前には食欲を刺激する山盛りの朝食が並べられている。

にも拘らず会話も食器を扱う際に発せられる音が一切しないのは理由があった。

それは――

「……エントマ。もう一度聞けけど、その、あなたが持っているそれは、なんですって?」

プレアデスの副長であるユリ・アルファと並んで冷静沈着、出来る女の見本のように一般メイドから評価されているソリュシャン・イプシロンが極めて冷静な口調で問うた。

一般メイド達や男性使用人達が固唾を呑んで声の発せられた先、つまりナーベラルを除くプレアデス5人が座るテーブルに意識を集中させる。

この時間帯にプレアデスが従業員用食堂に集合することはとても珍しいことだ。

一般メイドからアイドルの如く慕われている彼女達がいるとなれば、自然多くの耳目を集める事になる。

だが今日のそれは常のものとはその真剣さと緊張感をまったく異にしていた。

重苦しい沈黙が場に降りる。

「んー。これはねえ」

ソリュシャンに問いかけられて多くの視線をその身に受けるエントマは手にした白い包みをくるくると優しい手つきで回転させて言った。

「クーゲルシュライバー様に授かった、私の赤ちゃん」

——きやああああああああああああああああ!?

「え、ちよつ、あなた達!声を控えなさい!」

背後で爆発した黄色い歓声とも悲鳴ともつかぬ叫びにユリが慌てて立ち上がり注意するが、その程度で興奮仕切った年頃のメイド達を押し留めることなどできなかつた。

いつのまにか大挙して詰め寄ってきていたメイドの大群に囲まれユリは顔を引きつらせた。

「い、いつなの!?!いつ授かったの!?!」

「昨日う」

「昨日!?!」

昨日、寵愛を、授かってもう産まれたというのか?

一般メイド達のテンションがさらに上昇する。

「ねえねえあのか、それで……どうだったの?」

「どう……つてえ？」

「だからあー！その……クーゲルシュライバー様よ！や、やっぱりすごかった？」

「……実はあ、あんまり覚えてないのお。色々な事があって何が何だかさっぱりい」

「「きゃあああああああああ!!」」

前後不覚に陥るほどだったのか！

どうやら相当に熱く濃厚な夜だったらしい。

具体的なことは全く分からないというのに、アイドルであるプレアデスの一人と至高の御方による夜の情事という情報だけで一般メイド達の想像は膨張を続けあらぬ方向へと飛躍する。

ついには一般メイドの中から気絶するものまで出始めた。

対するエントマは落ち着いたもので、卵囊を一通り回転させると懐へとしまいこみ食事を再開している。

健啖家であるエントマだったが、今日は不思議とその食事の量と速度は控えめだった。

「つていうかエンちゃんズルいつス！なんで一人だけ至高の御方専用メイドになってるツスカあ！」

「しかもご寵愛を受けた。御子まで授かっている。すごく特別扱い、ズルい」

鮮やかな赤色をしたお下げを振り回しながら人狼であるルプスレギナ・ベータが叫び、自動人形であるCZ2128・△……略称シズ・デルタがそれに追従する。

動と静、正反対な特徴を持つ彼女達の主張はここに居るメイド達全員の心情を代弁していた。

一般メイドの群れの向こうで一人コソコソと食事をしていたシクススがびくりと肩を跳ね上げた。

半ばクーゲルシュライバーの専用メイドとなっているシクススにとって、プレアデスの二人の言葉は自分にも向けられているように聞こえたのだ。

(き、気まずい……早く食べてクーゲルシュライバー様のお部屋に行

こう……)

どうすれば至高の御方に気に入られるのか、エントマの業務は今後どうするべきか、メイド長とセバスに報告はしたのか、この事実をアルベドに伝えるべきか。

背後から聞こえてくる様々な話を受け流しつつ食事を終えたシクススは足早に食堂の出入り口へと向かう。

昨晩情事の後と思われるエントマを介抱している時から大事になりそうだと感じていたけれど、その予感間違いではなかった。

今はエントマを質問攻めに行っている同僚達だが、情報を漁りきつたらその矛先が自分に向くのは確実である。

三十六計逃げるに如かず。シクススは仕事へ逃げることにしたのだ。

しかし――

「この騒ぎは一体どういうことかしら？廊下まで漏れ聞こえているわよ」

開けようとした扉が勝手に開き、そこから現れた人物の姿を見てシクススは思った。

もつと大事になる。そして自分は逃げ遅れたのだ、と。

シクススはぞつとするような笑顔で話しかけてくるアルベドに対し深く頭を垂れた。



「お待ちせいたしました。守護者統括アルベド、御身の前に」

「よく来たなアルベド。まあ楽にするがいい」

クーゲルシュライバーは日が昇ると同時にモモンガに陽光聖典への尋問不参加を伝えると、アルベドに鎧を装着した状態で部屋に来るよう命令していた。

果たして時間通りにクーゲルシュライバーの自室にやってきたアルベドはカルネ村で身に着けていた全身鎧《ヘルメス・トリスメギストス》を装備していなかった。

代わりに装備しているのは伝説級の魔法の武具である全身鎧だ。これはクーゲルシュライバーの私物である。

ヘルメス・トリスメギストスと比べればかなり劣る防具だ。

これからアルベドに付き合ってもらおう実験に使うには丁度いいゴミアイテムだった。

「では、失礼致します」

そういつて立ち上がるアルベドの首元をクーゲルシュライバーは凝視する。

主人への礼を示すために頭部全体を覆う兜は取り外され小脇に抱えられている。

そのお陰で完全装備だったなら見ることは叶わなかった喉元への刺突を防ぐ為に備え付けられた鉄板の奥には、アルベドの細く白い首が見えていた。

そしてアルベドの首を覆う白いドレスのネック部分も確認できた。(鎧の下にいつものドレスを着ているのか? いや、この場合都合だから下手に突っ込みをいれる事も無いか)

クーゲルシュライバーは定位置である巨大な蜘蛛の巣から降りるとアルベドの前に立った。

「これより昨日言っていた実験を行う。まあ難しい事は何も無いし、時間も然程掛からん。アルベドは鎧を着てそこに立っているだけでいい」

「畏まりました。しかし、この場で行ってもよろしいのですか?」

「かまわん。多少周囲の家具が散らばるかも知れないが、たまにはメイド達の仕事を増やしてやったほうがいいだろうしな」

仕事こそが生きがいと豪語して憚らないのがナザリックのメイドである。

そんな生き方自分だったら絶対に御免だが、仕事イコール趣味な人間から仕事を取り上げるのはいかにも可哀想だろう。

適度に仕事を与えてやるのがよい上司……適当に思いついた言葉に従うとクーゲルシュライバーは両前肢を持ち上げた。

メイド、という言葉を出したとたんにアルベドの微笑が微かに引き

つったように見えたが、気にするほどの事も無いだろう。

クーゲルシュライバーの両前肢の先端についた巨大な首切り鉋のような爪が魔法の光を反射して怪しく光る。

「では行くぞ」

「どうぞ、いかようにも」

返事を聞くとクーゲルシュライバーはゆつくりと二本の爪をアルベドの両肩へと近づける。

耐久力や攻撃力を調べる為のサンドバッグにでもされると思っていたのか、この遅さが予想外だったらしいアルベドは眼を丸くして自身に近づいてくる爪を見つめている。

アルベドが見せた意外な表情をこっさり観察しつつ、クーゲルシュライバーは二本の鉋状になった爪の腹で鎧の肩を優しく一回ずつ叩いた。

パァンツ!

風船が破裂するかのような音がクーゲルシュライバーの自室に響いたと思えば、続いて金属板が転がるけたたましい音があちらこちらから発生した。

前者の音はアルベドから発せられていた。

「んなっ……!?!」

思わず驚愕の声を漏らしてしまったクーゲルシュライバーの眼前。

「まァー!」

そこには妖艶な肢体を惜しみなく晒すアルベドの姿があった。

「し、下になんにも着てなかったのかお前!?!」

「はい。ドレスを着ていては鎧を装備することはできませんわ。そして私が所蔵する衣類は普段着ているドレスと同じものだけなので」

あ、シヨーツだけは履いております。

その言葉に無駄に広くなっている視界でアルベドの下半身を確認してしまったクーゲルシュライバーは自分の高性能な肉体を呪った。妖艶なアルベドらしくかぬパステルカラーである。ふざけんなタブラさん、そこは紫とか黒だろ。なにそんな所でギャップ萌えだそうとしてんだよ、イメージ崩れたわちくしょうめ。

そんな不埒な事を考えるクーゲルシュライバーの前でアルベドのアルベドが震える。バインバインのポヨンポヨンである。

絶世の美女たる彼女のあられもない姿を前に、完全な蜘蛛に対してのみ激しい性欲を掻き立てられる体になってしまったクーゲルシュライバーであつても欲情を抑えることができなかつた。

(でも体から沸き起こる感じじゃあないな。これはあれか、人間の心が反応しているだけなのかな)

精神作用無効化が発動し作り出された精神的な風の中でクーゲルシュライバーは現実逃避に似た自己分析を行つていた。

しかしそれで事態が好転するわけもなし。

クーゲルシュライバーは自身の肉体に絡み付いてきた柔らかい感触に現実世界へと引き戻された。

「そういう事がお望みとあればこのアルベド、いつ何処であろうとお応えする準備ができております！しかもあのメイドには出来なかつたようなあんなことからこんな事までオールOKばっちりでございます！」

「ま、まてアルベド！早まるな！」

擬腕を伸ばして取り押さえようとするクーゲルシュライバーだったが、まるでポールダンスを踊るように4対ある肢を利用して避けるアルベドを捕らえる事ができない。

(な、なんとという技量だ！素早さに特化したこの俺がいいように翻弄されるなど！)

これがサキユバスの力かと戦慄するが、こんなアホな事をいつまでも続けるわけにはいかない。

なぜならばモモンガが陽光聖典の尋問が一段落つき次第この部屋にやつて来る予定になつているからだ。

今はこの部屋にいないシクススには、モモンガが来たら一々確認せず中に通してもよいと伝えてしまつている。

流星にこんな短時間で尋問が終了するとは思えないが、それに甘えてこの状況を長引かせては取り返しのない事態に発展するだろう。

こうなればアルベドを傷つけまいと動かさなかった肢を一斉に振り回し彼女を振り払うもやむなしか？

クーゲルシュライバーがそう思った瞬間。

部屋の扉が断りもなしに開け放たれた。

「おはようクーゲルシュライバー。いやあ参った実は捕虜に魔法が……つてなにしてるんだお前ら!？」

「ギャアアアアア！モモンガさん見ないでえええええ!!」

「くふー！モモンガ様も来ましたわー!」

阿鼻叫喚である。

クーゲルシュライバーの予想を大きく裏切って訪問してきたモモンガは、眼前で繰り広げられる蜘蛛の邪神の肉体を使った淫らなショーを直視することが出来ず骸骨の両手で眼を覆っている。

一方見られた側のアルベドはお客さんいらつしやいといわんばかりに腰の動きを激化させ、なりふり構わず振り回されるクーゲルシュライバーの肢の勢いを利用して三次元的でダイナミックなダンスを披露している。

そしてクーゲルシュライバーはこの誤解をどう解くのか、そもそも何処からが誤解なのか、どうすればこの状況を切り抜けられるのかがさっぱり分からず、眼を擬腕で覆いながら肢をバタつかせるのみである。

今この時、この空間で主導権を握っているのは間違いなくほぼ全裸のアルベドだった。

「ああ此処で私は初めてを迎えるのですね……しかも二人の愛する御方の手で！初めてが3P！くふー！ああ……でも私はどなたに純潔を捧げればいいのかしら!」

……アルベドのその言葉がキツカケだった。

乱痴気騒ぎの空気に吞まれていたクーゲルシュライバーの胸中に精神作用無効化であっても抑えきることの出来ない激情が滾った。

——好きな人が6人いて、誰にすればいいのかわかんないの。

——仕方ないじゃん。好きになっちゃったんだから。

——あなたの事も、大好きだよ？

それほど遠くない昔、呆然と聞いた言葉がありえないほど鮮烈にクーゲルシュライバーの脳裏で蘇った。

「……アルベド。服を着ろ」

あふれ出す百の罵倒を飲み込んで放たれたその言葉に、狂騒状態に陥っていた部屋の空気が一瞬で凍りついた。

助太刀に入ろうとしていた天井のエイトエッジ・アサシン達も、ギルド長として強権を振りかざしても事態を収拾させようとしていたモモンガも、愛に狂って暴走を続けるアルベドも皆一様に動きを止めて押し黙った。

「は、はい。……こ、この度は至高の御方に対して大変な無礼を」

「黙れ。服を着ろと言っているんだ」

「っ!!」

静かに放たれるクーゲルシュライバーの言葉に含まれた激怒の気配に、アルベドは何も言う事が出来ず、怯える幼子のように震えながら部屋に四散した鎧を集めて身に着けた。

これはクーゲルシュライバーが行った行為が装備破壊ではなく装備解除だった事と、身に着けていたものが魔法の防具だったから出来たことだ。

普通の防具だったらこうも早く全身鎧を装備しなおす事は出来なかつただろう。

「……着ました」

「……」

鎧を着たアルベドは先ほどまで朱に染まっていた顔を真っ青にして、冷や汗を流しながら床に跪いた。

そんなアルベドを前にしてクーゲルシュライバーは言葉を発しない。

二人の間に胃が痛くなるような沈黙が降りる。

数十秒が経ち、見るに見かねたモモンガが口を開いた。

「その、なんだ。クーゲルシュライバーさん、アルベドも反省しているみたいだしもう許してあげてくれませんか？」

モモンガは友人たるクーゲルシュライバーに寛恕を求めた。

素の口調で話すのはクーゲルシュライバーが演技ではなく本気で怒り狂っている事に気付いたからだ。

何が悪かったのか、モモンガにはわからない。

しかしアルベドの言動の何かがクーゲルシュライバーの逆鱗に触れたのは確かだった。

モモンガは大変危険な状態だと思った。

今にも死にそうな顔で跪くアルベドの前に立つクーゲルシュライバーは牙を広げ、狂器たる前肢を持ち上げ、めくりあがった擬腕の先端をアルベドに突きつけている。

それはクーゲルシュライバーの戦闘態勢であり、モモンガにとって最悪の光景だった。

こんな光景見たくは無かった。

モモンガは湧き上がっては抑圧されるを繰り返す怒りを意志の力で冷却し、もう一度声をかけた。

「もう一度だけ言います。アルベドを許してあげてください」

クーゲルシュライバーが視線をアルベドから外す。

モモンガの鬼火の如き瞳とクーゲルシュライバーの紅玉のような8つの瞳が互いを正面から捉える。

死の超越者と深淵の大蜘蛛の視線がぶつかり合い火花が散った。

どれだけそうしていただろうか？

モモンガとクーゲルシュライバーにとっては一瞬、アルベドにとっては永遠ともいえる時間が過ぎ去り、唐突に室内の空気が和らいだ。

「……ふう。すみませんモモンガさん。頭に血が上りました。止めてくれてありがとうございます」

「……いえ、此方こそお願いを聞いてくれて感謝しています」

アルベド、お前はもう行きなさい。

モモンガが優しくかけた言葉にアルベドは涙を流しながら頷くと、クーゲルシュライバーの部屋から退出していった。



「実は俺……ビッチがダメなんですよ……」

「ええええええええええ!?!」

アルベドが退出した後、護衛のエイトエッジ・アサシンも部屋から追い出したクーゲルシュライバーは疲れた中年のように背を丸めてそういった。

聞いているモモンガが喉から搾り出すような声で驚愕するのも仕方のない事だろう。

「だってクーゲルシュライバーさんアルベドの設定弄るときに『まあ結局範囲が狭まっただけでビッチですけど。でもそこがいいんですよ、そこが!』とか言ってたじゃないですか!」

「いや、ビッチが許されるのは創作の中だけであってですね。リアルビッチとかマジ無理ですって。ビッチ殺すべし、慈悲は無い……そういうレベルでダメなんですよ」

ウンザリするほどの実感が籠ったクーゲルシュライバーの言葉に、モモンガはなんて声をかけたらいいか分からなくなった。

モモンガにはろくな恋愛経験がない。

それでも多情な女性と付き合って浮気された時の心情について察するのは童貞にとっても然程難しいことではなかった。

考えただけでも気が滅入るが、実際に経験したなら想像以上の苦痛なのだろう。

それを知らない者が、安易に口を出すことはためらわれたのだ。

「……ていうか、あれですか?毎年嫉妬マスクゲットして騒いでたからないと思ってたんですが……クーゲルシュライバーさん彼女いたんですか?」

「……居ました。奇跡的に出来た、5年間付き合った人生初めての彼女です」

アチャー……。

モモンガは天を仰いだ。

ビッチ嫌い、人生初彼女、5年間。

もうこれだけでこの友人の身に何が起こったのかがおぼろげながら理解してしまったのだ。

「それで、結構酷い別れ方になっちゃって……未だにトラウマなんです」

「そのトラウマをアルベドが刺激しちゃったってわけですか……」

モモンガは先ほどまでの静かに怒り狂うクーゲルシュライバーを思い出す。

あれは間違いなく激怒していた。

精神作用無効化を持っているのにもかかわらず、あれほど長時間怒りをキープできるのは並の怒りではない。

同じ特殊能力によって精神を抑圧されているモモンガだからこそ、それが分かるのだ。

クーゲルシュライバーの言うトラウマとは軽口や冗談などではなく、真正正銘のトラウマなのだろう。

「アルベドには悪いことをしちゃいました。俺がビッチ設定にしたよ
うなもんなのに。……いやまあビッチと言っても色々あるんですが
ね？俺はなにも処女じゃないとダメって言っているわけじゃないん
ですよ。そういう問題じゃなくてですね。ただのエッチなお姉さん
とかなら……サバサバ系ビッチとかなら余裕で許せるんですよ。そ
こに恋愛感情がないから。でも恋愛が絡んできたらもうダメ。その
点アルベドはアウトなんですよ。あと娼婦とか、売春やってるような
のはもうアウト。売ってる癖して恋とかしちゃう奴とか殺してやり
たくありませんよもうマジで。っーか殺します。精神的に追い詰めて
殺します」

いや、それでも例外はあるんですけどね？

そう言っただんなビッチがアウトなのかを懇々と語るクーゲルシュライバーに対してモモンガは思った。

(今後絶対にこの話題には触れないようにしよう……)

たった一人の友人が抱く超特大地雷を知って、モモンガはもう二度とこんな事が繰り返されないようにそう心に誓った。

だが、モモンガはまだ知らなかった。

クーゲルシュライバーが隣で喋っている内容に一切嘘や冗談が含まれていない事を。

そして……この一点に関してクーゲルシュライバーは完全に狂ってしまっている事を。

24話

「……シクスス。酒とか無いか？　あるなら一番強い奴を適当に口で持ってきてくれ」

クーゲルシュライバーの私室にモモンガの姿は無い。

彼は捕虜となった陽光聖典の隊員達にかけられた魔法について説明した後、アルベドの様子を見てくると言って出て行ってしまった。

クーゲルシュライバーはそんなモモンガにいくらかの頼みごとをして送り出していた。

……気が滅入っていた。

どうして自分はこんな風になってしまったのだろうかと自問自答する。

昔から続けられていたその問いの答えは日によって変化する。

あまりにも支離滅裂で考えるだけ馬鹿馬鹿しいのだが、考えずにいられない。

これ以上不毛で陰鬱な気分はゴメンだと、クーゲルシュライバーはいつかのように酒に逃げることにした。

まだ正午にもなっていないという事実など知ったことではない。

いまの自分は酔わない体で、そして此処は自分の部屋なのだ。文句など言わせないぞとクーゲルシュライバーは内心で猛った。

「一番強いお酒を、ということでしたのでお持ちいたしました。どうぞ、スピリタスウオツカでございます」

「ええ……？」

シクススが真顔で持ってきたクリスタルガラスで出来た底の分厚いオールドファッシュヨンガラスには透明な液体とこれまた透明な丸く整形された氷が一個入っていた。

グラスと氷はいい。寧ろ最高の組み合わせだといっている。

手にしたずっしりとした重みは如何にも高級グラスのそれであり、硬くしまった球状の氷は酒によつて濡れ、まるで水晶のような輝きを放っている。

グラスの中で転がせば甲高い澄んだ音を立てて耳を大いに楽しま

せてくれた。

しかし中身の酒が問題だ。

度数96%を誇る言わずと知れた超高度数の酒である。

恐らくは自室の一角に存在するバーでカクテル用にキープされていたものだろうが、まさかロックを頼んでこんなものが出てくるとは思っていなかった。

それもダブルで。

「う、うむ」

どれほど酒に溺れていた時期でも流石にこのような飲酒の経験は無い。

一度原液で飲んだことがあるからこそクーゲルシュライバーは出された酒を飲むことに躊躇した。

しかしシクススは自分のオーダーを馬鹿正直に、いや、忠実に守ってこれを出してきたのである。

此処で別のものに変えさせるのは可哀想な気がした。

そのうち酒の味について教えてやろうかな。

そう思いながらクーゲルシュライバーは擬腕に掴むグラスを口へと運んだ。

底は分厚く、側面と飲み口が薄いグラスの口当たりは上々。

だが次の瞬間、そんな繊細な感覚を破壊しつくす冷却された劇物が口内に流れ込んでくる。

(毒に対する完全耐性を持っていても感じる酒の味は変わらずか。酔うことはないだろうが、嗜好品としては十分やっていけるな)

焼き尽くされるかのような刺激を伴う液体を一息に飲み下すとクーゲルシュライバーは深い溜息をついた。

味についてはなんてことはない。相変わらずのスピリタス、つまり雑味のないクリアなアルコールの味だ。

現実の世界で幅を利かせていた合成酒の原料と大した差はない。

酔えないのであればこんなものを好んで飲む必要は無かった。刺激を楽しむにしても些かこれは無粋に過ぎるのだ。

クーゲルシュライバーはグラスをシクススに差し出した。

すかさず差し出された銀の盆にグラスを置くとクーゲルシュライバーはシクススに話しかけた。

「そういえばエントマはどうした？今日はまだ見ていないが」

「エントマ・ヴァシリツサ・ゼータは……その、クーゲルシュライバー様の御子を授かった関係で職務内容の再検討が行われていまして……」

「んん、なんだそれは？私の卵を持っているからと言って特別扱いする必要などない。普段どおりの扱いをせよとペストーニャに、いやセバスか？ともかくエントマの上司に伝えておけ」

「は、はい。畏まりました」

なんで防御用アイテムを渡してやっただけで仕事の内容を変更する事になるのか？

疑問に思うクーゲルシュライバーだったが、よくよく考えればエントマを特別扱いしすぎたのかもしれないと思い当たった。

自分とエントマの接点は非常に濃い。

午前0時の儀式を任せているのもエントマ、専用メイド的に毎日殆どの時間傍に侍らせているのもエントマ、そして今回の褒美。

これではエントマを贖身していると思われても仕方が無いとクーゲルシュライバーは思った。

実際、贖身もしている。

なにせ自分の体を満足いくレベルで毛づくろい可能なのは現状エントマだけなのである。自然と特別扱いにもなる。

(だけどそれじゃあダメか。これが過ぎればメイド達の中で不和が起きるかも知れない)

クーゲルシュライバーはメイド達がモモンガや自分、所謂至高の御方に侍ることを何よりの喜びとして知っている事を知っている。

いまいち理解しがたい部分もあるのだが、その無上の喜びをごく一部のメイドに独占させるのはいかにも不健康だ。

そう考えれば、初日に担当だったというだけの理由で毎日来て貰っているシクススも密かに周囲から妬まれている可能性がある。

シクススの場合は一日中ではなく時々別の一般メイドと交替して

いるからそれほど深刻ではないと思われるが、一応気をつけておいたほうがよいだろう。

しかし、まあ、それはそれとしてだ。

クーゲルシュライバーはグラスを片付けようとしているシクセスに独り言のように話しかける。

「一人酒とはつまらん。そういえばこの階層に本職がやっているバーがあったと記憶しているが……」

「はい。副料理長がバーテンダーを務めているショットバーがございます」

「素晴らしい。いつ頃開店なのかな？」

「本日の夜には。ただ、至高の御方がお望みとあれば今からでも店を開けるでしょう」

夜か。正直今から飲みたい気分なんだが……。

そう思うクーゲルシュライバーだったが、幾ら酔わないとはいえ昼間からバーで酒を飲むのは組織の上位者として躊躇われた。

それにクーゲルシュライバーはバーとは暗くなってから行くものと考えているし、無理やり開店させるなんて無粋はしたくなかった。

そんなに飲みたければバーじゃなくて自室で酒を飲んでいればいいのである。

他人に迷惑をかける酒の飲み方はしてはいけないのだ。

「わかった。では夜にすこし覗いてみよう。副料理長にも伝えておいてくれ」

「畏まりました」

「あとお前も一緒にくるように。折角バーに行くのだからメイド服は場違いだろう。私服を着てくるがいい」

「畏まり……えっ!?!」

シクセスの目が可愛らしく見開かれた。

半開きになっている口がすこし間抜けであり、なんとも微笑ましい。

クーゲルシュライバーの予想通りの反応だった。

「特に深い意味は無いからな?ただ一人で飲みに行くのが嫌だったん

だ。シクスス、お前は酒を飲んだことは？」

「あつ……はい。飲んだことはありません。ありませんけど……」

「なら丁度いい。酒がどんなものか教えてやろう。そのついでに私の好みでも覚えてくれたら言う事はないな」

何も言わずとも好みの酒をだしてくれるメイドなんて最高じゃないか。なあ？

クーゲルシュライバーがそういうと、なにやら慌てていたシクススが動きを止め暫し考えこんだ後に頬を朱に染めた。

どうやらやる気が出てきたらしい。

「そういうわけで今晚は予定を空けておけ。私はこれから第六階層に向かう。夜までそこで過ごすつもりだが、火急の知らせ以外は人を寄せさないでくれ」

「あつ！でも私……クーゲルシュライバー様!？」

クーゲルシュライバーはそれだけ伝えるともう離すことは無いとばかりにその場から転移して姿を消した。

後に残されたシクススは伸ばしかけた手を胸元へ引き寄せると途方にくれた旅人のように項垂れた。

「どうしよう……私服なんてもってないよお……」

これは自分の手にあまる状況だ。

メイド長か執事長に相談しなければ。

シクススはペストーニヤとセバスに助力を求める事を決めると、一先ずクーゲルシュライバーの自室の出入り口へと向かった。

エントマの件と今夜の件についてしかるべき人物に連絡しなければならぬからだ。

誰も見るものがないとしても上品な歩法は崩れることなく、シクススは素早く目的の扉の前までたどり着いた。

メイドの数が足りない。

リビングルームからこの場所まで来るまでにメイドの姿は一人として見かけられなかった。

部屋の広さと主人の格を考えると明らかに不自然であるメイドの数を再確認する事になったシクススは胸中にわだかまりを感じつつ

扉に手を伸ばした。

その美しい指先が扉に触れるか否かというタイミングで反対側から扉が3回ノックされた。

奇妙なタイミングの一致に軽い驚きを感じるもシクススは扉をゆっくりと開けた。

扉の向こうには一人の女が立っていた

シルクのような光沢を放つ白いローブを着ており体の輪郭を掴ませないうえに、フードを目深に被っており顔を見ることもできない。

しかしフードの中から伸びる細くしなやかな茶色の長い髪と、そこから発せられる混然と交じり合った花のような香気、そして僅かに見える瑞々しい桃色の唇がこの人物が女性である事を強く認識させていた。

「ミュルアニスでございます。クーゲルシュライバー様にお目通りがしたいのですが、よろしいでしょうか？」

低く落ち着いた声でそう言うとミュルアニスはシクススに頭を下げた。



どうしてこうなってしまったんだろう。

モモンガは眼前で跳ね回る二つの白い物体へまるで月でも眺めるかのような遠い眼差しを向けていた。

驚くほど静かな心境ではあったが、静けさの中に骨の芯まで染み渡るような冷たさがあった。

その冷たさに名前をつけるのであれば、それは自己嫌悪の四文字になるだろう。

モモンガの頬を生暖かい風が撫でる。

骨の体が純白のシーツにさらに沈み込んだ。

どうすればよかつたんだろう？

徐々にその濃さを増していく甘く熟した果実のような匂い。

あまりにも非現実的なその匂いに理性を解かされる事も無くモモ

ンガはひたすらに考える。

仕込まれているスプリングがよほど高品質なのだろう。

一切音を立てずにモモンガの体がまるでトランポリンに寝そべっているかのように上下を繰り返す。

俺はただ、放っておけなかっただけなのだ。ただ、それだけだったのに。

モモンガはクーゲルシュライバーの部屋から出た時の事を思い出す。

扉をあけて真つ先に眼に飛び込んできたもの。

それは廊下に立ち尽くし無表情で声一つ上げずに涙を流すアルベドの姿だった。

大粒の涙で頬を濡らしながらアルベドはジッと此方を見つめていた。

その姿にいてもたってもいられなくなり、アルベドの手を引いて自室へと連れてきた……もうこの時点で失敗だったのだろうか？

最初からやり方を間違えていたのではないかと考えるモモンガだったが、ではそれ以外にどうすればよかったんだと叫びたい気持ちで一杯だった。

アルベドは守護者統括という地位にあるNPCであり、傾国の美女という設定に恥じない美しい女性だ。

そんな彼女がいたく傷心しており、人目憚らず涙を流し立ち尽くしていたのだ。

声をかければ感情が爆発してしまいそうな彼女を、メイドや護衛のシモベ達の眼の無いところへ連れていくのは当然の事ではないだろうか？

連れて行った先が自室なのも、二人きりの環境を作りやすいからであって他意など微塵も存在していなかったのに。

やはり、下手な同情は禁物ということなのだろうか。

モモンガは暗澹たる気持ちで倒れこんできた柔らかいものを両手で抱きとめた。

エントマへの嫉妬を吐露し、捧げる愛の深さを語り、拒絶された絶

望と混乱を訴えるアルベドの姿は普段の彼女を知るものならば誰もが唾然とするだろう。

まるで14歳かそこらの少女のように泣きじゃくるアルベドの姿はナザリツクの支配者としてNPC達を守ろうとするモモンガの父性、もしくは庇護欲を酷く掻き立てた。

感情とは違い心中から湧き上がる欲は抑圧されたりはしない。

三大欲求を失って間もないモモンガは思いがけず手にした欲にあっさりと吞まれてしまった。

涙を流し、髪を振り回し、尚も言葉を続けようとするアルベドの体を、モモンガは無言で抱きしめた。

それはモモンガが昔見たマンガやドラマの知識を元にした行動だった。

大抵はこうすることで上手く行くのだとモモンガは本気で思っていた。

しかし――

「あつはあー！ジュル……んはっ！モモンガ様っ！モモンガ様あつ！愛しています！アルベドはっ、アルベドは貴方様を愛しております！」

自らの腰の上に跨り、流れ出た涎を啜り、ドロリと濁った瞳で病的に愛を口にするアルベドの姿に、モモンガは自分が取り返しのつかない事をしてしまったような気がしてならなかった。

(……これって失恋した女性の傷心に付け込んで関係を持つとうとするクズ男の手口なんじゃないか?)

そう思えばアルベドの濁った目が依存に満ち満ちているような気もしてくる。

吐露された心情を聞く限り、アルベドは重い女だ。それもかなり。いや、危険なレベルで。

本人は愛の深さを知ってもらおうとしているのだろうが、聞いているモモンガとしてはアルベドの言葉は背筋が寒くなるようなものばかりなのだ。

――私だけが至高の御方々の真の下僕、忠実なる奴隷。

その言葉から始まった、何もかもを犠牲にする事をいとわない狂愛

を嫌という程に思い知らされる言葉の奔流は未だ途切れることは無い。

正直な話モモンガはそんなアルベドの事が不安だったし、恐ろしかった。

しかしその一方で冷静な思考がアルベドを御し易い相手だと判断していた。

要は此方がアルベドの愛にある程度応えてやれば、彼女は決して裏切らないのである。

それどころかどんな事を命じても全力で実行し、命令を達成するだろう。

一枚岩であると信じていたナザリックの中にあつたアルベドという特大の危険分子。

その危険分子は、自分がこういう関係が続けていれば爆発する事はないのである。

モモンガはナザリックを愛している。

ナザリック地下大墳墓とそこに生きるNPC達は仲間達から預かった宝物であり、どんな理由があつたとしても失われてはいけなものなのだ。

それにアルベドの設定が歪んだのは自分にこそ原因があるとモモンガは思っていた。

自分が原因ならば、その責任を取るのは自分だ。

罪の意識に後押しされながら、モモンガはいつそ悲壮感すら漂わせるような決意を持ってアルベドを抱きしめた。

嬌声が上がリ、魔法の薄明かりに肢体がくねる。

「私も愛しているぞ、アルベド」

内心の恐怖を完璧に封じ込めた優しげなモモンガの声。

その嘘でしかない言葉に依存心をさらに深めながら、アルベドは息を止めてつまさきを伸ばしながら激しく痙攣した。



「お待たせしましたクーゲルシュライバー様」

「……」

ナザリツク地下大墳墓第九階層の一角にあるバーの扉前でクーゲルシュライバーは絶句していた。

その理由は単純明快。

いま、彼の眼前で恥ずかしそうに服装を気にしているシクスの姿にあった。

「あの、クーゲルシュライバー様？」

「あつ、うむ。うー……いや、なんだ、思いがけない服装だったから、ついな」

シクスはこのナザリツク地下大墳墓において非常に珍しい服を着ていた。

それがクーゲルシュライバーを激しく動揺させていた。

シクスが着ているのは白のストライプ生地フリルシャツ。下はメイビー色のハイウエストスカート。ミディー丈だ。

それはいわゆる『現実』での普通の服である。

だからこそユグドラシルというファンタジー世界の産物であるナザリツク地下大墳墓では周囲から浮いた存在に映るのだった。

だからといって似合っていないという訳ではない。

元々の素材がいいのだから似合わないわけが無い。

しかも着ているものがシクスの外見年齢にジャストフィットであり、清楚なお嬢様といった風情を醸し出している。

(ちよく好みだ)

スカートの下から伸びる黒いタイツに覆われたスラリと長いふくらはぎが、クーゲルシュライバーの食欲と好みのストライクゾーンを見事にぶち抜いていた。

「なんとも新鮮だな。何時もはメイド服ばかりだが、そういった服装も似合うではないか」

「あ、ありがとうございます」

「お前の私服のセンスはバツチリだな。何時もその格好で居て欲しいぐらいだ」

「……」

「ん？どうした？」

「あ、いいえ。この格好ではお仕事ができませんので、やはり私はホワイト・ブリム様に頂いたメイド服が……」

私服のセンスを褒めたと途端に黙ってしまったシクススを怪訝に思うが、取り繕うように続いた言葉にクーゲルシュライバーは納得させられた。

やはりメイドはメイド服を着てこそなのか、と。

心の隅ではメイドがメイド服以外の服を着ているところに猛烈な萌えポイントがあると主張していたが、そんな事は今言う事ではあるまい。

ペロロンチーノやホワイト・ブリムを相手に言うべき話題だ。

「そういうものか。まあいい、行くぞ」

「はい。お供させていただきます」

クーゲルシュライバーが扉に手を伸ばそうとするとシクススが一步先に扉を開けてしまった。

主人が通りやすくしようというシクススからすれば当然の行動だったが、初めて入る店の扉を開けるワクワク感に拘りを持つクーゲルシュライバーとしては少々不満な対応だった。

シクススは浪漫というものを分かっていない。

その辺りも徐々に教え込んでいくか、そう思いながらクーゲルシュライバーは副料理長自慢のショットバーへと肢を踏み入れた。

「いらつしやいませクーゲルシュライバー様。お好きな席にどうぞ」

「うむ。……4席分ほど専有する事になるが大丈夫かな？」

「問題ありません。本日は貸切になっておりますので」

「そうか……貸切か」

ならば構うまいとクーゲルシュライバーは自身の巨大な腹部を四つの席に乗せた。

4対の肢にかかる負荷が一瞬で軽減される。中々の座り心地だった。

「シクススも座るがいい」

「はい。……し、失礼します」

声をかけられたシクススが緊張しながら席に座った。

意外なことに、シクススは戸惑いながらもクーゲルシュライバーの隣の席に座ってみせた。

遠慮して一つ席を飛ばして座るのではないかと思っていたクーゲルシュライバーにとって、これは嬉しい誤算だった。

緊張して膝に手を置きながらカウンターチェアに座るシクススの姿はとても可愛らしく、大人なムードがたつぷりと漂うこの空間に居てはいけないような気すらする。

しかしそれがいいのだとクーゲルシュライバーは声を高らかにして主張したかった。

現実世界では未成年者を夜遊びに連れていったとして警察の世話になりかねない状況だ。

夢想しても実現することは不可能だったはずの光景に感動しないほどクーゲルシュライバーは人間を止めていなかった。

「何になさいますか？」

副料理長の声にカウンターへ視線を移せば既にお絞りとコースターが用意されていた。

クーゲルシュライバーは副料理長の背後に並ぶ酒を眺めながらお絞りで手を拭く。

ライトアップされた多種多様な酒と器具の放つ輝きが落ち着いた照明の店内においてなんとも華やかだ。

幾つか知らないモルトウイスキーや焼酎があったが、大体の酒は揃っているらしい。

クーゲルシュライバーはシクススが隣に居るといふ事もあって多少気取りながらオーダーを出した。

カクテルを頼んでいるカツコイイ大人、というイメージを与えたいが為の子供っぽいチョイスだった。

「ドライマティーニを。タンカレーとノイリーで」

「畏まりました」

副料理長がカウンター裏にあつたらしい冷蔵庫から霜だらけに

なったキンキンに冷えた酒瓶を取り出した。

消火栓の形をした瓶……とは知識として知っているが、大昔の消火栓とは変な形をしているものだと思う。

カクテルグラスに氷を入れバースプーンで素早くステアする副料理長の見事な手際に感心しつつ、クーゲルシュライバーは隣で眼をきよろきよろ動かしているシクسسに話しかけた。

「シクسسはどんな酒が飲みたい？」

「あ、えっと、私お酒は飲んだことが無いので……クーゲルシュライバー様と同じものでお願いします」

「いや、私の頼んだのはそこそこの度数が強くて辛口だ。初めて飲むには辛かるう……そうだな、ヨーグルトとか好きか？」

「ヨーグルトですか？はい、大好きです」

「そうか。……副料理長、パツシモはあるかな？」

突然話しかけられても作業を淀ませること無く副料理長が答える。

「ごいいますよ」

「ならマリブ……じゃなかった、ココモだっけか？ココナッツリキユールで、ほら、あれだよ」

「コパ・ミルクの変形でごいいますね？畏まりました」

そうそれ！と手を叩くと、クーゲルシュライバーはシクسسが自分を見ている事に気付いた。

一瞬で自尊心が満たされテンションが急上昇し、そして抑圧された。

それを不愉快に思う一方で、あのままでは無様を晒す羽目になっていたかもしれないと精神作用無効化に感謝もしていた。

どうもこの状況はよくない。

いや、非常に良いのだが、それが良くない。

とても可愛らしい女の子が、何故かの確に自分の好み直撃な服を着て、大人のお店で隣り合って座っている。

もしもこれでシクسسの髪の毛が茶色だったら即死だった……。

クーゲルシュライバーは心の中で喜びと不満を同時に感じていたが、それを一切外に出すことは無かった。

程なくして頼んだ酒が出来上がり二人の前に出された。

クーゲルシュライバーはよく冷えているカクテルグラスを持つとシクسسへそれを向けた。

シクسسも出されたオールドファッシュヨングラスを手にとり、おっかなびつくりではあるがクーゲルシュライバーへと向けた。

「シクسسのアルコールデビューに乾杯」

「乾杯、です」

ガラスがぶつかり合う澄んだ音が店内に響くと、二人はそれぞれのグラスに口をつけた。

「ん。美味しい。ココナッツと、甘酸っぱいのはヨーグルト？柑橘？よくわからないけど、甘くて美味しいです」

「そうか、それは良かった」

隣でコクリコクリと酒を飲むシクسسをみてクーゲルシュライバーは少しだけ悲しくなった。

感じる酒の味は変わらない。匂いですら人間の頃と比べて変化は無い。だからこの蜘蛛の体になっても酒に関しては文句はなかった。

しかしたった一つ、この自分の股間にカクテルグラスを持っていくような情け無い格好だけはどうにも受け入れがたい。

自室ならともかく、こういつたムード溢れるオシャレな店でこの飲み方は自分が酷い無作法者に思えて仕方が無いのだ。

副料理長もシクسسも気にした様子は無いが、酒を飲む自分の姿も自己満足の内である以上やはり不満は残る。

（酒を飲むときぐらい人間の姿になれないものだろうか？）

そんな事を思いながらクーゲルシュライバーは最初の一杯を飲み干すと、次の酒を選び出す。

シクسسもまだまだいけるようだし、今日はゆつくりたっぷり酒を飲むことにしよう。まずはスタンダードカクテルからだ。

クーゲルシュライバーはランタン型のボトルに目をとめると、エメラルドクーラーを注文した。



「あのお、お聞きしてもいいれしょうかあ？」

「ん？なんだ？」

二人はスタンダード、オリジナル双方で結構な数の酒を飲んでいった。

飲み始めてもう3時間だろうか？

ゆっくりと味わって飲んでいたものの、流石に毒耐性を持っていないシクススは素面ではいられなかったらしい。

舌つたらずな口調がいつもよりシクススを幼く見せている。

姿勢を保つのが難しくなってきたのだろう。猫背になったせいで自然とカウンターの先に置かれることになった胸がいけない魅力を発していた。

美味しそう……。

二つの意味でそう思う自分をクーゲルシュライバーは心の中で叱っていた。

「へロへロ様は今何をなさっているのしょうかあ？わた、わたひ、へロへロ様にお会いしたいです」

シクススの問いにクーゲルシュライバーは低く唸った。

唐突な話題である。そして中々答え難い性質のものだった。

なんだかんだで最後までギルドに在籍していたへロへロの今について、クーゲルシュライバーはある程度は知っている。

しかしある程度というのはその程度なのだ。

それにNPCであるシクススにどう伝えるかも問題である。

素直に中年サラリーマンの悲哀について話しては至高の41人に対してNPC達が持っている神秘性を消してしまいかねない。

それは今後ナザリックで生きていく自分達にとって有利にはなるまい。

だが、ここで暈してしまうのものにか可哀想な気がするのも事実だった。

なのでクーゲルシュライバーはすこしばかり誤解を助長するような形でシクススにへロへロについて教えてやることにした。

「……我が友へロへロは、原初の世界にいる」

「げんしよのせかい？」

「うむ。ありとあらゆる世界の根源だな。あの広大なユグドラシルの世界とて原初の世界から発生した無数の宇宙の一つにすぎん」

「はええ……」

シクスの返事が生返事にも程がある。

こんな状態で言っただけで聞かせる意味があるのだろうかとも思うが、クーゲルシュライバーは話を続けることにした。

「まあそういう世界があったんだ。元々は私達が暮らしてた世界なんだがな」

「えっ!？」

「そこで私達41人は……そうだな、世界を動かす歯車みたいな事をしてたんだ」

サラリーマンは社会の歯車、という古くから伝わる言葉を利用した例えだった。

実際にサラリーマンだったギルドメンバーは多くは無いが、社会人をサラリーマンに置き換えてもさして差はないだろう。

想像以上に驚愕するシクスと副料理長を横目に、クーゲルシュライバーは酒を一口含むと話を続ける。

「へロへロは今その世界で、システム……なんというか、そう、法則だな。法則を作っているようだ。昼夜問わず、己の精神と肉体をすり減らしながら」

「……なぜへロへロ様はそこまでして法則をお作りになられているんですか？」

ここで金のためと答えるのは良くないだろう。

NPC達に対する説明としても不適切だし、へロへロ本人にとっても失礼にあたる。

たとえ本当に金のためだとしても、ここで自分が言っただけはいけない事だろう。

しかし、AI製作を得意としたあの友人が何を思っただけシステムエンジニアという茨の道に進んだのか、クーゲルシュライバーは知らない

かった。

あのご時勢である。

殆どの企業がいわゆるブラック企業であり、その中でもシステム土方と呼ばれる過酷な職業に自ら進んでいったへ口へ口の気持ちなど本人に聞かねばわからないだろう。

「……成さねばならない事だから」

主に生活の為に。

いい言い方が思いつかず、苦々しい思いで呟いた言葉はクーゲルシュライバー自身が思いがけない重みを持つていた。

聞いていた二人が黙りこくる程度には。

「でも、それじゃあへ口へ口様がお可哀想です……」

沈黙を破りシクススがポツリと呟いた。

カウンターの上でグラスを持つ手が震えている。

「全ての世界を司る原初の世界……へ口へ口様がその世界を構成する偉大なる存在の支柱だとしても、いやだからこそ、そんな苦役は酷すぎます」

現実の世界で社会人がブラック企業で社畜やっています。

ただそれだけの内容だったはずなのだが、クーゲルシュライバーの思惑以上に聞き手の想像は膨らんでしまったようだ。

「もしや、他の至高の御方々も……?」

今まで聞きに徹していた副料理長が口を挟む。

「いや、全員がそうという訳ではない。それぞれ苦労しているのは間違いないだろうがな……つと」

これ以上は話が広がりすぎて制御不能になる恐れがある。

クーゲルシュライバーはそう判断して立ち上がった。

今夜はこれまでだ。

「そろそろ行くぞ。シクスス、立てるか?」

「大丈夫で……きやあつー!」

椅子から立ち上がろうとしたシクススが足首が捻って体勢を崩す。すかさず擬腕を伸ばして転倒を防いだクーゲルシュライバーだつ

だが、その時ふとシクスの服から香ってきた匂いに牙を軋ませた。「すみません！クーゲルシュライバー様にこんな……ひとりであつたす！」

そういつて自分の腕を掴む主の手から離れるシクスだったが、そんな彼女の事はクーゲルシュライバーの頭に入っていなかった。

赤い顔で一通り足のコンディションを確認していたシクスも、グラスを片付けている副料理長も、無言のクーゲルシュライバーに氣付いて小首を傾げていた。

「……ん。そうか。だがしばらくは足元に氣をつけろよ。それではな、副料理長。大変いい酒だった。また来るよ」

「ありがとうございます。またのお越しをおまちしております」

副料理長の声を背中で受けながらクーゲルシュライバーは自室に戻る為に扉を開き、シクスを氣遣うこともなくさっさと出て行ってしまった。

シクスは制御の難しい自分の体に四苦八苦しながらも、ゆっくりと出入り口へと向かう。

まだ3歩も歩かないうちにクーゲルシュライバーが開けた扉は閉まってしまった。

その扉をぼんやりとした目で見つめた後、シクスは主人と別の空間にいる事に安堵して床にへたり込んでしまった。

「はあ……はあ……」

「大丈夫ですか？今チエイサーを持って行きますので」

副料理長の言葉にシクスはカウンターチェアの金属で出来た脚部分に頬を当てながら頷いた。

頷き下を向いた先にはメイビーのスカート。

「ありがとうございます、ミルアニス様……」

間違いなくクーゲルシュライバー様はこの服をお好みになるわ。

その言葉と共にこの服を貸してくれた人物に対しシクスは小さく礼を言った。

25話

バーでしこたま酒を飲んだ翌日、巨大な円卓に牙を乗せながらクーゲルシュライバーは憂鬱なため息をついていた。

頬杖をつく感覚でそれを行っているクーゲルシュライバーは生活指導室に呼び出された学生のような心情だった。

触肢は忙しなく床を叩いているし、乗せられた牙は時折円卓の表面を強く引つ掻き不快な音を立てている。

それらは全てこれから行われるモモンガとの面談に対する不安のあらわれだった。

「そろそろ時間かあ」

クーゲルシュライバーがこのナザリック地下大墳墓第九階層の円卓の間に居るのは、かつて無いほどに憔悴した声でモモンガからメッセージが送られてきたからだ。

アルベドの件で話があるので円卓の間まで来てくれませんか？

そう言われただけでクーゲルシュライバーは此度の話し合いがこの世界に転移してから最も重要で深刻なものになると理解していた。話し合いにはその内容に相応しい場というのがある。

一般的に考えれば、たわいも無い雑談なら廊下でもロビーでもいいし、組織運営に関わる重要な話し合いなら会議室が丁度いいだろう。では、ナザリックにおいてこの円卓の間に相応しい内容の話とはなんだろうか？

アルベドについて、と一言に言ってもその深刻さの度合いとは？

この円卓の間はギルドメンバーの憩いの場であると同時に、ギルド《アインズ・ウール・ゴウン》が何かを決定するために多数決を行う場だった。

くだらない事でも、重要な事でも、大よその方針はこの場で多数決によって決められ、そして実行されてきた。

その実績があるからこそ、態々話し合いの場にこの部屋を指定してきたモモンガが一体どのような話し合いを求めているか察するのは容易な事だった。

加えてメツセージで聞こえてきたモモンガの憂いに憂いたあの声。どう考えても非常に深刻な話し合いになるのは間違いないかった。

「ううう……俺のせいだ、俺の……」

クーゲルシュライバーはある程度までNPC達の忠誠心を信じているが、完全には信用していない。

だからこそナザリックが自分達アインズ・ウール・ゴウンの下に一枚岩であるように出来のよくない頭を捻って策を講じていた。

より忠誠心を引き出そうと耳に心地よい言葉による演説を行い、団結を促すために上映会を行い、功をなした者に対してはささやかではあるが褒美を与えたりもした。

支配者が二人居るといふ内乱の種を危険視し、最終的な人望がモモンガに集中するように仕向けようともしている。

しかしそうした努力を先日のアルベドの一件で台無しにしてしまったのではないか？

アルベド以下NPC達はおそらくは問題ないだろう。

理不尽に怒られたところでその怒りを従順に受け止め、自責の念によって多少行き過ぎた謝罪を行おうとするだけだとクーゲルシュライバーは予測する。

それはそれで罪悪感が酷い事になるのだが、それよりも問題はモモンガとの関係だ。

アルベドを叱りつけた後、モモンガからは確かにNPCに対し理不尽な扱いをするクーゲルシュライバーを責める気配が発せられていた。

ナザリックを一枚岩とするクーゲルシュライバーの目論見は、ギルド長でありギルドマスター権限という絶対的な力を持つモモンガとの信頼関係があつてこそ意味があるものだ。

モモンガが絶対に自分を裏切らず、どんな時でも味方で居てくれる。

そう信じていなければモモンガに全ナザリックの人望を集中させるなんて事は出来ないのだ。

なぜならばもしもモモンガが裏切ったとき、クーゲルシュライバー

に味方するNPCなど居ないのだから。

クーゲルシュライバーにとってナザリック地下大墳墓という楽園で生きていくには、モモンガとの”ネットゲームでの友達”という酷く曖昧な友情をより確かなものにしていくのが何よりも重要なのである。

それが今、危うい。

モモンガはNPC達の後ろに今は居ないギルドメンバーの影を見ている。

今になってカルネ村の救出を決定した時の事を思い出してみれば確信できる。

モモンガは一度理性的にカルネ村を見捨てようとしたがその決定を覆した。

自分達の戦闘能力を調べる為と言っていたが、それこそ取ってつけた理由に過ぎない。

あの時モモンガは今ここにいないたち・みを偲んでカルネ村を助けたのだ。

自分自身の安全とナザリックの安全、そしてギルドメンバーであるクーゲルシュライバーの安全をも優先して。

だがそうだったモモンガの重たい、一般的に見れば異常ともいえるギルドメンバーへの執念はクーゲルシュライバーにとって十分以上に理解できる心情であるし、なによりも非常に都合の良いものだった。

特定の人物に対する異常な執着というのは千切れては混ざり合う支離滅裂とした感情の混沌から生じるものであり、理性や理屈で抑えつけられるものではないとクーゲルシュライバーは信じきっている。

一度そういった異常な執着を抱けばそれを手放すことはほぼ不可能だと身をもって知っているからこそ、モモンガの執着の対象である我が身の磐石の地位を思いクーゲルシュライバーは安堵していた。

だがそれは甘い考えだった。

当然の事ながらギルドメンバーであれば何をしても許されるといふ訳ではない。

執着の対象であるギルドメンバーを思い出させるNPC達もまたモモンガの執着の一部であり、それを不当に傷つける行為はモモンガの逆鱗に触れて当然だろう。

執着の対象に何者かが干渉する。それも自分の認めがたい方法で。もしも自分がそんな事をされたら、制裁を下す以外に選択肢はない。

自分と似た部分のあるモモンガならば、同じように考えても不思議は無い。

勝手な決め付けでモモンガが怒り狂っていると思いだんだクーゲルシュライバーは、過去の自分の所業を思い出してその巨体を震わせた。

無限に湧き上がる邪悪なモチベーション。

途切れること無い残酷なアイディア。

我が身を省みない異常な行動力。

かつて己が発揮していたそれらおぞましい力の数々が、我が身に降りかかるうと思えばその恐怖は当然であり、後悔の念を抱くのも自然な事だった。

しかしその一方で今感じる不安が、過去自分の手にかかった者達の恐怖と苦しみの程を表しているようでクーゲルシュライバーは胸がすくような思いだった。

コストに見合ったパフォーマンスがあるのはとても素晴らしい事だ。

そこまで考えた時、クーゲルシュライバーは舌もないのの一つ舌打ちすると、擬腕の手を組んで祈りを捧げるように擬頭に当てた。

自分自身が持つ吐き気を催す邪悪かつゲスな一面を再確認するのは今の心情的に負担が大きかった。

「ごめんよモモンガさん。でもしようがなかったんだよ。どうしようもできないんだ」

本来自分は心身共に弱い一般人であり、ありふれた所謂『善人』だと信仰しているクーゲルシュライバーは抗いようが無いのだと虚空へ訴える。

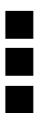
当然それに答える者はなく、クーゲルシュライバーは項垂れた。

——でも、絶対にこの気持ちをつ分かつてくれる。だってモモンガさんは間違いないと俺と同類だから。

モモンガから発せられる慣れ親しんだ執着と依存の湿った香りを思い出しながら、クーゲルシュライバーは自分を勇気付けるように組まれた擬腕を解いて擬頭を毅然と前へと向けた。

その視線の先でモモンガが音も立てずに転移してきた。

暗く落ち窪んだ彼の眼窩に宿る赤光が怪しく輝いていた。



硬質な足音が地に深く刻まれた亀裂に反響する。

風も無いのに揺れる朽ち果てた木の吊り橋が立てるキイキイという不吉な音と相まって非常に不気味な印象の空間だった。

普通の人間にとっては完全な暗黒に支配された場所を危なげない足取りで進むのはナザリツクの絶対支配者モモンガその人である。

「ここと、そこと、あそこ……ええいもう分からん！飛行！」フライ

おっかなびっくり足場を指差し確認しながら歩いてきたモモンガは自分の記憶力の無さに絶望しながら飛行の魔法を使用した。

ナザリツク地下大墳墓第二階層、シャルティアの自室と地下聖堂を繋ぐ吊り橋の踏めば壊れる罫の場所が僅か三步で分からなくなったのだ。

だがそれも仕方がない事だとモモンガは自己弁護しながら眼下の吊り橋の更に下にひしめく亡者の群れをみる。

この道を通るのは年単位で久しく、吊り橋の中心直下にある目的地に至っては領域を担当するクーゲルシュライバーが各種オブジェクトを配置する前に訪れて以来の事になる。

「さて、正式な侵入方法はどうするんだったか……」

モモンガは無数の亡者たちが奏でる怨嗟の声を聞きながら異様に尖った顎を撫でた。

早朝にセツティングしたクーゲルシュライバーとの話し合いはモモンガが思っていたよりもあっさりとは片付いた。

開口一番、クーゲルシュライバーは誠意の籠った謝罪と共に自分の非を認めたのだ。

その上でデリケートな部分に影響する事態になった時、あのような対応になってしまうことは不可避である事を懇々と説明された。

クーゲルシュライバーの説明に非常に粘着質な何かを感じ取ったモモンガがもう十分理解したと言った後、結論としてアルベドに対して直接謝罪する事と、慎重に言葉を選んだ上で必要最低限近づかないように説得する事となった。

前者はクーゲルシュライバーの仕事であり、後者はモモンガの仕事である。

過程をぼかさされながらもアルベドを慰めることに成功したと聞いたクーゲルシュライバーが土下座してまで頼み込んできたのである。

モモンガの本心としては全部クーゲルシュライバーにして欲しかったのだが、また同じような修羅場が発生してはたまらないと渋々請け負うことにしたのだった。

不満な点は多く文句や突っ込みを入れようと思えば幾らでも出来たのだが、モモンガはアンデッドとなって得た忍耐強さと得体の知れない不安からそれら全てを飲み込んでいた。

クーゲルシュライバーから昨晩のアルベドに似た雰囲気を感じたのも理由の一つであるが、モモンガにはなんとしても呑んでもらいたい案件があったのだ。

モモンガ自らがナザリックの外に出て情報収集する。

NPC達が聞けば大反対確定な申し出に、クーゲルシュライバーも一瞬戸惑ったようだったが数秒後には擬頭を縦に振っていた。

我慢した結果かどうかは不明だが、これにはモモンガも安堵した。

モモンガにとってナザリックでの支配者としての生活は非常に精神をすり減らすものだ。

そこにアルベドのカウンセリングが加わった事でモモンガの精神は最早限界間近だったのだ。

喜ぶモモンガだったが、流石に一人旅はどうあってもNPC達が許さないだろうというクーゲルシュライバーの言葉から旅に連れていくシモベの選別が始まった。

人間達の住処であるエ・ランテルに行くつもりはモモンガとしては人間蔑視の思想を持っておらず、それでいて人間と見分けのつかない者が望ましい。

モモンガが最も離れたいと願っているアルベドはその両方を満たしておらず旅の供とはなり得ない。

では誰が適任かと協議を進めていくとプレアデスの一員であるナーベラル・ガンマが最も都合がいいのではとの結論が出た。

出たのだが……。

——二人旅だと流石に少なすぎます。最低でもあと一人連れていってください。

ミュルアニスが回復役とレンジャー代わりになるから連れていけ。そうでなければこの件は呑めないと強硬な態度でクーゲルシュライバーは言い放った。

リフレツシュが一番の目的であるモモンガは従者が増えることを快く思わなかったがそれを受け入れた。

一から十までリフレツシュの為の外出ではない事がその理由だった。

未知の世界を知るにはナザリックの指揮官である自分かクーゲルシュライバーが実際に外の世界に触れる必要があるとモモンガは判断していた。

出来ることならば自分だけではなく同等の地位にいるクーゲルシュライバーにも参加して欲しいのだが生憎彼は人間に変装する事は出来ない。

不可視化や不可知化をしていたとしても、陽光聖典から聞き出したこの世界特有の能力であるタレントの存在を考えるとやはりリスクが大きいように思えた。

それはクーゲルシュライバー自身も同じ考えだったようで、だからこそミュルアニスなのだとは彼は語尾を強くしていた。

ミュルアニスはクーゲルシュライバーを信仰し力の源とするウオーロックでありクレリックでもあるエルドリッチ・デイサイプルだ。

信仰の対象であるクーゲルシュライバーと彼女は職業的にも結びつきが非常に強い。

さらに蜘蛛の女王に仕えるスパイであり召使という設定の種族である事も相まって、ミュルアニスは見たものや感じたものをそのまま主人であるクーゲルシュライバーに送る事が可能だと言う。

そんな便利能力あつたつけ？とモモンガは首を捻ったが、設定文と種族のフレイバーテキストが化学反応を起こしたようだとかクーゲルシュライバーが苦々しい口調で説明してくれた。

結局のところ原因は不明だが、生きたカメラとして機能するのは本当らしい。

そうであるならば確かにミュルアニスは適任だろうということでも旅のお供はナーベラルとミュルアニスの二人に決定したのだった。

そしてそれが今モモンガが普段来ないこの場所へ足を運んだ原因になっている。

「普通に落下すればいいか。どうにかなるだろう」

モモンガは顎から手を離すと亡者の海目掛けて高速で飛翔した。

恨めしげな声を上げて手を伸ばしていた亡者達が慌てた様子でモモンガの落下地点から離れる。

スペースを空ける事など不可能にも思えた群れの中に生じた僅かな円状の隙間にモモンガは突入する。

ゴムの膜を破るような感触と共にモモンガは亡者達が立つ足場に穴を開けてその内部へと侵入を果たした。

「これはすごいな。まるでニューロンだ」

上下逆様だった体勢を立て直し周囲を見回すモモンガの周囲には、無数の包帯でグルグル巻きにされたミイラを思わせる物体が互いに白いロープで繋がれている空間が広がっている。

大きな塊であるミイラ風の物体を細胞体、お互いを繋ぐロープを軸索と見れば確かにここは脳の拡大画像によく似た場所だった。

細胞体の如き糸の塊が仄かに発光しており、それが無数に存在することによってこの空間を淡く照らしあげている。

頭上を見上げてみれば突入した際に生じた穴に小型の蜘蛛が群がっており、その尻から出る銀色の糸で穴を補修している。

ものの数秒で元通りになった穴から視線を外すと、モモンガは周囲に広がるオブジェクトに触れないように下降を開始する。

無数の光源があるとはいえ、底は見えない。

かなりの深さがあるのだろう。

モモンガは黙々と最下層を目指した。

「なんて深さだ。次からは絶対転移を使おう……」

クーゲルシュライバーが手を加えた後、この場所を訪れていなかったモモンガは観光として指輪による転移を使用していなかったが、障害物の多さと想像以上の深さに次回からは転移を使うと心に決めていた。

無駄に出っ張っていたりヒラヒラしている自分の装備を恨めしく思いながらも、ついにモモンガは最下層へと降り立った。

今までどおりのニューロンめいた物体が並んでいるが、一箇所これまで見たことの無いような大きな白いドームがあった。

その半球状のドームにはドアがあり、窓があり、内部からは白い光が漏れていた。

あそこが目的地だ。

モモンガは肩飾りが周りに引つかからないように注意しながらドームに近づいていく。

ニューロンの森を抜けてモモンガがドームの前に立った時、玄関と思わしき扉が開いた。

「いらっしやいませモモンガ様。ここまでの道中さぞかしお疲れでしょう。どうぞ此方へ」

扉を開けて現れたのは一人の女だった。

ドームと同じ光沢を放つ白いローブを着ており、同色のフードを目深に被っておりその顔を見ることはできない。

如何にも余所行きといった声で、しかし他のNPCと比べて仰々し

くない態度で自分を誘う女に、モモンガは好意的な驚きを覚えながらも言われるがままにドームの中へと入った。

開かれた扉をくぐる時に香った花の香がモモンガの嗅覚を優しく愛撫した。

通された室内は一言で言ってしまうば”普通”だった。

モモンガは実際に入った事は無いが、時折CMや雑誌などで見かける一人暮らしの女性の部屋に酷似しているのである。

どうしよう、なんかすこしドキドキする。

部屋全体から香る嗅ぎ慣れない良い匂いがモモンガに異性の部屋にいるという事実を強く認識させていた。

「どうぞ。お掛けになってくださいモモンガ様」

「あつ、はい」

なにその返事。

間抜けな声を出してしまったことを悔やみながらもモモンガは引かれた椅子に腰掛けた。

静かに出されたティーカップが出される。

カップ内の液体が立てる湯気を見て、まるでお供え物だなど思いつながらも今更辞退するのも悪いと思いつつもモモンガは無言を貫いた。

「レモンティーでございます。クーゲルシュライバー様はお好きなのですが、モモンガ様のお口に合うかどうか……」

「ん、いや私はアンデッドだからな。飲む事はできないが……この香りを楽しめただけで十分だ。ありがとうミュルアニス」

「そう言っただけで嬉しいです」

口を手をあてて柔らかに笑うミュルアニスに対してモモンガは感動していた。

なんとという、なんとというほどほど加減！

もしこれがナーベラルであつたら、ありがとうという言葉を見た瞬間やれもつたないだの身に余る光栄だのと大げさな反応を見せるだろう。

それ以前にアンデッドだから飲めないといった時点で土下座するに違いない。

だがミュルアニスはその事はない。

此方に対する敬意は感じられるが、それが堅苦しくないのである。

これはこのナザリックにおいて超稀少な精神的癒しであり自分がNPCに求める関係に近いとモモンガは断言できた。

クーゲルシュライバーがミュルアニスを旅のお供とするように強く推していた理由が分かったような気がした。

なるほど、確かにミュルアニスならば貴重な気分転換の時間をより良いものにしてくれるかもしれない。

「それでミュルアニスよ。今日お前に会いに来たのは大事な話があるからなのだ」

「クーゲルシュライバー様より伺っております。ナザリックの外へ情報収集の旅に出ると」

「なんだ、聞いているのか。まあいいその通りだ。お前にはナーベラルと共に私と外の世界へとついて来て欲しい。ナーベラルは分かるな？」

「存じ上げております。プレアデスの一人で優れた魔法詠唱者の……」

「そうそのナーベラルだ。問題なくやっていけそうか？」

「私には問題などありません。ですが……」

「ん？どうした、なにか心配事でもあるのか？」

口ごもるミュルアニスにモモンガが首を傾げる。

彼女の口ぶりだとナーベラルがミュルアニスに対して何らかの問題を抱えているように聞こえた。

「ご存知の通り私は至高の御方々から特別観察官としての地位を頂いております」

「知っている。このイビルウェブ・ブリッジの状況をクーゲルシュライバーに報告する役目だな？」

「はい。クーゲルシュライバー様が深淵にかけたこの橋にはかの御方が生んだ無数の卵が孵化の時を静かに待っています。私は卵達に異変がないかを観察し、もし異変があれば即座にクーゲルシュライバー様にお伝えする事になっています」

その話はモモンガもクーゲルシュライバーから聞いている。

実際にあるのはクーゲルシュライバーが産んだ卵ではなく、衝撃を与えることで無限湧きする各種スパイダースウォームの発生器なのだ。設定上はミルアニスの言うとおりなのだ。

しかし、それが一体どうしたのだろうか？

訝しげなモモンガにミルアニスはですが、と言葉を続けた。

「特別観察官の業務とはそれに限ったものではないのです。私は言わばクーゲルシュライバー様の目、クーゲルシュライバー様の耳。私が見聞きしたものはクーゲルシュライバー様が望めば即座に伝わりま

すし、伝えることを拒むことは出来ません。それはつまり……」

「つまり、内部監査人扱いされているということか」

首を縦に振るミルアニスにモモンガは遠い目で虚空を見つめた。

クーゲルシュライバーは例えるならば会社の社長とか会長だ。

そんな人物直通の内部監査人、悪く言ってしまうえばスパイや告げ口屋というのが周囲のNPC達のミルアニスの評価なのだ。

それは確かに気まずいだろうしギクシャクするだろう。

鈴木悟として働いていた時、お偉いさんが数分視察に来ただけでも相当な緊張を強いられた経験があった。

それがレベルアップしたものと想像すれば、なるほどミルアニスに近づこうという者は少ないかもしれない。

「私自身はナーベラルさんと仲良くしたいと思いますが、お役目上ナーベラルさんには負担を掛けてしまうと思うのです。ですので、恐れながら私はこの任務には不適任かと……」

「……いや、やはりお前が適任だミルアニスよ」

暫しの時間の後、かけられた言葉に俯き気味だったミルアニスが驚いたように顔を上げるのを見ながらモモンガは心底思った。

お前以外の適任など居ない。

クーゲルシュライバーに出された条件の一つであるし、なによりもナザリックでは稀有な畏まり過ぎない態度がモモンガの心を掴んでいた。

「実際にナーベラルと会って避けられた事があるのか？」

「いえ、面と向かってお会いしたことも無いので」

「なんだ、会った事も無いのか？ならばお前の先の言葉は早計というものだ。不適任かどうかは実際に会ってみてから判断しようじゃないか」

「……モモンガ様のお心のままに」

フードの下から唯一見える唇が微笑んでいるのを見てモモンガは満足げに頷いた。

今日のところはミュルアニスがどんな人物か分かったのもうこれで良いだろう。

NPCの設定を見直そうとしたとき、クーゲルシュライバーの必死の懇願にあつてミュルアニスのテキストデータだけは見ていなかったのだ。

もし設定を見ていたとしても、実際に会わなければどういった人物なのかは判断できない。

やはり実際に自分で体感する事は重要なのだ。

モモンガはナザリックの外へ行こうという自分の考えが正しいことを再確認すると、最後にレモンティーの香りをたつぷりと堪能してからナーベラルの居るであろう第九階層へと転移していった。



モモンガが去った室内でミュルアニスは静かにティーカップの片づけを行っていた。

慣れているのだろう、よどみの無い動きで全て片付け終わると、ミュルアニスには部屋の端に置かれたベッドへうつぶせに倒れこんだ。

白魚のような指が枕元に置かれた四角いぬいぐるみを掴むと、それを引き寄せギョツと抱きしめた。

「……クーゲルシュライバー様、どうしてこんな……なぜ私を遠ざけようとするのですか？」

枕に埋もれたその表情を見るものは誰も居ない。

しかし発せられた涙声はミュルアニスが泣いていることを明確に

示していた。

「一緒に居たいです。お会いしたいです。昔のように叩かれるだけでもいいんです」

「ミュルアニスは過去を思い出す。」

創造された最初の頃は創造主に打ち据えられた。罵詈雑言と共に激しく痛めつけられ、しかし体に痛みは無く、ただ心だけが痛かった。暫くたって創造主は抱きしめてくれるようになった。髪をとかし、頭を撫で、素敵な家と沢山のプレゼントをくれた。優しい言葉をかけられ愛されていると知つてとても幸せだった。

最後に創造主は姿を見せなくなつた。何度か至高の存在が放つ気配を感じることもあつたが、姿を見せてくれることは無かつた。胸が張り裂けそうだった。

「ぐすつ……」

もう二度と会えないのだと絶望していた時、様々な奇跡が重なつて創造主がこのナザリツクへと帰還した。

またお会いできる！

そう喜んだのもつかの間、創造主は会いにきてくれなかつたし、唯一同じ空間に居ることができた上映会では目を合わせてくれもしなかつた。

精一杯の勇氣と我侷を奮い起こして、報告を届けるといふ名目で創造主の部屋に行つても留守で会えず、第六階層に居ると聞いて向かつてみれば姿を見ることも出来ずに階層守護者であるアウラとマールに追い返された。

そして今回のコレである。

創造主から連絡を受けていたと言つてもそれはメツセージによるものであつたし、声を聞くのも忌々しいとばかりに一方的に用件を伝えられただけだった。

更にその内容はナザリツクの外へ行けというもの。もしかして創造主は同じナザリツクに居るのも我慢ならないと仰せなのだろうか？

せめてもの抵抗としてナーベラルをダシに使つてナザリツクに残

れるように進言したが、それはどうも叶いそうも無い願いらしい。
「ひつく……うう……そ、それがクーゲルシュライバー様のお望みならば……」

鼻を嚙り、喉をしゃくり上げながらミュルアニスはベッドの上で蹲った。

クーゲルシュライバー自らの糸で作られ贈られた白い蜘蛛糸のローブに包まれた華奢な背中が激しく震えている。

「でっ……でもおっ……寂しい、寂しいよお」

私はこんなにもあなたの望むままで此処に在るというのに。一体何故？

ナザリツク地下大墳墓第二階層、奈落にかけられた悪魔の橋イビルウエブ・ブリツジ最下層に今日もミュルアニスの嚙り泣く声が静かに染みこんでゆく。

26話

天高く伸びる大樹が無数に存在する大森林。

手付かずの自然がそれぞれの生命力の限り生きている生存競争の場にクーゲルシュライバーは訪れていた。

真紅の瞳に映る何もかもが美しく愛おしい。

自分達の世界では失われた光景ではあるが、亡くなってしまったそれを悲しいと思ったことは余り無い。

無い事が当たり前だったからだ。

しかしこうして本物の自然を目の当たりにすると、自分達が失ったものがどれ程尊いものだったのか身に染みるようだった。

「では調査に行つてきますねクーゲルシュライバー様」

「ああ。圧勝できないと感じる存在と遭遇したら即座に連絡をするようにな。全力で救援に向かう……まあ一通り見て回った感じ、この辺りにはいないと思うが」

周辺一帯の大雑把な偵察を終えたアウラとクーゲルシュライバーの二人は、マーレ率いる工兵部隊が確保したベース前で別行動を取ることにした。

既に脅威となる存在の索敵は二人で森を駆け回った結果終了しており、これからはレンジャー技能を持つ者による地形の調査や有用なアイテムが無いかの探索になる。

そういった作業の力になれないクーゲルシュライバーはアウラについていつて作業の邪魔になるよりは、マーレ達本隊の護衛を行う方が有意義だと判断したのだ。

現在クーゲルシュライバーは、ナザリツクの頂点であるモモンガからアウラとマーレに対し正式に下された「大森林内を探索し、把握せよ。ナザリツクに従属する可能性を持つ存在の確認や、物資蓄積場所の設営も重ねて行え」という命令を遂行中である。

当然ながらアウラとマーレに下された命令なのだから、命じられた二人と与えられた施設設営のためのシモベだけが参加する予定だったのだがそこに本人の強い要望もあつてクーゲルシュライバーも加

わっている。

クーゲルシュライバーがアウラとマーレの任務を手伝うと言いだした時、当然のように大反対の声が上がった。

アウラは与えられたシモベと自分達二人と使役する魔獣達だけで十分に任務を遂行できると主張しており、それを論拠としてアルベドを筆頭としてクーゲルシュライバーの外出に反対するNPCは大勢居た。

しかしそれをクーゲルシュライバーは真剣な眼差しで拒否した。

ナザリックの為に何か力にならなければならない。

先の失態を悔い、熟考した末の申し出であるからは容易には引けなかったのである。

デミウルゴスやセバスと違いアウラが向かう先は人の手が入っていない秘境、そういった場所には比較的強力な脅威が潜んでいるものであり、未知の驚異に対する対抗策として自分以上の適任はいない。

そんなクーゲルシュライバーの言葉にナザリックの知患者二人も一定の理解を示した。

クーゲルシュライバーが持つ速度はナザリック最高峰に位置しており、取得している種族の転移^{フェイズ・スパイダー}蜘蛛や悪魔^{ベビ}食いの大蜘蛛^スには回数無制限の転移能力も存在している。

そこに職業からくる隠密能力の高さと森という領域での優位性を考えると、レンジャーとして高い水準にあるアウラと組むには非常に適しているといえる。

高い隠密性を維持したままアウラと併走可能で、戦闘において格上が現れても対処でき、いざという時の緊急避難能力も備えている人材などナザリック広しといえどそうは居ないのである。

しかしクーゲルシュライバーが懇切丁寧に説明してもナザリックの忠臣にとつては容易に呑める事ではなかった。

最終的には洩るモモンガに対して「危険を感じた時点でナザリックに必ず帰還すること」を条件に鶴の一声を発してもらい無理やりに押し通す事になったのだった。

「お、お疲れ様でしたクーゲルシュライバー様。その、す、すみません

……」

「……マールレ、謝らないでいいって何度も言っているだろう？ こうも恐縮されると私がお前達を虐めているみたいじゃないか」

アウラと分かれるとすぐにマールレが既に5回以上繰り返し返されている言葉でクーゲルシュユライバーを出迎えた。

至高の41人の一人であるクーゲルシュユライバーに自分たちが与えられた任務を手伝ってもらっているという事実がマールレに謝罪の言葉を言わせているのである。

それに対してクーゲルシュユライバーは少々呆れながらも努めて優しい声で不要だと告げた。

恐怖されるようにロールプレイするつもりではあるが、この気弱なマールレ相手にナザリック外で怯えさせるような事を言っても良い事はないだろう。

すでに周囲に脅威になるものが居ないとは分かっているが、なにが起るか分からない未知の世界の事である。

突然の敵襲があった場合、素のステータスにおいてクーゲルシュユライバーを凌駕するマールレが萎縮してはもしかすると不覚をとるかもしれないのだ。

反射的にまた謝ろうとするマールレを手で制するとクーゲルシュユライバーは本隊の中心へと歩き始めた。

全軍撤退する事態になった時、集団の中心部に居たほうが転移するのに都合がいいのだ。

「よいよい、わかっている。何時ものように全周囲警戒状態でアウラの帰りを待とう」

すみません。あつ、また謝って……あの、すみませんさっきのは違うんです。

これまた5回以上繰り返し返されているマールレの言葉を事前に封殺し、向かった集団の中心部には丁度よい間隔で生える三本の木があった。

緋色のローブを着た死者の大魔法使いや重機扱いの重鉄動像の群れを割るように進むクーゲルシュユライバーはその三本の木に向けて擬腕を向ける。

右腕の手首に存在する一つの糸疣から糸の塊が発射され音も無く炸裂すれば、三本の木の間には巨大な蜘蛛の巣が架かっていた。

跳躍し、音も無くその上に着地したクーゲルシュライバーは蜘蛛的な安堵感を覚えながらも最低限の緊張感を胸に空を見上げる。

見上げた先に空は無く、あるのは天から漏れた太陽の光とかすかに透ける新緑の葉だけだ。

森の上空を撫でる風の影響で常に形を変える木漏れ日を見ながらクーゲルシュライバーは己が願望について思いを巡らせた。

(もう二度とアイツに手が出せないほどに遠く行きたい。アイツを想わせる全てから遠ざかりたい。異世界に來た事について念願が叶ったわけだけど、この期に及んでまだ捨てきれないとか我ながら度し難いな)

距離と時間は想いを風化させるなによりの良薬、あるいは毒だ。遅効性だがその効果は確かである。

良薬か毒かは人によるがクーゲルシュライバーにとっては良薬に他ならない。他人を、なにより自分自身を苦しめる執着から逃れることのできる唯一の薬なのだから。

モモンガであれば毒と評するだろうか？よく似ているとはいえ自分とは違う友人を思いクーゲルシュライバーは無表情で笑った。

(この世界で暮らしてただひたすらに時間を重ねて怒りも憎しみも、悲しみも愛情も恋心も何もかも全部風化して無くなればいいと思ってた。でもこの世界にもアイツを思い起こさせるものは沢山あるんだよな)

クーゲルシュライバーの脳裏にアルベドとミルアニス、そしてこの世界の人間の存在が浮かぶ。

それと同時に胸の奥にチリチリと燻るような感覚を覚える。

大嫌いで、それでいて捨てることの出来ない自分がそこに居る事を再確認してクーゲルシュライバーはため息をついた。

(ちよつと、油断しすぎた。その結果アルベドを傷つけモモンガさんに迷惑をかけている。俺個人の事情で仲間を苦しめるなんて許されることじゃない)

そういう事が許されるのはアイツだけだ。

心の奥から聞こえてきた声。

二重人格なんて慈悲が存在しない、無慈悲なまでに自分自身から発せられる声を極力無視する。

(一度暴れ出したら制御不能。なら暴れないようにそのスイッチとなるものを周囲から徹底的に除外する。……それが出来たら楽なんだけどなあ)

ナザリックという組織に属している以上それは難しいのが現状だった。

まさかモモンガ一人を置いてどこかに出奔するわけにはいかない。そんな事が出来るほどモモンガに対して感じる友情は薄くは無いだ。

ならば次善策として出来るのは「感情を狂わすものに」できるだけ近づかない」事。

そうしているうちに想いの風化を待つ。完璧とはいえないがそうするほかない。

今回アウラとマーレの任務に追加要員として志願したのには、ナザリックにいるとアルベドやミュルアニスに会う可能性が高いからというのも理由の一つだった。

「我ながら情けない。精神作用無効化が無かったら今頃どうなっていたんだか……ん？」

小声で自嘲したクーゲルシュライバーが訝しげに首を捻った。

見上げている先。つまり三本の木の枝葉の中に、何か居る。

それにLv100であるクーゲルシュライバーが今の今まで気付かなかったのは潜んでいる何かゴミクズのようにありふれた弱い存在だったから。

気付いたのは風の悪戯によりカモフラージュとなっていた葉が一瞬その身から離れてしまったからだ。

「蜘蛛だ」

その言葉通りに、枝葉の下に潜んでいたのは一匹の蜘蛛だった。

正式な名前は知らないが既に何度か目撃した事のある種だ。

1メートルを超える体を持つのでモンスターの一種だと予想されている。

樹上性らしく大抵は木に張り付いた状態で発見される蜘蛛で、性質は極めて臆病。

此方の戦力が強大故に萎縮しているだけであつて本来は寧猛な性質なのかもしれないが、とりあえず彼らは一度も襲い掛かってきたりはしなかった。

ナザリツクにとって無害な生物であり、特に気に留める必要の無い道行く蟻の如き存在だったが、いま枝葉の下から此方を窺う個体はクーゲルシュライバーの興味を酷くそそっていた。

彼は大変な美少年なのである。

クーゲルシュライバーの蜘蛛的美的センスがこの性成熟したばかりだろう若蜘蛛を褒めちぎっていた。

人間の感覚で言えば美少女と見間違ふような美少年。つまりは男の娘に近い魅力があつた。

「あ、あのお……ソレ、やっちゃいましょうか……？」

「え？あ、いや、まて。待つんだマーレ」

考え込んでいた隙に近くまで来ていたのだろうマーレから飛び出てきた物騒な言葉に待ったをかける。

大方至高の御方を煩わす害虫だとか、上から見下ろすとは何事かとかさういった考えなのだろう。

やる気満々なマーレだったが、折角の美しいものを殺してしまうのは如何にも勿体無かつた。

「……野生動物との触れ合いも野外活動の楽しみのうちだ。アウラが戻るまでの無聊の慰めになる。放っておけ」

クーゲルシュライバーは一礼して集団の外周部へと下つていくマーレを見送ると視線を美少年蜘蛛へと向ける。

見れば見るほど美しく可愛げのある個体だ。

数日前のクーゲルシュライバーならば蜘蛛に対して何てことだと嗜好の変化を再確認して嘆いていただろうが、アルベドとのひと悶着を経て人間の形に似た女性と距離を置きたい今となつてはむしろこ

の出会いには幸運だった。

クーゲルシュライバーは思う。

いつそ人間ではなく、体の嗜好に従って蜘蛛に傾倒すれば良いのではないかと。

（いやまで。それは失恋の悲しみをペットで埋めるとかそういう行為じゃなからうか？）

別にそれが悪いわけではないが、代替品で精神の安定を図ろうとして大失敗したのがミユルアニスだ。

感情の赴くまま相反する心をぶつけるだけぶつけて放棄した過去を思い出すと、この方法は自分にはあつていないと判断せざるを得ない。

ただでさえ黒歴史なのに、仮想世界が現実となりNPCがゲーム時代の事を覚えている現状その破壊力は倍増している。

これ以上の黒歴史増産は許容できなかった。

内心であれこれ思いを巡らせているクーゲルシュライバーだったがその肉体は微動だにせず樹上の蜘蛛を見つめ続けている。

そんなクーゲルシュライバーに何を思ったのか、蜘蛛は僅かな音を立てながら枝葉の中へと潜っていった。

怖がらせてしまったかな？

クーゲルシュライバーがそう思った時、青々とした枝葉の中から小さな、人間と猿を掛け合わせたような人型の生物が上下逆さまの状態で飛び出してきた。

「ぬ……い！」

ぬわーっ！

突如現れた不気味な物体に不意を打たれたクーゲルシュライバーは、口元まで出掛かった悲鳴を精神作用無効化の恩恵によって押しとどめることに成功した。

一体なんだというのか？

強制的に落ち着かされた精神で冷静に観察してみれば、それはやや小柄でやせ細っているがユグドラシルでもよく見かけたモンスターである小鬼ゴブリンもしくはその類縁種であると知れた。

あまりにもフレキシブルに揺れる頭部と細い首にくつきりと残る索状痕から既に絶命していることがわかる。

すわアンデッドの類かとも思ったが、先ほどの蜘蛛がゴブリン(仮)の左足を啜えているのが見えた。

「どうやらこの死体はこの蜘蛛が狩ったものらしい。」

「……それ、どうするつもりなんだ？」

いやな予感がして声に出して問いかけるクーゲルシュライバーの眼前で、美少年蜘蛛はおずおずと自らの獲物であるゴブリンの死体をクーゲルシュライバーの張った蜘蛛の巣の傍らに置いた。

そして脱兎の如く元居た枝葉の茂みに逃げ込み、その影から愛らしい頭を出してクーゲルシュライバーの動向に注目しだした。

「なん……だど？」

クーゲルシュライバーは自らの擬頭をやまいこの女教師怒りの鉄拳によって殴打されたかのような衝撃を感じた。

様々な考えが錯綜する。

狩りの労力、ゴブリンの獲物としての価値、野生動物に対する常識、此方を見つめる熱心な瞳、恵まれた？それともプレゼント？等々……。

クーゲルシュライバーは単に置かれたゴブリンの死体に何かをやる前にすかさず真意看破を使用した。

暫しの沈黙。交差する八つの瞳と瞳。

やがてクーゲルシュライバーは深いたため息をついた。

「……なんという事だ」

真意看破により読み取れた情報はいたってシンプルであり純粹だった。

なにせ相手は大きいとは言っても蜘蛛である。複雑な思考ができるほど知能は高くない。

見方によっては恥ずかしそうに此方を見つめる蜘蛛の一連の行動。

その真意は端的に言えば「お姉さん、僕と子作りしてください」というものだった。

クーゲルシュライバーの30年に届かない人生の中で最も衝撃的

な求愛であった。



クーゲルシュライバーが紅顔の美少年に真摯な求愛を受けている頃、モモンガはイビルウェブ・ブリッジ最下層にあるミュルアニスの部屋でレモンティーの香りを堪能していた。

ナザリックの支配者である自分の裁可が必要な案件を全て片付けたモモンガは、内政を自分より優秀なアルベドに押し付けると逃げるようにこの部屋へとやって来ていた。

いまやモモンガにとってミュルアニスの守護するこの領域は隠れ家的癒しスポットと化していた。

夜な夜な訪れるアルベドとの逢瀬にアンデッドらしくもなく精神を磨耗させたモモンガには、ミュルアニスのそつと寄り添うような人柄がたまらなく心地よいのだった。

もしかしたら友達になれるんじゃないだろうか？

心の片隅でそう思ってしまう程度にはモモンガはミュルアニスを気に入っていた。

「それでモモンガ様、本日はどのようなご用件でしょうか？」

「うむ、例の情報収集の旅に関する事だな。ナーベラルの意識調査をした結果特に問題がなさそうだったので、旅の供はお前とナーベラルの二人に決定したという事を伝えにきたのだ」

アルベドやデミウルゴスが反対しようとも絶対に押し通すつもりでモモンガは既に供になるナーベラルにもその由を伝えていた。

それと同時に最終確認として人間に対する評価を聞いたのだが、ギリギリ許容範囲と言えるものだった。

上映会の効果なのか本人の努力次第でなんともなりそうな感覚があり、当初の予定通りナーベラルが供としていくことが決定したのだった。

「そうでしたか……」

覇気の無いミュルアニスの声にモモンガは一体どうしたのだろう

かど無い眉をしかめた。

「どうした？なにやら元気がないようだが」

「いえ、そのようなことは……」

すこし俯きながら語るミュルアニスの姿にモモンガは自身の使命感を激しく燃え上がらせた。

デスナイトを用いて階層守護者の困ったことを聞いて回る……相談を行った事は記憶に新しい。

慣れない事ゆえ効率的とは言えず、むしろ自分の愚かさを思い知らされる事の方が多かったが、それでもいくらかの人物については有意義な結果を出せたと自負している。

自分の目が節穴でなければ眼前のミュルアニスは悩みや不安を感じているのだろう。

ここで応えてやらねばなにが上司か。

モモンガは優しい口調でミュルアニスに語りかけた。

「なにか悩み事のようなな。私でよければ話してみないか？力になれるかもしれない」

「えっ？い、いえ、モモンガ様を煩わせるわけにはまいりません」

「という事は悩みがあるんだな？」

「うっ」

肩をすくめて俯くミュルアニスにモモンガはあくまで優しく話しかける。

「ミュルアニスよ。お前も先の上映会には居たのだろう？あの時我が友でありお前の創造主であるクーゲルシュライバーが言った言葉を思い出してみよ。お前達との絆は我々アインズ・ウール・ゴウンを繋ぐ絆になんら劣ることの無いものなのだ。大切なお前達が何か苦しんでいるのであれば私がそれを助けるのは当たり前ではないか」

「モモンガ様……」

自分を呼ぶミュルアニスの声に確かな手ごたえをモモンガは感じていた。

暫し躊躇するかのように口を開いては閉じるを繰り返していたミュルアニスだったが、ついに話を始めた。

「……寂しいのです」

「寂しい？」

「はい。ただそれだけなのです」

口元だけで儂げに微笑むミュルアニスにモモンガの父性が激しく掻き立てられるが、それを抑えて寂しいとは一体どういう事かを考える。

このイビルウェブ・ブリッジには滅多に人は訪れない。それもそのはずここは一つの罫であり、ミュルアニスに用事がある者以外では吊り橋から落下した侵入者ぐらいしか入ってこない。

侵入者が来ないのであればここを訪れる人物はほぼ皆無だろう。

そして以前聞いた内部監査扱いで避けられているという話。

ナーベラルに聞いてみたところ確かに多少の緊張はするが、避けるほどのものではないという答えが返ってきたがナザリックのシモベ全員が同じ意見という訳ではないのだろうか？

それともミュルアニス自身が勝手にそう思いこんで壁を作っているのだろうか？

もう少し話を聞いてみないと分からないが、モモンガはこの時点でミュルアニスに対してかなり同情的になっていた。

こんな地の底でたった一人、孤独を感じながらひたすら孵ることに無い卵が孵るのを待つ日々。

そののなんと空虚なことだろう。

心を繋ぐ誰かを求める気持ちがモモンガには痛いほど理解できた。

この子を自分のようにしてはいけない。

いや、自分程度ならまだマシかもしれない。

下手をすればあのアルベドのように寂しさから精神を病んでしまう可能性すらある。

貴重な癒し要因であるミュルアニスをあのようにするわけにいかない。

「よく話してくれたな。しかしただそれだけなどと言うものではないぞ。寂しさは放置すると病に転じるものだ。決して放置してはならないものなのだよ」

「はい、しかしモモンガ様……」

「いいや、しかしは無いぞミルアニス。心とは容易く病むものだ。お前のその寂しき、どうにか解決してみせようじゃないか。私に任せとおきなさい」

具体的な方法はまだ浮かばないがモモンガがミルアニスに対して言い切ってみせたのは、自身の退路を塞いで解決するほかになくする為だった。

言い切った直後に本当に大丈夫かと弱気が頭をもたげるが覚悟を言葉にしたのだからもう遅い。

それに目の前でミルアニスの白い顎に涙が伝っている。

これでやらねば男が廃るといふものだった。

「モモンガ様の慈悲にこのミルアニス、なんとお礼を申し上げたらいいか……」

「ああ、泣くな泣くな。この程度の事何ほどのものではない」

椅子から立ち上がりフードを取って深々と頭を下げるミルアニス。

一瞬だけ見えた彼女の顔は多くのNPCがそうであるように整っていたが、どこか親しみを覚えるような素朴さがあった。

ナーベラルやアルベドのように絶世の美女とはいかなくとも品があり愛嬌のある顔だ。

そんな顔を美しい涙で濡らすミルアニスを宥めながらモモンガは思う。

カウンセリングとは大変な責任があり実際多大な労力を要するものだが、大切に思う誰かの力になれるのはとても気分がいいものだ。

ふとアルベドの事が思い出される。

余りの重症ぶりに自分では手に負えないと徐々に心を遠ざけていたが、アルベドとて苦しんでいるのだ。

クーゲルシュライバーがビッチ嫌いという事は、自分が設定を弄っていないなかったとしてもアルベドは拒絶されていた可能性が高いだろう。

しかしただのビッチではなく愛する事を強制したのは自らの所業に端を発する。

アルベドを狂わせたのは自分なのだ。

確かにアルベドは難物だ。自分の手には余る。

しかしだからと言って見捨ててしまえば誰が彼女を救えるというのだろうか？

アルベドに関してクーゲルシュライバーは全く役に立たないのだから、それは自分自身、モモンガを置いて他に居ないだろう。

(もう少し、アルベドとも向き合ってやらないとだな)

底なし沼の如き渴愛に狂った女を思い、モモンガはもう少し頑張ってみようかなと思った。

ミルアニスを元氣付けられた自分になら、もしかすると同じようにアルベドを助けられるかもしれないと思ったから。



恋愛において一途な思いに対して一途に応えられないならば、希望が残る余地も無くはつきり拒絶するべきだ。

そう思い差し出された貢物をクーゲルシュライバーが払いのけたのはもう2時間前の出来事である。

にもかかわらず眼前にまだ体温の残るゴブリンの死体があるのは、クーゲルシュライバーが非情に徹し切れないがためだった。

「おまえ、また持ってきたのか……」

巨大な岩と木の間で張られた蜘蛛の巣の上からクーゲルシュライバーは呆れた声で話しかけた。

声の先には重鉄動像に隠れるように此方を窺う美少年蜘蛛がいた。

「や、やっぱり、やっちゃいましたよ……?」

「……………いや、いい。放っておいてやれ」

主人を思いやるマールレの提案を却下するとクーゲルシュライバーはゴブリンの死体に糸を飛ばし、そのまま腕を振り上げ遠くへ投げ飛ばした。

例の蜘蛛は放物線を描いて飛んでいく死体を見送ると元氣なく草むらへと消えていった。

初めてあの蜘蛛と出会ってから既に2度はベースの場所を変えているが、その都度彼は何処からか現れてはクーゲルシュライバーの前にゴブリン等の死体を置いていく。

見た目が大変愛らしく殺すのは忍びない為に部下達には手を出さないように命令したのだが、それがいけなかったのだとクーゲルシュライバーは後悔していた。

まさかこれほどまでにしつこい、もといガッツがあるとは思ってもみなかったのだ。

「次にアウラが帰って来たらガツンと言ってもらおうか。ビーストテイマーの言葉なら従うだろ」

アウラと組んで周辺の偵察を行い、その後の精密調査を終了させたアウラと合流してから本隊を移動させ新たな場所をまた偵察する。

それを繰り返して未踏破地域を徐々に埋めているが、一回の偵察範囲が広大なため既にかかりの距離を移動している。

あの蜘蛛が元々住んでいた場所はもう遙か後方だ。

クーゲルシュライバーにはよく分からないが野生動物には縄張りなどがあるだろうし、これ以上あの本来の住居から離れるようなことがあつてはあの蜘蛛の為にならないように思えた。

「あ、あのう……貢物を受け取れば、もう来なくなるんじゃないかなつて、お、思います」

「ええ……ゴブリンの死体を受け取るのか？」

「すつ、すみません！馬鹿な事をいたしました！」

頭を下げて必死に謝るマーレだが、彼の言には一理ある。

あの貢物に求婚が絡んでいなければ、たとえゴブリンの死体であろうとも受け取ってもいい。

そう、求婚が絡んでいなければ。

「頭を上げろマーレ。そうだな……受け取ってやっても構わないのだ。野生動物とはいえ私を純粹に慕う者が差し出してきた貢物。物品自体は不要なものとは言えそこに込められた思いを私は尊重した

いし嬉しく思うのだ」

あの蜘蛛は受け取り拒否したゴブリンの死体に手をつけない。折角苦勞して得たであろう生きるための糧を、一度捧げたものだからなのか食べて自分の活力に変えようとしないので。

最初の一回以降真意看破を使用していないため、その行為にどのような意図があるのかは不明だ。

しかし不明だからこそついついその行動を擬人化して捉えて、いじらしいと感じてしまう。

ただの性欲ではこうはいかないのではないかとすら考えるほどに。「では何故受け取らないんですか？」

「それはなマール。奴が、あのチビスケが私に恋しているからだ」

「こつ、恋！至高の御方に対して!？」

褐色の頬に差す朱色は羞恥かそれとも怒りなのか。

素っ頓狂な声をあげたマールに周囲のエルダーリツチ達が何事かと視線を向けてくる。

「そう、恋だ。それもかなり本気のな。しかし私にはその恋に応じるつもりは無いから、ああして分かりやすく拒絶しているわけだ。こういうった場合、相手が本気であればあるほど下手に優しくするのは残酷な事なんだよ」

自分の何もかもを捧げて愛した結果が求めるものと違った時の絶望感は筆舌に尽くしがたい。

それは愛する者を生き返らせようと死霊術に身を堕とし何もかもを犠牲にして外道を邁進した結果、得られたのは知性の無いゾンビだった……そんな救いの無い物語の主人公が感じる絶望感と同等だとクーゲルシュライバーは断ずる。

そんな思いは、するのもしさせるのも嫌だった。

「そ、そういうもの、なんですね。……えへへ」

「うん？どうしたマール。なぜ笑う？」

「いえ、そ、そのお……やっぱりクーゲルシュライバー様は真面目な方なんだなって」

「……そうか？自分ではとてもそうは思えないのだが。というかそれ

でなんで笑うんだ？嬉しいことかそれは」

「は、はい！嬉しいです。だってそんな真面目な方に忠誠を受け止めてもらえて、き、き、絆まで結んでいただけてると思うと」

すごく嬉しいです。

そう言つて顔を赤らめて笑うマーレにクーゲルシュライバーは愕然とした。

マーレが言っているのは上映会前にクーゲルシュライバーが騙つた「主従の絆」の事だろう。

シモベは忠誠を捧げ、主はその忠誠に応える。

公の場で結ばれたその絆は実のところクーゲルシュライバーの不信により成り立ってはいないのだ。

その事を知るのはナザリツクの中でクーゲルシュライバーただ一人。

マーレはまんまと騙されて自分たちが捧げる忠誠が絶対であるように、クーゲルシュライバーが自分たちに寄せる信頼も絶対であると思っているのである。

それがクーゲルシュライバーには堪らなかった。

「マ、マーレ……」

「はい？……えっ？えっえっえっ！？」

突如クーゲルシュライバーの擬腕に抱かれたマーレが耳まで赤くして困惑の声を上げる。

黒檀色の胸板に包まれるマーレの姿に、先ほどから視線を向けていたエルダーリツチ達が速やかに視線を外し背を向けた。

「わた……俺も、お前達のそんな気持ちがとても嬉しいぞ」

心の暗雲が晴れていくようだった。

純粹無垢な子供のような姿のマーレだからこそ気付かされた。

自分自身の理論でいけば、この胸に燻る不信は許されるものではない。

恋か忠誠かの違いはあるが、どちらも相手を必要とする強い感情に変わりはないのだから。

「許せマーレ。私はお前達を信頼すると言っておきながら心の奥底で

は疑っていたのだ。忠義を捧げるのが当然だと言うお前達が信じられなかった。この不義をどうか許して欲しい」

「そ、そんな、許せだなんて、そんな事、仰らないで下さい。僕達をお疑いになるのは、その、仕方ないことだと、思いますし」

かつての1500人によるナザリツク侵攻を防ぎきることのできなかった自分達が忠義を語ろうとも、そこに疑いが生じるのは仕方がないとマールレは言う。

なぜならば真の忠義者であれば主人に仇なす叛徒共を皆殺しにすべきであり、それに失敗したのだから口で言う絶対の忠義には至らない、むしろ主人を危険に晒すことをよしとする叛意を持っていると判断されてもおかしくないのだから。

それを聞いてクーゲルシュライバーはなにその頭逝ってる論理はと若干以上に引いていたが、自分の告白に対しマールレが怒っていない事を喜んだ。

「ごめんな。ありがとう」

胸に抱いたマールレの額に自分の擬頭を当ててクーゲルシュライバーは決心した。

もうNPC達の忠誠心を疑うのはやめよう。

裏切りを警戒し無実の者を疑う心こそが裏切りを誘うのだ。きつとそうに違いない。

「お前たちの事を心の底から信頼する。だから、これからもよろしくな」

「……はいー」

マールレは赤くなつた夢心地のような表情でクーゲルシュライバーと額を合わせながら答えた。

そんな二人を見る者はエルダーリツチ達が背を向けている以上誰一人としていない。

筈だったのだが、重鉄動像の影に隠密スキルを使用して覗き見るものが一人いた。

「はわわわ……マールレなにしてるのよ……」

精密調査から戻ってきていたアウラが目にあてた両手の隙間から

その光景を凝視していた。

クーゲルシュライバーの左腕によつて肩を、そして右腕によつて腰と尻を抱かれ持ち上げられているマールレのスカートは女物の下着に覆われた臀部がむき出しになるほどに捲り上がっている。

その状態で頭部を合わせる二人は見ようによつては口付けしているようにも見えてしまいアウラの頬を熱くさせていた。

結局アウラがたった今帰還した風を装いながら二人の前に姿を現したのは、クーゲルシュライバーによつてあちらこちらを撫でられたマールレがのぼせたように意識を飛ばしてからだった。

この日この時よりクーゲルシュライバーはナザリツクのシモベに對して全幅の信頼と愛情を向けるようになる。

自身の心を掻き乱す可能性のあるアルベドやミユルアニスという例外を除いて。

そして多くの者に暖かく接する中、例外である彼女達を遠ざけるようになるのだった。

その一方でモモンガはアルベドとミユルアニスの抱える寂しさを解消せんと動き始める。

一見平和な日常の水面下で、何かが始まってしまった。

27話

金具の立てる極僅かな音と共に扉が閉まってからたっぷり5分間。執務室だけではなく、スイートルームを模したこの広大な部屋からメイドや護衛を含む部下達が余裕を持って退室できる時間を経てからモモンガとクーゲルシュライバーの二人は大きなため息と共に姿勢を崩した。

「ああああ……ようやく終わったよ」

「予想していたとはいえアルベドは強敵でしたねクーゲルシュライバーさん」

この世界に転移してから7日と21時間。

いい加減慣れてきた自室にてモモンガは愛用の執務机に突っ伏した。

違法ギリギリの長時間サービス残業によって意識が飛んだサラリーマンのような格好だ。

そのだらけきった姿はモモンガ自らが情報収集のためナザリック外へ赴く件について、NPC達の承諾を得るのがどれ程困難な作業だったのかを如実に表していた。

「上位者一人でタッグを組んでもこれほど手こずるとはなあ。デミウルゴスの援護がなければどうなっていたか……頭がいい人を相手にするのは難しいねモモンガさん」

「ほんとに疲れますよお。いや、私アンデッドだから疲労無効ですけど」

「ナイス死体ジョーク。いい感じに疲れてますね。そんなモモンガさんに、はい。これお土産です」

「おみやげ？」

「ええ。今日アウラと一緒に森を探索した時に見つけたんです」

上半身を起こしてクーゲルシュライバーに視線を向ければ、黒檀色の擬腕には小さな花のブーケと洋ナシに似た形の果実が握られていた。

それらがそっと机に置かれれば、得も言われぬ甘い芳香がモモンガ

の嗅覚を刺激した。

これは一体どうしたのだろうかとかクーゲルシュライバーを見れば、邪神は擬腕の掌をあわせていた。

「お供え物」

「死体ジョークですか!? そりゃあ私は死体だけどそれでも生きてるんですよー!」

「うーん、じゃあ即身仏とかどうだろう!」

「そういわれるほど皮ついていませんって」

「でも仏みたくないもんじゃないですか」

「どこが?」

「……モモンガさんが思っている以上にアルベドの件についてありがたく思ってるんですよ? いや、本当に感謝してますモモンガ大菩薩様」

「あ、あー……」

急に畏まった態度で頭を下げるクーゲルシュライバーにモモンガはむず痒さを覚えた。

こうしてギルドメンバーに面と向かって感謝されるとどうにも気恥ずかしい。しかしモモンガはその気恥ずかしさが嫌ではなかった。

ああ、自分はいまギルドの役に立っている。

指先で頬を搔く。カリカリと骨が擦れる乾いた小さな音が鮮明に二人の耳をくすぐった。

「その件はもういいですって。人間何かしら無理なことはありませんし……というかギルドメンバーが困っているんですからギルド長としてお手伝いするのは当たり前というか」

「いや、こんなの私の我がままなんですから普通はもつと怒ってもおかしくないんですよ? いくらギルド長だからって……」

「いいんです、いいんですって! そりゃあ最初はちよつと思っ所はありましたが、その……なんというか」

言葉を濁すモモンガの顔をクーゲルシュライバーが凝視する。

その視線の圧が続きはなんだと問いかけているようで、しかし続く言葉を口にするのが恥ずかしくモモンガは視線を泳がせた。

フラフラと意味もなく部屋の内装を歩き来する視線は、最終的に机上の花束と果実へとたどり着いて止まった。

くだらないジョークが挟まれたが、これらの品々はクーゲルシュライバーが自分への感謝の気持ちとして持ってきた物なのだろう。

見た目と香りで楽しめる物をチョイスしたのは食事が出来ない自分を思いやつての事に違いない。

我ながらチョロイなと思うがこうして気遣ってくれる仲間の心が嬉しくて、本来ならあやふやになって消えていくはずだった言葉をモモンガは口に出すことが出来た。

「だって、友達じゃないですか」

「はうっ!？」

「えっ、なんですその反応!?もしかして私の勘違いですか!？」

大きく身をのけぞらせて奇声を上げたクーゲルシュライバーの姿に、モモンガも思わず立ち上がった。

勝手に友達だと思いきんでいたが、相手にとって自分は友達扱いではなかったとしたら悲しい以上に恥ずかしすぎる。

「い、いや!?!違う違う!友達友達!私達友達ですよ!そう友達!」

「うっわなにその取り繕うような反応!違うなら言ってくれていいんですからね!?!」

「いやいやいやモモンガさん落ち着いて!嘘じゃないから!嘘じゃないからお願い、後光背負って眼から炎みたいなの吹き上げながら迫ってこないで!なんか怖いよ!」

その言葉に、クーゲルシュライバーのツヤツヤと黒光りする擬頭に映りこんだ自分の姿に気付いたモモンガは倒れこむように椅子へともたれ込んだ。

連発されていた精神作用無効化により感情も安定してきた。

それにより先ほどまでの自身の醜態を冷静に理解できたモモンガは、もう一度精神を抑圧されてから冷静さを取り戻した。

「……すみません。取り乱しました」

「あ、はい」

二人の間に無言の静寂が訪れた。

非常に、大変に気まずい空気だった。

居もしない天使が通り過ぎていく様を幻視するほどに。

なにか、話題をずらそう。

そう思つて口を開こうとしたモモンガに先んじて、クーゲルシュライバーが蝕肢を蠢かせながらポツリと呟いた。

「モモンガさんが俺を友達と思つてくれてるように、俺もモモンガさんの事を友達だと思つてますよ。ホントです」

「えっ」

「だからあ！俺達は五分五分の友情で結ばれた友達同士ですつて言つてるんですよ！二人だけの時はもう私とか言いませんからね！」

「そういうのつて一人称よりも敬語をやめるのが先なんじゃ……」

「あなた相手の癖だからしようがないんですよ！というかなんなんですかコレ！甘酸っぱいよ！なんでいい歳したおっさん同士で、骸骨と蜘蛛でこんなローティーンめいたやり取りしてるんですかあ！」

「あの、俺そういう趣味無いんで……」

「そんなん知ってるよ！俺だつて女の子の方が好きだよ！」

漫画のように大袈裟な身振り手振りで騒ぐクーゲルシュライバーが突然動きを止めた。

しげしげと自分を見つめる八つの真紅の瞳をモモンガはいたずらに首を傾げ軽やかに見つめ返した。

「……あれ、今モモンガさん俺って言いました？」

「言いましたが、なにか？」

「え、いや、なにかつて……」

しどろもどろになつて擬頭を搔くクーゲルシュライバーを見てモモンガは小さく笑つた。

「五分と五分なんでしょう？だったら俺も二人の時は私なんて言いませんよ」

支配者ロールをしていない自分本来の声でモモンガは恥ずかしげもなく言い切つた。

あつけに取られたように棒立ちになるクーゲルシュライバー^友が見ていてとても面白かつた。

ああ、なんていい気分なんだろうか。

精神作用無効化を解除していなかった事が本当に悔やまれる。

「モモンガさんって、ホントもうさあ……」

「なんですか？」

「いや、いいです。なんでもないです」

「えー、なんですか？ 気になるから言ってくださいよ」

「なんでもないんですってば！ ほら、こんな事してる場合じゃないでしょ？ モモンガさんは明日出発なんだからさっさと連絡会終わらせちやいましょうよ」

クーゲルシュライバーが虚空より封筒を取り出して押し付けるように差し出してくる。

もう少しジャレていたいなと思いつつ、モモンガは封筒を受け取ると自らも机の中から同じ封筒を取り出しクーゲルシュライバーへと差し出した。

クーゲルシュライバーが開封するのを見届けるとモモンガも蜜蝋をへし折り封筒の中身を取り出す。

中から出てきたのは「キャラクターシートver. 2. 1」と表記された紙を先頭にした数枚の書類だった。

「あ、新規の部分にカラーマーカー引いてくれたんですね」

「前貰ったモモンガさんのキャラシに引いてあったから。ホントすみません、俺って書類仕事とかしたこと無いから……今まで読みにくかったでしょう？」

「いやいや大丈夫ですよ。読みやすくなったってだけで、今までのが読みにくかったわけじゃないので」

モモンガもクーゲルシュライバーも慣れた手つきでお互いが提出した書類を読み進めていく。

クーゲルシュライバー手製のキャラクターシートを使った情報共有は毎日欠かさず行われており、書き込まれる情報の量は日に日に増すばかりだ。

能力の検証結果から部下達に行った様々な対応まで細やかに記された書類にお互い嘘は書かない約束だった。

モモンガの胸に小さな痛みが走る。

アルベドとの夜の関係について、クーゲルシュライバーに渡した書類には一切記載されていない。

隠し事や嘘が許されない書類に、自分は隠し事も嘘も忍ばせているのだ。

それはもちろんモモンガ個人の感情もあるが殆どはクーゲルシュライバーを思いやつての行為である。

とはいえ先ほど友情を暖めあったばかりの友人に隠し事をしている自分がモモンガは好きではなかった。

もやもやした気持ちを抱えながらモモンガは書類を注意深く読み進める。

クーゲルシュライバーの渡してくる書類には時折驚くような内容が記されている。

最近ではエントマに褒美として《ウオール・オブ・ヴァーミン》の卵を渡したという記述がそれにあたる。

はじめてその記述を見たときはアルベドと一夜を共にした後だったので今更感があったが色々と合点がいった。

アルベドがあんな無茶なアプローチを取った原因はエントマの持つ卵であり、ひいてはそれを渡したクーゲルシュライバーにあったというわけだ。

その事に気付いていなかったクーゲルシュライバーに事の真相を伝えてみれば、それはもう見事な落ち込みっぷりを披露してくれた。

唐突に擬頭を前肢で切り落としたときは本当に焦ったものだ。数分後には時間経過による自動回復によって元通りに生えてきたがなんと肝を潰す光景だった。

そこまで責任を感じるならその分アルベドへの謝罪に心を込めてやってくれと伝え、もう二度と迂闊に卵をプレゼントしない事を約束させてこの一件は一応は落ち着いたのだった。

(それぞれの発生時期から考えてあの時は無理だったけど、情報があと少しだけ早く手に入っていたらアルベドとクーゲルシュライバーさんが衝突するのを回避できたかもしれない。情報はしっかり把握

しておかないとな)

情報と、それを手に入れるまでの時間の大切さを再確認したモモンガは慎重に書類を読み進めていく。

その赤い眼光がピタリと止まる。

そして止まった付近を何度もなぞるように行き来すると、モモンガはクーゲルシユライバーを睨むように凝視した。

「あの、クーゲルシユライバーさん？ちよつとここに書いてあることなんですけど」

「もう其処まで読んだんですか？モモンガさんは読むの早いですね」「……どういふことか説明してくれるんですよね？」

能天気なクーゲルシユライバーの声にあくまで真剣に言葉を返す。

返答如何によつてはモモンガの骨の右手が白い稲妻となつて邪神を打ち据えるだろう。

「もちろんです。元々モモンガさんに相談するつもりだったんですよ」

相談するならもつと前に相談して欲しい。

そう思いながらモモンガは手に持っていた書類を机上に投げ出した。

空気を含み柔らかに着地する書類。

蛍光マーカーで強調された一文にはこうかかれていた。

——森林探索時の取得アイテム：現地生物との受精卵（蜘蛛型生物×クーゲルシユライバー）

とにかく、モモンガには説明が必要だった。



クーゲルシユライバーの目にその光景が飛び込んできたのはアウラと一緒に未踏破領域の偵察を行っていた時だった。

僅かに開けた森の一角で複数のゴブリンと、それよりも巨大で逞しい肉体を持った見るからに知性が低そうな亜人種人食い大鬼の集団がなにかを袋叩きになっている。

別に珍しいことではない。

この森は多種多様な種族の生活の場であり生存競争の場だ。

ここまでの行軍で似たような光景は幾度となく見かけていた。

クーゲルシュライバーもアウラも今更特に何を言うわけでもなく、ああやっているな、と一瞥してハイド状態のまま通り過ぎようとした。

だからクーゲルシュライバーがそれに気付けたのは偶然であり、センチメンタルな言葉に直せば運命だったのかもしれない。

「チ、チビスケツ！」

「うええっ?!私ですか!?!」

シャルティアが自分を呼ぶ時の名を叫んだクーゲルシュライバーに、先導するアウラが何事かと目を白黒させる。

そんなアウラに目もくれずにクーゲルシュライバーは前肢を振り上げ集団暴行の場へと風よりも速く駆け出していた。

オーガが啞える枯れ枝のような脚にも、ゴブリンの隙間から見える歪に盛り上がった大きな腹にもクーゲルシュライバーは見覚えがあった。

どの部位も胸が温くなるほど愛らしい造形であり、見間違うことなど無いほどに特徴的だ。

袋叩きにあっているのは自分に一途な恋心を捧げるあの美少年蜘蛛で間違いなかった。

「クソがー」

口を衝いて出てきた罵倒と共にクーゲルシュライバーの首切り鉞めいた前肢が振るわれる。

風のうねりと言うには余りにも短く低い爆音と共に、分厚い前肢の腹がゴブリンとオーガ達を叩いた。

鎧を身に着けていない相手に対するハイド状態からの奇襲は、峰打ちに近い殴打にも拘らず、触れた者の首を鋭利に切断した上でその全身を木っ端微塵に打ち砕いた。

クーゲルシュライバーの取得する職業に由来する常時発動型特殊技術の内、切断魔スラッシュヤーによる鎧を装備していない者に対す

る通常攻撃が必ずクリティカルになる《ソフトスキンキラ》、ハイド状態からの攻撃の威力を増大する捕食者プレデターと各種ホラー系職業クラスが持つ複数の《不意打ち》の効果が、クリティカルした相手の首を切断し即死させる首切りヴォーバルが付与された爪に乗った結果である。

ゴブリン達だった血煙を前肢で扇いで散らし、クーゲルシュライバーは身を屈めて倒れ伏す蜘蛛、チビスケを見た。

「……馬鹿な子だ」

チビスケは虫の息だった。

二本あった雄らしくないほつそりとした可愛らしい蝕肢は片方を筆り取られているし、4対8本あるはずの歩脚は千切られたり叩き潰されたりしてたった3本しか残っていない。

執拗に殴打されたからだろう、頭胸部と腹部を繋ぐ節は引き伸ばされカクカクと頼りなく揺れ動いており、八つあった円らな瞳は一つ残らず潰れていた。

ボロボロになっても尚クーゲルシュライバーに美しさを感じさせるチビスケだったが、その身を彩る傷の数々はまぎれもなく致命傷だ。

「アウラに元居た場所に帰れと言われたじゃないか。なんでこんな所でウロウロしてたんだ」

問いかけてはみるものの、すでにクーゲルシュライバーにはその答えが分かっていた。

チビスケは体の下に自分よりも大きなゴブリンの絞殺死体を抱えていた。

まるで誰かに奪われないよう庇うかのように。

「あれだけ貢物をつ返されてまだ懲りてなかったのか。こんなの、お前が死に掛けているのは自業自得だぞ」

クーゲルシュライバーの声が聞こえたのだろうか？

チビスケが残った蝕肢をかすかに蠢かせ、クーゲルシュライバーのいる方向へ伸ばされる。

その小さな触肢の向かう先にクーゲルシュライバーは無言で自分の巨大な蝕肢を差し出した。

チビスケの繊細な触肢がクーゲルシュライバーの蝕肢を捉え愛おしそうに撫でた。

クーゲルシュライバーはなされるがままにそれを放置した。

——キイ、キイ。

チビスケは甲高くかすれた声を上げると残った3本の脚でゴブリンの死体から自らの体を退かした。

そして力なくゴブリンの死体をクーゲルシュライバーへと押した。また貢物だ。

バカの一つ覚えにも程がある。

そんな事をしても無駄なのだ。どうしてそれを分かってくれないのか。

「この畜生めが」

クーゲルシュライバーはアイテムボックスに擬腕を突っ込んだ。

内部で掴むは最も安価で最も効果が低い回復ポーションだ。

これを使えば死は免れるだろう。

しかしクーゲルシュライバーはポーションを掴んだその手を引き抜けなかった。

(補給の目途も立ってない消耗品をこんな所で使っているのか? いや、それよりも)

コイツを助けてなにかメリットでもあるのか?

生じた疑問に対して答えは一つ。

メリットなど無い、だ。

ここで助けたところでまた付き纏われるだけだ。

そしてそれはチビスケに望みの無い求愛を続けさせるという事につながる。

今日のはじめての出会いそのうえ野生動物の蜘蛛であるチビスケだが、クーゲルシュライバーはこの美少年に対してすっかり情が湧いてしまっていた。

チビスケの一途ぶりにはクーゲルシュライバーが何をおいても応援したくなる尊さがあり、同情すべき悲しさがあった。

だからこそクーゲルシュライバーは決断した。

アイテムボックスから引き抜かれた擬腕にはポーションは掴まれてなかった。

そしてクーゲルシュライバーは引き抜いたその擬腕でゴブリンの死体を掴み、引き寄せて蝕肢に挟み込んだ。

「……」

ドサツ。

今まで押していたゴブリンの死体が無くなった事でチビスケは前のめりに地面に倒れこむ事になった。

力なく蝕肢が周囲を探っている。ゴブリンの死体がない事を確認しているのだろう。

やがで死体が元あった場所から消えている事、そして今はクーゲルシュライバーの蝕肢に保持されている事を理解できたのか、チビスケはキイキイと苦しそうな鳴き声を上げながら3本の脚で這うようにクーゲルシュライバーへと近づいていく。

何度もクーゲルシュライバーの体を蝕肢や歩脚で確かめながらチビスケが進んだ先は、彼の体に倍する巨大な腹部の直下だった。

——キイ、キイキイ。

チビスケの蝕肢がクーゲルシュライバーの腹部と頭胸部の境界付近をなぞる。

なぞる。なぞる。なぞる。

何かを探しているのだろう。

チビスケの蝕肢はまたなぞろうとして、重力に引かれて地に落ちた。

そしてチビスケは一言だけ、キイと啼いてそれきり動かなくなった。

チビスケは死んだのだ。

「悪いけど子作りはさせてやれないんだ。でもまあ、それなりに満足しただろう？」

クーゲルシュライバーは外雌器を覆う蓋を閉める筋肉の力を抜いてからゴブリンの死体を遠くへ放り投げると、一途に心を捧げてくれた可愛い男の子の亡骸をそつと撫でた。

最期の最期、真意看破を使用して垣間見たチビスケの心は、やっぱり馬鹿な畜生らしくシンプルなものだった。

「あの、クーゲルシュライバー様。そいつがお気に入りでしたら」
今まで事態を静観していたアウラが恐る恐る話しかけてきたところを、クーゲルシュライバーは手を掲げて制止した。

「生き返らせない。コイツはうれしい、うれしいと喜びながら死んでいった。なにかに心焦がす事無く穏やかに死んだコイツに二度目の生は不要だ」

「わかりました。クーゲルシュライバー様の仰せのままに」

クーゲルシュライバーが前肢を一振りさせる。

たった一撃で腐葉土が空中に舞い大地に穴が穿たれる。

その穴にチビスケの亡骸をそっと入れると、クーゲルシュライバーはチビスケに残った最期の触肢を根元からへし折った。

手に入れた触肢をアイテムボックスに放り込むと、クーゲルシュライバーはチビスケの眠る穴に土を被せていく。

「おやすみチビスケ」

土を被せ終わったクーゲルシュライバーは優しさを込めた声でそう呟くと、複雑な表情をして「チビスケって名前だとなんだか私が言われてるみたいで恥ずかしくなるよ」などと小声で言っているアウラに声をかけた。

「アウラ、待たせて悪かったな。そろそろ任務に戻ろう」

「わかりました！あの、でもその前に少しお聞きしてもいいですか？」

別に構わないと答えれば、アウラは心底不思議そうな顔で質問してきた。

「なんでクーゲルシュライバー様はあの蜘蛛にあれほどの慈悲をおかけになったんですか？」

あんな下等生物に対してなぜ？

言外にそう言うアウラにクーゲルシュライバーは暫し思索すると少々かっこつけた言い方で答えた。

「向けられる純粹な願いに報いてやるのが神つてもものだろう？」

私は邪神だけだな！

それだけ言ってクーゲルシュライバーはまだ見ぬ森の深部へと走り出した。



「という事があったんですけど、その後アウラ達の間を見てチビスケの触肢に入ってた精液をスキルで産んだ卵にかけてみたら受精しちゃったっぽいんですよ」

「色々言いたい事はあるけど、とりあえずなんで体外受精を試みちゃったんですか……」

モモンガは肩を落とし、額に手をあてながら質問した。

「二応実験のつもりだったんです。ほら、モモンガさんが見せてくれた階層守護者の面談結果に世継ぎが欲しいっていうのがあったのを思い出して」

「ああ、コキュートスの……」

「骸骨のモモンガさんには難しい要求ですけど、肉体がある俺なら何とかなるかもしれないじゃないですか。体外受精にしたのは流石に直に入れると気持ち悪いというか俺的にアウトというか……」

「あー！あーあー！いい！いい！直に入るとかそういう生々しいの言わなくてもいいですから！」

両手で耳を塞ぐとモモンガは執務机に突っ伏した。

友人のそういう話はあまり聞きたいものではない。

「というか体外受精とはいえクーゲルシュライバーは相手が野生動物でいいのだろうか？」

自分の知らないうちに友人が人間の嗜好をはるかに越えた超越者になってしまったようで色々心配になってしまふ。

「これがその受精卵です」

モモンガの前に白い布に乗った小さな球体の山が置かれた。

クーゲルシュライバーがアイテムボックスから取り出したものだ。

粒の一つ一つは殆ど透明であり一部分だけクリーム色に変色している部分があった。

「本当に受精してるんですかね？」

「わからないです。でも比較用に産んだ卵と比べると確かに差があるんですよ。ほら、この不透明の部分です。何もしてない卵にこういう特徴は見られませんでした」

「……不確定ですか。そうすると検証の為にはしばらく様子を見る必要がありますね」

「ええ。そこでモモンガさんに判断を仰ごうと思って。ぶっちゃけこの卵育てちゃっていいんですかね？今はモモンガさん以外には知られてないけど、育てるってなると如何してもNPC達にばれてしまいます」

そうならば大騒動待った無しじゃないか。

モモンガの脳裏にアルベドの顔が浮かぶ。

自分の愛を受け取ろうとしない愛しのクーゲルシュライバーがある日突然どこぞの野生動物との卵をもって帰ってきて甲斐甲斐しく世話を焼いている。

そんな事になったらアルベドの頭がおかしくなるに決まっている。それに問題はアルベドだけではない。

生まれてくる後継者が一人だけならばシンプルだが、クーゲルシュライバーの卵は虫らしく非常に数が多い。

ナザリックの恵まれた環境に育まれてこれら全てが孵ったとしたら、後継者候補の数は100を優に超えるだろう。

熾烈な後継者争いの予感がモモンガの背筋を冷たくさせる。

さらに後継者が生まれることによってNPC達に見捨てられるのではないかという恐怖もあった。

即座にという事は無いだろうが、子供たちはアルベドやデミウルゴスに後継者として相応しいように生まれたその時から教育を施されるだろう。

そんなエリート相手に支配者として勝てる自信が微塵も湧かなかった。

「かなりまずいかもしれないですね。でも戦力の充実という面で考えると検証だけはしておきたい気持ちも……いや、やっぱりダメか？」

モモンガの脳裏に様々な考えが浮かんでは消えていく。
ああでもないこうでもない、いやでもしかし。

思考の迷路に迷い込んだモモンガは無意識の内に悩みの元凶である卵の山に手を伸ばした。

骨の指先で卵の一つを優しくつまんだ時、モモンガは自身の手首に尋常ではない圧を感じて意識を現実へと帰還させた。

「……あー、クーゲルシュライバーさん？」

「弄っちゃダメです」

「あ、はい。わかりました」

凶悪な握力でもって自分の手首を握り締めるクーゲルシュライバーの黒い腕。

発せられた穏やかでありながら凄味を感じさせる声にモモンガはつまんだ卵をそつと戻そうとする。

しかし――

「あの、クーゲルシュライバーさん。手、手が動かないから放してほし
いんですけど」

「え？あ、すみませんでした！痛く無かったですか？」

「ええ、痛みはまったくないのでお気になさらず」

クーゲルシュライバーが手を離し、自由を取り戻したモモンガは細心の注意を払って卵を元あった山へと戻した。

そして先ほどの現象は一体なんだったのかと思いを巡らせ、やがて控えめにクーゲルシュライバーへと声をかけた。

「ところでクーゲルシュライバーさんはどうしたいんですか？ その卵を育てたいですか？」

「俺ですか？俺は……別に何が何でも育てたいわけじゃないです。ただ折角だし育てられるなら育ててみたい気持ちがありますよ」

「ふーん」

「なんですかその気の抜けた返事は。……まあ育てるとなると色々問題がありそうですから、スキルで産んだ卵を普通に孵化させる事ができるかを検証している事にすればいいんじゃないかなとは思っています」

「なるほど、その手があったか」

クーゲルシュライバーの言葉に一理あるとモモンガは手を叩いた。

この卵の問題部分がすべて隠蔽される良い案だと思われた。

「普通にクーゲルシュライバーさんが一人でスキルを使って産んだ卵だから、後継者としては扱わないという事ですよね？」

「そういう事です。エントマに渡した卵と同じ扱いですよ」

「なるほど。……そうそう思いました、エントマの卵についてメイド達を中心にかなり誤解されてるんでそっちの修正お願いしますね？」

「うぐつ！しかし自分のまいた種……やっておきます」

「お願いします。エントマの卵の二の舞になってはいけないので今回は先手を打って大々的に公開してしましましょう。そうすれば皆様達の言い分を信じてくれるはずです」

クーゲルシュライバーの纏う雰囲気が会話の度に明るくなっていくのが分かる。

わかりやすい人だなあと内心微笑むが、楽しそうにしている友人にこれから冷水をかけなくてはならない事を思い出したモモンガは気を引き締めた。

どうしても言うっておかなければならない事があるのだ。

「うん。その卵育ててもらって結構ですよ」

「本当ですか！ありがとうございますモモンガさん。これで検証がはかどりますよー！」

「ですが、もしもナザリックに大きな損害をあたえかねない状況になったら。卵のままだろうと孵化した後だろうと責任を持って処分してもらいます。それでもいいですか？」

これだけは約束してもらわねばならない事だった。

モモンガは未来に起る全てのリスクを想定できるほど優秀ではない。

よく考えた上で受精卵育成の許可を出したつもりだが、モモンガが思いも寄らなかつた問題が発生する可能性は十分ある。

最悪の事態を想定すれば予め覚悟を決めておいてもらわねばならなかつた。

「わかりました。俺にとってもこんな卵よりナザリックが、いやモモンガさんの方が大事です。モモンガさんを困らせたくはありません。たとえ情がうつたとしても、その時が来たら責任をもって必ず処分しますよ」

目と目をあわせてそう断言するクーゲルシュライバーの姿は真剣そのものだ。

卵よりもモモンガが大事というクーゲルシュライバーだが、先ほど見せた様子から怪しいものだともモンガは思う。

しかしこうして面と向かって真剣に宣言してもらったからには、もうモモンガには言う事などなかった。

「それじゃあそういうことをお願いします。報告楽しみにしているんで大事に育ててあげてくださいね」

「はい！専用の用紙に書いて提出しますね」
「了解です。じゃあ次の質問なんですけど……」

慣れた手つきで卵を糸で織った布に包んでいくクーゲルシュライバーを見ながら、モモンガは書類を手に質問を続けた。

モモンガがエ・ランテルに旅立つ前日。

モモンガとクーゲルシュライバー、超越者達の夜はまだまだ終わらない。

28話

「わざわざこんなところまで見送らなくても」

第九階層の廊下に通じる扉の前でクーゲルシュライバーは見送りのためついて来たモモンガを振り返った。

その動きは緩慢だ。

それはひとえにクーゲルシュライバーの蜘蛛の腹部上面に貼り付けられた白い包み、つまりはチビスケとの卵を気遣うものであった。「お気になさらず。見送りたい気分になっただけですから」

やや気弱に聞こえる素の声でそう言ったモモンガの視線はクーゲルシュライバーの腹部に向いている。

モモンガの表情から感情を察するのは困難ではあるが、クーゲルシュライバーにはその視線に優しさに由来する不安が含まれているように思えた。

「それよりもクーゲルシュライバーさん。その卵、本当にそんな所に貼り付けておいて大丈夫なんですか？」

「うーん。詳しいことはわからないですよ。なにせ子育てなんて初めてですから。でも凶鑑で見た蜘蛛に自分の背中に卵を背負う種類が居たのでそれを参考にしています」

「……エントマに子育てについてアドバイス貰ったほうがいいんじゃないですかね？」

それはいいアイデアだ。

人間の子育てについても無知だというのに、蜘蛛の子育ての事などクーゲルシュライバーもモモンガも知るはずが無い。

であるならば、餅は餅屋。同じ蜘蛛系種族であり、既に卵を数日世話しているエントマに助力を仰ぐのが最も賢いやり方といえよう。

「そうします。大事にしないとですからね」

卵が孵るのには時間がかかるだろう。

今回の検証は結果が出るまでに時間が必要なものなのだ。

もしも世話の仕方が間違っていて検証途中で卵がダメになったりしたら費やしてきた長い時間と労力が無駄になる。

再検証することになり、二度手間となれば本来別の事に使えたはずの時間は更に削られるだろう。

それは実利的にもクーゲルシュライバーの心情的にも避けたかった。

一回で結果が出るように大事に世話をしなければならぬ。

「それじゃ俺はもう行きます。モモンガさんも根を詰めずにゆっくり休んでくださいね」

「ええ。つらくなったら持ってきてくれた花の香りでもかいで休みますよ」

「そりゃあいい。是非有効活用してください」

「しますとも。では次は出発前に会いましょう。卵になにかあったら連絡してくださいね？」

「当然です。真っ先にモモンガさんにお知らせしますよ」

それだけ言うとクーゲルシュライバーはモモンガに手を振った後、扉を開けてモモンガの自室を後にした。

(うげ)

廊下に出たクーゲルシュライバーは内心で悪態をついた。

モモンガの自室の前に、追い出されていたメイドや護衛、そしてアルベドが待機していたのだ。

そういえばモモンガが少し声のトーンを落として「この後にアルベドと話し合いがある」と言っていたことをクーゲルシュライバーは思い出す。

扉の近くに立っているアルベドの姿に、まさかさっきの会話を聞かれていないだろうなと焦るクーゲルシュライバーだったが、よくよく考えてみれば別に聞かれて困る内容ではない。

アルベド達に聞かれて困るのは自分が背負う卵が特別製であるという事だけだ。

さっきの会話にその事に関する内容は含まれては居ない。

だからセーフだ。

クーゲルシュライバーは落ち着きを取り戻すとアルベドに声をか

けた。

「随分と待たせてしまったようだ。悪かったな」

クーゲルシュライバーのその言葉に待機していた者全員を代表するようにアルベドが頭を下げて答えた。

「いいえ、とんでもない。至高の御方同士の語らいです。私どもシモベは何時間でもお待ちするのが当然でございます」

予想できた返答に、そうか、とだけ答えてクーゲルシュライバーはその場を後にしようとする。

アルベドには既に謝罪を終えているし、モモンガから禁則事項の通達は行われている。

だが未だにアルベドに対する気まずさはなくならないし、アルベドの設定を考えれば何時また狂乱のトリガーになる言動が飛び出すかわからない。

アルベドと接する時間は短いほうが望ましかった。

「ところでクーゲルシュライバー様」

足早に去ろうとするクーゲルシュライバーをアルベドが呼び止めた。

クーゲルシュライバーに緊張が走る。

「……なんだアルベドよ」

「お引き止めして申し訳ありません。その背にある白い包みですが、それはもしや卵ではないでしょうか？」

卵についての質問！

さっそく飛んできた突っ込みにクーゲルシュライバーは気を引き締めた。

これはピンチでありチャンスである。

NPC達に用意したカバーを信じさせるにはもってこいの状況だ。

クーゲルシュライバーは努めて平常を装いアルベドに答えた。

「そうだ、私がスキルで産み出した卵だぞ。検証の一環でな。しばらくは私自らが世話をする事にしたのだ」

細かく説明しようとするればかえって不自然になるかもしれないと思ひ、なるべく簡潔に言葉をまとめたつもりだった。

アルベドはどのような反応をするだろうかと様子を窺えば、彼女はクーゲルシュライバーが久しく見ていない微笑みを浮かべていた。

「まあ、そうでしたか。ですがクーゲルシュライバー様、恐れながら至高の御身自ら世話をなさらずとも、メイドに一言命じればよろしいのでは？」

「それは駄目だ」

クーゲルシュライバーから即座に飛び出てきた拒絶の言葉にアルベドの背後にいたメイド達が肩を跳ねさせた。

アルベドは変わらず微笑んでいるが、彼女らメイド達はエプロンを握り伏せ目がちになっている。

自分の発言がメイド達を信頼していないと言っているも等しい事に気づいたクーゲルシュライバーは慌てて言葉を続けた。

「いや、メイド達の手腕を疑っているわけではない。私はメイド達も、護衛達も、そしてアルベドお前も。ナザリックの全ての者達を心の底から信頼している。その信頼するお前達の仕事を私は疑わない」
目の前で蕩けるような笑顔に変わるアルベドと咽ぶ護衛、そして笑顔を輝かせるメイドを見てクーゲルシュライバーはどうかになつたかと胸をなでおろした。

クーゲルシュライバーが言ったことは昨日の時点では嘘でしかなかったが、今では紛れもない本音だ。

本音でなければこの近距離ではアルベドに看破されていたかもしれない。

チビスケとマールレによってもたらされた自身の変化に、クーゲルシュライバーはそつと感謝した。

「ただな……これはそう、検証なのだよ。私が世話しなければ……まあ意味が無いわけではないが、私が世話をすべきなのだ。だからメイド達には手伝いを頼むことはあるだろうが、メインとして世話を任せることはない」

そこまで言ってクーゲルシュライバーは擬頭の頬を掻いた。

自分の言葉を振り返って恥ずかしくなったのだ。

(完璧に情が移っている。正直この卵が可愛くて可愛くて仕方ない

ぞ。自分以外に触らせたくないというか、守ってやらなければならぬ
いというか……もしかしてこれが母性というものなのだろうか？)

モモンガに対してはクールに、検証のために受精を試みたと説明し
たが、実際はクーゲルシュライバーのチビスケに対する情けがこの受
精卵を産み出したのだ。

最期の最後で子作りをさせてやれなかったチビスケへの手向けと
して、墓前に花を供える程度の感覚でクーゲルシュライバーは産んだ
卵に精液を振りかけたのだった。

情けがあつたとしても元々はその程度のものであった筈なのに、なに
かの偶然か卵が受精したらしき変化を見せ、モモンガに扱いについて
相談したりしているうちにその情けはこんなにも大きくなっていった。

モモンガとの約束は忘れてはいない。

いざその時がくれば情を切捨てる覚悟は出来ている。

しかしその一方で「その時」が来ないように育ててみせると意気込
む自分がいるのだ。

それはきつとチビスケの子を殺したくないという親心なのだろう
とクーゲルシュライバーは思う。

「まあ、そういうことだ。用件はそれだけか？」

「はい。お引止めして申し訳ありませんでした」

そういうアルベドは普段より慈愛に満ちた表情で微笑んでいた。

そんなアルベドに内心の親心を見透かされているようで居心地が
悪くなったクーゲルシュライバーは、背中の卵に気遣いながら部下達
に背を向けた。

「それは二回目だなアルベド。気にすることはない……ではな」

それだけ言い残してクーゲルシュライバーは自室の方へと静かに
歩いていった。



「モモンガ様あ」

「うん？なんだアルベドよ」

魔法の光によって神秘的な薄暗さが保たれている寝室にて、一糸纏わぬ姿のモモンガとアルベドが巨大なベッドの上で重なり合っていた。

仰向けになって天井に染みがないか探しているモモンガの胸板……もとい肋骨に頭をのせて身を寄せるアルベドは白魚のようなその指先でモモンガの胸骨をなぞりながら語りかける。

「クーゲルシュライバー様がお持ちの卵ですが」

「……その事か。それについてはもう説明しただろう？あれはクーゲルシュライバーがスキルで生み出したものであり、検証すべき事があって持ち歩いているだけだ。なにか特別なものではない」

「はい。承知しております」

「うん？」

モモンガは頭をもたげ胸元のアルベドを見下ろす。

アルベドは最近お気に入りモモンガの肋骨の隙間に自分の角を差し込むプレイに興じながらも、なにかを心配するような視線をモモンガに向けていた。

「何が言いたいのだ？」

「いえ、ただもう一度だけモモンガ様から確認したかっただけです」

「……まあ、確認は大事だからな。うん」

アルベドの言葉になにか深い意味がありそうな気がするが、それを察することが出来ないモモンガはとりあえず言葉通りに受け取ることにした。

ここで根掘り葉掘り聞くと自らの思考能力の浅さを感じられるような気がしたからだ。

一方でアルベドはそんなモモンガの対応を、わざとらしくとぼけているのだと受け取っていた。

（私が事の真相に気付いているのは当然モモンガ様ならご存知のはず。やっぱりそういう事なのね。）

アルベドは廊下で待機していた時、扉の向こうからかすかに漏れる会話を持ち前の地獄耳デビルイヤで正確に聞き取っていた。

モモンガはクーゲルシュライバーの卵を非常に心配しており、クー

ゲルシュライバーもまた卵を大事にすると言っていた。

この時点でアルベドはある程度事の真相に勘付いていたのだ。

その後モモンガの自室から出てきたクーゲルシュライバーとの会話でアルベドは自身の考えが正しいと確信した。

クーゲルシュライバーの言葉には卵に対する深い愛情が籠っていたし、なにか行動する際にも卵を気遣っていた。

メイドにも触らせたくないほどの心血の注ぎようであり、それはクーゲルシュライバーが言うようなスキルで生み出した召喚モンスター並の価値しかないはずの卵には分不相応のものだ。

そしてクーゲルシュライバーの説明もアルベドからすれば疑問を感じるものだった。

アルベドはモモンガと褥を共にする中でエントマが下賜された卵についての説明を受けていた。

エントマが与えられた卵はクーゲルシュライバーがスキルで生み出した物であり、そこに特別な感情や意味はないという。

故に思う。

クーゲルシュライバーのいう検証はエントマに与えた卵でも十分実行可能であり、わざわざ二つに分けて行う事は無いのではないかと。

エントマに任せておけばクーゲルシュライバー自身の手が塞がることもない。

孵化失敗を恐れて複数卵を用意したとしても、それならばもつと沢山産んでメイド等に世話をさせればいいだけの話だ。ナザリツクには人手が沢山あるのだから。

あれこれと思考を重ねていくと結局は、クーゲルシュライバーの持つ卵は何かが特別、という結論に行き着いてしまう。

モモンガとクーゲルシュライバー。

二人の至高の存在が特別大事に扱う卵。

それはつまり――

(モモンガ様とクーゲルシュライバー様の御子なんだわ)

アルベドにはそうとしか考えられなかった。

二人が子をなしてもなんらおかしくは無い。
なにせ前々からそういう予兆はあったのだ。

(モモンガ様が上で、クーゲルシュライバー様が下……やはりあの時から既に御二人は愛を育まれていたのね)

アルベドの脳内でナザリックを挙げての懐妊祝いの段取りが瞬く間に計画されていくが、果たしてそれを主人達は望んでいるのだろうか？

答えは否であろう。

バレバレとは言え、わざわざ虚偽の情報を公開して隠そうとしているのだからその意を汲むのが優れたシモベだ。

何故隠そうとするのかは不明だが、なにか深遠な考えがあつての事だというのは間違いないのだろう。

(表面上は至高の御子であると気付かない振りをして、さりげなくお二人の子育てをお手伝いするのが最適かしら？モモンガ様もそれをお望みのようだし。あとお二人の様子を見れば公表された情報が虚偽である事に気付かない者はいないでしょうけど、念のため全ナザリックに周知させておくべきね。落胤扱いになるしても、なにかの間違ひがあつてはいけないのだから)

デミウルゴスやコキュートスがさぞかし喜ぶことだろう。

そう思いながらアルベドは甘えるようにモモンガの肋骨に自らの角を擦り付ける。

硬質な物体が擦りあわされる、アルベドにとっては淫らな音が彼女の頭蓋骨を通じて鼓膜を震わせた。

慈悲深き偉大なる支配者であるモモンガは多忙である。こうして二人で居られるにも時間制限がある。

もう残り10分程のその時間を余すところなく堪能した後、さっそく階層守護者達にクーゲルシュライバー様懐妊の知らせを届けに行こう。

そう決めると、アルベドは身を起こしてから全身でモモンガへと覆いかぶさっていった。

(次は私の番。シモベのなかで最初に至高の御方の御子を授かるのは

この私！今日こそお情けを頂戴できるよう頑張らなくては）
ラストスパート10分間。
モモンガの受難はまだ終わらない。



自室に戻ったクーゲルシュライバーはリビングルームの何時もの場所であつろいでいた。

神話パワー抽出の儀式が間近なため、室内にはエントマの姿はない。

だがクーゲルシュライバーの自室にいるメイドの数は何時もと同じで二名から変わっていないかつた。

「こんな夜更けにすまないペストーニヤ」

蜘蛛の巣の上から声をかけるクーゲルシュライバーの前には異形のメイドがいた。

体は成人した人間の女性のものだがその頭部は犬のものであり真つ二つにしたものを無理やり縫い付けたかのような跡が残っている。

彼女こそがアインズ・ウール・ゴウン全員が愛した、ナザリツク最萌大賞を受賞したメイド服を着た触手ことペストーニヤ・シヨートケーキ・ワンコその人である。

一般メイドを統べるメイド長である彼女は犬頭であるが故に感情が読みにくいだが、仕草からして恐縮しているようだった。

「お呼びとあらば何時でも参ります……わん」

「そうか。それでだ、ペストーニヤ。お前を呼んだのは他でもない。一般メイド達の間で蔓延している噂についてだ。把握しているか？」

「はい。プレアデスのエントマがクーゲルシュライバー様の慈悲を受けて御子を授かったといった内容ですな……わん」

「そう、それだ！」

ペストーニヤを指差して大きな声で叫んだクーゲルシュライバーに定位置で事態を見守っていたシクススが可哀想なぐらいに震え上

がった。

直接声を向けられているペストーニヤは動じた素振りをみせず、美しい洗練された動作で深く頭を下げた。見事なお辞儀だった。

「この度は私の管理行き不届きにより、御宸襟を悩ませてしまい誠に申し訳ありませんでした……わん」

「ごしんきんってなんだ？」

ペストーニヤの放った聞きなれない言葉に大いに悩みながらも、クーゲルシュライバーはそれを微塵も外に漏らさず鷹揚に頷いてみせた。

「うむ。まあ噂話に興じるメイド、というのも我らの仲間が望んだ一つの理想だ。あまりうるさく言うつもりはないが、今回の噂はすこし行き過ぎだな」

メイドとメイド服に対して一家言を持っていたホワイト・ブリムが噂好きという設定をつけたメイドが数名居た。

今回の噂もそのメイド達を中心として広まったのだろう。

かつての仲間がつけた設定に忠実な彼女たちを強く叱ることはできない。

緊迫した場面だろうと律儀に語尾に犬の鳴きまねをつけるペストーニヤのように、NPC達は設定に逆らえないのだから。

「今回は見過ごすが、今後はこのような事がないように頼むぞペストーニヤ。こういう形の面談はもう勘弁だ。お前もそう思うだろう？」

「はい。誠に申し訳ありませんでした……わん」

「それではメイド達の勘違いを正すのはペストーニヤに任せるからしっかりやっておいてくれ。エントマに与えた卵は確かに私が産んだものだが、それはスキルによる物でありモモンガが作成するデスナイト等と同じ存在だ。エントマには本人の戦力強化を望む意思を汲んで褒美として渡したにすぎん。そこに特別な感情は存在しないし、卵にも特別な意味は無いのだ」

「畏まりました。そのように説明しても？……わん」

「構わん。メイド全員に徹底して説明してくれ」

了解の意を示したペストーニヤを退室させると、クーゲルシュライバーはため息をついた。

これで一般メイド達への対応は済んだだろう。

そう安心して気が抜けたがゆえのため息だったが、ふとクーゲルシュライバーの緩んだ意識に浮上する懸念があった。

（あの時、エントマが本当に欲しかった物は言葉の通り俺との子供だったとしたら……）

先ほどペストーニヤに託した説明の内容はエントマの心を酷く傷つけるのではないか？

いや、それ以前にだ。

あの時のエントマの言葉は告白と同義という事になる。

クーゲルシュライバーの脳内であえてバラバラにしていた真実のピースが、次々に寄り合わさっていく。

（あの態度から考えればそれが自然で普通だ。俺だって分かったんじゃないか）

考えれば考えるほど自分の考えに確信が持てる。

罪悪感が心に鋭く突き刺さった。

しかし、素直にエントマの要求を呑むわけにはいかなかったのも事実だ。

ナザリツクの政治的にも、クーゲルシュライバーの心情的にも。

だから褒美としてあの卵を渡した事は間違いではなかったはず。

間違いがあったとすれば、エントマの気持ちに正面から向き合わなかったことだろう。

「失礼します。只今戻りました」

「ぬう……」

クーゲルシュライバーが黙考していると儀式を終えたエントマが入室してきた。

彼女の胸元は不自然に膨らんでおり、そこに与えられた卵をしまいこんでいる事が見て取れた。

（放っておけばペストーニヤから説明されるだろうが、やはり俺から言うのが筋というものだろう）

もしも告白ではなかったならただの笑い話になるだけだ。

ここでこの問題を放置する理由など欠片も存在しなかった。

クーゲルシュライバーは緊張に牙を擦りあわせるとエントマを手招いた。

「はい。今日もご奉仕させていただきます……」

普段はクーゲルシュライバーが体の清拭を求める時に行う仕草を見て、エントマよりいつそう甘ったるい声を出してにじり寄ってくる。

歩く様すら色毛を感じさせるエントマにクーゲルシュライバーは待ったをかけた。

エントマが立ち止まり不思議そうに擬毛をゆらした。

「毛づくろいは今はいい。其処に座れ」

「は……う。はい、畏まりました」

一瞬戸惑いながらも、エントマはクーゲルシュライバーが指差すソファへと腰掛けた。

今までにない主人の指示と、圧倒的上位者と相向かいになって座るという状況に不安を覚えているのだろう。

エントマの擬毛は小刻みに動き、しきりにこちらを窺っているのがわかる。

これから言わなければならない事を思ってクーゲルシュライバーは胸が痛んだ。

「エントマよ。できるだけいいから冷静になって聞いて欲しい」

こんな事を言われて冷静に聞ける者はいないだろう。

少なくとも自分なら何を言われるのか緊張するだろう。

クーゲルシュライバーの予想通り、エントマの擬毛が緊張を示す動きをとっており、部屋の隅にいるシクススもただならぬ雰囲気身を硬くしている。

「はい」

「まず確認を行いたいのだが、先日お前に褒美として何が欲しいかを聞いたな？そしてお前は私の子が欲しいと言った……そうだな？」

小さな体をさらに小さく縮めてエントマが肯定する。

微笑みしか浮かべないエントマの顔が、俯いて出来た影のせいで泣きそうなのを我慢している健気な少女のようにみえてより一層クーゲルシュライバーを苛んだ。

「それはつまり、私と、あー、そのだな。セツ……いや、交尾したかった……んだよな？」

現実世界ではこんな自意識過剰なことを口にする機会などまず発生しない。

現実世界のクーゲルシュライバーは碌な貯金もない夜勤労働者であり、容姿も十人並だ。

だがここはナザリックであり、エイトエッジ・アサシン達の言葉を信じれば自分は蜘蛛的超美形で、ナザリックの頂点に近い至高の権力者だ。

その歴然とした事実を自分に言い聞かせ、途中で何度も途切れそうになる言葉をついにクーゲルシュライバーは言い切った。

そうだと言われても違うと言われても、どっちにしる頭を悩ませるだろう質問だった。

クーゲルシュライバーは激しく緊張しながらエントマを見つめた。

「……はい。恐れ多くもクーゲルシュライバー様のお情けを頂ければと、愚かにもそう思っていました」

「そう、か」

室内に重い沈黙が降りてきて、空気に肩を押すような重みすら感じる。

既に最悪の雰囲気ではあるが、まだ確定していないことがある。

それを明らかにするためにクーゲルシュライバーは自分でもどうかと思う言葉を放った。

「……なぜだ？」

「え？」

「なぜ子を欲しがるんだ。理由はなんだ？」

なぜ子を欲しがるのか。

それこそがクーゲルシュライバーにとって最も重要な事だった。

かつてはエントマに限ってありえないと除外したが富や地位、権力

等も子を欲しが理由になるだろう。

もしそうだとしたら、それはそれで問題だがクーゲルシュライバーの気持ちは楽になる。

だが、もしもエントマの答えがクーゲルシュライバーの最も恐れるものだとしたら。

そのもしもが飛び出てくるのを想像してクーゲルシュライバーは体を小さく震わせた。

「それは……」

「それは？」

「クーゲルシュライバー様をお慕いしているからですう……」

クーゲルシュライバーは血反吐を吐くような唸り声をあげそうになり、それを必死に抑えた。

精神作用無効化の力もあって早々に精神を立て直したクーゲルシュライバーだったが、帰ってきた冷静さが理路整然と己の行いを弾効していた。

無限ループに陥りそうな精神的苦痛を味わいながらも、クーゲルシュライバーは想定の内だと自分に言い聞かせてある程度安定した冷静さを取り戻した。

目の前には恥らうように顔を逸らすエントマの姿がある。

ここからが本番なのだ。

「そうか。だがなエントマ。私はお前を大切に思っているし信頼もしているが、その慕情に応えるつもりは——」

一切無い。

一呼吸おき、絶対の意思を込めてクーゲルシュライバーはそう言い切った。

エントマの反応を見るのが恐ろしくて、クーゲルシュライバーは視線を虚空に彷徨わせながら言葉を続ける。

「お前に与えた卵はただのスキル的一种に過ぎず、発動すれば身を守る盾となって消える消耗品だ。私は褒美として戦闘メイドたるお前の役に立つだろうと考えあれを渡したのであって、そこに他意は存在しない」

「……」

「私は……お前を愛してなどいないし、これからも愛するつもりはない」

「言っちゃった！」

勢いに任せて言葉を選ぶ事なくストレートに言い切ってしまったクーゲルシュライバーは流せない筈の汗を体表に感じた。

当然幻覚であるが、真摯に接する＝隠し事をせず素直に接するではない事は当然の常識であり、自分の物言いは余りにも無神経であったと自覚する身としては幻覚もむべなるかなである。

だが本心である事も確かなため、クーゲルシュライバーは言葉を修正することは無かった。

「エントマはどう反応するだろうか？」

「クーゲルシュライバーは恐る恐るエントマを見た。」

「はい。存じ上げております」

「うえ？」

「エントマはいたって自然な姿勢で其処に居た。」

さつきまでの恥らいや緊張を感じさせ丸く縮こまった姿ではなく、何時も通りのナザリックのメイドらしい凜とした姿だった。

「むしろ、なんだそんなことかと安心して居るようにも見える。」

「これは一体どうしたことなのか？」

子供を欲するほど恋している相手から手酷く振られたのだから、何かしらの精神的ショックがあるのが普通ではないか？

「クーゲルシュライバーは訝しんだ。」

「ですが卵については初耳でした。もしかしてこの卵はどれだけお世話をして居らないのでしょうか？」

「いや、それはどうだか不明だ」

「じゃあ孵るかもしれないですね！」

「う、うむ。その可能性はまあ、あるな」

表情がなくともクーゲルシュライバーには分かる。

「エントマはいま物凄くいい笑顔をしている。」

蜘蛛に対する審美眼が肥えてきた今ならば、仮面を外し素顔を晒し

たエントマならばその表情を読み取ることも可能だろうが、態々仮面を外してもらわずとも分かるほどにエントマは喜んでいた。

「そうしたら長生きしてくれるでしょうか?」

「どうだろうな。普通に発動条件が揃って孵化したときよりは長生きするかもしれないが、どの道短命だと思うぞ。というかだなエントマよ」

どうも話が子育ての不安に流れている。

いまやエントマと同じく子持ちであるクーゲルシュライバーにはこれから生まれてくるであろう命を心配する気持ちがよく分かったが、今はそれよりも優先して聞きたいことがあるのだ。

心底不思議そうにクーゲルシュライバーはエントマに問うた。

「なぜそうもあつげらんとしてるんだ?」

「満足しているからです」

「満足ってお前……私が言うのもなんだが、振られた上に渡された卵もただの消耗品のマジックアイテムみたいなもんだぞ?それで満足なのか?」

「満足です。至高の御方のご寵愛を一メイド如きが得たいと思う事こそ不敬。そんな不敬を行ったにも拘らずクーゲルシュライバー様は私の愚かな願いを叶えてくださりました」

「叶えたといつてもその卵はスキルで産みだした単なる消耗品だぞ」
「ですがクーゲルシュライバー様がお産みになった事には違いありません」

クーゲルシュライバーは唸った。

きつと泣かれるだろうと思っていたのだが、エントマとしては全く問題ないらしい。

お前の恋心はどうか、産んだのは確かだけど普通に育てて孵るかかわからないのに本当にいいのかとか、色々聞きたいことはあつた。

しかし此方が言いたい事を伝えた上でエントマが納得しているのなら、もうこれ以上この話題を続ける意味はない。

報われずとも独り胸の中で満たされる恋もあるのだろう。

それはクーゲルシュライバーには理解しがたいものだ。

だが、たとえどんなに理解できない考え方でも、他人に迷惑をかけず本人が幸せならばそれでいいのだ。

そしてエントマのそれは迷惑ではない。

「そうか……では話は終わりだ。この後シャルティアに会う予定があるから身だしなみを整えたい。毛づくろいを頼むぞ」

「畏まりましたあ」

クーゲルシュライバーの甲殻が無数の繊維に解れると、慣れた動作でエントマが片方の蝕肢にむしやぶりつく。

クーゲルシュライバーは行きつけの床屋にいるかのようにリラックスしながらエントマと話をする。

仕事の事、ネイルサロンの事、階層守護者の事、ギルドメンバーの事、酒の事、風呂の事。

会話の内容は多岐に渡り、脈絡もなく移り変わっていく。

最後にクーゲルシュライバーから育児についてのアドバイスを求められたエントマが恐縮しながらもそれを承諾し、二人の間に新たな関係ができたところで毛づくろいは完了した。

「それじゃあ少しシャルティアの所に顔を出してくる」

体毛を再び甲殻化したクーゲルシュライバーの体表はワックスがけされた黒塗リリムジンのような光沢を放っている。

そんなクーゲルシュライバーをエントマとシクススが二人揃って見送りにでる。一糸乱れぬ優雅な動作だった。

「いつてらっしゃいませクーゲルシュライバー様」

「ああ。これからもよろしく頼むぞ二人とも」

エントマとシクススの見送りを背に受けながらクーゲルシュライバーは転移によって姿を消した。

29話

クーゲルシュライバーが転移した先は完全な闇に覆われた100メートル四方の空間だった。

朽ち果て、冒流されかつての輝きを奪われた地下聖堂の中には数十体に及ぶアンデッドの気配が彷徨っている。

クーゲルシュライバーは真昼の平原を行くが如く足取り確かに聖堂内を歩く。

アトラクナク 深淵の大蜘蛛の種族的特殊能力の一つである暗視のおかげだ。

ンカイの闇に住まう邪神に暗黒による目隠しなど意味を成さないのである。

地下聖堂を抜ける。

見えてくるのは巨大な大地の裂け目とボロボロになった吊り橋だ。

直下に見える亡者が伸ばす手の群れの更には下にはクーゲルシュライバーがナザリックで最も忌む存在が今もそこにいるのだろう。

(ミュルアニスとはかく、イビルウェブ・ブリッジには一度会っておいた方がいいか。ちゃんと陽光聖典発狂組を保存してるか確かめねば)

しかしそれは今でなくとも問題ない。

ミュルアニスガモモンガと共に外部へと出ているときに行えばいい。

クーゲルシュライバーは崖の壁面に巧妙に隠された崖下と崖上を繋ぐ階段をジツと見つめ警戒する。

親切にも下に降ちた侵入者が這い上がれるように用意されたそれは、ミュルアニスガ守護領域外へ出かける時に使用されることもある。

クーゲルシュライバーにとってナザリック一會いたくない存在がミュルアニスだ。

偶然かなにかで鉢合わせすることになつたらたまつたものではない。

「……エッセンス・オブ・ホラー恐怖の本質」

回数制限のある不可知化スキルを惜しみもせず小声で発動させる
と、クーゲルシュライバーは一切の振動を発生させずに吊橋を渡る。
踏み板のトラップの場所など既に記憶から消え去っているが、向こ
う岸に繋がる吊り橋のロープを歩けばなんの問題も無い。

ロープ上を歩くのは蜘蛛の得意技である。

すると滑らかに橋を渡っていくクーゲルシュライバーは、地の
底で出発の準備をしているだろうミュルアニスを想う。

(アイツもなあ。もう少し顔が似てなければいいのに。参考資料とし
て秘蔵のエログッズを提出したのがこんな悪影響を与えるなんて
思ってもみなかった)

NPCは設定はもちろんデザインからモデリング、AIに至るまで
素人なりに勉強して独力によって作り出すのがクーゲルシュライ
バーの流儀だ。

しかし最終作であるミュルアニスについてはその当時の精神状態
が不安定であり、それでいて製作するNPCに最高の質を求めている
為に例外的に他のギルドメンバーに助力を得て製作されている。

この時デザインとモデリングを担当したギルドメンバーが「イメー
ジが掴みにくい。君のエロコレクションの提出を要求する」と言い出
し、それに別件で発生していた罰ゲームが絡んでクーゲルシュライ
バーは嫌々コレクションの提出に応じる事になったのだ。

女の好みが率直に表れるエログッズを参考にして作られたミュル
アニスのビジュアルは、見事クーゲルシュライバーの好みにストライ
クしたのだが……それがいけなかった。

クーゲルシュライバーは人生初めての恋人が自分の好みに完璧に
合致した女性という、多くの男性が羨む幸運に巡りあえた男だったの
である。

(ミュルアニスの方が美人だけどやっぱだめだわ。フードで顔隠すん
じゃなくて仮面でも被せとけばよかったかなあ)

ゲーム時代は作ってくれた人達に失礼だという理由で顔の変更は
行わなかったし、顔を完全に覆うような装備は控える必要があった。

しかし今はそんな事を気にする必要はない。

アイテムボックスに丁度いい装備がないか記憶を探りつつ、吊り橋を渡りきったクーゲルシュライバーはシャルティアの私室である死
蟻玄室の前に到着した。

エッセンス・オブ・ホラー
恐怖の本質を解除し姿を現してから、石に偽装した表面を持つ金
属扉を叩く。

10秒ほど経つても返事がない。

もしかして留守？事前に連絡すべきだったか？

クーゲルシュライバーは擬頭の顎を摩り、歩脚の一本でカツカツと
床を叩いた。

もう一度扉をノックする。

これで反応がなければメッセージでも使おうと考えているクーゲ
ルシュライバーの前で、ゆっくりと扉が内部から開かれた。

中から顔を出したのはシャルティアの身の回りの世話をしている
シモベ、ヴァンパイア・ブライド吸血鬼の花嫁だった。

「はい、どなた……デッ!？」

頭だけを覗かせていた彼女は、顎をさすり苛立たしそうに床を蹴る
クーゲルシュライバーの姿を認めると即座に全身を現し頭を深々と
下げた。

血の気の失せた顔が更に青白くなっている。

それも仕方ないことだ。

ナザリックの支配者のうち最も恐ろしい御方だと主人であるシャ
ルティアから聞き及んでいる存在が、見るからに苛立たしそうな仕草
をしながら眼前に立っているのだから。

尚、実際のところクーゲルシュライバーはイラついてなどいない。
「た、大変失礼致しました！至高の御方をお待たせするなど……
!」

「いや、アポ取っていなかったからな。シャルティアはいるか？少し
話がしたいのだが」

「え、あ、う!?シャルティア様はいま……」

「うん?いま、なんだ?」

死体にもかかわらず額に汗を浮かべるヴァンパイア・ブライドの視

線がクーゲルシュライバーと部屋の内部を激しく行き来する。

一体なんだというのだろうか？

怪訝に思ったその時、はるか遠くを行く騎馬隊の数や位置を正確に把握できる振動感知能力が聴力と連携して部屋の内部の様子をクーゲルシュライバーに伝えた。

「這い蹲りなんし——」「ああシャルティア様——」「可愛くおねだりできたら踏んでやりんしょう——」

その後聞こえてきた興奮したシャルティアの声と嬌声にクーゲルシュライバーは天を仰いだ。

部屋の中で何が行われているのか理解できてしまったからだ。

これでは目の前のヴァンパイア・ブライドも言いにくいだろう。

そつと哀れな吸血鬼を見つめる。

クーゲルシュライバーとして同情的な視線を向けたつもりなのだが、無機質な単眼が八つ存在するだけの擬頭からは感情など窺い知れないのが当然だ。

ヴァンパイア・ブライドは全身を震わせ涙さえ浮かべながら頭を下げた。

「申し訳ありません！申し訳ありませんっ！直ちにシャルティア様にお取次ぎいたしますので、至高の御方に対し大変なご無礼とは存じますがどうか後もう少しだけここでお待ち頂けませんでしょうか!？」

「あー……そういう事をやっているのなら中に入って待つわけにはいかんよなあ。分かった。もうすこしここで待とう」

「偉大なる至高の御方の慈悲に感謝します！」

ヴァンパイア・ブライドは風のような速度で扉の内側へと滑り込むと速やかに扉を閉めた。

しかし余りにも急ぎすぎていたのだろう。扉が僅かに開いている。並みではない聴力を持つクーゲルシュライバーにとって、そのかな隙間でも内部の音を漏れ聞くには十分だった。

「シャルティア様！クーゲルシュライバー様がお越し——」「あつ？
イイイイイ!?クーゲルシュライバー様!?!なんで——」「全員服着て器具も片付けて——」「換気！それと香水とお香を——」「これ以上お

待たせしたら皆殺しに——」「とにかく急ぎなさい——」などと大騒ぎしているのが聞こえてくる。

(待たせただけで皆殺しになんかしらないぞ……。どれだけ恐れられてるんだ俺って……)

数十秒後、自分のイメージが想像していたよりも悪かった事に衝撃を受けるクーゲルシュライバーは少々髪がほつれているヴァンパイア・ブライドに案内されてシャルティアの自室へと足を踏み入れる事ができた。

天井からピンク色の薄い絹のヴェールが垂れ下がり、染み込んでくるような甘く扇情的な香りの空間にはどこからか聞こえてくる嬌声があまりにもよく似合っていた。

肉欲に耽溺する王の後宮のような室内をヴァンパイア・ブライドに案内され通された先には、小さな白い丸テーブルがあり二人分の椅子が用意されていた。

片方は巨体のクーゲルシュライバー用なのだろう、背もたれがなく非常に大振りだ。

相向かいには通常サイズの椅子があり、その隣には緊張のためかガチガチに体を硬直させたシャルティアが立っていた。

「ようこそおいで下さいましたクーゲルシュライバー様。大変お待ちせしてまつこと申し訳ありません。ど、どうぞお掛けなまし」

「いや、事前に連絡をしていなかった私が悪いからな。そう畏まらないでくれ」

クーゲルシュライバーが用意された椅子に座るとやや硬い動きでシャルティアも着席する。

二人の前には赤い液体の入ったティーカップが湯気を上げている。

クーゲルシュライバーとしては優雅な飲み方だとか作法などには疎いため手をつけないでおきたかったが、全く手をつけないのは用意してくれた側にとって失礼にあたると思い極普通の動作でティーカップを口をつけた。

(……悪くないけど、俺はレモンティーがいいなあ)

そんな内心は勿論表には出さない。

出されたものに文句をつけるなどと、そんな失礼行為はできるものではない。

「美味しいな」

「お口にあつたようでよかつたでありんす。それでクーゲルシュライバー様、至高の御方自らお越しになられるとは一体どのようなご用件で？」

「いや、大したことではないんだ。お前が今日の朝ナザリックを発つと知つてな。しばらく会えなくなるから一つ聞いておきたい事があるんだ……が、その前にもう一つ聞かせてくれ」

「なんでありんしょう？一つといわずに幾らでもお答えするでありんす」

「じゃあ聞くけど、シャルティアつて踏んだりするのが趣味なのか？」
シャルティアが素早く入り口でクーゲルシュライバーに対応したヴァンパイア・ブライドを睨んだ。

睨まれた側は瞼を閉じて素知らぬ顔だが手足がガクガクと震えている。

非常に剣呑な一睨みではあつたが、それは常人ならば視線がずれたことにも気付かない程の一瞬の出来事だつた。

次の瞬間にはシャルティアは淑女らしい涼やかな表情をしていた。
だが素早さに関してステータスがカンストしているクーゲルシュライバーに掛かれればそんな一瞬の変化も容易に目撃可能だ。

どうもあのヴァンパイア・ブライドは運が低^{ラック}いらしいから、少し助けてやらねばとクーゲルシュライバーは思った。

「待っている間に扉越しに聞こえてきてな。盗み聞きするつもりは無かつたのだが、まあピッタリと閉まっている扉越しで外にいる私に聞こえるほど盛り上がっていたという事かな」

「お恥ずかしい限りでありんす。……ご質問にお答えするでありんすが、仰るとおり趣味でありんす」

「ふうん。嗜虐趣味なんだ。ストレス発散になつたりするのか？」

「なにも踏みつけに限る話ではありんせんが、這い蹲る女を脚で踏み躪り弄ぶのはとても愉快でありんすえ。ストレス発散にも効果が

あつて美容にも良いでありんす」

「そうかそうか……美容効果もあるのか」

シャルティアはストレス発散方法として踏み付けを好む。

クーゲルシュライバーは心のメモにそう書き足すと、これは一体いつ役にたつ情報なんだろうと首を傾げた。

首を傾げる自分をシャルティアが年相応のあどけない表情で不思議そうに見つめている事に気付いたクーゲルシュライバーは、誤魔化すように擬頭を振ると本題に入ることにした。

「まあ嗜虐もほどほどにな。それで本題なんだが、ナザリツクに帰還した時にモモンガがお前達に私に対する評価を聞いたよな？覚えてるか？」

「当然覚えているでありんすが……あのお、なにかご無礼がありましたか？」

途中でインチキ廓言葉が消えているシャルティアは不安そうにクーゲルシュライバーを見つめていた。

ロリに分類される美少女であるシャルティアが不安そうに上目遣いで見つめてくるといふペロロンチーノであれば狂喜乱舞するだろう状況だったが、クーゲルシュライバーには例外一名とそれに付随したり想起させたりする人物を除いて女性を怖がらせて喜ぶ趣味はない。

「そう怖がることはない。あの時私は異論は無いと言ったではないか。ええと、たしか『かの御方はまさしく恐怖の極限。死者すらも恐怖に怯えすくむことでしょう』だったな？」

「はい、恐れ多くも至高の御方をそう評した事は間違いありません」
「だから怖がらなくてもいいと言っているのに。……私が聞きたいのはなシャルティア。お前が何故私を其処まで恐れているかなのだよ」

前々からクーゲルシュライバーにはそれが気に掛かっていた。

デミウルゴスの発言からかつての大惨事撮影会の出来事が尾を引いているのは理解できたが、シャルティアの恐れようは他の階層守護者よりも深刻であり何か別の理由で恐怖しているのではないかと思われた。

クーゲルシュライバーとしてはシャルティアにそれほどまでに恐れられるような事をした覚えはない。

純粹に何が原因でそんな事になっているのかが気になって仕方なかったのである。

また、恐怖を煽るロールをするのにも、どの程度の行為がNPCにとっての限界に近いのかを知る必要があった。

「責めているわけでもないし何か懲罰を与えることもない。だからお前が私に抱く恐怖について教えてくれないか？私としてはお前に対して特になにかをした覚えは無いのだが」

「え……」

シャルティアが思わず漏れてしまったのだろう声を抑えようと口元に手を当てて目を点にしていた。

彼女の目が、何言ってるんだこの人はと語っているように見えてクーゲルシュライバーは焦った。

(え!?え、ってなんだ!?なんで俺若干引かれてるんだ!?)

よほど恐ろしい事をしておいてそれを完全に忘れているというのだろうか？

改めて記憶を探るが思い当たることがない。

「……どうしたシャルティアよ。答えられないのか？」

「いい、いいであります。そうでありますね、至高の御方にとっては記憶に残す価値も無いと言わすこと……」

怖れを含む視線を向けながら感心するように言うシャルティアにクーゲルシュライバーの焦りが益々酷くなる。

シャルティアの小さな肩が微かに震えている。

そんなに!?そんなになのか!?単体戦力最強の階層守護者であり、真祖たる吸血鬼でありペロロンチーノによって色々とガン積みされてるシャルティアがそこまで怯えてしまうのか!?

だがクーゲルシュライバーには本当に心当たりが無い!

「二人で納得していないで教えて欲しいのだが」

「これは失礼したであります。ええと……わらわがクーゲルシュライバー様を恐れ敬うのには恐怖を司る至高の御方であると言わす事の

他にもう一つ理由がござりんす」

シャルティアは一度テーブルに視線を落としてから周囲のヴァンパイア・ブライド達を見やってからクーゲルシュライバーを見つめた。

ヴァンパイア・ブライド達にも聞かせていいのか？という意味だろう。

一体どんな話が飛び出てくるのか全く不明な為、ここは席を外してもらおうが良い。

クーゲルシュライバーが擬腕を「散れ」という意味で振るとシャルティアが何かを言う前にヴァンパイア・ブライド達はどこぞへと消えていった。

完全に二人きりになったと確認したシャルティアは何度も視線をクーゲルシュライバーとテーブルを歩き来させながら語り始めた。

「そのお、クーゲルシュライバー様はミュルアニスの姉達を覚えてるでありんすか？5人居た元サキュバスの者達でありんすえ」

「無論だ。自分の創作物を忘れることはない」

シャルティアが言っているのは最終作であるミュルアニスにたどり着く前にクーゲルシュライバーが作成したNPC達の事だ。

ミュルアニスとは違って完全にクーゲルシュライバー一人の力で製作されている。

そして末子であるミュルアニスと同じく、高難易度ダンジョン《深淵》のどこかに存在するサキュバスの姉妹が経営する淫魔の館で女主人兼従業員をやっていたところ^{アトラク}クーゲルシュ^クライ^{ナク}バーに捕獲され禁断の呪法で肉体を改造されたという設定を持っている。

淫魔の館云々についてはペロロンチーノとTRPGセッション後の深夜テンションで語り合っていた時に生えてきた設定をそのまま採用していた。

肉体改造ならば触手の出番だろうと、エロに対して非常に厳しいユグドラシルにおいてペロロンチーノと二人で互いの叡智を結集して触手服なるアイテムを作り出した事は未だに鮮明に思い出す事ができる。

あの経験があったからこそ後の五大最悪の一角「エロ最悪」作成時に様々な助力が可能になり、結果として高いクオリティを持たせることができたのだ。

懐かしい記憶が掘り起こされ一瞬視線が遠くなるが、浮かび上がった疑問に現実へと引き戻される。

「……しかし何故知っている？あれらは……って、シャルティアお前まさか」

「はい。盗み見るつもりはなかったであります、階層巡回中に偶然見てしまったであります。その、クーゲルシュライバー様がいつも容易く、いや、きつとわらわ如きが窺い知れない深淵な理由があったと存じんすが、次々とあの子達を抹消していくところを」

「……全員分？5回とも？」

「5回ともでありんす」

「ああ……」

どんな確率だと言いたくなるが、とりあえずクーゲルシュライバーにはシャルティアが恐怖する理由が分かった。

シャルティアの言うとおり、ミュルアニスの前に作られた5体のNPCは全て抹消されている。

仲間達から貰った50Lvの枠組でより良いものを作ろうと何度も試行錯誤していたのがその理由だ。

NPC作っては動作確認して消去、これで良いかと思っても一週間以内に不都合が見つかり消去、特に不都合は無いけどビジュアルに飽きたから消去……彼女ら深淵の姉妹達の寿命は驚くほど短い。

消去を繰り返すこと5回。

一体目のNPCの設定文では「姉妹」とだけ記述されてるのに、ミュルアニスの設定文では「六姉妹」になっているのはこれが原因だった。作られては無慈悲に消去される彼女達をシャルティアはどこかの物陰から見ているのだろう。

(そりゃあ怖がられるわ。NPC達にとっては無慈悲ってレベルじゃないぞこの所業)

ゲーム時代では別になんて事の無い作り直し作業ではあるが、仮想

世界が現実と化しNPC達が命をもって動き出した今となつては自らの行為に恐怖するしかない。

NPC達はゲーム時代の出来事まで覚えている。

どういう理屈かは知らないが、もしもゲーム時代でも自分たちプレイヤーが知らなかっただけでNPC達に意思が宿っていたとしたら、消去されていった彼女達の恐怖と絶望は如何ほどだったろうか？

絶対の忠誠と敬愛を向ける創造主から、わけも分からずに一切の慈悲もなく失敗作として存在を消去される時の気持ちは察するに余りある。

見ていたシャルティアには自分が暴君のように見えていたに違いないだろうとクーゲルシュライバーは思う。

「その光景を見てクーゲルシュライバー様はシモベに完璧を求める御方なのだと理解したのであります。一切のミスを許さない至高の厳しさで冷酷さ……ペロロンチーノ様に創造されたこの身に落ち度などありませんが、気の緩みがあれば何時あの子達と同じようになってもおかしくない。そう思うと、クーゲルシュライバー様を前にした時はどうしても緊張してしまふのであります」

無理も無い。

クーゲルシュライバーはシャルティアに同情していた。

そんな暴君のような奴を恐怖しないほうがおかしい。

スーツにアイロンが掛かっていないという理由で即日クビを言い渡してくる上司のようなものだ。

なんたる理不尽。

そんな奴がいたら後先考えずに一発殴り飛ばしてやりたいが、そういう風に思われているのは自分自身なのである。

これはいけないとクーゲルシュライバーはすっかり縮こまってしまったシャルティアに優しく話しかけた。

「なるほど理解した。しかしなシャルティアよ。昔ならばいざ知らず、今の私はお前が思うほど冷酷ではない事を知ってほしい。失態はないに越した事はないが、もしも失態を演じたとしてもそれだけで心繫いだお前達を消滅させるような事は決してない」

そもそもあの慈悲深いモモンガがそんな事を許すものか。

モモンガの株を上げるべく一言付け加えたクーゲルシュライバーは出された飲み物を飲み干すと、口を空けて此方を見つめるシャルティアへの言葉を続ける。

「私は一時期お前達を信じていなかった。しかし知ったのだよ、お前達が信頼するに足る存在であると。いまやお前たちは信頼できる大切な仲間だ。罪があれば相応の罰を科す事はあるが、極刑である存在消去はナザリックを裏切る等の重罪がなければありえない。私は裏切りを許したことは一度も無いが、ナザリックを、我々アインズ・ウール・ゴウンを裏切るなんてお前たちはしない。そうだろうか？」

「当然でありんす！至高の御方々を裏切るなんて、そんな愚かな真似は絶対にしないでありんす！」

「わかっているともシャルティア。お前たちは私達を決して裏切らない。だから極刑などありえない。ほら、これで私を必要以上に恐れる理由はなくなったぞ」

身を乗り出し吼えるシャルティアの頭へ、クーゲルシュライバーは巨体に相応しい長さを持った擬腕を伸ばし銀色の髪を優しく撫でた。

恐怖の象徴から与えられた思いもかけない優しさにシャルティアは目を丸くする。

頬は紅潮していないが、シャルティアの趣味を考えれば撫でただけでそんな反応は望めるわけは無いし、そもそもそんなものをクーゲルシュライバーは望んでいない。

「だから今度の任務もあまり気張らずにな。勿論お前が任務をしくじるとは思っていないが、心に余裕があることはいい事だ。無事任務を終えて帰ってきたら褒美をやるから、それを励みに頑張ってくれ」

「褒美!?クーゲルシュライバー様、怖れながら申し上げんすが、至高の御方に命じられた任務を遂行することは当然の事！褒美なんて不要でありんす！」

「そうは言っても私が渡したいのだから仕方が無い。まあどうしても嫌だと言うのなら諦めるが……それはすこし残念だな」

「う、う、ううう……」

目の前で百面相を演じるシャルティアを見ると、すこし意地悪な言い方だったかと申し訳なくなる。

しかしこうも言わなければシャルティアは決して褒美を受け取りはしないだろう。

「お、恩賜を賜れるように、奮励努力するであります」

「そうか。そうしてくれ。……さて、出発も間際に迫っているというのに邪魔して悪かったな。私はもう行くとしよう」

話を切り上げてクーゲルシュライバーは席を立つ。

ゆつくりと振り返り退室しようとするクーゲルシュライバーの背中に、同じく席を立ったシャルティアが声をかけた。

「大したおもてなしも出来ずにまっこと申し訳ありません……おやつ？その背中の白いの、それが噂の卵でありますか？」

「んむ？なんだ、もう話が来ているのか？」

「クーゲルシュライバー様がお越しになる少し前にアルベドの使いが来ていたんであります」

「流石に仕事が速いなアルベドは。その通り、コレがその卵だよ」

クーゲルシュライバーはシャルティアに見やすいように体を起きます。

「おおっ、という軽い感嘆と共にシャルティアは卵を食い入るように見つめている。

「まあ検証だからな。孵るかどうかわからないんだが」

「何時頃孵るかも分からないんでありますか？」

「それも不明だ。……なんだシャルティア。孵るところが見たいの？」

「見たいであります！」

「おお!？」

思いがけないシャルティアの勢いにクーゲルシュライバーが僅かにたじろぐ。

悪い気はしないが、まさかシャルティアが此処まで興味を示すとは思ってもみなかった。

シャルティアの表情を見てみれば、羨ましいような、もしくは物欲

しような目をしている。

蜘蛛とか子供が好きなんだらうか？すこし意外だ。

シャルティアがこの卵をモモンガとの間に産まれた子供であると勘違いしており、モモンガの愛とその結晶を一身に持つクーゲルシュライバーを羨ましがっているなんて、羨望の眼差しをうける当人は夢にも思っていないかった。

「そうかあ。じゃあ産まれそうになったら必ずシャルティアを呼ぼうじゃないか」

「本当でありんすか？是非よろしくお願いしんす！」

何故かテンションが高いシャルティアに了解の意を返すと、クーゲルシュライバーは死蝟玄室を後すべく歩き出す。

子供が生まれてくるのをああも楽しみにされるとなんだか気恥ずかしいな。

そんな事を考えながらも、クーゲルシュライバーは上機嫌で退室していった。



ナザリツク地下大墳墓への入り口、地上部中央霊廟の墳墓然とした室内でガチャガチャと音を立てながら鎧のチェックを行う者が居た。

金と紫のラインで彩られた豪華な漆黒の鎧と真紅のマントから突き出した二本の長大なグレートソードを背負う大柄な戦士、ナザリツク外での活動の為に変装したモモンガである。

その隣には黄色の紐で特徴的な美しい黒髪をポニーテールに纏めた戦闘メイドプレアデスの一員、ナーベラル・ガンマの姿がある。

彼女もナザリツク外での活動の為に普段のメイド服から、外の世界で目立たないような服装に着替えその上から茶色のマントを羽織っている。

腰から下げた剣は魔法詠唱者であるナーベラルにとって馴染みのないものであり、何かを確認するようにずっと弄繰り回されている。

そしてもう一人。

金糸と銀糸による刺繍が施された漆黒のローブを纏い、手には振れた白い短杖ワンドを持つ如何にも魔法詠唱者らしい人物がいる。

その頭部はローブと一体化した大きなフードによって覆われており、口元しか見ることが出来ない。

しかしその滑らかな白い肌と形の良い艶やかな唇、そして近くに寄れば香ってくる花と混ざり合った女性特有の芳香がこの魔法詠唱者が女性であると示していた。

その正体は言うまでも無く、モモンガによって供として選ばれたミュルアニスだ。

黒い鎧、黒い髪、黒いローブ。

特徴的であり、ついつい目が行くような部分がすべて黒というこの三人組は、今まさに準備を終えナザリックを後にし外の世界へと旅立ちとうとしていた。

ナザリックの支配者であるモモンガが出発しようとしているにもかかわらず見送りは居ない。

既にアルベド達とはモモンガの執務室で別れをすませている。

これからモモンガは情報収集のために何度もナザリックを離れる事になる。

その度に大げさな見送りがあつては面倒だということで、最初から見送りを断っていたのだ。

「準備はいいか？」

「はいモモンガ様。装備の確認は終了しました」

モモンガの問いかけに対してナーベラルがメイドの如く美しい礼をして答えた。

その様子にモモンガは無いはずの眉をしかめた。

そんな二人を見てミュルアニスは困ったように首を傾げた。

「全て終わっていますよモモン」

「ちよつと、ミュルアニス貴女……」

鋭い口調でミュルアニスを睨むナーベラルに対して、モモンガは手を上げてそれ以上の発言を抑えた。

「良いのだナーベラル。いや、ナーベよ。外の世界ではミュルアニス

……ミユールのような言葉遣いこそが必要なのだ」

「しかしモモンガ様に対して呼び捨てなど」

「モモンガ様ではない。私は旅の戦士モモンだ。そしてお前はモモンの仲間である魔法詠唱者ナーベ。敬称もいらないし敬語もやめろ。仲間同士で敬語を使っているのは少し、こう、なんだか隔たりがあるように思われそうだ」

「そ、それは……不敬では……」

心細そうなナーベの言葉にモモンは肩を竦めた。

そんなモモンを見て助けを求めるように視線を向けてくるナーベに、ミユールは再び首を傾げると一歩前にでてモモンに話しかける。

「私もナーベも敬語が素の言葉遣いという事ではダメでしょうか？習慣なので無理に敬語をやめようとするとは不自然な言葉遣いになってしまい、より怪しまれることになると思うのですが」

「む……。確かにそれは……」

「可能な限り砕けた言い方になるように努力しますので、どうかご容赦いただけないでしょうか」

そこまで言われると断ることは難しい。

モモンの理想とは少し違うが、お互い妥協できる範囲だろう。

そう判断したモモンは首を縦にふった。

「わかった、しばらくはそれでいいだろう」

「ありがとうございます」

モモンに対して軽く頭を下げるだけの会釈をするミユールをナーベは驚愕の面持ちで見つめる。

見つめられるミユールは視界が確保されているのかも定かではないフードにより表情を読むことが難しいが、じつに涼しげな態度で立っていた。

「……ねえミユール。貴女、すごいよね」

「そうでもないよ。平気に見えるかもしれないけど、私だって心臓が破裂しそうなんだよ？ああモモンガ様に対してなんて口をー！って」

「本当？いや、そうよね。普通そうなるわよね」

「至高の御方だもの。でもそれに耐えることをお望みなんだから……」

一緒に頑張りましょうナーベ」

「ええ。一緒に頑張りましょうミュール」

仲がいいのはいい事だ。

そう思いながらもモモンは、お互いの手を繋いだりして会話するナーベとミュールを見て小さくない疎外感を覚えていた。

女子高生だらけのバスに男は自分ひとりだけしか乗っていない。

そんな時に似た心情だった。

端的に言つて、華やかな二人の雰囲気は非常に居心地が悪かった。

「あー、二人とも。仲が良くて大変よろしいのだが、私に敬語を使う以上は互いにも忘れずにな」

自分にだけ敬語でナーベとミュールがため口で話していたら、若い娘二人にハブられているおっさんという悲しい構図になりかねない。

モモンとしてはそれだけはなんとしても阻止せねばならなかった。

「畏まつ……わかりました」

「はい、そのようにします」

「うむ。それじゃあ出発するか」

モモンは全身鎧の重さを全く感じさせない動きで霊廟の出入り口へと歩き出す。

一度ナザリック地表部へ出て、地上部の様子を視察してから転移する予定だ。

ナザリックから徒歩で移動するとなると、偶然その様子を目撃される恐れがあるからだ。

それを避けるためにアウラにはエ・ランテルから程よく離れた森の一角の安全確保させてある。

其処が転移先だ。

まずはタロスでも見て回るか。

そう思いながら出入り口へと差し掛かったモモンの前に、一体の蜘蛛がおずおずと顔を出した。

「む？レン・スパイダーだと？」

「モモニーサーーの歩みを遮るなんて……下りなさい無礼者！」

「あの、ナーベ？その方はクーゲルシュライバー様が召喚された直属

の部下なんですが……」

「いいっ!? こ、これは失礼しました! 至高の御方直属の方とは知らず、大変な無礼を——」

「あー、そのぐらいにしておけナーベ。というかなんだモモンナーさーんって。間抜けに聞こえる以前に別の名前に聞こえたぞ」

「モモンガ」「様」の禁止ワードを必死に堪えた結果なのだろうが、もう少し練習して慣れてもらわねば困る。

モモンはレン・スパイダーに対して平謝りするナーベを止めると、レン・スパイダーがその口に啣えている皮袋に注目した。

「それはなんだ? なんの用事で来たのだ?」

問いかけてみるとレン・スパイダーは何かを訴えるように体を動かすのだが、生憎モモンには蜘蛛と意思疎通する手段が無い。

とりあえず受け取ればいいのかだろうか? そう思った時、ナーベを慰めていたミュールがモモンの隣へとやってきた。

「ええと、クーゲルシュライバー様からアイテムを預かってきたそうです」

「なに? ミュール、お前は蜘蛛の言葉がわかるのか?」

「はい。蜘蛛アラクノマンサーの職業クラスを持っていますので」

そういえばそんなネタ職業クラスを持っていたっけ。

クーゲルシュライバーから貰ったミュールアニスのステータス表を思い出しながら、モモンは「え、私宛のアイテムなんですか?」と嬉しそうな声を上げるミュールを見た。

ミュールはレン・スパイダーから受け取った皮袋を愛おしげに一撫ですると、ローブを開いて様々な秘術師的アーケインナーアイテムが装備されているベルトへ括りつけている。

「中身がなんなのか教えてもらっても構わないか?」

「勿論です。予め設定された相手の前に、使用者のもとに繋がる一方通行の転移門を生成する転移系アイテムだそうです」

「ああ、この間クーゲルシュライバーが言っていた例の小道具か」

設定された相手の名前を呼ぶことで発動するこの転移アイテムは、期間限定イベントで発生する特殊エネミーを討伐することで100

％の確率で手に入れる事ができる。

ドロップする特殊エネミーもPOPする確率が低いというわけではなく、狩れば狩るほどアイテムが手に入る一種のボーナスステージのようなイベントだった。

かなり使えるアイテムという事でギルドメンバー総出でイベントに参加し、敵対ギルドと狩場を巡る抗争に発展した記憶がある。

大型掲示板にて「AOG死ね。氏ねじゃなくて死ね」「狩場独占を許すな」「運営仕事しろ」等と大いに叩かれていたような気もするが、アインズ・ウール・ゴウンが叩かれるのは何時もの事なのでモモンはよく覚えていなかった。

「設定されているのはクーゲルシュライバーなのだろうか？」

「はい。クーゲルシュライバー様のお名前が登録されています」

「……イメージ戦略の一環だと言っていたが、突然クーゲルシュライバーが現れたら使用者は驚くのではないだろうか」

風呂場での出来事を思い出しながらも、渡す相手と渡す時の説明をしつかり選べば問題はないだろうとクーゲルシュライバーのやりたいうようにやらせる事にする。

一応どういう事をしたのかは昨晚の内に教えられているし、その場ではモモンガも許可を出しているのだから今さら口を出すわけにはいかないのだ。

「驚くくらいが丁度いいのではないでしょうか？」

「……驚きすぎて使用者が発狂したり死んだりしないかだけが心配だな。さて、受け渡しはすんだし用事はこれで終わりかな？」

レン・スパイダーはモモンの問いに頭部を上下させた。
「もう終わりだそうです。……そう、終わりなのね」

用事はすんだと言わんばかりにそそくさと墳墓内へと消えていくレン・スパイダーをミュールは寂しそうに見送っていた。

そんなミュールにナーベが不思議そうに首をかしげ、モモンは小さく唸りをあげた。

「どうしたのっ……どうしたんですかミュール。折角至高の御方からアイテムを賜ったというのに」

「え？あ、いいえ勿論嬉しいですよナーベ。ただ、クーゲルシュライバー様からなにか一言、なにか一言でもお言葉が頂けたら……なんて身分不相応な事を思ってしまっただけで。欲が過ぎますね。猛省しなくては」

無理に笑おうとするミュールを見て、不憫だ、とモモンは思った。健気ともいえるミュールの姿にモモンはついつい自分を重ねてみてしまう。

自分自身の事を健気だと評するつもりは無いが、寂しさを堪えながら何時かギルドメンバーが帰ってくると信じてナザリツクの維持の為にログインしていた身としては、同じく寂しさを堪えているミュールを応援したくなるのは当然なのではないかとモモンは思う。

(きつとクーゲルシュライバーさんはミュルアニスがどれだけ寂しがっているか分かってないんだろなあ。俺が何とかしてあげなくちゃ)

既に昨夜の連絡会でクーゲルシュライバーにはミュルアニスに寂しがっているという事を伝えてある。

しかしその時の反応は実に淡泊なものだった。

それを思い出すと、クーゲルシュライバーはそもそも寂しさというもの辛さを理解していないように思えた。

それに思うところがないわけではないが、別に責めるつもりはない。

知らない事を理解することなど出来ないのだから。

(もうちよつと構ってあげるようお願いしよう)

そう決心すると、モモンは緋のマントを翻しながら歩き出す。

風に靡くマントの音が聞こえ、モモンの脳裏に白銀の聖騎士の勇姿が浮かぶ。

自分が大いなる未知に挑む勇者になったような錯覚が、モモンの心を昂ぶらせた。

「さあ、そろそろ行くぞ、ナーベ、ミュール。冒険のはじまりだ」

そういうとモモンは薄暗い霊廟から光差す世界へと足を踏み出した。

30話

バハルス帝国とスレイン王国との国境に近いリ・エスティーゼ王国の軍事的要所であるエ・ランテルは、その軍事的な重要性から三重の城壁によつて防御を固めている城塞都市である。

外周部の軍事エリア、内周部の市民エリア、最内周部の行政エリアに分かれたエ・ランテル内部のうち、内周部の市民エリア、町と聞いて一番に思い浮かべるような光景が広がる場所にモモンは居た。

冒険者登録を終え当面の宿の確保を済ませた後、この世界の人間の営みや文化レベルを知る為に散策に出ているのである。

その隣にはかすかにローブの裾を上げて歩くミュールが居るが、ナーベの姿は何処にも見当たらない。

彼女は冒険者組合にて冒険者として登録を終えた後にとつた宿にて留守番をしている。

ナザリックから離れここまで来る間に知つたナーベの頭の硬さ、あるいはポンコツぶりに愛想を尽かした……という訳ではない。

モモンが離れている間に何者かが襲撃をかけてくる可能性を考慮しての事だ。

襲撃されたところで部屋にはなにも置いていないので盗難されて困ることはないのだが、これから偽装身分アンダーカバーとして有名な冒険者になるうとしているモモンとしては汚名に繋がりがねない事はなるべく排除したかった。

また、可能性は低いがユグドラシルプレイヤーが接触してくる場合も想定される。

相手の出方によるが、敵対的ならば第八位階魔法を使用可能でミュールよりもレベルの高いナーベを残すべきだ。

友好的な相手だった場合ナーベのあの刺々しい態度は明らかにマインスだが、そんな相手ならばある程度の礼儀をもって接してくる事が予想されるのでギリギリ問題にならないとモモンは判断した。

(今頃ナーベはアルベドに定期連絡をしている頃か。もしも襲撃があるとしたらさっきの三下共かな。前衛の居ない美人魔法詠唱者が狭

い密室にいる……脳味噌が下半身についている奴ならやりかねないが、あれでも冒険者のはしくれ。可能性は低いか)

モモンは宿屋での出来事を思い起こす。

冒険者が利用する宿の内、最低ランクに位置する店をモモンは最初の宿として選んだ。

冒険者組合で教えられた店だったが、やはり低いランクの宿にはそれに相応しいだけの程度の低い冒険者がたむろしていたのである。

お手本のような新人いびりを圧倒的な実力の片鱗、具体的にはちよつかいを掛けてきた男の胸倉を掴み軽々と放り投げる事で理解させたのだが、その騒動に無関係な冒険者が巻き込まれてしまった。

モモンの放った男の直撃により儉約の末に手に入れたポジションを台無しにされたその冒険者に対し、モモンは自前のポジションを譲渡することで賠償とした。

(後、あるとすればポジションを渡したあの女が此方の財力に目くらくらんで盗みに入るぐらいか。この世界のポジションは結構な高級品だ。それを気軽に渡したからにはそれなりの財を持っていると思われる。でも仕方ないからな。しかし所詮は鉄のプレート、特に力があるようには見えなかったし、どの道なんの問題も無い)

自身の胸元で揺れる銅のプレートを見下ろす。

冒険者達の冒険者としての身分、そしてそのランクを示す証として冒険者組合はこのプレートを発行している。

下から順に銅、鉄、銀、金、白銀、ミスリル、オリハルコン、アダマントタイトの全8ランク存在している。

最低ランクに毛が生えた程度の鉄級冒険者にナーベが後れを取るなどまず考えられない。

彼らからは実力面、装備面からもカルネ村で遭遇したスレイン法国の偽装帝国兵ほどの強さも感じられないのだから。

(なんだか思っていたよりリラックス出来ないなあ。金ないし。色々考えなきゃいけないし。あと金ないし)

三人部屋が無かったので四人部屋を三人で使うことにして、代金は銅貨11枚だ。

二泊ぶん支払ったため銀貨1枚と銅貨2枚が宿屋の主人のポケットへと消えることとなった。

さらに宿屋の主人に冒険に必要な道具一式を用意してもらっているので余分に使えるだけの金銭は皆無に等しい。

これでは興味を引かれるアイテムを見つけたとしても購入するとは出来ない。

今日はもうしかたないとして、金を稼ぐのはモモンにとって急務といえた。

「さて、エ・ランテルは円状の城郭を持つ都市だ。円に沿って歩けばいつかは元の場所にたどり着くが、どっち廻りでいこうか？」

モモンが話しかけるのは後方に居るミュールだ。

しかしモモンはミュールに意見を求めているわけではない。ミュールを通して此方を観察している者に対して問いかけたのだ。

『ちよつと待って、今スプーンで占う……右に倒れた！右回りが吉だよモモンガさん！』

『分かりましたよクーゲルシユライバーさん。しかしそんない加減なのを占いと言っていていいんですかね？』

『由緒正しい占いだよ！それにぶつちやけ右でも左でも大して変わらないんだから構うことないですって』

『また身も蓋もないことを……』

モモンの脳裏に呵呵とした声が響く。

広域テレパシーを可能とするマジックアイテム《エンジェルハイロウ》を使用したクーゲルシユライバーからのテレパシーだ。

周囲に誰も居らず、そしてテレパシーを送った相手は自分一人なのだろう。

ミュールに聞かせるはずも無い碎けた口調で話すクーゲルシユライバーに、モモンも右手の薬指に嵌めたMPを消費する事でメッセーヂの魔法を発動させる指輪の力を使い返事をしていた。

『……どうしてもメッセーヂ使うんですね。此方がテレパシーで干渉している時は其方の思念も強く念じてくれば読めるんで、わざわざMPを消費してメッセーヂを使わなくとも良いんじゃないですか？』

『変なことまで伝わっちゃいそうで嫌なんです。MP消費すると言っても微々たるものなんで、これからも基本的に会話はメッセージでさせて貰いますよ』

『折角のテレパシーの利点が……。まあいっぺんに複数に対して思念を飛ばせるだけでも十分か』

遠く離れたナザリツクに居るクーゲルシュライバーに声を届かせるには、言葉を声に出してミュールに伝えるか、メッセージで直接通話するかのどちらかになる。

ミュールという電話機に対して語りかけ、返事をテレパシーで貰うという方法は周囲から見ても間違いなく不審がられる為に減多に使用できるものではない。

そしてクーゲルシュライバーが言う伝えたいことを強く念じるという方法も、受信に関してはクーゲルシュライバーの思念が無害なものだと強く信じていることになんとかなっているが、送信はモモンが言った理由以外にも、アンデッドが持つ精神作用無効化の影響を消し去ることが出来ず情報が不鮮明になりがちという欠点があり通信方法としては採用しがたかった。

結果としてクーゲルシュライバーはテレパシーを使い、モモンとミュールはメッセージを使うという方法に落ち着いたのである。

「私はモモンさんにお任せします」

「そうか。では中央から見て右回りに進もう」

「はい！わかりました」

ナーベがモモンの事を敬称で呼ぶのなら自分も合わせねば、という事でモモンに「さん」をつけるミュールは何処か弾むような声でそう答えた。

どうやら上手くいっているらしい。

嬉しそうにしているミュールを見ると、モモンまで嬉しくなってくる。

(なぜか物凄く渋ってたから不安だったけど、クーゲルシュライバーさん、ちゃんとミュールにもテレパシーを使ってくれてるみたいだな)

ミュールが目に見えて嬉しそうなのはテレパシーによりクーゲルシュライバーの声を聞けたからだろう。

これはモモンの成果だと言える。

クーゲルシュライバーはスキルや魔法を使わずに、ミュールことミルアニスの視覚と聴覚を通して情報を得ることが出来る。

しかし意思疎通は不可能であり、やろうとするならばメッセージの魔法やテレパシーなどを使わねばならない。

当初クーゲルシュライバーはミュールに対してテレパシーを使用しなかった。

なにか用事がある時は必ずモモンに対してテレパシーを使うのだ。

もちろん部下である二人に聞かせられない話ならばそれで構わないのだが、ミュールに対する「あれが見たい」「その場で耳を澄ませてくれ」等という指示までもモモンに送ってくるのである。

そんな指示を出すのに一々間に人を挟む意味は無く、酷く非効率的だ。直接ミュールにメッセージなりテレパシーを送ればいいだけなのだから。

(避けるにしても露骨過ぎるよクーゲルシュライバーさん。俺にとってのミルアニスはあなたにとつてのパンドラズ・アクターなんだって言われても、いくら俺だってそこまでしない)

そもそもミルアニスの何処が黒歴史なのかモモンには分からなかった。

優しくて気が利いて美人でいい子じゃないか。

中二的な要素も無く、見ていて胸がかきむしられるような事もないし、アルベドのように精神を病んでいる様子もない。

モモンは決して口に出さないが、ずっと傍に置いておきたくなるようなNPCだと常々思っている。

そんなNPCに対して距離を置こうとするクーゲルシュライバーがどうにも理解できない。

遠ざけられていると言えばアルベドだが、ミルアニスにはピツチという言葉は全く似合わない。

何故なんだと理由を聞いても、クーゲルシュライバーはそれだけは

言えない、勘弁してくれと回答を拒否するばかり。

クーゲルシュライバーが何を考えているのかがわからないモモンは、この仕打ちが理不尽なものであり、正すべき悪しき行いだと感じた。

だからと言って事情もわからないのに強い言葉で責めるわけにもいかないで、モモンはメッセージで差し障りのない言葉を用いてクーゲルシュライバーにこのやり方の非効率さを説いた。

最初は渋っていたクーゲルシュライバーも、モモンの言う事が紛れも無い正論であるため最終的には折れることとなった。

折れたとは言え、その通りに実行してくれるかは別なので多少心配していたが、この分ならば問題なさそうだ。

出発前にミュールが言っていた「せめて一言だけでもお言葉を頂けたら」という願いを叶えることができたと言えるよう。

ミュールの寂しさを埋める力になれた事がモモンにはとても嬉しかった。

(あの二人ってどんな会話してるんだろうなあ。この会話方式だと3人揃って通話できないのが難点だ)

自分の知らない裏で友人とその娘がどんな話をしているのか気になるが、モモンはその欲求をグツと飲み下した。

「よし。それでは行こうか。初日だから基本的に大通りを歩こう」
「わかりました」

既に太陽は頂点を極めておりこれからは暗くなる一方だ。

完全に日が落ちたとしても暗視能力のあるモモンと、魔法的視覚を持つミュールの行動の妨げにはならない。

だが冒険者等という荒くれ者が集う都市の事、夜間に歩くのはいらぬトラブルに巻き込まれかねない。

それを避ける為に夜が降りてくる前に宿屋に到着できるように適度なペースを保たなければいけない。

時間配分に気をつけながらも二人はエ・ランテルの町を歩き始めた。



歩く二人を追うように、エ・ランテルの人々の視線が動く。

誰もが一度は二人を見つめ、頭から爪先までを観察する。

目撃者達の瞳はまず最初に二人が身にまとう見事な装備に注目する。

絢爛豪華な装飾の施された全身鎧、燃え盛る業火のような緋のマント、長大な二本のグレートソード、金糸と銀糸で刺繍を施された漆黒のローブ。

装備の価値に疎い者が見ても一級品の代物だと即座に理解できる見事な装いだ。

そして視線は首元へと伸び、そこで驚愕に見開かれるか猜疑に細められる事となる。

一級品の装備に身を固める二人が首元にかける冒険者の証は最低ランクを示す銅^{カツパー}。

あまりにもちぐはぐな組み合わせだと言えた。

二人が去った後目撃者達は口々に噂する。

一体どういった人なのだろうか？

そういった内容は全体からしてみればごく一部であり、殆どは身に纏う装備の素晴らしさについて語られている。

『ここにナーベが居なくて良かったな。あの美貌だ、つれてきていたら注目されすぎて散策もまともに出来なかったかもしれない』

ミュールにも聞こえるように放たれているのだろう、支配者としての言葉遣いになっているクーゲルシュライバーの思念がモモンに届く。

『確かにな。冒険者組合に登録しにいった時みたいな状態では、とてもじゃないが落ち着いて見て回る事はできなかつただろう』

『二人とも顔を隠す装備だったのが功を奏したな。多少怪しがられているみたいだが、まあ許容範囲だろう。……で、この街をどう思う』

『……中世と言われて真っ先に思い浮かぶ光景に近い、今のところはそう思うが』

『なるほどな。モモンの意見に賛同するが、ミュールの意見で私も気付いた。確かにこの街は清潔すぎる』

ミュールからのメッセージが届いたのだろう。

モモンがその内容を知ることが出来ないが、意見を受け入れられた、もしくは名前を呼ばれたせいだろうか？

背後に付き従うように歩くミュールの口元が微笑みを形作っており、足取りも軽くなっている。

唐突にご機嫌になった彼女に奇異の目で見るものは居ないかモモンは周囲を窺った。

(どうやら大丈夫のようだが……あまりにも露骨になった場合は心苦しいが注意しなくてはな)

『清潔すぎるとは?』

『一時期タブラ・スマラグディナに感化されて中世ヨーロッパについて調べ物をした事がある。それによると都市の人間は糞便を道端に捨てていたらしく、道路は汚物塗れになっていたそうだ。だがこの街にはそんな様子は無い』

『……なんだそれ。今も昔も人間は環境を汚染するのが大好きなんだな』

『モモンの言うとおり人間とはそういう生き物なのかもな。しかし汚れた環境で生活したい人間など殆どいない。環境汚染への対処法があるならばそれを行うのは当然だ。この世界の場合、魔法がなんらかの対処法として機能しているんだと思うが』

魔法の存在しない世界と、存在する世界。

当然ながら技術の発展の仕方も違うだろうし、世を覆う常識も違うだろう。

もしかすると魔法式水洗トイレや、魔法式湯沸かし器なんかもあるかもしれない。

今後ナザリツクの者達がこの世界で活動していくには、常識も大切だが現実世界には存在しなかった道具の使い方についての情報が必要になってくるだろう。

もし潜入任務中の者が、使えて当たり前のものが使えないなんて事

になったら不審がられるのは必至だからだ。

モモンは自分がナザリックに持ち帰らねばならない情報の量を思い、暗澹たる気分になった。

『見てくれモモン。街灯なんかあるぞ！ええいミユール止まれ。街灯を見るのだ。そう、そうそう。いいぞそこだ。一体燃料はなんだ？油か？いやガス？まさか電気というわけは無いだろうが、やはり魔法か？』

『夜でもある程度の明かりを取れるのはいい事だな』

……様々な考察を交えながら散策している内に数時間は経ち、日が傾き周囲が薄暗くなってきた頃

ふと、背後を歩くミユールが足を止める気配を感じ、モモンは立ち止まって彼女を振り返った。

ミユールが見つめて先には大通りから伸びる脇道があった。

裏通りという程狭くなく、かといって主要な道とも言えない絶妙な大きさの道だ。

『む、目を離していた。なんだミユール？立ち止まれとは言っていないぞ』

クーゲルシュライバーも突然停止したミユールの行動に疑問の声を上げている。

どうやらミユール個人が興味を引かれるなにかを発見したらしい。

『どうした？なにか気になるものでもあったか？』

「モモンさんがお気になさる程の物ではありませんが……。すこし懐かしいものを見かけたので」

ミユールにつられるようにモモンも脇道を覗き込む。

よく掃き清められているのだろう、石畳にはゴミは無く、敷き詰められている石すらも均一に並べられている。

道端の壁も拭き掃除がされているのか、他の場所では見られないほど清潔な印象を感じる道だった。

しかし言ってしまうえばそこは綺麗なだけの道である。

ミユールはこの道になんの懐かしさがあるというのだろうか？

「今は見えなくなってしまうかもしれませんが客引きがいました。ここは多

分、花街なんですね」

「かがい？」

「あら？……ああ、モモンさんには当然縁のない場所ですからご存じなくても仕方ないことですね。遊郭、つまり女が春を売る場所です」
うげっ！

そう声に出さなかったことをモモンは褒めてやりたかった。

目は見えないがミュールの優しげな声がモモンの羞恥を余計に煽った。

そのぐらい知ってるやい！と言いたかったが、あまりにも空しい抵抗な為途中で断念する。

いや、そんな事はどうでもいい。

真に気に掛けるべきは……！

『モモンガさん、俺ちよつとここ嫌だ。早く別の所にいこう？』

モモン個人に送られてくるクーゲルシュライバーの思念に、なにかささくれ立ったものが混じっている。

このビッチ嫌いで娼婦に対しても並々ならぬ嫌悪感を抱いている人物をこれ以上刺激してはいけない。

早々に立ち去るべきだ。

「そうか。だが遊郭など私にはなんの関係もないな」

肉体的に意味が無い。

そういう場所に対するちよつとした憧れや好奇心はあるが、本性が骸骨であるモモンには全く縁の無い場所と言えた。

モモンはマントを翻す。

クーゲルシュライバーの件が無くとも遊郭への入り口だと分かったからには、何時までもそんな場所で突っ立っていたくはない。

入るかは入るまいか考えてる童貞のようで、周囲の人間に見られていないか恥ずかしかった。

ここに長居する必要など皆無だ。

歩き出すモモンにミュールが気付く。

そしてミュールが歩き出そうとした時、彼女の目にかすかに人影が映りこんだ。

『馬鹿な!?!』

「うおっ!」

「きゃっ」

突如叩き付けられた大音量の思念にモモンとミユールが驚愕の声を漏らす。

精神作用無効化のおかげでモモンの動揺は口から漏れた声ほど大きくは無い。

冷静さを乱さず一体何があったのかと聞くモモンに対し、クーゲルシュライバーは興奮しきった思念で返答する。

『ありえない!ありえるわけがあるかクソが!ミユール!もう一度だ!もう一度確認しろ!ああいやでも……クソツ!我慢なんて無理だ!お願いだ確認してくれ!』

「は、はいっ」

異常な熱を孕んだクーゲルシュライバーの思念に従いミユールが花街への入り口を覗き込む。

モモンもただ事ではないと身を翻して覗き込む。

「……あの杖、魔法詠唱者か?」

覗き込んだ先には客引きと思われる男性と別れ、俯き加減でこちらへと歩いてくる魔法詠唱者風の人物が居た。

サイズが合っていないのだろうダボダボの皮の服を着た上にマントを羽織っただけの軽装だ。

それだけならば一般人かと思うだろう。

しかし手に持った先端がO字状になっている杖と、腰のベルトに備えられたポーチや奇妙な形状の瓶や木工細工、そして胸元に輝く銀の輝きがこの人物が冒険者であり魔法詠唱者である事を示していた。

黄昏の光に照らされ判別がつきにくいのが、濃い茶色の髪の毛を無造作に短く切ったような髪形をしており、その顔は……。

「んん……?」

「あら……?」

モモンとミユールが同時に戸惑いの声を上げた。

二人は互いの顔を見つめる。

そして同時に何事か喋ろうとしてクーゲルシュライバーの思念に遮られた。

『……もう、十分だ。ここを離れよう。あんまり見つめていたら不審がられるだろうしな。二人とも驚かせてすまなかつた、許してくれ』
『許しますし、了解しました。でも一体どうしたんですかクーゲルシュライバーさん』

『……ごめんいまちよつと混乱してて。落ち着いたら話しますから、今は……』

打ちひしがれているような覇気のない思念を返すクーゲルシュライバーに、モモンはこれ以上声をかけるのが辛くなった。

この過激な反応からして、例のトラウマに関係していることが想像できる。

そして遠目ながら垣間見たあの顔。

モモンの中で情報が組み立てられ、とある可能性にたどり着こうとしていた。

しかしモモンは即座に意識を切り替えるとその場を後にすべく歩き出した。

一瞬遅れてミユールも歩き出す。

まだ距離は離れているが、魔法詠唱者らしき人物がこちらを不審そうに見つめていたのだ。

(別に怪しいものではない……なんて実際怪しいよなあ。でもこのくらい問題にはならないだろ)

既に視線を魔法詠唱者風の人物から逸らしていたのがせめてもの慰めだ。

きつと、花街に入ろうかどうか迷った末にやっぱりやめた……そんな風に思われただけだろう。

(それはそれで恥ずかしいぞ……まるで初めてアダルトコーナーに入ろうとする中学生のような……)

頭を抱えなくなるが、モモンは全身鎧によって表情を読まれないこと、そもそも骸骨なので表情がない事を頼りに内心の羞恥を動作に出す事無く歩き続ける。

つい先程まではテレパシーとメッセージを多用してたとはいえ会話が途切れなかったはずなのに、今ではずっと無言である。

その空気に耐え切れなくなったのか、珍しくミユールがモモンに話しかけてきた。

「あの冒険者の方は情報収集でもしていたのかもしれないね。花街には情報が集まるもの。女と肌を合わせている時の殿方は口を滑らせやすいものですから」

「そうなのか？」

「そうなんです。モモンさんは情報を集める事こそ重視していますし、覚えておいて損はないかと思います」

「……まあ覚えておこう」

覚えておいたところでどう活用すればいいのかモモンにはさっぱり分からなかった。

「しかし情報収集か。普通に女を買いに来てたんじゃないか？ なんだか元気が無かったのは目当ての女が居なかったとか」

「それはないでしょう。あの方はいたって普通そうでしたので」

自信満々に切って捨てられたモモンは、どういうことかいまいち理解できないものの、きつとそういう事なんだろうと納得する事にした。

普通そうだとかは自分には分からないが、それはないと判断するのが当然のような即答ぶりだったからだ。

先程の「花街」の件もある。

あまり連続して無知を晒したくなかった。

「必要とあれば花街で情報を仕入れてくることも出来ますので、その時にはどうぞお気軽に言ってくださいね」

「うん？ 情報を仕入れるって一体どうやって」

「それは……きやつ!？」

話の途中でミユールが突然耳を押さえて蹲った。

モモンは背中中のグレートソードの一本に手を伸ばすと周囲を油断無く警戒する。

「あ、モモンさん、ちが、違います。攻撃されたわけじゃなくて……」

「違うのか？」

「はい、ちよつと叱られてしまつて……今もお叱りを受けています」
モモンはグレートソードから手を離し、ミユールへと手を差し出した。

その手を取る事は無く自分の力で立ち上がると、ミユールはモモンに軽く頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。不意な大声で……」

「いや、別に構わないが、彼は何をそんなに怒っているんだ？」

「……私の身を案じてくれているんです」

「それはどういふ……」

どういふことだと問おうとしたモモンだが、最後まで言う事が出来なかった。

なぜならば少しずれたフードの下から、滅多に見ることの出来ないミユールの素顔が見えたから。

そしてその顔が、とても幸せそうに微笑んでいたから。

「まあいい。会話が終わつたら教えてくれ。急に大声を出すなど彼に言つてやらねばならん」

これが安全な場所だったからいいものの、戦闘中だったり大事な交渉中だったとしたら一大事だ。

大声での不意打ちテレパシーは今後行わないようにクーゲルシユライバーにしっかりと言い渡さなければならない。

「はい。終わりましたらお伝えします」

そして二人はまた歩き出す。

フードの位置を戻したミユールがモモンに会話の終了を伝えたのは、二人が宿屋の前に到着した頃だった。



翌朝、冒険者組合の受付カウンター前でモモンは勝利の雄たけびを上げていた。

もちろん心の中での話である。

モモン、ナーベ、ミユールの三人が揃ったことで増した人々の視線の中で、モモンはこの世界の字が読めないというナザリックの支配者、そして有能な冒険者としての沽券に関わる絶体絶命のピンチを迎えた。

この危機を勇気と知恵と演技力を駆使し見事乗り切ったモモンの心中では、木霊す雄たけびだけではなく彼を喝采する今は居ない仲間達の姿さえあった。

モモンは勝利者であり、英雄であり、偉大なるギルド長だった。

後もう少しすれば受付嬢が丁度良い仕事を見つけてくるだろう。そして文字ではなく、口頭で仕事内容を説明してくれるはずだ。

あまりにも完全な精神的勝利にモモンは感涙しそうになる。

しかし、元より出るはずも無い涙が出るよりも早く、男の声が掛かった。

「それなら私達の仕事を手伝いませんか？」

「あん？」

ドスの利いた声が口から漏らしつつモモンは声のした方向へと頭を向ける。

その先には銀のプレートを首から提げた4人組の男達が居た。

「あ」

「あら、あの方は」

モモンとミユールが見つめる先には昨日花街へと続く通路で見かけた魔法詠唱者がいた。

視線を向ける二人に対して会釈している事から、どうやら向うも昨日の事を覚えているらしい。

「モモンさーん、あの者をご存知なのですか？」

「ああ。昨日の散策中に少しな」

興味が薄そうな視線を男達に向けながら聞いてくるナーベに答えると、モモンは即座にクーゲルシュライバーにメッセージを飛ばす。

『どうでしょうか？ 俺としてはコネクションを得る為に彼らの仕事を手伝うのもアリだと思おうのですが』

『俺もそれでいいと思います』

すんなりと返ってきた了承の言葉にモモンは眉を顰めた。

昨日あれほど取り乱す原因となった人物とこれから行動を共にする事になるかもしれないのに、クーゲルシュライバーの声は冷静だったからだ。

『あの、本当にいいんですか？無理してませんか？』

『本当に大丈夫です。昨日の事は……不意打ちだったんで取り乱しましたけど、もう整理はつけました。むしろ今ではあの子に積極的に関わりたいぐらいなんです』

『……なら受けちゃいますよ？』

『お願いします』

一体どういう心変わりなのか聞きたかったが、相手が此方の答えを目の前で待っている以上クーゲルシュライバーと長話している場合ではなかった。

「まずは仕事の内容について伺いましょう。やりがいのある仕事ならば、お手伝いしますよ」

その返事を聞くと男達は受付嬢に依頼して部屋を一つ用意させた。

冒険者組合の二階にある部屋で、会議室のような場所だ。

木のテーブルがあり、その周りには椅子が用意されている。

テーブルを挟んで銀プレートの冒険者達4人とモモン達3人は向かい合って椅子に座った。

『流石は銀級冒険者。初心者卒業間際ってところか』

『皆若い割に落ち着いた雰囲気ですし、なんだか隙が無いような立ち居振る舞いですよ。椅子の間隔を空けているのは武器を抜きやすくする為、ですかね』

『それか逃げやすくするためか。どちらにしろ結構なやり手ですよ。TRPGでの強キャラムーブにこんなありましたし』

強キャラムーブというのがどういうものなのかモモンには分からなかったが、少なくとも昨日宿で出会った三下達よりは強そうな気配を感じる。

今のところ、自分達を脅かすほどの力は感じられないが、それなり

の態度で接するべき相手だった。

「それじゃあ仕事の話をする前に、簡単な自己紹介をしておきましょう」

先程声をかけてきた戦士風の男が代表として話だす。

「私が『漆黒の剣』のリーダーのペテル・モークです。あちらがチームの目や耳である野伏^{レンジャー}、ルクルット・ボルブ」

ペテルと名乗った男はこの辺りの人間としては一般的な金髪碧眼の青年だ。如何にも好青年らしい整った精悍な顔立ちをしており、帯鎧と片手剣、盾で武装している。

装備の質はスレイン王国の偽装帝国兵と比べて多少劣るといったところか。

どちらかと言えばガゼフ率いる戦士団に近い印象があるのは、装備品の各所に使い込まれた、それでいてよく手入れされた跡が多く見受けられるからだろう。

そんな歴戦、とは言えずとも場慣れした戦士の雰囲気を纏ったペテルが紹介したのは彼の隣に座る軽薄そうな笑みを浮かべる男だった。

此方も金髪、瞳は茶色だ。

ペテルが着ているものと比べると軽量で防御力に劣る皮鎧と、小剣、そして弓を装備している。

全体的にやせ気味で手足が長く蜘蛛のような印象を与える男だが、そこに非力さは全く感じられない。

「そして魔法詠唱者であり、チームの頭脳。ニニヤ——『スペルキャスター』」

「よろしく。またお会いしましたね」

やや甲高い声で挨拶するのは昨日モモン達が出あった魔法詠唱者、ニニヤ。

この中では一番の年下だろう。そして一番の美形だ。

遠目では分かりづらかったが、濃い茶色の髪と青い瞳の中性的な美しさを持った人物だった。

「ええ。不躰な視線を送ってしまっただけです。銀のプレートが珍しかったもので」

「いえ、僕こそ恥ずかしいところをお見せしてしまいました。出来れば忘れていただけると助かります」

「ではそのように。ミュールもいいな？」

「もちろんですモモンさん」

ガタツ！

大きな音を立て、突然ニヤが椅子から立ち上がった。

ニヤの青色の瞳は大きく見開かれており、その視線はミュールに注がれている。

「うそ……でも、まさかそんな……」

「おいおい、いきなりどうしたんだよニヤ？」

「何に驚いているのかは知らないであるが、落ち着くのである！」

様子のおかしい仲間を落ち着かせようとルクレットと、あともう一人、紹介されていない大柄な男がニヤの肩に手をかけ椅子に座らせようとする。

よほどに珍しい事態なのか、リーダーであるペテルも一瞬あつげにとられていたが、直に我を取り戻しモモンに対して謝罪する。

「仲間がすみません。どうかお気を悪くしないで下さい。……一体どうしたっていうんだニヤ？」

「ミツ、ミュールさん、と言うんですか？お願いします、どうか、フードを！フードをとって素顔を見せてくれませんか!？」

叱りつけるよりも心配する色の方が強いペテルの言葉が聞こえていないのか、ニヤは抑えられている小柄な体を精一杯起き上がらせてミュールに向かって嘆願した。

「モモンさん、どうしましょうか？」

首をかしげながら問いかけてくるミュールにモモンが答えようとするその前に、三人にクーゲルシュライバーからの思念が届いた。

『見せてやれ。モモンもそれで構わないだろう？』

確かに構いやしない。

モモンは一応ナーベの意見を聞くべく視線を向けてみるが、判断は全てお任せしますと言わんばかりに頷かれてしまった。

なんとという主体性のなさ。

主人が傍にいるメイドなどこんなものかと思いつつも、モモンはミュールに許可を出す。

「ミュールがいいならば好きにするといい」

「わかりました。では……」

ニニヤを筆頭に視線を向けてくる『漆黒の剣』の前で、ミュールが頭部を覆うフードに手を掛けた。

そしてゆつくりとフードを上げていく。

「うおっ！こりやまたすつげえ美人さんじゃないか！」

パサツ。

軽い音を立ててフードが取り払われた時、真っ先に声を上げたのはルクルツトだった。

彼はナーベとミュールを交互に見ると、最後にモモンを見た。

「色男だね旦那。こんな美人二人も連れちゃってさ」

「やめないかルクルツト！すみません、仲間が失礼なことを」

「いや、お気になさらずに」

モモンは手を掲げ謝罪は不要だとペテルに伝えようと、ニニヤの様子を観察した。

「あ、ああ……」

モモンの視線の先ではニニヤが目元に大粒の涙を浮かべながら、クシヤクシヤに歪んだ今にも泣き出しそうな顔でミュールを見つめていた。

「やっと会えた……ツアレ姉さん!!」

え、誰それ？

驚愕の声を上げた後此方に鋭い視線を向けてくる『漆黒の剣』の面々を見て、モモンは心の中でそうこぼした。

31話

「姉さんが攫われてから7年……やっと会えた！」

「え？ええ？」

ニニヤは机に身を乗り出してミユールの手を握る。

大切な人と離れ離れになる辛さを知るモモンは、ニニヤが過ごした時間の長さを思う。

きつとその7年間様々な苦労があつたのだろう。

ニニヤの若さで7年前と言えば中学生かそれよりも下のはず。

最終学歴が小学校のモモンは若年者が社会に出て働くことの苦勞を知っているつもりだ。

だからこそ感動に打ち震えるニニヤの心境を思い描くことが出来る。

きつと二十数年を勉強と競争につき込みアークロジの居住権を得た喜びと比べてもさして違いはないはずだ。

(だが人違いだ)

そう。

悲しいことにどれだけニニヤが感動しているところでその事実是不変ならない。

だからそんなに睨まないでほしいとニニヤを除く『漆黒の剣』の面々に言いたい。

攫われた、というニニヤの発言から、彼らが自分の事を誘拐犯かなにかだと疑っているのは窺い知れるが、彼ら自身の為にもそろそろ止めてもらわねば困るのだ。

なにせ――

「……ちっ」

聞こえてきた舌打ちにモモンは肝を冷やす。

右隣に座るナーベの機嫌が最悪なのである。

切れ長の美しい瞳には触れれば切れる白刃のような危険な光が宿っている。

大方、人間如きが至高の御方にガン垂れてるんじゃないぞ……とか

そういう事を考えているに違いない。

この数日で分かった事だが彼女はかなり短気な性格をしている。いきなり魔法で殺しにかかったりはしないとは思うが、痛めつける程度はしてもおかしくはない。

『漆黒の剣』の此方への態度は決して褒められるものではないしモモン自身多少の不快感はあるが、それでも彼らはこの街における情報収集の貴重な足がかりである。

ナーベが暴発する前になんとかしなければならなかった。

「落ち着いてくださいニニヤさん。ミュールはあなたの姉ではありません」

「モモンさんの言うとおりです。私はあなたとは初めてお会いしました。誤解させてしまって申し訳ないのですが、人違いですよ」

「そんな！だって声も顔も姉さんそのものじゃないか！」

モモンの言葉を補強するように困り顔で微笑みながら誤解だと伝えるミュールを、そんなはずはないとニニヤは頭を振って否定した。

頑なにミュールを姉だと思い込もうとしているニニヤの姿に、モモンに向けられていた『漆黒の剣』の視線が逸れていく。

彼らとて憶測で此方を誘拐犯だと決め付けて事を荒立てる愚かさはわかってるのだろう。

リーダーであるペテルはモモンに対し小さく頭を下げると立ち上がり、ミュールの手を握るニニヤの手を掴んだ。

身体能力において戦士職であろうペテルに魔法詠唱者であるニニヤが勝てるはずもない。

繋がれていた手は容易く離れ離れになった。

「ニニヤ、落ち着くんだ。落ち着いたら、もう一度冷静に確認してみくれ。本当にニニヤのお姉さんなのかい？」

「ペテル！私が姉さんを見間違うわけがないです！」

手をつかまれたまま吼えるニニヤの隣で、ルクレットが頭を掻きながらペテルに続く。

「でもよニニヤ。お前が姉貴さんを最後に見たのは7年前だろ？7年もありやあ人は変わるし、記憶なんざ曖昧になるもんだぜ」

「ニニヤの記憶が確かだとしても、もう一度確認するべきである。世の中には顔の似ている人物が三人はいると言うのであるからな！」

まだ紹介されていない髭の男が加勢し、落ち着いた低い声で諭すようにニニヤに語りかけた。

チームメイト三人からの説得を受けたニニヤは口をへの字に歪めながらも自分の椅子へと座り込んだ。

そしてミユールをじつと見つめる。

「声は姉さんそのものです。でも髪の毛の色が違う……でも染めることは出来るし……」

「これは地毛ですよ」

ミユールがセミロングの黒に近い茶色の髪を手櫛で梳かしながら言う。

空気を含んだ髪から複雑に混ざり合った花の香気が放たれ、『漆黒の剣』の男達の鼻腔をくすぐった。

「うっひよおー！すごいなー！どういう香油使ってるんだあ？」

「うるさいぞルクレット」

鼻をひくつかせ目を輝かせるルクレットに肘鉄を入れるペテル。

そんな二人を無視してニニヤは今にも消えそうな細かい声で呟き続けている。

「よく見れば……姉さんよりも綺麗な顔をされていますね。黒子の位置も違う……それじゃあ本当に？」

「期待させてしまって申し訳ないのですが、そのとおりです。私はあなたの姉ではありません」

「ッ！」

ようやく納得したのだろう。

突きつけられた現実に打ちひしがれるようにニニヤは俯き、なにかを堪えるように肩を震わせる。

そんな仲間の姿を見てペテル達が心配そうな表情になるが、即座にニニヤを慰めるような事はしなかった。

リーダーであるペテルは何よりも先にモモン達三人に対して謝罪することを選んだ。

「度重なる無礼、本当にすみません」

テーブルに頭が着くほどに深いお辞儀の姿勢で、ペテルの口からは次々に謝罪の言葉が飛び出してくる。

何時終わるかもわからない謝罪の洪水に対して、モモンは早々に待ったをかけた。

「そのような謝罪は不要ですよペテルさん。多少面食らいましたが、なにか事情がある様子。それも家族に関する事情であればニニヤさんが必死になるのも当然でしょう。このぐらい無礼の内にも入りませんよ」

おおつ、という感嘆の声が『漆黒の剣』から漏れる。

それはモモンの態度が非常に落ち着いており、堂に入った見事なものであったからだ。

『漆黒の剣』は知るよしも無いが、モモンは謝罪しようとする者への対応についてはナザリツクで散々経験を積んでいる。

豊富な経験に裏づけされた堂々たる態度は、見る者に「この人は只者ではない」という印象を深く植え付けていた。

「それよりも最後の方の紹介をお願いしますよ」

「は、はい。彼は森司祭^{ドルイド}——ダイン・ウッドワンダー。治療魔法や自然を操る魔法の使い手で、薬草知識に長けています」

「よろしくお願います！」

口周りにぼさぼさの髭を蓄え、体格もかなりガツシリとした大柄の男が重々しく口を開いた。

森司祭^{ドルイド}よりも蛮族^{バーバリアン}の方が似合っているような男ではあったが、知性と落ち着きを感じさせる声だった。

「では私達の番ですね。こちらがナーベ。魔力系魔法詠唱者であり第三位階魔法の使い手で直接的な火力に優れます。そして彼女はミュール。様々な秘術、妖術に精通しており、同時に信仰系魔法詠唱者でもあります。直接火力ではナーベに劣りますが支援系の第三位階魔法を使用可能です。そして私はモモン。見ての通り戦士で、剣を使つて前衛として戦います」

「……よろしく」

「よろしくお願ひしますね」

愛想よく頭を下げるミュールに対してナーベは少し無愛想だった。その事にモモンは眉を顰めるが、『漆黒の剣』達は自分たちの行いからナーベの反応も無理はないと誰一人嫌な顔一つ見せなかった。

「はい。こちらでもよろしくお願ひします。それでモモンさん方が此方を呼ぶ際は名の方を呼んでいただいて結構ですよ。……それにしてもすごいですね。第三位階魔法の使い手が二人もいるなんて」

「私程度、モモンさんに比べれば何ほどのものでもありません」

「ナーベさんの言うとおり、モモンさんにはどうやっても劣りますので過剰な期待はなさらないでくださいね？」

再び視線がモモンに集まる。

熟練魔法詠唱者二人が口をそろえて褒め称える戦士とは一体いかなる存在なのか？

底知れぬ実力を秘めるであろうモモンに興味が向くのは自然なことだった。

しかしモモン自身としてはそこまでハードルを上げられると落ちて着かない。

モモンはレベルだけならばこの中の誰よりも優れているが、前衛としての技術は皆無に等しい。

ナザリツクを出る前に闘技場で最低限剣の振り方だけでも練習しようとして素振りしていたところ、ふらりと現れたクーゲルシュライバーに「やだ、モモンガさんその構え超ダサイ」と言われた心の傷は未だ塞がっていないのだ。

その後と同じ二刀流だからとアドバイスを貰ったが、いざ戦闘になった時に構えからド素人であると露見するのではないかと心配なのである。

しかしその心配や不安を押し殺しモモンは胸を張る。

モモンは偉大なる戦士であり稀代の英雄となる男なのだ。

アンダーカバー
偽装身分としてそれを選んだからには、相応しい態度を心がけなければならぬ。

「二人はこう言っています私に出来るのは剣を振るうことだけで

す。期待されても剣から火球を飛ばしたりはできませんよ?」

肩をすくめ小首を傾げておどけてみせるモモンの姿に『漆黒の剣』から小さな笑いが起こった。

「あはははーそんな事は思いもしませんよ。ですが剣技の方は期待しても?」

「どうぞいくらでも。皆さんの期待を悉く上回ってご覧にいれましょう」

「それは楽しみです。では早速ですが仕事についての話をしましょうか。いえ、仕事と言っても実は仕事ではないのですが」

「ん?それは一体どういう……」

訝しむモモンにペテルは詳細を話し始めた。

彼ら『漆黒の剣』がやろうとしているのは街周辺に出没するモンスタの討伐だという。

仕事であって仕事ではないというのは、これが街、つまりは国が組合を通して報酬をだしているので「冒険者組合の仕事」ではないのが理由だ。

モモンの知識で言えば、環境破壊によって野生動物が居なくなつた為に自然消滅したという有害鳥獣駆除のようなもので、ユグドラシルにおけるフィールドモンスタを狩ってドロップアイテムや金貨を得る行為に相当する。

ゲーム的に考えればこういった行為は冒険者の基本であり、旨味のあるクエストがない時に行われるものである。

銀級冒険者であるペテル達があえてこのような事をしていけると、受付で仕事を探してもらったとしても碌なものは無かつたかもしれない。

これがゲームならば初心者用クエストが用意されているのが当然だが、現実ではそんな仕事は真つ先に奪われ消えてなくなるのが定めである。

差しあたって当面の資金を得たいモモンとしては、ペテル達の仕事を手伝うのが最も良い選択だと思われた。

どのような手順を踏んでモンスタを討伐し報酬を得るのかを知

ることも出来るし、仕事を共にすることで様々な知識を得ることもできるだろう。

クーゲルシュライバーがニニヤに対して興味を示している事もある。

モモンはペテルの説明を聞き終わると、報酬についての話を取りま
とめてから仕事に協力することを伝えた



魔法の光すらも消した暗黒の寝室で、全身の甲殻の縁に青紫の光を走らせながらクーゲルシュライバーはミユールを通じてニニヤを見つめていた。

もしもこの姿をモモンガや知識豊富なNPCが見たとしたら、即座にクーゲルシュライバーのやろうとしている事を阻止しようとするだろう。

なぜならばこの状態こそクーゲルシュライバーが持つ転移蜘蛛フェイズ・スパイダーの特殊能力である転移能力を発動させる一歩手前の姿だからだ。

モモンガの転移門ゲートの魔法がそうであるように、クーゲルシュライバーの転移能力もなんらかの方法で転移先の光景を確認できればその場へと転移が可能になる。

そしてクーゲルシュライバーはいま、ミユールの視界を通してニニヤのいる冒険者組合二階の視覚的情報を得ている。

ナザリック内に転移するつもりならば自前の転移能力を使用する意味はない。

何処に転移する気なのかは火を見るよりも明らかだった。

「いや、いやいやいや。何度目だ。落ち着け俺」

自分に言い聞かせるように放たれた言葉と共に甲殻の隙間を流れる光は弱くなっていく。

これで計14回目のスキル発動中断だった。

「ああ嫌だ嫌だ。見守るって決めたのにすぐに決意が揺らぐ。こんな落ち着かない気持ちになるって分かってたからミユールアニス avoidance

ていたのに、なんでこう似ている奴が出てきてしまうんだ」

そんな言葉とは裏腹にクーゲルシュライバーの声には隠し切れな
い喜びがあった。

自らの声を聞き、如何に心が飢餓状態に陥っていたのかを悟った
クーゲルシュライバーは悲しげに息を吐いた。

「必死に忘れようとした数年が無駄になってしまった。しかも姉、ツ
アレ姉さんだと？ミユルアニスよりは美貌に劣るらしいが、それはつ
まりアイツそのものな見た目ってことじゃないのか？」

八つの瞳が激しい欲望の炎を宿して紅く輝く。

極上のご馳走が並ぶテーブルに、忍耐に忍耐を重ね食事制限を続け
ていた空腹に苦しむダイエッターを座らせたらこんな目になるのか
もしれない。

しかし目的を果たさんとするダイエッターが暴食を拒もうと葛藤
するように、クーゲルシュライバーもまた心の飢餓に膝を屈すること
にか弱い抵抗をみせていた。

「ニニヤの姉、ツアレか。ミユルアニスと同じで絶対に会うわけには
いかないな。歯止めが利かなくなる。……ニニヤはもう、仕方ないけ
ど」

クーゲルシュライバーは意識を集中させミユールが見聞きした情
報を読み取る。

ミユールにはニニヤを可能な限り視界に入れるようにと密かに命
令してある。

お陰でクーゲルシュライバーは陰りのある表情で頻繁に視線を向
けてくるニニヤの姿を堪能することができた。

「本当に面影のある子だなあ。俺はこの出会いを恨んだらいいのか、
喜べばいいのか」

膨大な感情が混ざり合った混沌の塊が心の空白を埋めていく。

その感覚から自身に苦しみに満ちた未来が訪れる事を確信するが、
その一方で大きな喜びと満足感が確かに存在していた。

クーゲルシュライバーは人間状の部位における胸に相当する場所
に擬腕をあて、暗い地の底から天を仰ぐ。

「やっぱり風化させて忘れ去るなんて出来ないよな」

闇に覆われた視界に、クーゲルシュライバーはかつての日々を幻視する。

紛れも無くあの日々は人生の絶頂期であり忘れがたい青春だ。

今となってはどれほど心を乱す悪因となっていて、捨て去ることは不可能に思えるほどに大切な記憶だった。

「どだい無理な話だったか」

疲れたように吐き捨てる。クーゲルシュライバーは遠く離れたミュールにむけて強く念ずる。

暗闇の中で首から提げた干首の群れが、苦しみ悶えながらその効果を発動させた。

『ミュール、重要任務だ。モモンガとナザリックの利益を最優先しつつも、ニニヤとの関係を重視して行動しろ。可能な限り友好的な関係を築くのだ。そしてある程度関係が深まったら例のアイテムを与えてやれ』

『了解しました。アイテムを譲渡する時の説明はいかが致しましょうか?』

『もう少しニニヤを観察してから追って伝える。現状としては友好関係の構築に全力をあげろ』

『ではそのようにします。……あら?』

通話の途中でミュールが疑問の声をあげる。

その理由は視界を共有しているクーゲルシュライバーにはすぐに理解できた。

漆黒の剣のルクルトトという男がモモンとナーベの関係について質問したと思ったら唐突に愛の告白を始めたのである。

ナーベからの冷たい視線と痛烈な断りの言葉を貰っているにも拘らず、ルクルトトはまったく堪えていないように見えた。

『見るからに軽薄そうな男だとは思っていたが、なんとという度胸だ。ナンパが生きがいとかそういう人種なのだろうか?』

『それか彼なりのコミュニケーションなのではないでしょうか?』

『そうかもしれないがな。……もしもお前にもしてくるようならキツ

パリ断るように。ああいう奴とベタベタするのは絶対に許さんからな』

『……はいっ』

ミユールの何処か嬉しそうな声を苦々しく思いながらテレパシーを終える。

さっきの自分の言葉はどういう心の動きから出たものだろうか？

考えようとするだけで、頭が混沌としていくようだった。

「ちくしょう、モヤモヤしやがる……」

クーゲルシュライバーは擬頭を掻き毟るとベッドに身を投げ出した。

そして。

「あ、シャルティアへのご褒美用人形つくらなきや」

やるべき事を思い出して寝室から這い出て行くのであった。



「厳しいお断りの言葉ありがとうございます！でもごさいます！では友達から始めてくださいー！」

「死ぬ、ウジムシ下等生物。私がお前の友人になどなるわけないでしょ。目をスプーンでくりぬかれないの？」

すでに二度目となるルクレットとナーベのやり取りは、今回も取り付く島もない有様だった。

しかしそれでもルクレットにめげた様子は無い。

ニコニコと笑いながらわざとらしく額に手をあて嘆いてみせるその姿は、モモンに黒^{バンドラス・アクター}歴史を思い出させ僅かなりとも機嫌を損ねさせていた。

「なんと冷たいお言葉！私の心は深く傷つきました！この上は信仰系魔法詠唱者であるミユールさんに癒してもらうほかありません！」

（おいおい今度はミユールか？ナーベみたいな事にはならないだろうが、大丈夫か？）

モモンが心配そうに見つめる中、クルリクルリと芝居がかった動き

でミュールの前まで近づいたルクルクットはこれまた大げさな身のこなしで跪き、姫の手を取る騎士の如く己の手を差し出した。

ミュールはそれを見るとにっこりと微笑んだ。

「恋は一途に秘めるもの。多情な人は嫌いです。私の神の名において、呪って差し上げてもよろしいのですよ?」

いつの間にか青紫色に発光する短杖ワンドを手にしているミュールに、漆黒の剣から小さな呻き声が上がった。

喜ばしい事に秘術の使い手による「呪ってやる」発言を軽んじる冒険者にあるまじき迂闊な者は漆黒の剣には居なかつたということだ。

秘術という分類の魔法は膨大な種類に分かれるが、その中でも一際恐ろしいものとして「呪い」という種類がある。

呪いの効果は様々であるが、そのどれもが人々が嫌厭するに足る陰湿な脅威を秘めている。

一度呪われれば解除は困難なため、一般人冒険者問わず非常に恐れられている魔法なのである。

「あー……ちなみにそれ、どんな呪いなんです?」

笑顔を引きつらせ冷や汗を垂らしながらもルクルクットは気丈にも軽い口調でミュールに問う。

短杖ワンドが放つ魔法の光による照り返しを受けながら、ミュールは愛らしい笑顔をルクルクットの下腹部に向けて言った。

「ルクルクットさんのお腰のものが先端から裏返る呪いです」
「んなあつ!」

身の毛もよだつおぞましい呪いの効果を耳にしたペテル、ルクルクット、ダイン、モモンの四名から純粹な恐怖の悲鳴が漏れた。

ルクルクットなどはもう内股になってつま先だけで後ずさり自分の椅子へと撤退する有様だ。

だがそれを笑える男が何処に居ようか? そんな男は居ようはずも無い。

「あはははー! その呪い良いですね。僕もいつか姉さんを攫った豚貴族にかけてやりたいんですが、やり方を教えてくれませんか?」

「まあニニヤさん! それはいい考えだと思います。私でよろしければ

喜んでお教えしますよ」

「ありがとうございますミユールさん！」

楽しそうに話をするミユールとニニヤ以外に言葉を発するものは誰も居ない。

仲睦まじい二人から視線を逸らすと、ペテルとモモンは互いに頭をさげた。

「……仲間がご迷惑を」

「いえ、此方こそ申し訳ありません」

青い顔をしているペテルの表情からは此方に対する若干の親しみを感じられた。

男子共通のシモの恐怖に対して共に震えたことが、プラスに働いたのかもしれない。

それはそれでなんか嫌だなあ、と思いながらもモモンは全員に向かって声をかけた。

「ではもうお互いに質問はないという事でよろしいですかね？」

反論の声は上がらなかつた。

「ではモモンさん達の準備が整いましたら出立しましょう。こちらの準備は既に出来ておりますので」

「此方は食料の補給さえできれば出発できます」

冒険者の宿で3人分の冒険道具一式を購入したせいでモモンの手持ちの金は激減している。

とはいえ食料を全く食べないで活動しているのは不自然すぎる。

一々食べられそうな動物を捕獲するのも面倒だし、捕まえたところで料理の仕方が不明だ。

ここは最低限の量でいいから食料を手に入れる必要があった。

「食料だけですか。特定の店で購入する必要があるのならばカウンターで保存食を注文してはどうですか？」

「そうですね。それがよいでしょう」

「では行きましょうか」

全員が立ち上がり階下へと歩き出した。

冒険者組合の一階は相変わらず多くの冒険者でごった返していた。

しかしどうも様子がおかしい。

誰もが皆カウンター前で受付嬢と話をしている金髪の少年を気にしている。

モモンはこの町における有名な冒険者なのだろうかとも思ったが、少年の装備が厚手のエプロン以外一般人と大差なく首になにも下げていないことからその考えは間違いだという事を悟った。

ではあの少年は何者なのだろうか？

好奇心を向けるモモンの視線の先で受付嬢が驚愕の表情を浮かべる。

そして彼女の視線は階段を下りるモモンへと向けられた。

「ご指名の依頼が入っています」

受付嬢がそう言った瞬間、背後の漆黒の剣、そして眼下の冒険者たちから驚きの声が上がリ好奇心に輝く無数の瞳がモモンへと向けられた。

32話

エ・ランテルから東北にあるカルネ村に向かい、馬車一台とそれを取り囲む7人の冒険者が平原を進んでいた。

東に向かう彼らの左手にはトブの大森林の威容が広がる。

無数の巨大な樹木が有り余る生命力に任せ大きく枝葉を伸ばした結果、太陽光の殆どは濃緑の大海に飲み干され、森の中は深海を思わせる暗さと不気味さを宿していた。

今は遠く離れているが森は人外が跳梁跋扈する未開の地に他ならず、突然未知の怪物が森の中から躍り出てきてもなんらおかしくは無い。

だが馬車を囲む冒険者達、ペテル・モーク率いる『漆黒の剣』とモモン達三人組に緊張の色は無い。

前者は経験と知識からこの辺りにまで脅威となるようなモンスターは出てこない事を知っているのと、出発直後に見たナーベとミュールの第三位階魔法への信頼感から。

後者はアウラやクーゲルシュライバーといった仲間達の報告で、森全体に自分達の脅威となりうる強大なモンスターが居ない事を知っているからだ。

(まあ見落としがあるかもしれないし、案外地下に何か潜んでいるかもしれない。油断はしないに越したことはないんだが)

実際にこの世界には自分達を脅かすにたる能力を持ったものが居る。

決して油断はするまいと己に言い聞かせながら、モモンは馬車の御者をつとめる長い前髪で目を覆い隠した金髪の少年、ンフィーレア・バレアレを見つめた。

モモンを名指しで依頼したのはこの少年、ンフィーレア・バレアレだった。

エ・ランテルにおける最も腕のよい薬師であるレイジー・バレアレの孫であり、本人もまた優秀な薬師であり稀少なタレントの持ち主である街有数の有名人である。

そんな彼をモモンが油断できないと警戒する理由は、彼をエ・ランテルの有名人にしている稀少かつ強力なタレントにある。

タレントとは大体200人に一人の割合で生まれ持つという、ユグドラシルには無かったこの世界特有の能力だ。

その効果は人によって様々であり、イネ科穀物の収穫時期を数日早めるといったものから、召喚したモンスターが少しだけ強くなるという戦闘向けのものなど多種多様である。

そんなピンからキリまであるタレントだが、ンファイレアが持つのはモモンがこの世界で聞いた中では最も強力な能力だった。

彼のタレントは「あらゆるマジックアイテムの使用が可能」というもの。

その効力は王族の血が流れている事が使用条件のマジックアイテムでさえ、使用を可能とするのではと噂されている。

(ギルド長でしか使えないギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウル・ゴウンですら使用できるかもしれない能力。ナザリックを崩壊させることが可能な力だ。やはりこの世界の未知は十分に我々の脅威となる。未知に備えなければ)

モモンはンファイレアを警戒すると同時に、高く評価していた。

その能力は敵に回れば厄介この上ないが、味方にすれば非常に心強い。

彼は不可解なことに、野放しにするにはあまりにも強大な力の持ち主であるにも拘らず国による保護を受けていない。

この隙に可能であればンファイレアの身柄を押さえ、さらに一歩踏み込んでその貴重な能力を引き剥がしてしまいたかった。

タレントという能力を引き剥がしデータクリスタルなどに変換する事は、超位魔法《ウイッシュユニアボン・アスター星に願いを》を使えば可能かもしれないのだ。

本来ならば経験値を消費するこの超位魔法は濫りに使用することは出来ないのだが、毎日ノーコストで召喚されたモンスターの経験値を世界級アイテム《強欲と無欲》に貯め続けているために、一回や二回の使用は問題なく行える。

モモンはこの依頼が終了した後、秘密裏にンファイレアを誘拐する

つもりだった。

(なんて美味しい状況なんだ。一石二鳥以上じゃないか)

ペテル達から情報は取れる、資金稼ぎも出来る、超稀少な能力をゲットできるかもしれない。

それ以外にも、働き次第では名声なども得られるだろう。

たった一回の仕事で得られるだろう物の大きさと多さにモモンはヘルムの下でほくそ笑む。

(だがまずは依頼を完璧にこなすのが肝心だ。失敗してンフィーレアを失うような事があれば今後の冒険者としての活動にも支障がでる)ンフィーレアのタレントについては彼が死ねば悪用される危険性がなくなるので、レアな能力を逃したという悔しさだけですむ。

しかしエ・ランテルの有名な人の直接の依頼を受けていながら、むぎむぎと死なせたとあつてはモモンの評価は地に落ちる。

それは避けるべき事態だった。

(とは言っても、トブの森に薬草を採取しに行くンフィーレアの警護、及び薬草の採集の手伝いという今回の依頼……この構成で失敗するとは思えない)

慣れた様子で警護の為の陣形を組み、余裕を持ちながらも要所要所で注意を向けている漆黒の剣を見ると、この依頼ならば彼らだけでも十分達成可能だと思える。

モモンはンフィーレアの依頼を彼ら漆黒の剣と共同で受けることにして正解だったと確信していた。

もしもモモン達三人組だけで依頼を受けたとすると、思わぬところで無知を晒したり、警護に対する理解が足りずンフィーレアに怪我を負わせてしまう可能性もあったからだ。

ミユールの回復魔法があるといつても、治せば良いという問題ではないのだ。

(彼らが居るからンフィーレアの警護にはそこまで意識を向けることは無いだろう。油断はしないが、ここは一つ偉大な戦士として名を売ることを考えてみるかな)

モモンが売名行為に積極的なのはクーゲルシュライバーの入れ知

恵が原因だった。

売名に必要ななるだろう各種演出について手ほどきを受けていなければ、モモンはこの場で行動を起こそうとはしなかっただろう。

モモンはメッセージを使用しアウラへと通話を繋ぐ。

『仕事中悪いがアウラに頼みたいことがある』

『何なりと仰ってくださいモモン様！』

元氣一杯の返事を返すアウラ。

現在彼女はトブの大森林で森林内の調査と拠点の構築任務に励んでいる。

トブの大森林近くの平原を移動する自分達をサポートさせるには都合のよい存在だった。

『現在トブの大森林の南辺に広がる平原を移動中だ。私の姿が見えるか？』

『ええつと……はい！見えました！馬車一台と8人の集団ですね』

アウラが居るのはトブの大森林の深部であり、樹冠に登って周囲を見渡したとしてもモモン達のいる外延部とはかなりの距離がある。

しかしレンジャーとしての技量に長けたアウラにとっては、その程度の距離を見通す事は見戯に等しい。

『うむ。その集団に向けて森に潜むモンスター共をけしかける事は可能か？』

『もちろんできます。どのぐらいのレベルと量が必要ですか？』

モモンは少しばかり考え込む。

漆黒の剣達が戦闘を想定しているのは小鬼ゴブリンとそれに飼われる狼ウルフ、そして草原で遭遇する中で最も危険度が高い人食い鬼ガイだ。

更に森林内部では跳躍する蛭ジャンピング・リリーチと巨大昆虫系統のモンスターならば何とかなるといふ。

木の上から糸を飛ばしてくる絞首刑蜘蛛ハンキング・スパイダーや地中から襲い掛かってくる森林長虫フォレスト・ワームに対しては苦戦するといった事から、地上を移動し攻撃手段が近接物理攻撃に限定されるモンスターが相手としては好ましく思えた。

『あまり素早くない小鬼ゴブリンや人食い鬼ガイの類で、大よそ10レベル以下が

望ましい。数は最大で30体だ。そしてそれとは別に20レベルぐ
らしいのモンスターを2、3体程混ぜておく和尚良い』

『小鬼ゴブリンや人食い鬼オーガは問題ないです。丁度いい数の小鬼ゴブリンの集団を見かけ
ましたのでそれをぶつけます。ただ20レベルのモンスターとい
ますと少し難しいかもです』

『何故だ？報告書にはそのレベル帯のモンスターもいると書かれてい
たが』

『生息域がモモンガ様のいらっしやる森林南部から離れているんで
す。そこから追い立てるとなると少し時間が掛かってしまいます』

『今すぐにけしかけるといふ訳ではない。タイミングは私が決めるか
ら何時でも突撃させられるように移動させておいてくれ』

『わかりました！』

これよし。

アウラとの通信を切り、モモンは何食わぬ顔で歩き続ける。

そんなモモンにペテルが少し硬い声で話しかける。

「モモンさん。ここから少し行くと危険地帯になります。対処不可
なモンスターは出てこないとは思いますが、念のため警戒をお願いします
ます」

「わかりました」

丁度いいタイミングで危険地帯になってくれたものだ。

後はアウラが20レベル相当のモンスターを近場まで誘導してく
れば準備は万端だとモモンはほくそ笑んだ。

ンファイレアと漆黒の剣達のド肝を抜いてやろう。

演出についてクーゲルシュライバーから様々なアドバイスを貰っ
ているモモンは、効果的な戦闘シーンについて頭をめぐらせる。

(ここはやはり俺がメインを張るべきだろう。ナーベもミュールも既
に第三位階魔法の試し打ちで実力を認められているが、俺はまだ実力
を見せていないからな)

漆黒の剣から軽んじられているわけではないが、魔法詠唱者二人を
守るタンク役として見られている節がある。

タンクも重要な役割ではあるのだが、やはり人々が英雄視するのは

メイン火力として襲い掛かる敵をなぎ倒していく者だろう。

モモンという男は美女の魔法詠唱者二人の火力に頼った戦い方を
する、なんて評判は些か情けない。

ならば自分が英雄として見られるにはどういった戦闘の流れがい
いのか、モモンはじつと黙りこんで考える。

そんなモモンの沈黙を別の意味に捉えたのだろう。

ルクルットが戯けるような軽い口調で話しかけてきた。

「大丈夫だって！そんなに心配することねえって！奇襲でも受けない
限りそんなにやばい事にならねって！そして奇襲なんか、俺が目であ
り耳であるうちは問題ナツシング！なあナーベちゃんミュールちゃ
ん、俺すごくくない？」

キリリと顔を引き締め、顔が最も美しく見えるだろう角度で自分を
アピールするルクルット。

顔が良いため三枚目にも見える彼の仕草はモモンから見て中々に
かっこいいものだった。

だがナーベは人間に対してよい感情は持っていない。

演技力に乏しいナーベが再三に渡るルクルットのアピールに激発
しないかモモンは気を揉んだ。

しかし――

「ミュールさんの短杖ワンド凄いです！見ただけでも強力な魔法の力を感じ
ますよ」

「ありがとうございますニヤさん。さる御方から頂いたもので私の
宝物なんです」

「杖は使い慣れたものが良いっていうのはわかっているんですが、
やっぱりこういった素晴らしいものを見ると私も新しい杖が欲しく
なってしまいますよ。ナーベさんもそういう事ってありませんか？」

「……別に。新しく杖が欲しいと思ったことなんてありません」

「あれ？新しくって言うのと、もしかしてナーベさんご自分の杖をお持ち
ちなんですか？」

「……今は手元に無いけれど、一本持っています」

「へえー。一体どんな杖なんですか？やっぱりミュールさんの杖みた

いに凄かったり?」

「当然です。ミユールさんの杖と比べても負けることのない最高の杖よ」

アピール先であるナーベとミユールの二人はニニヤと一緒に魔法詠唱者特有の話題に興じており、ルクルットには全く意識が向いていなかった。

「うおおおおい!?俺の話聞いてないのお!?っていうかニニヤお前両手に花とかずるいぞー!」

「ニニヤは我々随一の美男子であるからな」

「はははは、諦めろルクルット。お二人みたいな美人にはお前はつりあわないよ」

「ちつくしよおお……。でもいいや、ナーベちゃんの得意そうな顔みれたし……」

がつくりと肩を落としながらもルクルットはナーベを見て笑っていた。

杖を実際に見せたわけでもないのに、さも自慢げに語り胸を張るナーベの姿はその美しい理知的な見た目に反して幼さを感じさせるものだ。

社交的なミユールのおかげでナーベの持つ剥き出しの不快感や刺々しさが薄れている。

クーゲルシュライバーの胸中にどのような葛藤があったとしても、ミユールを連れてきたのは大成功だったようだ。

モモンは穏やかな心持ちで陽気に騒ぐ彼女達を見つめていた。

(NPCにとって与えられた装備は宝物扱いなんだなあ。一つまた勉強になった)

彼女達に混じって杖談義に興じたい気持ちを押し殺しながらモモンは歩く。

戦士である自分があの会話に割って入ることはできない。

だがどうしてもモモンは考えてしまうのだ。

自分だったらどんな杖が最高の杖となりうるだろうか?

答えはすぐに出る。

ギルド全員で作り上げた思い出のギルド武器《スタッフ・オブ・ア
インズ・ウール・ゴウン》に決まっている。

あれをニニヤに見せたら驚くだろうか？驚くに違いあるまい。

ナーベやミユールには悪いが、あの杖こそ至高の杖。

あれ以上に素晴らしい杖は存在しないのだ。

「ふふん」

「ん？どうしたのモモンさん？急に笑ったりして」

「い、いや。なんでもありません」

小さく漏れてしまった笑いを聞きつけたルクルットにモモンは心
の中で冷や汗をかく。

流石は野伏^{レンジャー}。

少なくとも彼の耳は信頼できるとモモンは確信した。

「ペテルさん。馬に水を飲ませてやりたいんですが、あそこで休憩し
ませんか？」

「ここから危険地帯ですしね。わかりました。モモンさん、よろしい
でしょうか？」

あり得ないとは思うが、いざという時はインフイーレア一人で逃げて
もらう事になる。

その時に馬の足は不可欠だ。馬が万全の力で走れるように休憩は
必要だろう。

それにアウラの為にも時間は必要だ。

モモンは静かに頷いた。

「ええ、構いませんよ」



翼持つ屈強な体躯が本来の色を失いクリーム色一色へと変じ、その
形すらも失っていく。

粘土をこねるように変形するそれは、やがて軍服を着た一体の異形
へとその姿を落ち着かせた。

「ご苦労だったパンドラス・アクター。お前のおかげでシャルティア

の笑顔を見れそうぞぞ」

「お役に立てたようで光栄でございます！」

カツ！と軍靴の踵を鳴らして敬礼するのは、モモンガが作り上げた100レベルNPCパンドラズ・アクターだ。

ネオナチ親衛隊制服の上からコートを片袖だけ通してはおり、クーゲルシュライバーのように凹凸のない楕円状の頭部には厳しい軍帽が載っている。

目と口の部分に3つ穴が空いているだけというドツペルゲンガー特有のシンプルな構造の顔に似合わず、発する声は声優並みの美しさだ。

動作が一々大仰で恥ずかしいとは創造主たるモモンガの言だが、クーゲルシュライバーはこのNPCをことのほか気に入っていた。

「これで私の用事は済んだ訳だが、折角ここまで来たわけだしな。しばらく邪魔してもいいかな？」

「勿論でございます。ささ、こちらへどうぞ」

クーゲルシュライバーはアイテムボックスから腕を引き抜くと、パンドラズ・アクターに導かれるままソファに座る。

宝物殿管理責任者室と銘打たれたこの場所は、戦闘にも使用できるように広大な空間を有している。

しかし室内にある物と言えばソファ二脚とテーブル一脚のみだ。

奥に続く道からはいかにも古墳らしい陰鬱な雰囲気の流れ込んでおり、空間の空虚さと相まってなんとも寒々しい気分になる。

こんな所にたった一人で、パンドラズ・アクターは平気なのだろうか？

モモンガは誰も居ない玉座の間を自室としていたアルベドを哀れんで、第九階層の空き部屋を彼女の自室として与えたという。

ならばパンドラズ・アクターにもなにかしらの救済処置を行うべきではないかとクーゲルシュライバーは思った。

「なあパンドラズ・アクター。お前はこの場所にたった一人だけで居る事になにか思うところは無いのか？」

「はっ！大変名誉な事だと。至高の御方々の宝物を守る大役を、私唯

一人が仰せつかったその意味を重く受け止めております」

宝物殿の番人という主人からの信頼が厚くなければ就く事の出来ない職務を、唯一人任せられるというのは自分こそが最も信頼されるシモベであるという事の証明である。

その事を名譽に思っている、パンドラズ・アクターはそう言っているのだからクーゲルシュライバーが聞きたいのはそういうことではなかった。

「いや、職務に対することでは無くてな。この空間についてだ。お前が望むならばもう少し家具を増やしたり……」

話し相手として人員を増やしてもいいんだぞ。

口元まで出た言葉をクーゲルシュライバーは飲み込む。

その言葉はパンドラズ・アクターの誇りを傷つけかねないからだ。「家具？……おお！これは失礼しました！至高の御方をお持て成しするのには、ここは些か以上に殺風景でした！」

「いや私は構わないんだが、そのなんだ。お前の居住スペースとして、この設備は不十分ではないかと心配しているんだ。なにしろ人が訪れる事の無い宝物殿で、お前はたった一人きりで職務に励んでいるではないか」

「おお……。なんと慈悲深い！されどクーゲルシュライバー様、このパンドラズ・アクター！至高の御方から与えられた部屋に不足や不満を感じたことなど一度たりとて御座いません」

軍帽のつばに手を添えるクーゲルシュライバー的にもカツコイイポーズを取って断言するパンドラズ・アクター。

本当だろうかと真意看破を使用するが、まったく嘘は感じられなかった。

本人が良いのならそれで構わないのだろうが、本当になんの不満もないのだろうか？

クーゲルシュライバーが疑惑の眼差しで見つめているのが分かったのだろう。

パンドラズ・アクターは大仰な仕草で語りだした。

「……部屋には不満などありませんが、強いて一つ挙げるとするなら

ば、宝物殿に籠っていると我が創造主モモンガ様のご活躍を眼にするどころか耳にすることすら稀です。それが残念ではありません」

我が創造主、か。

その言葉にクーゲルシュライバーは心中に棘のようなものを感じた。

「やはりそういうものなのか？被造物としては創造主の事が気にかかるか？」

「創造主様の事が気にならぬ者などナザリツクには居ないでしょう」

「そうか……だとしたら」

自らの口から零れ出た言葉にクーゲルシュライバーは蝕肢を不機嫌に引きつらせた。

だとしたら、なんだと言うのだ？

ミュルアニスもパンドラス・アクターのように創造主を慕っている？

だからどうした。

僅かに芽生えた憐憫の情を、クーゲルシュライバーは容赦なく叩き潰した。

千切れ飛び闇へと消えていったミュルアニスの素顔は、笑顔だったか、それとも悲しみに歪んでいただろうか？

それを思い出そうとする気持ちすらも、クーゲルシュライバーには忌まわしかった。

「どうにもならん」

口の中で呟いた言葉は幸いパンドラス・アクターには言葉として届かなかつたらしい。

何事か呟いたらしいクーゲルシュライバーをその空虚な両目で見つめ首を傾げる様は、ただそれだけなのにも拘らずオーバーリアクションだった。

「大したことではないから気にするな。それよりも《水晶の画面》クリスタル・モニターを発動できるマジックアイテムを持ってきてくれ。どうやらモモンガが外の世界で一戦、遊びに興じるらしいぞ。ミュルアニスの視点で悪いと一緒に観戦しようじゃないか」

「直ちにお持ちいたします！」

あ、さっきのはちよつと演技っぽさが薄かったな。

そんな事を思いながらも、足早にマジックアイテムを探しに行く。パンドラズ・アクターを見送る。

(パンドラズ・アクターもアクター俳優なわけだし、演技や演出についてモモンガさんに色々とおアドバイスしながら観戦するのも楽しいかもしれないな)

クーゲルシュライバーは心の中に残る苦味を目前の享樂へと意識を向けることで誤魔化した。

既にクーゲルシュライバーの脳内は漆黒の戦士モモンの雄々しい活躍を漆黒の剣達にどう魅せつけるかで一杯になっていた。

『モモンガさん。戦闘になったら俺とパンドラズ・アクターで色々サポートするんで安心してくださいね』

『ちよつとまってください！なんでパンドラズ・アクターまで!?まさかあいつも見てるんですか!?!』

『すこし訳があつて一緒に観戦する事になりました！彼もすごく楽しみにしているみたいなんで頑張ってください』

『やめてください。恥ずかしくて死んでしまいます』

『もう死んでるから大丈夫ですよね』

その後、クーゲルシュライバーとモモンガの声無き通話はパンドラズ・アクターがかつてないオーバーリアクションでマジックアイテムを持ってくるまで続けられたのだった。



「なんて事だ……」

思わず漏れてしまった言葉に、すぐ隣で濡れたハンカチを使い額を拭っていたナーベとミユールが不安そうな顔でモモンを見つめた。

ルクルットまでも此方を振り向いているのは、彼の野レンジャー伏としての技能が優秀である証左だった。

「どうしたんですかモモンさん。なんか忘れものですか？」

(くそっ！あの二人、いつか覚えてろよ)

心中で訳の分からないプロデュースを仕掛けてくる蜘蛛とのつべらぼうに悪態をつくくと、モモンはわざとらしくヘルムの後頭部を掻いた。

「大したことではありません。宿を二泊でとっていたので、今日の分の宿代が無駄になってしまったと今更ながら気付いたんですよ」

「ああ、前払いですしね。こればかりは仕方ないですよ」

会話を聞きつけたペテルが苦笑いをしている。

とつさに用意した誤魔化しの言葉だったが、もしかして必要経費を惜しんでいるケチな男だと思われるってしまったのではないか？

そんな不安が頭をもたげる。

これも全てあの蜘蛛のせいだ。

モモンは心の中でそつとクレーゲルシュライバーを罵ると、すぐさま気分を切り替えた。

「大した金額ではありませんが埋め合わせはしておきたいですね。モンスターの大群でも来てくれればよいのですが」

敵を望むモモンの発言に漆黒の剣の面々に微かな笑みが浮かぶ。

苦笑いに近いその笑みには、きつと度重なる大口への呆れのようなものが含まれているのだろう。

もしくは、彼ら自身の経験からこの場所では大群と呼べるほどのモンスターの群れは出没しないと知っているのか。

しかしどちらにせよ、モモンにとっては問題ではなかった。

すでにモモンの脳内にはアウラからの準備完了の知らせが届いているのだ。

「あんまり大群で来られると怖いですね。でもこの辺りでモンスターの大群が現れることはまずないと思いますよ」

「そうなんですか？」

「実はこの辺りからカルネ村まで森の賢王と呼ばれる強大な魔獣のテリトリーなんですよ。ですから滅多な事ではモンスターは姿を見せないんです」

「森の賢王ですか」

滅多な事では姿を見せない。

それならば問題ないだろうと判断したモモンは、ンファイレアの語った森の賢王についての知識を思い出す。

カルネ村で得た情報によれば、森の賢王とは数百年の時を生きた蛇の尾を持つ白銀の四足獣であるらしい。

凄まじい身体能力に加え、魔法すらも使用可能であるとのこと、近隣の村や冒険者達の間では伝説の大魔獣という扱いをされている。

「……それは、会ってみたいものですね」

「はははっ！たしかに会ってその姿を見てみたい気持ちはありますが、その時は命の危機ですね」

「居るだけでモンスターを寄せ付けないほどの力の持ち主である。伝承の通り魔法を使うとなればその強さは、かのアダマンタイト級でなければ太刀打ちできない領域なのは間違いないのである！」

「銀^{シルバー}級の俺らじゃあ真っ向勝負はきちいわな」

「興味はありますけど、命には代えられませんね」

実際に会うことは無いと思っているのだろう。

気楽な様子で次々に口を開く漆黒の剣のメンバーを眺めながら、モモンはヘルムの下でメッセージの魔法を発動させ何事か呟いた。

そしてマントを翻して立ち上がる。

「ふむ。どうやら馬も水を飲み終えた事ですし、そろそろ出発しますか？」

「そうですね。ンファイレアさんは大丈夫ですか？」

「皆さんが良いなら問題はありませんよ」

ンファイレアの言葉を合図に冒険者達は再び隊列を組み移動を開始する。

天高く昇った太陽がその豊富な光量でもって一行の肌を焦がす。

モモンが経験した事の無い太陽の猛威だったが、熱さを感じる肌など存在しないアンデッドの身にはなんの痛痒も与えない。

もしも生身だったなら、太陽光を吸収した黒色の金属鎧は真夏のマシンの蓋の如く熱せられているため、とつくの昔に脱水症状か熱中症で倒れていただろう。

その事を幸運だったと思う一方で、一度でいいから日光浴とやらを経験してみたかったとも思いながらモモンは黙々と歩き続ける。

「にしてもさあモモンさん。その全身鎧暑くないんですか？兜ぐらい外さないとぶっ倒れますよ？」

「ご心配なく。確かに多少暑いですが、この程度問題ではありません」
実際にはまったく暑くないが、人間として演技するモモンは涼やかな声で、それに、と言葉を続ける。

「ここからは危険地帯なのでしょう？森の賢王が壁になっているとはいえ襲撃の可能性はゼロではありません。隙は見せないに越したことはないでしょう」

「常在戦場、という事ですね。立派な心構えです。ルクルット、お前もすこしはモモンさんを見習ってだな」

「いやいや確かに立派だけどきー！そんな警戒しなくてもいいって！俺がちやんと見とくからさ。ほら、ナーベちゃんなんて俺を信じてるから超余裕の態度だぜ？」

「あなたじゃありません。モモンさんがいるからです」

ナーベの眉間に皺が寄り、こめかみに青筋が浮かぶ。

今にも堪忍袋に詰め込まれた怒りが爆発し、緒を四散させかねない雰囲気だった。

「あら、私は無視なのナーベさん？同じ仲間なのに、モモンさんばかりでちよつと寂しいです……」

「え？あつ、いえ、決してミュールさんを蔑ろにしているわけでは」

ナイスタイミング！

ミュールの口出しでナーベの意識がルクルットから逸れたのを好機と見て、モモンも無言でナーベの肩に手を置いた。

落ち着けというモモンの意思が伝わったのだろう、即座にナーベの表情が和らいだ。

そんな一連の流れを見ていたルクルットはある質問を投げかけた。
「なあー。やっぱナーベちゃんとモモンさんって恋人関係だったりするの？」

「こっつ!?!?こここいびと!?!何を言うんですか！モモンさんにはア

ルツツツ!？」

唐突にナーベの言葉が途切れた。

一体どうしたのかとナーベに視線が集まるが、彼女は口を開けたまま目を白黒させていた。

「ナーベさん?」

パサツ、という軽い音を立ててフードが後頭部へと落ち、頭になった顔に慈愛に満ちた微笑を湛えたミュールがナーベに優しいげな声をかける。

ナーベの視線が動き、ミュールを捉える。

次の瞬間、ナーベの瞳がこの世の終わりが訪れたかのような絶望に染まった。

そんなナーベの様子を見て、ミュールは長い息を一つ吐いてフードを被りなおす。

モモンはその一連の流れを目撃し、ミュールの前で失態を演じた者はこうなるのかと理解した。

ナーベの絶望は自身を見つめるミュールの瞳の向うにクーゲルシュライバーが存在しているのを知っているが故だ。

「っふはー」

息を止めていたのだろう、水中から頭を出して息継ぎするような音を立ててナーベは肩を上下させていた。

そんなナーベにモモンが足早に近づいていく。

「ナーベ」

重く静かな一声だった。

そのモモンの声にナーベの顔は血の氣を無くし、口元を押さえ全身を震わせた。

モモン達3人の間に流れる異様な雰囲気、ンファイレアと漆黒の剣の視線が集中していた。

「……ルクルットさん。詮索は止めていただけませんか」

他者を寄せ付けけない冷たさと堅さを含んだモモンの言葉は、ともすると悪印象を与えかねないものだった。

しかしそんなモモンに対して眉を顰める者は皆無だ。

モモンの反応は当然のものであると、ルクルットへ批難の目を向ける者が殆どだった。

「……あー。すみませんでした。ちょっとからかうつもりでした」
特に反省しているようには見えないルクルットだったが、モモンは別に怒ってはいなかった。

ナーベが口を滑らせようとしたとき、ミユールが何かをして口を塞いでくれたおかげで、アルベドの名前を知られるという事態には陥ってないからだ。

(とはいえナーベは迂闊に過ぎる。今後こういう事が無いように注意しなくては)

そう思う一方でモモン自ら注意する必要はないのではないかとも感じる。

自らの失態を悟り顔を青ざめさせるナーベに、追い討ちをかけるのは躊躇われたのだ。

モモンは今までの社会人生活において嫌な思いをした経験を思い出していた。

(ナーベの気持ちも考えてやらねばな。これまでも色々と問題行動を繰り返しているが、それにはなにか理由があるに違いない。それを考えずに頭ごなしに叱り付けては良い上司とは言えないだろう)

精神的な地雷というのは思わぬ所に存在し、それは得てして破滅的な被害を出すものなのだと思感したつい最近の経験がモモンにそう思わせる。

他人の心情を思いやる事が身に染み付き始めているモモンだったが、それは彼自身の雰囲気をややかなものへと変化させ、慈愛に満ちた人物であるという周囲からの好評価へと繋がっていた。

ナーベの肩を軽く叩くモモンの表情は兜に覆われており、もしも兜が無かったとしてもその正体は表情の無い骸骨である。

どうやっても感情など窺いしれないはずなのに、肩を叩くモモンを見つめるナーベの瞳からは絶望の曇りが取り払われていた。

「わかっているとは思いますが、これから気をつけるんだぞ」

甘くなりすぎない声色で言うモモンに、ナーベは両手で口を押さえ

ながら無言で首を縦に振る。

その様子にはこれで十分だと納得する。

「モモンさん、仲間がすみません。詮索は御法度だと言うのに……」
「今後気をつけてもらえれば構いませんとも」

胃の辺りに手を当てながら謝罪してくるペテルにモモンは内心同情していた。

彼は今日何回仲間のせいで謝罪しているのだろうか。

同じ冒険者という身分であるがパーティが違うならそこには明確な隔たりが存在する。

例えるならばペテルは他社との商談で部下やかした時と同レベルの精神的負荷を味わっているのではないかとモモンには予想できた。

そのため、自然と声にも哀れみや慈しみが滲み出てしまう。

それがどのような効果を発揮したかは、明らかに安堵した様子で表情を緩めるペテルを見れば一目瞭然だろう。

「ありがとうございます。……ルクルット！モモンさんが寛大だからって調子に乗って！」

「……いや、待て」

語調を荒くして注意するペテルに対し、ルクルットは先ほどまで浮かべていた軽薄な笑みを一変させる。

聴覚を研ぎ澄ましているのだろう、より音を敏感に拾うために耳に手をあてた格好のままルクルットは額に汗を浮かべた。

「動いている。それも、かなりの数だ。おまけにすげえ勢いで向かってきやがる」

「なんだって？どこだ？」

「あれだよ、あれ」

ルクルットが指し示す先にある森の一部は木々が生い茂っているだけあって見通しが利かない。

だがすぐに舞い散る木の葉と砂塵が湧き起り、そこに何者かが居る事を誰の目にも明らかにした。

鳥などの小動物が悲鳴に似た鳴き声と共に次々に空へと飛び立つ

ており、ただならぬ雰囲気を醸し出している。

やがて、騒然となった森の一角から大小の人型が躍り出る。

それと同時に漆黒の剣から困惑の声が漏れた。

「ゴブリンにオーガ！数が多すぎぞ！」

「それに何か様子が変わるな。酷く興奮しているようである」

ペテルが言うようにゴブリンとオーガの集団は此方の人数に倍する数の30匹にもなる。

ゴブリン13匹にオーガ17匹で構成されたモンスターの群れは全速力で此方を目指して走ってくる。

「ダインの言うとおり、ありやあまともな状態じゃねえぞ？血眼汗だく涎だらだら。気が触れてるみたいだ」

「ゴブリンよりもオーガの数が多いいもおかしい。普通オーガはゴブリンに雇われる立場のはず、あのゴブリン達にあれほどの数のオーガを雇う能力があるとは思えない……あの集団は異常です」

困惑しつつも冷静に敵を観察する漆黒の剣達を他所に、モモン達3人は全く動じない。

ナーベはモモンを見つめ、モモンとミユールの二人はペテルを見つめている。

道中の護衛に関する指揮を執っているのはペテルだ。

その彼の判断を待っているのである。

「特異な行動をするモンスターを相手にするのは避けたいところだが、あの数に勢いでは戦闘は避けられないか」

戦闘を決意するペテルの呟きを聞きつけると、モモンはここぞとばかりに口を挟む。

「でしたら私が前に出て敵の勢いを抑えましょう。そこをミユールとナーベの魔法で攻撃します。漆黒の剣の皆さんには撃ち漏らした敵からファイレアさんを護っていただきたい」

「しかしそれではモモンさんの負担が多すぎます。私も武技《要塞》が使えるので一緒に……」

「いえ、お気になさらずに。ペテルさんは護衛に専念してください。私なら大丈夫です。ただの大口叩きではない事を証明させていただきます」

きたい」

絶対的な自信に裏付けられた堂々たるモモンの態度に、漆黒の剣達の顔に理解の色が浮かぶ。

「分かりました。ですが、出来るだけの支援をさせて頂きますよ」

「よろしくお願いします」

「えっと、支援魔法は要りますか？」

「私達には必要ないので、漆黒の剣の皆さんに支援なさって下さい。……いや、むしろミユールの支援魔法は要りますか？」

「いえ、支援魔法はニニヤので十分ですので、火力の要であるミユールさん達は魔力を温存しててください」

「ではそのようにさせて貰います。いぐぞ、ナーベ、ミユール」

歩き出すモモンに付き従うように、二人の黒い魔法詠唱者が続く。

左右に美女を侍らせる漆黒の戦士の向かう先から些か不自然な風が吹き、緋色のマントをヒロイツクに靡かせた。

「わあ……」

馬車と共に後方に下り、冒険者達の姿を見ていたンファイレーアから熱の籠った声が漏れる。

それはヒーローに憧れる純粹無垢な少年の如き感動の表れであり、モモン達3人の持つ非日常的な魅力の強烈さを物語るものであった。

「ああ、そうだった」

漆黒の鎧を夏の日差しに輝かせながら、モモンが立ち止まり背を向けたまま言う。

どうしたのだろうか、戦闘の段取りを決めるのも一時中断して漆黒の剣達の視線がモモンに集まる。

「モンスターが出た場合、その半分受け持つという約束でしたね……報酬はそのまま最初の取り決め通り半々で構いません」

いやに謙虚な言葉遣いのモモンに聞く者達は訝しげな顔をした。

そんな彼らの前で、モモンは腕を交差させるようにして背中にまわし、剣の柄を握る。

そして左右からナーベとミユールがマントの下に手を差し入れ、一人一本ずつ鞘を抜き取った。

緋のマントが大きく波打った後、風に靡く。

大きく、大きく弧を描くように現れた二本の剣がその姿を顕にした。

抜き放たれたモモンの双剣に、誰もが息を飲む。

モモンが片手に持つ剣は150cmを超える巨大な物であり、暗黒が凝縮したような黒い刀身の中で刃と、刀身を覆おうように彫られた蜘蛛の巣状の溝だけが白銀に輝いていた。

鏢には紅い八つの宝石を埋め込まれた漆黒の蜘蛛が拵えられており、戦闘用の武器というよりも美術品と言ったほうが正しいような、そんな見事な武器だった。

まさに英雄が持つべき武器ではあるが、美術品の如き美しさのどこか怪しい気配を感じさせる一品である。

そんな武器を両手に一本ずつ握るモモンは、肩慣らしとばかりに腕を振るう。

巻き起こる風の中、無数の光が炎天下の草原に綺羅星の如く煌いた。

「……そんな、ばかな」

まるで小枝を振るうが如き軽やかさで縦横無尽に振り回される二本のグレートソードの姿に、剣を扱う戦士であるペテルが呻く。

モモンが手にしている剣は一本だけでも、その重量は魔法によつて軽減されていない限り人間一人分はあるだろう。

それを片手で保持し、あまつさえ短剣で行うような鋭く素早いあの剣舞を行うのにどれ程の筋力が必要なのか。

ただそれだけでも信じがたい奇跡的光景ではあるが、モモンは動きを制限される全身鎧を装備してそれを行うのである。

ペテルはこの一瞬でモモンが戦士としてどれほどの高みに位置するのかを理解した。

そしてモモンの発言が決して大口の類ではなかったのだと思いついたのだった。

「ナーベとミューールの仲間である私の力。ご覧にいらしましょう」

33話

「ダインはゴブリンの足止めを！ニニヤは防御魔法を私に、その後は攻撃魔法に専念して欲しい。不要かもしれないがナーベさんとミユールさんの安全に注意していてくれ。ルクルットは遊撃だ！敵の数が多いから無力化できる敵を優先！抜けてきたオーガは私が対処するが、他にも抜けてきたやつがいたらブロックに回ってくれ！」
ペテルによる漆黒の剣に対する指示の内容を背中で聞きながら、モモンはゆっくりと歩き出す。

数はそれだけで脅威である。

真つ先に数を減らそうとするペテルの指示に不備は無く、また指示を受けた漆黒の剣達の連携にも不満は無い。

これならばンフィーレアの身の安全は確保されたも同然だろう。
（実力を示しつつ程よく彼らにも仕事をさせてやらなければな。近接戦闘は付け焼刃の練習しかしてないのに、そんな調整できるかな？）
左手に持った大剣を左肩に担ぎ、右手に持った大剣は切っ先を地面に引きずらせる。

モモンのそんな構えは、ユグドラシルにおいてはじめて二刀流で戦う初心者が多用する構えである。

それも初心者も初心者、初めて近接武器を握った人向けの「とりあえず両手に持った武器を使って戦闘ができる」という最低限の実用性しかないものだ。

二刀流と言えばかつてのギルドメンバーである「式式炎雷」の華麗な剣技が思い起こされ、それを目標としたくなっただがキャラクタの性能が彼とは違いすぎる事から泣く泣く断念している。

「ギヤアツ！」

「おっ！」

モモンの背後から放たれた矢が、走るゴブリンの頭部を見事に射抜いた。

ルクルットによる射撃だろう。

一心不乱に突撃してくるモンスター達が精神に異常をきたしていた。

るのは誰の目にも明らかだ。

モモン達にけしかける為にアウラが精神異常を付与し、理性をほとんど残さないが狂戦士と化しているのだ。

狂っている相手に対して心理的な間隙を突こうとする戦い方は意味が無い。

距離を詰められる前に少しでも多くの命中弾を出して数を減らすうとする彼の判断は正しいと言えた。

「もつと小細工を凝らした戦い方をするかと思っただが……。敵の状態をよく見ているんだな。中々やるじゃないか」

振り返りもせずにルクルツトを褒めると、モモンは尚もゆつくりと歩を進める。

対するゴブリンとオーガの群れは狂氣的な全速疾走でもって、突出し孤立した迂闊な敵へと迫る。

先頭に立つオーガ3体の小集団が地響きを立て、青草を空中に蹴り上げながら突撃してくる。

その巨体を持つ重量が全力の速度をそのままに体当たりすれば、人間など全身鎧を着ていたとしても蹴り散らされる草原の青草の如く宙を舞うことになる。

それはペテルの持つ防御系武技である《要塞》の持つダメージ吸収能力をもつても避けられない運命だろう。

何者かにより精神を歪められたオーガ達の捨て身の突進はそれほどまでの威力を秘めていた。

狂気に染まり力を底上げされたオーガ達が、雄たけびと共に巨大な棍棒を振り上げモモンの眼前へと殺到する。

「ムーン！」

「うわ!？」

「な、なんであるか!？」

後方からモモンの援護の為に魔法を唱えようとしていたダインやニニヤまでもが自らの務めを忘れ驚愕の声を上げる。

短くない年数冒険者として戦ってきた漆黒の剣達にして、見たことも無い信じがたい光景がモモンの裂帛の気合と共に現出したのだ。

「ギャッ！ギャッ！」

3体のオーガの後ろを走るゴブリン達が悲鳴めいた金切り声を上げた。

それも仕方のない事だろう。

黒い旋風が巻き起こったかと思えば先頭を走っていたオーガ達が地面ごと爆発し、草原に血と臓物の雨が降り注いだのだから。

(ふう、なんちゃって二刀流でもなんとかなるもんだな)

上空から落下してくる土や血肉を鎧に受けながら、振り下ろした左の剣を大地から引き抜き再び左肩に担ぐとモモンは安堵の息をついた。

上下に両断されたオーガ2体、そして左右に両断されたオーガ1体。

カラフルな内蔵を撒き散らし倒れ伏す犠牲者を生み出した二本の大剣は、本来白銀に輝く蜘蛛の巣状の溝を血の赤に染めていた。

左になぎ払われた右の剣が先頭のオーガの胸部を棍棒とそれを持つ両腕ごと切り裂き、腰の捻りを十分に利かせた返しの刃が宙を舞う一体目のオーガの上半身と2体目のオーガの腰をぞつとする程の鋭さで断ち切り臓物をあふれ出させ、剣が右に振るわれる勢いと上手く同期させた渾身の力を込めた左の剣による振り下ろしが3体目のオーガを頭部から股下まで駆け抜け、その余力で大地を切り裂き爆発四散せしめたのだ。

その一連の動作があまりにも速かった為、傍からは3体のオーガがぶつ切りになりながら爆発したようにしか見えなかったのである。

両手に剣を持っているのに実際に使うときは片腕の一本ずつというモモンの言うところの「なんちゃって二刀流」だったが、実戦において十分な威力と見栄えを發揮していた。

モモンの脳裏で、闘技場におけるクーゲルシュライバーとの会話が思い起こされる。

「モモンガさん。見栄えを重視しようとするとかえってかっこ悪くありません。いや、ちゃんと研究すれば見れるものになるのは確かかなんだけど、やっぱり実用性にどうしても劣るんですよね」

「でもたっちゃん……」

「たっちゃんだつてエフェクト発動させるのは特別なときだけだつたでしょ。かつこつけるのはここぞという時だけでいいんです。じゃないと常時大げさな……そうだなあ。パンドラズアクターみたいになつちやいますよっ。」

「うっ！それは……控えるべき、ですね」

「自分で例に出しといてなんだけど、パンドラズ・アクター不憫だなあ……。ま、ともかくキメポーズは一定の状況用のを幾つか決めるだけでいいじゃないですか。真のかつこよきは実用性と共にあるもの、機能美とかいうでしょう？まず目指すべきはそこです。次に演出を追加していく形にしましょう」

「といつてもどうすればいいのか」

「モモンガさんには式式炎雷さんみたいなテクニカルな軽業は無理だから、移動要塞みたいな感じで行けばいいんじゃないですかね？モモンガさんの強みはレベル差からくる圧倒的なステータスです。それを前面に出すんですよ。敵の攻撃を受けても一歩も引かない堅牢な防御力！誰もがダメージを与えられない強大な敵を真正面から叩き潰す超火力！非力な魔法詠唱者や一般人を身を挺して守る漆黒の戦士、赤いマントを翻すその背中……か、かつこいい！」

——少しはかつこよかつたかな？

自身の行いを評価しつつ、モモンはクーゲルシュライバーから渡された武器の使い心地に満足していた。

モモンの双剣はクーゲルシュライバーから収穫された《アトラク・ナクア深淵の大蜘蛛の抜け殻》からかつてのギルドメンバーが鍛え上げた聖遺物級武器であり、外装統一のために装備している《ブラックウイドワズバイダー・クロス黒後家蜘蛛の衣服》とのシナジーにより攻撃速度と命中率上昇の効果を持っている。

モモン自身が用意していた武器と比べると一撃の攻撃力は劣っているが、その分手数が多い。

なによりも、習熟すれば二刀忍者である式式炎雷の剣技の真似事もできる可能性があるのが気に入っていた。

「必中いらずのスーパー系とは言っていたが、なるほど。力いっぱい剣を振っているのに狙った場所に正確に命中するのは中々気持ちがいいな。ハアアアツ！」

風を切り裂く三連撃。

今度はゴブリン3体が宙に舞った。

3体のオーガを屠ったものと全く同じシンプルな斬撃ではあるが、圧倒的なレベル差とステータス、装備品による補正を持つモモンが放つこの攻撃は唯それだけで回避不能な必殺技と化していた。

「す、すげえ、おいペテル、なんつう武技だありや。オーガが3体、まとめて両断されてんぞ!？」

「《流水加速》……?いや、あの攻撃は同時だった。それにオーガの切り口から見て、あの一瞬で4回の斬撃を?ま、まさか」

「噂に聞く王国戦士長の《四光連斬》……!?!それも連続して2回も!」

「よもやモモン氏が王国戦士長と同じ武技の使い手であったとは……あの自信もむべなるかなである!」

モモンからしてみればただの通常攻撃であるし、実際の斬撃は一振りずつ3回繰り出されているのだが、ンフィーレアや漆黒の剣にはそんな事はわからない。

それが武技であるか否かは見るものが見れば判断がつくが、発生した現象の規模とそれを見る者の未熟さゆえの勘違いだった。

もしも、クーゲルシュライバーが様々な迷惑に対する謝罪の品として、モモンに武器を渡していなかったならばこうはならなかったに違いない。

漆黒の剣の中で最も武技に詳しい職業クラスであるペテルの見立てでは、モモンがあの一瞬で行ったのは《四光連斬》、《即応反射》、そして再び《四光連斬》という常識的に考えれば肉体的、精神的消耗が著しい超高難度の連携技ということになる。

そんな大技を放ってモモンは大丈夫なのかと心配するも、剣を担ぎなおす動きに淀みは無く全く疲労を感じていない様子だった。

一体どのようなタフネスのなせる技なのか?

それを得る為に一体どのような鍛錬を己に課したというのだろう

か？

想像するだけでペテルは雲の中へと続く巨大な霊峰を見上げたかのような眩暈を感じた。

「銅級なんて冗談じゃない……あの人は紛れも無い、アダマントタイト級だ」

今や彼らの目には、モモンは人間の極限まで自身を鍛え上げ、最強と謳われる王国戦士長ガゼフ・ストロノーフと同等の高みへと到達した偉大なる戦士に映っていた。

「ミュール、ナーベ、やれ」

「はい」

「がんばりますね」

モモンは宙を舞っていたゴブリンの死骸に猛烈な勢いで剣の腹と前蹴りを浴びせた。

弾き飛ばされた死骸は臍物を撒き散らしながらも敵集団へと着弾しその動きを鈍らせる。

狂気かられたモンスター達は仲間の死骸を払いのけ尚も突撃をかけようとするが、モモンに命じられた二人がそれを許さなかった。

ライトニング
「雷撃」

一筋の雷がナーベの白魚の如き指先から空気を震わせながら迸る。

人差し指の指し示す方向にいたゴブリンとオーガは瞬きする間もなく雷に体を貫かれ、異臭と湯気を発しながら草原に崩れ落ちる。

そのあまりにもあっけない死に様を見て、狂気だけではない感情に顔を歪ませるモンスター達だったが、彼らの受難はまだ終わらない。

雷を放ったナーベの隣では漆黒のローブをはためかせながら緑色の怪光を宿した短杖を掲げるミユールの姿があった。

「シニヤガレエツ！」

ゴブリンの一匹がしわがれた声と共に、手に持っていた唯一の武器である刃こぼれた剣をミユールに投擲しようとする。

それは未だ距離の離れた魔法詠唱者の魔法発動を阻止する手段としては悪くない判断である。

ゴブリンの血走った眼が標的であるミユールを睨みつけ、剣を持つ

腕が大きく振りかぶられる。

そして勢いよく振り下ろされようとした時、投手であるゴブリンが片方の手で目を覆い身を振った。

ミユールとゴブリンの距離は既に15m以内。

行動を起こすのが遅すぎたのだ。

「えい」

「ギャアアアアアアアアアアア!!」

ミユールが掲げる短杖の先端から、バチバチと電撃が荒れ狂うような音を立てる緑色の怪光線が迸る。

その光は今まさに剣を投げようとしていたゴブリンの網膜を焼いて投擲を中断させるに止まらず、聞くだけで身の毛もよだつような絶叫を上げさせながら生命を奪い去っていった。

力の根源となる邪神の悪辣さを継承した恐るべき怪光線の前に、ゴブリンは壮絶な苦悶の表情をそのままに地面へと倒れこむ。

「おいおいおいおいおい!!?なんだよさっきの!!?」

「の、呪いの類だとは思いますが……」

あまりにも悲痛すぎる断末魔の咆哮を耳にしたルクルットが矢を放ちながら、若干悲鳴めいた上ずった声で叫んだ。

それに答えるニニヤも油断なく敵の動きに注意しながら顔を青くしていた。

「呪い……え、えげつねえ。つうかなニが裏返る呪いかけるって言うてたけど、アレひよつとしてマジだったのか?」

「あの様子を見ると本当にそういう呪いを使えてもおかしくありませんね。というより、あの苦しみようです。もしかするとあのゴブリン、実際に裏返ってるのかも……」

「やめろおニニヤ!そんな恐ろしい話は聞きたくねえー!」

恐怖を振り払うように矢玉を撃ちつくしたルクルットは腰に下げたショートソードを抜き放つと、ニニヤを守るように前進した。

ミユールが放ったのはウォーロックにとって、最も基本的な技である第一位階に属する魔法《エルドリッチ・ブラスト／怪光線》だ。

ウォーロックの職業を修める者にとっては、魔法でありながらMP

を消費せず無限に使用可能であるそれは、単体では最大でも第一位階魔法である《マジック・アロー／魔法の矢》2、3発分の威力しかないが、怪光線専用の魔法と同時使用することによって様々に強化する事が可能だ。

実際にミユールが放った怪光線には第三位階魔法相当の苦痛の呪いが付与されており、正確には《ペインフル・ブラスト／激痛光線》と呼ばれるものに変化していた。

哀れにもこの魔法の直撃を受けたゴブリンは、エルドリッチ・ブラスト怪光線本来のダメージに加え、ゴブリン種を専門とする熟練拷問官の手厚い取調べを受けたかのような激痛によるダメージをオーバーキル気味に見舞われてしまったのだ。

「オオオオオオッー！」

《四光連斬》と勘違いされるほど速度を持つモモンの通常攻撃が三度敵を切り裂く。

今度の犠牲者により最初は17体居たオーガの数は8体へと減じ、30体からなるモンスター達の集団の総数は13体と激減していた。(いち、にい、さん。いち、にい、さん。なるほど、たった3回の連続攻撃だけ何となく分かってきたぞ。一つの攻撃を次の動きに繋げる予備動作にするんだな。そして流れるように次に移る。常に先の事を考えながら戦うのが近接戦闘の肝か)

剣を振り切った時の腰の捻りを利用した単純な三連撃。

それに慣れてきたモモンはユグドラシルの二刀流初心者達と同じように次のステージへ移行しようとしていた。

「勢いを殺さないようにするわけだ」

先の惨劇を見たからか、モンスターの集団は互いに間隔をあけつつ突撃を継続している。

剣の間合いでしか攻撃出来ないモモンにとつては必然的にカバーすべき範囲が広がり、今までのように足を止めて迎撃すれば良いだけの状況ではなくなっていた。

故に、モモンは自分から動く。

おぼろげながら掴んだ近接戦闘のコツが、思い違いでない事を確か

める為に。

「こんな感じかな？」

その声と共にモモンは色つきの風と化した。



30体ものモンスターの群れが完全に殲滅されるまでに、時間はそう掛からなかった。

血と刃の嵐を巻き起こすモモンと、それを魔法による遠距離攻撃でサポートするナーベとミユールの三人からなる前線部隊は、護衛部隊である漆黒の剣達に活躍の機会を殆ど与える事無く戦闘を終結させてしまった。

戦闘が終わり、現在漆黒の剣達はモンスター討伐の証となる部位の収集に当たっている。

ゴブリン、オークのどちらも死体の耳を切り取るだけの簡単な作業であり、彼らにとつては慣れ親しんだもののだが、その進捗状況は芳しくない。

「お、頭みつけ！……ってなんだよ、割れてて耳が無えじゃんか。くそっ」

「この辺りにあるはずである！掘ってみるのである！」

そう言って耕かされた畑のような有様になった元草原の土を掘り返し始めるダイン。

彼の背後では肩を落とし居心地悪そうに佇むモモンがいた。

その手には未だ乾ききらぬ血に濡れた剣が握られたままだ。

「皆さんすみません。モンスターを倒すことに夢中になって、あとの事をまったく考えていませんでした」

「ああいや、お気になさらずに。モモンさんのおかげでアレだけの数のモンスター相手に大した消耗もなしに勝利できたんですから」

謝るモモンに対し、これっぽっちも迷惑だと思っていないと笑うペテルの両手は、血を吸って泥と化した土で汚れていた。

それを見てしまえば、いかに本人たちが気にしていないとはいえ申

し訳なさが湧きあがってくる。

彼らがこの尋常でない生臭さの中で畑仕事をするが如く泥にまみれながらオーガやゴブリンの死体を捜す羽目になっているのは、紛れも無くモモンが原因なのだから。

あの時、猛スピードで駆け出したモモンは練習がてらと軽い気持ちで、武器の持つ命中率上昇の効果をあてにしながら両手の剣を振りまくった。

敵が剣の間合いに居なくとも振るわれる剣は、唯ひたすらにバランスを崩して転倒しない事と攻撃の連続性を意識したものであり、子供が木の棒を両手に持って走りながら振り回しているのとそう違いは無かった。

しかしそれをモモンのステータスと装備で行った時、子供の遊びは恐るべき光景を生み出した。

まず最初の犠牲者は戦場となった草原だった。常識外の怪力で振るわれる大剣は、切っ先が触れるだけで地面を吹き飛ばし土砂を宙高く巻き上げた。

空中に大量の土砂が舞うなか、モモンの剣が本来の目標であるゴ布林やオーガを捉えはじめると、次々にその肉体をミキサーの如く粉砕し、夏の青い空目掛けて鮮血と臓物を飛び立たせていったのである。

そんな事をモンスターが全滅するまで続けた結果がこれである。

今やモモンの通った後にはかつての草原の面影は無く、残されたのは混ぜ返され、まるで肥料の如く大小無数の破片となったモンスター達の死体が梳きこまれた畑のような土地だ。

上空から眺めてみれば、広大な緑の平原の只中に茶色の筋が一本走っているように見えるだろう。

「少し待っていてください。もうすぐ終わりますので」
移動を繰り返しながら一行はトブの大森林と平原の境界へと近づいていた。

ばら撒かれた死体は物によって数十メートルを飛翔したため搜索範囲は広大なものになっているのだ。

30体全ての耳を集めるのが最善ではあるが、本来の仕事はカルネ村へ向かうフィーレアの護衛である。

時間の関係上全て見つからなくとも、斬り飛ばされた死体が転がっている森と境界までの約20メートル間を調べ終わった時点でこの作業も終わりとなる。

「申し訳ない。そんなに汚れてしまった」

「いえいえ。回収作業ぐらい楽しんでた私達がやらないと、あれだけ武技を連発していたモモンさんに申し訳ないです」

「あ、いや、あれは……」

武技ではない、モモンはそう言いかけた口を噤む。

生き生きとした表情でルクルツトとペテル、そしてミュールと話をしていたニニヤが会話に参加してきたからだ。

「そうそうーいくらモモンさんでもあれだけの武技を連発したんだからそれなりに疲れてるっしょ？こんなの俺らがやっつくから、その剣の手入れでもしてて下さいよ」

「ナーベ氏とミュール氏の魔法も実に見事だったであるが、モモン氏の剣技はその上を行くであるな！まさしく、出発前に言っていたとおりである！」

「全力で突進してくるゴブリンとオーガの集団を真正面から撃破するなんて眼を疑いましたよ。剣だけで魔法と同等以上の戦果を上げるなんて脱帽です」

掘り返されていない地面を通ってモモン達の近くまで来ていたンフィーレアの馬車に、耳がぱんぱんに詰まった袋を積み込みながらニニヤは普段顔に張り付いたものとは別の笑みを浮かべている。

若者特有の生気溢れるあどけない表情に、モモンは背中がむず痒くなかった。

モモンとしてはそう褒められるような事はしておらず、彼らの反応が過剰のように思えたからだ。

このような反応を求めて行った戦闘とはいえ、どうしても達成感よりもおもばゆさが勝ってしまう。

「大した事はしていませんよ。むしろ皆さんの分の獲物を独り占めし

てしまったようで恐縮です」

経験値はこの世界にもあることは確認済みである。

そして経験値がある以上、モンスターを狩るのはドロップアイテムや金を得る手段だけに留まらず自己強化に必須の大切な行為という事になる。

経験値資源とも言えるモンスターを、当初の約束を破り一人で殲滅してしまったモモンの行為はユグドラシルで言えば非難される類のものだ。

(いや、パーティを組んでいるから経験値は分配されるのか？もしそうならレベリングが容易になるが……)

また一つ検証すべき事が増えたことを心のメモに書きとめ、モモンは一旦それ以上の思考をやめた。

戦闘が終わり多くの者達が緊張を和らげているが、今は警戒を解いてよい状況ではないのだ。

「そんな事気にしないで下さい。正直な話、半数だけだとしてもあれほど激しいモンスター達の突撃に対処する事になっていたら、私達だけではかなりの被害が出ていたと思います」

周囲を探索し終わったのだろう。

立ち上がり森の方向へと歩き出すペテルに、泥を掘り返していたルクルットとダインが続く。

これより先はモモンによる地面の破壊跡は無く、探索は容易なものとなる。

これ以上泥に塗れる心配がなくなったからか、心なしか軽快な動きになった彼らの後にモモンも続く。

両手には剣が握られているままだ。

今のところそれを指摘するものは居ないが、もしされたときは漆黒の剣達の回収作業中に敵襲があった場合の備えだと説明するつもりだった。

「それにしても、あの群れは一体どうしたんでしょうね。モモンさんの実力を見ても突撃を止めないなんて」

「それな。あいつら臆病だから、自分より強い相手だとわかるとさっ

さと逃げ出すのが普通なんだが」

「あれではまるで自殺であるな。あの凶相といい、なにか精神に作用する魔法でも受けたのかもしれないのである」

「理性を無くして凶暴化させる魔法やアイテムというのは存在しますけど、そうなるって一体誰がそんなものをゴブリン達に使ったんでしようか？」

横一列になって森へと探索の歩を進める漆黒の剣。

後ろから黙ってついていくモモンから見ると最左翼のニニヤの背後には、馬車に乗ったンファイレアとそれを護衛するように歩くナーベとミュールがいる。

「そういう効果のある毒草やキノコを集団で食べてしまったとかでなければ……ンファイレアさん、あなたに恨みを持つ人などに心当たりはありませんか？」

「心当たりですか？ええと、人に恨まれるような事は全然思い浮かばないんですけど」

「わからないぜ？人の恨みなんてものは自分が気付かない内に買っちゃまってるもんだからな」

ルクルットの言葉にモモンは人知れず頷いていた。

脳裏に漆黒の巨影がよぎって、モモンはミュールに視線を向ける。

そして、離れ離れになった39人の友を思い浮かべた。

モモンは友人達の誰であっても、別れの時には感謝と当たり障りの無い社交辞令めいた言葉を贈っていた。

(きつと皆は知らなかっただろう)

ユグドラシルが終わり、この異世界へと迷い込む事となったあの日。

モモンが胸の中で抱え、荒れ狂っていた感情は紛れも無く恨みだった。

友人達が去っていったのは仕方のない事だとわかかっていても、それでも恨まずにはいられなかった自分自身を思い出してモモンはルクルットの言葉に頷いたのだ。

(感情は理屈じゃないんだな)

モモンはナザリック地下大墳墓のある方向の空を見る。

その空の下に居る、強すぎる感情に隷属し、身を振りのた打ち回る者達を想った。

そして、その心を憐れむのだった。

恨みを抱える心が産む葛藤の辛さを、モモン自身が知っているから。

『モモンガ様』

突如届いたミユールの声に、モモンは愚かにも警戒を怠っていた自分を恥じつつ意識をこの場へと帰還させる。

メッセージによる通信だ。

それはつまり、モモンが警戒していたものが接近してきた事を意味する。

モモンは剣を強く握り締め、森を睥んだ。

「……みんな止まれ！」

ミユールのメッセージから遅れること約5秒。

突如立ち止まったルクルットから警戒の声が上がった。

すかさず漆黒の剣の一人一人が武器を抜き放つ。

こりやまずい。

ルクルットが額に汗を浮かべて呟いた。

「森の奥から何か大きいものが突進してくる。とんでもない速度だ。時間がねえ！もうすぐ来るぞ！」

「ンファイレアさん！すぐにここから離れてください！」

「は、はい！」

ペテルの怒鳴るような声にンファイレアは即座に手綱を操る。

しかし馬を動力源とし小回りの利かない馬車の方向転換には時間がかかる。

そんなンファイレアの馬車を守るべくナーベとミユールが前に出る。

漆黒の剣達も同じ考えのようで、全員が馬車に向かって走り出す。

最も近い場所に居たニニヤが真っ先に到着し、杖を構えて森を睥んだ。



「あ」

ニニヤの口から間の抜けた声が零れる。

見つめる先の木々が不自然に青葉を散らしたと思えば、一本の太い線が音も無く飛来したのである。

死ぬ。

正体不明の物体を見て、ニニヤは自らの死の運命を悟った。

死を目前としてニニヤには過去を懐かしむ事も、ここには居ない誰かに思いを馳せる事も出来なかった。

アレが当たって死ぬ。

唯それだけした思い浮かばなかった。

「ハアッー」

金属質な音が鳴り、ニニヤの目前で火花が散った。

その視覚的な衝撃と、短く切られた前髪の一部を掠め取られる痛みからニニヤは後ろに倒れこみ盛大に尻餅をつく。

「ニニヤー」

自分と呼ぶペテルの声を何処か遠くに感じながらも、ニニヤは余りにも早く脈打つ心臓のせいで呼吸も満足にできないまま森から距離を取ろうと足掻いた。

下生えと樹木の葉の中間に横たわる闇が、自分を食い殺そうとしている猛獣の口内に見えてニニヤは恐ろしかった。

その闇に、たった今自分を殺そうとした正体不明のロープ状の物体が大蛇の如くうねりながら姿を消していく。

またあの攻撃が来る。避けられない！

「ひっ、ひあっ、あっ……あっ？」

恐怖に震えるニニヤの視界に、眼を焼くような赤が滑り込んだ。

ゆったりと波打ちながら、恐ろしい森の姿を覆い隠していくくその正体に気付いた時、ニニヤは普段よりも少し高い声で叫んだ。

「モモンさんー」

視界に映る赤は、かの偉大なる戦士のマントだった。

自分は今、モモンに庇われているのだ。

「ニニヤさん、大丈夫ですか？」

安否を問いかけるモモンの声は彼らしく、冷静で落ち着いたものだった。

助かった。

攻撃を仕掛けてきた存在が如何なるものか未だ分からないというのに、絶対的な安心感が胸を埋めていく。

信頼する仲間と力を合わせて戦う時に感じるものに似ているが、それとは異なる不思議な暖かさだった。

強大な力を持つ一人の男が自分を守ってくれるという安心感。

早鐘を打つが如き心臓の鼓動は、いつしか不快ではなくなっていた。

「立ってー！」

背に豊かな弾力を感じたかと思うと、姉を想起せずにはいられない声と共に体が引き起こされた。

後ろから回された手が、胸の辺りを抱え込んで引つ張っているのだ。

圧迫される胸部の感触に焦りを覚えるが、それは今の状況では心配するに足らない些事である。

ニニヤは必死に足で大地を搔いて、自らの足で立ち上がる事に成功した。

「すみませんミュールさんっ、助かりました！」

「どういたしましてっ」

必死に走って後衛たる魔法詠唱者として必要な距離を取った事を確認した時、背後からまた、あの激しい金属音が聞こえた。

モモンは無事だろうか？

何時でも魔法を使えるように杖を握り締めて振り返った先には、未だかつて見た事も無いような怪物が居た。

「白銀の、魔獣」

視線の先、モモンの逞しい後姿越しに見える絶望するに足る脅威を

見たとき、ニニヤの口から零れ落ちたのはそんな言葉だった。

駆けつけた仲間達もモモンの背後で武器を構え立ち向かう姿勢を見せてはいるが、後姿だけでも彼らの動揺が透けてみえた。

彼らの肩が微かに震えている。

そしてそれは、ああなんということだろうか！

「なんだと……」

！
この中で最も強い戦士であるモモンでさえ、例外ではなかったのだ

！
呆然といった風に疑問を呟きながら、肩を震わせるモモンがふらりとよろめく。

ニニヤはその事にショックを受けながらも、当然のことであると納得もしていた。

攻撃を仕掛けてきた者。

蛇のような鱗を持つ尾をくねらせるそれは、白銀に輝く体毛に覆われた巨大かつ屈強な体軀をしていた。

その全身に高度な魔法的文様を宿した獣は、見るものを震え上がらせるような鋭い眼光を放っており、眉間には荒れ狂う殺意と激怒の程を窺わせる皺があった。

生物としての格が違うとしか言いようの無い存在の、明らかに敵対的なその威容を恐れぬ者など居るはずも無いのだから。

「嘘だ……なんで、こんなところ!?」

必死に手綱を操作するンファイアが悲鳴のように叫んだ。

ニニヤも嘘だと言いたかった。何故だと問いたかった。

この化け物は、本来こんな所に居るはずが無いのだ。

「森の賢王！」

襲い掛かってきた絶望の名を、ンファイアが言い当てた。

蛇の尾を持つ白銀の四足獣。

伝説どおりの姿を持ち賢王と謳われる大魔獣は、その威厳溢れる瞳に狂気を宿し、決して逃さぬとばかりに此方を睨みつけていた。

34話

森の僅かな変化と同時にニニヤへ放たれた攻撃をモモンが防げたのは、ひとえに襲撃を前もって予知しており奇襲による精神的間隙が一切生まれなかったからだ。

全力で走り、剣を振ってニニヤに迫る鱗に覆われた鞭のような物を弾き飛ばす。

その瞬間に手から伝わってきた衝撃と堅さ、発せられた金属音と火花はモモンにとって新鮮な驚きだった。

（全力で振ったわけじゃないが、切断できなかった。それにあの速さに力強さ。いいじゃないか！）

自分とチャンバラが出来る相手が現れた事にモモンは歓喜した。

先ほどのゴブリン達のように、圧倒的力で蹴散らすのも強者である事を演出するにはインパクトがあつて良いものだ。

しかし激しい攻防の末の勝利というのはそれとはまた別の感動がある。

偉大なる戦士として評価を受けるための戦い、その相手として未だ姿を見せない敵は合格だと言える。

「ニニヤさん、大丈夫ですか？」

尻餅をついているニニヤの前に体を滑り込ませたモモンは注意深く攻撃の飛んできた方向を観察する。

血を撒き散らしながら、まるで巻き取られる巻尺のように森へ吸い込まれていく鱗持つなにか。

背後ではミユールに手助けされながら後退していくニニヤがいる。

モモンは自身の勝利を微塵も疑わないが、勝利したとしても犠牲が出てしまつてはまずい。

特に護衛対象であるンファイレアと、クーゲルシユライバーに執着されているニニヤはなんとしても守り抜かなければならない。

またもや森の青葉が微かに散る。

モモンは即座に両手の剣をクロスさせながら頭上に掲げた。

金属音と共に、クロスさせた部分に重たい衝撃が走り激しい火花が

散る。

すかさず剣を持った両手を左右に振った。

鍔と同じ要領でこの鞭のような物体を切断しようという試みだったが、それはモモンにとって意外なことに、激しい火花と僅かに血の滲む切り傷を発生させるのみに留まった。

（深遠アトラク・ナクアの大蜘蛛の外皮で出来た武器には劣るらしいが、打ち合うことは出来る硬度を持つ金属質の鞭か。血が出るということは肉体武器の一種だろうが、この敵のレベルは40を下回っているはず。にもかかわらずこの硬さと耐久力はなんだ？）

肉体武装の硬度や耐久力はレベルの上昇と合わせて高まっていく。アウラに指定したモンスターにはレベルの上限を設けている。

追加で要望したモンスターも同様であり、実際に調査して40レベルを上回るようであるならば一報を入れるように指示してあった。

つまり彼女がミスや命令違反を起こしていないならこの敵は40レベル以下のはずだ。

そしてモモンの常識から言うと、40レベル以下の肉体武装で聖遺物級武器レリックと傷つきながらも打ち合えるのは驚愕に値する。

（この状態での腕力を考慮すれば更に不可解だ。剣や棍棒以外の武器と戦った事もないし、どう対処するべきか）

敵の持つ武器とその攻撃方法から、実戦経験の少ない戦士であるモモンにとっては多少手こずりそうな予感があった。

前衛として役に立つスキルが無いわけではないが、使い慣れていないスキルを不慣れな状況と用途で使用すればどんな結果になるかが分からない。

ンファイレアや漆黒の剣が居る手前、「やりすぎ」になるのは避けたいモモンとしては純粋な剣技によってこれに立ち向かうしかない。

しかし初心者であるモモンには剣技と呼べるほどの技量はなく、鞭のような特殊な武器に対する立ち回りの知識もないのだ。

（多少やり辛いが、ステータス差を考えれば丁度いいハンデか。さあ、姿を見せてかかって来るがいい！）

ステータスを物言わせて一方的に捻じ伏せる事も出来るが、それ

はモモンの望む「激闘」とは違うものになる。

全力は出さず技量でもって戦う決意を固め、剣を担ぎ構えを取ったモモンは戦意に燃える眼差しで森を睨んだ。

森の下生えがガサガサと音をたてて揺れる。

二度の攻撃を防がれた敵が、攻め手を変えついにその姿を現した。

「なんだと……」

現れた敵の姿を見てモモンは精神的動揺を感じた。

胸にこみ上げる衝動と、力を失ってよろめく脚。

精神が抑制されるまでの間、モモンは脚に力を入れ震えだしそうな肩を気力で押さえつけ、演技が崩れないように必死で平静を装った。

しかし――

『ハムスターだ！モモンガさん、ジャンガリアンハムスターだよアレ！』

「うぷっ!？」

クーゲルシュライバーからの喜色に満ち満ちたテレパシーを受けて、モモンはついに我慢が利かずその肩を笑いによって震わせた。

嬉しそうな感情と一緒に、クーゲルシュライバーが青空と花畑をバックに飛び跳ねているという奇妙なイメージまで送られては平静を保てるはずもない。

たまらずヘルムの中で笑いを漏らしてしまったが、幸いなことにそれは誰にも聞かれなかったようだ。

クーゲルシュライバーの言うとおり、森から現れたのはジャンガリアンハムスターという小動物に酷似した生物だった。

ウルウルと輝く円らな黒い瞳、銀というよりスノーホワイトのフワフワの毛並み、短い手足と愛くるしいまん丸い体。

熊のように巨大ではあるが、それは何処からどう見てもハムスターでしかなかった。

「嘘だ……なんで、こんなところに!？」

この緊迫した状況で愛くるしい外見のジャンガリアンハムスターが出てくるなんて予想できる人間はいるまい。

その馬鹿げたサイズと合わせて嘘だと言いたくなるのは仕方な

い事だ。

モモンは困惑するンファイレアに大いに同情した。

モモンは大声で威嚇しようかと考えた。

偶然気の立っているハムスターが襲い掛かってきただけで、脅せば逃げ帰ってくれるかもしれないからだ。

なにせこれから伝説と謳われる大魔獣との戦闘が控えている。

英雄らしい戦いをし、戦士モモンの名を広めるための大舞台である。

その大事な舞台にハムスターの出る幕はない。

厳しい姿の強大な魔獣との、火花散り血が吹きすさぶ決闘こそがお似合いなのだ。

——なのに。

「……」

モモンは視線を横へ僅かにずらした。

その視界には鱗に覆われた長い尻尾がくねっている。

モモンの攻撃によって出来た傷が生々しく残っていた。

今度は逆方向にずらす。

なんとということだろうか。

違ってくれというモモンの願いも空しく、尻尾はハムスターの尻に繋がっていたのである。

それはつまり、先ほどまでの攻防を行い敵として不足なしと認めた相手がこのハムスターであるという事を示していた。

「森の賢王！」

そしてとどめはそれだった。

……今、ンファイレアはなんと言ったのか？

森の賢王、森の賢王と言ったのか!?これを森の賢王と認識してしまうのかお前は!?

変な尻尾とそのサイズを除いては愛くるしい外見のハムスターを、切羽詰った声で森の賢王と呼ぶンファイレアはちよっとおかしいのではないだろうか？

そう思っただけで後ろを確認してみれば、ンファイレアどころか

漆黒の剣達までもが、かつてカルネ村で初めて出会った兵士達のような表情で震えていた。

それをみたモモンは自分の真の姿が、神器級装備ゴッズに身を固めた死の支配者の姿が、ハムスターと同等の恐怖を人々に与えると知って危うく膝を折りそうになる。

ハムスターと同格って……。

何度も反芻されるその言葉は、ロールプレイを重視しロマンを詰め込んで作り上げた姿キャラクターに対するプライドを著しく傷つけていた。

（ハムスターを好敵手と思つてたのか俺は……いや、同格だもんな。こんな俺にはお似合いか）

自分とハムスターの間に巨大な等号が浮かぶのを幻視し自嘲するモモン。

見る見るうちに戦意と盛り上がりが萎えていく中で、クーゲルシュライバーからのテレパシーが入った。

『あー、モモンガさん？テレパシーで受信できちゃうぐらいショック受けているところアレなんですけど、やる気出してもらえませんか？なんか人間達の反応みるとあのハムスターは言い伝えどおりの大魔獣って扱いたいですよ』

その言葉にモモンはもう一度背後を窺う。

皆悲壮な覚悟を決めているようで顔が青い。

特に急な方向変換のせいで抉れた地面に車輪が嵌ってしまったンファイレアと、これからどうすべきか思索しているらしきペテルの顔色が悪い。

自分に集まる視線も感じる。それは縋るような、期待するような、窮地に追い込まれた者がする眼差しだ。

『文化の違いですかね？彼らにはハムスターが化け物に見えてるみたいですよ。なんか納得できませんけど、名声を高める相手としては申し分ないのではないかと』

だからやる気をだして演技を続けてください。

そんなクーゲルシュライバーの言葉には間違いはないのだろう。

異なる感性を持つ彼らにとってこれから始まる戦闘は「偉大な戦士

対伝説の大魔獣」そのものであり、今現在モモンが感じているようなギャグやジョークの気配など微塵もない、シリアス一辺倒の真剣勝負に他ならないのだ。

だからといって一度失われたやる気を取り戻すのは難しい。

どれだけ奮い起こそうとしても、敵であるハムスターの姿を視界に入れば脱力は免れないのだから。

動物虐待。

そんな言葉が脳裏に浮かんでは、モモンから戦意というものを削いでいく。

そんな時に背後から声が掛かった。

緊張に震えるペテルの声だ。

「モモンさん。私達の仕事はンファイレアさんの護衛です。彼の無事がなによりも優先されます」

そう言うペテルはなんとも気まずそうな、申し訳なさそうな態度だ。

それを感じ取ったモモンは、ペテルがなにを言いたいのかをおぼろげながら理解した。

好青年然した彼がここまで言い難そうにしているのだから、此方にとつて負担になるような話に違いないだろう。

「それで？」

「うっ……、ンファイレアさんにはエ・ランテルまで逃げてもらいます。夜には到着できる距離ですから……ただ、一人で行かせる事は出来ません。道中の護衛は絶対に必要ですので。そ、それで、だから、あの、モモンさんには……」

顔中にかいた汗を拭う事もなく必死に言葉を紡ぐペテルの様子に、モモンは罪悪感に揺れる彼の心境を垣間見た。

だから、彼の望む言葉を口にする。彼の考えを拒否する前提でだ。

「私はあのハム……森の賢王の相手をしますよ」

「よろしいのですか!？」

「いいですとも。この場であれを抑えられる可能性があるのは私だけですから」

喜びよりも純粋な驚きに染まっているペテルの声に、モモンはこの若者の心根の良さを再確認する。

ペテルの提案は、逃げるンファイレアを護衛する部隊と、追撃を阻止するため森の賢王と対峙する部隊の二つに分かれようというものだ。

手に負えない敵が出た時の対処法としては悪くない策と言える。

森の賢王と対峙する役をモモンに希望するのも、漆黒の剣では時間稼ぎも出来ず全滅するのが現実だからこそその合理的な判断だ。

道中に出没するであろうゴブリンやオーガが相手ならば漆黒の剣でも対処可能であり、ンファイレアの護衛として十分な働きが期待できる。

正に適材適所であり、助かる命が最も多い作戦である。

ペテルが言い辛そうだったのは、この作戦だと追撃を阻止する為に残る人員がほぼ確実に死亡する事になるからだろう。

多くを助けるためとは言え、その犠牲になって欲しいと他人に頼むのは心苦しかったに違いない。

しかし実際のところ、モモンが森の賢王と対峙する以上敗北は存在しないのだから、その苦悩は全くの無駄だったと言うしかない。

(勝てるかどうかの確認を本人にする前にコレとはな。どうやら先ほどの活躍ではまったく足りなかったらしい)

自分が森の賢王に負けると思われる程度の評価しか受けていないことを悟り、モモンはさらなる評価を得る必要を強く感じた。

「では……」

「しかしー」

仲間達に撤退の指示を出そうとしたペテルは、モモンの鋭い声に肩を跳ね上げた。

「部隊を二つに分けるのは反対です。この場にて全員で戦いましょう」

「なっ、何故!?!」

「ルクルトトさんが接近を察知してから到着するまでの時間が早すぎます。通さないよう努力しますが、万が一敵が私を迂回してンファイ

レアさんの方へ向かった場合、全滅は免れません。敵の速力を考える
と、距離が離れていればいるだけカバーに向かうのが困難なのです」
「ですが森の賢王には先ほどのゴブリン達のように精神異常の様子が
見られます。迂回などしないのでは？」

「さっきの連中とは違う状態の可能性もあります。それに敵は最初に
ニヤさんを攻撃しました。あの時ニヤさんの後ろには誰が居ま
したか？」

「……ンファイレアさん！」

「そうです。あの攻撃は直線状の攻撃範囲を持っているようです
から、奴の狙いは最初からンファイレアさんだという事も考えられるの
ですよ」

モモンの冷静な観察力と思考にペテルは舌を巻いた。

不可解にも此方に会話をするだけの時間を与えてくれてはいるが、
依然として圧倒的な威圧感を放っている森の賢王を前にして、冷静沈
着な態度を崩さないモモンの胆力はどれ程称賛しても足りないほど
だ。

しかしモモンの提案には大きな問題がある。

それは、勝てなければ結局皆殺しになるという点だ。

だがこの英雄の風格を持つ男がこの策を選んだ以上、あの恐るべき
魔獣の姿を見ては信じがたいことではあるが、つまりはそういうこと
なのだろう。

最早ペテルは英雄に向ける眼差しそのものでモモンを仰ぎ見た。

「モモンさん、勝算は？」

「勿論、必勝です。全員で力を合わせれば、ね」

「……わかりました！」

明朗快活なペテルの返事に、モモンは自らの企みが成功した事に喜
んでいた。

一人で戦ったとしても絶対に負けることのないモモンとしては、問
題なのは部隊を分けることによって活躍を語り継ぐための観客が居
なくなってしまう事一つだけだ。

必死に頭を使いそれっぽい理由を並べた努力が実って、ついに演技

の舞台は整ったのである。

「さて、待たせたな森の賢王よ。いざ尋常に、勝負といこうじゃないか」

あれは大魔獣、あれは大魔獣……。

ハムスター相手にかっこつけている漆黒の戦士の図を想像してはいけない。

そう言い聞かせて視覚にフィルターをかけながら、あらかじめ考えておいたキメ台詞を言い放つ。

それと同時に、ピクピクと痙攣する体を奇妙に振りながら此方に敵意を向けていた森の賢王が、その巨大な体を躍動させながら襲い掛かってきた。

あとはどれだけ見栄え良く倒すかだ。

ナーベやミユールの魔法で即殺しないように上手く立ち回らねば。モモンは唸りをあげ迫り来る爪に狙いを定め、剣を振り下ろした。



「ここで森の賢王を討つ！モモンさんを援護するんだ！」

戦いの幕が切つて落とされたのと同時に響き渡ったペテルの声に、各チームのリーダー同士の様子を取りを緊張の面持ちで伺っていたクルツト、ダイン、ニニヤの三人がかすかに笑みを浮かべてから各々気炎を上げた。

「伝説が相手かよ！とんだ依頼だなおい！」

「しかしやるしかないのである！」

「モモンさんは勝てると言いました！あの人を信じましょう！」

仲間達の声に強大な脅威に立ち向かう戦意が十分に満ちている事を確認すると、ペテルは自分達で出来る援護とは何かを考える。

すでに衝突し、目視すら怪しい速度での攻防を繰り返しているモモンと森の賢王に、近接武器での支援を行おうとするのは自殺行為だ。

したがって剣による攻撃手段しか持たない自分はほぼ無力である。だが、何も出来ないわけではない。

「ニニヤ、私に防御魔法を！ダインは何時でも《植物の絡みつき／トワイン・プラント》を発動できる状態で待機！発動のタイミングは私が言う！ルクルットは側面から弓で攻撃！可能な限り眼を狙え！すこしでも敵の動きを邪魔するんだ！」

「《鎧強化／リーインフォース・アーマー》！」

「あんな動き回ってる奴の目玉狙えとかひでえリーダーだぜ！」

ルクルットが森の賢王の側面を取るべく走り出す。

ニニヤからの支援魔法を受けたペテルもルクルットを追って走る。

モモンの背後は彼が健在である限り安全圏と言って差し支えないが、側面ともなれば話は別だ。

森の賢王が持つ長大な尻尾による攻撃が、何時飛んできてもおかしくないのである。

まともに受ければ死は免れない攻撃からルクルットを守れるのは、二人居る戦士の片割れである自分しかない。

剣と盾を防御に使用し、超高速で襲い掛かってくる尾に対して武技〈要塞〉を起動できたとしても自分が無傷で受け切れるかは怪しい。しかしやるしかないのである。

己の負傷と引き換えに仲間を守る事こそ戦士の誉れだ。

「つー！」

ルクルットの狙い済ました一射が森の賢王へと迫るが、それは眼球に命中せず、毛皮によって弾かれ地に落ちてしまった。

しかし眼に当たらずとも、眼球目掛けて飛来する物に対する防衛反応で、瞼が閉じられるだけでも援護としては十分な効果がある。

接近戦において突発的に視界が狭まるのは相当な不利なのだ。

現に、その隙を突いたモモンによる一撃が森の賢王の強固な防御を掻い潜り、白銀の体毛に朱色を差した。

いけるぞ！

手傷を負った大魔獣の姿に希望が膨らむ。

それは仲間達も同じだったようで、彼方此方で歓喜の声が上がった。

その声を聞いた次の瞬間、ペテルの耳はほんの僅かな風きり音を捉

えた。

「あああつー！」

パン！

反射的に武技《要塞》を起動した瞬間、甲高い破裂音が周囲に響く。気がつけばペテルは剣も盾も投げ出して地面に倒れこんでいた。

ハンマーによって全身の骨を打ち砕かれたかのような激痛。

混濁する意識で立ち上がろうとするも、体はピクリとも動かなかった。

「《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》」

「うっ、うぐっ!？」

このまま死ぬのだろうか？ルクルットは無事なのか？

薄れ行く激痛を感じながら横たわっていたペテルは、急に鮮明になった痛みに眼を白黒させた。

「《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》」

この声はミユールのものだ。

全身の痛みが嘘のように消えていく。

それにしたがつて霧が晴れるように明らかになっていく意識。

自分がついさつき死に掛けたことを理解すると、ペテルは最も手近にあった盾を手に取りわき目も振らずにモモンの後ろへと走った。

「ありがとうミユールさん！下れルクルット！早く！」

「わあってるよー！」

最後の矢を撃ち終えたルクルットが追いついてきて、腕を掴んで引っ張ってくれている。

転がり込むようにモモンという壁を挟んで森の賢王の正面に移動した二人は息も荒く悪態をついた。

「一発で死に掛けてんじゃねえよ！生きた心地がしなかったぞこんにやろう！」

「守られなくてそれはないだろう!?!そもそもあんな攻撃されて死に掛けない奴なんていない！」

「モモンの旦那がいるだろうが！」

「あの人は特別なんだよ！同じ戦士だからって一緒にしないでくれ

！」

怒鳴りあいながらも体勢を立て直し戦況を見てみれば、モモンはたった一人で森の賢王の攻撃に耐えている。

敵の攻撃は激化の一途を辿っており、モモンは剣捌きのみでなく、目まぐるしく移動することで戦線を維持している。

ンフィーレアのいる馬車の近くに控えるナーベとミユールを見れば、二人とも鋭い眼差しで森の賢王を見つめてはいるが攻撃魔法を撃とうとはしていない。

それも仕方のない事だ。こうも激しく動かれています、標的が巨大であろうとも誤射を恐れて迂闊には魔法は使えない。

廻り込んで撃とうとしても先ほどの自分の如く、大地に転がされるのが関の山だ。

目視することはできなかったが、尾による一撃があたりの攻撃の正体だろう。

酷く歪んでしまった盾と、幾重にも巻かれた皮が弾け飛んでしまったバンデッド・アーマーた帯。鎧が自身の受けた攻撃の凄まじさを如実に物語っている。

伸び縮みし、長大な射程をもつアレを魔法詠唱者が受ければ即死は間違いあるまい。

結局のところ、この戦闘の勝敗は全てモモンに掛かっているのだ。周りに居るものは戦闘に関与できず、ただひたすらモモンの勝利を

祈るだけ。
押し寄せる無力感がペテルにそう思わせる。

しかし——
「いや、違う。それは違う」

先ほどのルクルクルトによる攻撃はモモンに森の賢王の防御を突破する隙を生んだ。

あれは紛れも無く、効果的な援護だったはずだ。
モモンは全員で力を合わせれば必勝であると言った。

逆に言えば、力を合わせなければ必勝というわけにはいかない相手なのだ。

モモンには自分達の力が、援護が必要なのである。

へこたれている暇などないのだ。

「オオオッ！」

裂帛の気合と共にモモンが剣を大きく振りかぶる。

渾身の力を込めた一撃を繰り出そうというのだろう。

そしてペテルの予想通り、振りかぶられた剣は足の踏み込みと腰の捻りを込められ目視不可能な速度で奔り出した。

「ギイイイー！」

森の賢王が恐ろしい声で吼えた。

そう思った瞬間、耳をつんざく金属音と《火球／ファイヤーボール》の魔法と見間違えような巨大な火花が散ってモモンの体勢が大きく崩れた。

渾身の一撃を弾かれたのだ！

「ダイン今だ！」

《植物の絡みつき／トワイン・プラント》！

地面から生えた植物が、体勢の崩れたモモンに致命的な追撃をかけるようとしていた森の賢王の足を絡め取った。

だがダインのドルイド魔法による拘束は、ほんの僅かな効果しか発揮しなかった。

ブチブチと蔓を引きちぎる音と共に森の賢王は攻撃を続行する。

しかし、その僅かな抵抗がモモンの防御を間に合わせた。

「……皆さん、援護感謝します」

激戦の最中、モモンの発した感謝の言葉に胸が熱くなる。

紛れも無く英雄級の力を持つ偉大な戦士と、自分達は一緒に戦えている。

その実感がどうしようもなく気分を昂ぶらせていた。

どうやらそれは仲間達も同じようで、ニニヤなどは露骨に顔を紅潮させていた。

モモンは防御を成功させると即座に体勢を整えた。

そこからのモモンの攻勢はまさに熾烈の一言であり、剣をどういう風に振るっているのかもペテルには分からない有様だった。

だが、時間と共に森の賢王の毛皮は着実に赤く染まっていく。

対するモモンの鎧には傷一つない。

モモンが伝説の大魔獣を圧倒しているのだ！

「これで、決めるー！」

その言葉と共に真紅のマントが舞いあがる怪鳥の翼の如く広がった。

そして剣が振り抜かれると、森の賢王の巨体が鮮血を撒き散らしながらまるで鞠のように吹き飛ばされた。

モモンとの距離が離れたこの好機を逃すわけにはいかない。

「二ニヤ、撃てえー！」

「喰らえー！《魔法の矢／マジック・アロー》！」

二本の光の矢が吹き飛ばされてもがく森の賢王に突き刺さる。

ヂユウ、という苦悶の声が上がった。

普通の矢は毛皮に防がれても、魔法の矢は効果があるらしい。

どうやら森の賢王の弱点は、魔法のようだ。

「撃ちまくれー！」

「《魔法の矢／マジック・アロー》！《魔法の矢／マジック・アロー》！

《魔法の矢／マジック・アロー》！はあ、はあ、《魔法の矢／マジック・

アロー》！」

「……あー。ナーベ、ミュール、撃て」

次々と放たれる二ニヤの魔法に続くようにナーベとミュールの第三位階魔法が発動する。

迸る雷撃と緑色の怪光線がバチバチと音を立てながら直撃すると、

森の賢王の赤く染まった毛皮が血の湯気と共に逆立った。

「アババババー！」

獣の鳴き声というより、人間の悲鳴に似た叫びを上げて森の賢王は沈黙した。

どう、という音を立て地面に倒れこみ、時折痙攣するかのよう足が引きつらせている。

どうやらまだ生きてはいるようだが、死にかけの蟲のようにも見えるその姿からはもはや脅威を感じられなかった。

「……勝った、のか？」

目の前の光景が信じられなくて、ペテルの口からそんな疑問が零れ落ちた。

だって、自分達はただの銀級冒険者で、敵は圧倒的強者の伝説的魔獣で、それなのにこうして無事に立っていられるわけ。

現実を飲み込めず、呆然と立ち尽くすペテルにモモンが答えた。

「あれほどの傷を負ってはもう動けないでしょう。私達の勝利です」

私達の勝利。

そうか、私達は誰一人として欠ける事無く、森の賢王に勝利したのか。

……。

「勝った？勝った、勝ったのか……うおおおおお!?」

「うおおおおお！すげえ！すげえよ！俺達森の賢王を倒しちゃった！」

「伝説の魔獣を私達で……まるで、夢みたい……!」

「しっかりとするのであるニニャー！これは現実である！勝ったのである！」

仲間の誰もが歓喜に打ち震えている。

事態を震えながら見守っていたンフィーレアも、口元に笑みを浮かべて安堵に胸を撫で下ろしていた。

普段は冷静なナーベさえ、ミユールと一緒にあってモモンの戦いぶりを熱心に褒め称えている。

この場で冷静なのは、最も華々しく活躍したモモン一人だけであり、その普段どおりの姿がペテルには気に食わなかった。

それは仲間達も同じだったようで、アイコンタクト一つでモモンに向かって走り出した。

「モモンさん！」

「モモンの旦那！」

「モモン氏！」

「モモンさん！」

「え、あ？なに？なんですか皆さん？」

突然詰め寄られたモモンは戸惑いながら首を左右にせわしなく動

かしていた。

そんな仕草が、先ほどまでの戦い振りとは比べると余りにも愛嬌がありすぎて、ペテルは益々この男が好きになってしまった。

「みんなーやれー！」

おー！

息の合った掛け声と共に、重装備のモモンが宙に舞った。

胸上げである。

気を抜けば腰を痛めそうな重量だったが、齒を食いしぼり仲間と力を合わせて偉大なる戦士を天に押し上げる。

大した高度にはならないが、何度も、何度も。

「うおっ!?ちよ、ちよっと待ってくださいー!おおおお?」

トブの大森林間近の草原に、困惑するモモンの声が天高く響いていった。

……胸上げの途中、ナーベの視線がかつてない冷たさを宿していた事に気付いたペテルは、勝利の熱狂も忘れるほどの恐怖を味わった。そんなナーベを無言でたしなめてくれたミュールには後で礼を言わねばならない。

ペテルはそう胸に刻むのだった。



さてどうするか。

胸上げも終わり、モモンはピクピクと痙攣を繰り返す森の賢王を眺めて思案する。

森の賢王を殺すか、殺さないかについてだ。

モモンは戦闘中、森の賢王を殺すつもりだった。

「これで、決めるー!」とキメ台詞を吐いての一撃で、華麗に止めを刺すつもりだったのだ。

それをどういふことか、深手を与えたもののしくじってしまった。間髪容れずにペテルの号令によってニニヤが魔法による攻撃を始

めてしまい、ここでナーベとミュールが攻撃しないのは不自然すぎる
と判断。

最も重要なとどめのシーンを我が物に出来ないという悔しさを堪
えながら、断腸の思いで二人に攻撃命令を出したのだった。

勿論モモンはこの時に、森の賢王が死ぬことを覚悟していた。

(それでも生きているとか中々丈夫な奴だなコイツ)

幸運のハムスターか……。

そんな名前が浮かぶ程度には、二度も死線を潜り抜けたハムスター
にモモンはある種の価値を見出していた。

しかし名声を高めるといふ当初の目的を思い出せば、殺して毛皮な
り骨なりを持ち帰ったほうがいいのではないかという気もする。

殺さずに使役するというのも名声を得るには良いかもしれないが、
アウラのようなビーストテイマーの職業クラスを持っていない自分にそれ
が出来るとは思えない。

魔法が使えるならば話は別なのだが、今の状態では一切の魔法が使
用不可能だ。

やはり、殺すか。

モモンがそう思った時、ンファイレアが控えめな声で話しかけてき
た。

「あの、森の賢王を殺してしまうのですか？」

「ん？」

まるで殺さないで欲しいと言うようなンファイレアの物言いにモ
モンは首を傾げた。

そんなモモンの仕草をどう勘違いしたのか、ンファイレアは身を縮
めながらも話を続ける。

「護衛中に襲ってきたモンスターを討伐して得られた物は冒険者の皆
さんの取り分です。そういう契約ですから……でも、森の賢王を殺し
てしまうと、その縄張りによって平穏を保っていた村がモンスターに
襲われる事になるかもしれないんです」

そういえばそんな話もあったなとモモンは納得する。

ンファイレアの言う村というのは、一行が補給を行う予定のカルネ

村の事である。

定期的に薬草採集の為にカルネ村を訪れるンファイレアにとっては、モンスターによって壊滅するような事があっては困るのだろう。いや、それ以前に同じ人間種の村なのだから、同族意識的に危険を招くようなことは避けたいのかもしれない。

しかし、そんなンファイレアの事情はモモンには関係ない。

この任務の後に誘拐される運命であるンファイレアには補給地点の存亡など関係ない話であるし、同族を助けたいという気持ちも人外であるモモンにとっては同情に値しない。

そして何よりも、ンファイレアは知る由もないが、カルネ村は現在クーゲルシュライバーの影響下にあるためモンスタアの襲撃などまゝで問題としないのである。

森の賢王が生きていようがいまいが、カルネ村の安全は揺るがないのだ。

(ネムを守るという約束の為に村全体を保護しかねない過保護っぷりだからなあ。襲撃でもあつたら直接乗り込むぐらいはしそうだ)

モモンはあの茶髪の少女にかけるクーゲルシュライバーの情けの深さを知っている。

アルベドやミユールの一件を経験した今となつては不可解ではあるが、もしも何者かに襲われあの娘が悲しむ事があつたりしたらカルネ村に邪神が降臨するのは確実だ。

その後始末の事を考えると、森の賢王に今までどおり防壁になつてもらふのも悪くないようにも思えるが……。

アレコレと考えてみるものの、モモンはすぐにその思考を打ち切つた。

ンファイレアに対するモモンの答えは最初から決まっていたのである。

「分かりました。森の賢王を殺すのはやめましょう」
殺さない。

名声を高めるため苦労したモモンにはそれしか選びようがないのだ。

この会話の流れで森の賢王を殺したら、戦士モモンは自らの手柄を誇るために村一つの安寧を犠牲にしたと見られるに違いない。

誘拐が決定しているンファイレアはさして問題にならないが、エ・ランテルに帰って名声を広めてもらわねばならない漆黒の剣達のモモンに対する評価が落ちるのは問題だ。

ここは激闘の末に森の賢王を打ち倒すも、己の名声よりも村民の安全を優先した高潔な人物という演技するべきだろう。

「漆黒の剣の皆さんもそれでよろしいですか？」

「私達はただ手伝いをしただけに過ぎません。一番の功労者であるモモンさんの決定に口を挟むことはしませんよ」

「ありがとうございます。と、いうわけですンファイレアさん。これでよろしいでしょうか？」

期待通り尊敬の眼差しを向けてくる漆黒の剣達に背を向けてンファイレアを見れば、少年は頬を上気させて頭を縦に振った。

「はい！僕のがままを聞いてくれて本当にありがとうございます！このご恩は必ずお返しします！」

「ああ、いえ、御気になさらず」

誘拐して人生そのものを奪い取る予定なのだから、恩を返すと言われても……。

そんな内心を一切外に出さず、興奮するンファイレアを軽くあしらったモモンは森の賢王を観察する。

さつきよりも毛皮の赤が広がっており、痙攣も疎らになっている。

恐らくはHPが1割以下になっているのだろう。

所謂「瀕死」状態だ。

殺さないでただ放置しておいては、他のモンスターによって殺されてしまいそうな程に森の賢王は弱りきっていた。

「このままではいずれ死ぬ。ミユール、こいつに回復魔法を。最低ランクのもので構わない」

「わかりました」

先ほどまで戦っていた相手を回復させて大丈夫なのかと問う視線に対して、モモンは二本の大剣を構えることで答えた。

それで納得したのだろうか。

漆黒の剣とンファイアは念の為に距離を取り、武器を取り出し事態を静観する構えをとった。

「ではやります。《ライト・ヒーリング／軽傷治癒》」

ミユールの短杖が暖かな光を発する。

そして、それを受けた森の賢王が僅かに身じろぎをした。

「森の賢王よ。お前がその名に相応しい知性を持つのなら私の声に答えてみせろ」

モモンは高圧的な態度で森の賢王へと話しかける。

瀕死とは言えHPが残っている状態にも拘らず攻撃を続行してこなかった事から、アウラのかけた精神異常がすでに解除されていると判断しての行動だった。

「うぐぐ……そ、それがしを打ち倒すとは、お見事でござる」

「おおっ！しゃ、喋ったぞー！」

驚くルクルツトの姿にモモンは小首をかしげる。

知能の低い亜人のゴブリンですら人語を解するというのに、賢王とも称される魔獣が喋るのはそんなにおかしい事なのだろうか？

もしかすると亜人が喋るのは当たり前で、魔獣は喋らないのが普通なのだろうか。

冷静に考えてみれば、人間と喉の構造が全く異なる魔獣に人語を喋れというのは無茶な話かもしれない。

しかし、そうすると喉もへったくれもない自分が喋れているのは一体どういうことなのだろうか？

（まあいいか。それにしても、それがし？ござるう？妙に時代劇めいた言葉遣いだが……翻訳のせいかな？）

まあ言葉が通じるのなら問題はない。

予想通り精神異常は解除されており、職業クラスによらず会話での交渉が可能とは実に好都合だ。

モモンはうつぶせに倒れる森の賢王の鼻先に扇状の剣先を突きつけた。

「自らの置かれた状況と力の差は理解しているな？」

「……抵抗は無意味でござるな。もつとも、抵抗する体力も気力もないでござるが」

「ほう？では全面降伏というわけだな？」

「そうする他ないでござろう？さあ、やるが良いでござる！」

森の賢王は観念して仰向けに転がった。

モコモコの毛に覆われた柔らかそうな腹部がモモンの前に差し出された。

「……結局仲間とは一度も出会えなかったでござる。子孫も残せずこの世を去るとは、それがしは生物失格でござる。でも、無念だがしかたがないでござるなあ」

「むう……」

円らな黒い瞳を涙でウルウルさせ、森の賢王はプルプルと小刻みに震える。

逃れえぬ運命を恐怖しながらも待っている状態だ。

その姿と言葉が如何にも哀れで、モモンの罪悪感と同情を誘った。

特に仲間と一度も出会えなかったという言葉が心に響く。

こいつも長く孤独だったのか。

そう思うと、モモンはほんの少しだけ声をやわらげて森の賢王に語りかけた。

「お前が私に服従し、なんでも言う事を聞くというのであればその命を助けてやろうじゃないか」

「えっ？それがしを殺さないの？でござるか？」

「服従するならば、だ」

「ふ、服従するでござるよ！200年も生きて一度も同族に会えないまま終わるなんて寂しすぎるでござるー！」

「その言葉、絶対だな？」

「絶対でござる！この森の賢王、命の恩は忘れないでござる！これより漆黒の戦士殿に服従し、如何なる命令にも従う所存！だから助けて欲しいでござるよ……」

「いいだろう。ミユール」

《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》

ミュールの魔法によって森の賢王は全回復とは行かなくとも、自由に動き回れる程度に回復した。

より高位の回復魔法を使って全回復させることも出来るのだが、それをしないのは第三位階魔法の呪いを使用できる上に、回復魔法まで同じ位階で使えるとなると悪目立ちが過ぎるからだ。

《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》を数回使用して全快させるの手も、使用魔力の合計的になにかと騒がれそうなのであえて行われなかった。

「体の調子はどうか？」

「おお、体が動くでござる！かたじけのうござる、かたじけのうござる！」

血に染まっていた毛皮が元の白さを取り戻すと、森の賢王は身を起こしてモモンに対ししきりに頭を下げた。

続けて己を癒してくれた黒い魔法詠唱者に同様に頭を下げる。

しかし礼を受けたミュールは口元に笑みを浮かべながらも、居心地悪そうに体を揺らした。

「ええと、それがあなたの最敬礼だとは思いますが私には不要ですよ。至上の敬意はモモンさんにだけ向けてください」

「むむ？されど実際にそれがしの傷を癒してくれた相手にそれは、森の賢王の名が泣くというものでござ……」

「いいから。大体、モモンさんがあなたを生かすと言わなければ私は何もしませんでした。だからあなたが最も感謝すべきはモモンさん一人なのです」

森の賢王の発言を途中で遮つてのミュールの主張は、彼女らしくない焦りが含まれていた。

そんなミュールの事をナーベが同情的な視線で見ているのに気付いたモモンは、ああやっぱりミュールもナザリックのNPCなんだなと静かにため息をついた。

（そこまでして俺を立てなくてもいいんだけどなあ。そういうので怒ったりしないのに）

そうは思うものの、NPC達のこういった性質を変えるのは不可能

なのではないかとも思われた。

NPC達と暮らしてもう九日。

こうして身分を隠しての冒険中に、あまり不自然になつたりしない限りは、一々注意するのは止めようと諦めムードになる程度には、NPC達の向ける敬意と忠誠について学んだモモンだった。

「さて、元気になったところでお前に命ずる」

「はっ！何なりとご命令ください、殿！」

「殿お？これまた大仰な……」

「大仰などではござらん！絶対服従の相手とは主君も同然ではござらぬか！」

「……左様か。まあいい、ではお前はこれから自分の縄張りに戻り今までどおり暮らしている。それが命令だ」

「えっ？それだけでござるか？」

森の賢王はまんまるの目を更に丸くして問う。

眼の見開きすぎで多少白目が見えているのが少し気持ち悪い。

「それだけだ。強いて言うなら、後日私達は薬草を取りにお前の縄張りに向かう。その時に薬草集めの手伝いをしてもらいたい程度か」

「……それは勿論かまわぬのでござるが、本当にそれだけでいいのでござるか？それがし、殿には敗れましたが強さと容姿には自信があるでござるよ……」

「本当にそれだけなんだが、なにか不服か？」

「いや、そうではござらぬが……」

小さな耳をペタンと折って体を丸くするその姿は、全身で落ち込んでいる雰囲気を出している。

しかしながら、森の賢王を縄張りから引き離す事が出来ない以上は、本当に要求はそれだけなのでどうしようもない。

話は終わりだとはかりにモモンは踵を返す。

一歩ずつ遠ざかっていくモモンの背中を悲しそうな瞳で見つめる森の賢王。

そんな大魔獣に、事態を静かに見守っていたンファイアレアが声をかけた。

「あ、あの森の賢王！一つお聞きしたいのですが」

「なんでござるか？」

「なぜあなたは僕達に襲いかかってきたんですか？」

ンフィーレアのその質問に、モモンは内心で舌打ちした。

アウラのやることだから、気づかれることなく事を済ませているはずだが万が一がある。

なにか此方に繋がるような発言が飛び出してきやしないかと、モモンは気を揉んだ。

「うーむ……。実はそれがしにもわからなかったのでござるよ。巢で眠っていたはずなのでござるが、急に頭が怒りに染まって、気がつくとおぬし達と戦っていたのでござる」

「そうだったんですか……」

納得の言葉を口にするンフィーレアの顔色は悪い。

話を聞いていた漆黒の剣達も深刻そうな表情で次々に口を開いた。

「これはやはり、何者かが精神に作用するなんらかの手段を用いて森の賢王をけしかけてきたとしか思えないな」

「まあ十中八九、あのゴブリン共を狂わせたのと同じ犯だろうよ」

「単独か、それとも複数か。いずれにしても並大抵の人物ではないであるな」

「ええ。使ったのが魔法にしろアイテムにしろ、ゴブリン達のみならず森の賢王にまで精神異常を付与できるなんて、並の技量ではありませんよ。モモンさんもそう思うでしょう？」

「……ええ。私も同意見です」

唐突に話を振られたモモンは努めて冷静に、内心の安堵を悟らせないように答えた。

下手人が何者かが判明していない以上、事件を迷宮入りさせる事は容易だ。

自作自演のマッチポンプがばれる事はまずないだろう。

むしろ、この状態で問題になるのは……。

「ンフィーレアさん。断定は出来ませんが、どうやら私達は何者かに狙われているようです。このまま進めば更なる襲撃があるかも知れ

ません」

「はい……」

「相手は森の賢王すら手駒にするような手練です。安全の為にここでエ・ランテルに引き返すのも選択肢の一つだとは思いますが、如何でしょう?」

モモンが恐れていた事が現実となった。

名声を得るのを急ぎすぎたのだ。

立て続けに危険な目に遭えば、いくらモモン達という優秀な戦力があるとはいえ身の安全の為に引き返すという選択肢が出てくるのは当然だ。

ここでンファイアが引き返すと言えば、モモンとしてもその判断に反するのは難しい。

なんとかしなければならぬ。

モモンは必死に考えた。

「ペテルさんの仰る事もっともですが、それは敵の思う壺かも知れませんよ?」

「えっ?」

どうするべきか悩んでいたンファイアが勢いよくモモンに視線を向けた。

英雄級の実力を持つ人物の発言に、視線が次々に集まっていく。

その視線を感じるたびに緊張は跳ね上がり大きな重圧となるのだが、それを微塵も悟らせぬ堂々とした態度でモモンは説明をはじめた。

「まず、敵の目標はンファイアさんを害する事、もしくは薬草収集の妨害でしょう。どちらにせよンファイアさんのお店に対して大きな損害となるでしょう」

材料である薬草が仕入れられなくなればポーションは作れない。

そして薬師であるンファイアが負傷ないし死亡すればその損害は言うまでもない。

「聞けばンファイアさんのお店はエ・ランテル最高の薬屋との事。この襲撃はエ・ランテル最高の薬屋というネームバリューを狙う同業

者による営業妨害の線が濃厚と言えるでしょう」

「そ、そんな。エ・ランテルのポーシヨン職人の皆に、そんな事を考える人なんて……」

「本当に居ないと言い切れますか？職人と言っても商人です。売り上げを伸ばしたい、名声を得たいという人物は必ずいます」

「……」

黙り込むンファイレアを見てモモンは密かに笑う。

モモンの語った推理はンファイレアの不安を煽るためのでまかせだ。

しかし、もしかしたら？という疑念を抱かせる事はできる。

そうして疑いの目を真実とは見当違いの方向へ向けさせることがモモンの狙いだった。

「まあ。事件の黒幕に関しては今は気にしなくともよいでしょう。今はこれからどうするかが問題ですからね。襲撃が繰り返される中、安全に薬草を収穫しエ・ランテルへ戻るにはどうすればいいか？私に案があります」

「それは一体？」

「それは……森の賢王よ。1日か2日、縄張りを空けたとして、周囲のモンスター達に影響があると思うか？」

「それぐらいなら特に影響はないと思うでござる」

話を振られた森の賢王が鼻先を突き出して得意そうに答えた。

何処となく腹の立つ仕草ではあったが、モモンは満足そうに頷いてからンファイレアを見つめた。

「敵が強大なら戦力を増やせばいいのですよ」

「そうか！森の賢王が仲間になれば百人力だ！」

「なるほど……モモンさんと森の賢王がいれば敵無しですね！」

ンファイレアとペテルが興奮気味に声を上げた。

先の激戦の光景が臉に焼きついている彼らは、肩をあわせ同じ方角を向くモモンと森の賢王の姿を想像して胸を熱くしていた。

「まさか敵も森の賢王が負けて、服従させられるなんて思いもしなかったでしょう。ンファイレアさん、これならいけますよ！」

「はい。それじゃあエ・ランテルに引き返すのはやめて、予定通りに森へむかいますよう」

勝った！

拳を握り締め慎ましいガッツポーズを取ると、モモンは本日二度目の精神的勝利に酔いしれた。

これで疑いの目を向けられる事無く、依頼を続行することが出来る。

「そういうわけだ。さっきの命令は取り消す。私達に同行するのだ」

「わかったでござるよ殿！この森の賢王、殿と共に如何なる敵にも立ち向かう所存！」

鼻を引くつかせ長くツヤツヤとヒゲをピンと張った森の賢王。

モモンからしてみればハムスターが威張ってる微笑ましい姿にか見えないが、ンファイレアや漆黒の剣達にとってはそうではなかったらしく、皆一様に頼もしそうな眼を森の賢王に向けている。

「さあ、カルネ村に向かって出発しましょう！」

ンファイレアの声にしたがって、八人と一匹になった一行はカルネ村へ向かって移動を再開した。

35話

カチカチと硬質な音が連続して通路に響く。

塵一つない磨き上げられた大理石の如き輝きを宿す床を、クーゲルシュライバーは自分の針のように鋭利な先端を持つ歩脚が傷つけたりしないかと気にしながら歩いていった。

針どころか刃物であり、アダマントタイトなどの金属すら切断しうる前肢にいたっては微かに床から浮かせた状態をキープしている。

日頃繰り返し返されるエントマによる毛づくろいによりクーゲルシュライバーの甲殻は漆器のような艶やかさを得ており、今まさに踏みしめている床と同じく、天井から降り注ぐ暖かな光を受けて星を宿しているかのように輝いている。

これはつまり、エントマに毎日行わせている毛づくろいと同じ情熱と丁寧さで一般メイド達も清掃業務に励んでいるということなのだろう。

見ていないところでも誠実に仕事をこなしている彼女らには正直頭が下る気持ちだ。

だから、そんな彼女たちの努力の結晶に傷をつけたくは無かった。

(まあ頭を下げたらその度に一騒動起こるからやらないけど)

無数にあるドアの一つから、掃除を済ませたのだろうメイドが出てきたのでクーゲルシュライバーは擬頭を彼女に向けると、感謝と挨拶のつもりで擬腕を小さく掲げた。

一度人間が手を上げる感覚で前肢を掲げてみたところ、無礼討ちされる町娘めいた反応をされた苦い思い出が蘇る。

あれは確かに自分が悪かった。

前肢には巨大な首切り鉞がついているのだから、それを振り上げられれば誰だつて怖いに決まっている。

「……」

クーゲルシュライバーは擬頭と擬腕を元の場所へと戻すと何も言わずに歩き続ける。

メイドも何も言わない。ただ深々と礼をするのみだ。

お互い声も発しないやり取りではあるが、どうやら恐縮されてはいないようだった。

パンドラズ・アクターと共にモモンガの活躍ぶりを観戦したクーゲルシュライバーは、もうすぐ訪れる夜を思い機嫌がよかった。

夜ともなれば冒険者一行の移動は一旦停止となり、ゆつくりと会話をする時間が生まれるはず。

もしもミュルアニスが言いつけどおりニニヤとの関係を深めようとするならば、この機会を逃すことはないだろう。

一体どんな話をするのか？

果たして仲良くなれるのか？

そういった事を考えると、クーゲルシュライバーの胸は愉悅に満ちていくのだった。

ニニヤとて忌避するに足る存在ではあるのだが、一度関わると決めてからは何処までも貪欲に相手を求め、それを楽しく思えてしまう。

それを情けなく思わない事もないが、方針を変更する気はまったく起こらなかった。

(今晚は忙しいぞ。ニニヤとのやり取りを監視しなきゃだし、ネムの夢枕にも立たなきゃだし)

忙しいと思うも、機嫌は良いままだ。

出会ったシモベ達の苦労を偲び、挨拶を積極的に行おうという程度にはクーゲルシュライバーは上機嫌だった。

何度か角を曲がり、クーゲルシュライバーは自室を目指す。

モモンガ達は野営の準備をしているところで、一段落するのはもう少し後になりそうだった。

この隙に自室で休憩を取り、エントマによる毛づくろいを受けようとしているのだ。

しかし、自室に至る最後の角を曲がったところで、クーゲルシュライバーはその予定に変更が生じた事を理解した。

自室の前に、印象的な赤いスーツの男が立っているのを見つけたから。

「デミウルゴスか」

名前を呼ぶより早く、此方に気付き深々と礼をするデミウルゴスの頭を眺めながら思う。

苦手な奴が来てしまったなあ、と。

(頭いいシモベと会話するのは嫌なんだよなあ。こっちの馬鹿さ加減が露見しそうで)

ナザリックには最高峰と呼ばれる頭脳を持つシモベが三体いる。

アルベド、デミウルゴス、パンドラズ・アクターの三体だ。

その内パンドラズ・アクターに関しては、彼の大げさな身振り手振りからか全く抵抗はない。

しかし見るからに知性に優れていそうな外見を持つ残りの二体は、相對するだけでも多大な緊張を強いられるのだ。

かつて人間だった頃の性根が、ブルジョアとインテリに平伏しようとしてしまうのである。

そんな自分を奮い起こし、クーゲルシュライバーは自ら設定した演技を何度も反芻しながらデミウルゴスに話しかけた。

「私に用事かな？」

「はい。至高の御方々のご命令どおり、これより出立いたしますので、そのご挨拶に伺いました」

その言葉を聞いてクーゲルシュライバーは納得がいったとばかりに大きく頷いた。

デミウルゴスにはモモンガと話し合った結果、ナザリックの外に出てもらう事になっている。

セバスに与えたものと同じ種類の任務であり、周辺各国の情報収集とスクロールなどの消耗品が補給できるかどうかの調査が彼の仕事だ。

魔王を作るだとか、国を一つ制圧するだとか、そういう指示はしていない。

モモンガもクーゲルシュライバーも、そういったこの世界の住民に大きな被害が出る手段を避けていた。

ナザリックの支配者である二人は、可能な限り穏便に異物である自分達をこの世界に溶け込ませたいと考えているのだ。

この世界に来ているかもしれない他のギルドメンバーにアインズ・ウール・ゴウンの名を届けようという試みも、平和的に成されるべきなのだ。

なぜならば、ギルドの名が広がったとしてもそれが悪名としてだった場合、アインズ・ウール・ゴウンとは無関係なプレイヤーから敵対される恐れがある。

プレイヤーだけではない。この世界の住人にもモモンガとクレーゲルシュライバーが知らないだけでとんでもない強者がいるかもしれない。

そういった連中から身を守るためには、取るべき手段を可能な限り平穏なものにする必要があった。

対外的にはアインズ・ウール・ゴウンは正義の味方でなければならぬのである。

「そうか。お前の任務は他の者と似た部分がある。だが賢いお前ならば、他とはまた違った着眼点と手法で異なる成果を出してくれると信じているぞ」

「至高の御方々による信任、重く受け止めております。必ずやお二人がお喜びになる成果を持ち帰ってご覧に入れましょう」

ボロは出なかつただろうか？

特に不審な目を向けられてはいないと思うが、何時までもデミウルゴスの前に居たら看破されるかもしれない。

挨拶は終わったのだからさっさと自室に引き込むとしよう。

そしてエントマと育児について話し合いながら毛づくろいをしてもらい、シクススに邪神系面白画像100連発を見せて反応を楽しむのだ。

薔薇色の時間を思い浮かべ心躍らせるクレーゲルシュライバーは、足取りかるく自室の扉へと向かった。

「あと、もう一点。少々よろしいでしょうか？」

護衛のシモベ達によって開かれた扉をくぐろうとしていたクレーゲルシュライバーは、デミウルゴスのその声にギクリと体をこわばらせ

た。

一体なんの用事だろう？もう挨拶はすんだじゃないか。もしかしたら浮かれているのを見破られたのか？

別に悪いことはしていない筈だが、妙に緊張するのは相手がデミウルゴスだからだろう。

クーゲルシュライバーはその場で振り返ると、努めて冷静な態度でデミウルゴスを見つめた。

「なんだ？まだ用事があるのか？」

「クーゲルシュライバー様を煩わせてしまい申し訳ありません。ですがなにとぞ、お聞きしていただきたいことが」

「そんなに恐縮することはしないでください。私はお前達が思うよりも遥かに寛大だ。言ってみるがいい」

ちよ、ちよつと偉ぶりすぎたかな？

内心でビクビクと怯えながらデミウルゴスを見つめれば、彼はほんの少しだけ肩から力を抜き用件を話し出した。

「第五階層守護者コキュートスがクーゲルシュライバー様との面会を希望しております。是非とも御身が背負う卵を見てみたい、と……」
「なに？コキュートスが私の卵を？」

擬頭を捻り、己の巨大な腹部の上に鎮座する白い包みを眺める。

野生の大蜘蛛「チビスケ」の精子によって受精した自分の卵である。

「そういうえばコキュートスは我々の世継ぎを熱望しているようだからな。一目みたいというのは当然か？」

「まさに仰るとおりです。アルベドからの知らせを受けてからというもの、気になって仕方ないようでした」

「そうだったのか。しかしこの卵が実験用のものであり、世継ぎとは関係ないという事はわかっているのだろうか？」

アルベドからの連絡を受けたのならば、そういう事になっていなければ困る。

そのためにモモンガと一緒にあれこれ考えたのだから。

「勿論コキュートスも私も完璧に理解しております」

「そうか？なら何故特別でもなんでもないこんな卵を見たいと言うの

だ」

「特別な物ではないとはいえ、クーゲルシュライバー様自らお産みになった卵ですから。生まれる御子はクーゲルシュライバー様の子であり、たとえ世継ぎではないとはいえ気に掛かるのでしよう」

「そうか……」

まあ、完璧に理解しているというのであれば問題は無い。

此方の流した虚偽の情報を信じている限り、クーゲルシュライバーとしては何も文句はなかった。

「生まれるかどうかも定かではないのだぞ。あまり期待しても生まれなかった時に気落ちするだけだが……まあいい。コキュートスがそれを望むのであれば応じようではないか」

「申し出を受け入れてくださり感謝します」

「気にするな。ではこれから私は第五階層へ向かうとしよう」

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの力があれば第五階層へ向かうのに一秒と掛からない。

ナザリック内にいる時はいつも装備しているこのアイテムを使おうとした時、デミウルゴスが焦ったように口を開いた。

「お待ちくださいクーゲルシュライバー様！至高の御身にご足労頂くわけには参りません。コキュートス自らが御身の前に馳せ参じますので、どうかお待ちを」

デミウルゴスのその気持ちはわかる。

個人的な願いの為に目上の存在を呼び寄せるのはかなりの抵抗感があるものだ。

しかしリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを持たないコキュートスを第九階層まで呼び寄せるとなると、距離に応じた時間が掛かってしまう。

コキュートスに任せられた仕事の事を考えると、此方から出向くのが得策に思えた。

「しかしなデミウルゴス。コキュートスはこのナザリック地下大墳墓の警護任務についている。そのような重要な仕事をしているあいつを、現場から引き抜くのは気が咎めるのだが？」

「問題はありません。ご許可さえ頂ければコキユートスが抜けたとしても即応できる体制へと移行しますので」

疑問に答えるデミウルゴスの態度は堂々としている。

その様子に嘘などは感じられない。

どうやらデミウルゴスは事前に此方の言葉を予想していたらしい。

流星はナザリックの知恵者と感心するが、それ以上にコキユートスの為に力を貸しているデミウルゴスの友情がクーゲルシュライバーには眩しかった。

彼とて自分を恐れている一人のはずなのに、こうして同僚の為に頑張っている。

唯でさえ良かった自らの機嫌が、さらに良くなっていくのをクーゲルシュライバーは苦笑いしながら感じていた。

「そうか？まあ、防衛に穴が空かなければいいんだ。軍事面に関してデミウルゴスの言を疑うことなどしないさ。よし、コキユートスを呼ぶがいい」

「ありがとうございます。では早速コキユートスに連絡を」

そういつて一礼の後、下ろうとしたデミウルゴスに擬腕の掌を突きつけ待ったをかける。

即座に動きを止めたデミウルゴスではあったが、その表情には疑問が浮かんでいる。

そんなデミウルゴスに対し、クーゲルシュライバーは小さくない緊張を機嫌の良さでごまかしながら、穏やかな口調で話しかけた。

「折角コキユートスと呼ぶのだ。デミウルゴスともしばらく会えなくなることだし、場所は副料理長のバーにしよう。壮行会をかねてな」

「なんと……！私如きにそのようなお気遣いは無用でございます！」

「そんなに気にしないでくれデミウルゴス。私が酒を飲みたい気分なんだ。すこし付き合ってくれ」

こういわれてはデミウルゴスも断れまい。

そう思っ放たれた言葉は、果たしてその通りの結果をもたらした。

「わかりました。クーゲルシュライバー様のお心のままに」

そう言うデミウルゴスは、上司からの飲みの誘いを断れなかった、という雰囲気ではなかったと思う。

その反応に少しは喜んでもらえたのかなと軽い満足を感じつつ、クーゲルシュライバーは自室から一転、バーへ向かって歩き出した。「それじゃあ待っているからな。余り急がずコキユートスを呼んでくるがいい」

背後にデミウルゴスがお辞儀する気配を感じながら、クーゲルシュライバーはその場を後にした。



「大変才待たせシテ申シ訳ゴザイマセン」

謝罪と共に開け放たれた扉から冷気が室内へと滑り込んでくる。

真夏に冷凍庫を開けたかのような感触を室内照明によって輝く甲殻で受けながら、クーゲルシュライバーは擬腕をヒラヒラと振った。

同時に、甲殻に感じるものとは対照的なえらく熱の籠った視線を自らの腹部に感じる。

「気にする事はないぞコキユートス。さあまずは座るんだ。そして乾杯しよう」

そう言うクーゲルシュライバーの隣には既にデミウルゴスが着席している。

三つ揃えのスーツを着こなし、銀の眼鏡を煌かせるこの悪魔は、ただ座っているだけで様になっている。

室内の雰囲気完全に味方につけている伊達男を隣に置いて、自分はカウンターチェア4脚を占有しふんぞり返ると言う恥辱。

決して表には出さなかったが、精神が抑制されるギリギリのラインの恥ずかしさと敗北感、そして僅かな嫉妬に苛まれる時間がコキユートスの到着によってようやく終わったのである。

クーゲルシュライバーの声は喜びに弾んでいた。

「お互い巨体だからな。少し席を離さねばならないが……コキユートス？」

「失礼イタシマス」

ボールのように弾んでいたはずの音が途中で萎み、最後には困惑へと変わった。

クーゲルシユライバーの視線が着席したコキユートスと自分が座っている席とを行き来する。

「コノ度ハ私ノ我俣ヲ才聞キクダサリ、アリガトウゴザイマス」

「いや、待て。待つのだコキユートス。お前は……なぜそんなに離れているのだ？」

1、2、3……遠い。

クーゲルシユライバーはコキユートスと自分の間に存在する椅子を数え軽くシヨツクを受けた。

あからさまに距離を置かれている。

コキユートスはあろうことか、クーゲルシユライバーから最も遠い席へと着席したのだ。

なにか嫌われるような事でもしただろうか？

記憶を探るも思い当たるものはない。

しかしシャルティアのような事もある。クーゲルシユライバーは必死に頭を働かせていた。

「御卵ガ私ノ冷氣デ冷エテ、万ガ一ガアレバ一大事デ御座イマス。コノ席デドウカ御容赦ヲ」

「あ、ああ！そういうことか。露骨に避けられているから何事かと思っただぞ」

全く心臓に悪い。

心の中で悪態をつきながらもクーゲルシユライバーは胸を撫で下ろした。

コキユートスが距離をとったのは、妊婦の体を冷やさないようにする、といった類の思いやりから来たものだったらしい。

「常時発動型特殊技術ハ切ツテイルノデスガ、生来ノ冷氣ハドウシテモ消セズ。コノヨウナ身デ身重デアラレル御身ノ前ニ立ツノデアレバ細心ノ注意ヲハラワネバ……」

「あー、いや、大丈夫だコキユートス。そこまで気を使わなくとも私の

卵は丈夫だからな」

無口なイメージだったコキユートスが次々に言葉を連ねるのを見てクーゲルシュライバーは困惑した。

なにかこう、興奮した人が捲くし立てるような雰囲気だ。

もつと限定的に言えば、新婚家庭において初めての子供が出来たことを聞いた後の夫か、祖父母のような。

そんな過保護な気配がコキユートスから滲み出ている。

そこまで気を使うことはないのに、とクーゲルシュライバーは思う。

自らが背負う卵がかなり丈夫なことは事実だ。

魔法系の毒としては最高峰である《ブラッド・オブ・ヨルムンガンド》が満ちている宝物殿を、クーゲルシュライバーと共に通り抜けてもなんの影響も受けなかった卵なのである。

まだ生命としてカウントされておらずトラップオブジェクト扱いで毒が効かなかったのか、それとも周囲を包む卵囊のおかげで毒から守られたのかは分からないが、コキユートスが平常時に放つ冷気程度はなんの問題にもならないように思えた。

しかし。

(でもこういう気遣いって悪くないなあ。ちよつと鬱陶しいかも知れないけど、大事にされてるって感じでなんか良い)

この卵はクーゲルシュライバーにとって情が間欠泉の如く湧き上がる大切なものである。

心底無事誕生することを願う卵を気にかけてくれるコキユートスの態度は好ましいものだった。

熱望する「至高の存在の世継ぎ」ではないと理解しているのにこの対応を出来るコキユートスは中々のナイスガイだ。

もしかして、単純に赤ん坊が好きなのだろうか？

なんだか転移初日に見たときよりもコキユートスの事が男前にさえ見える。

自らの美的感覚が節足動物を鼻屑しはじめているようで何処か薄ら寒い気持ちもあるが、概ねクーゲルシュライバーはご機嫌だった。

「ナリマセン！ドレホド丈夫デアロウトモ、万難ヲ排ス事ガ肝要デス。ムウ！我が身ノ氷柱ヲ削ツテ来タトイウノニ、モウ生エテイル！コレデハ冷氣ガ！自然回復ガコレホドマデニ煩ワシイトハ！」

「まてまて!? お前もしかして冷氣抑えようと自分の体削ってきたのか!?!」

「左様デ御座イマス」

「左様で御座いますじゃないわタワケ！思いやりで自傷行為されたんじゃないたまらんわ！」

思いもよらない事実には直面して声が大きくなってしまった。

コキュートスとは顔を合わせる機会が少ない為に気付くのが遅れたが、確かによく見ると彼の身体のおちこちにある氷柱が歪な形をしている。

そして妙に鋭利な断面をしている事から察するに、コキュートス自慢の武器「斬神刀皇」で自ら切り削ったに違いない。

思いやつてくれるのはいいのだが、これは流石にやり過ぎであり、やり過ぎな思いやりは単なる迷惑に過ぎない。

そのこの辺りをどうかわかって欲しいクーゲルシュライバーだったが、NPC達の性質から中々難しそうな望みなのかもしれないと半ば諦める気持ちもあった。

「申し訳アリマセン。シカシ……」

「わかった、わかった！まったくコキュートスは心配性だな。その気持ちだけは受け取っておくから、さあ、グラスを持て。乾杯しよう」
空気と化していた副料理長が差し出したワイングラスに手を伸ばす。

内部で美しい赤が揺れている事から赤ワインなのだろう。

ワインという高尚な酒の知識は全くないが、ナザリックで出されるものなのだからきつと最高級のものに違いない。

内心涎を垂らしワインを見つめるクーゲルシュライバーだったが、隣に座るデミウルゴスは疎かコキュートスまでもが極自然にグラスを受け取って持っている。

がつついているのは自分ひとりだと知ってクーゲルシュライバー

は酷く恥じ入った。

そしてそれを隠すようにグラスを擬腕で掴んだ。

「デミウルゴスの任務成功と無事帰還を願って。乾杯！」

三つのグラスが憤ましく掲げられる。

居酒屋の癖でついついグラスを打ち合わせようとしてしまったクーゲルシユライバーだったが、100レベル相当の素早さに由来する動体視力によって他の二人がグラスを掲げる動作を取っている事に気付कि自らもそれに倣った。

思わぬところで無教養を晒すところだったと冷や汗を流しながら、グラスに口をつける。

芳醇な、とにかく美味しいとしか形容できない液体が口内に流れ込んでくる。

その味はクーゲルシユライバーの心を僅かなりとも落ち着けてくれた。

「クーゲルシユライバー様。このような場を設けていただき、身に余る光栄に御座います。必ずやご期待に応え、ナザリックに帰還する事をお約束いたします」

「はははは。大げさだなデミウルゴスは。さっきも言ったが、私が酒を飲みたかっただけだ。そんなに畏まる事は無いのだぞ？」

「それでも、で御座います。至高の御方とこうして酒を飲み交わすなど考えられない事でした。ましてや至高の御方々の為に作られたこのバーで」

「そうか？いや、まあそうだな。私もこうしてお前達と酒を飲む日が来るなんて思いもよらなかつた」

考えてみればおかしなものだ。

ゲーム中のNPCとこうして肩を並べて酒を飲むだなんて、夢の出来事のようなだ。

シクススと酒を飲んだときにも思ったことではあるがそう思わざるを得ない。

きっとこうした場がある度に自分はそう思うのだろうなど、クーゲルシユライバーは遠くを眺めるような眼で思考に浸っていた。

「……」

「……」

「ん？どうした二人とも。そんなに見つめられると照れるぞ？」

神妙な顔で——どちらも表情がわかりにくいのだが——こちらを見つめる階層守護者達の視線に気付いたクーゲルシュライバーはおどけながらそう言った。

それに対するデミウルゴスとコキユートスの反応は何かに堪えるような、喉になにかつかえているようなものだった。

「イエ、失礼シマシタ。ナンデモ御座イマセン」

「不躺な視線、失礼いたしました」

「んー？……まあ別に気にしてはいないが」

なんでもない訳ではないだろう事はクーゲルシュライバーにも分かっている。

しかしあえて深く聞く必要があるかというところではないように思えた。

故に話を変える。

「それで、コキユートスはこの卵が見たかったんだな？どうだ、実際に見た感想は」

「ハイ！誠愛ラシク、ソレデイト途方モナイ可能性ヲ秘メテオラレルカト存ジマス！流石ハ至高ノ御方ノ御子、誕生ガ待チ遠シクテ堪リマセン！」

「愛らしく？可能性？孵化していないのにそんな分かるのか？デミウルゴスはどう思う？」

「……私は卵に関する審美眼を持たないので実際の愛らしさというのは理解しかねます。しかしクーゲルシュライバー様の御子と見れば、コキユートスの言うとおりで大変愛らしく可能性に満ちた卵かと存じます。誕生が待ち遠しいですね」

「そうか」

「そうか。そうか。そうか。そうか！」

口の中で何度も呟くクーゲルシュライバーの心は、完璧に浮かれていた。

即座に精神が抑圧される程度には浮かれていた。

落ち着いた頭で自己分析してみれば、どうやら自分は親馬鹿になっているらしい。

その事実が自分でも驚くほどあっさり飲み込めてしまい、これは処置なしだと確信した。

自分の卵が褒められるのがたまらなく嬉しい。

そしてナザリックのシモベの中でも高位に位置するデミウルゴスとコキュートスが、我が愛し子達の誕生を心待ちにしてくれているという現実が嬉しい。

これまで表情の存在しない我が身に感謝した事は数あれど、今日ほど深く感謝した日は無い。

もしも今この時自分に表情があつたら、無表情を装うことなどできずデレデレとだらしのない笑みを部下に晒す事になっただろう。

いや、もしかすると表情が無くとも仕草に表れているかもしれない。

そう思いあつたクーゲルシュライバーは、冷静を装うためにと口を開いた。

「あー、何度も言うがな？この子らが生まれてもだな？後継者がどうか、そういうんじゃないからな？あくまで検証の一環で、戦力の足しにするとか、そういうのだからな？」

ダメだこれ全然冷静装えてない！

ニヤついたような口調とセリフからは、浮かれ切った心情が露骨に滲み出ている。

そんなクーゲルシュライバーに対して、階層守護者の二人と副料理長は暖かな視線を向けてくる。

デミウルゴスは眼を閉じており、コキュートスは複眼で、副料理長にいたっては目がないが雰囲気的にきつとそうだとクーゲルシュライバーは確信していた。

「無論ワカッテオリマス。サレド至高ノ御方ノ御子ニハ違イハアリマセン。御誕生マデ、ソシテソレカラ先モ、コノコキュートスガ命ニ代エテモ奥方様ト若様姫様方ヲ御守リシマス」

「え、奥方様？」

聞き捨てなら無い単語に思わず声が出る。

奥方様、というのはつまり妻とかそういう意味だ。

するとなんだ？コキユートスはこの卵に、父親がいると考えているのだろうか？

蜘蛛のチビスケの存在が露見したのかと、クーゲルシュライバーの浮かれた思考が一気に冷え込んだ。

どうということだと問いたただそうとするクーゲルシュライバー。

だが、その前にデミウルゴスが口を開いた。

「おいおい、待ちたまえコキユートス。こちらの卵はクーゲルシュライバー様がスキルで生み出したものじゃないか。にも拘らずクーゲルシュライバー様を奥方様と呼ぶのは正しくないと思うのだがね？」
「ムウ。ソノ通りだ、デミウルゴス。失礼シマシタクーゲルシュライバー様。御身ガ卵ヲ才産ミニナツタツイウ事ニバカリ気ヲ取ラレ、ツイ」

申し訳なさそうに頭を下げるコキユートス。

卵を産むのは雌の仕事であり、その雌が上位者だったから「奥方様」という呼称を使った。

つまりはそういう事なのだろうか？

そう問いかけてみればコキユートスは2.5メートルはある巨体を更に縮めて、コクリと頷いた。

肩の力がドツと抜ける。

そういうことなら、問題は無い。

「まったく、何事かと思っただぞ」

「面目次第モアリマセン」

「まあ気にするな。それでコキユートスよ。守ってもらうのも勿論嬉しいのだが、私としてはこの子達には戦力として期待している部分がある。孵化してからしばらくは守るついでに鍛えてもらいたい感じなんだが」

「ヤリマス！是非、ヤラセテイタダキタイ！」

「うおっ!？」

突如店内に響いたコキユートスの大声に体が跳ねた。

しまったと思った時には既に遅く、擬腕に持ったグラスから酒が零れ、カウンターと体の一部を濡らした。

「おおっと、気にするなよコキュートス。私は気にしない」

口元の大顎を引きつらせて席から立ち床へ膝をつこうとするコキュートスを片手で制止しつつ、クーゲルシュライバーはグラスをカウンターに置こうとする。

その直前に、副料理長が驚くべき素早さとタイミングの良さでカウンターをお絞りで拭き清めた。

続けて新品のお絞りを広げクーゲルシュライバーに差し出してくる。

これで体を拭けという事だろう。

副料理長の早業に賛辞を送りつつ、差し出されたお絞りに手を伸ばす。

その時だ。

横合いから、見るからに高級そうなハンカチが差し出された。

「どうぞお使いください」

差し出しているのは微笑を浮かべたデミウルゴスだった。

彼の左胸にあるポケットチーフの姿がないところから見ると、差し出しているのはどうやらソレらしい。

クーゲルシュライバーの擬腕が左右に彷徨う。

折角デミウルゴスが厚意で差し出してくれたのだから、副料理長のお絞りよりもそちらを取るべきだとは思ふ。

しかし、差し出されている布はシルクのような光沢を放っており一目で見ても高級品だと分かる一品だ。

そして色は純白。

零した酒がポリフェノールを含む赤ワインだという事を考えると、これを使うのは躊躇われた。

「いや、折角だがデミウルゴス。こんな高級なものを使うのはもったいないと思うのだが」

「御気になさらず。至高の御方には常に最高の物をお使い頂きたいのです」

クーゲルシュライバー様の玉体を拭うには、副料理長のお絞りは些か以上に力不足でしょう。

デミウルゴスの言葉を、少し嫌味っぽくないか？と思いきクーゲルシュライバーは副料理長を見やる。

だが副料理長はデミウルゴスの言葉にその通りだとばかりに頷いて、手に持ったお絞りを引っ込めてしまった。

こうなればもうデミウルゴスのポケットチーフを使わざるを得ない。

「では使わせてもらおう。ありがとうデミウルゴス。洗濯して後で返す……って今晚からいなのだったな。ではお前が帰ってきたら返すので構わないかな？」

「勿論でございます。むしろ、そのまま捨ててもらって構いません」

「いや、それは流石にどうかと思うぞ」

返却の手間を省略しようというデミウルゴスの気遣いなのだろうが、流石に承服しかねる。

渡されたハンカチは洗濯してアイロン掛けて返すのがフィクション、ノンフィクション問わずのお約束なのだ。

「洗濯して返すから、ちゃんと帰ってくるんだぞ。形見のハンカチとかにならないと困るんだからな」

「クーゲルシュライバー様を困らせるわけには参りませんね。必ず戻りますとも」

堂々と、どこか誇らしげに言い切るデミウルゴス。

その姿を見ていると、羨ましいやら頼もしいやら、様々な気持ちが沸き起こってくる。

自分もこんな立派な男だったなら、という劣等感すら覚える。

「それにしてもデミウルゴスは凄いな。より良いものを差し出そうと、いうその忠誠心、そして完璧を求めようとする姿勢。私も完璧主義者だと言われることもあるが、お前の方がよっぽど完璧主義者なのではないか？」

「ご冗談を。私などクーゲルシュライバー様に比べれば粗ばかり。より完璧なものを目指してはおりますが、御身を越えるなど夢のまた夢

でしょう」

「果たして本当にその通りかな？まあいい。なんにせよお前の姿勢は素晴らしいものだ。その姿勢を忘れずに精進していつてくれ」

「承知いたしました」

体を拭き終え、クーゲルシュライバーはハンカチをアイテムボックスへと仕舞う。

そしてグラスに残った酒を飲み干すと、左の擬腕に巻いた時計を見た。

「そろそろ時間だな。私はこれからやる事があるので部屋に戻るが、二人はゆっくりしていつてくれ」

歩脚を動かし、椅子から降りるとクーゲルシュライバーは出口へと向かう。

途中、コキュートスがしょんぼりとした雰囲気で見ているのに気付いたクーゲルシュライバーは出口前で立ち止まる。

本当はコキュートスの前まで近づきたいところだが、自身の放つ冷気を気にする彼の事、より一層恐縮させるだけだろう。

「コキュートス。そう気にするな。私はなにも怒ってなどいない」
「シカシ……」

「しかしもかかしもあるものか。そんな事気にするなら、ナザリック防衛や我が子が孵化した時の事でも考えるんだな。さっきのは冗談ではないんだぞ？」

「ハッ！ハハアッ！」

そう、子供が孵化したらコキュートスに子守をしてもらおうというのは冗談ではなく本気だ。

同じ節足動物であるし、恐怖公や餓食狐蟲王と親しいというコキュートスならば子守役には最適だろう。

いや、本当に最適なのは^{アラクノイド}蜘蛛人であるエントマなのだが、彼女には彼女の卵がある。

既に共に子育てをする仲間として認識してしまっているエントマには、あまり負担をかけたくなかった。

「ああそうそう、今後はお前たちもこの店に来ていいからな？マス

「ターも問題ないだろう?」

「至高の御方がよろしいのであれば、何の問題もございません」

こう言うのはデミウルゴスがこのバーを「至高の御方々の為に作られた」と言っていたからだ。

もしかするとギルドメンバー限定の店であり、NPCは使っていないかと思っているのではないかと考えたのだ。

デミウルゴスはなにか勘違いしているようだが、別にこの店はギルドメンバー限定という訳ではない。

かつてのギルドメンバーである「館ころもつちもち」が創造したNPCである「エクレア・エクレール・エイクレーア」には時々このバーに顔を出すという設定があったはずだ。

それはつまりNPCが入店することは至高の存在によって許されている、という事である。

「デミウルゴスは出張だからしばらく利用は出来ないだろうが、コキユートスは気が向いたら来てみると良い」

それだけ言うと、クーゲルシュライバーは背後から飛んでくるデミウルゴスとコキユートスの感謝の言葉を最後まで聞く事無く扉を開いた。

早く自室に行つて監視体制を整えねば、重要な場面を見過ごしてしまうかもしれないからだ。

「ではな」

その言葉と共に、クーゲルシュライバーは外にでて静かに扉を締めた。



「さて、と」

至高の存在であるクーゲルシュライバーが退室し、光量が減じたように感じる室内をデミウルゴスはエレガントな歩みで移動する。

手に上質なワイングラスを持った彼は、カウンターの端、つまりはコキユートスの座る席まで来ると、その隣に腰を下ろした。

「おめでとう、コキユートス」

「デミウルゴスッ！」

差し出したグラスにコキユートスが小刻みに震えるグラスを打ち付け、キン！という澄んだ音が鳴る。

全身を震わせるコキユートスに微笑みを向けながら、デミウルゴスは天上の美酒を呷った。

美味い。

これほどまでに美味しい酒は、たとえ人間の国をこの上ない裏切りと疑心によつて滅ぼしたとしても味わえるかどうか。

デミウルゴスは先程の体験を思い出して身を震わせた。

「私ハ、オ前ニ対スルコノ感謝ヲ言葉ニスルコトガデキナイ。ナント言エバ全テ伝ワルダロウカ」

「気にしないでくれたまえ、友よ。言葉にせずとも全て分かっているさ」

そう、全て分かっている。

誰よりも世継ぎの誕生を望み、それを守護することを望んでいたコキユートス。

その二つの望みが叶った喜びの程を察するのは容易な事だ。

そしてその喜びに比例する感謝の程も。

「しかし私は場を作ったに過ぎない。真に感謝すべきは、君の望みを叶えてくれた至高の御方々だ。それを忘れてはいけないよ？」

「無論ダ。無論ダトモ。ダガソレデモ、感謝スルゾデミウルゴス。コレデ私ハモウスグ爺ダ！オオ、若様！姫様！必ずヤ爺ガ御守リシマスゾ！」

興奮気味に立ちあがったコキユートスの脳内では様々な未来絵図が展開されていた。

卵から生まれたばかりの透き通った体をした小さな蜘蛛達が母親であるクーゲルシユライバーの背中に乗って眠っているのを見つめる自分。

脱皮を繰り返して大きくなってきた子蜘蛛達の吐く糸によつてグルグル巻きにされる自分。

やんちゃを繰り返す子蜘蛛達にある日突然迫る危機。それに敢然と立ち向かい剣を振るう自分。

傷ついた自分に心配そうに駆け寄る姫君達と、自分の剣技に魅せられ稽古をねだる若殿達。

「ナンノコレシキ、傷ノ内ニモハイリマセヌ！姫様心配メサレルナ、爺ハコンナニ元氣デスゾ！アア若様、ソナニ強請ラレテモ困リマス。マズハ奥方様ニオ伺イヲ立テネバ」

「あー、うん。君が幸せそうだなによりだよ」

腕を振り上げ妄想にふける友人に呆れながらも、デミウルゴスは心の底から笑っていた。

アルベドから事の真相はすでに聞いている。

今のところ至高の御方々はあの卵から生まれる御子を世継ぎにとは考えてはいないようだが、態々バレバレの偽装を施しているのが気に掛かる。

至高の御方々の深遠な考えを察することはできないが、もしかすると、という事も十分有り得るだろう。

デミウルゴスの望みもまた、コキュートスと同じように叶うかも知れないのだ。

これが嬉しくないはずが無い。

「誕生が待ち遠しいですね」

「同感だー！」

本当に誕生が待ち遠しい。

忠誠を尽くす相手がいれば、忠誠を尽くす為に作り出された者達は存在できるのだ。

存在理由をそのままに、いつまでも、いつまでも。

それはとても喜ばしいことなのだから。

36話

ンファイアとその護衛の一行はまだ日の高い内に平原で野営の準備に取り掛かっていた。

新たに一行に加わった森の賢王も含め、各自が分担して野営地の設営に取り組んでいる。

モモンが黙々と構築しつつある鳴子による警戒網の内側では杖を持ったニニヤが《アラーム／警報》という警戒用の魔法を行使しながら歩き回っている。

広範囲をカバーする事は出来ず、いつもなら念のため程度に行使用する魔法だが、森の賢王の精神に干渉できる何者かに狙われている可能性が非常に高い現状では気休め程度の警戒とて怠れない。

真剣な表情で杖を掲げながら歩くニニヤ。

その後ろには掲げた短杖を不気味に輝かせるミュールが続く。

より強固な警戒網を形成するためにとミュール自らが協力をかってでたのだ。

なお、二人と同じ魔法詠唱者であるナーベは警戒に使えるような魔法を習得していないという事で別の仕事を任されている。

「ミュールさんはどんな魔法を？」

顔色を窺うようにチラリと振り向いたニニヤがミュールに問う。

相手の出方を窺うようなことなく気弱な声に対し、ミュールはいつも通りの柔和な声で返答した。

「ニニヤさんのとそう変わりませんよ。非実体のモンスターみたいに発見が困難な相手を感じする事のできる魔法です」

ミュールはにっこりと笑いながら嘘をついた。

ミュールにはそのような効果を持つ魔法は使えない。

杖が光っているのは、ただ単に怪光線魔法を発射直前の待機状態にしているだけだ。

なぜ嘘をつき演技までしているのかというと、ニニヤと同じ役割の仕事を受け持つ事で二人きりの状況を作りたかったからだ。

ミュールはクーゲルシュライバーからニニヤと良好な関係を築く

ようにと命令されている。

絶対の主人である至高の41人の役に立つことはナザリックに属する者に共通する存在理由であり、至上の喜びだ。

たとえばそれが下等生物である人間相手にみじめなやきもちを妬いてしまうような命令であつても、ミュールは主人に忠実だった。

(モモンガ様のお力添えのおかげで随分とクーゲルシュライバー様と会話出来るようになったし、お役に立つことができれば、いつかまたあの時のように可愛がつて頂けるように……)

クーゲルシュライバーから様々な服や装飾品を与えられ、髪を梳かされ、優しい言葉をかけられ愛でられていたかつての黄金時代を思い描きミュールの心は蕩けそうになる。

今は、違うけれど。

だからこそ、またいつか。

渴望に焦がれるミュールはニニヤにそれを悟らせることなく、命令遂行の意欲を燃え上がらせていた。

「なるほど。実体を持たないアンデッドなどのモンスターは脅威ですからね。わたしの魔法では接近を察知できても居場所の特定はできないので……そういった手合いが来た場合、ミュールさんにお任せしてもいいでしょうか？」

「勿論です。私はクレリックでもありませんから、そういう敵の相手には適任でしょう」

対処可能であることは確かだが、適任ではない。ミュールはまた嘘をついた。

ウォーロックとクレリックの複合職であるエルドリッチ・デイサイプルを取得しているミュールは確かにクレリックの使うような信仰系魔法を使うことができるが、アンデッド退散に利用できるような神聖な善の魔法は使えない。

NPCの設定としての信仰対象はクーゲルシュライバーだが、ゲームシステムのミュールが信仰の対象としているのはシャルティアなどと同じ邪神系の神格だ。

悪に偏った神を信仰する者は邪悪を助長する魔法に習熟している

が、逆の属性を持つ善の魔法は使用できないのである。

そしてそれが常識だから、ニニヤはミュールの嘘を見抜くことが出来なかった。

「第二位階魔法《ミドル・キュアウーンズ／中傷治癒》が使える優秀な神官がいてくれるのは本当に心強いです」

ニニヤは貼り付けたような笑みで、しかし本心からの言葉を口にす
る。

特殊監察官という役職に就くミュールからしてみれば仮面として不完全な笑みだったが、全く気にした様子は見せず笑顔で会釈する。目論見通りに事が進んでいることを内心でほくそ笑んでいるのを一切悟らせない完璧な笑顔の仮面で。

ニニヤはミュールがアンデッドに有利な善のクレリックであるとすつかり勘違いしていた。

これは善の魔法に代表される回復魔法を実際に使用しているのだから常識的に考えてそう思うしかなかったのだ。

ミュールは生者を癒すキュア系魔法よりも、生者を脅かしアンデッドを癒すインフリクト系魔法を得意とする悪のクレリックだ。

通常ならばキュア系魔法を使用できないのだが、そこは廃人犇めくアインズ・ウール・ゴウンのNPC。

悪のクレリックでありながら善の魔法を使用可能にする抜け道を創造主たるクーゲルシュライバーが把握していないわけがなかった。「いえ、そんな。私のクレリックとしての技量なんて中途半端なものですから」

「謙遜することないですよ。ミュールさんは第二位階魔法まで使えるんですから間違いなく一流です」

それに、と羨望と微かな嫉妬が混ざった目でミュールを見ながらニニヤは続ける。

「神官として一流なうえに、魔力系魔法詠唱者としてもミュールさんは一流なんですから。もっとモモンさんのように自信を持っていいと思いますよ」

自らの力に絶対の自信を持つ漆黒の戦士モモン。

モモンの戦闘力を目の当たりすると、確かにミュールが謙遜するの
もわからないわけではない。

しかしそれは比較対象が凄まじすぎるだけで、別系統の魔法を高い
次元で使いこなすミュールの実力は誇ったとしても許されるものだ。
そう思ったから出てきた言葉に対し、ミュールは微かに苦笑すると
いつも通りの笑みを浮かべてニニヤに近づいた。

「ねえ、ニニヤさん」

「は、はい！なんでしょうか？」

突然距離を詰めてきたミュールにニニヤが慌てる。

背の低いニニヤの耳元に囁くように身をかがめたミュールからは、
ルクルツトが絶賛したかぐわしい花の香りがした。

花の香りに混じったミュール自身の髪の毛の香りが嗅覚を官能的に撫
でますり、ニニヤは驚き以外の理由で心臓の鼓動を速めた。

「本当は何か別に言いたいことがあるんでしょう？」

「あつ……」

油に濡れたような艶やかに潤う唇が動き、ゾクゾクするような吐息
が耳にかかってニニヤは頬を赤く染めた。

官能を感じたから、だけではない。

ミュールに自分の心を見透かされていた事に気づいてニニヤは羞
恥を感じていた。

「な、なんで？いつわかったんです？」

「結構最初の頃に。二人きりになってから何度かニニヤさんの視線を
感じたものですから。言いたい事があるのかなと思えば何も言わず
……何か言いにくい事があるんだなと思ったんです」

意外とわかりやすいですね、と笑うミュールをニニヤは頬を染め
ながら恨めしげに睨んだ。

実のところニニヤはミュールに本題を伝えるために色々と苦悩し
ていた。

ミュールに魔法の事を尋ねたのも話し出す切っ掛けを得るための
策だったのだ。

それなのにミュールは早々にニニヤの葛藤に気づいていたという。

もつと早くに言いだしてくればよかったのに、という言葉を飲み込んでニニヤは観念したように肩の力を抜いた。

「漆黒の剣の皆さんには隠しておきたいことなんですよね？」

「……はい」

優れた聴力の持ち主であるルクルツトを警戒してニニヤは慎重に言葉を選ぶ。

そして俯きながら、そよ風でかき消されてしまいそうな小声で話し始めた。

「森の賢王と戦った時、ミュールさんに抱き起こして貰いましたよね。だからお気づきだと思っんですが」

精神を攪乱された森の賢王の致命の一撃を受けそうになって倒れたニニヤはミュールによって抱き起され戦闘に復帰した。

その時、ニニヤはミュールの両手が自分の脇を通して前へと回され胸部を掴んだ事をあの急場での出来事であるにも拘らず覚えていた。

そしてその時の事はミュールもしっかりと覚えていた。

両手に残る確かな膨らみの柔らかさと共に。

「わたしの体の事は内緒にしています。冒険者として、漆黒の剣の一員として姉さんを探すために、どうかお願いします」

ミュールから距離をとり頭を下げるニニヤからは必死さと真摯さがあふれ出ていた。

その姿をみるだけで、どれほど女である事を知られたくないかが窺い知れる。

男だらけのチームの中に一人だけ女がいると揉め事に発展しやすいというのは冒険者の間では有名な話だが、考えてみれば誰にだってわかる事でもある。

ミュールは冒険者達のジンクスに詳しくはないが、ニニヤが性別を偽る理由についてはあたりがついていた。

だからふと疑問に思う事がミュールにはある。

「それは構いませんが……わざわざ隠す事もないのでは？」

「いえ、そうはいきません。ミュールさん達のチームは問題ないようですが、私達のチームは揉め事を恐れて女性は参加させないようにし

「ているんです」

「あら、そうなんですか？」

意外そうなミュールの口調にニニヤは考える。

日頃の会話の中で異性のチーム参加を快く思っていないような発言がちらほらと散見されるのは確かだ。

しかしチームの決まり事として女性の参加を拒むといったものは無いのも事実だった。

「でも漆黒の剣の皆さんなら、ニニヤさんの事を知っても追い出したりはしないと思うのですが」

もしかしたらそうなのかもしれない、とニニヤも思う。

冒険者として長い間チームを組み育んできた仲間との友情と信頼がそう思わせる。

だがそれでもニニヤは自分が女だと明かすつもりはなかった。

この世界は女だからという理由だけで不幸になる機会が満ち溢れている。

自分の姉がそうであるし、その手の不幸の犠牲者は冒険者として活動する中で実際に目にしたり話に聞いたりしていた。

だからニニヤはそういったものを嫌悪し、そして恐怖していた。

「そうだとしても、お願いします。どうかこの事は内密に」

「そうですか。わかりました。決してこの事は口外しません」

ミュールの返事にニニヤは安堵のため息をついた。

森の賢王との戦闘からずっと気を揉んでいた案件が片付いたのだからそれも当然だろう。

「ありがとうございます。このお礼はいつか必ず」

「お礼だなんてそんな。気にしないでください」

「そう言わず。ミュールさんは命の恩人でもあるのでお礼はさせてください」

譲らないニニヤにミュールは苦笑する。

ミュールはニニヤの表情に頑固なものがあるのを確認すると、内心で舌なめずりしながら口を開いた。

「……でしたら、私とお友達になっていただけませんか？」

「え、友達、ですか？」

意外だったのだろう。

目をパチクリと瞬かせるニニヤにミュールは説明する。

「もうお気づきかもしれませんが私たちはこの国の人間ではありません。そのうえ冒険者としてもまだ駆け出し。ですからこの国の冒険者であり銀のプレートを持つ漆黒の剣の皆さんとは仲良くしたいんです」

ニニヤはミュールの言いたい事を理解した。

つまりミュールはニニヤを漆黒の剣との繋ぎとしたいのだ。

そうして王国での活動をするに当たって必要な情報や協力を得ようしている。

向こうに実利がある以上お礼としては十分に成り立つだろう。

(それにこれはわたし達にとっても素晴らしい申し出だ)

ミュールの所属するチームは今は無名だが、間違いなくアダマンタイト級の實力を持っている。

そう遠くない内に胸の銅のプレートがアダマンタイトのプレートへと変ずるのは間違いない。

そして彼女らがアダマンタイト級冒険者となった時、その友人であるというのはとてつもないアドバンテージになる。

もしかすれば銀級冒険者にも拘らず友人関係によってアダマンタイト級冒険者の助力を得られる事もあるかもしれないのだ。

ミュールの提案はまさに両チームにとってwin-winであり承諾しない理由が無かった。

「願ってもない事です。わたし程度でいいのでしたら是非友達になってください」

ニニヤがそう言えばミュールはフードを脱いで素顔を露わにした後に微笑んだ。

花がほころぶような笑顔にニニヤもついつられて素の笑顔を見せる。

ニニヤはミュールと友達になる事をチームや自分の利益だけに注目して承諾したわけではない。

ミユールと接しその人柄に触れ純粋に友達になりたいと思ったのだ。

姉によく似たミユールに面影を重ねていないとは言えないが、それでもニニヤは純粋な気持ちで頷いたのである。

「よかった！断られたらどうしようかと……それじゃあニニヤさん。改めて、これからもよろしくお願いしますね？」

「はい。よろしくお願いしますミユールさん」

互いに手を取って二人は笑いあう。

両者とも裏表のない素直な笑顔で。

（これでクーゲルシユライバー様に与えられた任務は大幅に前進した。ああ、ご覧になっていいのかしら？いまミユルアニスはあるあなた様のお役に立っています！）

素直に笑うミユールは心の中で主人に語り掛ける。

しかし彼女は知らない。

主人であるクーゲルシユライバーは今、ナザリック地下大墳墓第九階層のバーでデミウルゴスとコキュートスと一緒に酒を飲んでおり、忠実に仕事をこなすミユールをまったく見ていないという事を。

そんな事を知らないミユールはいつ主人からお褒めのテレパシーが飛んできて嬉しみに取り乱さないよう気を張りながら、ニニヤからモモンガの為にそうなる情報を雑談という体をとって収集しつつマーキーテントへと向かっていった。

「そんじゃ森の賢王に名前を付けるのはモモンの旦那の仕事って事で決まりとして、飯の準備が出来たから外の五人を呼んできてくれない？つと、三人になったな。お疲れミユールちゃん。ニニヤもな」

「一体なんの話をしていたんです？」

マーキーテントに作られた竈で料理をしているルクルツトにニニヤが問いかける。

ルクルツトの隣にいるモモンは腕を組みながら森の賢王を眺めなにやら難し気に唸り声を上げていた。

「いやさ、いつまでも森の賢王森の賢王って呼ぶのもなんだかなって話がでてさ。本人も改名に乗り気だったしここは一つ倒した張本人

に名づけ親になつてもらう事になつたわけよ」

「出来る事なら遠慮したいのですが……」

心底嫌そうな声で喋るモモン。

そんなモモンに森の賢王が嘆願するような声を上げながら縋り付いた。

「そんなあー。それがし、名づけられるのであれば絶対に殿がいいでござるー！どうかそんなつれない事いわないで欲しいでござるよお」
「むう……」

縋り付く森の賢王を見て唸るモモン。

そんな様子を見るナーベの顔はなぜか誇らしげだ。

(必死に嘆願する姿を見て誇らしげにしてるんだらうけど、ここはモモンガ様を煩わせる獣を叱りつけるのがメイドとして正しいのではないかしら?)

ミュールはそう思うものの何かする事は無かった。

どちらもナザリックの存在にとっては正しい事のように思えたからだ。

どちらを選ぶかは個人によつて違ふだろうし、なによりこの場で突つつくべき事ではない。

「まあ、考えておきましょう。しかしあまり期待しないでいただきました。では、ンファイーレアさん達を呼んできます」

「私が参ります、モモンさん」

「うえー、ナーベちゃん行つちやうの？ミュールちゃんと三人で愛の共同作業として料理しない？」

「死ね、^ゲ下等^ゲ生物」

「そんなに呪われたいんですか？」

「よさないか二人とも。一緒に行くぞ」

本気の嫌悪を露わにするナーベと冗談めいて脅すミュールを引き連れてモモンはその場を離れる。

テントから少し離れた場所では、ダインとペテルが大地に座り込みながら装備の点検を行っている。

二人とも冒険者らしく自らの命を預ける装備品の整備点検に余念

がない。

が、ダインはともかくペテルは手の施しようのない装備品を前に頭を抱えていた。

「剣はもうルクルットのを借りるしかないか。鎧も盾も簡易修理じゃどうにもならない……くそっ完全に赤字だ」

「そうは言っても森の賢王を相手に赤字で済んだのであるから儲けものである」

「わかっている。でも明日からの護衛は一体どうすればいいんだ？また襲撃があるかもしれないのに」

ペテルの前には完全に折れた剣と大きく拉げ内部の緩衝材がめくれ上がった盾が横たわっている。

着こんでいる鎧は簡易修理によりなんとか鎧としての形を保っているが、装甲となるべき革帯のほとんどが千切れ飛んでおりまともな防御力は望めそうになかった。

(ユグドラシルでも装備溶かされた人ってあんな雰囲気だったなあ)

モモンは装備品を破壊された者を襲う悲しみは世界を超えて共通する事を知った。

その悲しみは強者でありより高級な装備を身にまとっている者ほど大きくなる。

そういつた点ではペテルはまだかすり傷だと言えるだろう。

モモンの脳裏に神器級装備を無残にもロスしたプレイヤーが発する悲しみと怒りの絶叫が蘇る。

そして改めてかっつての仲間へ口へ口のえげつなさを思い知るのだった。

(カルネ村に騎士達の遺品が残っていないかな？いや、アルベドが全部回収したって報告出してたっけ。じゃあ仕方ないか)

赤字を嘆くペテルのためにと思いを巡らせたモモンだがすぐに無理だと思い当たり思考を打ち切った。

ペテルは哀れであるがモモンには自分が所有する装備を与えようという考えは一切ない。

だからもうモモンに出来ることはなかった。

モモンは二人に声をかけると食事の準備が出来たことを伝えた。馬の世話をするンフィーレアにも同じ事を伝えるとマーキーテントへと戻っていった。



太陽が地平線に沈む夕暮れ時。

草原が燃えるような赤に染まる中、森の賢王を除くメンバーで食事が始まっていった。

森の賢王は頬袋に貯蔵した食べ物を食べながら周囲の警戒にあたっている。

これで食事中を襲撃される恐れは少なくなるだろう。

ルクルットが用意した夕餉は保存食が主体ではあるが、塩漬けの燻製肉を使ったシチューといったしっかりとした料理もあった。

質素な食事と言えば確かにそうなのだろうが、野外でこれだけの食事を作ったルクルットの手腕をモモンは評価していた。

（ナーベは不満そうだったがこのアウトドア感あふれる食事、かなりいいと思うんだけどな。……まあそれはともかく）

この出された食事をどうするかとモモンは悩んだ。

なにせモモンの正体は骨だけのアンデッドであり、物を食べようとするればそのまま顎を突き抜け落下してしまう。

そうなれば幻影を纏っているとはいえ正体が露見するのは必至だ。

モモンは解決策を急いで考える必要があった。

ナーベとミュールはモモンより先に食事に手を付けるつもりがないらしく、食事が始まってから三人そろって手をつけないという異様な状態になっているのだ。

（とりあえず、俺に構わず食べるようメッセージで伝えようか？）

そう思った瞬間、恐れていた問いがルクルットから飛び出した。

「あー、なにか苦手なものでも入ってた？」

「いえ、そういうわけではなくてですね。すこし理由がありました」

「そうなん？ならいいけどさ、無理に食べなくてもいいんだけど？」

「つーか飯どきなんだしヘルムぐらいは外したらどうよ？」

「……宗教的な理由でしてね。命を奪った日の食事は四人以上で食べてはいけないというものがありました」

宗教がらみの問題ならば深くは突っ込まれまいという打算の元、半ば出任せ気味にモモンから放たれた言葉に皆の不審げな視線が和らいだ。

どうにかなったか、とモモンはホツと息をつく。

「変わった教えを信じられているのだなモモン氏は。ミユール氏とナーベ氏も手を付けないという事は三人は同じ教えを信じておられるのかな？」

「皆さんのようにお強い方々が信仰する教えですか……差支えが無ければなんという神の教えか教えていただけませんか？」

(な、なにに!?)

ダインに続いて口を開けたニニヤがミユールを見ながら放った言葉に、ピンチを乗り越えたと思っていたモモンは無言不動で狼狽えた。

まさか突っ込まれるとは思ってもみなかったのである。

そしてそれはニニヤを除く漆黒の剣の面々も同じだった。

「おいおいニニヤ、そういう事は聞くもんじやないだろ？」

「そうだぞニニヤ。一体どうしたって言うんだ」

「二人の言う通りである。ぶしつけに聞いて良いものではないのである」

次々に仲間たちに諫めらるニニヤは身を縮めながらもミユールを見つめている。

モモンはミユールからニニヤと友達になったという報告を密かに受けていた。

故に先ほどの発言が友人に対して僅かばかり遠慮がなくなったが為のものだったのだと思いが当たった。

(だけど出任せの理由だから神の名前なんて言えないぞ。どうしたものか……ん?)

考えこむモモンの視界にこちらを見るミユールがうつる。

フードの落とす闇の向こうにある彼女の瞳が「私に任せてください」と言っているようで、モモンは藁にも縋る思いで頷いた。

「あー、皆さんそのぐらいで。……そしてニニヤさんには申し訳ないんですけど、私達の神の名は濫りに唱えてはいけないのです」

モモンと同じように宗教上の問題を理由にしたミュールの言葉に、ニニヤを窘めていた漆黒の剣達は目に見えた安堵していた。

そしてそれはモモンも同じだった。

漆黒の剣達の安堵は結局ミュール達の信仰する宗教がなんであるか知ることが出来なかつたからから。

モモンの安堵は言わずもがなだ。

「名前を呼んではいけない神？珍しい教えなんですね」

「そうでしょうね。でも世界は広いのですから、そういう教えもあるという事です」

場の空気が緩んだことで素直な感想を言うンフィーレアにミュールは微笑みながら嘯いた。

これを好機と見たモモンは話題を変えるためにペテルに漆黒の剣というチーム名の由来について質問する。

そこからは食事中和やかな会話の一時が流れた。

チーム名の由来から始まり、十三英雄とその中の一人が持っていたとされる四本の剣についての話。

そしてその内の一本を所有するという冒険者の話と続き、食事からしい雑多な会話が乱れ咲く。

「それにしてもモモンさんの剣の素晴らしさといったら！私の剣を折った森の賢王の一撃を何度も受けて刃こぼれ一つないなんて！」

「確かにすっげえよなその剣。どこぞの名工の作なんだろ？」

己の武器を称賛するペテルとルクルットにモモンの機嫌がよくなる。

なぜならモモンの持つ剣は友人達が作ったものだからだ。

友人の作品を褒められたモモンは自分でもちよろいなと思いがながらも上機嫌で答える。

「ええ。友人達が力を合わせて作ってくれたものでしてね。中々の一

品でしょう?」

「それはもう!いつかはそんな素晴らしい武器を手にしてみたいものです。……まあ武器にふさわしい実力をつけるのが先ですけどね」

「はははは。ペテルさんならばすぐに扱えるようになりますよ」

モモンは装備に必要な筋力とそれを得られるレベルを思い浮かべながら当然のように言い放つ。

そんなモモンに対し、ペテルは力ない苦笑を浮かべるだけだった。

「ん?どうかしましたか?」

不思議そう首を傾げるモモン。

漆黒の剣達の間には微妙な空気が発生するが、それを振り払うようにルクルットが明るくモモンに問いかける。

「それよかモモンの旦那!その剣はなんて名前なんだ?それだけの一品なんだから銘ぐらいあるんだろ?」

「ンンッ ツー」

モモンの喉から奇妙な声が発せられ、この場にいる全員が首を傾げてモモンに注目した。

意図せず注目を集めてしまったモモンは失われた肌から汗が噴き出すような感覚に襲われていた。

(ど、どうする?銘など無いと嘘をいうか?しかしそれではあの二人、いや三人が作ってくれた武器が無銘の凡武器と思われるのでは?それは作ってくれた人達に対する失礼にあたるんじゃないか?)

モモンの脳内で激しいせめぎ合いが発生する。

数秒に満たない時間で多くを考えたモモンは震えそうになる声を腹に力を入れることで堪え、ボソリとつぶやいた。

「……………リッター」

「え?なんですって?」

うまく聞き取れなかったペテルが聞き返すと、モモンはもはや自棄になったような大声で愛剣の銘を叫んだ。

「斬影剣ゲシュペンストシュバルツリッターですうっ!」

血を吐くような絶叫の後、モモンは地獄のような沈黙に包まれた。

いたたまれなくなつて地面を見つめるモモンは沈黙化しては吹き

上がる羞恥に身を焦がしていた。

斬影剣ゲシユペンストシユバルツリッター。

それはクーゲルシユライバーが産出した『アトラクⅡナクアの抜け殻』を素材にウルベルト・アレイン・オードルが協力し鍛冶師であるあまのまひとつが作り上げた香しい名前を持つ武器である。

外装と名前はクーゲルシユライバーとウルベルトが凝りに凝って作ったものの、武器としての性能が今一だったため共同制作作品として宝物殿の武器庫に仕舞われていたのだが、モモンガの外出に当たりクーゲルシユライバーが探して持ち出してきたのだ。

仲間達の思い出が詰まった武器にケチなどつけられないが、ドイツ語の響きの良い単語をとりあえず繋げてみたような名前は思春期特有の病を克服したと自負するモモンガの心を容赦なくえぐっていた。

そういった意味では凄まじいまでの切れ味を誇る一品だった。

(やめてくれ……誰かなにかしゃべってくれ。無言が一番つらいんだよお)

モモンは地面を見つめながら肩を震わせた。

沈黙がたっぷり十秒以上続き、モモンがあまりの苦痛から自ら喋りだそうとした時、ペテルが声を上げた。

「す、すごい。なんて神秘的で強そうな名前なんだ!」

「剣のくせに王族みたいな長さの名前だな。剣の中の王とかそんな感じ?」

「斬影剣という事は影すら斬れるってことなんででしょうか? なにか秘められた力があつたり?」

「ううむ。剣の持つ格に相応しい銘であるな!」

「ふわあ……まるで伝説の武器みたいな素敵なお名前ですね!」

「は?……はあ!」

予想外の好感触にモモンは安堵するどころか狼狽える。

モモンはもう一度剣の名前を心で唱える。

斬影剣ゲシユペンストシユバルツリッター。

(……だめだ! どう考えてもダサイわこれ! なんになんでこいつらこんな褒めちぎってるの? 森の賢王といい、こいつらおかしいんじゃない)

いか?)

漆黒の剣とンフィーレアに珍獣に向けるような視線を送るモモン。異世界人のセンスに理解しがたいものを感じて衝撃に身を震わせるモモンに隣から声がかかる。

ナーベとミユールだ。

「まさにモモンさーくんが持つ剣に相応しい名前だと思います。カットコイイです」

「ナーベさんの言う通り!ととてもかっこいいです!提案なんです、これからは斬影剣のモモンと名乗ってみてはいかがでしょう?」

(ナーベはともかくミユール!お前もかっ!!)

美しい瞳をキラキラと輝かせる二人の美女に渾身のチョップを打ち込みたい衝動に駆られるもモモンはそれを押しとどめた。

今のモモンのステータスはレベル100の戦士職相当になっているのだから、渾身のチョップなど打ち込もうものならば二人の美しい頭部が爆発四散し団欒の一時は一瞬で惨劇の舞台と化すだろう。

そんな事はあらゆる理由から許容できない。

「そ、そうでしょうか?いや、そうでしょうね。しかしミユール、その呼び方はどうも頂けないな。却下する」

「そうですか……かっこいいのに」

モモンに断られたミユールは心底残念そうに肩を落とすが、どうやら納得してくれたようだ。

たった数分のやり取りだというのに徹夜明けのような疲労感がモモンを襲う。

早急に何か別の話題に移らねば。

そんなモモンの願いが叶ったのか、ンフィーレアが話題を変える。

「それにしてもモモンさんのご友人はすごいですね。こんな素晴らしい武器をくれるだなんて」

仲間を直接褒められたモモンは鼻が高かった。

先ほどまで感じていた疲労が嘘のように吹き飛ぶ。

「ええ。最高の仲間達でしたよ」

モモンの脳裏に仲間達との思い出が駆け巡る。

そのどれもが人間鈴木悟の青春であり、輝かしいものだった。

仲間達への思いは実際には複雑なものもある。

しかし思い出を振り返るそのたびにモモンの空虚な胸は暖かさを感ずるのだ。

そしてその暖かさがもう二度と帰ってこない過去にしかない事を思い出し現在とのギャップに凍えるのである。

「最高の……仲間達でした……」

もう一度つぶやいたモモンの言葉に、誰もが何かを察知し口を閉ざす。

世界にたった一人しかいないような静寂の中でモモンは語る。

己と仲間達との最初の出会い。

増えていく仲間達と共に世界を旅した喜び。

旅の中で育んだ友情と絆の深さ。

今も仲間と共にいて青春をひた走る漆黒の剣に負けない、いや、それ以上の輝きがかつて自分にもあったのだと。

言外にそう言いたいかのように、張り合うように、見せつけるように、モモンは今は無き過去を誇って語った。

「今でも彼らと過ごした日々は忘れられません」

そう締めくくる漆黒の鎧を纏う英雄には、昼間戦場で見せた覇気はなく、ただ老人のような寂寥があった。

「いつの日か、またその方がたに匹敵する仲間ができますよ」

「そんな日は来ませんよ」

慰めようとしたニニヤの言葉に対し、モモンは驚くほど敵意に満ちた声を上げた。

そして一瞬後我に返り、ショックを受け硬直したニニヤの顔を見て己の行いを恥じた。

ニニヤの顔が、クーゲルシュライバーに怒りを向けられたアルベドと同じ表情を浮かべていたのだ。

（ニニヤは何だ？クーゲルシュライバーさんが大切に思う人間だ。つまり俺にとってのアルベドと同じ。なのに俺はクーゲルシュライ

バーさんがアルベドにしたようにニニヤを傷つけている)

かつて批難した行いを自分が再現している事に気づいてモモンは激しく後悔した。

早急に謝罪するべきだ。

そう思うものの、かつての仲間に対する膨大過ぎる思いが身動きの邪魔をする。

(ああ、クーゲルシュライバーさんもこんな気持ちだったのかな)

そう思うモモンの目の前ではニニヤが悲しそうな表情を浮かべて俯いていく。

モモンが鎧をガチャリと鳴らし立ち上がった。

「すみません。仲間達の事は本当に特別で、つい声が大きくなってしまつて。どうか気にしないでください。私も気にしていませんから」
それだけ言うのでモモンは精一杯だった。

言葉では気にしていないとは言うものの、誰の目からも気にしているのは明確だ。

もつと上手くいう事は出来なかったのかと考えるモモン。

しかし、そんなモモンの言葉でも暗かったニニヤの顔は生気を僅かばかりに取り戻していた。

「すみませんモモンさん。モモンさんのお話を聞いていたのにあまりにも軽はずみな言葉でした。どうか許してください」

「……許しますとも。ですからどうか気にしないでください」

怒ったモモンに対して怒らせたニニヤが謝罪し、それをモモンが許すと言った以上この件はこれで終了だ。

硬直していた場の空気が軟化していく。

「では……。ナーベ、ミユール、私達は向こうで食べよう」

モモンの誘いに二人が立ち上がる。

モモンとナーベが料理を持って早々に立ち去る中、ミユールは一人遅れてニニヤに近寄った。

「大丈夫。モモンさんが許すと言ったんですから、気にしないのが一番あの方のためになります」

だから元気を出してね、とニニヤに耳打ちするとミユールもまたモ

モン達の向かった方へと去っていった。



「元氣を出せ、と言われてもそう簡単に出てくるわけがない。」

ニニヤは尊敬する戦士にとんでもない無礼を働いたことに打ちのめされていた。

そんな彼女をチームのメンバーがそれぞれ慰める。

仲間のフォローはお家芸の冒険者である。

ニニヤ自身の心根の良さとモモン直々に許しの言葉をもらっている事、そしてモモンと長い付き合いのミユールの励ましもあつてか、気持ちを切り替えるのにそう時間はかからなかった。

そうして再び雑談が開始される。

ンファイレアがモモンの強さについて問えば、待ってましたとばかりにペテルが話題に食いつき話に花が咲く。

最初は純粹にモモンの持つ強さについての評価がなされ、次にモモンの出自について話題は移っていく。

出自の話に最も食いついたのは漆黒の剣にとって意外な事にンファイレアだった。

「それでモモンさん、どこの国の人とか言ってますでしたか？」

「いえ、特には……でもミユールさんがこの国の人間ではないと言っていましたよ」

「なにっ!? そりや初耳だぞニニヤ。いつの間にそんな事を聞いたんだ？」

「警戒用魔法をかける時にミユールさんと一緒になったので、そこで」
なんともない事のように答えるニニヤにルクルットは頭を抱えて

仰け反った。

「おいまじかよお！ 俺には教えてくれなかったのに！」

「そりやあ、まあ」

「ルクルットとニニヤの信頼の差であるな。一度己の行いを省みるべきである」

ダインの発言にルクルットがむくれ、それを見た全員が笑い声をあげる。

「あはははは。でもわたしが知っているのはそれぐらいです。多分三人とも南方の国の出身だとは思いますがね」

「そうですか……最悪、名前を言っただけはいけない神を信仰する場所を調べればモモンさん達の国がわかるかな」

小声でつぶやくンフィーレアの発言に漆黒の剣達は顔を見合わせる。

正直なところ、ただの好奇心にしては行き過ぎている感があった。

「あ、いえ……遠くの国の方ならこの辺りで使われているポーシヨンとは違う物を持っているかなど。薬師としては興味を惹かれる部分です」

訝し気に自分を見つめる漆黒の剣達に気づいたンフィーレアはやや早口で説明する。

その甲斐あって漆黒の剣達の疑いは晴れたようだった。

と、その時だった。

「ん？あれ？ミュールちゃん？」

急に振り向いたルクルットの発言に誰かが「えっ」と声を漏らした。

ルクルットの向いている方向を見れば、焚火の明かりが届かない闇の中から黒いローブを着たミュールが近づいてくるのが見えた。

「随分はやいじゃん。あ、もしかして俺に会いたくて……」

「そんなわけないだろこの馬鹿。どうしたんですかミュールさん。モモンさんやナーベさんは？」

お約束のごとくミュールにちよっかいを出そうとするルクルットの言葉を遮ってペテルが問う。

ミュールは焚火の光の範囲へと入ると当然のようにニニヤの隣の大地に腰を下ろした。

「モモンさんやナーベさんはまだ食事中です。私は……ちよつとニニヤさんにお話があつて」

「わたしにですか？」

ミュールがニニヤを指名するという事態に当事者以外の四人が目

を丸くする。

「はい。新しいお友達のニニヤさんにこれを差し上げます」

そういつてミュールが渡したのは磨かれた銅製の円盤だった。

「これは？」

ニニヤは手に持った円盤を焚火の光にかざす。

よく磨かれた平面にニニヤの顔が写った。

裏返してみれば精密な文様が刻まれており中央部の半球状の箇所にはニニヤが見たことのない未知の言語10文字が刻まれている。

「その銅鏡はある種の祭具で、まあ私の宗教に伝わるお守りのようなものです。持ち主が絶体絶命の危機に瀕したとき、神の名を唱える事で救済が得られると言い伝えられています」

説明を聞いていたルクルットが胡散臭そうな表情を顔に浮かべた。

「……お守りつつたってさあ。俺らミュールちゃんの神様の名前知らないんだぜ？そんなの貰ったってどうやって使えばいいんだよ」

「神の名を教える事はできません。ですけど、もしも本当にこれの持ち主が加護を受けるに足る存在なら、自然と神は耳元にそのいと尊き御名を囁くことでしょう」

微笑みながら言うミュールに空気が凍り付いた。

自分のよく知る人物が突然聖書の引用を使って宗教の勧誘をしてきたような、そんなうすら寒さが漆黒の剣とンファイレアを襲ったのだ。

「……というのが決まり文句なのですが、あまり気にしないでいいです。ただのお守りとして身に付けて貰えばいいなあと、ただそれだけなので」

凍り付いた空気を溶かすように明るく振る舞うミュール。

その様子にどうやら狂信者ではないようだどペテル達は胸をなでおろした。

「そういう事でしたら、ありがたく受け取りますね。ありがとうございます
いますミュールさん」

「（ちらちらそありがとうございます。受け取ってもらえなかったらどうしようかと）」

手にした銅鏡をポーチへとしまい終えるのを最後まで見守ったミュールはニコニコと笑いながら立ち上がるとモモン達のいる方向へと踵を返した。

「それじゃあ私は食事に戻りますね」

「はい。どうぞごゆっくり」

去ろうとするミュールに代表としてペテルが答えると、ミュールは明かりもないのに全く危なげない足取りで闇の中へと溶けるように消えていった。

その姿が見えなくなり、ルクルットの聴覚でも足音が聞こえなくなるほどの時間が経った後。

ルクルットが普段見せないような神妙な顔でつぶやいた。

「ミュールちゃんってさ。可愛いけど時々ちよつと怖えよな」

そんな言葉に四人分の苦笑いが同意した。